八代集 下

例言

一、本卷は八代集下卷として、金葉和歌集、詞花和歌集、千載和歌集、及び新古今和歌集ををさめました。

一、本卷は佐伯常麿が擔當しました。

一、本文は、正保四年版の普通刊本八代集をもととし、北村季吟の八代集抄を參考校訂しました。

一、註釋は主として八代集抄により、特に新古今集は、美濃の家苞、尾張の家苞、詳解等を參考し、まゝ私見も加へました。

一、本卷には、從來勅撰集研究の指針とされて居る、吉田令世の歷代和歌勅撰考を添載しました。

校註 國歌大系 第四卷目次

千載和歌集……一八一—三八四

卷之三

目次終

解題

金葉和歌集

白河天皇は、御在位中の後拾遺集と、法皇とおなりになつてからの金葉集と、御一人で二度勅撰集を撰進せしめ給うた。これは前例のない事で、後に後鳥羽院が、新古今集と新勅撰集とを撰ばしめ給うたのと好一對である。後拾遺集時代の歌人の第一人者と、自他ともに許してゐた源經信が、その撰者たるの光榮を得なかつた事は、世人にとつても意外であつたらうが、經信としても遺憾至極であつたであらう事は、難後拾遺が經信の著と傳へられてゐるのに據つても想像に難くはない。

併しながら、崇德天皇の御宇天治元年(皇紀一七八四)に、勅撰集をえらぶべき白河法皇の院宣は、經信の息前木工頭源俊頼一人に下つた。後拾遺集の成つた應德三年(皇紀一七四六)より三十八年後である。經信も以て地下に瞑すべきであらう。

かくして俊頼によつて撰まれたのが金葉和歌集である。ところが最初、貫之の「年のうちに春たつことを春日野の若菜さへにも知りにけるかな。」の歌を卷頭歌とした本（續羣書類從には三宮の「年のうちに春立ちくればひととせにふたゝび待たる鶯の聲。」の歌だといふ。）を奉つたが御氣に入らなかつた。再び卷頭に藤原顯季の「うちなびき春は來にけり山川の岩まの氷けふやとくらむ。」の歌をおいた本を御覽に入れたが、やはりいけなかつた。三度、源重之の「吉野山峯の白雪いつ消えてけさは霞のたちかはるらむ。」といふ歌を卷頭歌とした本を撰んだが、前例に懲りた俊頼は此の本を草案のまゝで先づ御覽に入れたら、直に御嘉納になつたのだといふ。そこで金葉集には初度本、二度本、三度本（奏覽本とも三奏本ともいふ）と三種ある事になつた。三奏本は草案のまゝで先づ御覽に入れたのがそのまゝに納まつたので、撰者の手許にも控へがなかつたから、二度目の本が世に流布したのである。本大系收錄の本はこの二度本である。金葉集の出來上つたのはいつであらうか、勿論三奏本奏覽の時を以て定めるべきであるが、金葉集には序がない。袋草紙にはかうある。

大治元二年之間上ニ奏之ㇾ。此集本不定也。奏覽之處兩度返卻。第三度之度。以ニ中書草案ㇾ先覽ㇾ之、而件本無ニ左右ㇾ納畢。仍撰者許無ニ此本ㇾ云々。

大治元二年之間といふのは、この間に初度本から三奏本までを奏覽した意味だと解されるから、三奏本奏覽は大治二年(一七八七年、天治三年大治と改元)だといふ事になる。八雲御抄には、

金葉集天治元年。依二白河法皇綸言一。俊頼朝臣撰レ之。再三改直。大治二奏レ之。披露中度本也。

とあつて、三奏本が大治二年に奏進されたと云つてゐる。爾來金葉集は大治二年撰進といふのが通說となつて居るやうである。してみると後拾遺集の成つてから四十一年後に金葉集は出來上つたのである。初度本、二度本はいつ出來たらうかといふ事も知りたい事である。

最近岡田希雄氏は、流布本秋の部に、「奈良の花林院の歌合に月を詠める。」と詞書して、權僧正永緣の「いかなればば秋はひかりのけさるらむ同じみ笠の山の端の月。」が載つてゐるのを手掛りとして、此の歌合は羣書類從によれば、大治三年二月五日に催されたものだから、流布本はそれ以後に出來たらしい。又流布本には忠通の歌が「攝政左大臣」として出て居る。忠通は大治三年十二月十七日には太政大臣を拜命してゐるから、以後ならば「攝政太政大臣」とあるべきだ、といふ根據から、流布本は大治三年二月五日から同年十二月十七日までの間に出來上つた。三奏本にも忠通は「攝政左大臣」とあるから、これ亦大治三年十二月十七日以前になつたのだ、といふ推定を下

されたが、後に氏自らも云つてゐられるやうに、權僧正永緣が、興福寺別當次第によれば、天治二年(一七八五、俊頼に院宣の下つた翌年)四月に示寂したといふのであるから、永緣の坊で行はれた花林院歌合が大治三年二月五日(一七八八、天治二年から三年後)である筈がない。示寂說の天治二年に誤りがあるか、歌合の大治三年が誤つてゐるか、どちらかである。この天治二年と大治三年とをつき合はせて考へてみると、まことに間違ひ易い年號である。が併し、天治は三年正月二十七日に大治と改元されてゐるから、天治三年の誤りといふ事は想像されない。天治二年は大治三年の誤りと想像されない事もないが、二字までも誤りとするには、これ以外の確證がなくては危險である。たゞ、歌合が天治二年の誤りか示寂が大治二年の誤りかと想像する以外はないやうである。してみると、流布本の成立が大治三年だといふ推定は成立しない事になつて、やはり袋草紙の說に從つて、院宣を受けて三年目、大治元年に初度本を奉り、大治二年までに二度本三奏本を撰進したといふのが、今のところ妥當だと思はれる。

金葉集が何故に三度までも、撰述をやり直さねばならなかつたか。これに關しては、今鏡第七「村上の源氏」の「武藏野の草」の條に、俊頼が初度本には卷頭に貫之の歌、其の次に覺雅法師の歌をおいたのが御氣に入らなかつた。そこで俊頼は、「古き上手ども入るまじかりけり。又いとしも

なく思召す人除くべかりけりとて、覺の人。」ばかりを採り入れて奉つたら、これも、「げにとも覺えず。」と仰せられたと云つてゐる。(日本文學大系第十二卷、五四七頁五四八頁參照)。又增鏡「おどろのした」には、初め奏したのには、輔仁親王の御名乘をかいたので返された。(同書六一八頁參照)と傳へてゐるが、共に二度目の本のいけなかつた理由は明記してゐない。藤岡作太郞博士も、「日本文學全史平安朝篇」に、「天治元年これを奉る。されど認可せられず、その理由は詳かならず。」と言はれてゐる。續羣書類從三百六十七卷に收められてゐる金葉集の初度本と稱するものは、井上通泰博士も論ぜられたやうに、卷頭歌は流布本卽ち二度本と同一であるから眞の初度本ではないであらう。併しながら、二度本よりは多少初度本に近い本だとは思はれる。この本には增鏡にいふ所の輔仁親王は「三宮」と記されてゐるし、今鏡にいふところの覺雅法師の歌は五首目に載せてあるが、流布本には除かれてゐる。猶續羣書類從三百六十六卷には金葉和歌集の奏覽本(三度本)が收めてある。いま試みに、この所謂初度本と流布本と奏覽本との春の部を調べてみよう。初度本にあつて、流布本にない歌が二十二首、初度本になくて流布本にある歌が二首ある。初度本と奏覽本とを比較すると、歌數は二十三首減じてゐるだけであるが、初度本にあつたのを五十三首削り、新たに三十首を補つてゐる。中には初度本にあつて、流布本にないのが奏覽本に

復活してゐるのも一首ある。而して著しい現象は撰者俊頼の歌が初度本に十一首あるのを、流布本では七首を削り、奏覽本では初度本から八首を削り、(流布本で削つた「身にかへてをしむにとまる。」の一首は復活。新たに一首を加へてゐるので、歌數は流布本奏覽本共に各四首載つてゐる。其の他は流布本で削られてゐる歌は奏覽本でも削られ、流布本で加へられた伊通の「白雲と峯には見えて。」と、盛經母の「花のみや暮れぬる春の。」の二首は奏覽本で削られてゐる。初度本にあつて奏覽本に歌を削られた作者は、長實の五首、顯輔の三首、内大臣の二首が多い所で、これらは金葉集時代の人である。他は一首宛、公實、覺雅、顯仲、雅兼等で、その殆んど全部が當時の人々である。これに反して、初度本流布本になくて奏覽本に新たに入つた作者は、兼盛の五首、朝忠、道綱母、道濟、花山院の二首宛、好忠、順、赤染衛門、能宣、長能、公任等の一首宛で、殆んど全部が金葉以前の作者である。これで見ると、俊頼は當代を捨てて、先代をとるといふ方針で撰述をやり直したのではあるまいか。初度本にあつて流布本、奏覽本に削られた歌は、

庭もせに引きつらなれるもろ人の立ちゐるけふや千代の初春　俊頼

いつしかと末の松山かすみあひて風とともにや春はこゆらむ　同

散る花は水の岩間によどむとも香は流れてや瀬にとまるらむ　同

もかり舟ほくらしめなは心せよ河ぞひ柳風に浪よる　同

みちのくの衣の關をけさ立ちていつのまにかは春のきつらむ　覺雅

鶯の梅の花がさ散りぬれば降る春雨にそぼちてぞなく　爲眞

雪かゝる雲路は春もさえければ霞の衣きてかへるなり　慶經

山びこのこたへざりせば呼子鳥むなしき音をや鳴きて過ぎまし　靜念

玉づさをかけしをりにや鴈がねに春かへりごと契りそめけむ　意尊

等の如きものである。奏覽本に新たに撰まれた歌は、

よしの山峯の白雪いつ消えてけさは霞の立ちかはるらむ　重之

くらはしの山のかひより春霞年をつみてや立ち渡るらむ　朝忠

ふる里は春めきにけりみ吉野のみかきの原も霞こめたり　兼盛

雪消えばゑぐの若菜も摘むべきに春さへ晴れぬみやまべの里　好忠

こほりだにとまらぬ春の谷風にまた打ちとけぬ鶯の聲　順

等の如きものである。歌の善惡といふよりも、作者に重きをおいたのではあるまいか。慶經、靜念、意尊の三法師は金葉集初度本にとられてゐたが、流布本以後に削られて、勅撰集には以後も

作が出てゐないやうだ。作者には氣の毒でもある。かうしてみると今鏡にいふ「いとしもなく思召す人除くべかりけり。」といふ方針で撰び直したといふのも眞であらう。ところがそれもいけなかつたので、大に當代の作者を削つて、先代の作者を增加して奉つたのではあるまいか。卽ち俊頼が餘りに當代の作者の歌を多くとつたのが、法皇の御思召に叶はない根本の原因ではなかつたであらうかと推測される。

金葉集は今までの勅撰集二十卷の例を破つて十卷である。部立も春、夏、秋、冬、賀、別離、戀上下、雜上下と簡單であるが、雜下に連歌の一項が設けてある。連歌は勅撰集には已に拾遺集にも收められてゐるが、特に連歌の部を設けたのは此の集が最初である。又題名も後撰といひ、拾遺といひ、後拾遺といひ、皆古今を祖とし、それに追從增補する意味を以て命ぜられてゐるのに、此の集は傳統を破つて金葉といふ思ひあがつた名をつけてゐる。卽ち古今に追從追補するのではなくて、古今と對立する意味である。俊頼の撰述の意氣はこの名によつても窺ひ知る事が出來よう。この十卷、題名、連歌部新設の三點は、金葉集に於て第一に目につくあたらしい點で、流石に進步派である俊頼の撰としてふさはしい。扠撰ばれた歌はどうか。流布本によれば歌數の最も多いのは撰者自らの三十五首であつて、撰者の父經信の二十六首これに次ぎ、更に十首以上

ある者は藤原公實、同顯季、同長實、同顯輔、藤原忠通、權僧正永縁である。過去の歌人も後撰までのはとらず、その以後をとつてゐる。卽ち現代に重くして、過去に輕い。古今以後の撰者が單に古今撰述の皮相のみをみて、古今時代の作者を重んじて過去を重んじ、現代を輕んじたのに反し、俊頼が現代を主とした事は、貫之等が古今を撰ぶ時に當代を主とした根本精神が、俊頼によつて始めて祖述され理解されたのである。併しこれは後拾遺が後撰まではとらず、拾遺時代を多く採つた精神に倣つたとも云はれるが、後拾遺はなほ過去を主として、現代を客としてゐる。俊頼は一歩を進めて貫之の眞意を復活したのである。この點は、俊頼の大なる功績でなければならぬ。後拾遺の撰者通俊は保守派の歌人ではあつたが、曾根好忠、源經信の如き新風の和歌を採つた點よりみて、經信が當時第一の歌人と稱された點よりみて、後拾遺の時代には表面傳統的な保守派が重んぜられてゐると共に、新しい傾向が實力に於て中心を占めてゐたと見られる。卽ち新舊二派が對立して居たのである。この新派が金葉時代には舊派を稍壓倒したのである。院政時代は全盛であつた藤原氏に代つて武士が新たに勢力を養ひ來つて、政權を握るに至る過渡の時代である。かかる傾向は歌壇に於ても見る事が出來る。卽ち古今を祖述する保守派に對して、清新を以て立つた好忠の新風が對立して、新古今に於て頂點に達するまでの過渡の時代である。政治

上の變化も、文學の展開も基くところは共に人心の趨勢にある。

かかる時代に出た俊頼は如何なる人物であらうか、彼は宇多天皇の孫左大臣源重信の子孫である。重信の孫が經信、これは曾根好忠の流れを汲む歌人である。經信の子が俊頼、官位は從四位上木工權頭に至つてゐる。袋草紙に、大判事明兼が金葉に入らなかつたので、立腹して俊頼の許に來て、「貴殿遇二後拾遺之時一、而不二入レ之給一カトモ。」と云つたとあるから、後拾遺の時既に相當の歌人であつたらしい。彼の歌は詞の自由と自然の客觀描寫を特長としてゐる。例へば、

ゆふまぐれ戀しき風に驚けば荻の葉そよぐ秋にはあらずや

夕されば萩をみなへしなびかしてやさしの野邊の風のけしきや

これは彼の家集散木奇歌集に出てゐる。客觀描寫、やさしの野邊といふやうな自由な詞を見るべきである。しかしてこの歌からは清新なる感覺を感得する事が出來る。

さて此の撰者に撰まれた金葉集の歌風は如何なるものであらうか、古今、新古今の如くある一種の情味で一貫してはゐない、一定の調を以て收まつてはゐない、新舊錯雜色々の調が混交してゐる。落著きはないが、生氣はある。大成の風はないが、新しい方向への惱みと情熱とがある。

うちなびき春はきにけり山川の岩間の氷けふやとくらむ　顯季

の如き純然たる古今調である。

梅の花にほふあたりはよきてこそいそぐ道をば行くべかりけれ　　貫之

の如きは古今風の理窟に墮した歌である。

鳴のゐる野ざはの小田をうちかへし種まきにけりしめはへてみゆ　　國基

の如きは萬葉調を帶んだものである。

村雲や月のくまをばのごふらむ晴れゆくたびに照りまさるかな　　俊頼

の如きは餘りに新奇を求めて詩趣を失つたものである。

ゆふされば門田の稻葉おとづれてあしのまろ屋に秋風ぞふく　　經信

うづらなく眞野の入江の濱風に尾花なみよる秋の夕暮　　俊頼

の如きは自然の純然たる客觀描寫であつて、底にしみ〴〵とした情趣を湛へて、古今から新古今への連鎖をなすものである。

白雲とよそにみつれば足曳の山もとゞろにおつる瀧つ瀨　　經信

陸奥の思ひしのぶにありながら心にかゝるあふの松ばら　　長實

の如く、新古今に多い體言止めの歌も、後拾遺と共に此の集にも可なりに見えてゐる。悠々平淡

一氣に調べ下して澀滯しない調を喜ぶものは古今を讀むがいゝ。巧緻華麗の趣を好む者は新古今を味へ。新たなる者を生まんとする過渡期の苦惱、舊套を脱せんとする新人の意氣を知らんとする者は金葉集を玩味すべきである。

古今、後撰の時は當時の歌壇の重鎭數名の合撰になつてゐる。拾遺以後は一人の撰である。其の上に新舊對立の時代である。通俊の後拾遺には難後拾遺等の非難があつた。金葉の時代には俊頼と竝んで、當時の名流藤原基俊がある。彼は道長の次男藤原頼家の曾孫で、父は大宮右大臣俊家である。家柄は俊頼よりもいゝが、官位は從五位下右衞門佐であるから俊頼よりは稍低い。年齡は二人殆ど同じ位で、基俊は學才があつて、保守派の棟梁、當代の公任を以て自任してゐる。寔に俊頼の好敵手である。當時の歌合の判者を勤めた數も二雄は相匹敵してゐたのであつた。袋草紙にも「一時有ニ基俊者。兼ニ和漢一尤便ニ撰者。」とある。この基俊を壓倒して、一人勅撰撰者の榮譽を得た俊頼は、基俊の歌を僅かに數首しか撰ばなかつた。而も歌論が盛んとなり、人々の批評眼、觀賞力が進んだ當時としては、金葉集に對する非難のあるのも、いたし方のないことであらう。袋草紙に、「金葉名予心中ニ傾思、其故ハ自伺ニ見之一處、佛欲レ入ニ涅槃一之時、先世間ニ金葉花雨云々、以レ之思レ之、金葉ノ世間ニ流布不吉歟、而此集之後、無レ程白河院崩御、撰者又逝去。」

といつて金葉の名を難じてゐる。今からみれば愚にもつかない事であるが、迷信の盛んな當時としては相當な存在價値があつたのであらう。又藤原顯仲は良玉集を著はして金葉を嘲つたといふが、傳本が不明なのでよくわからず、而して顯仲の歌は四首しか金葉集に入つてゐない。これらの事が原因ではあるまいか。或は金葉に種々の異名がついたが、「瞥突アルジ」の名が第一で、盛經の命名だと袋草紙にある。悅目抄(基俊の著だといはれてゐるが、僞書だといふ說もある)に、「すべて金葉集には、ひが事どもありて、さまぐ〵の名どもつきて沙汰せられ給ふ也。あまたの名の中に式部大輔業恆と申すもの、ひぢつきあるじとなづけ申しけるを、えせ集といふ意也。此の君は事のたとへに、假名のし文字をだにも知り給はぬ人の、さしよる者もなき家にて、只一人うつぶして撰び給ひたれば、かく僻事多きなめりと時の人は申し合へり。是れは心せばく、我一人してしたりといはれんとてそんじ給へるとぞ、人々は沙汰しけり。」と言つてゐる。無名抄には「わざともをかしからむとして輕々なる歌多し。」と云ひ、八雲御抄には、「今もうけられぬふし。」があると書かれてゐる。吉田令世は歷代和歌勅撰考に、「歌の數もあまりに少く、すこしばかりのうす草子なるは、勅撰の歌集といふべくもあらず、いと拙きわざなりといふべし。」(本卷七三六頁參照)と難じてゐる。併しながら古來風體抄には、「歌どもみなよろしく。」とほめ、夜の鶴は、

「金葉、詞花などは、歌の姿かはりて一ふしをかしき所あり。」といつて、歌風の變化を認めてゐる。「なゝそぢになりぬる潮の濱びさし久しく世にも埋れぬるかな。」と述懐して、一代の光榮に感激して、單身老軀を提げて勅撰集撰述に從事した俊頼が、撰後の非難はともかくも、三度まで撰み直さねばならなかつた事は少なからず彼を苦しめたに相違ない。しかも金葉集に、彼の家集散木奇歌集に見る如き潑剌たる意氣の見えないのは、勅撰集といふ者の性質によるのであらう。

詞花和歌集

金葉和歌集奏覽の大治二年（皇紀一七八七）から十七年後、近衞天皇の御宇、天養元年（皇紀一八〇四）六月二日、中古以來勅撰集に入らない和歌を撰集すべしとの、崇德院の院宣は、六條家の祖左京大夫藤原顯輔に下つた。かくして撰まれたのが詞花和歌集十卷である。袋草紙に

故左京一人撰レ之。天養元年六月二日奉レ之、奏二覽之一。御覽之後返給。御製少々并藤範綱、頼保同盛經等歌被レ除、予爲二御使一持二參彼亭一、奏覽本布目色紙草紙自筆也。

とある。故左京は顯輔のことである。八雲御抄にも、「天養元六月二日奏レ之。仁平又奏レ之。」とあるのを、吉田令世が、「按ずるに、仁平崇德院の依レ仰て天養に奏るといふ誤りなるべし。勅撰次

第にも是れを疑ひて、天養は仁平以前の年號なりといへり。」（本卷七四〇頁參照）とあるのは、吉川令世のふとした思ひ違ひであらう。天養元年は皇紀一八〇四年、久安を經て仁平元年は、皇紀一八一一年であるから、天養は無論仁平以前の年號である。然らば、仁平に仰せをうけて天養に奏覽する筈がないからである。扨天養元年六月二日之れを奏し、仁平又之れを奏すは何と解すべきか。天養元年六月二日に奏覽したのに、御製少々と範綱、賴保、盛經等の歌をお除き遊ばされたので、仁平年中再び奉つたといふ意味であらうか。この仁平を仁平元年と假定して、撰述し直すのではなく、單に歌を除くだけの事で、天養元年（一八〇四）から仁平元年（一八一一）まで、足かけ八年もかゝつたといふ事は信ぜられない。それならば、撰述をやり直したのであらうか、さうした史料も見當らないやうである。而も袋草紙に、「宣下狀云。被二院宣一云。自二中古一以來。不レ入二勅撰集一之外和歌等。宜レ被二撰集一者。仍執達如レ件。」とあつて六月二日といふ日附がある。これは天養元年の事であらうと思はれる。拾芥抄に、「天養元年甲子六月二日。依二崇德院勅一。顯輔撰レ之、仁平又奏レ之。」とある文の意味は、天養元年は顯輔撰レ之にかゝるとも解せられる。藤岡作太郎博士は、さう解してゐられる。がしかし、天養元年は「依二崇德院勅一」にかゝつて、「顯輔撰レ之。」にはかゝらず、即ち天養元年に院宣が下つて、後に顯輔が撰レ之したといふ意味に解せら

れない事もあるまい。勅撰次第一本に、「天養元年甲子六月被レ仰レ之奉行參議、教長卿。」と明記されてをり、藤岡博士も、「されど一說勅撰次第一本に、天養元年を以て、はじめておほせを承けたる年とし、仁平中の奏上としたるもの、或は可ならんか。」といつてゐられる。されば袋草紙の、「天養元年六月二日奉レ之。奏二覽之一。」の「奉レ之。」は奉院宣の意味と解し、奏覽はそれより後の事としたい。袋草紙の異本には、「天養元年六月二日奉レ之。仁平奏二覽之一。」とあるさうだ。これならなほさら前述の解が妥當である。

院宣の下つた年は天養元年である。が扨奏覽は仁平何年であらうか。勅撰一本に、「八九年終レ功。仁平奏レ之。」とある。八年目は仁平元年である。九年目は仁平二年である。此の集も金葉と同じく序文がないので、撰進の年を明らかになし得ないのは殘念である。作者は後撰以來のをとつて、古今の作者を入れてゐない。天養元年は古今撰進の延喜五年を經ること二百四十年で、延喜の作者の歌も次々と勅撰集に拾ひ出されてゐるから、いかに古今を尊んでもさうは取るべき歌もあるまいし、又一方、表面には古今を尊んではゐるが、實際としては新機運が中心勢力となつたが爲だとも思はれる。袋草紙に、「金葉集付二流布本一。第三度本歌不レ除レ之。件本無二知人一之故也。」とあるのは、金葉集の流布本（二度本）にある歌は詞花集に入れないが、奏覽本にあつて流布本に

ない歌は、載せてあるといふ意味である。成程金葉流布本になくて、奏覽本に出てゐる所の、

ふる里は春めきにけりみ吉野のみかきの原も霞こめたり　平兼盛

雪消えばゑぐの若菜も摘むべきに春さへ晴れぬみやまべの里　曾根好忠

佐保姫の絲そめかくる青柳を吹きなみだりそ春の山風　平兼盛

古里のみ垣の柳はるぐ〵とたが染めかけし淺みどりぞも　源道濟

などはそれぐ〵詞花集の三首目、五首目、十三首目、十五首目にそのまゝに載せられてゐる。又金葉奏覽本に、

山花をたづねにまかりて、かへさに人々手ごとにをりてかへるを　藤原登平

やま櫻手ごとに折りてかへるをば春のゆくとや人はみるらむ

の歌が詞花集には、

人々あまたぐして櫻の花を手ごとに折りて歸るとてよめる　源登平

櫻花手ごとに折りて歸るをば春のゆくとや人はみるらむ

とすこし變へて載つてゐる。金葉奏覽本は、當時は餘程稀であつたのが之れでも知られよう。詞花集が、金葉の流布本によつて、奏覽本の歌を除かなかつた事は、便宜主義、實際主義からみれ

ば承認されるが、理論的にみれば、金葉集が勅撰集である以上は、奏覽本を根據とすべきが當然であるのに、敢て便宜主義によつて奏覽本を認めなかつたのは、尠なからず此の集が勅撰集としての重味を缺くやうにも思はれる。

詞花集は卷數、部立共に金葉集と同樣である。但し金葉の俊頼が、採錄した歌數は十數首にすぎなかつたとはいへ、新味を見せた連歌の部が詞花集にはおかれなかつた。穩健な顯輔は、連歌は單なる遊戲にすぎないと思つて除いたのか、他の勅撰集に前例がないのでおかなかつたのでもあらうか、そのどちらかか、兩方かであらう。十卷とした事は以前にも拾遺抄の例があるから、一概に金葉に摸したとも云はれないが、詞花の名は勿論金葉の例に倣つたのである。此の集は流布本によれば歌數四百十一首、袋草紙、八雲御抄には共に四百九首とある。流布本金葉集の歌數約七百に比して、三百首程も少ないのは、金葉を經ること僅かに十數年餘り久しくないので、俊頼と殆んど同一方針によつて撰した顯輔としては、採るべき歌が實際に少なかつたからでもあらう、金葉奏覽本の歌を除かなかつた原因の一部もこゝらにあつたのかもしれない。袋草紙に「隨二金葉撰一以後年序不レ幾。爲二之如何一。」といつてゐるのによつても推測される。

顯輔は左大臣魚名の三男末茂の裔顯季の子である。彼の父顯季は、後拾遺には一首に過ぎない

が、金葉には二十首の歌を載せられ、歌道の名匠であつた。その家が六條烏丸にあつたので世に六條家と稱せられた。顯季は正二位修理大夫、顯輔は正三位左京大夫で、官位は父より劣つてゐるが、歌道に於ては父を凌ぎ、六條一流歌學の祖と仰がれてゐる。顯輔の子清輔（袋草紙の著者）も亦猶子法橋顯昭と共に歌學に名があつた。併しながら顯輔が詞花集を撰ぶ時には、清輔にも見せなかつたといふ。斯樣にして撰まれた詞花集を通覽して、撰に入つた歌數の多い作者を求めると、故人になつた人々では曾根好忠の十七首、和泉式部の十六首、大江匡房の十四首、源俊頼の十一首、花山院の九首、大中臣能宣、赤染衞門の各八首に對して現在の人々は、藤原忠通七首、崇德院六首、撰者顯輔自身の六首は、俊頼が當代に重きをおき、且自らの詠を最も多數に入れて古今の精神を復活させた、新しい撰述方針を取つたのに比して、些か物足りない感がないでもない。これは俊頼が新風の爲に奮鬭した旺盛な自信力に對して、強ひて古調を守るのでもなく、また新奇を人に誇るのでもなく、その中間をゆく穩健を主とする六條家の歌風の然らしめたものであらうか。それも一つの原因ではあらうが、又金葉を去ること幾許もなかつた事も、その一因ではあるまいか。俊頼の十一首に對して、競爭者基俊の一首は金葉の時と似てゐる。後拾遺の通俊二に對して經信一も偶然ではあらうが、面白い對照である。俊頼が金葉を撰んだのは、院宣を奉

じてから三年後である。詞花集は仁平元年の撰進として、院宣が下つてから七年も掛つてゐる。而も俊頼は三度撰び直してゐるのに、顯輔にはそのやうな傳へもない。これも俊頼の急進主義と顯輔の事大主義との現はれかもしれないが、金葉にとられた後で、適當な歌の蒐輯に困難であつたからではなからうかと思ふ。

この詞花集に盛られてゐる歌は、どんな歌であらうか。

数ならぬ身にさへ年のつもるかな老は人をも嫌はざりけり　冬　成尋法師

命あらば逢ふ夜もあらむ世の中になど死ぬばかり思ふ心ぞ　戀上　藤原惟成

のやうに調といひ、理智的反省的な主觀的内容といひ、全く古今の風格をもつてゐる歌もある。

身の程を思ひしりぬる事のみやつれなき人の情なるらむ　戀上　隆縁法師

胸は富士袖は清見が關なれや煙も波もたたぬ日ぞなき　戀上　平祐擧

は餘りに技巧に走りすぎ、餘りに趣向を凝らしすぎた弊があつて詩趣を失つてゐる。

來たりともぬるまもあらじ夏の夜の有明の月も傾きにけり　戀下　曾根好忠

夕霧に佐野の舟橋音すなりたなれの駒の歸りくるかも　雜上　俊雅の母

は古今調にあいて、萬葉調を學んだものである。「春さへ晴れぬみ山邊のさと。」「吹きなみだりそ

春の山風。」「むすぼほるらむ青柳の絲。」といふやうに體言止めはいよ〳〵多くなつてゐる。「來ぬ人をまちかね山の。」「鈴蟲のなるみの野邊。」といふやうな云ひかけは益多く、

雪の色を盗みて咲ける卯の花はさえてや人に疑はるらむ　夏　源俊頼

風ふけば楢の枯葉のそよ〳〵と云ひ合はせつゝいつか散るらむ　冬　惟宗隆頼

といふやうな擬人法が見えてゐて、修辭的の技巧は金葉と共に非常に發達してゐる。

春日野にあさなく雉のはね音は雪の消えまに若菜摘めとや　春　源重之

は、「この歌どもみなまことにめづらしげにおもしろく。」と俊成がほめてゐる。

難波江の蘆間に宿る月みれば我が身ひとつもしづまざりけり　雜上　藤原顯輔

を俊成は、「この歌いみじくをかしき歌也。」「この歌はむかしの歌にも恥ぢざる歌なり。」と讃賞してゐる。

わだの原こぎ出でて見れば久堅の雲居にまがふ沖つ白浪　雜下　藤原忠通

を藤岡博士は、「何等の奇趣なきがごとしといへども、一誦して萬里洶涌の海眼前に彷彿たるを覺ゆ。」と評してをられる。

夜もすがらふじのたかねに雪消えて淸見が關にすめる月影　雜上　藤原顯輔

思ひかね別れて野邊をきてみれば淺ぢが原に秋風ぞふく　雑上　源　道　濟

の如きは、純然たる敍景客觀の歌であつて、清新な感覺、纖細な感覺を感得する事が出來る。かくの如く詞花集は長所も短所も、金葉集と相同じうして、大概に金葉と同一傾向であると思はれる。金葉の卷頭歌は、

うちなきび春はきにけり山川の岩間の冰いまやとくらむ　藤原顯季

であつて、平明な歌であり、調子は古今を思はせるものがある。これに比すると、詞花集の卷頭歌の、

冰りゐし滋賀の唐崎打ちとけてさゞ波よする春風ぞふく　大江匡房

をみれば、餘程巧緻になつてゐて、調に近代風の響が感じられる。詞花の方が金葉よりは一層近代的であらうか。またしかあるべき筈であるのに、

山びこのこたふる山のほとゝぎす一聲なけば二聲ぞきく　夏　能因法師

わが戀はよしのの山のおくなれや思ひいれどもあふ人もなし　戀上　藤原顯季

といふやうな機智にすぎて、理窟に墮した歌が、即ち古今の、

絲によるものならなくに別れ路の心ぼそくも思ほゆるかな　羇旅　貫　之

の理智的な歌と、一味相通ずるもののある歌が、反つて詞花の方に多いやうに思はれる。これは撰者の立場が然らしめたのか、清新な歌が俊頼によつて多く採られて、これに變るべきものが少なかつた爲の結果であらうか、輕々に斷じ去る事は出來ないであらう。

金葉集が題名に新味を見せて迷信的批難をうけ、これに倣つた詞花が、詞の音、死に通ずると難ぜられてゐる。袋草紙に、「餘りの難歟。」と辨じてゐるのは、金葉不吉なりと難じた淸輔としては、些か我佛尊しの感がある。詞花の名の不吉な爲に、崇德院外遷の御嘆きが出來たといふ說さへもある。詞花集出でて教長は拾遺古今二十卷を撰してこれを難じ、其の序を永範が書いてゐるといふ。八雲御抄に、「教長撰。有レ序。永範嘲二詞花集一。」とある。教長は勅撰集撰進の院宣を顯輔に傳へた人ではあるが、其の作は詞花に二首しかとられてゐない。永範は一首も入つてゐない。もしかすると、その恨みの結晶が凝つて拾遺古今の二十卷となつたのかも知れないが、傳本がないらしいので、どの程度の批難であるかわからないのは殘念である。俊成が正治奏狀に、

のり長と申し候ひしもの、私のうちききに、拾遺古今と名づけて集め撰びたる事候ひき。其の時淸輔かれにつきたるものにて、傍にそひ候ひて、諸共に仕りて候ひし、誠に見ぐるしき事にて候ひき。

といつてゐるのはどうであらうか。清輔が俊成の競爭者の立場にあつた事が、俊成をしてかく云はしめる原因であつたのではあるまいか。なる程清輔は、父顯輔が詞花を撰ぶ時に相談をしなかつた事や、千歳一遇の金葉詞花兩集の時に逢ひながら、初めには幼少、後には撰者の子の歌は入らないのが例だからとて入らなかつた事に對して、袋草紙で歎聲を發しては居るが、正治奏狀にいふ程の事はどうであらう。吉田令世が袋草紙の、「予按レ之。撰集無二私事一。難且議者不二實事一也……傍人之所爲別事也。」とあるのを引用して、正治奏狀の信ぜられない旨を論じてゐる（本卷七四五、六頁參照）のに荷擔せざるを得ない。又長門前司爲經が後葉集二十卷を編して詞花集を誹つてゐるが、これは俊頼の、

なみだてる松のしづえをくもでにて霞みわたれる天の橋立

みにかへて惜しむにとまる花ならばけふや我が身の限りならまし

等を始め、詞花集中の歌をも撰び入れてゐる。此の後葉集に對して、清輔が牧笛集を編して後葉集を難じたと傳へられてゐる。これによつてみても清輔の拾遺古今に助力したといふ事は肯定し難い事である。其の他八條太政大臣實行が、その子公行の秀歌を詞花に入れなかつたのを怒つて別に歌集を撰んでこれを駁せんとしたが、その子公教の諫めで思ひ止まつたとか、餘り一體許り

におもむけたので、後代の難もあつた(言塵集)とか。「詞花集はことにさまはよくみえはべるを、あまりにをかしきさまのふりにて、ざれうたざまの多く侍るなり。」(古來風體抄)など、いろ〱の難があつた。が、これは新舊、中立、各好む所に據つて黨をたて、羣雄割據の當時の歌壇の趨勢としてはいたし方のない事であらう。がしかし、古來風體抄にも、「詞花集には勅撰集にあらねばとて、玄々集(能因の私撰歌集)の歌をおほく入れたればにや、後拾遺の歌よりもたけある歌ども入りて、集のたけもよくみゆるを。」と褒めてゐるし、「歌のありさまのかはりてゆく程も、撰者のこゝろ〲も、撰集にみなみゆる事なるべし。」と歌風の變化を認めてゐる通り、金葉、詞花の時代には、古今のかげも餘程薄らいできたのは自然の勢ひで、如何ともし難い事である。之れを要するに金葉、詞花の時代は、歌人は各自個を主張して他を排し、古今の威力既に衰へ、之れに代るべき新興の歌風は未だ天下を風靡するに至らず、古今の殘壘を死守せんとする基俊一派、新風の大旆の下に勇躍する俊頼の一黨、其の間に介在する顯輔の穩健派、雜然紛々として活氣橫溢の時代である。此の二集の興味は一にかゝつてその動的な點にあるのである。

千載和歌集

詞花集撰ばれて間もなく、さしも泰平うち續いた京都の地も、保元、平治の亂以來、櫻插して大宮人の練り歩いた都大路に、武士の鎧の袖の響を聞くに至り、詞花の名が讖をなしたのか、崇德院は松山に音をのみなき給ふ御身の上となり果て給うた。藤原氏に代つて平氏が政權を得て間もなく、上下に怨嗟の聲をきくに至つた。洛外鹿ケ谷に怪しい談合があるかと思ふと、宇治に賴政の戰がある。福原の遷都騷ぎがある。賴朝は伊豆で兵を擧げた。諸國の源氏は漸く蜂起した。平家の棟梁淸盛が薨じた。天下はまことに多事である。かかる時に、壽永二年(皇紀一八四三)二月、三位中將平資盛は後白河院の院宣を奉じて、勅撰集を參らすべき曲の旨を藤原俊成につたへた。詞花集撰進の院宣が下つてから三十九年後である。それにしても大宮人の悠長驚くべきものがある。かくて俊成は後拾遺に撰び殘された歌、上は正曆から文治の今にいたるまでの歌を撰んで、文治三年(皇紀一八四七年)九月二十日に奏つた。賴朝が鎌倉に幕府を開いてから三年後である。院宣を承つてから四年かゝつてゐる。これが千載和歌集で詞花集成つてから三十五六年後である。ところが俊成の息定家の日記明月記に、

文治四年四月二十二日戊子晴。巳刻計入道殿令㆑參㆑院給。爲㆓勅撰集奏覽㆒也。日來自筆御淸書……

とある。即ち、巳刻(今の十時頃)に俊成が定家を院にやつて、勅撰集を奏覽させたといふのである。千載集には今までのと違つて、堂々と序文がついてゐる。それに、「文治三つの年の秋長月の中の十日に、撰び奉りぬるになむありける。」とある。この矛盾を、吉田令世は三年九月に奏覽したが、何か改める事があつて、再び淸書して四年四月二十二日に奉つたのであらうと說明してゐる(本卷七五一頁參照)。明月記の文治四年四月二十四日の條にも、撰者の詠が少ないので、もう三四十首を加へよとの仰せがあつたと記されてゐるのを見ても、令世の推測のやうな事があつたのであらう。その訂正は內々の事で、表面には文治三年九月二十日撰進といふ事にしておいたのであらうから、嚴密にいへば文治三年撰進とは云はれないわけではある。

撰者俊成は道長の息長家の曾孫で、父は俊忠、俊成はじめは顯廣といつた。詞花集には顯廣の名で歌が載つてゐる。官は正三位皇太后宮大夫である。其の家が五條室町にあつたので世に五條三位といつてゐる。薙髮して後釋阿といふ。千載集撰進の院宣は入道後の事である。入道が勅撰集を撰んだのはこれが最初である。序文にも「松の戸ぼそに遁れ、苔の袂にしをれたるもの、これを撰べる跡なむなかりけれど。」と自分で書いてゐる。此の人もと顯輔の養子であつたので、名も顯廣と稱したといふ說もあるから、始めは歌を顯輔に學んだのであらう。後に藤原基俊の門に

入つて、俊成と名を改めた。然るに彼は千載集を撰ぶや、師の基俊二十七首に對して、俊頼を五十二首もとつてゐる。顯輔に至つては僅かに十三首にすぎない。或人が師匠の敵俊頼の歌を多く入れた事を難じたのに、彼は、俊頼はにくいが敵は憎くないと答へたといはれてゐる。かやうな閱歷嗜好を持つてゐる俊成に、これらの諸家の風がそれ〳〵入つてゐるのは當然のことである。卽ち保守派の基俊に學んだ彼は、詞の上に多少おだやかな保守的な點がある。俊頼のもつ詞を自由に大膽に驅使する表現上の新し味は彼は好まない。しかし俊頼の豐富な詩趣は彼の喜ぶところである。金葉、詞花には新しい表現法で、自然の客觀描寫がされてゐる。潑剌とはして居るが、生々しい。それを更に進んで、しみ〴〵とした心で自然を眺めて、それを溫雅平明な詞で表現しようとするのが俊成の立場である。俊頼も基俊も俊成の咀嚼同化を經て、新しく俊成のうちに生きたのである。寒い夜桐火桶を抱きながら沈思瞑想して、俊成は幽玄な歌の境地を見出したのである。

夕されば野邊の秋風身にしみてうづらなくなり深草の里

といふ歌を彼は自讃したといふ事である。しみ〴〵として靜かな歌である。曾根好忠によつて開拓された客觀描寫は、俊成によつて行きつく處まで行きつくした樣である。この撰者が古來風體

抄で自ら、「千載集は又おろかなる心ひとつにえらびける程に、歌をのみ思ひて人をわすれにける
に侍るめり。」といつて撰んだ此の集はどうであらう。

千載集二十卷、歌數千二百有餘首、序文をつけて堂々たる歌集である。金葉、詞花の二集は名
が不吉だとの俗難があつたので、彼は、「過ぎにし方も年久しく、今ゆく樣も遙かに止らむため。」
に千載和歌集と祝儀をこめて名づけた。集中の作者は、拾遺の選に漏れた正曆の頃から文治の今
に及んでゐるが、主としてゐるのは近代である。撰歌の最多いのは俊賴の五十二首、ついで俊成
が三十六首、藤原基俊、崇德上皇、俊惠法師、藤原淸輔、道因法師は各二十數首、西行法師、後
德大寺實定、源賴政等は十數首あり、新古今の撰者家隆、定家の名も旣に見えてゐる。

うめがえに降りつむ雪は鶯の羽風にちるも花かとぞみる　　藤原顯輔

は趣向の歌で、理智的な嫌ひはあるが、鶯の羽風に散る雪は、流石に纖細である。

梅の花をりて簪にさしつれば衣に落つる雪かとぞ見る　　藤原公［言］

は、散る雪を花と見た前の歌に對して、これは散る花を雪とみたので、同巧異曲である。

春の夜は軒端の梅をもる月の光もかをる心地こそすれ　　藤原俊成

月の光もかをるは、巧妙なる修辭である。

霞しく春のしほぢを見渡せば緑をわくる沖つ白浪　　藤原兼實

艶麗な色彩の歌である。

何となくものぞかなしき菅原やふしみの里の秋の夕暮　　源俊頼

俊成の喜びさうな歌である。「なにとなくものぞかなしき。」が說明的であるが、この境地を一步進めば俊成の、「うづらなくなり深草の里。」になるのである。

郭公なきつるかたをながむればたゞ有明の月ぞ殘れる　　後德大寺實定

郭公の姿の見えないのを云はないで、有明の月のみ殘つてゐるといふ、洗練された技巧である。

あすもこむ野路の玉川萩こえて色なる浪に月やどりけり　　源俊頼

色なる浪に措辭の新奇があり、色彩の美がある。かく樣々な姿、色々な心はあるが、千載集を統一する俊成の精神は、表現が平明で、深みのある靜寂幽玄な趣であつたであらう。

勅撰集が出るとそれを難ずる書の出るのが近來の例になつてしまつた。此の集も、定家が明月記に於て作者の位置や題の年月に誤りが多い。昔俊成が撰述の時に諫めたがきかれなかつた。此の集の體遺感な點が多いと難じてゐる。がこれは流石に撰歌の內容にふれてゐない。漂泊の詩人西行が東國にあつて、勅撰集撰述の事を聞いて上洛の道に、人に逢つて、彼の、「鴫たつ澤の秋の

夕暮。」の歌の入つてゐない事を聞いて、扨は見て要なしといつてひき返したといふ傳へもある。又平忠度が撰集の事を聞いて、都落の途中、ひきかへして俊成を訪れて、詠草を託してその歌の入れられる事をたのんだのは有名な話である。まことに天下騷亂の際に成つた千載集が溫雅幽玄な姿をもつてゐる事は興味深い事ではあるまいか。

新古今和歌集

年々歲々花の色は相似てゐるが、歲々年々人は同じではない、悠々たる歲月の流れは、古きを送り新しきを迎へて、人の世に常住の姿は見られない。五條三位入道俊成が、古今の和歌に眼を曝して千載集撰述に餘念もないうちに、世の中には大きな變化があつた。俊成が後白河院宣をうけた壽永二年二月にはまだ平家の世であつた。それが撰述の事が終つた時には、伊豆流人賴朝は既に鎌倉にあつて天下の實權を握つてゐた。その賴朝も薨じ、千載集奏覽の文治三年から春は十四度廻つて、建仁元年(皇紀一八六一)となつた。時に土御門天皇の御宇、後鳥羽院の院政時代である。院は諸道に御通曉になつてゐたが、就中最も和歌を御好みになつて、その年七月二十六日延喜、天曆の古例を御慕ひになつて和歌所が開かれた。寄人は藤原良經、源通親、源通具、釋慈

圓、藤原俊成、藤原有家、藤原定家、藤原家隆、藤原雅經、源具親、釋寂蓮の十一人である。ついで藤原淸範、藤原隆信、鴨長明、藤原秀能を寄人とし、源家長を開闔となされた。これが大規模の新古今集編纂の序開きであつた。此の撰集の成立の有樣は定家の日記明月記によつて詳細に知る事が出來る。同年十一月三日和歌撰進の院宣が、寄人の右衛門督源通具、大藏卿藤原有家、左近中將藤原定家、前上總介藤原家隆、左近少將藤原雅經、沙彌寂蓮の六人に下されたが、事始まつて僅かに半年、建仁二年七月二十日その中の寂蓮が示寂した。「已以奇異逸物也。今已歸㆑泉爲㆑道可㆑恨於㆑身可㆑悲。」と定家はこの事を悲歎してゐる。この間にも撰歌の事は撓まず行はれて殘りの五人は各自古今の和歌に眼を曝す事となつた。その努力は非常なものであつたらしい。明月記の同二年八月十三日の條に、「自㆓一昨日㆒右目大腫。撰歌之間眼精盡歟。」とある。精勵の程察するに餘りがある。翌建仁三年春、後鳥羽院熊野へ御幸遊ばされ、還御早々に撰歌を奉るべき旨があつた。同年四月十一日の明月記に定家は「此二十日計只見㆓舊歌㆒送㆓日夜㆒。」と書いてゐる。四月十九日通具撰歌を奏覽し、二十日に定家も撰歌を奏覽した。他の三人の奏覽も此の頃であつたのであらう。御鳥羽院はこの五人の撰者の奉つた歌を御覽になつて、親しく合點取捨を遊ばされた。かくて院の御點を得た撰進歌を中心にして、それに建仁三年四月以後の作、もしくは撰出せ

られた歌を加へて、今日の新古今和歌集は出來上つてゐる。その建仁三年四月以前撰進の歌と、以後撰出の歌とが武田祐吉氏の古寫本研究の努力によつて明らかになつたのは、まことに喜ばしい事である。

建仁四年(皇紀一八六四)二月二十日、改元して元久元年となつた。元久元年七月二十二日から撰歌の部立が始められた。七月中に夏の部までの部類が出來た。明月記九月二十七日の條に、「近日和歌部類。每日雖レ催。所勞無レ術由披露。萬事無レ興。交レ衆甚無益。」と不平をこぼしてゐる。部類を編成して、やゝ歌集の體をなしてきたのに、今度は屢一部を切つて和歌を除いたり入れたりする面倒な仕事が起つてきた。これが十一月頃からのことである。これは多くは院の御意見から出た。いかに院が新古今集編纂に力を御盡しになつたかが此の一事でも伺ひ知られる。明月記元久二年三月二十日に、始めて新古今和歌集の名が見えてゐるから、この頃命名されたのであらう。此の名は如何にも立派な名である。古今を尊び、而も徒らにそれを摸するのではなく、古今の姿に新しい心を盛つた此の歌集には、いかにも似つかはしい名である。この月六日に大體の目錄が出來上つて居るから、三月頃にまづ大體歌集の體裁が整つたのであらう。新古今の假名序にも、「時に元久二年三月二十六日になむしるし終りぬる。」とあるから、表むきにはこの時に出來上

つた事になつてゐる。三月二十七日に新古今集の竟宴を行はせられた。勅撰集撰進の竟宴は前例のないことであつた。

竟宴はすんでもこれは何かの都合で行はれたのであらう。實際はその翌日すぐに改正を命ぜられてゐる、切繼の事は頻々として行はれてゐる。武田氏は甘露寺親長筆本の奥に、「承元四年九月止之。」とあるのが、切繼の事の物に見える最後だといつてゐられる。承元四年（皇紀一八七〇）は始めて院宣の下つた建仁元年からは九年後、元久二年からは五年後である。流布本新古今集の雜中に、後鳥羽院の、

奥山のおどろの下もふみわけて道ある世ぞと人に知らせむ

の御歌がのせてある。これは承久二年（皇紀一八八一）三月、住吉歌合の時の歌である。此の年は建仁元年からは十七年後、元久二年からは十四年後の事である。然るに御鳥羽院は、承久の亂後隱岐に御遷幸になつて後も、御氣に召さない歌を御刪りになつて、千六百首に遊ばされた。

かやうに新古今集は改正につぐに改正を以てして停止する處を知らない有樣であつたので、種種な異本を生ずるに至つた。かくして新古今集はどの本が最も正しいのであらうかといへば、隱岐本であらう。それは此の集は以前の勅撰集の樣に撰者が撰進したものを御嘉納になつたのでは

なく、撰者が各自撰進した歌を、院自ら御合點遊ばされて、撰者がこれを部類に配列したので、最後の決定は院であるから、實は後鳥羽院が御撰になつたので、五人の撰者はその助手だと見られない事もない。この意味からみて、隱岐本が院の御心持ちに最も近いものだからである。併しながら元文二年に竟宴まで行はれてゐる、院の御心に御不滿はあつたであらうし、その時は事實まだ完成してゐたのではなくて、假名序も淸書されてゐなかつたといふから、未定稿には相違ないが、この未定稿とても院の合點によつて撰者が配列したのであるから、院は御不滿ながらも一時これを御認めになつたのだと云はれない事もあるまい。この草稿をそのまゝ淸書したもの卽ち新古今集だといふ事も出來よう。金葉集の初度本、二度本の時とは事情が異つてゐる。序文にも元文二年と明記されてゐるのだから、勅撰集の事はこゝに終つて、その後の切繼や隱岐本は、後鳥羽院御一人の內々の御仕事である。隱岐本は拾遺集に對する拾遺抄の樣な關係のものだと云はれよう。元文二年三月のもののみの配列が此の集の正しい姿であるといふ事も出來得ると思ふ。

新古今和歌集二十卷、假名序と眞名序とあり。假名序は良經、眞名序は親經の作、歌數實に千九百數十首、前例を見ない堂々たる大勅撰集である。古今より新古今までを八代集と稱する事旣に八雲御抄に見えて居る。撰者定家は俊成の子で、父子相繼いで勅撰集の撰者となつて、以來二

條家は歌學に重きをなした。新古今以後の歌壇の頭目である。俊成が幽玄體を喜んで、靜寂な境地をたゞそのまゝに客觀的に平明に詠出したのを、定家は更に一歩をすゝめて、有心體を喜んだ作者の心境にもつてゐるものは、その表現法の完全と相待つて、初めてすぐれたものであるとして、俊成よりはその表現法に巧緻な技巧を凝らした。內容からみれば、純粹客觀の中に主觀が織り込まれてきた。卽ち主觀と客觀とが融合してきた。この定家の歌風が新古今和歌集の基調をなす歌風である。古今が新しい生命を持つて、よみがへつてきたのだと云つていい。此の意味から此の集に新古今と名づけられたのは寔にふさはしいと思ふ。撰者家隆は寂蓮の壻であつて俊成の門弟である。定家の歌が工夫に工夫を積んで修辭を整へられてゐるに反して、家隆の歌はすらすらとして技巧を弄する事が少なく、俊成の歌の境地よりは華麗纖巧なところがある。有家は詞花集の撰者顯輔の孫である。當時の歌人の主なる者は、定家、家隆の他に、後鳥羽院、後京極攝政良經、慈鎭和尙、式子內親王、宮內卿、顯昭、寂蓮、長明、秀能、俊惠等が名がある。

新古今は古今に對立して新らしい時期を劃すものだといはれて居る。萬葉風とか、古今風といふに對して、新古今風といはれてゐる。然らば新古今の特徵はどんなものであらうか。第一に本歌取りが多くなつた事である。本歌取りとは、古歌によつて新しい歌を作ることである。巧みに

換骨奪胎する事である。これによつて新しい歌に本歌から生ずる聯想を添へて、詩的聯想を多量ならしめようとしたのである。一口に本歌取りといつても方法は色々ある。單に古歌の句をとつたもの、古歌の心と同じやうな心を歌つたもの、古歌の詞をとつて全く別な趣を歌つたものなど色々ある。例へば、定家の、

駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮

は、萬葉の、

苦しくも降り來る雨かみわが崎狹野のわたりに家もあらなくに

が本歌であるが、これは本歌とは別種な情景を詠出したもので本歌取の手本だといはれてゐる。

第二には三句切が非常に多くなつた事である。これは卽ち七五の多くなつたといふ事である。奈良朝は五、七調、平安は七、五調だといはれてゐるが、その一因は三句切が出來たからにもある。萬葉の、

ぬばたまの　夜のふけゆけば、ひさぎおふる　淸き河原に、千鳥しばなく。　赤人

これは五、七の調である。新古今の、

見渡せば、霞の中も　霞みけり。煙たなびく　しほがまの浦。　家隆

では三句切で、七、五になつてゐる。此の三句切が、古今の頃は三句切は一割四分位であつたのが、漸次增加してきて、金葉、詞花の頃は二、三割となり、新古今にいたつて過半數をしめるにいたつた。

第三が體言止めの多くなつた事である。體言止めとは、最後が「なり」でも「かな」でもなくて、名詞で終つてゐるものである。例へば、

今更にすみうしとてもいかゞせむなだの鹽屋の夕暮の空　秀能

のやうなものである。これは古今の頃は二十一分の一位の割合であつたのが、漸次殖えてきて、金葉では十三分の一、新古今では四分の一位の割合にまで進んできた。

第四には、歌ふべき思想感情にさして大きな變化を示し得なかつた新古今時代の歌人は、「鶯の涙のつらゝ。」といふやうな著想の珍らしさや、「嵐をわたる聲。」といふやうな表現の巧緻に苦心をしてゐる。それがために、「主ある言葉。」といふ不文律が出來てきた。「主ある言葉。」といふのは、當時の人がある珍らしい表現法をすれば、その詞の主はその人であるから、他人はこれを盜んではいけないといふのである。これによつてみても、當時の人がいかに一首の技巧の上に腐心したかが覗ひ知られよう。緣語も用ゐられれば、懸詞もある。序も、

石上ふるのの小笹霜をへて一よばかりに殘るとしかな　　眞　經

のやうに、客觀敍景を其の儘主觀の形容句に用ゐてゐる。譬喩にも、

我が戀は松を時雨の染めかねて眞葛が原に風さわぐなり　　慈　圓

といふやうに、全首譬喩からできてゐるものもある。かういふのは、或は當時流行し始めた禪宗の影響ではあるまいかと思はれる。

これまでは主として修辭の上から新古今の歌を見てきた。今度は内容の方から眺めてみよう。

なごの浦の霞のまよりながむれば入日を洗ふ沖つ白浪　　實　定

しがの浦やとほざかり行く波間より冰りて出づる有明の月　　家　隆

このやうな客觀描寫の歌は依然として多い。がこれは新古今に始まつた事ではない、金葉、詞花の頃からの傾向である。けれども新古今にいたつて、技巧の妙を極めて磨きあげられて居る。「入日を洗ふ。」「冰りて出づる。」の如きがそれである。

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕ぐれ　　定　家

寂しい秋の情景である。が純粹な客觀描寫にとゞまつてはゐない。花も紅葉もないといふところに、主觀的な要素が入つてゐる、客觀の中に主觀が織り込まれてゐるのであつて、新古今にいた

つて始めて到達し得た境地である。

鳰の海や月の光のうつろへば浪の花にも秋は見えけり　家隆

景象と感覺と情趣の混然融合した美を見せてゐる。

古來からの敍情の歌も勿論多量に載つてゐる。例へば、

これや見し昔すみけむ跡ならむ蓬が露に月のかゝれる　西行

忘らるゝ身を知る袖の村雨につれなく山の月は出でけり　後鳥羽院

の樣に、單なる敍情にとゞまらないで、感情と景象と相互に溶け合つて一つになつてゐるところに、物語を讀むやうな趣をもつてゐる。これらの點が此の集のもつ特徴である。これを要するに此の集は千載よりも技巧内容共に一歩を進めて居る、益纎細に益優麗である。定家は此の集の撰歌が花を主として實を忘れてゐるといふので、面白からず思つたといふ事は、ほゞ明月記でも察しられるが、古今集の餘りに平淡に、餘りに理窟つぽいのを嫌ふ人は、反つて新古今の巧緻華麗な趣を好むであらう。併しながら新古今の餘りに技巧に走り、詞の彫琢に過ぎてゐて、感激のないのを忌む人は、古今の悠揚として迫らざる調を愛するであらう。新古今の旅の歌をみるに、

みやこにも今や衣をうつの山ゆふ霜はらふつたの下みち　定家

といふやうに、美しくはあるが旅としての實感の伴はない作の多いなかに、

年たけて又こゆべしとおもひきや命なりけりさ夜の中山

のやうな、實感の滲み出した作を殘した西行の如きは、異色のある作家であつた。

解題 終

金葉和歌集

金葉和歌集　巻第一

春歌

堀河院の御時百首の歌めしける時立春の心をよみ侍りける　修理大夫顯季

うちなびき春はきにけり山川の岩間のこほり今日やとくらむ

春宮大夫公實

春たちてこずゑに消えぬしら雪はまだきに咲ける花かとぞ見る

藤原顯仲朝臣

いつしかと明けゆく空のかすめるは天の戸よりや春は立つらむ

皇后宮肥後

つらゝゐし細谷川のとけ行くはみなかみよりや春はたつらむ

百首の歌の中に春の心を人にかはりてよめる　前齋宮河内

春のくる夜のまの風のいかなれば今朝ふくにしも氷とくらむ

初春の心をよめる　太宰大貳長實

いつしかと春のしるしに立つものはあしたの原の霞なりけり

○うちなびき　おしなべて。普く

○まだきに　まだその時期にならないのに。

○つらゝゐし　氷柱の生じてゐた。一本「つゞらゐし」つゞらは蔓草の名。

○ふくにしも　吹くにも。「し」は意味を強める助詞。

○あしたの原　大和國北葛城郡。

正月の一日ごろ雪のふり侍りける日遣はしける　　修理大夫顯季

あらたまのとしの初めに降りしけば初雪とこそいふべかりけれ

かへし　　春宮大夫公實

朝戸あけて春のこずゑの雪みれば初花ともやいふべかるらむ

實行卿の家の歌合に霞の心をよめる　　少將公教母

あさみどり霞める空のけしきにや常磐の山も春をしるらむ

藤原顯輔朝臣

年ごとにかはらぬものは春霞たつたのやまのけしきなりけり

霞の心をよめる　　太宰大貳長實

あづさゆみ春のけしきになりにけりいるさの山にかすみたなびく

百首の歌の中に鶯の心をよめる　　修理大夫顯季

鶯の鳴くにつけてやまがねふくきびのやまびと春をしるらむ

初聞鶯といへる事をよめる　　春宮大夫公實

今日よりや梅のたちえに鶯のこゑ聞きなるゝ初めなるらむ

正月八日春立ちける日鶯のなきけるを聞きてよめる　　藤原顯輔朝臣

今日やさは雪うちとけて鶯のみやこに出づるははつねなるらむ

○あらたまの　「年」の枕詞。

○かへし　返し歌。返歌。

○空のけしきにや　空の様子によつてか。「や」は疑問の助詞。

○常磐の山も　不變といふ名を負うてゐる山も。常磐の山は山城國葛野郡。

○たつたのやま　大和國生駒郡の龍田山に春霞の立つ意味を云ひ懸く。

○あづさゆみ　梓弓。「張る」の序から「春」の枕詞に用ゐられた。

○いるさの山　但馬國出石郡の入佐山。

○まがねふく　眞金を吹く。「吉備」の枕詞。

○きびのやまびと　きびは備前、備中、備後の古稱。やまびとは山住みの人。

○春立ちける日　立春の日。

○さは　さやうに。

○はつね　初音。一本「はじめ」

あかつき鶯をきくといふ事をよめる　源雅兼朝臣

うぐひすの木づたふ樣もゆかしきにいまひとこゑは明けはてて鳴け

皇后宮にて人々歌つかうまつりけるに雨中鶯といふ事をよめる　源俊頼朝臣

春雨はふりしむれども鶯のこゑはしをれぬものにぞありける

永暹法師忍びてものへまかりけるに右大辨經賴が家の梅さかりに咲きければ門にひねもすに立ちくらして夕つかたいひいれ侍りける　永暹法師

梅の花匂ふあたりはよきてこそいそぐ道をば行くべかりけれ

梅花夜芳といへることをよめる　前太宰大貳長房

梅が枝に風やふくらむはるの夜はをらぬ袖さへにほひぬるかな

朱雀院に人々まかりて閑庭梅花といへる事をよめる　大納言經信

今日こゝに見にこざりせば梅の花ひとりや春の風にちらまし

道雅卿の家の歌合に梅花をよめる　藤原兼房朝臣

ちりかゝる影はみゆれど梅の花水には香こそうつらざりけれ

梅の花をよめる　源忠季

かぎりありて散りははつとも梅のはな香をば梢に殘せとぞ思ふ

子の日の心をよめる　大中臣公長朝臣

○ゆかしきに　見たいこと故。

○ふりしむれども　降り濕るけれども。

○ひねもす　終日。

○よきて　避けて。でないと急ぐ道もはかどらないから。

○をらぬ　折らぬ。

○朱雀院　累代の後院で或は四條後院と號した。

○見にこざりせば　見に來なかつたならば。

○ちらまし　散つたらうに。

○子の日　昔正月初の子の日に郊外に出て小松を引き遊宴する行事があつた。

○ひかでこそ　引かずに。「こそ」は强める助詞。
○神さび行かむ陰にかくれめ　松が年古りて老木になり行かう其の陰に隱れよう。「め」は「こそ」の係りで「む」の既然形で結ばれたもの
○ひくまの野　參河國とも云ふ。遠江國濱名郡か。
○心を　一本「事を」
○かたより　片撚り。
○あさまだき　朝のまだ明け切らぬ内。
○かたよりしける　「し」一本「に」
○あやおる　紋様を織る。
○いとかやま　紀伊國有田郡の絲鹿山。くる（來る、繰る）心細くなど皆絲の緣語。
○よぶこ鳥　郭公鳥のことであらう。
○いかで知らまし　何として知るだらう。
○かりがね　雁が音で雁のこと。
○行きかゝる　一本「行きかくる」

百首の歌の中に子の日の心をよめる　　大藏卿匡房

春日野の子の日の松はひかでこそ神さびゆかむ陰にかくれめ

柳絲隨風といふ心をよませ給ひける　　院御製

春霞たちかくせどもひめ小松ひくまの野邊にわれは來にけり

百首の歌の中に柳をよめる　　春宮大夫公實

かぜふけば柳のいとのかたよりになびくにつけて過ぐる春かな

池邊柳をよめる　　源雅兼朝臣

あさまだき吹きくる風にまかすればかたよりしける靑柳の絲

呼子鳥をよめる　　前齋院尾張

風ふけばなみのあやおる池水に絲ひきそふる岸のあをやぎ

霞中歸鴈といへる事をよめる　　藤原成通朝臣

いとかやまくる人もなき夕暮にこゝろぼそくもよぶこ鳥かな

歸鴈をよめる　　藤原經通朝臣

こゑせずばいかで知らまし春がすみへだつる空にかへるかりがね

花薫風といふ心をよみ侍りける　　攝政左大臣

今はとてこしぢに歸る鴈がねは羽もたゆくや行きかゝるらむ

よしのやま峯の櫻や吹きぬらむふもとの里ににほふはるかぜ　新院御製

白河の花見の御幸に

たづねつる我をや花もまちつらむ今日ぞ盛りににほひましける　太政大臣

人にかはりてよめる

白河のながれひさしきやどなれば花の匂ひものどけかりけり　太宰大貳長實

吹く風も花のあたりはこゝろせよ今日をば常の春とやは見る　待賢門院兵衛

よろづ代のためしと見ゆるはなの色をうつしとゞめよ白河のみづ　源雅兼朝臣

年ごとに咲きそふやどの櫻花なほゆくすゑの春ぞゆかしき　院御製

宇治前太政大臣京極の家の御幸の日よませ給ひける

春霞たちかへるべきそらぞなき花のにほひにこゝろとまりて　春宮大夫公實

遠山櫻といへる事をよめる

白雲とをちのたかねの見えつるは心まどはすさくらなりけり　内大臣

松間櫻花といへる事をよめる

○よしのやま　大和國吉野郡。
○白河　山城國。
○御幸　上皇、女院の御外出。
○花も　一本「風も」
○こゝろせよ　注意せよ。
○今日をば常の春とやは見る　今日は新院の御幸であるから今日を通常の春と見てよいものか。
○なほゆくすゑの春ぞゆかしき　なほこれから先の春が見たいことだ。
○白雲とをちのたかねの見えつるは　彼方の高嶺が白い雲と見えたのは。

春毎に松のみどりにうづもれて風にしられぬ花ざくらかな

左兵衛督實能

この春はのどかに匂へさくら花えださしかはす松のしるしに

山寒花遲といふことを　左京大夫經忠

山ざくらこずゑのかぜのさむければ花のさかりになりぞわづらふ

花爲春友といへることをよめる　内大臣

散らぬまは花を友にてすぎぬべし春よりのちのしる人もがな

新院の御方にて花契遐年といへる事をよめる　待賢門院中納言

しらくもにまがふさくらの梢にて千歳の春をそらにしるかな

藤原顯輔朝臣

萬代に見るべき花のいろなれど今日のにほひをいつかわすれむ

終日尋花といふ事をよめる　源貞亮朝臣

しらくもにまがふ櫻を尋ぬとてかゝらぬ山のなかりつるかな

堀河院御時女房たちを花山の花見せに遣はしたりけるにかへりまゐりて御前にて歌つかうまつりけるに女房にかはりてよませ給うける　堀河院御製

よそにては岩こす瀧とみゆるかなみねの櫻やさかりなるらむ

○花ざくら　櫻花と同じ。

○松のしるしに　常磐である松に枝をさしかはす印に久しくのどやかに匂へ。

○なりぞわづらふ　成り煩ふ。

○散らぬまはの歌　散らない内は花を友にして過せるだらうが、春の去つた後の知り人が欲しいものだ。

○しらくもにまがふ　白雲と見紛ふ。

○今日のにほひ　歌御會のあつた今日の花のにほひ。

○かゝらぬ山　雲のかゝらぬ意味に自分の尋ねない山の意味を云ひ懸けてゐる。

○女房　部屋を持つた女官。

○花山　山城國宇治郡。

○よそにては　餘所見では。

源師俊朝臣

今日くれぬ明日もきてみむ櫻花こゝろしてふけ春のやまかぜ

山花を翫ぶといへる事をよめる　太宰大貳長實

かゞみ山うつろふ花を見てしよりおも影にのみ立たぬ日ぞなき

深山花を　攝政左大臣

みねつゞき匂ふ櫻をしるべにて知らぬ山路にまどひぬるかな

人々に櫻の歌十首よませ侍りけるによめる　修理大夫顯季

さくら花さきぬるときはよしのやま立ちものぼらぬ峯のしらくも

山花留人といへる事をよめる　大中臣公長朝臣

斧の柄は木のもとにてや朽ちなまし春をかぎらぬ櫻なりせば

宇治前太政大臣の家の歌合に櫻をよめる　皇后宮攝津

ちりつもる庭をぞみまし櫻花かぜよりさきにたづねざりせば

源俊頼朝臣

山ざくら咲きそめしよりひさかたのくもゐに見ゆる瀧のしらいと

遙見山花といへる事をよめる　大藏卿匡房

初瀬山くもゐに花のさきぬれば天のかはなみ立つかとぞ見る

○こゝろしてふけ　花を明日まで散らさないやうに注意して吹け。

○かゞみ山　うつろふ（映ろふ、移ろふ）を云ひ起す序。

○深山花を　一本「深山花といへることを」

○しるべにて　道案内にして。

○斧の柄の歌　仙人の棊をうつのを見てゐて斧の柄の朽ちたのに驚いて歸つて來たら世の中がすつかり移易してゐたといふ王質の古話によつて歌つてゐる。

○ちりつもるの歌　初二句と三四五句とを入れ換へるとよく分る。

○ひさかたの　雲、天などの枕詞

○くもゐ　雲居。雲の居る遠方。

○初瀬山　大和國磯城郡。

藤原忠隆

よしのやま嶺になみよる白雲とみゆるは花のこずゑなりけり

堀河院の御時女御の御かたの女房あまた花見ありきけるによめる　前斎宮筑前乳母

春毎にあかぬにほひをさくらばな如何なる風の惜しまざるらむ

人にかはりてよめる　僧正行尊

外（よそ）にては惜しみに來つる花なれど折らではえこそ歸るまじけれ

後冷泉院の御時皇后宮の歌合に櫻をよめる　堀河右大臣

春雨にぬれて尋ねむやまざくら雲のかへしのあらしもぞ吹く

月前見花といふ心をよめる　大藏卿匡房

月影に花見る夜半のうき雲は風のつらさにおとらざりけり

顯季卿の家にて櫻の歌十首人々によませ侍りけるによめる　太宰大貳長實

春の日ののどけき空にふる雪は風にみだるゝ花にぞありける

水上落花といへる事をよめる　源雅兼朝臣

花さそふあらしや峯を渡るらむさくらなみよる谷川のみづ

落花滿庭といへる事をよめる　左兵衞督實能

けさ見ればよはのあらしに散りはてて庭こそ花のさかりなりけれ

○あかぬ　飽きない。
○さくらばな　「櫻花」に「咲く」を云ひ懸けてゐる。
○如何なる風の惜しまざるらむ　いかにつれない風の惜しまず散らすのだらう。
○折らではえこそ歸るまじけれ　折らないでは歸り得まいことよ。
○雲のかへしのあらし　雲を吹きかへす嵐。
○風のつらさにおとらざりけり　月影を浮雲が蔽ふと花が見えなくなるので。
○花さそふ　花を誘ひ散らす。
○さくらなみよる　櫻波寄る。

堀河院御時中宮の御方にて風靜花芳といへる事をつかうまつれる　源俊頼朝臣

こずゑには吹くとも見えでさくら花かをるぞ風のしるしなりける

落花の心をよめる　長實卿母

春ごとにおなじさくらの花なればをしむ心もかはらざりけり

落花隨風といふ心をよめる　右兵衛督伊通

うらやまし如何にふけばか春風の花を心にまかせそめけむ

水上落花といへる心をよめる　大納言經信

水上に花やちるらむ山がはのゐぐひにいとゞかゝるしらなみ

藤原成通朝臣

水の面にちりつむ花をみる折ぞはじめて風はうれしかりける

落花衣にちるといへる事をよめる　藤原永實

散りかゝるけしきは雪の心地して花には袖のぬれぬなりけり

堀河院御時花のちりたるをかきあつめて大きなる物のふたに山のかたにつませ給ひて中宮の御方に奉らせ給へりけるを宮御覽じて歌よめとおほせごと有りければつかうまつれる　御匣殿

さくら花雲かゝるまでかきつめて吉野の山と今日はみるかな

○見えで　見えずして。

○如何に吹けばか　いかに吹くからか。

○水上に　一本「水上は」
○ゐぐひ　水を堰く杙。
○いとゞ　いよ〳〵。一層。

○折ぞ　一本「時ぞ」
○はじめて風はうれし云々　今までは風はつれなく思はれたが、水面に散り積む花の美しさに。
○散りかゝるの歌　橘在列の「折ニ梅花一而挿レ頭。二月之雪落レ衣。」の心持か。
○山のかたに　山の形に。

○かきつめて　「掻き集めて」か、又は掻き積まして。

花の庭にちりつもりたるを見てよめる　郁芳門院安藝

庭の花もとのこずゑに吹きかへせ散らすのみやは心なるべき

夜思落花といへる事をよめる　隆源法師

衣手に晝はちりつむさくら花よるは心にかゝるなりけり

春ものへまかりけるに山田つくるを見てよみ侍りける　高階經成朝臣

櫻さく山田をつくるしづの男はかへすがへすや花をみるらむ

花をよみ侍りける　右兵衞督伊通

白雲とみねには見えてさくら花ちればふもとの雪とこそみれ

後冷泉院の御時月のあかかりける夜女房御供にて南殿にわたらせ給ひたりけるに庭の花かつ散りておもしろかりけるを御覽じてこれを知りたらむ人に見せばやとおほせごとありて中宮の御方に下野やあらむとてめしにつかはしたりければ參りたるを御覽じてあの花折りて參れと仰せごとありければ折りて參りたるをたゞにてはいかゞとおほせごとありければつかうまつりける　下野

春の夜の月のひかりのなかりせば雲居の花をいかでをらまし

新院の御方にて殘花薫風といへる事をよめる　中納言雅定

○散らすのみやは心なるべき　風は散らすばかりが本意ではあるまいに。
○衣手　袖。
○心にかゝる　氣懸りに散りかゝる意味を含めてゐる。
○かへすがへす　田を返す意味に繰返す意味の返すがへすを云ひ懸く。
○あかかりける夜　明るかつた夜
○南殿　紫宸殿。
○知りたらむ人に　物の風趣を解しよう人に。
○見せばや　見せたい。
○たゞにては　たゞでは。歌を詠まないでは。
○春の夜の　一本「長き夜の」
○雲居　皇居のこと。

散りはてぬ花のありかをしらすれば厭ひし風ぞけふはうれしき

奈良にて人々百首歌よみけるに早蕨(さわらび)をよめる　権僧正永縁

山ざとは野邊のさ蕨もえいづる折にのみこそ人はとひけれ

百首の歌の中に杜若(かきつばた)を　修理大夫顕季

あづまぢのかほやが沼の杜若(かきつばた)はるをこめても咲きにけるかな

春の田をよめる　大納言經信

あら小田に細谷川をまかすればひくしめ繩にもりつゝぞゆく

苗代をよめる　津守國基

鴫のゐる野澤の小田をうちかへし種蒔きてけりしめはへて見ゆ

後冷泉院御時弘徽殿の女御の歌合に苗代をよめる　藤原隆資

山里のそともの小田の苗代にいはまのみづを堰かぬ日ぞなき

家の山吹を人々あまたまうで來てあそびける頃に折りけるを見てよめる　中納言雅定

わが宿にまた來む人もみるばかり折りなやつしそ山吹のはな

水邊款冬　攝政左大臣

限りありて散るだにをしき山吹をいたくな折りそ井手の川なみ

○散りはてぬ　一本「散り殘る」
○しらすれば　風がしらせるので
○奈良　大和國添上郡。

○あづまぢ　東路。東國地方。
○かほやが沼　上野國。萬葉集東歌に「可美都氣努、可保夜が沼。」と見える。

○まかすれば　水を引くこと。
○もりつゝぞゆく　萬葉集巻七に「石の上振のわさ田をひでずとも繩だに延べよ守りつゝ居らむ」
○しめはへて　注連を引張って。

○そとも　外面。

○折りなやつしそ　一本「折りな盡しそ」折り盡すなよ。
○散るだにをしき　散るのでさへ惜しい。
○いたくな折りそ　ひどく折るなよ。「な」は禁止、「そ」は强めの助詞。
○井手　山城國綴喜郡。

おなじ心を　太宰大貳長實

春ふかみかみなび河に影みえて移ろひにけりやまぶきの花

後冷泉院の御時歌合に山吹をよめる　前太宰大貳長房

山吹にふきくる風もこゝろあらば八重ながらをば散らさざらなむ

晩見躑躅といふ心をよめる　攝政左大臣家參河

いり日さすゆふくれなゐの色はえて山下てらす岩つゝじかな

院の北面にて橋上藤花といへる事をよめる　大夫典侍

色かへぬ松によそへてあづまぢのときはの橋にかゝる藤なみ

藤花をよめる　藤原顯輔朝臣

むらさきの色のゆかりに藤のはなかゝれる松もむつまじきかな

坊の藤の花さかりなりけるを見てよめる　律師增覺

くる人もなき我が宿の藤の花たれを待つとて咲きかゝるらむ

紫藤藏松といへる事をよめる　賴暹法師

まつかぜの音せざりせば藤波をなにゝかゝれる花としらまし

二條關白の家にて池邊藤花といへる事をよめる　大納言經信

いけにひづ松のはひ枝に紫の波おりかくるふぢ咲きにけり

○春ふかみ　春が深いので。この歌は萬葉集卷八の「蛙鳴く神なび川に影見えて今や咲くらむ山吹の花」を本歌にして詠んだのであらう。

○八重ながらをば散らさざらなむ　八重山吹を八重のまゝにそつくり散らさないでくれ。拾遺集卷一「我が宿の八重山吹は一重だに散り殘らなむ春のかたみに」

○院の北面　院御所の北面に伺候して御所を守る武士の詰所。

○よそへて　なぞらへて。

○ときはの橋　近江國と云ふ。

○坊　僧侶の寢泊りする家。

○音せざりせば　一本「音なかりせば」

○池にひづ松のはひ枝　池に浸し濡れる松の這ひ延びた枝。

百首の歌の中に藤花をよめる　修理大夫顯季

住よしの松にかゝれる藤の花かぜのたよりに波やおるらむ

雨中藤花といへる事をよめる　神祇伯顯仲

ぬるゝさへ嬉しかりけり春雨に色ます藤のしづくとおもへば

鄰家藤花といへる事をよめる　内大臣家越後

蘆垣のそととはみれど藤の花にほひは我をへだてざりけり

題しらず　盛經母

花のみや暮れぬる春のかたみとて青葉のしたに散りのこるらむ

三月盡の心をよめる　大僧都證觀

春のゆくみちに來むかへ郭公かたらふ聲に立ちやとまると

中納言雅定

残りなく暮れゆく春ををしむとて心をさへにつくしつるかな

三月盡戀といへる心をよめる　内大臣

春はをし人は今宵とたのむれば思ひわづらふ今日のくれかな

攝政左大臣家にて人々三月盡の心をよませ侍りけるに　源俊頼朝臣

かへる春卯月のいみにさしこめてしばしみあれの程までも見む

〇住よし　一本「住の江」攝津國東成郡。

〇かぜのたよりに　松を吹く風のたよりに。

〇おるらむ　一本「立つらむ」

〇ぬるゝさへ　濡れるのまでも。

〇そとは　一本「ほかとは」

〇花のみや　花ばかりがか。

〇心をさへに　心をまでも。「に」は感動の助詞。

〇つくしつるかな　使ひ盡したことだ。

〇春はをしの歌　今宵戀人の來る約束があるので早く暮れよとも思はれるが又春の今日限りで暮れるのも惜しまれて今日の夕暮を思ひ煩はされる意味。

〇かへる春　立ち返る春。

〇卯月のいみ　四月、賀茂神社の祭の前から忌竹を立てて忌に差籠ること。

〇みあれ　山城國賀茂神社の祭典每年四月二の酉の日に行はれた。

重服に侍りけるとし三月晦日の日人のもとより音づれて侍りければ遣はしける

藤原顯輔朝臣

思ひやれめぐり逢ふべき春だにもたち別るゝは悲しきものを

金葉和歌集　巻第二

夏歌

卯月のついたちの日ころもがへの心をよめる　　源師賢朝臣

我のみぞ急ぎたたれぬ夏ごろもひとへに春をゝしむ身なれば

二條關白家にて人々殘花の心をよませ侍りけるによめる　　藤原盛房

夏山の青葉まじりのおそざくらはつ花よりもめづらしきかな

應德元年四月三條内裏にて庭樹結葉といへる事をよませ給ひける　　院御製

おしなべてこずゑ青葉になりぬれば松の緑もわかれざりけり

　　大納言經信

たまがしは庭も葉廣になりにけりこやゆふしでて神祭るころ

鳥羽殿にて人々歌つかうまつりけるに卯のはなの心をよめる　　春宮大夫公實

雪の色をうばひて咲けるうの花に小野のさと人冬ごもりすな

卯花連垣といへる事をよめる　　大藏卿匡房

いづれをかわきて折らまし山里のかき根つゞきに咲ける卯の花

○たたれぬ　立たれぬに裁たれぬを云ひ懸く。
○ひとへに　「偏に」に夏衣の「一重」を云ひ懸く。
○春を　一本「一花を」
○應德　白河天皇の年號。
○青葉に　一本「緑に」
○緑も　一本「千年(ちとせ)も」
○葉廣に　かしはを葉廣柏とも云ふので、斯う用ゐた。
○こや　これがまあ。
○ゆふしでて　木綿を垂れかけて
○雪の色をうばひて　雪の白色を奪ひとつて卯の花が白色に。
○わきて　分けて。辨別して。

卯花をよめる　　江侍從

雪としもまがひもはてず卯の花は暮るれば月のかげかとも見ゆ

攝政左大臣

うの花のさかぬ垣根はなけれども名にながれたる玉川のさと

卯花たがかき根ぞといへる心をよめる　　中納言實行

神山の麓にさける卯のはなは誰がしめゆひし垣根なるらむ

卯花をよめる　　大納言經信

賤の女が蘆火たく屋もうの花の咲きしかゝれば宴れざりけり

源盛清

うのはなを音なし河の波かとてねたくも折らで過ぎにけるかな

大中臣定長

卯の花の青葉も見えず咲きぬれば雪と花のみかはるなりけり

鳥羽殿の歌合に郭公をよめる　　修理大夫顯季

み山いでてまだ里なれぬ郭公うはのそらなる音をやなくらむ

尋郭公といへる事をよめる　　藤原節信

今日もまた尋ねくらしつ郭公いかできくべき初音なるらむ

○雪としも　雪とも。「し」は助詞。

○名にながれたる　名の高く流傳した。

○玉川の里　攝津國三島郡。後拾遺集にも「見渡せば浪の柵かけてけり卯の花吹ける玉川の里」

○たがかき根ぞ　誰が垣根ぞ。

○心を　一本「事を」

○神山　賀茂のこと。

○しめゆひし　誰が標(しめゆ)を結うた。標とは人に手をつけさせないために結ふ標識。

○蘆火たく屋　蘆火を焚く煤け黒んだ屋。

○音なし河　紀伊國。卯の花は河波の白いのに似てゐるが音が無い河波だと見紛うた心持。

○ねたくも折らで　殘念にも折らずして。

○うはのそらなる　一本「旅の空なる」

○いかで　何として。

郭公の歌十首人々によませ侍りける頃に

郭公すがたは水にやどれども聲はうつらぬものにぞありける　攝政左大臣

郭公なきつと語る人づてのことの葉さへぞうれしかりける　源　雅　光

郭公尋ねける日は聞かで二日ばかりありて鳴きけるを聞きてよめる

ほとゝぎすおとはの山のふもとまでたづねしこゑをこよひ聞くかな　橘　成　元

長實卿の家の歌合に郭公の心をよめる　左京大夫經忠

年ごとに聞くとはすれど郭公聲はふりせぬものにぞありける

郭公をまつ心を　内　大　臣

戀すてふなき名やたたむ郭公まつにねぬ夜の數しつもれば

郭公をよめる　藤原顯輔朝臣

郭公あかで過ぎぬるこゑによりあとなき空にながめつるかな

承暦二年内裏歌合に郭公を人にかはりてよめる　藤　原　孝　善

ほとゝぎす心もそらにあくがれてよがれがちなるみ山邊の里

郭公をよめる　權僧正永縁

○おとはの山　山城國宇治郡。

○ふりせぬ　古りせぬ。古めかしくならぬ。つまり「珍らしい」

○戀すてふ　戀すといふ。
○なき名　無實の浮名。
○ねぬ夜の數しつもれば　ほとゝぎすの鳴くのを待つて寢ない夜の數が積るので。「し」は助詞。
○あとなき空に　「に」は一本「を」

○承暦　白河天皇の年號。

○あくがれて　さまよひ出て。
○よがれ　夜離れ。夜出。

聞くたびにめづらしければ郭公いつも初音のこゝちこそすれ　源俊頼朝臣

人々十首歌よみけるに郭公を

待ちかねてたづねざりせば郭公たれとか山のかひになかまし　中納言實行

いなり山たづねやみまし郭公まつにしるしのなきと思へば　中納言公成

郭公驚夢といへる事をよめる

おどろかすこゝろなかりせば郭公まだ現にはきかずやあらまし　院御製

待郭公といへる事をよませ給へる

郭公まつにかゝりてあかすかな藤のはなとや人は見るらむ　後二條關白家筑前

俊忠卿の家の歌合に郭公をよめる

まつ人のやどをばしらで郭公をちのやまべを鳴きてすぐらむ　中納言女王母

郭公ほのめくこゑをいづかたと聞きまどはしつあけぼののそら　前齋院六條

郭公をよめる

宿ちかくしばしかたらへ郭公まつ夜のかずのつもるしるしに　中納言雅定

○聞くたびの歌　平家物語卷六によると、この歌を詠んだので永緣(永縁)は初音の僧正と云はれたと云ふ。
○かひ　峽に效を云ひ懸く。
○いなり山　山城國紀伊郡。
○みまし　一本「せまし」
○おどろかす　夢を覺す。
○現には　現實には。
○あかす　夜を明す。
○をち　彼方。
○鳴きてすぐらむ　一本「鳴きわたるらむ」
○ほのめくこゑ　ほのかに鳴く聲
○あけぼの　夜明け方。

郭公まれになく夜はやまびこの答ふるさへぞうれしかりける

宇治太政大臣の歌合に郭公をよめる　康資王母

山ちかくうらこぐふねは郭公なくわたりこそとまりなりなれ

匡房卿美作守にて下りける道にて郭公なきけるを聞きてよめる　中原高眞

聞きもあへずこぎぞわかるゝ郭公わが心なるふなでならねば

郭公をよめる　藤原成通朝臣

郭公一こゑなきて明けぬればあやなくよるのうらめしきかな

月前郭公といへる事をよめる　皇后宮式部

ほとゝぎす雲のたえまにいる月のかげほのかにも鳴きわたるかな

曉聞郭公といへる事をよめる　源定信

わぎもこにあふさか山の郭公あくれば歸るそらになくなり

尋郭公といふことをよめる　讀人しらず

郭公たづぬるだにもあるものを待つ人いかでこゑを聞くらむ

雨中郭公といへる事をよめる　大納言經信

郭公くもぢにまどふ聲すなりをやみだにせよさみだれの空

五月五日實能卿のもとに藥玉つかはすとて　内大臣

○やまびこ　こだま。
○なくわたり　鳴く邊。
○とまり　舟の泊る所。つまり郭公の鳴くのを聞いて舟を停めるから。
○高眞　一本「高貞」
○聞きもあへず　聞かうとして聞かずに。
○わが心なる　自分の心にまかせる。自分の自由な。
○あやなく　無益に。つまらなく
○よる　一本「よは」
○いる月　一本「もる月」
○わぎもこに　我妹子。愛人。
○あふさか山　近江國滋賀郡。我妹子に逢ふと云ひ懸けてゐる。
○たづぬるだにもあるものを　尋ね歩いてさへ聞き難くあるものを
○まどふ　一本「まよふ」
○をやみだにせよ　小止みでもせよ。

永承六年殿上にて根合にあやめをよめる　大納言經信

あやめ草ねたくも君がとはぬかな今日は心にかゝれと思ふに

郁芳門院の根合にあやめをよめる　藤原孝善

よろづ代にかはらぬものはさみだれの雫にかをる菖蒲なりけり

承暦二年内裏の歌合にあやめを　春宮大夫公實

菖蒲(あやめ)草ひく手もたゆく長きねのいかであさかの沼に生ひけむ

宮づかへしける娘のもとに五月五日くすだま遣はすとて　權僧正永縁母

玉江にや今日の菖蒲を引きつらむ磨ける宿のつまと見ゆるは

百首の中にあやめをよめる　春宮大夫公實

菖蒲草我が身のうきを引きかへてなべてならぬに生ひも出でなむ

五月五日家にあやめふくを見てよめる　左近府生秦兼久

菖蒲草よどのに生ふるものなればねながら人は引くにやあるらむ

むかし中の院にすませ給ひける頃はみえざりけるあやめを人の中の院のと申しけるを見てよませ給ひける　第三宮

同じくばとゝのへてふけ菖蒲草さみだれたらばもりもこそすれ

淺ましや見しふる里の菖蒲草わがしらぬまに生ひにけるかな

○ねたくも　恨めしくも。「ね」に菖蒲草の根と云ひ懸けてゐる。
○心にかゝれ　心に懸れ。菖蒲草をかけることからの縁語。
○永承　後冷泉天皇の年號。
○あさかの沼　淺香沼は陸奥國にあつた。長き根に對して淺いといふ事を云ひ含めてゐる。古今集巻十四に「陸奥の淺香の沼」と見える。
○玉江　越前國と云ふ。
○磨ける　玉を磨ける宮殿といふ心持で玉の縁語に用ゐた。
○宮づかへ　宮中に仕へること。
○くすだま　藥草を玉にして絲で飾りお呪ひに簾や柱に掛けた物。
○うきを　一本「うきに」。憂きに浮沼を云ひ懸く。
○よどの　淀野―夜殿。
○ねながら　根ながら―寝ながら
○五月五日　端午の節句。
○とゝのへて　調へて。五月雨(さ亂れ)に對して云ふ。
○もりもこそすれ　雨が洩りもするから。
○中の院のと　一本「中の院のなどと」
○淺ましや　荒れ果てたから。

百首歌の中にさみだれをよめる　　参議師頼

さみだれは沼のいはがき水こえて眞菰かるべきかたも知られず

五月雨の心をよめる　　藤原定通

五月雨は日かずへにけりあづまやの萱が軒端の下くつるまで

承暦二年内裏の歌合に五月雨の心をよめる　　源通時朝臣

五月雨に玉江の水やまさるらむ蘆の下葉のかくれゆくかな

權中納言俊忠卿の家の歌合にさみだれの心をよめる　　藤原顯仲朝臣

さみだれに水まさるらしさはだ川まきのつぎ橋浮きぬばかりに

五月雨の心をよめる　　左兵衛督實能

さみだれは小田の水口手もかけでみづの心にまかせてぞみる

三宮

五月雨に入江の橋の浮きぬればおろす筏のこゝちこそすれ

攝政左大臣の家にて夏月の心をよめる　　神祇伯顯仲

夏の夜の庭にふりしくしら雪は月のいるこそ消ゆるなりけれ

權中納言俊忠卿の家の歌合に水鷄の心をよめる　　藤原顯綱朝臣

里ごとにたゝく水鷄の音すなりこゝろのとまる宿やなからむ

○さみだれは　一本「さみだれに」
○あづまや　四阿。四方に壁のない作りの家屋。
○くつる　朽ちる。
○さはだ川　山城國相樂郡か。
○まきのつぎ橋　槇の繼ぎ橋。
○こゝちこそすれ　心地がする。
○庭にふりしくしら雪　月光を白雪に見なした。
○月のいる　「月の入る」の入るに「煎る」を云ひかけてゐる。
○たゝく　水鷄の鳴き聲が門を叩くやうに聞えるので斯う云ふ。
○音すなり　音がすることだ。

攝政左大臣の家にて水鷄の心をよめる　　源　雅光

夜もすがらはかなく叩く水鷄かなさせる戸もなき柴の假屋(かりや)を

實行卿の家の歌合に夏風の心をよめる　　修理大夫顯季

なつごろも裾野の草をふく風に思ひもあへず鹿やなくらむ

水風暮涼といへる事をよめる　　源俊朝朝臣

風吹けばはすのうき葉に玉こえて涼しくなりぬひぐらしのこゑ

照射(ともし)の心をよめる　　源　仲正

澤水にほぐしの影のうつれるをふたともしとや鹿はみるらむ

神祇伯顯仲

鹿たたぬ端山(はやま)のすその照射していく夜かひなき夜をあかすらむ

家の歌合に盧橘をよめる　　中納言俊忠

五月闇(さつきやみ)花たちばなのありかをば風のつてにぞそらに知りける

百首歌の中に盧橘をよめる　　春宮大夫公實

宿ごとにはな橘ぞにほひけるひと木がすゑをかぜは吹けども

二條關白家にて雨後野草といへる事をよめる　　源俊頼朝臣

このさとも夕立しけりあさぢふに露のすがらぬくさの葉もなし

○させる戸　「さしたる戸」に「鎖したる戸」を云ひ懸く。

○なつごろも　裾を云ひ起す序。○思ひもあへず　夏の風だと思ひ得ずに。秋だと思つて。

○照射　鹿を寄せて射るために火串(ほぐし)といふものに火をともしたもの。○ふたともし　二照射。一つは水に映るので。

○鹿たたぬ　鹿も立たない。

○花たちばな　橘の花。○そらに　それとなく。

○にほひける　一本「にほふなる」

○あさぢふに　淺茅生に。

實行卿の家の歌合に鵜川の心をよめる　　中納言雅定

大井河いくせ鵜舟のすぎぬらむほのかになりぬかゞり火のかげ

夏月をよめる　　源親房

玉くしげふたがみ山の木の間よりいづれば明くる夏の夜の月

六月二十日ごろに秋の節になる日人のもとに遣はしける　　攝政左大臣

みな月のてる日のかげはさしながら風のみ秋のけしきなるかな

公實卿の家にて對水待月といへる事をよめる　　藤原基俊

夏の夜の月まつほどのてすさびに岩もる淸水いくむすびしつ

秋隔一夜といへる事をよめる　　中納言顯隆

みそぎするみぎはに風の涼しきは一夜をこめて秋やきぬらむ

○鵜舟　鵜を使つて鮎をとる所謂鵜飼する舟。

○玉くしげ　玉櫛笥。櫛笥から蓋(ふた)を云ひ起し、詞になつた。

○ふたがみ山　二上山。大和國北葛城郡。

○みな月　六月の異稱。昔は陰曆たつたから四、五、六の三箇月は夏であつた。

○事を　一本「心を」

○てすさび　手慰み。

○いくむすびしつ　幾結びしたことか。

○みそぎ　六月の末(夏の終り)に行はれた禊祓の行事。

金葉和歌集　巻第三

秋歌

百首歌の中に秋立心をよめる　　春宮大夫公實

とことはに吹く夕暮のかぜなれど秋たつ日こそ涼しかりけれ

野草帶露といへる事をよめる　　太宰大貳長實

まくずはふあだの大野のしら露を吹きなみだりそ秋のはつかぜ

待草花といへることをよめる　　皇后宮美濃

藤袴はやほころびてにほはなむ秋のはつかぜ吹きたたずとも

後冷泉院御時皇后宮の春秋の歌合に七夕の心をよめる　　土佐内侍

よろづ代に君ぞ見るべきたなばたのゆきあひの空を雲のうへにて

七夕の心をよめる　　能因法師

たなばたの苔の衣をいとはずば人なみ〳〵に貸しもしてまし

七月七日父のぶくにて侍りける年よめる　　橘元任

藤衣いみもやするとたなばたに貸さぬにつけて濡るゝ袖かな

○とことはに　不斷に。

○まくずはふ　眞葛（まくず）延ふ。

○あだの大野　大和國宇智郡。

○吹きなみだりそ　吹き亂すなよ一本「吹きな拂ひそ」

○にほはなむ　匂へよ。

○七夕　織女星（たなばたつ女）に牽牛星（彥星）が一年に一度、天の川を渡つて行き合ふといふ信仰から。

○苔の衣　僧侶の衣。

○父のぶく　亡父の服喪。

○藤衣　喪服。

○いみもやする　忌みもするか。

七夕の心をよめる　　前齋宮河内

戀ひこひて今宵ばかりやたなばたの枕にちりの積らざるらむ

　　三宮

天の川別れに胸のこがるればかへさの船はかぢも取られず

　　中納言國信

たなばたにかせる衣の露けさにあかぬけしきを空にしるかな

七夕後朝の心をよめる　　內大臣

かぎりありてわかるゝ時もたなばたの涙の色はかはらざりけり

　　皇后宮權大夫師時

たなばたのあかぬわかれの涙にや花のかつらも露けかるらむ

　　內大臣家越後

天の川かへさの船に波かけよ乘りわづらはばほども經(ふ)ばかり

　　源俊頼朝臣

かへるさはあさ瀬もしらじ天の川あかぬなみだに水しまさらば

草花告秋といふ事をよめる　　源雅兼朝臣

咲きそむる朝(あした)の原の女郎花あきをしらするつまにぞ有りける

○枕にちりの積らざるらむ　逢ふ夜は枕の塵を拂ふだらうから。
○こがるれば　焦るに漕がるを云ひ懸く。
○かへさ　歸る場合。
○あかぬけしき　飽かぬ樣子。
○後朝　男女の逢つた翌朝。
○涙の色はかはらざりけり　仲らひが變らないので。
○かつら　髮飾り。
○かへさの船　たなばたの歸る時の舟。
○しらじ　知るまい。
○朝の原　大和國北葛城郡。
○つま　端緒。

おなじ心をよめる　源縁法師

咲きにけりくちなし色の女郎花いはねどしるし秋のけしきは

秋のはじめの心をよめる　大納言經信

おのづから秋はきにけり山ざとのくず這ひかゝる槇のふせやに

田家早秋といへる事をよめる　右兵衞督伊通

稲葉ふく風のおとせぬ宿ならば何につけてか秋を知らまし

山家秋といへる事をよめる　藤原行盛

山ふかみとふ人もなきやどなれどそとものの小田に秋はきにけり

師賢朝臣の梅津の山里に人々まかりて田家秋風といへる事をよめる　大納言經信

夕されば門田のいなばおとづれて蘆のまろやにあき風ぞふく

三日月の心をよめる　大江公資朝臣

山の端にあかでいりぬる夕月夜いつありあけにならむとすらむ

攝政左大臣の家にて夕月夜の心をよませ侍りけるによめる　藤原忠隆

風ふけば枝やすからぬ木の間よりほのめく秋の夕づくよかな

後冷泉院御時殿上の歌合に月の心をよめる　大納言經信

○くちなし色　花の梔子色に口無しをいひかけて、次のいはねどを引出したもの。
○いはねどしるし　言はなくてもいちじるしい。
○くず　葛。蔓草の名。
○山ふかみ　山が深いので。
○そとも　外方。
○夕されば　夕が來ると。
○おとづれて　音なうて。
○蘆のまろや　蘆葺の假屋。
○あかで　飽きずして。
○夕月夜　夕方の月。
○ありあけ　月の空にあるまゝに夜の明けること。

月かげのすみわたるかな天のはら雲ふきはらふ夜半のあらしに

月はたびの友といへる事をよめる　　法橋忠命

草枕このたびねにぞおもひしる月よりほかのともなかりけり

閑(しづかに)見月といへる事をよめる　　顯仲卿女

もろともに草葉の露のおきゐずばひとりや見まし秋の夜の月

翫明月といへる事をよめる　　前中納言伊房

いつはりになりぞしぬべき月かげをこの見るばかり人に語らば

鳥羽殿にて旅宿月といへる事をよめる　　春宮大夫公實

我こそはあかしのせとに旅寢せめおなじ水にもやどる月かな

寛治八年八月十五日夜鳥羽殿にて池上翫月といへる事をよませ給ひける　　院御製

池水にこよひの月をうつしもて心のまゝに我がものと見る

大納言經信

てる月の岩間の水にやどらずば玉ゐるかずをいかで知らまし

明月をよめる　　民部卿忠教

いづくにもこよひの月を見る人の心や同じそらにすむらむ

○このたびねにぞおもひしる　此の旅寢で思ひ知つた。

○おきゐずば　置き居ずばに起き居ずばを云ひ懸く。

○いつはりになりぞしぬべき　今見る月の面白さを見る通りに人に語つたならば僞りだとなつてしまふだらう。人は本當にすまい。

○あかしのせと　明石の狹門(せと)。播磨國明石郡。

○旅寢せめ　旅寢せむ。

○寛治　堀河天皇の年號。

○池水にの歌　袋草紙によると、女房堀川の歌だつたのを、汝の歌に似つかはしからずとて院の御製にせられたのだといふ。

○いかで知らまし　何として知らう。

後冷泉院の御時皇后宮の歌合に駒迎(こまむかへ)のこゝろをよめる　藤原隆經

ひく駒のかずより外にみえつるは關の清水の影にぞありける

駒迎の心をよめる　源仲正

あづま路をはるかに出づるもち月のこまに今宵やあふさかのせき

八月十五夜の心をよめる　源親房

さやけさは思ひなしかと月影を今宵としらぬ人にとはばや

閏九月のある年八月十五夜によめる　春宮大夫公實

秋はなほのこりおほかる年なれどこよひの月の名こそをしけれ

水上月といへる心をよめる　前齋院六條

雲のなみかゝらぬさよの月影をきよたき川にうつしてぞ見る

九月十三夜閑(しづかに)見月といへる事をよめる　源俊賴朝臣

すみのぼるこゝろや空をはらふらむ雲のちりゐぬ秋の夜の月

月をよめる　皇后宮肥後

月をみて思ふこゝろのまゝならばゆくへも知らずあくがれなまし

人のもとにまかりて物申しけるほどに月の入りにければよめる　源師俊朝臣

如何にしてしがらみかけむ天の川流るゝ月やしばしよどむと

○駒迎　毎年八月、諸國の牧場から貢進させた馬を天皇の御覽になる儀を駒索(こまびき)と云ひ、その馬を宮人が逢坂の關まで出迎へるのを駒迎と云ふ。
○關の清水　逢坂の關近邊にあつた清水。
○もち月のこま　信濃國の望月の牧から出る馬。それに滿月の望月を云ひ懸く。
○あふさか　逢ふを云ひ懸く。
○さやけさは思ひなしかと　この月のさやけさは、私が十五夜だと知つてゐるための思ひなしであらうかと。
○今宵としらぬ人にとはばや　今宵は十五夜だと知らない人に問ひたいものだ。
○閏九月　一本「閏八月」
○こよひの月の名こそをしけれ　今宵ばかりの名月の名は惜しい。
○さよ　さ夜。「さ」は接頭語。
○きよたき川　山城國葛野郡。
○ちりゐぬ　散り居ぬ。
○あくがれなまし　心がさまよひ出でるだらう。
○しがらみ　流水を堰くために竹や木を杙にからみつけた物。
○よどむ　水の停滞すること。

経長卿の桂の山莊にて閑かに月を見るといへる事をよめる　大納言經信

今宵わがかつらの里の月を見ておもひ殘せることのなきかな

承暦二年内裏歌合に月をよめる　春宮大夫公實

くもりなき影をとゞめば山のはに入るとも月を惜しまざらまし

宇治前太政大臣家の歌合に月をよめる　皇后宮攝津

てる月のひかりさえゆく宿なれば秋の水にもこほりゐにけり

源俊頼朝臣

やまのはに雲のころもをぬぎ捨ててひとりも月のたちのぼるかな

水上月　攝政左大臣

薦根はひかつみもしげき沼水にわりなくやどる夜半の月かな

宇治前太政大臣家の歌合に月をよめる　一宮紀伊

かゞみ山みねより出づる月なれば曇る夜もなき影をこそみれ

秋なにはの方にまかりて月のあかかりければよめる　參議師頼

いにしへのなにはの事をおもひ出でて高津の宮に月のすむらむ

秋月如晝といへることをよめる　藤原隆經

草の上の露なかりせば如何にして今宵の月をよると知らまし

○かつらの里　月の中に桂の木があるといふ信仰から。桂の里は山城國葛野郡。
○おもひ殘せることのなきかな　滿足したことだ。
○影　光。

○こほり　一本「つらゝ」

○かつみ　眞菰。
○わりなく　愛想もなく。

○かゞみ山　近江國蒲生郡の鏡山

○なには　難波。今の大阪邊。
○高津の宮　仁德天皇の皇居を難波の高津の宮と申した。

○草の上の　一本「菊の上に」

翫明月といふ事をよめる　源行宗朝臣

なごりなく夜半の嵐に雲はれてこゝろのまゝにすめる月かな

八月十五夜に人々歌よみけるによめる　平師季

みかさ山ひかりをさして出でしより曇らであけぬ秋の夜のつき

宇治入道前太政大臣の三十講の歌合に月の心をよめる　讀人しらず

宿からぞつきの光もまさりけるよの曇りなくすめばなりけり

月をよめる　藤原忠隆

ながむればふけゆくまゝに雲晴れて空ものどかにすめる月かな

奈良の花林院の歌合に月をよめる　權僧正永縁

いかなれば秋はひかりのまさるらむおなじ三笠のやまの端の月

月の歌とてよめる　藤原顯輔

三笠山もりくる月のきよければ神のこゝろもすみやしぬらむ

太皇太后宮の扇合に月の心をよめる　大納言經信

三笠山みねよりいづる月かげはさほの河瀨のこほりなりけり

顯季卿の家にて九月十三夜人々月の歌よみけるに　太宰大貳長實

くまもなくかゞみと見ゆる月かげに心うつらぬ人はあらじな

○みかさ山　大和國添上郡。

○三十講　法華經二十八品、無量義經一卷、觀普賢經一卷を講ずること。その講が果てて後に歌合が行はれたのである。

○三笠山もりくる月　笠を洩り來るを云ひ懸く。

○神のこゝろ　春日明神もこの月の清いのには心が澄むであらう。

○くまもなく　一本「隈もなき」

○あらじな　あるまいな。

源俊頼朝臣

むら雲や月の隈(くま)をばのごふらむ晴れゆくたびに照りさまるかな

月の心をよめる　藤原家經朝臣

いまよりは心ゆるさじ月かげのゆくへも知らず人さそひけり

月照古橋といへる心をよませ給へる　三宮

とだえして人もかよはぬたな橋は月ばかりこそ澄みわたりけれ

水上月をよめる　藤原實光朝臣

月影のさすにまかせて行く舟はあかしの浦やとまりなるらむ

題しらず　太宰大貳長實

さらぬだに玉にまがひておく露をいとゞみがける秋の夜の月

永承四年殿上歌合に月の心をよめる　藤原家經朝臣

よとともに曇らぬくものうへなれば思ふことなく月をみるかな

月前旅宿といへる事をよめる　修理大夫顯季

松が根に衣かたしきよもすがら眺むる月をいもや見るらむ

ひとり月をながめてよめる　藤原有教母

ながむればおぼえぬ事もなかりけり月や昔のかたみなるらむ

○むら雲　羣る雲。

○心ゆるさじ　月影に誘はれて行方も知らず遠くさまようたが今後は心を許すまい。

○たな橋　棚のやうに架けた假橋

○あかしの浦やとまりなるらむ　月の美しさに明石の浦で舟を止められて、そこが停泊地となるであらう。

○さらぬだに　さうでなくてさへ

○玉にまがひて　玉と見紛うて。

○いとゞみがける　露の玉をいよいよ月の光が磨くやうに光を添へることを云ふ。

○よとともに　「夜に共に」に「世と共に（常にの意味）」を云ひ懸く

○衣かたしき　衣を片方だけ敷いて獨寢して。

○いも　妹。愛人。

○いもや見るらむ　一本「いも見るらむか」

○おぼえぬ事　思ひ出されない事

行路曉月といへる事をよめる　權僧正永緣

もろともにいつとはなしに有明の月のみおくる山路をぞ行く

山にむかひて月を待つといへる事をよめる　土御門左大臣

有明の月まつほどのうたゝねは山のはのみぞ夢に見えける

山家曉月といへる事をよめる　中納言顯隆

山里の門田のいねのほの〴〵と明くるもしらず月をみるかな

月のあかかりけるころ明石にまかりて月を見てのぼりたりけるに都の人

人月はいかにと尋ねければよめる　平忠盛朝臣

有明の月もあかしの浦風になみばかりこそよると見えしか

月前落葉といへる事をよめる　源俊頼朝臣

あらしをや葉守の神もたゝるらむ月に紅葉のたむけしてけり

蛬をよめる　前齋院六條

つゆしげき野邊にならひてきり〴〵すわが手枕の下になくなり

はたおりといへる蟲をよめる　顯仲卿女

さゝがにのいと引きかくるくさむらにはたおる蟲のこゑぞ聞ゆる

鴈をよめる　讀人しらず

○有明の月のみおくる　有明の月ばかりが山路を送る。

○有明の月　空にあるまゝで夜の明ける頃の月。

○うたゝね　現寢(うつゝね)。ぐつすり眠らないで寢ること。

○ほの〴〵と　稻の「穗の」を云ひ懸く。

○のぼりたりけるに　都へ上つた時に。

○あかし　明石に、月の明しを云ひ懸く。この歌物語は平家物語にも見える。

○よるとも見えしか　涙の寄るに夜を云ひ懸く。上に「こそ」の係りがあるので「き」が「しか」で結ばれた

○葉守の神　葉を守る神。

○たゝるらむ　嵐に對して葉守の神が祟るのだらう。

○月に紅葉のたむけしてけり　嵐が月に紅葉の手向けをしなかつたので。「してけり」一本「しつれば」

○ならひて　倣つて。我が手枕の下は我が涙で濡れてゐるので、これをきり〴〵すが露の繁い野邊に倣つての意味。

○さゝがに　蜘蛛。

○はたおる蟲　はたおり蟲。上に絲と緣語を用ゐた。

玉章(たまづき)はかけてきつれどかりがねのうはの空にも聞ゆなるかな

歌合に鴈を　　春宮大夫公實

いもせやま峯のあらしや寒からむ衣かりがね空になくなり

鹿をよめる　　三宮大進

妻こふる鹿ぞ鳴くなるひとりねのとこの山かぜ身にやしむらむ

曉聞鹿といへる事をよめる　　皇后宮右衛門佐

思ふこと有明がたの月かげにあはれを添ふるさをしかのこゑ

夜聞鹿聲といふ事をよめる　　内大臣家越後

夜はになく聲にこゝろぞあくがるゝ我が身は鹿のつまならねども

攝政左大臣家にて旅宿鹿といへる事をよめる　　源　雅　光

さもこそはみやこ戀しきたびならめ鹿の音にさへぬるゝ袖かな

鹿の歌とてよめる　　藤原顯仲朝臣

世の中をあきはてぬとやさを鹿の今はあらしの山の鳴くらむ

　　藤　原　行　家

秋ならで妻よぶ鹿を聞きしがなをりから聲の身にはしむかと

野花帶露といへる事をよめる　　皇后宮肥後

○いもせ山　紀伊國伊都郡。
○衣かりがね　鴈に「衣を借り」を云ひ懸けてゐる。

○とこの山　近江國犬上郡。

○さをしか　さ牡鹿。「さ」は接頭語。

○さもこそは云々　さぞ都戀しい旅であらう。

○あきはてぬ　「秋果てぬ」に「倦き果てぬ」を云ひ懸く。
○あらしの山　嵐山に「今は憂世に有らじ」を云ひ懸く。
○秋ならで　秋にあらずして。
○聞きしがな　聞きたいな。
○をりから　時節によつて。

白露とひとはいへども野邊みればおく花ごとに色ぞかはれる

太皇太后宮扇合に人にかはりて萩の心をよめる　僧正行尊

小萩原にほふさかりはしら露もいろ／＼にこそ見えわたりけれ

萩をよめる　太宰大貳長實

しらすげの眞野の萩原つゆながら折りつる袖ぞ人なとがめそ

女郎花をよめる　隆源法師

女郎花さける野邊にぞ宿りぬる花の名立てになりやしぬらむ

顯隆卿家に歌合し侍りける時女郎花をよめる　中納言俊忠

ゆふつゆの玉かづらして女郎花のはらの風にをれやふすらむ

女郎花をよめる　藤原顯輔朝臣

しら露や心おくらむをみなへしいろめく野邊にひとかよふとて

攝政左大臣

をみなへし夜のまのかぜに折れふしてけさ白露にこゝろおかるな

攝政左大臣家にて歌合し侍りけるに蘭をよめる　源忠季

佐保川のみぎはに咲ける藤袴なみのよりてや掛けむとすらむ

藤袴をよめる　右兵衞督伊通

○見えわたり　一本「見え増り」

○しらすげの眞野　大和國添上郡
○つゆながら　露の置いたまゝに
○人なとがめそ　人よ咎めるな。

○花の名立てになりやしぬらむ　花の不名譽になりはしないだらうか。

○玉かづら　玉の髮飾り。
○をれやふすらむ　折れ伏すだらうか。

○佐保川　大和國添上郡。

かりにくる人もきよとやふぢばかま秋の野ごとに鹿のたつらむ

神祇伯顯仲

さゝがにの絲のとぢめやあだならむ綻びわたる藤ばかまかな

鳥羽殿の前栽合（せんざいあはせ）に女郎花のこゝろをよめる　春宮大夫公實

あだし野のつゆ吹きみだる秋風になびきもあへぬ女郎花かな

思野花といへる事をよめる　藤原伊家

今はしも穗に出でぬらむあづま路の岩田の小野のしののをすゝき

野花留人といへる事をよめる　平忠盛朝臣

行く人をまねくか野邊の花すゝき今宵もこゝに旅寢せよとや

堀河院御時御前にておの〳〵題をさぐりて歌つかうまつりけるに薄をとりてつかうまつれる　源俊頼朝臣

うづらなく眞野のいりえの濱風に尾花なみよる秋のゆふぐれ

河霧をよめる　藤原基光

宇治川のかはせも見えぬゆふ霧にまきのしま人ふねよばふなり

藤原行家

河霧のたちこめつればつ高瀨舟わけゆくさをのおとのみぞする

○かりにくる　狩りに借りを云ひ懸く。
○きよとや　著よとてか。
○綻び　花の開き綻びることを云ふ。
○あだし野　山城國葛野郡の墓地のあつた野。
○吹きみだる　吹き亂す。
○なびきもあへぬ　敢て靡かぬ。
○岩田の小野　山城國宇治郡。
○眞野のいりえ　近江國滋賀郡か
○なみよる　波寄る。
○まきのしま　山城國久世郡の槇島。
○よばふ　呼ばふ。

郁芳門院の歌合に菊をよめる　中納言通俊

さかりなるまがきの菊を今朝みればまだ空さえぬ雪ぞつもれる

鳥羽殿の前栽合に菊をよめる　修理大夫顯季

千年まで君がつむべき菊なれば露もあだには置かじとぞ思ふ

攝政左大臣家にて鄰家紅葉といへる事をよめる　藤原仲實朝臣

もずのゐる櫨（はじ）のたちえの薄紅葉たれわがやどの物とみるらむ

承暦二年內裏歌合にもみぢをよめる　源師賢朝臣

はゝき木のこずゑやいづこおほつかな皆その原はもみぢしにけり

宇治前太政大臣大井河にまかりたりけるともにまかりて水邊紅葉といへる事をよめる　大納言經信

大井河いはなみ高しいかだ士よきしの紅葉にあからめなせそ

太皇太后宮の扇合に人にかはりてもみぢの心をよめる　源俊頼朝臣

音羽山もみぢ散るらしあふさかの關の小川ににしきおりかく

落葉をよめる　藤原伊家

谷川にしがらみかけよ龍田姫みねのもみぢにあらし吹くなり

大井河の行幸につかうまつれる　修理大夫顯季

○雪　白菊を雪と見なしてゐる。

○つむ　摘む。

○あだには　徒らには。無駄には

○はゝき木　遠くから見ると帚の形に見えて近づくとさう見えない木で信濃國の薗原にあつたといふ源氏物語帚木にも「帚木の心を知らで薗原の道にあやなく惑ひぬるかな」と見える。

○その原　信濃國伊那郡の薗原。

○大井河　山城國葛野郡。

○あからめなせそ　よそ見をするな。

○音羽山　山城郡宇治郡。

○龍田姫　大和國の龍田山の女神秋の女神で紅葉を司ると信ぜられた。

大井河ゐぜきの音のなかりせば紅葉を敷けるわたりとやみむ

深山紅葉といへる事をよめる　　大納言經信

山守よ斧の音たかくひゞくなり峯のもみぢはよきてきらせよ

紅葉をよめる　　神祇伯顯仲

よそにみる峯のもみぢや散りくるとふもとの里はあらしをぞ待つ

大井河の逍遙に水上落葉といへる事をよめる　　藤原伊家

はゝそちる岩間をくゞる鴨とりはおのが青葉ももみぢしにけり

落葉埋橋といへる事をよめる　　修理大夫顯季

小倉山みねのあらしの吹くからに谷のかけはし紅葉しにけり

落葉藏水といへる心をよめる　　大中臣公長朝臣

大井河ちるもみぢ葉にうづもれてとなせの瀧は音のみぞする

落葉隨風といへる事をよめる　　太宰大貳長實母

色ふかきみやまがくれのもみぢ葉をあらしの風のたよりにぞみる

九月盡の心をよめる　　中原經則

あすよりはよもの山邊の秋ぎりの面影にのみ立たむとすらむ

源俊頼朝臣

○ゐぜき　井堰。水を堰き止め居る所。
○わたり　渡し。
○ひゞく　一本「きこゆ」
○よきて　よけて。避けて。
○はゝそ　柞。
○くゞる　一本「かづく」かづくは水を潜ること。
○鴨とり　鴨の鳥。
○青葉　青羽に云ひ懸く。
○小倉山　山城國葛野郡。
○吹くからに　吹くゆゑに。
○紅葉しにけり　紅葉が散つたので
○となせの瀧　山城國葛野郡の戸無瀬。
○あすよりは　明日から冬になるので。秋霧を懐かしんで。

草の葉にはかなく消ゆる露をしも形見におきて秋の行くらむ

九月盡の日大井にまかりてよめる　春宮大夫公實

惜しめどもよもの紅葉は散り果ててとなせぞ秋のとまりなりける

○秋のとまり　秋の停泊所。紅葉が大井河の戸難瀬に流れ集まつたので云ふ。

金葉和歌集　卷第四

冬　歌

承暦二年御前にて殿上のをのこども題を探りて歌つかうまつりけるに時雨をとりて　　源師賢朝臣

神無月しぐるゝまゝにくらぶ山したてるばかり紅葉しにけり

從二位藤原親子家の草子合(さうしあはせ)にしぐれをよめる　　修理大夫顯季

しぐれつゝ且ちる山のもみぢ葉をいかに吹く夜のあらしなるらむ

ならにて人々の百首歌よみけるに時雨をよめる　　權僧正永緣

山川の水はまさらでしぐれには紅葉の色ぞふかくなりける

源　定　信

音にだに袂をぬらす時雨かなまきの板屋のよるの寐ざめに

時雨をよめる　　攝政家三河

神無月しぐれの雨のふるまゝにいろ〳〵になるすゞか山かな

後朱雀院御時御前にて霧藏紅葉といへる事をよめる　　前中納言資仲

○神無月　十月の異稱。
○くらぶ山　山城國愛宕郡暗部山
○したてる　下照る。
○まさらで　増らずして。紅葉の葉が時雨となつて降るので。
○ふるまゝに　一本「ふるたびに」
○すゞか山　伊勢國鈴鹿郡。

大井河にまかりて紅葉の心をよめる　源致親

紅葉ちるやまは秋ぎりはれせねば龍田の川のながれをぞ見る

落葉をよめる　大納言經信

大井河もみぢをわくる筏士はさをにしきをかけてこそみれ

竹風似雨といへるこゝろをよめる　前中納言基長

みむろやまもみぢ散るらし旅人の菅の小笠ににしきおりかく

十月十日ごろに鹿のなきけるを聞きてよめる　法印光清

なよ竹の音にも袖をかづきつゝ濡れぬにこそは風と知りぬれ

百首歌のなかに紅葉をよめる　源俊頼朝臣

何ごとにあきはてながらさを鹿のおもひ返してつまを戀ふらむ

あじろをよめる　皇后宮肥後

龍田川しがらみかけてかみなびのみむろの山の紅葉をぞみる

月照網代といへる事をよめる　大納言經信

冰魚（ひを）のよる川瀬にみゆる網代木（あじろぎ）はたつ白波のうつにやあるらむ

旅宿冬夜といへる事をよめる

月きよみ瀬々の網代による冰魚はたま藻にさゆる冰なりけり

○龍田の川　紅葉の流れる川を云ふ。龍田川は大和國生駒郡にある紅葉の名所。

○にしき　紅葉を錦に見立ててゐる。

○みむろやま　大和國生駒郡。

○なよ竹　なよ〳〵した竹。
○音にも　一本「音にぞ」
○袖をかづきつゝ　雨と聞き違へて袖をかぶり〳〵して。「かづきつゝ」は一本「かづきつる」
○濡れぬにこそは風と知りぬれ　濡れないので初めて風と知つた。
○あきはて　秋果て—倦き果て。

○龍田川の歌　紅葉を堰き止めて見るといふ意味。
○かみなびのみむろの山　大和國生駒郡。
○冰魚　小さい白い川魚。
○網代木　魚を取るために竹や木を編んだものをしかけた杙。

○月きよみ　月が淸いので。

旅寢する夜牀さえつゝ明けぬらしとかたぞ鐘のこゑきこゆなり　源　兼昌

關路千鳥といへる事をよめる

淡路島かよふ千鳥のなく聲にいくよねざめぬ須磨のせきもり　神祇伯顯仲

風早みとしまが崎をこぎ行けばゆふなみ千鳥たちゐなくなり　藤原隆經朝臣

氷をよめる

高瀨舟棹の音にぞしられぬる蘆間のこほりひとへしにけり　内大臣

谷水結冰といへる事をよめる

たに川のよどみにむすぶこほりこそ見るひともなき鏡なりけれ　藤原仲實朝臣

百首歌の中に冰をよめる

しながどり猪名のふしはらかぜさえてこやの池水冰しにけり　神祇伯顯仲

冬月をよめる

冬さむみ空にこほれる月かげはやどにもるこそ解くるなりけれ　大納言經信

冰滿池上といへる事をよめる

水鳥のつらゝの枕ひまもなしうべ冱えけらしとふのすがごも　大藏卿匡房

深山霰をよめる

○とかた　外方。
○きこゆなり　「きこゆなる」か。
○いくよねざめぬ　幾夜寐覺めたことか。
○須磨のせきもり　攝津國武庫郡の須磨關の番人。

○風早み　風が早いので。
○としまが崎　攝津國か。

○しられぬる　一本「しられける」

○しながどり　猪名の枕詞。
○猪名のふしはら、こやの池　共に攝津國の地名。

○冬さむみ　冬の寒さに。

○うべ　成程。
○とふのすがごも　目を十筋に編んだ菅薦。「とふ」の意味は未詳。

はしたかのしらふに色やまがふらむとかへる山に霰ふるなり

水邊寒草といへる事をよめる　　大中臣公長朝臣

たかねには雪ふりぬらし眞柴川きしのかげ草たるひしにけり

宇治前太政大臣家歌合に雪の心をよめる　　源頼綱朝臣

ころも手によごのうら風さえ〳〵てこだかみ山にゆき降りにけり

橋上初雪といへる事をよめる　　前齋院尾張

白波の立ちわたるかと見ゆるかな濱名の橋にふれるしら雪

初雪をよめる　　大納言經信

はつ雪はまきの葉白くふりにけりこや小野山の冬のさびしさ

雪中鷹狩のこゝろをよめる　　源道濟

ぬれ〳〵も猶かりゆかむはしたかの上毛(うはげ)の雪をうちはらひつゝ

鷹狩の心をよめる　　俊頼朝臣

はしたかをとりかふ澤に影みれば我が身も共にとやがへりけり

内大臣家越後

ことわりや交野(かたの)の小野に鳴く雉子さこそは狩(かり)の人はつらけれ

百首歌の中に雪の心をよめる　　大藏卿匡房

○はしたか　鷹の一種。
○しらふ　白色の斑(ふ)のある羽
○とかへる山　越前國の歸山を云ひ懸けてゐるか。
○たかね　高嶺。
○たるひ　垂氷。つらゝ。
○よご、こだかみ山　共に近江國の地名(餘古、木高見山)
○濱名の橋　遠江國濱名郡。
○こや　是や。是れがまア。
○小野山　山城國愛宕郡か。
○鷹狩の心を　一本「鷹狩といふことを」
○とりかふ澤　取り飼ふを云ひ懸く。
○とやがへり　鳥屋歸り。
○けり　一本「せり」
○交野の小野　河内國北河内郡。
○狩の人　狩に假を云ひ懸く。

いかにせむ末の松山なみこさば峯の初雪消えもこそすれ

宇治前太政大臣家歌合に雪の心をよめる　　皇后宮攝津

ふる雪に杉のあを葉もうづもれてしるしも見えず三輪の山もと

中納言女王

岩代のむすべるまつにふる雪は春もとけずやあらむとすらむ

大嘗會主基(すき)方備中國彌高山をよめる　　藤原行盛

雪ふればいやたかやまの梢にはまだ冬ながら花咲きにけり

雪の歌とてよめる　　源俊頼朝臣

衣手のさえゆくまゝにしもとゆふかづらき山に雪はふりつゝ

雪の御幸におそくまゐりければしきりにおそきよし御使をたまはりてつからまつれる　　六條右大臣

朝ごとのかゞみのかげに面なれてゆき見むとしも急がれぬかな

炭竈をよめる　　皇后宮權大夫師時

すみがまに立つ煙さへ小野山は雪げのくもと見ゆるなりけり

百首歌の中に雪をよめる　　隆源法師

みやこだに雪ふりぬればしがらきの槇の杣山あと絶えぬらむ

○末の松山なみこさば　古今集卷二十「君をおきてあだし心を我が持たば末の松山波も越えなむ」
○はつゆき　一本「しらゆき」
○三輪の山　大和國磯城郡の三室山と同じ。
○岩代のむすべるまつ　萬葉集卷二に「有間皇子自傷結二松枝一歌」として「磐代の濱松が枝を引結びま幸く有らば亦還り見む」
○しもとゆふ　笞結ふ。葛とかゝる言葉で葛城の枕詞。
○かづらき山　大和國南葛城郡。
○おそくまゐりければ　參ることがおそくなつたので。
○面なれて　自分の雪やうな白髮の顏を見馴れてゐるので。
○ゆき見む　雪に行きを云ひ懸く
○小野山　山城國愛宕郡。
○しがらき　近江國甲賀郡。
○杣山　材木を伐り出す山。

皇后宮肥後

道もなくつもれる雪に跡たえてふる里いかにさびしかるらむ

選子内親王いつきにおはましける時雪ふりたるに月のあかかりける夜參りたりけれど女房達ねたりけるにや月もみざりければ殿上の御簾にむすびつけける歌　　藤原兼房朝臣

かきくらし雨ふる夜半やいかならむ月と雪とはかひなかりけり

冬月をよめる　　源雅光

あらち山雪ふりつもる高嶺よりさえても出づる夜半の月かな

家經朝臣が桂の山莊のさうじのゑに神樂したるかたかける所をよめる　　康資王母

さかき葉や立ちまふ袖の追風になびかぬ神はあらじとぞおもふ

神樂をよめる　　皇后宮權大夫師時

神なびのみむろの山に霜ふればゆふしでかけぬ榊葉ぞなき

氷をよませ給へる　　三宮

つながねどながれもやらず高瀬舟むすぶ氷のとけぬかぎりは

水鳥をよめる　　前齋院六條

○あらち山　越前國敦賀郡。
○さうじのゑ　障子(襖)の繪。
○なびかぬ神云々　風になびき同時に心にうけ入れ喜ばぬ神はあるまいと思ふ。
○神なび　一本「神がき」
○ゆふしで　木綿幣で、榊に垂れかけるもの。
○やらず　一本「ゆかず」

なか〳〵に霜のうはぎを重ねてやをしの毛衣さえまさるらむ

池水鳥をよめる　　前齋宮内侍

なみまくら如何にうきねをさだむらむ冰る益田の池のをしどり

題しらず　　修理大夫顯季

さむしろにおもひこそやれ笹の葉のさゆる霜夜のをしのひとり寢

依花待春といふ心を　　内大臣

何となく年のくるゝはをしけれど花のゆかりに春をまつかな

としのくれの心をよめる　　藤原成道朝臣

人しれず暮れゆく年を惜しむまに春といふ名の立ちぬべきかな

霜月十日ごろに攝政左大臣家にて冬の題どもをさぐりてよみ侍りけるに

年のくれをとりてよめる　　藤原永實

數ふるに殘りすくなき身にしあればせめても惜しき年の暮かな

この歌よみて後としの内に身まかりにけるとぞ

としの暮の心をよませ給ひける　　三宮

いかにせむ暮れ行く年をしるべにて身を尋ねつゝ老は來にけり

中原長國

○なか〳〵に　却って。
○重ねてや　一本「重ねても」
○さえまさる　一本「さえわたる」

○うきね　浮んだまゝ寢ること。
○益田の池　大和國高市郡。

○さむしろ　さ筵。さは接頭語。
○おもひこそやれ　思ひ遣る。古今集卷十九「さかしらに夏は人まね笹の葉のさやぐ霜夜を我がひとりぬる」

○せめて　痛切に。

○身まかりにけるとぞ　死んだといふことである。

年くれぬとばかりこそは聞かましか我が身の上に積らざりせば

中納言國信

何事を待つとはなしに明けくれて今年も今日になりにけるかな

○年くれぬの歌　年が暮れたといふだけを聞いて、我が身の上に年が積らないものならばなアの意味
○とばかりこそは　一本「とばかりをこそ」
○聞かましか　「か」一本「を」

金葉和歌集　巻第五

賀歌

長治二年三月五日内裏にて竹不改色といへることをよませ給うける　堀河院御製

よゝふれど面かはりせぬ河竹はながれての世のためしなりけり

郁芳門院根合の祝ひの心をよめる　六條右大臣

萬代はまかせたるべし石清水ながきながれを君によそへて

堀河院御時中宮はじめて遷御の時松契遐年といへる事をよめる　大納言俊實

水のおもに松のしづえのひぢぬれば千とせは池のこゝろなりけり

禁中翫花といへる心をよめる　中納言實行

九重にひさしくにほへ八重櫻のどけき春のかぜと知らずや

花契遐年といへる事をよめる　源師俊朝臣

萬代とさしてもいはじさくら花かざさむ春のかぎりなければ

橘俊綱に朝臣家歌合に祝ひの心をよめる　藤原國行

○よゝ　一本「千代」
○面かはりせぬ　竹の色の變らないことを云ふ。
○の世の　一本「ながき」
○石清水　山城國綴喜郡男山の石清水八幡宮。
○ひぢぬれば　濡れたので。
○九重　皇居。楚辭に「君之門兮九重。」と見える。
○師俊　一本「師賴」
○かざさむ春　かざすとは髪に飾ること。

おのづから我が身さへこそ祝はるれ君が千代にも逢はまほしさに

百首歌の中に祝ひの心をよめる　　源俊頼朝臣

君が代は松の上葉におくつゆのつもりて四方の海となるまで

祝ひの心をよめる　　大納言經信

君が代のほどをばしらで住吉の松をひさしとおもひけるかな

後一條院御時弘徽殿女御歌合に祝ひの心をよめる　　永成法師

君が代はすゑの松山はる〴〵と越すしらなみのかずも知られず

嘉承二年三月鳥羽殿の行幸に池上花といへる事をよませ給ひける　　堀河院御製

池水のそこさへにほふ花ざくら見るともあかじ千代の春まで

大嘗會主基方辰日參入音聲に鼓山をよめる　　藤原行盛

音たかきつゞみの山のうちはへて樂しき御代となるぞ嬉しき

悠紀方の朝日の里をよめる　　藤原敦光朝臣

くもりなきとよのあかりにあふみなる朝日の里はひかりさしそふ

巳日の樂の破に雄琴の里をよめる

松風のを琴の里にかよふにぞをさまれる世にこゑはきこゆる

後冷泉院の御時の大嘗會の主基方備中國二萬郷をよめる　　藤原家經朝臣

○我が身さへこそ祝はるれ　我が身をまでも祝はれる。
○逢はまほしさに　逢ひたいので
○辰日參入音聲　大嘗會に悠紀主基の國郡の卜定があつて十一月卯日から午日まで四日間の儀式があり、その二日目辰の日に悠紀の儀が終つて天皇が主基の帳に坐して二獻の後國司が主基の歌を奏す。國司が儀鸞門より謡つて參入す。國司が前に立ち次に音聲人歌女など參入する儀。
○つゞみの山　丹波國。
○うちはへて　うち續けて。
○とよのあかり　豊明。大嘗會の時午の日に行はれる饗宴の儀。
○巳日の樂の破　第二日目巳の日も辰の日と同じく悠紀主基が風俗（民謡）を奏す。樂には序、破、急がある。
○を琴の里　近江國滋賀郡。

○よぼろ　丁。人夫。
○風ふく空　一本「風なき空」
○たつちりの　立つ塵のやうに。
○うれし　一本「あはれ」
○みかさ山　「見る」を云ひ懸く。
○二葉の松　春日神社は藤原氏の祖神であり、又攝政左大臣忠通がまだ中將で十二歳だつたのでその前途を祝ふ心持を籠めてゐるのであらう。
○いつぬきがは　美濃國。この歌催馬樂に「席田のや席田の伊津貫河にや住む鶴の千年を兼ねて遊びあへる萬代兼ねて遊びあへる」とあるに基いたのか。
○天つ兒屋根の命　藤原氏の祖神。こゝの君とは藤原頼通か。

みつぎもの運ぶよぼろをかぞふれば二萬の里人かずそひにけり

同國いな井のさとを人にかはりてよめる　　高階明頼

苗代のみづはいな井にまかせたり民やすげなる君が御代かな

祝ひの心をよめる　　皇后宮肥後

いつとなく風ふく空にたつちりの數もしられぬ君が御代かな

花契遐年といへる事をよめる　　太宰大貳長實

花もみな君がちとせをまつなればいづれの春か色もかはらむ

攝政左大臣中將にて侍りける春ころ日祭の使にくだりけるに周防内侍女使にてくだりけるに爲隆卿行事辨にてはべりけるがもとにつかはしける　　周防内侍

いかばかり神もうれしとみかさ山二葉の松の千代のけしきを

題しらず　　藤原道經

きみが代はいくよろづ代か重ぬべきいつぬきがはのつるの毛衣

宇治前太政大臣家の歌合に祝ひの心をよめる　　中納言通俊

君が代は天つ兒屋根の命よりいはひぞ初めしひさしかれとは　　大藏卿匡房

君が代はくもりもあらじ三笠山みねに朝日のささむかぎりは

新院の北面にて藤花久匂といへる事をよめる　　大夫典侍

ふぢなみは君が千年をまつにこそかけて久しく見るべかりけれ

祝ひの心をよめる　　源忠季

君が代はとみの小川の水すみて千年を經(ふ)ともたえじとぞ思ふ

實行卿の家の歌合に祝ひの心をよめる　　藤原爲忠

みづがきのひさしかるべき君が代を天照神やそらにしるらむ

前中宮初めて内へまゐらせ給ひける夜雪のふりて侍りければ六條右大臣のもとへつかはしける　　宇治前太政大臣

雪つもる年のしるしにいとゞしくちとせの松のはな咲くぞみる

かへし　　六條右大臣

つもるべし雪つもるべし君が代は松の花さくちたび見るまで

天喜四年皇后宮の歌合に祝ひの心をよませ給うける　　後冷泉院御製

長濱の眞砂のかずもなにならずつきせず見ゆる君が御代かな

松上雪をよめる　　源頼家朝臣

よろづ代のためしと見ゆる松の上に雪さへつもる年にもあるかな

○まつ　待つ—松。

○とみの小川　大和國生駒郡。

○みづがきの　神社の瑞垣のやうに。拾遺集卷十九に「をとめごが袖振る山の瑞垣の久しき世より思ひ初めてき」

○天照神　皇祖神の天照大神。

○いとゞしく　一層。

○松の花　松の花は千年に一度花咲くと云はれるので、雪を松の花に見なしてゐる。

○ちたび　千度。

○天喜　後冷泉天皇の年號。

○なにならず　何でもない。

○をよめる　一本「といへる事をよめる」

○石合　一本「歌合」

○とよさかのぼる　豊榮昇る。

前齋宮伊勢におはしましける頃石などりの石合といへる事をせさせ給ひけるに祝ひのこゝろをよめる

源俊頼朝臣

くもりなくとよさかのぼる朝日には君ぞつかへむ萬代までに

金葉和歌集　卷第六

別離歌

兼房朝臣丹後守にてくだりける遣はしける　大納言經長

君うしやはなのみやこのはなを見で苗代水にいそぐこゝろは

かへし　藤原兼房朝臣

よそにきく苗代水にあはれわがおりたつ名をもながしつるかな

重尹帥になりてくだり侍るに人々馬のはなむけし侍りける時よめる　堀河右大臣

かへるべきたびの別れとなぐさむる心にたがふ涙なりけり

題しらず　讀人しらず

おくれゐて我がこひをれば白雲の棚引く山を今日やこゆらむ

經輔卿つくしへくだり侍りけるに具してくだりけるに道より上東門院に侍りける人につかはしける　前太宰大貳長房朝臣

かたしきの袖にひとりはあかせどもおつる涙ぞ夜をかさねぬる

○うしや　憂いことよ。
○見で　見ずして。
○苗代水　國司(地方官)となることを云ふ。
○よそにきく　今までは國司を餘所事に聞いてゐたが。
○おくれゐての歌　萬葉集卷九に見える。
○つくし　筑紫。九州の古稱。
○かたしき　片敷き。獨寢をいふ

これを御覧じてかたはらに書きつけさせ給ひける　　上東門院

別れ路をげにいかばかり歎くらむ聞く人さへぞそでは濡れける

源公定が大隅守になりてくだりける時月あかかりける夜わかれをゝしみてよめる　　源爲成

はるかなる旅の空にもおくれねばうらやましきは秋の夜の月

對馬守にて小槻のあきみちが下りける時つかはしける　　爲政朝臣妻

沖つ島くもゐの岸を行き返りふみかよはさむまぼろしもがな

としよりが伊勢へまかることありて下りけるとき人々馬のはなむけし侍りける時よめる　　參議師頼

伊勢の海をののふるえに朽ちはてで都の方へ歸れとぞ思ふ

　　源行宗朝臣

待ちつけむ我が身なりせば歸るべき程をいくたび君にとはまし

百首歌の中に別れの心をよめる　　中納言國信

今日はさは立ちわかるとも便り(たよ)あらばありやなしやの情(なさけ)忘るな

　　藤原基俊

秋ぎりの立ちわかれぬる君によりはれぬ思ひにまどひぬるかな

○はるかなるの歌　拾遺集卷六では平兼盛の作。
○對馬守　一本「但馬守」
○爲政　一本「共政」
○くもゐ　雲居。雲の居る遠方。
○まぼろしもがな　幻術もあれはいいな。
○下り　一本「いでたり」
○をののふるえ　伊勢國一志郡。斧の古柄（王質の故事）を云ひ懸く。
○待ちつけむ　歸る日を……。
○歸るべき程をいくたび　一本「幾千度歸り來む日を」
○さは　さやうには。
○ありやなしや　安否を問ふことゝ伊勢物語「名にし負はゞいざ言問はむ都鳥我が思ふ人は有りや無しやと」

橘爲仲朝臣みちのくににくだりけるに人々むまのはなむけし侍りけるによめる　藤原實綱朝臣

人はいさ我が世は末になりぬれば又あふさかも如何(いかゞ)まつべき

藤原有定

戀しさはその人かずにあらずとも都を忍ぶうちにいれなむ

經平卿つくしへまかりけるに具してまかりける時公實のもとへつかはしける　中納言通俊

さしのぼる朝日に君を思ひ出でむかたぶく月にわれを忘るな

かへし　春宮大夫公實

あさ日とも月ともわかずつかのまも君をわするゝ時しなければ

みちのくにへまかりけるにあふさかの關より都へつかはしける　橘則光朝臣

我ひとり急ぐと思ひしあづまぢに垣根の梅はさきだちにけり

○みちのくに　陸奥國。
○むまのはなむけ　餞別。
○人はいさ　人はどうだか知らないが。
○あふさか　東國への往復には必ず逢坂の關を通つたので、これに再び逢ふといふことを云ひ懸けてゐる。
○忍ぶ　一本「思ふ」
○いれなむ　入れて下さい。
○具して　伴つて。
○朝日、月　京は東方で筑紫は西方だから。
○あさ日とも月とも　朝夕とも。
○つかのまも　少しの間も。
○さきだちにけり　先立つて咲いたことだ。

金葉和歌集　巻第七

戀歌　上

五月五日はじめたる女のもとにつかはしける　　小一條院御製

知らざりき袖のみぬれて菖蒲草(あやめぐさ)かかるこひぢに生ひむものとは

女のもとにつかはしける　　大江公資朝臣

しのすゝき上葉にすがくさゝがにのいかさまにせば人なびきなむ

曉の戀をよめる　　神祇伯顯仲

さりともと思ふかぎりは忍ばれて鳥と共にぞねになかれける

つれなかりける女のもとにつかはしける　　春宮大夫公實

これにしくおもひはなきを草まくらたびに歸すはいなむしろとや

後朝の心をよめる　　としよりの朝臣

わが戀はおぼろの清水いはでのみ堰きやる方もなくて暮しつ

顯季卿の家にて人々戀の歌よみけるによめる　　藤原顯輔朝臣

あふとみて現(うつゝ)のかひはなけれどもはかなきゆめぞ命なりける

○こひぢ　戀路に泥を云ひ懸く。
○すがく　巣をかける。
○さゝがに　蜘蛛。これまでは次の「い」を云ひ起す序。
○いかさまに　い(蜘蛛の巣)を云ひ懸く。
○さりとも　それにしても。
○忍ばれて　耐へ忍ばれたが。
○ねになかれける　曉の鳥の音と共に泣かれた。
○しく　及ぶ。
○草まくら　たびの枕詞。
○たびに　度に。度々。
○いなむしろとや　稲蓆に否(いな)を云ひ懸く。いやといふのですか。
○後朝　男女が逢つた翌朝。
○おぼろの清水　山城國愛宕郡。
○いはで　言はずにの意味に、岩を云ひ懸く。
○あふとみて　戀人に逢ふと夢見て。
○現　現實。

女のもとにつかはしける　源雅光

逢ふまでは思ひもよらず夏引(なつびき)のいとほしとだにいふと聞かばや

從二位藤原親子家の雙紙合に戀の心をよめる　宣源法師

今はたゞねられぬいをぞ友とする戀しき人のゆかりと思へば

太宰大貳長實

おもひやれ須磨のうらみて寐たる夜のかたしく袖にかゝる涙を

ものいひける女の髪をかきこして見けるをよめる　津守國基

朝寐がみ誰が手枕にたわつけてけさは形見にふりこしてみる

題しらず　讀人しらず

戀すてふ名をだにながせなみだ川つれなきひとも聞きやわたると

なにせむにおもひかけけむ唐衣戀しきことはみさをならぬに

中納言雅定

あふ事はいつとなぎさのはま千鳥波のたちゐにねをのみぞなく

ある宮ばらに侍りける人の忍びて宮をいでてあやしの小家にて物申して

後日ごろありてつかはしける　春宮大夫公實

思ひいづやありしそのよの呉竹はあさましかりしふし所かな

○夏引の　いとの枕詞。
○いとほし　絲に云ひ懸く。氣の毒だ。
○聞かばや　聞きたい。
○ねられぬい　眠られぬ睡眠。
○友と　一本「友に」
○戀しき人のゆかり　戀人故。
○須磨のうらみて　恨みてに須磨の浦を云ひ懸く。
○たわつけて　「撓著けて」か。
○ふりこして　詞書の「かきこして」と同じ意味で、「ふり亂して」の意味か。
○聞きやわたると　聞き渡るかと
○なにせむにの歌　唐衣をさをにかけるといふ言葉を歌ひ含めてゐる。
○なぎさ　渚。「いつと無き」を云ひ懸く。
○ねをのみぞなく　泣いてはかり居る。
○宮　宮達。
○後日ごろありて　一本「又の日」
○よ　「夜」に竹の節と節との間の「よ」を云ひ懸けてゐる。
○ふし所　「臥し所」に「竹の節」を云ひ懸く。

顯季卿家にて寄織女戀といふ心をよめる　少將公敎母

棚機はまたこむ秋もたのむらむ逢ふ夜もしらぬ身をいかにせむ

寄水鳥戀といへることをよめる　源師俊朝臣

水鳥の羽風にさわぐさゝなみのあやしきまでもぬるゝ袖かな

寄夢戀といへる事をよめる　左兵衛督實能

ゆめにだに逢ふとは見えよさもこそは現につらき心なりとも

題しらず　中納言顯隆

しら雲のかかるやまぢをふみみてぞいとゞ心はそらになりける

中納言俊忠卿の家にてたのめてあはぬ戀といへる心をよめる　源顯國朝臣

逢ひ見むと頼むればこそ吳服(くれはとり)あやしやいかゞたちかへるべき

忍戀の心をよめる　中納言實行

谷川の上は木の葉にうづもれて下にながると人しるらめや

月前戀といへる事をよめる　藤原基光

ながむれば戀しき人のこひしきにくもらばくもれ秋の夜の月

題しらず　讀人しらず

つらしとも愚かなるにぞいはれけるいかに恨むと人にしらせむ

○棚機　織女星。七月七日、一年に一度天の川を渡つて牽牛星に逢ふと信ぜられた。

○水鳥の歌　上句は　文(あや)を云ひ起す序。

○ゆめにだに　夢にでも。

○さもこそは　さほどに。

○ふみみて　踏み見てと文見てと

○吳服　あや(綾)の枕詞。又上からつゞいて「來れ」を云ひ懸く。

○人しるらめや　人が知るだらうや。

○愚かなるに　大方なるつらさに

もの申しける人の前中宮にまゐりにければなごりを戀ひて月のあかかりける夜いひつかはしける　　藤原知房朝臣

面かげはかずならぬ身にこひられて雲居の月をたれとみるらむ

さはる事ありて久しうおとづれざりける女のもとよりいひ送り侍りける　　讀人しらず

淺ましやなどかきたゆる藻鹽草さこそは蜑のすさびなりとも

文ばかりおこせていひたえにける人の許にいひ遣はしける　　內大臣家小大進

ふみそめて思ひかへりしくれなゐの筆のすさびをいかで見せけむ

實行卿家の歌合に戀の歌の心をよめる　　長實卿母

知るらめや淀の繼橋よとともにつれなき人を戀ひわたるとは　　藤原道經

戀ひわびておさふる袖やながれ出づる涙の川のゐぜきなるらむ　　少將公數母

ながれての名にぞ立ちぬるなみだ川人目づゝみをせきしあへねば

題しらず　　皇后宮右衞門佐

淚川そでのゐぜきも朽ちはててよどむかたなき戀もするかな

○面影は　面影をば。
○かずならぬ身　數にもあらぬ我が身。
○雲居の月　宮中の月。
○など　何として。
○かきたゆる　書きに掻きを云ひ懸く。
○藻鹽草　海鹽をとるに用ゐる海草。
○ふみそめて　「文染めて」と「踏み初めて」を云ひ懸く。
○すさび　戯れ。
○知るらめや　知るだらうか。
○淀の繼橋　山城國久世郡。
○ゐぜき　堰き止める所。
○人めづゝみ　「人目を包む」に堤を云ひ懸く。
○せきしあへねば　「し」は助詞。
○よどむ方なき　心が靜かになる方のない。

○いはしろ　岩代の松に[illegible]た云はぬ意味を云ひ懸く。
○むすぼほれたる　結ばれたる。
○もじの關守　門司の關に文字を云ひ懸く。
○かきつらむ　書いたらうか。
○年ふとも　年が經つとも。
○つらかりし心ならひに　貴方がつらくした日頃の心の習慣で。
○いはがきこむる　岩の垣に籠める。
○すさめぬ　賞翫せぬ。
○くち木の杣　近江國。
○うもれぎ　地に埋もれた木。
○いかにせむの歌　貴い人を戀ひあるまじき事を思ふまいと包むに餘る涙をどうしようの意味。
○熊野　紀伊國西牟婁郡。

源顯國朝臣

かくとだにまだいはしろの結び松むすぼほれたるわが心かな

女のもとにつかはしける　藤原顯輔朝臣

戀すてふもじの關守いくたびかわれかきつらむ心づくしに

左兵衞督實能

命だにはかなからずば年ふともあひ見むことを待たましものを

後朝の心をよめる　源行宗朝臣

つらかりし心ならひにあひみてもなほ夢かとぞ疑はれける

堀河院御時の艷書合によめる　春宮大夫公實

思ひあまりいかでもらさむ奥山のいはがきこむる谷のした水

戀の心をよめる　藤原顯輔朝臣

年ふれど人もすさめぬ我がこひやくち木の杣の谷のうもれぎ

あるまじき人をおもひかけてよめる　讀人しらず

いかにせむ數ならぬ身にしたがはでつゝむ袖より落つるなみだを

院の熊野にまゐらせおはしましける時御迎へにまゐりて旅の牀の露けかりければよめる　太宰大貳長實

夜もすがら草の枕におく露はふるさと戀ふるなみだなりけり

忍戀の心をよめる　神祇伯顯仲

知らせばやほのみしま江に袖ひぢて七瀨のよどに思ふ心を

野分したりけるにいかゞなどおとづれたりける人の其の後又音もせざりければ遣はしける　相模

荒かりし風の後より絶えぬるは蜘手にすがく絲にやあるらむ

國信卿の家の歌合に夜戀の心をよめる　源俊頼朝臣

よとともに玉ちるとこのすが枕見せばや人によるのけしきを

五月五日わりなくもていでたる所にこもといふものをひきたりけるを忘れがたさにいひ遣はしける　相模

菖蒲にもあらぬ眞菰をひきかけしかりのよどのの忘られぬかな

閏五月侍りける年人をかたらひけるが後の五月すぎてなど申しければよめる　紀季通

なぞもかくこひぢに立ちて菖蒲草あまり長びく五月なるらむ

人のもとに遣はしける　神祇伯顯仲

おのづから夜がるゝほどのさ筵は涙のうきになると知らずや

○草の枕　旅寢の枕。
○知らせばや　知らせたいな。
○ほのみしま江　攝津國の三島江に、「ほのかに見し」を云ひ懸く。
○袖ひぢて　袖濡れて。
○七瀨のよど　肥前國。淀に思ふ心の淀んで云ひ出ぬことを云ひ含めてゐる。
○野分　秋冬の頃野を分けて吹く暴風。
○蜘手に　蜘蛛の手の形に。
○よとともに　夜と共に
○すが枕　菅枕。
○よるのけしき　夜の氣色に人にた寄る氣色の意味を云ひ懸く。
○菖蒲にも　五月五日だから斯う云ふ。
○かりのよどの　刈りの淀野に假の夜殿を云ひ懸く。
○後の五月　閏五月のこと。
○なぞもかく　何として斯やうに
○こひぢ　戀路に泥を云ひ懸く。
○長びく　月日の長びくに菖蒲を引くを云ひ懸く。
○夜がるゝ　夜出する。
○さ筵　「さ」は接頭語。
○うき　浮沼。

そら事いひて久しうおとせぬ人のもとにいひつかはしける　相摸

ありふるもうき世なりけり長からぬ人の心をいのちともがな

人をうらみて遣はしける　藤原惟規

池にすむ我が名をしのとりかへす物にもがなや人を恨みじ

女のもとにまかりたりけるに今宵はかへりねとまうしければ歸りにける　藤原正家朝臣

後ひと日はいかに思ひしなど申しければいひ遣はしける

秋風に吹きかへされて葛の葉のいかにうらみしものとかは知る

かたらひ侍りける人のあながちに申さする事のありければいひ遣はしける　藤原有教母

從へば身をばすててむ心にもかなはでとまる名こそ惜しけれ

長實卿の家の歌合に戀の心をよめる　藤原忠隆

つゝめどもなみだの雨のしるければ戀する名をもふらしつるかな

人にかはりて　春宮大夫公實

白菊のかはらぬいろもたのまれず移ろはでやむ秋しなければ

人を恨みてつかはしける　藤原惟規

島風にしばだつ波のたちかへりうらみても猶たのまるゝかな

○ありふるもの歌　春をたのんで存命するのも憂き世の中だから、末長くない人の心を我が命にして短命でありたいの意味。
○をし　鴛鴦に名を惜しを云ひ懸く。
○とりかへす物にもがなや　逢はぬ昔にとりかへす物であつてくれるならばなア。
○恨みじ　恨むまいに。
○かへりね　歸りなさい。
○秋風に「倦き」を云ひ懸く。
○うらみし　裏見しー怨みし。
○申さする　一本「うらむる」
○從へば身をば　一本「從はば身をも」
○すててむ　捨ててあるだらうが
○とまる　死後に留まる。
○しるければ　いちじるしいので
○ふらし　一本「ながし」
○移ろはでやむ　變らないで濟む
○島風　一本「鹽風」
○しばだつ　しばしば立つ。「立ち返り」の序。

なき名たてける人のもとにつかはしける　前齋宮内侍

あさましや逢瀬もしらぬ名取川まだきに岩間もらすべしやは

逢不遇戀といへる事をよめる　左京大夫經忠

ひとよとはいつか契りしかは竹のながれてとこそ思ひそめしか

後忠卿の家にて戀歌十首人々によませ侍りけるに誓ひて逢はずといへる事をよめる　皇后宮式部

あひみての後つらからばよゝをへてこれよりまさる戀に惑はむ

實行卿の家の歌合に戀の心をよめる　源俊頼朝臣

いつとなく戀にこがるゝ我が身よりたつや淺間の煙なるなむ

戀の歌とてよめる　藤原成通朝臣

後の世と契りし人もなきものを死なばやとのみ言ふぞはかなき

攝政左大臣

いはぬまは下はふ蘆の根をしげみひまなき戀を君しるらめや

かたらひける人のかれ〲になりて恨めしかりけるにつかはしける　白河女御越中

待ちし夜のふけしを何に歎きけむおもひ絶えても過しける身を

○なき名　無實の浮名。
○名取川　陸前國。
○まだきに　まだ早くに。
○もらすべしやは　洩らすものかい。水を洩らすに名を世に洩らすを云ひ懸く。一本「もらすべしとは」
○逢不遇戀　逢ひながら實事のない戀。
○ひとよ　一夜に竹の一よを云ひ懸く。
○思ひそめしか　思ひそめしかど

○淺間　信濃國佐久郡。

○後の世と　後の世までも夫婦だと。
○死なばや　死にたい。
○いはぬまは　一本「あはぬ間は」
○根をしげみ　蘆の根が繁つて。
○君　一本「人か」
○かれ〲に　離れ〲に。疎々しく。
○待ちし夜の歌　語らひした時代に君を待つた夜をなぜ歎いたのだらう。今は思ひ絶えても過した身なのに。
○何に　一本「何と」
○過し　一本「あられ」

戀の心を人々よみけるによめる　律師實源

命をしかけて契りし中なればたゆるは死ぬるこゝちこそすれ

皇后宮美濃

かきたえて程はへぬるをさゝがにの今はこゝろにかゝらずもがな

旅宿戀を　攝政左大臣

見せばやな君しのびねの草枕たまぬきかくるたびのけしきを

堀河院の御時艷書合によめる　皇后宮肥後

思ひやれとはで日をふる五月雨のひとりやどもる袖のしづくを

皇后宮にて人々戀の歌つかうまつりけるに被返書戀といへる事を　美濃

戀ふれども人の心のとけぬには結ばれながらかへるたまづさ

人々に戀の歌よませ侍りけるに人にかはりて　攝政左大臣

こゝろざし淺茅がするにおく露のたまさかにとふ人はたのまじ

寄三日月戀をよめる　藤原爲忠

よひのまにほのかに人をみか月のあかで入りにしかげぞ戀しき

忍戀をよめる　讀人しらず

忍ぶれどかひもなぎさのあま小舟波のかけても今はうらみじ

○かきたえて　仲が絶えて。
○へぬる　經ぬるに蜘蛛の絲を經ぬるを云ひ懸く。
○さゝがにの　蜘蛛のやうに。
○かゝらずもがな　心にかゝらないであれ。
○たまぬきかくる　玉貫き懸くる

○とはで　訪はずして。
○ふる　「經る」に「降る」を。
○五月雨の　一本「五月雨に」
○やどもる　一本「やどせる」
○結ばれながら　結んでやつたままに解かずに。

○たまさかに　上から露の玉を云ひ懸く。

○みか月の　「人を見る」と云ひ懸く。
○なぎさ　「かひも無き」を云ひ懸く。
○かけても　心にかけても。
○うらみじ　一本「たのまし」

○かふ　換ふる。
○人の爲かは　人のためかい。我が身のためだ。
○あだなりし　徒らだつた。
○ときはのもの　永久のもの。
○からす羽にかく　敏達天皇元年四月、高麗から烏の羽に表辭を書いて獻じたが、黒くて讀めないので船史祖王辰爾がその羽を蒸して帛に押し寫して讀んだといふことから次の句を起す序に用ゐてゐる。
○あやにくに　生憎に。意外に。
○こがるゝ　焦ける。
○入るさ　入る時。思ひ入るを云ひ懸く。
○つらきを　君のつれないのを。
○思はましかば　思つたならばなあ。

雲居寺の歌合に人にかはりて戀の心をよめる　三宮大進

なぞもかく身にかふばかり思ふらむ逢ひ見むことも人の爲かは

寄花戀　攝政左大臣

あだなりし人の心にくらぶれば花もときはのものとこそ見れ

百首の歌の中に戀の心をよめる　修理大夫顯季

我が戀はからす羽にかく言の葉のうつらぬ程はしる人もなし

攝政左大臣家にて戀の心をよめる　源雅光

あやにくにこがるゝ胸もあるものをいかにかわかぬ袂なるらむ

寄山戀といへる事をよめる　大中臣公長朝臣

こひわびて思ひ入るさの山の端にいづる月日のつもりぬるかな

つれなかりける人のもとにあふよしの夢を見てつかはしける　藤原公教

うたゝねに逢ふと見つるは現にてつらきを夢と思はましかば

攝政左大臣家にて寄花戀といへる事をよめる　源雅光

吹く風にたへぬこずゑの花よりもとゞめがたきは涙なりけり

權中納言俊忠卿家にて戀歌十首人々よみけるに來不留戀といへる事をよめる　源俊頼朝臣

○おもひ草葉末に結ぶ白露の　たまたまの(玉)を云ひ起す序。
○うき　浮沼に憂きを云ひ懸く。
○重服　重い服忌。
○藤衣　喪服。
○はやくより　もとより。
○たのめおくの歌　露は草の葉にかゝるものだから。

おもひ草葉末にむすぶ白露のたま〳〵きては手にもたまらず

春宮大夫公實

女を恨みて遣はしける

蘆根はふ水の上とぞおもひしをうきは我が身にありけるものを

橘俊宗女

重服になりたる人の立ちながらまうでこむと申したりければ遣はしける

立ちながらきたりとあはじ藤衣ぬぎすてられむ身ぞと思へば

前中宮上總

戀の心を人にかはりてよめる

石(いは)ばしる瀧の水上はやくよりおとに聞きつゝ戀ひわたるかな

皇后宮女別當

たのめおく言の葉だにもなきものを何にかゝれる露のいのちぞ

金葉和歌集　巻第八

戀歌　下

初戀の心をよめる　　眞暹法師

かすめてはおもふ心をしるやとて春の空にもまかせつるかな

公任卿家にて紅葉天橋立戀と三の題を人によませ侍りけるにおそくまかりて人々みな書きける程なりければ三の題をひとつによめるうた　　藤原範永朝臣

こひわたる人にみせばや松の葉もしたもみぢするあまの橋立

後朝戀の心をよめる　　源師俊朝臣

しのゝめの明けゆく空も歸るさは涙にくるゝものにぞありける

月增戀といへる事をよめる　　内大臣

いとゞしくおもかげにたつこよひかな月見よとしも契らざりしを

戀の心を　　藤原顯輔朝臣

戀ひわびて寐ぬ夜つもれば敷妙の枕さへこそうとくなりけれ

鳥羽殿の歌合に戀の心をよめる　　藤原仲實朝臣

○かすめては　云ひほのめかしては「霞めては」を云ひ懸く。

○みせばや　見せたい。
○あまの橋立　丹後國。

○歸るさ　歸る時。
○くるゝ　昏るゝ。上の明けゆくに對して云ふ。

○いとゞしく　甚しく。
○月見よとしも　「し」は助詞。

○敷妙の　枕の枕詞。
○枕さへこそうとくなりけれ　枕に就かないので。

夜とともに袖のかわかぬ我がこひやとしまが磯によするしら波

晩の戀といへる事をよめる　　中納言雅定

あふことを今宵と思はば夕づく日いる山のはも嬉しからまし

戀の心をよめる　　右兵衞督伊通

山の井の岩もるみづに影みればあさましげにもなりにけるかな

皇后宮にて人々こひの歌つかうまつりけるによめる　　太宰大貳長實

みちのくの思ひしのぶにありながら心にかゝるあふの松原

戀の心をよめる　　皇后宮權大夫師時

人しれぬこひをしすまの浦人は泣きしほたれて過すなりけり

奈良の人々百首の歌よみけるに恨みの心をよめる　　權僧正永縁

思はむとたのめし人の昔にもあらずなるみのうらめしきかな

戀の心をよめる　　隆源法師

くるゝまも定めなき世に逢ふ事をいつともしらで戀ひ渡るかな

藏人家時かれ〴〵になりけるを恨みていひつかはしける　　前中宮越後

人心あさ澤みづのねぜりこそかるばかりにも摘ままほしけれ

俊忠卿の家にて戀の歌十首人々よみけるに立聞戀といへる事をよめる

○としまが磯　攝津國西成郡か。
○夕づく日　夕日。
○山の井の歌　戀にやつれた我が姿を詠んだ歌。
○おもひしのぶ　「思ひ忍ぶ」に信夫の地名を云ひ懸く。
○あふの松原　播磨國飾磨郡か。
○こひをしすまの浦　須磨の浦を云ひ懸く。
○しほたれて　鹽垂れて。
○なるみ　一本「なるこ」
○うらめしきかな　「浦」を云ひ懸く。
○戀の心をよめる　一本「戀の歌とてよめる」
○ねぜりこそ　根芹は。
○かるばかりに　枯れるほどに。

修理大夫顯季

わぎも子がこゝろたちききし唐衣その夜の露にそでは濡れけり

我をばかれ〴〵になりてこと人のもとへまかると聞きてつかはしける

讀人しらず

ことわりや思ひくらぶの山ざくらにほひまされるはなを愛づるも

郁芳門院根合に戀の心をよめる　周防内侍

戀ひわびてながむるそらの浮雲やわがしたもえの煙なるらむ

人をうらみて五月五日につかはしける　前齋宮河内

あふ事のひさしにふける菖蒲草たゞかりそめの妻とこそ見れ

戀の心をよめる　太宰大貳長實

つらきをも思ひもしらぬ身のほどに戀しさいかで忘れざるらむ

題しらず　前中宮上總

さきの世の契りをしらではかなくも人をつらしと思ひけるかな

戀の歌をよみける所にてよめる　源俊頼朝臣

忘草しげれるやどを來てみれば思ひのきより生ふるなりけり

人をうらみて　讀人しらず

○わぎも子　吾妹子。愛妻。
○たちききし　「立ち聞き」に「裁ち著」を云ひ懸く。
○濡れけり　一本「濡れにき」
○ことわりや　尤もぢや。
○思ひくらぶ　思ひくらべる意味にくらぶ山（近江國か）を云ひ懸く。
○したもえ　心の下に燃えること
○ひさし　庇ー久し。
○ふける　葺けるー耽る。
○妻　端(はし)の意味の「つま」を云ひ懸く。
○思ひも　一本「憂きをも」
○前中宮　一本「前齋宮」
○さきの世　前世。
○しらで　知らずして。語らずに
○忘草　萱草の一名。
○思ひのき　思ひ退きに軒(のき)を云ひ懸く。

今よりはおもひもいでじ恨めしといふもたのみのかゝる契りは

逢不遇戀をよめる　　左兵衞督實能

思ひきや逢ひ見し夜はの嬉しさに後のつらさの増るべしとは

人をうらみけるころ心地例ならずおぼえければよめる　　讀人しらず

あはずともなからむ世には思ひいでよ我ゆゑ命絶えし人かと

女のがりつかはしける　　藤原長實

するすみも落つるなみだに洗はれて戀しとだにもえこそ書かれね

家の歌合に初戀を　　中納言國信

いろみえぬ心ばかりはしづむれど涙はえこそしのばざりけれ

題しらず　　讀人しらず

逢ふことは夢ばかりにて止みにしをさこそ見しかと人に語るな

大納言經信

蘆垣のひまなくかゝるくものいの物むづかしくしげるわが戀

藤原忠隆

おさふれどあまる涙はもるやまのなげきに落つる雫なりけり

なき名たちける頃月をみてよめる　　橘俊宗女

○今よりはの歌　もう思ひ出すまい。恨めしいといふのもつまりは頼みのかゝる契りなのだから。
○後のつらさ　別れのつらさ。
○心地例ならず　氣分わるく。
○世には　一本「世にも」
○人かと　一本「人ぞと」
○女のがり　女の許に。
○えこそ書かれね　書かれ得ない
○いろみえぬ　外に表はれぬ。
○えこそしのばざりけれ　忍び得ざることよ。
○さこそ見しか　そんなに見た。
○くものいの　蜘蛛の巣のやうにこれまでは序歌。
○物むづかしく　むしやくしやさ
○もるやま　近江國の守山（もるやま）に漏るを云ひかく。
○なげき　「き」に木を云ひ含めてゐる。

いかにせむなげきの森は茂けれど木の間の月のかくれなき世を　前齋院肥後

もの申しける人の久しう音もせざりければ遣はしける

蘆ぶきのこや忘らるゝつまならむ久しく人のおとづれもせぬ　左兵衞督實能

戀の心をよめる

我が戀の思ふばかりの色にいでばいはでも人にみえましものを　春宮大夫公實

もろともに郭公をまちけるにさはる事ありて入りにける後鳴きつやなど
たづねけるを聞きてよめる

郭公くもゐのよそになりしかばわれぞ名殘のそらになかれし　藤原成通朝臣

冬戀といへる事を

水の上にふるしら雪のあともなく消えやしなまし人のつらさに　權僧正永緣

多聞といへる童をよびにつかはしたりけるに見えざりければ月のあかか
りける夜よめる

まつ人のおほぞらわたる月ならばぬるゝ袂にかげは見てまし　攝政左大臣

寄水鳥戀

逢ふこともなぎさにあさる蘆鴨のうきねをなくと人しるらめや　盛經法

人をうらみてよめる

○蘆ぶき　一本「かや葺き」
○こや　「是や」に「小屋」を云ひかく。
○つま　端。端緒。
○戀の心をよめる　一本「人のがり遣はしける」
○いはでも　云はずしても。
○さはる事　差支へること。
○鳴きつや　鳴いたか。
○なかれし　鳴かれた。一本「ながめし」西
○水の上に　一本「水の面は」
○あとも　一本「かたも」
○消えやしなまし　消えもしてしまふたらう。
○つらさに　つれなさに。
○袂　多聞を云ひかく。
○なぎさ　「無き」を云ひかく。
○うきね　浮き寢ー憂き泣。

さのみやは我が身の憂(う)きになし果てて人のつらさを恨みざるべき

攝政左大臣の家にて戀の心をよめる　　源　雅　光

名にたてるあはでの浦の蜑だにもみるめは潛(かつ)くものとこそきけ

うらめしき人のあるにつけて昔思ひ出でらるゝ事ありて　　前齋宮甲斐

いま人の心をみわの山にてぞ過ぎにし方はおもひ知らるゝ

わすれたる人のおもひ出でておとづれたるによめる　　橘　俊　宗　女

めづらしや岩間によどむ忘水(わすれみづ)いく世をすぎておもひ出づらむ

皇后宮にて山里戀といへる事をよめる　　左京大夫經忠

山里のおもひかけひにつらゝゐてとくる心のかたげなるかな

山の歌合にこひの心をよめる　　讀人しらず

たまさかに逢ふ夜は夢のこゝちして戀しもなどかうつゝなるらむ

いかでかとおもふ人のさもあらぬさきにさぞなど人の申しければよめる　　中原章經

こひわぶるきみにあふてふ言の葉は僞りさへぞうれしかりける

伊賀少將がもとへつかはしける　　前中納言資仲

よもの海の浦々毎にあされども怪しく見えぬいけるかひかな

○さのみやはの歌　さうばかりも自分の身の憂き故として人のつれなさを恨み果てないで居られようかい。「や」は反語。
○あはでの浦　常陸國。逢はでを云ひかく。
○みるめ　見る目に海草のみるめ（海松）を云ひかく。
○いま人の歌　今つれない人の心を見るにつけて昔の事が思ひ知られる意味。三輪山の杉を云ひかく。
○忘水　大和國か。
○かけひ　「筧」に「思ひかけ」るを云ひかく。一本「かけぢ」
○かたげ　難げ。難さう。
○戀しも　「し」は强めの助詞。
○いかでか　どうかして。
○おもふ　一本「おもひし」
○さぞ　さうだ。
○あふてふ　逢ふといふ。
○いけるかひ　「生ける貝」に「生ける效(かひ)」を云ひかく。

かへし　伊賀少將

たまさかに波の立ちよる浦々は何のみるめのかひかあるべき

忍戀の心をよめる　源親房

ものをこそしのべばいはね岩代のもりにのみもるわが涙かな

物おもひ侍りけるころ月のあかかりける夜あかざりし面影つねよりも堪へがたくてよめる　橘俊宗女

つれ〴〵と思ひぞ出づる見し人をあはで幾月ながめしつらむ

題しらず　上總侍從

あさましや涙にうかぶ我が身かなこゝろかろくは思はざりしを

物へまかりける道にはしたもののあひたりけるをとはせ侍りければ上東門院に侍るすまひこそとなむ申すといひけるを聞きてよめる　源緣法師

名きくよりかねても移る心かないかにしてかは逢ふべかるらむ

戀の心をよめる　民部卿忠教

戀ひわびてたえぬ思ひの煙もや空しきそらの雲となるらむ

女のもとへつかはしける　大納言經信

あふ事はいつともなくてあはれわが知らぬ命に年をふるかな

○みるめのかひ　「海松、貝」に「見る目の效(かひ)」を云ひかく。
○忍べはいはね　「ど」を補ふ。忍ぶから云はないが。
○もりにのみもる　「漏りにのみ漏る」に岩代の森と云ひかく。
○見し人　嘗て相見し人。
○あはで　逢はずに。
○幾月　幾夜の月を。
○こゝろかろく　心かろ〴〵しく上の涙に浮ぶに對する言葉。
○はしたもの　中間男。
○すまひ　相撲。
○名きくより　相撲といふ名を聞くより。
○逢ふ　相撲の手合せすることを云ひかく。
○たえぬ思ひ　絕えぬ火を云ひかく。
○あはれ　あり。
○知らぬ命　明日知らぬはかない命。

ある所にて女房のながき髪を打ちいだして見せければよめる　藤原顯綱朝臣

人しれず思ふ心をかなへなむかみあらはれて見えぬとならば

堀河院の御時艶書合によめる　中納言俊忠

人しれぬおもひありその浦風に波のよるこそいかまほしけれ

かへし　一宮記伊

音にきく高師の浦のあだなみはかけじや袖のぬれもこそすれ

くれには必ずとたのめたりける人のはつかの月出づるまで見えざりければよめる　攝政家堀河

契りおきし人もこずゑの木の閒よりたのめぬ月の影ぞもりくる

心かはりたる人のもとへつかはしける　江侍從

目の前にかはる心をなみだ川ながれてやとも思ひけるかな

國信卿の家の歌合に初戀の心をよめる　源兼昌

今日こそはいはせの杜の下紅葉色に出づれば散りもしぬらめ

雪の朝に出羽辨がもとより歸り侍りけるにかれよりおくりて侍りける　出羽辨

おくりては歸れと思ひし魂（たましひ）の行きさすらひて今朝はなきかな

○かなへなむ　かなへて下さい。
○かみ　髪に神を云ひかく。
○見えぬ　見えた。

○おもひありそ　「思ひ有り」に越中國の「荒磯浦」を云ひかく。
○よる　寄るに夜を云ひかく。
○いかまほしけれ　行きたい。

○音にきく　評判に聞く。
○高師の浦　攝津國。評判の高いといふことを云ひかけてゐる。
○あだなみ　相手の浮氣心のこと
○かけじや　袖にかけまいよ。
○ぬれもこそすれ　「ば」を補ふ。

○人もこずゑ　梢に人も來ずを云ひかく。
○たのめぬ月　あてにしない月。

○ながれてや　行末までや添ひ果てむの意味。

○いはせの杜　大和國生駒郡。「云ふ」を云ひかく。
○しぬらめ　するだらう。一本「しぬらむ」

○おくりてはの歌　君を送つて後は茫然として魂の吾にないのを云ふ。

かへし　大納言經信

冬の夜の雪げの空にいでしかど影よりほかにおくりやはせし

すみかを知らせぬ戀といへる事をよめる　前齋院六條

行方(ゆくへ)なくかき籠むるにぞひきまゆのいとふ心のほどは知らるゝ

よにあらんかぎりは忘れじと契りたりける人の久しう音もせざりければよめる　讀人しらず

人はいさありもやすらむ忘られて訪はれぬ身こそなき心地すれ

寄關戀をよめる　源俊頼朝臣

なこそてふことをば君が言(こと)ぐさを關の名ぞとも思ひけるかな

としごろ物申しける人のたえて音づれざりければつかはしける　讀人しらず

はやくよりあさき心を見てしかばおもひたえにき山川の水

題しらず

もらさばや細谷川のうもれ水かげだに見えぬ戀にしづむと

をとこの今日は方たがへに物へまかるといはせ侍りければつかはしける

君こそは一夜めぐりの神ときけなに逢ふことの方たがふらむ

後朝戀の心を　藤原顯輔朝臣

○影よりほかにおくりやはせし　自分の影より外に自分を見送りしたらうかい。「や」は反語。
○知らせぬ　一本「知らせざる」
○ひきまゆ　一匹の蠶で一の繭を作つたもの。次のいと(絲)を云ひ起す序。
○よにあらんかぎりは　世に生存する限りは。
○人はいさ　人はどうだか知らないが。
○なこそ　陸奥國の勿來關を來るなよの意味の勿來に云ひかく。
○てふ　一本「といふ」
○君が言ぐさ　君の言ひぐさ。
○はやくより　疾てより。
○もらさばや　洩らしたいな。
○をとこ　夫。
○方たがへ　太白神の塞がる方を避けて他方へ行き違へること。
○一夜めぐりの神　太白神のこと

梓弓かへるあしたのおもひには引きくらぶべきことのなきかな

人のもとよりせめて袖ぬらすさまを見せばやなどいはせたりければよめる　皇后宮少將

うらむともみるめもあらじ物ゆゑになにかは蜑の袖ぬらすらむ

旅宿戀といへることをよめる　修理大夫顯季

戀しさをいも知るらめや旅寢して山のしづくに袖ぬらすとは

人の夕方まうでこむと申したりければよめる　一宮紀伊

恨むなよかげ見えがたき夕月夜おぼろげならぬ雲間まつ身ぞ

藏人にて侍りける頃内をわりなく出でて女のもとにまかりてよめる　藤原永實

三日月のおぼろげならぬ戀しさにわれてぞ出づる雲の上より

周防内侍したしくなりて後ゆめ〳〵この事もらすなと申しければよめる　源信宗朝臣

逢はぬ夜はまどろむ程のあらばこそ夢にもみきと人にかたらめ

なき名たつといへる事をよめる　左京大夫經忠

人しれぬなき名はたてど唐衣かさねぬ袖はなほぞつゆけき

○梓弓　枕詞。
○事の　一本「物の」
○うらむ　浦見を云ひかく。
○いも知るらめや　妹(愛妻)は知るだらうか。
○まうでこむ　參りませう。
○夕月夜　夕方の月。
○内　内裏。宮中。
○わりなく　無理に。
○われてぞ出づる　「わりなく出た」に「雲が破れて」を云ひかく。
○雲の上　内裏(雲上)を云ひかく。
○ゆめ〳〵　愼め〳〵。決して決して。
○逢はぬ夜はの歌　君に逢はない夜は寐られないがもしまどろむ時間があるならば夢にでも君を見たと人に語らうものを。
○唐衣　「重なる」の序。

人をうらみてよめる　大中臣輔弘女

あぢきなく過ぐる月日ぞ恨めしき逢ひ見しほどを隔つと思へば

三井寺にて人々戀歌よみけるによめる　僧都公圓

つらしとも思はむ人はおもはなむ我なればこそ身をば恨むれ

かたらひける女のもとにまからむなど申しけれどもさはる事ありてまからざりければ五月雨のころおくりて侍りける　讀人しらず

五月雨の空だのめのみ隙(ひま)なくて忘らるゝ名ぞ世にふりぬべき

返し　左兵衞督實能

忘られむ名は世にふらじ五月雨もいかでかしばしをやまざるべき

題しらず　讀人しらず

あま雲のかへしの風の音せぬは思はれじとのこゝろなるべし

足引の山のまに／＼たふれたるからきはひとりふせるなりけり

津の國のまろやは人をあくた河君こそつらき瀬々は見えしか

あふみてふ名は高島にきこゆれどいづらはこゝにくりもとの里

かさとりの山によをふる身にしあれば炭やきもをる我が心かな

み熊野に駒のつまづく青つゞら君こそまろがほだしなりけれ

○あぢきなく　味氣なく。つまらなく。
○逢ひ見し　一本「逢ひ來(こ)し」
○おもはなむ　思つてくれ。
○空だのめ　空だのみ。たのむは古くは下二段活用。
○忘らるゝ　忘れられる。忘るは古くは四段活用。
○ふらじ　降らじ、古らじ。
○をやまざるべき　小止みしまいものか。
○かへしの風　雨雲を吹き返す風
○思はれじ　「晴れじ」を云ひかく
○足引の　山の枕詞。
○からき　枯木、辛(から)き。
○ふせる　一本「寢(ぬ)る夜(よ)。」
○津の國　攝津國。
○まろやは人を云々　まろ(私)は君を倦きるものかい。「や」に反語。「まろやは」に丸屋を云ひかく。あくた河は地名。
○あふみてふの歌　近江—逢ふ見名は高し、高島、來る—栗本。
○かさとりの山　山城國宇治郡。
○炭やき　戀ひ焦れる事を云ひ含む。

こりつむる歎きを如何にせよとてか君にあふごの一筋もなき

あふごなきものとしる〳〵何にかは歎きを山とこりはつむらむ

疎ましや木の下陰のわすれ水いくらの人のかげを見つらむ

謀るめる言のよきのみ多けれど空歎きをばこるにやあるらむ

逢ふことの今はかたみのめをあらみもりて流れむ名こそをしけれ

逢ふ事はかたねぶりなる磯額(いそびたひ)ひねりふすともかひやなからむ

近江にか有りといふなるかれいひ山君は越えけり人とねくさし

逢ふ事のかた野に今は成りぬれば思ふがりのみ行くにやあるらむ

あふことはながめふる屋の板廂(いたびさし)さすがにかけて年のへぬらむ

かしがまし山の下ゆくさゝれ水あなかま我もおもふ心あり

ぬすびとといふもことわりさ夜中に君が心をとりにきたれば

はなうるしこやぬる人のなかりけるあなはらぐろの君がこゝろや

寄石戀といへる事をよめる　　前齋院六條

逢ふことをとふ石神のつれなきにわが心のみうごきぬるかな

攝政左大臣家にて戀のこゝろをよめる　　源　雅　光

數ならぬ身をうぢ川のはし〳〵といはれながらも戀ひ渡るかな

○こりつむる　伐り積む。
○あふご　朸、逢ふ期。
○山と　一本「いたく」
○言のよき　好言—斧(よき)。
○歎き　「き」に木を云ひかく。
○かたみ　難み—籠(かたみ)。
○めをあらみ　籠の目が粗いので
○ひねり　一本「ねぶり」
○かれいひ山　干飯の腐つたのを君が人と寢たと見えると云ひかく
○かた野　河内國の交野に逢ふ事の難いを云ひかく。
○思ふがり　思ふ人の許に。がりに狩を云ひかく。
○ながめふる　長雨降る—詠(なが)め經る。
○かしがまし　やかましい。
○さゝれ水　さら〳〵音立てる水のやうに君ばかりさう云ふが。
○あなかま　あゝやかましい。
○ぬる　寢る、漆を塗る。
○はらぐろの　腹ぎたない。
○はし〳〵　橋々—端(はし)たない。

戀歌十首人々よみけるに來不留といふ事をよめる　修理大夫顯季

玉津島きしうつ波のたちかへりせな出でましぬなごりひさしも

戀の歌とてよめる　春宮大夫公實

逢ふことは舟人よわみ漕ぐ舟のみをさかのぼる心地こそすれ

顯仲卿母

こゝろからつきなき戀をせざりせば逢はでやみには迷はざらまし

見かはしながら恨めしかりける人によみかけける　内大臣家小大進

かくばかり戀の病はおもけれど目にかけさげてあはぬ君かな

攝政左大臣家にて時々あへりといへる事をよめる　源顯國朝臣

我が戀はしづのしけ絲すぢよわみたえ間は多くくるはすくなし

戀の歌人々よみけるによめる　源俊頼朝臣

淺ましやこは何事のさまぞとよ戀せよとてもうまれざりけり

寄夢戀をよめる　源行宗朝臣

つらかりし心ならひに逢ひみてもなほ夢かとぞうたがはれける

俊忠卿の家にて戀の歌十首人々よみけるにおとしめてあはずといへる事をよめる　源俊頼朝臣

〇せな　夫。
〇ひさしも　「も」は感動の助詞。一本「さびしも」

〇よわみ　弱くて。
〇みを　水脈。

〇つきなき　「月無き」を云ひかく
〇逢はでやみに　逢はずに暗に。

〇目にかけさげて　私を見下げて
ー秤目にかけ下げて。
〇あへり　一本「逢戀」

〇しづ　賤者。
〇しけ絲　繭の外面から取つた悪い絲。
〇すぢよわみ　絲筋が弱いので。「しづ」からこゝまでは序。
〇くる　絲を操るー來る。
〇何事のさまぞとよ　何といふざまだ。

〇つらかりしの歌　この歌は既に卷七の戀上の中に、「後朝の心をよめる」と題して見えた。

奇（あや）しきも嬉しかりけりおとしむる其の言の葉にかゝると思へば

○其の言の葉に云々　その貴方の言葉に私の名がかゝると思ふと。

金葉和歌集　卷第九

雜部上

むかし道方卿に具して筑紫にまかりて安樂寺にまゐりて見侍りけるみぎりの梅の我が任にまゐりてみれば木のすがたはおなじさまにて花の老木になりて所々さきたるを見てよめる　　大納言經信

神垣にむかしわが見しうめの花ともに老木となりにけるかな

山家鶯といへる事を人々によませ侍りけるついでに　　攝政左大臣

山里もうきよのなかを離れねば谷の鶯ねをのみぞなく

圓宗寺の花を御覽じて後三條院の御事などおぼしいでてよませ給へりける　　三宮

植ゑおきし君もなき世に年へたる花はわが身のこゝちこそすれ

花見御幸を見て妹の內侍のもとに遣はしける　　權僧正永緣

行末のためしと今日をおもふとも今いくとせか人にかたらむ

かへし　　內侍

○具して　伴つて。
○安樂寺　筑前國太宰府にあつて天滿宮とも云ふ。

○ともに　梅が我が身と共に。この時作者經信は七十九歲。

○ねをのみぞなく　泣いてばかり居る。

○今いくとせか云々　作者永緣は旣に老人なので。

いくとせも君ぞかたらむつもりゐて面白かりし花のみゆきを　　僧正行尊

大峯にておもひもかけず櫻の花の咲きたりけるを見てよめる

もろともにあはれとおもへ山櫻はなより外に知る人もなし

堀河院の御時殿上人あまたぐして花見ありきけるに仁和寺に行宗朝臣ありと聞きて懷紙やあるとたづねて侍りければつかはすとてうへに書きつけ侍りける歌　　源行宗朝臣

いくとせにわれなりぬらむ諸人の花みる春をよそに聞きつゝ

山ざとに人々まかりて花の歌よみけるによめる　　源定信

みな人はよしののやまの櫻花をりしらぬ身や谷のうもれ木

後三條院かくれさせおはしまして後又のとしの春さかりなる花をみてよめる　　右近將曹秦兼房

こぞみしに色もかはらず咲きにけり花こそものは思はざりけれ

つかさめしの頃よろづにうらやましき事のみ聞えければよめる　　藤原顯仲朝臣

としふれど春にしられぬ埋木は花のみやこに住むかひぞなき

藏人おりて臨時祭の陪從(べいじう)し侍りけるに右中辨伊家が許につかはしける　　藤原惟信朝臣

○いくとせも　一本「いくとせか」
○みゆき　御幸―み雪。
○大峯　大和國吉野郡。
○懷紙やある　懷紙（歌を認めるに用ゐた紙）があるか。
○うへに　一本「はしに」
○をりしらぬ　折り知らぬ―折（時節）知らぬ。
○又のとし　翌年。
○こぞみしに　去年見たのと。
○つかさめし　毎年秋に行はれた京都在勤の諸役人（京官）の任官式
○よろづにうらやましき事　他人の昇進について。
○かひ　峽(かひ)―效(かひ)。
○臨時祭　十一月下の酉の日に行はれた山城國賀茂神社の祭典。四月の恆例の祭に對して云ふ。

山吹もおなじかざしの花なれどくもゐの櫻なほぞこひしき

隆家卿太宰帥に二たびなりて後のたび香椎御社にまゐりたりけるに神主木のもとの杉の葉を折りて帥のかうぶりにさすとてよめる　神主大膳武忠

千早振かしひの宮のすぎの葉をふたゝびかざすわが君ぞ君

源心座主になりてはじめて山にのぼりたりけるにやすみたる所にて歌よめと申しければよめる　良暹法師

年をへてかよふ山路はかはらねど今日はさかゆく心地こそすれ

藤原基清が藏人にてかうぶりたまはりておりにければ又の日つかはしける　藤原家綱

思ひかね今朝はそらをやながむらむ雲のかよひぢ霞へだてて

一品宮天王寺にまゐらせ給ひて日頃御念佛せさせ給ひけるに御ともの人人住吉にまゐりて歌よみけるによめる　源俊頼朝臣

いくかへり花咲きぬらむ住吉の松もかみ代のものとこそ聞け

田家老翁といへる事をよめる　中納言基長

ますらをは山田の庵に老いにけり今いく秋にあはむとすらむ

仁和寺にすませ給ひけるころいつまでさてはなど都より人のたづね申し

○山吹も　臨時祭に陪從は山吹、舞人は櫻、使は藤の挿頭花であつた。

○かうぶり　冠。

○千早振　神に關する枕詞。

○座主　天台座主。天台宗比叡山延暦寺の貫主。
○山　比叡山。

○さかゆく　坂行く―榮行く。

○かうぶり　位。

○天王寺　攝津國の四天王寺。

○いつまでさては　いつまでさうしていらつしやるのか。

たりければよませ給へる　　三宮

かくてしもえぞ住むまじき山里のほそ谷川の心ぼそさに

大峯の笙の岩やにてよめる　　僧正行尊

草の庵をなに露けしとおもひけむ漏らぬいはやも袖はぬれけり

良暹法師をうらむる事ありけるころむつき一日にまうできて又久しう見えざりければいひ遣はしける　　律師慶範

春の來しその日つらゝはとけにしをまた何事にとゞこほるらむ

對山待月といへる事をよめる　　藤原正季

このよには山の端出づる月をのみ待つことにてもやみぬべきかな

山家にて有明の月を見てよめる　　僧正行尊

木の間もる片われ月のほのかにも誰か我が身を思ひ出づべき

山寺に月のあかゝりけるに經のたふときを聞きて涙の落ちければよめる　　平康貞母

いかでかは袂に月のやどらましひかり待ちとる涙ならずば

宇治前太政大臣時の歌よみどもに月の歌よませけるにもれて公實卿のもとにつかはしける　　源師光

○かくてしも　一本「かくてのみ」

○笙の岩や　大和國吉野郡。

○むつき　正月。

○とゞこほるらむ　水の停滯するこゝに云ひかけてゐる。

○このよ　此の夜—此の世。

○木の間もる片われ月の　次の「ほのかに」を云ひ起す序。

○いかでかはの歌　涙のお蔭で月が袂に宿る有り難さを述べたもの

○もれて　一本「もれにければ」

かすが山みねつゞき照る月かげにしられぬたにの松もありけり　　橘　能　元

僧都賴基光明山にこもりぬと聞きてつかはしける

うらやまし憂世を出でていかばかり限なき峯の月を見るらむ　　僧　都　賴　基

かへし

もろともに西へやゆくと月影のくまなき峯をたづねてぞこし

郁芳門院伊勢におはしましける時あからさまに下りけるにすゞか川を渡りける時よめる　　六條右大臣北の方

早くよりたのみわたりしすゞか川おもふことなる音ぞきこゆる

源仲正がむすめ皇后宮に初めて參りたりけるに琴ひくと聞かせ給ひてひかせさせ給ひければつゝましながらひきならしけるを聞きて口ずさびのやうにていひかけける　　攝　津

琴の音や松ふく風に通ふらむ千世のためしにひきつべきかな

かへし　　美　濃

うれしくも秋のみやまの松かぜにうひことのねの通ひけるかな

月のあかかりける夜人の琴ひくを聞きてよめる　　內大臣家越後

琴の音は月の影にもかよへばや空にしらべの澄みのぼるらむ

○かすが山　春日明神は藤原氏の祖神なので、宇治前太政大臣藤原賴通を春日山に照る月に譬ふ。○たにの松　歌會に召されなかつた師光自身に譬ふ。○限なき峯　光明山といふ名につけて云ふ。

○西へや行く　西へゆくのか。佛說に西方に極樂淨土があるとされるので。○こし　來し。一本「見し」

○早くよりたのみわたりし　早くから願をかけて來た。○なる　鳴る—成る(成就す)

○秋のみやま　后宮を秋の宮といふので。○うひことのね　初琴の音。

伊勢國の二見浦にてよめる　大中臣輔弘

玉くしげ二見の浦のかひしげみまきゑに見ゆるまつのむらだち

宇治前太政大臣布引の瀧見にまかりたりけるともにまかりてよめる　大納言經信

白雲とよそに見つればあしびきの山もとゞろに落つる瀧つ瀬

讀人しらず

天の川これやながれの末ならむ空より落つるぬのびきの瀧

選子内親王いつきにおはしましけるとき女房に物申さむとて忍びてまゐりたりけるに侍（さぶらひ）どもいかなる人ぞなどあらく申してとはせ侍りければたゝうがみに書きておかせ侍りける　藤原惟規

神垣は木の丸どのにあらねどもなのりをせねば人とがめけり

郁芳門院伊勢におはしましける時あからさまに下りて侍りける時思ひがけず鐘の聲のほのかにきこえければよめる　六條右大臣北の方

神垣のあたりと思ふにゆふだすき思ひもかけぬかねの聲かな

前齋宮伊勢におはしましける時祭頭保俊御まつりの程とのゐ物のれうにきぬをかりて程過ぎてこれを忘れて今まで返さざりける事など申したり

○玉くしげ　二見の枕詞。櫛笥の蓋とかゝる。
○かひしげみ　貝が繁くあるので
○まきゑ　蒔繪に地名のまきゑを云ひかく。
○あしびきの　山の枕詞。
○山もとゞろに　山も響き動いて
○ながれの末　末流。
○いつき　賀茂大神に奉仕する未婚の皇女。齋院。
○あらく申して　一本「あらくましげに」
○たゝうがみ　疊紙。
○木の丸どの　古歌に「朝倉や木の丸殿に我が居れば名告りをしつつ行くは誰が子ぞ」とあるのによる。
○あからさまに　一寸。假初に。
○神垣のの歌　鐘は社になく寺にあるものだから。
○ゆふだすき　木綿製の襷。
○齋宮　伊勢大神に奉仕する未婚の皇女。
○祭頭　齋宮祭頭。
○とのゐ物のれうに　宿直の夜の物のために。

ける返事にいひつかはしける　前齋宮内侍

返さじとかねて知りにきから衣こひしかるべき我が身ならねば

和泉式部保昌に具して丹後國に侍りけるころ都に歌合のありけるに小式部内侍歌よみにとられて侍りけるを中納言定頼つぼねのかたにまうできて歌はいかゞせさせ給ふ丹後へ人はつかはしてけむや使はまうでこずやいかに心もとなくおぼすらむなどたはぶれて立ちけるをひきとゞめてよめる　小式部内侍

大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ずあまのはしだて

百首歌の中に夢の心をよめる　修理大夫顯季

うたゝねの夢なかりせば別れにし昔の人をまた見ましやは

百首歌に旅の心をよめる　參議師頼

さ夜中に思へばかなしみちのくのあさかの沼に旅寢してけり

この集撰じける時歌こはれておくるとてよめる　藤原顯輔朝臣

家の風吹かぬものゆゑはつかしの森の言の葉ちらしはてつる

しほ湯あみに西の海のかたへまかりたりけるにみるといふ物をみづからつみて都なるむすめの許へつかはすとて　平康貞女

○返さじとの歌　古今集に「いとせめて戀しき時はうば玉の夜の衣を返してぞ寢る」とあるのによる。「返して」に「返卻して」を云ひかく

○大江山、いく野　共に天橋立への途。生野に行くを云ひかく。
○ふみも　踏みも、文も。
○見ず　一本「見ぬ」
○あまのはしだて　丹後國。
○また見ましや　一本「またも見ましや」
○旅の心　一本「宿の心」

○この集　金葉和歌集。顯輔は和歌の六條家の祖。
○はつかし　恥かし―羽束師の森(山城國乙訓郡)
○あみに　浴びに。
○みる　海松。
○つみて　一本「とりて」

磯菜つむ入江の波のたちかへり君みるまでのいのちともがな

かへし　　むすめ

長居するあまのしわざとみるからに袖のうらにもみつ涙かな

和泉式部石山にまゐりけるに大津にとまりて夜ふけて聞きければ人のけはひあまたしてのゝじりけるを尋ねければあやしの賤の女がよねしらげ侍るなりと申しけるを聞きてよめる　　和泉式部

鷺のゐる松原いかにさわぐらむしらげばうたて里とよみけり

公實卿のもとにまかりたりけるに侍らざりければ出居におきたりける小弓をとりて侍(さぶらひ)にこれはおろしつとふれて出でにけりかの卿かへりて弓をたづねければ時房まうできてとりつと申しければおどろきて院の御弓ぞとくかへせといひにつかはしければ御弓につけて遣はしける歌　　藤原時房

梓弓さこそはそりの高からめはる程もなくかへるべしやは

男かれ〴〵になりて程へてたがひにわすれて後人にしたしくなりにけりなど申すと聞きてなげきける人にかはりてよめる　　春宮大夫公實

無き名にぞ人のつらさは知られける忘られしには身をぞ恨みし

大貳資通忍びて物申しけるを程もなくさぞなど人の申しければよめる

○いのちともがな　命でありたいな。
○うら　裏・浦。
○石山　近江國滋賀郡。
○大津　同上。
○のゝじりけるを　云ひ騷ぐのを
○賤の女　一本「下人の女」
○しらげ　米を精(しら)げ、白毛。
○出居　應接間。
○これはおろしつとふれて　この小弓は申し受けたと云ひふれて。
○さこそはそりの高からめ　さぞ反りが高からうが。
○はる　張る。
○無き名　無實の浮名。
○さぞ　さうだらう。

いかにせむ山田にかこふ垣柴のしばしのまだに隱れなき身を　相摸

肥後内侍をとこに忘られて歎きけるを御覽じてよませ給ひける　堀河院御製

忘られてなげく袂をみるからにさもあらぬ袖のしをれぬるかな

水車をみてよめる　僧正行尊

早き瀨にたえぬばかりぞ水車われもうきよにめぐるとを知れ

れいならぬ事ありてわづらひけるころ上東門院に柑子たてまつるとて人にかかせて奉りける　堀河右大臣

つかへつるこのみの程を數ふればあはれ梢になりにけるかな

御かへし　上東門院

すぎ來ける月日の數もしられつゝこのみを見るも哀れなるかな

僧正行尊まうできてよるとゞまりてつとめて歸りけるとて獨鈷を忘れたりける返しつかはすとてよめる　大納言宗通

草枕さこそは旅のとこならめ今朝しもおきてかへるべしやは

をとこ心かはりてまうで來ず成りにける後おきたりけるゑぶくろをとりにおこせたりければ書きつけてつかはしける　櫻井尼

○まだに　一本「ほども」
○をとこ　夫。
○たえぬ　一本「たたぬ。」
○れいならぬ事　不例のこと。病氣
○このみ　此の身、木の實。
○なり　成り―生り。
○つとめて　翌朝。
○獨鈷　佛具の名。
○草枕　旅の枕詞。
○さこそは旅の　一本「さこそ旅寢の」
○とこ　獨鈷―牀。
○ゑぶくろ　旅行者が食物入れて携帶した袋。

のきばうつ眞白の鷹の餌袋にをぎゑもささでかへしつるかな

後冷泉院の御時近江國より白き鳥を奉りたりけるをかくして人にも見せさせ給はざりければ女房達ゆかしがり申しければおの〳〵歌よみて奉れさてよくよみたらむ人にみせむとおほせごとありければつかうまつれる

少　将　内　侍

たぐひなく世におもしろき鳥なればゆかしからずとたれか思はむ

甲斐國よりのぼりてをばなる人のもとにありけるがはかなき事にてそのをばのなありそとておひいだしたりければよめる　讀　人　し　ら　ず

鳥の子のまだ卵(かひ)ながらあらませばをばといふ物はおひ出でざらまし

百首歌のなかに山家をよめる　修理大夫顯季

蜩(ひぐらし)の聲ばかりするしばの戸は入り日のさすにまかせてぞ見る

題しらず　藤原仲眞朝臣

年ふれば我がいたゞきにおく霜を草のうへとも思ひけるかな

殿上おり侍りけるころ人の殿上しけるを聞きてよめる　源　行　宗　朝　臣

うらやまし雲のかけはしたち返りふたゝびのぼる道をしらばや

殿上申しける頃ゆるされざりければよめる　平　忠　盛　朝　臣

○をぎゑ　鷹を招き誘ふ餌。
○ささで　ささずして。ささずとはをぎ餌を餌袋に入れること。
○ゆかしがり　見たがり。
○ゆかしからず　鳥を云ひかく。
○はかなき事にて　一寸した事で
○なありそ　家にあるな。
○卵　甲斐を云ひかく。
○をば　尾羽―伯母。
○おひ出で　生ひ出で―追ひ出でおひに甥(自分)をも云ひかけてゐる。
○いたゞきにおく霜　白髪。
○殿上　宮中の殿上に昇ることを許されること。
○しらばや　知りたい。

思ひきやくもゐの月をよそに見て心のやみにまどふべしとは

かたらひ侍りける人のかれ〴〵になりければこと人につきてつくしの方へまかりなむとしけるを聞きて男のもとよりまかるまじきよしを申したりければいひ遣はしける　　内大臣家小大進

身のうさもとふ一もじにせかれつゝ心つくしの道はとまりぬ

男のなかりける夜こと人をつぼねに入れたりけるにもとの男まうできあひたりければさわぎてかたはらのつぼねの壁のくづれよりくゞりてにがしやりての又の日その逃したるつぼねの主のがりよべの壁こそうれしかりしなどいひに遣はしたればよめる　　讀人しらず

寐ぬるよのかべ騷がしく見えしかど我が違(ちが)ふれば事なかりけり

源頼家がもの申しける人の五節に出で侍りけるを聞きてまことにやあまたかさねしをみ衣とよのあかりのくもりなきよにとよみて遣はしたりければかへしによめる　　源光綱母

日影にはなき名立ちけりをみ衣きてみよとこそいふべかりけれ

經信卿に具してつくしに侍りけるころ肥後守盛房野太刀のよきあり見せむなど申して程へにければいかになどたづねられて忘れたるよしを申し

○くもゐ　雲居。宮中。
○こと人　別の人。
○つくし　筑紫。
○まかるまじきよし　筑紫へ下るなとの趣。
○うさ　憂さ—宇佐。
○とふ一もじ　問ふ一文字に門司を云ひ懸く。
○心つくし　心盡し—筑紫。
○つぼね　部屋。
○主のがり　主の許に。
○よべ　昨夜。
○かべ　壁—夢(かべ)。夢見の惡いのは凶事とされてゐた。
○五節　十一月豐明の節會などに行はれた童女の舞樂。
○をみ衣　小忌衣。神事や節會の時に著用する齋服。
○日影　陰事—日陰の蔓(かづら)。
○きて　著て—來て。
○侍りけるころ　一本「まかりたるに」
○いかになどたづねられて　一本「いかにと驚かしたりければ」

しければよめる　　源俊頼朝臣

なき陰に懸けける太刀もある物をさやつかのまに忘れ果てぬる

大峯の神仙といへる所に久しう侍りければ同行どもみなかぎり有りてまかりにければ心細さによめる　　僧正行尊

見し人はひとり我が身にそはねども後れぬものは涙なりけり

たゞならぬ人のもてかくしてありけるに子をうみてけるが許より熟(う)みたる梅をおこせたりければよめる　　讀人しらず

葉隠れにつはると見えし程もなくこはうみ梅になりにけるかな

堀河院の御時中宮の女房たちを亮(すけ)仲實が紀伊守にて侍りける時若浦(わかのうら)みせむとてさそひければ許多(あまた)まかりけるにまからでつかはしける　　前中宮甲斐

人なみに心ばかりは立ちそひて誘はぬわかのうらみをぞする

保實卿ほかにうつりて後かのもとの所につねに見ける鏡をとがせ侍りければくらきよしを申しけるを聞きてよめる　　藤原實信母

ことわりや曇ればこそはます鏡うつりし影もみえずなるらめ

月の入りぬるを見てよめる　　源師賢朝臣

西へゆくこゝろはたれも有るものをひとりな入りそ山のはの月

○なき陰に懸けける太刀　史記に呉の季札が使に行つた途で徐君が季札の劒を欲しさうにしたので、季札は歸途贈らうとしたが、既に徐君は死去してゐたので、その墓に懸けて去つたと見える故事による。

○さやつかのま　さやうに少しの間に。鞘ー柄を云ひ懸く。

○つはる　萌す意味と艱阻する意味とを云ひ懸く。

○こはうみ梅　此は熟梅ー子は生み。

○若浦　紀伊國海草郡和歌の浦。

○人なみに　人竝みー波に。

○うらみ　恨みー浦見。

○ます鏡　眞澄の鏡。

○うつりし影　心の移つた人の影　一本「うつれる影」

○みえずなるらめ　一本「見えずなりにき」

○ひとりな入りそ　ひとりで入るな。

○山のはの月　一本「秋の夜の月」

爲仲朝臣陸奥守にて侍りける時延任しつと聞きてつかはしける　藤原隆資

まつ我はあはれ八十(やそぢ)になりぬるをあふくま川の遠ざかりぬる

したしき人の春日にまゐりて鹿のありつるよしなど申しけるを聞きてよめる　藤原實光朝臣

三笠山神のしるしのいちじるくしかありけると聞くぞうれしき

屏風のゑにしかすがのわたり行く人たちわづらふかたかける所をよめる　藤原家經朝臣

ゆく人も立ちぞわづらふしかすがのわたりや旅の泊りなるらむ

題しらず　讀人しらず

身のうさを思ひしとけば冬の夜もとゞこほらぬは涙なりけり

皇后宮美濃

夜な〱はまどろまでのみ有明のつきせずものを思ふころかな

上陽人苦最多少思苦老亦苦といへる心をよめる　源雅光

昔にもあらぬ姿になり行けどなげきのみこそおもがはりせね

青黛畫眉眉細長といへる事をよめる　源俊頼朝臣

さりともとかくまゆずみのいたづらに心細くも老いにけるかな

○延任　國司の任期は五年なのを成績がいいと任期を延べて治めさせたこと。
○あふくま川の　阿武隈川に逢ふを云ひ懸く。「の」一本「ぞ」
○春日　大和國の春日神社。
○しかあり　さやうにありを鹿ありに云ひ懸く。
○しかすがのわたり　三河國。然すが(さすが)の意味を云ひ懸く。
○思ひしとけば　了解すると。
○つき　盡き—月。
○上陽人苦最多　白氏文集新樂府の詞で、上陽人とは十六で入内したが楊貴妃に嫉まれて上陽宮に押籠められて六十歳まで物思ひ暮したといふ。
○おもがはりせね　昔と同じに面變りしない。
○青黛畫眉眉細長　これも同じ樂府の詞。
○さりとも　さうあつても。上陽宮に押籠められても。

年ひさしく修行しありきて熊野にてげんくらべしけるを秋家卿まゐりあひて見けるにことの外にやせおとろへて姿もあやしげにやつれたりければ見忘れてかたはらなる僧にいかなる人ぞことのほかにしるしありけなる人かなど申しけるを聞きてつかはしける

僧正行尊

こゝろこそ世をば捨てしかまぼろしの姿も人に忘られにけり

大中臣輔弘祭主にもあらざりけるころ祭主になさせ給へと大神宮に申しこひて寐いりたりける夜の夢にまくらがみに知らぬ人の立ちてよみかけける歌

草の葉のなびくもまたず露の身のおき所なくなげくころかな

六條右大臣六條の家つくりていづみなど掘りてとくわたりて見よなど申したりければよめる

顯雅卿母

千年まですまむ泉の底きよみかげならべむと思ひしもせじ

宇治平等院の主になりて宇治にすみつきて比叡の山の方をながめやりてよめる

忠快法師

宇治川のそこのみくづとなりながらなほ雲かゝる山ぞ戀しき

家を人にはなちて立つとて柱にかきつけ侍りける

周防内侍

○げんくらべ　験競べ。
○まぼろしの　幻のやうな。
○祭主　伊勢大神宮の神官の長官
○大神宮　伊勢大神宮。
○草の葉の　「の」一本「に」
○またず　一本「知らで」
○底きよみ　一本「底によも」
○みくづ　水屑。
○はなちて立つ　手離してそこを立つ。

住みわびて我さへのきの忍ぶ草しのぶかた〳〵しげき宿かな

賀茂成助に初めてあひてもの申しけるついでにかはらけとりてよめる　津守國基

聞きわたるみたらし川の水きよみそこの心をけふぞみるべき

かへし　賀茂成助

住吉のまつかひありて今日よりはなにはの事も知らすばかりぞ

皇后宮弘徽殿におはしましける頃俊頼西面のほそどのにて立ちながら人に物申し侍るに夜の更けゆくまゝにくるしかりければ土にゐたりけるをみて疊をしかせばやと女の申しければ石疊しかれて侍るめりと申すを聞きてよめる　皇后宮大貳

石だゝみありけるものを君にまたしくものなしと思ひけるかな

大原の行蓮聖人がもとへ小袖つかはすとてよめる　天台座主仁覺

憐まむと思ふ心はひろけれどはぐゝむ袖のせばくもあるかな

百首歌の中に述懷の心をよめる　源俊頼朝臣

世の中はうき身にそへる影なれやおもひすつれど離れざりけり

男につきて越前國にまかりたりけるに男心かはりて常にはしたなければ

○のき　退き―軒。

○みたらし川　山城國。

○まつ　松―待つ。
○なにはの事　「難波の事」に「何事」を云ひ懸く。
○ほそどの　細殿。廊の一つ。

○侍るめり　あるやうです。

○しくものなし　「敷く物」に「君に及くものなし」を云ひかく。

○憐まむと　一本「憐ぶと」
○はぐゝむ　庇ふ。
○せばく　狹く。

○影なれや　影であるからか。

○男　夫。

都なる親のもとへいひつかはしける　讀人しらず

うちたのむ人のこゝろはあらち山こしぢくやしき旅にもあるかな

かへし　おや

思ひやる心さへこそくるしけれあらちの山の冬のけしきは

思ふ事侍りける頃よめる　參議師賴

いたづらに過ぐる月日を數ふれば昔をしのぶねぞなかれける

鏡をみるに影のかはりゆくを見てよめる　源師資朝臣

かはり行くかゞみの影をみるからにおいその森の歎きをぞする

前太政大臣家に侍りける女を中將忠宗朝臣と少將顯國とともにかたらひ侍りけるに忠宗にあひにけりその後程もなく忘られけりと聞きて女のがりいひつかはしける　源顯國朝臣

こゆるぎのいそぎて逢ひしかひもなく波よりこずと聞くは誠か

藏人親隆がかうぶり給はりて又の日つかはしける　藤原公敎

雲の上になれにしものを蘆鶴（あしたづ）の逢ふことかたにおりゐぬるかな

堀河院御時源俊重が式部丞申しける申文にそへて頭辨重資がもとへつかはしける　源俊賴朝臣

○あらち山　越前國の荒乳山に、「有らぬ」を云ひ懸く。
○こしぢ　越路に來しを云ひ懸く。
○けしきは　一本「けしきを」

○ねぞなかれける　泣かれることです。

○おいその森　我が身の老いることに近江國の老曾森を云ひ懸く。
○歎き　「き」に「木」をきかす。

○いそぎて　上の句から相模國のこゆるぎの磯を云ひ懸く。
○かひ　貝—效。
○よりこず　寄り來ず。
○かうぶり　冠位。
○逢ふことかたに　逢ふこと難いに潟を云ひ懸く。
○申しける申文　任官を乞ふ申請書。

日のひかりあまねき空のけしきにも我が身一つは雲がくれつゝ

これを奏しければ内侍周防をめしてこれが返しせよとおほせごとありければつかうまつれる

周防内侍

何か思ふ春のあらしに雲晴れてさやけき影はきみぞ見るべき

そのたびなりにけりと云々

○日のひかり　天皇の恵みを喩へ云ふ。

○そのたび　一本「そののち」

金葉和歌集　巻第十

雜部下

公實卿かくれ侍りて後かの家にまかりたりけるに梅花さかりに咲きけるをみて枝にむすびつけて侍りける歌　藤原基俊

むかし見しあるじ顔にも梅が枝の花だにわれに物がたりせよ

かへし　中納言實行

ねにかへる花のすがたの戀しくばたゞこのもとをかたみとは見よ

人々あまた具してはな見ありきてかへりてのち風おこりてふしたりけるに具して花見ける人のもとより何事にかなど尋ねて侍りければつかはしける　平基綱

櫻ゆゑいとひし風の身にしみて花よりさきに散りぬべきかな

後三條院かくれおはしまして後五月五日一品宮の御帳にさうぶふかせ侍りけるに櫻のつくり花のさされたりけるを見てよめる　藤原有祐朝臣

あやめ草ねをのみかくる世の中にをりたがへたるはな櫻かな

○顔にも　一本「顔にて」

○ねにかへる　根に返る。散ること。

○このもと　木の本。

○風おこりて　風邪に冒されて。

○かくれおはしまして　崩御せられて。

○ね　根ー泣(ね)。

○をり　折りー折(時節)。

北の方うせ侍りて後天王寺にまゐりける道にてよめる　六條右大臣

難波江のあしのわかねのしげければ心もゆかぬ船出をぞする

郁芳門院かくれおはしまして又の年の秋知陰がりつかはしける　康資王母

うかりしに秋は盡きぬと思ひしを今年も蟲のねこそなかるれ

かへし　藤原知陰

蟲の音はこの秋しもぞなきまさる別れのとほくなるこゝちして

下﨟にこえられて歎き侍りけるころよめる　源俊頼朝臣

せきもあへぬ涙の川は早けれど身のうき草はながれざりけり

律師實源がもとに知らぬ女房の佛供養せむとてよばせ侍りければまかりて見れば事もかなはずげなる氣色を見てかたのごとく急ぎくやうして立ちける程にすだれの内より女房手づから衣ひとへとまきゑの手箱をさし出したりければ從僧してとらせかへりて見ればしろがねの箱のうちに書きて入れたりける歌　讀人しらず

玉匣(たまくしげ)かけごに塵もすゑざりしふたおやながらなき身とをしれ

大路に子をすてて侍りけるおしくゝみに書きつけ侍りける歌

身にまさる物なかりけりみどり子はやらむ方なく悲しけれども

○北の方　奥方。
○難波江の　一本「難波潟」
○わかね　若根—我が泣ね。
○心もゆかぬ　心もすゝまぬ。
○知陰がり　一本「知信がり」がりは「の許に」
○蟲の　蟲のやうに。
○下﨟にこえられて　地位の低い者に官が越えられて。
○事もかなはずげなる氣色　不如意らしい樣子。
○かけご　箱の縁にかけてその中に嵌め込むやうにした箱の懸子に子を云ひ懸く。
○塵もすゑざりし　自分を大切にした兩親が自分を大切にした意味を含めてゐる。
○ふたおや　兩親に蓋を云ひかく
○おしくゝみ　赤兒に纏うたもの
○かなし　可愛い。

○知綱　一本「基綱」
○知陰　一本「知信」
○あふせ　逢瀬。
○きえにしあわ　先立ち死んだ知綱を指す。
○出家しぬ　一本「出家してけり」
○國より　能登國に國守として赴任してゐる所より。
○聞くからに　聞くにつれて。
○かくれて　一本「うせて」
○たらちめ　母親。
○嘆きをつみて　火葬する木を積みての意味を云ひ懸く。
○おもひの下　火葬の火の下を云ひかく。
○おくれて　先に死なれて。
○その夢をの歌　なまじひに訪へばそれにつけて歎きが增さうとて遠慮した意味。

阿波守知綱におくれ侍りけるころ流されたりける人のゆるされて歸りたりけるを聞きてよめる　藤原知陰母

流れてもあふせありけり涙川きえにしあわを何にたとへむ

心地例ならず侍りけるころ人のもとよりいかゞなど申したりければよめる　讀人しらず

くれ竹のふししづみぬる露の身もとふ言の葉におきぞゐらるゝ

範永朝臣出家しぬと聞きて能登守にてはべりけるころ國よりいひつかはしける　藤原通宗朝臣

外(よそ)ながら世を背きぬと聞くからに越路の空は打ちしぐれつゝ

律師長濟かくれてのち母のそのあつかひをしてありける夜の夢にみえける歌

たらちめの嘆きをつみて我はかくおもひの下になるぞかなしき

顯仲卿女子におくれてなげき侍りけるころ程へてとひにつかはすとてよめる　大藏卿匡

その夢をとはば歎きやまさるとて驚かさでも過ぎにけるかな

從三位藤原賢子れいならぬ事ありてよろづ心ぼそくおぼえけるに人のも

とよりいかゞなど問ひて侍りければよめる　　藤原賢子

古（いにしへ）は月をのみこそながめしに今は日をまつわが身なりけり

身まかりてのち久しうなりにける母を夢にみてよめる　　權僧正永縁

夢にのみむかしの人をあひ見れば覺むるほどこそ別れなりけれ

人のむすめ母のものへまかりたりける程におもき病をしてかくれなむとしける時かきおきて身まかりける歌　　讀人しらず

露の身のきえも果てなば夏草のはは如何にして逢はむとすらむ

小式部内侍うせてのち上東門院より年ごろ賜はりけるきぬを亡きあとにもつかはしけるに小式部内侍とかきつけられたるを見てよめる　　和泉式部

諸共に苔のしたには朽ちずしてうづもれぬ名をみるぞ悲しき

したしき人におくれてわざのことはてて歸り侍りけるによめる　　平忠盛朝臣

今ぞ知るおもひの果ては世の中のうき雲にのみまじるものとは

陽明門院かくれおはしまして後御わざの事果てて又の日雲のたなびけるを見てよめる　　藤原資信

さだめなき世をうき雲ぞあはれなる賴みし君が煙と思へば

白河院の女御かくれ給ひて後かの家の南面の藤の花さかりに咲きたりけ

○日をまつ　死の日を待つ。
○身まかりて　死んで。
○夏草のはは　葉は―母
○年ごろ　長年。
○うづもれぬ名　書きつけて殘りある亡き娘の名。
○おくれて　死なれて。
○わざのこと　葬送のこと。
○うき雲にのみまじるものとは　火葬の煙となつて浮雲に混るものとは今思ひ知つた。
○うき雲　憂き―浮。

るを見てよめる　　僧正行尊

草木までおもひけりとも見ゆるかな松さへ藤の衣きてけり

雅房朝臣重服になりてこもりゐて侍りけるに出羽辨がもとよりとぶらひたりけるをこれがかへしせよと申しければよめる　　橘元任

悲しさのその夕暮のまゝならば有りへて人にとはれましやは

範國朝臣に具して伊豫國にまかりたりけるに正月より三四月までいかにも雨のふらざりければ苗代もせでよろづに祈りさわぎけれどかなはざりければ守能因歌よみて一宮にまゐらせて雨いのれと申しければまゐりていのり申しける歌　　能因法師

天の川なはしろ水にせきくだせあまくだります神ならばかみ

神感ありて大雨ふりて三日三夜やまずと家集に見えたり

心經供養してそのこゝろを人々によませ侍りけるに　　攝政左大臣

色も香もむなしと説ける法なれど祈るしるしはありとこそ聞け

法文のありけるを里なる女房のもとより宮に申さずともしのびてあからさまにとりてなど申したりけるをほの聞きてよませ給ひける　　三宮

見しまゝに我は悟りをえてしかば知らせでとると知らざらめやは

○藤の衣　喪服の藤衣に見做して云ふ。
○きてけり　一本「きたれば」
○重服　重い服忌。
○悲しさの歌　悲しさがその當時のまゝで來たならさくに失せてしまつて御弔問を受けられたであらうかい。
○範國　一本「實國」
○一宮　その國第一の神社。こゝは大山神社。
○あまくだり　天から雨降りーが降り。
○心經　大般若波羅密多心經。
○ありさこそ聞け　有るさ聞く。
○しのびてあからさまにとりて　宮にかくしてちよつさ取つて貸して下さい。
○ほの　ほのかに。
○見しまゝにの歌　自分は法文を見たまゝに悟りを得たのだから自分に知らせないで取るさ知らないだらうや。「や」は反語。

月のあかかりける夜瞻西上人のもとへつかはしける　　僧正行尊

いさぎよき空のけしきを賴むかなわれまどはすな秋の夜の月

例ならぬ事ありける頃いかゞなど思ひつゞけて心細さに　　源行宗朝臣

いかにせむうき世の中にすみがまの果ては煙となりぬべき身を

實範聖人山寺にこもりぬと聞きてつかはしける　　靜嚴法師

心にはいとひはてつと思ふらむあはれいづこも同じうき世を

八月ばかりに月あかかりける夜あみだの聖のとほりけるを呼びよせさせて里なる女房にいひ遣はしける　　選子内親王

あみだ佛ととなふる聲に夢さめて西へかたぶく月をこそみれ

依釋迦遺敎念阿彌陀といふ事をよめる　　皇后宮肥後

敎へおきて入りにし月のなかりせばいかでこゝろを西にかけまし

淸海上人後生を猶おそり思ひてねぶり入りたりけるに枕がみに僧の立ちてよみかけける歌

かくばかりこちてふ風のふくを見てちりの疑ひを殘さずもがな

普賢十願の文に願我臨欲命終時といへる文をよめる　　覺樹法師

命をも罪をも露にたとへけり消えばともにや消えむとすらむ

○いさぎよきの歌　瞻西上人は雲居寺にゐた彌陀である所から、光明遍照の淸淨光を賴むと詠んだ。
○すみがま　炭を燒く竈に、住みを云ひかく。
○煙となりぬべき身　死んで火葬されるべき身。
○いとひはてつ　世を厭ひ果てた
○あはれ　あゝ。
○同じうき世を　山寺に籠つた所で。そこも同じ憂世の中であるものを。
○あみだの聖　彌陀の名號を唱へ步く僧を云ふのか。「聖」一本「上人」
○かたぶく　一本「ながるゝ」
○依釋迦遺敎云々　般舟三昧經に「跋陀和菩薩請釋迦牟尼佛言未來衆生云何得見十方諸佛々敎令念阿彌陀以此佛特與娑婆衆生有緣」とある趣か。
○おそり　恐れ。
○こちてふ　東風といふ。東風は東から西へ吹くので極樂往生の道であるから。
○殘さずもがな　殘さないでくれ
○普賢　普賢菩薩。

衆罪如霜露といへる文をよめる　　覺譽法師

罪はしも露ものこらず消えぬらむ長き夜すがら悔ゆるおもひに

弟子品の心をよめる　　僧正靜圓

吹き返すわしの山風なかりせば衣のうらの玉をみましや

提婆品の心をよめる　　瞻・西上人

法のためになふ薪にことよせてやがてうき世をこりぞはてぬる

龍女成佛をよめる　　皇后宮權大夫師時

けふぞ知るわしの高嶺にてる月を谷川くみし人のかげとは

涌出品の心をよめる　　勝超法師

わたつみの底のもくづと見しものをいかでか空の月となるらむ

不輕品の心をよめる　　權僧正永緣

たらちねは黑髪ながらいかなればこはまゆ白き人となるらむ

藥王品の心をよめる　　覺雅法師

ありがたき法をひろめし聖にぞうち見し人もみちびかれける

懷尋法師

うき身をしわたすと聞けばあま小船のりに心をかけぬ日ぞなき

○衆罪如霜露　普賢觀經に「若欲懺悔者、端坐思實相、衆罪如霜露、慧日能消除。」
○くゆるおもひ　「悔ゆる思ひ」に「燻ゆる火」を云ひかく。
○弟子品　衣裏寶珠の意を。
○わしの山　靈鷲山。佛がこゝで八年間法華經を說いたといふ。
○こり　伐り—懲り。
○谷川くみし人　仙人に仕へた時代の佛。
○龍女成佛　提婆品に見え、法華經の功德で八歲の龍女が成佛したといふ。
○わたつみ　海。
○涌出品　釋尊に四十餘年の佛として無數の菩薩を弟子といふ事に二十五六歲の人が百歲の人を我が子と云ふが如しと云つたといふ趣を。
○不輕品　不輕菩薩は逢ふ人每に輕んぜず禮拜したので皆が欺かれると腹立つて打擲したが遂に菩薩に信從したといふ趣を。
○ありがたき　一本「あひがたき」
○藥王品　一切の衆生を濟ふ功德は渡しに船を得るやうだとある趣を。
○うき身　憂き身—浮き身。
○のり　法(のり)—乘り。

人のもとにて經供養しけるに五百弟子授記品の心を說けるに繫寶珠のことのたふとかりけるよしをよみてかづけものに結びつけて侍りけるを見てかへしによみ侍りける　　權僧正永緣

いかにして衣の玉をしりぬらむ思ひもかけぬ人もあるよに

依他(えた)の八のたとひを人々よみけるに此身如幻といへることをよめる　　懷尋法師

いつをいつと思ひ撓(たゆ)みて陽炎(かげろふ)のかげろふほどの世をすぐすらむ

常住心月輪といへる心をよめる　　澄成法師

よとともに心のうちにすむ月をありと知るこそ晴るゝなりけれ

極樂をおもふといへる事を　　源俊頼朝臣

よもの海の波にたゞよふ水屑(みくづ)をも七重の網にひきなもらしそ

醍醐の舍利會に花のちるを見てよめる　　珍海法師母

けふも猶をしみやせまし法のためちらす花ぞと思ひなさずば

地獄の繪に劒のえだに人のつらぬかれたるを見てよめる　　和泉式部

あさましや劒の枝のたわむまでこは何のみのなれるなるらむ

人のもとに侍りけるに俄にたえいりてうせなむとしければ蔀のもとにか

○かづけもの　贈與品。
○依他の八のたとひ　他に依つて起る性を幻事陽焰夢想影光彩谷響水月變化の八に譬へた。
〔懷尋　一本「懷春」〕
〔常住心月輪　菩提心論に「我見自心形皋月輪。」などと見える語か。〕
○すむ　一本「ある」
○あり　一本「ある」
○事を　一本「心を」
○ひきなもらしそ　引き漏らすなよ。
○をしみやせまし　惜しみするだらうに。
○こは何のみの　一本「いかなるつみの」
○たえいりて　息が絕え入つて。
○蔀　日光や雨を防ぐために設けられた戸。

きいれて大路におきたりけるに草の露のあしにさはる程郭公のなくを聞きていきのしたによめる　　田口重如

草の葉にかどではしたり郭公しでのやま路もかくやつゆけき

かくてつひにおちいるとてよめる

たゆみなく心をかくる彌陀佛（みだほとけ）ひとやりならぬちかひたがふな

障子のゑに天王寺の西門にて法師の船にのりて西ざまに漕ぎはなれて行くかたかける所をよめる　　源俊頼朝臣

阿彌陀佛ととなふる聲をかぢにてや苦しき海を漕ぎはなるらむ

連歌

ゐたりける所の北のかたに聲なまりたる人の物いひけるを聞きて　　永成法師

あづま人のこゑこそ北にきこゆなれ

陸奥國（みちのくに）よりこしにやあるらむ　　律師慶範

もゝぞの花をみて

もゝぞのもゝの花こそ咲きにけれ　　頼經法師

梅津のうめは散りやしぬらむ　　公資朝臣

○さはる程　一本「さはりける程」

○しでのやま　死後死者の越え行く山。

○ちかひ　彌陀自らの誓願。

○障子　襖。

○阿彌陀佛との歌　弘誓の舟に稱名の棹を下して生死の苦海を漕ぎ離れるのだらうの意味。

○連歌　上の句又は下の句に他の人がそのあとをつけて一首の和歌にする遊戯の歌。

○こし　來し—越（越後越前地方の汎稱）

○梅津　山城國桂川の邊。

賀茂の御社にて物つく音のしけるを聞きて

しめの内にきねの音こそきこゆなれ　神主成助

いかなる神のつくにかあるらむ　行重

宇治にて田の中に老いたる男のふしたりけるを見て

春の田にすきいりぬべきおきなかな　僧正源覺

かのみなぐちに水をいればや　宇治入道前太政大臣

日の入るを見て

日の入るはくれなゐにこそ似たりけれ　觀暹法師

あかねさすとも思ひけるかな　平為成

田中に馬のたてるを見て

田にはむ駒はくろにぞありける　永源法師

なはしろの水にはかげと見えつれど　永成法師

かはら屋をみて

かはらやの板ぶきにても見ゆるかな　讀人しらず

つちくれしてや作りそめけむ　助成

しかの島をみて

○きね　杵－宜禰（神主）

○つく　搗く－憑く。

○すきいり　死に入る意味に鋤き入る意味を云ひかく。

○みなぐち　水口に翁の口を云ひかく。

○水をいればや　水を入れて蘇生させたい。

○あかねさす　日の枕詞。染色の茜を差す意味。

○くろ　黒－畔。

○かげ　鹿毛－影。

○つちくれ　土塊（瓦の原料）－土磚（磚は木材）

○しかの島　筑前國糟屋郡の「志加」に「鹿」を云ひかく。一本「つくしのしかの島」

つれなく立てるしかの島かな　　爲助

ゆみはりの月のいるにもおどろかで　　國忠

宇治へまかりけるみちにて日頃雨のふりければ水の出でて賀茂川を男のはかまをぬぎて手にさゝげて渡るをみて

かも川をつるはぎにてもわたるかな　　頼綱朝臣

かり袴をばをしと思ひて　　信綱

あゆを見て

なにあゆるを鮎といふらむ　　讀人しらず

鵜舟にはとりいれし物をおぼつかな　　匡房卿妹

和泉式部がかもにまゐりけるにわらうづに足をくはれて紙をまきたりけるを見て

ちはやぶるかみをばあしにまくものか　　神主忠頼

これをぞしものやしろとはいふ　　和泉式部

源頼光が但馬守にてのぼりける時館の前にけた川といふ川ありかみより船のくだりけるを蔀あくる侍してとはせければ蓼と申すものかりてまかるなりといふを聞きて口すざびにいひける

○ゆみはりの月　月の弓張月に弓を張るを云ひかく。
○いる　月の入る―弓を射る。

○つるはぎ　裾をからげて脛の出たのを云ふ。これに上の鴨（賀茂川）に對して鶴を云ひかく。
○かり袴　借り袴―雁。
○をし　惜し―鴛鴦。

○あゆるを　あやかるのを。

○とりいれし　捕り入れし―鳥入れし。
○おぼつかな　鳥入れたのに魚なのは覺束ない。
○かも　賀茂神社。
○わらうづに足をくはれて　わらぐつに足を摺り損つて。
○ちはやぶる　神の枕詞。
○かみ　神―紙。
○しものやしろ　賀茂神社には上社と下社とあるので足が人體の下の部なのでかけ云ふ。
○のぼりける時　上京した時。

たでかる船のすぐるなりけり　源頼光朝臣

これを連歌に聞きなして

朝まだきからろのおとの聞ゆるは　相摸母

花くぎは散るてふことぞなかりける　讀人しらず

風のまに〳〵うてばなりけり　前太政大臣家ゆふしで

すまひ草といふ草のおほかりけるを引きすてさせけるを見て

ひくにはよわきすまひ草かな　讀人しらず

とる手にははかなくうつる花なれど

鳥を籠に入れ侍りけるが横雨に濡れけるを見て

雨ふればきじもしとゞになりにけり

かさゝぎならばかからましやは

蓑蟲のうめの花咲きたる枝にあるを見て　律師慶暹

うめの花がさきたるみのむし

まへなるわらはのつけける

雨よりは風ふくなとやおもふらむ

鵜の水にうかべるを見て

○たでかる　蓼刈る。

○からろ　唐艪―辛(から)い。

○花くぎ　花釘。

○すまひ草　相撲を云ひかく。

○とる手　相撲の取る手を云ひかく。

○籠に入れ侍りけるが横雨に　一本「軒にさしたりけるが夜雨に」

○しとゞ　しと〳〵と濡れたことに上の雉(きじ)に對して鵐鳥(しとゞ)を云ひかく

○かさゝぎ　鵲に笠を云ひかく。

○かからましやは　斯くあらうかい、雨がかゝらうかい。「や」は反語。

○うめの花がさきたる　梅の花が咲きたる―梅の花笠著たる―古今集卷二十に「青柳を片絲に撚りて鶯の縫ふてふ笠は梅の花笠」

○雨よりは云々　蓑蟲が更に笠を著たのだから雨の心配はないので梅が咲いたのを散らさないやうにと風吹くなと云つてゐるのである

あらうと見れどくろき鳥かな　　頼算法師

さもこそは住の江ならめよとともに　　讀人しらず

瀧の音のよるまさるを聞きて

よるおとすなりたきのしら絲　　讀人しらず

くり返しひるもわくとは見ゆれども

柱をみて

奥なるをもやはしらとはいふ　　成光

見わたせば内にもとをばたててけり　　觀暹法師

七十になるまでつかさもなくて萬にあやしき事を思ひつゞけて

なゝそぢに滿ちぬる潮の濱びさし久しくよにも埋れぬるかな　　源俊頼朝臣

○あらう　あら鵜―洗ふ(?)
○住の江　上の黒きに對して墨を云ひかく。
○よとゝもに　世―夜。
○よるおとすなり　夜音―絲を撚る音。

○くり返し　絲を繰るに云ひ懸く
○ひる　晝―干る。
○わく　絲枠―涌く。

○奥なるをもや　一本「奥なるものや」
○はしら　柱―端。
○と　戸―外。
○つかさ　官職。
○濱びさし　濱廂。これまでは久しくの序。
○よにも　世にも。「殊の外にも」の意味を云ひ懸く。

異本

卷第七

戀歌上

攝政左大臣家にて戀の心をよめる　藤原爲眞朝臣

あふ事のなきをうき田の森に住む呼子鳥こそ我が身なりけれ

賴めて不逢戀　藤原親隆朝臣

戀ひしなで心つくしに今までもたのむればこそいきのまつばら

在水鳥の下夢にだにの上

山の歌合に戀の心を　隆覺法師

身の程を思ひしりぬる事のみやつれなき人のなさけなるらむ

在面影下淺ましや上

戀の心を　琳賢法師

あくといふことを知らばや紅のなみだに染むる袖やかへると

在逢ひ見ての下いつとなく上

卷第八

戀歌下

題しらず　　讀人しらず

いとせめて戀しき時は播磨なる餝摩(しかま)に染むるかちよりぞくる

在逢ふ事の下逢ふ事は上

金葉和歌集終

詞花和歌集

詞花和歌集　巻第一

春

堀河院御時百首歌奉りけるに春たつ心をよめる　　大藏卿匡房

氷りゐし志賀の唐崎うちとけてさゝなみ寄するはるかぜぞ吹く

寛和二年内裏歌合に霞をよめる　　藤原惟成

きのふかも霰ふりしかしがらきのとやまの霞春めきにけり

天徳四年内裏歌合によめる　　平兼盛

ふる里は春めきにけりみよし野のみかきがはらは霞こめたり

はじめて鶯の聲を聞きてよめる　　道命法師

たまさかにわが待ちえたる鶯のはつ音をあやな人や聞くらむ

題しらず　　曾禰好忠

雪消えばゑぐの若菜もつむべきに春さへ晴れぬみ山邊のさと

冷泉院東宮と申しける時百首歌奉りけるによめる　　源重之

春日野に朝鳴く雉のはねおとは雪の消えまにわかな摘めとや

○志賀の唐崎　近江國滋賀郡。

○しがらき　近江國甲賀郡。

○みよし野　「み」は接頭語。
○みかきがはら　大和國。

○あやな　あやなく。つまらなく

○ゑぐ　芹の一種。
○み山邊　「み」は接頭語。
○春日野にの歌　雪が消えると雉が鳴くものだから、それは雪の消えた間に若菜をつめと云ふのかの意味。

鷹司殿の七十賀の屛風に子の日したるかたかきたる所によめる　赤染衞門

よろづ代のためしに君がひかるれば子の日の松もうらやみやせむ

題しらず　新院御製

子の日すと春の野毎に尋ぬれば松にひかるゝ心地こそすれ

梅花遠薫といふ心を　源時綱

吹きくれば香をなつかしみ梅の花ちらさぬほどの春風もがな

梅花をよめる　右兵衞督公行

梅のはな匂ひをみちのしるべにてあるじも知らぬ宿に來にけり

題しらず　俊惠法師

まこも草つのぐみわたる澤邊にはつながぬ駒も放れざりけり

藤原盛經

とりつなぐ人もなき野の春ごまは霞にのみやたなびかるらむ

僧都覺雅

もえ出づる草葉のみかはをざゝはら駒のけしきも春めきにけり

天德四年內裏歌合に柳をよめる　平兼盛

佐保姬のいとそめかくる青柳を吹きなみだりそ春のやまかぜ

○ひかるれば　君が長壽の例に引かれるので。子の日の小松引きに思ひよせてかう云ふ。

○なつかしみ　懷かしいので。
○もがな　「もが」は願望。「な」は感動の助詞。

○つのぐみわたる　ずつと芽ぐみ渡る。

○草葉のみかは　草葉のみかい。
○駒のけしき　馬の樣子。春になると駒もいさむからである。
○佐保姬　大和國佐保山の女神で龍田姬に對して春の女神と信じられた。
○吹きなみだりそ　吹き亂すなよ

贈左大臣の家の歌合によめる　　　原　季遠

いかなれば冰はとくる春風にむすぼほるらむ青やぎのいと

古鄕の柳をよめる　　　源　道濟

ふる里のみかきの柳はる〴〵と誰がそめかけしあさみどりぞも

題しらず　　　源　頼政

みやま木のその梢とも見えざりし櫻ははなにあらはれにけり

京極前太政大臣の家に歌合し侍りけるによめる　　　康資王母

くれなゐのうす花ざくら匂はずばみなしら雲と見てやすぎまし

この歌を判者大納言經信くれなゐの櫻は詩に作れども歌にはよみたる事なむなきと申しければあしたにかの康資王母のもとにつかはしける　　　京極前太政大臣

しら雲はたちへだつれど紅のうすはな櫻こゝろにぞそむ

かへし　　　康資王母

しらくもはさも立たばたて紅のいまひとしほを君しそむれば

おなじ歌合によめる　　　一宮紀伊

あさまだき霞なこめそ山ざくら尋ねゆくまのよそめにも見む

○冰はとくる　一本「冰吹きとく」

○ぞも　ぞよ。

○みやま木の歌　櫻とは見えなかつた山の木も花が咲いたので初めて櫻と現はれた。平家物語にも。

○しら雲はたちへだつれど　判者が難じたなれども。

○いまひとしほ　今一入。一入とは染物を一回染液に入れ浸すことで、私の歌が京極大殿の御心に染つたので、判者は何と云はうと本望だとの意味。

○霞なこめそ　霞よ籠めるな。

白雲と見ゆるにしるしみよし野の吉野の山のはなざかりかも　大藏卿匡房

承曆二年内裏の後番歌合によめる　大納言公實

山ざくらをしむにとまるものならば花ははるともかぎらざらまし

遠山櫻といふ事をよめる　前齋院出雲

九重にたつ白雲と見えつるはおほうち山のさくらなりけり

題しらず　戒秀法師

春ごとに心をそらになすものは雲居に見ゆるさくらなりけり

しら川に花見にまかりてよめる　源俊頼朝臣

白川のはるのこずゑを見わたせば松こそ花のたえまなりけれ

所々に花をたづぬといふ事をよませ給うける　白河院御製

はるくればはなの梢にさそはれていたらぬ里のなかりつるかな

橘俊綱朝臣の伏見の山荘にて水邊櫻花といふことをよめる　源師賢朝臣

池水のみぎはならずばさくらばな影をも波にをられましやは

一條院の御時ならの八重櫻を人の奉りけるをその折御前に侍りければその花を題にて歌よめとおほせごとありければ　伊勢大輔

○しるし　いちじるしい。
○みよし野の　吉野の枕詞。
○かも　感動の助詞。

○とまる　散らないで止る。

○九重にの歌　大和物語に堤中納言の詠として「白雲の九重に立つ峯なれば大内山といふにぞありける」と見える。大内山は嵯峨仁和寺の山。

○たえま　絶間。

○影をも波にをられましやは　花の影をまで波に漂ひ折られませうかい。「や」は反語。

いにしへの奈良の都の八重櫻けふこゝのへに匂ひぬるかな

新院のおほせごとにて百首の歌奉りけるによめる　　右近中將教長朝臣

ふるさとに問ふ人あらば山ざくらちりなむのちを待てとこたへよ

人々あまた具して櫻花を手毎に折りて歸るとてよめる　　源　登　平

櫻ばな手ごとに折りてかへるをば春の行くとや人はみるらむ

題しらず　　道　命　法　師

春ごとに見る花なれど今年より咲きはじめたるこゝちこそすれ

歸鴈をよめる　　贈左大臣母

古里の花の匂ひやまさるらむしづごゝろなくかへる鴈がね

源　忠　季

なか〳〵に散るを見じとや思ふらむ花の盛りにかへるかりがね

櫻の花のちるを見てよめる　　藤　原　元　眞

櫻ばな散らさで千代もみてしがな飽かぬ心はさてもありやと

天德四年內裏歌合によめる　　大中臣能宣朝臣

櫻花風にし散らぬものならば思ふことなき春にぞあらまし

太皇太后宮賀茂のいつきときこえ給ひける時人々まゐりて鞠つかうまつ

○こゝのへ　九重。宮中。

○ちりなむのちを待て　自分は櫻を見に出たのだから散るまでは歸らないから。

○しづごゝろなく　靜かな心なく忙はしく。

○なか〳〵に　却つて。

○散らさで　ためしに散らさないで千年も見たいことだ。それでも飽きない心が果してあるかどうかと。

○思ふことなき春　物思ひのない春。

りけるに硯のはこのふたに雪をいれていだされたりけるしき紙にかきつけ侍りける　　　攝津

櫻花ちりしくにはをはらはねば消えせぬ雪となりにけるかな

住みあらしたる家の庭に櫻の花のひまなく散り積りて侍りけるを見てよめる　　　源俊頼朝臣

はく人もなきふるさとの庭のおもは花散りてこそ見るべかりけれ

橘としつなの朝臣の伏見の山莊にて水邊落花といふことをよめる　　　源師賢朝臣

さくら咲く木の下水は淺けれどちりしく花のふちとこそなれ

藤原兼房朝臣の家にて老人惜花といふことをよめる　　　藤原範永朝臣

散る花もあはれと見ずや石のかみふり果つるまで惜しむ心を

庭の櫻の散るを御覽じてよませ給ひける　　　花山院御製

我がやどの櫻なれども散るときは心にえこそまかせざりけれ

さくらの花のちるを見てよめる　　　源俊頼朝臣

身にかへて惜しむにとまる花ならばけふや我が世の限りならまし

落花滿庭といふ事をよめる　　　花園左大臣

庭もせに積れる雪と見えながらかをるぞ花のしるしなりける

○はく人も　一本「とふ人も」

○ふち　水の深くなつた所。

○石のかみ　元來地名で布留（地名）の枕詞。後にフル、フリの枕詞になつた。

○ふり　降り—古り。

○心にえこそ云々　我が心のまゝになし得ないことよ。

○身にかへての歌　我が身に代へて惜しむのに花の散るのがとまるならば今日限りの命であつてよいの意味。

○庭もせに　庭も狹きまでに。

○散る花にの歌　上の句は序をもなしてゐる。
○にほひを　一本「にほひの」
○まちかねやま　攝津國。「待ちかね」を云ひ懸く。
○よぶこ鳥　郭公鳥のことか。
○二十日　牡丹のことを二十日草とも云ふ。
○新院　崇德上皇。
○あやなく　わけもなく。
○なるべき　一本「ならまし」

題しらず　　大中臣能宣朝臣

散る花にせきとめらるゝ山川のふかくも春のなりにけるかな

寛和二年内裏歌合によめる　　藤原長能

一重だにあかぬ匂ひをいとゞしく八重かさなれる山吹の花

麗景殿の女御の家の歌合によめる　　讀人しらず

八重咲けるかひこそなけれ山吹のちらば一重もあらじと思へば

堀河院御時百首歌奉りけるによめる　　太皇太后宮肥後

こぬ人をまちかねやまのよぶこ鳥おなじ心にあはれとぞ聞く

新院位におはしましし時牡丹をよませ給ひけるによみはべりける　　關白前太政大臣

咲きしより散り果つるまで見しほどに花の下にて二十日經にけり

老人惜春といふ事をよめる　　橘俊綱

老いてこそ春の惜しさは増りけれいま幾度もあはじと思へば

三月盡日うへのをのこどもをおまへにめして春の暮れぬる心をよませさせ給ひけるによませ給ひける　　新院御製

惜しむとて今宵かきおく言の葉やあやなく春のかたみなるべき

○たつ　立つ—裁つ。
○あつし　暑し—厚し。
○さえでや　冴えずしては。
○疑はるらむ　雪かと疑はれるだらう。
○かけし　葵を衣冠に懸けるに官を兼ねる意味を云ひ懸く。
○あふひ　葵—逢ふ日。
○ゆふかけて　夕をかけて—木綿を懸けて。

詞花和歌集　巻第二

夏

卯月の一日によめる　　僧　基　法　師

今日よりはたつ夏ごろもうすくともあつしとのみや思ひわたらむ

題しらず　　源　俊　頼　朝　臣

雪のいろをぬすみて咲ける卯の花はさえでや人に疑はるらむ

齋院長官にて侍りけるが少將に成りて賀茂の祭の使して侍りけるを珍らしきよし人のいはせて侍りければよめる　　大　藏　卿　長　房

年をへてかけしあふひはかはらねど今日のかざしは珍らしきかな

神まつりをよめる　　源　　兼　　昌

榊とるなつの山路やとほからむゆふかけてのみまつる神かな

郭公を待ちてよめる　　周　防　内　侍

むかしにも有らぬわが身に郭公まつこゝろこそ變らざりけれ

關白前太政大臣の家にて郭公の歌おの／＼十首づゝよませ侍りけるによ

める　　藤原忠兼

郭公なく音ならではよの中に待つこともなき我が身なりけり

題しらず　　花山院御製

ことしだにまづはつ聲を郭公よにはふるさでわれに聞かせよ

山寺にこもりて待りけるに郭公のなき待らざりければよめる　　道命法師

やや里のかひこそなければほとゝぎす都のひともかくや待つらむ

題しらず　　能因法師

山彦のこたふる山のほとゝぎすひと聲なけばふたこゑぞ聞く

藤原伊家

郭公あかつきかけて鳴くこゑを待たぬ寐ざめの人やきくらむ

大納言公教

待つ程に寐(ね)るともなきをほとゝぎす鳴くねは夢のこゝちこそすれ

閑中郭公といふ事をよめる　　源俊頼朝臣

なきつとも誰にかいはむ郭公かげよりほかにひとしなければ

題しらず　　待賢門院堀河

こやの池におふる菖蒲のながき根はひく白絲のこゝちこそすれ

○なく音ならでは　鳴く音でなくては。

○よにはふるさで　初聲を世に古さないで。

○かひ　峽―效。

○山彦のこたふる山　こだまの應答する山。

○寐るともなき　一本「寐る夜もなき」

○なきつとも　鳴いたとも。

○かげ　自分の影。

○こやの池　攝津國河邊郡。蓋屋(こや)を云ひ懸く。

土御門右大臣の家に歌合し侍りけるによめる　　源　頼家朝臣

よもすがらたゝく水鷄(くひな)は天の戸をあけてのちこそ音せざりけれ

題しらず　　皇嘉門院治部卿

五月雨の日をふるまゝに鈴鹿川八十瀬のなみぞ音まさりける

堀河院御時百首歌奉りけるによめる　　大藏卿匡房

我妹子(わぎもこ)がこやのしのやの五月雨にいかでほすらむ夏引のいと

右大臣家の歌合によめる　　源　忠季

さみだれは難波堀江のみをつくし見えぬや水のまさるなるらむ

郁芳門院のあやめの根合によめる　　中納言通俊

もしほやく須磨の浦人うちはへていとひやすらむ五月雨の空

藤原通宗朝臣歌合し侍りけるによめる　　良暹法師

五月やみ花たちばなに吹く風はたが里までか匂ひゆくらむ

世をそむかせ給ひて後花橘を御覽じてよませ給ひける　　花山院御製

やどちかくはな橘はほり植ゑじ昔を忍ぶつまとなりけり

なでしこの花を見てよめる　　藤原經衡

うすくこく垣ほににほふ撫子のはなの色にぞ露もおきける

○天の戸をあけて　天が明けて―戸を開けて。
○ふる　降る―經る。
○鈴鹿川　伊勢國鈴鹿郡。
○八十瀬　多數の川瀬。
○こやのしのや　蘆屋の篠屋。
○みをつくし　水脈を知らせる爲に水中に立てた杙澪標。
○もしほやく　鹽をとる爲の海草を燒く。
○うちはへて　打延へて。
○いとひ　厭ひ―絲。
○世をそむかせ給ひて　出家なさつて。
○昔を忍ぶつま　昔を戀ふる端。端緒。

贈左大臣の家に歌合し侍りけるによめる　　修理大夫顯季

たねまきしわが撫子の花ざかりいくあさ露のおきて見つらむ

寛和二年内裏歌合に　　大貳高遠

なく聲もきこえぬもののかなしきは忍びにもゆる螢なりけり

六條右大臣家に歌合し侍りけるによめる　　讀人しらず

さつきやみ鵜川にともすかゞり火の數ますものはほたるなりけり

水邊納涼といふ事をよめる　　藤原家經朝臣

風ふけば河邊すゞしくよる波のたちかへるべき心地こそせね

題しらず　　曾禰好忠

そま川の筏のとこのうきまくら夏は涼しきふしどなりけり

長保五年入道前太政大臣の家に歌合し侍りけるによめる　　源道濟

まつほどに夏の夜いたくふけぬればをしみもあへず山の端の月

題しらず　　曾禰好忠

川上に夕立すらしみくづせくやな瀬のさなみ立ちさわぐなり

閏六月七日によめる　　太皇太后宮大貳

常よりもなげきやすらむ棚機のあはまし暮をよそにながめて

○贈左大臣　長實。顯季の子。故に「わが撫子」と云つてゐるのであらう。
○おきて　露置きて—朝起きて。

○かなしき　一本「こひしき」

○鵜川　鵜をつかふ川。

○そま川　木材を流し下す川。
○とこ　牀。

○いたく　甚しく。
○夕立すらし　夕立がするらしい
○みくづせく　水屑を堰く。
○やな瀬　梁(やな)をうつ川瀨。
○さなみ　「さ」は接頭語。
○棚機　織女星。
○あはまし暮　閏六月がなければ今日は七月七日で牽牛星に逢はうとする夕暮であるから。

題しらず　　さがみ

下紅葉ひと葉づゝちる木のもとに秋とおぼゆる蟬の聲かな

よしたゞ

蟲の音もまだうちとけぬ草むらに秋をかねてもむすぶ露かな

○おぼゆる　思はれる。
○かねて　一本「兼(か)けて」

詞花和歌集　卷第三

秋

題しらず　　曾禰好忠

山城の鳥羽田のおもを見わたせばほのかにけさぞ秋風はふく

津の國にすみ侍りけるころ大江爲基任はててのぼり侍りければいひつかはしける　　僧都清胤

君すまばとはましものを津の國の生田のもりの秋のはつかぜ

七月七日式部大輔資業がもとにてよめる　　橘元任

萩の葉にすがく絲をもさゝがには棚機にとやけさは引くらむ

御ぐしおろさせ給ひて後七月七日よませたまひける　　花山院御製

棚機に衣もぬぎてかすべきにゆゝしとや見む墨ぞめの袖

承暦二年内裏歌合によめる　　藤原顯綱朝臣

題しらず　　加賀左衞門

たなばたに心はかすと思はねど暮れゆくそらはうれしかりけり

○任はてて　國司の任期が濟んで

○津の國　攝津國のこと。

○すがく　巣を懸ける。

○さゝがには　一本「さゝがにの」

○棚機にこや　織女星に捧げる願ひ絲にとてか。

○御ぐし　御髮。

○ゆゝし　忌々しい。

○心はかす　心まで借す。

如何なればとだえそめけむ天の川逢瀬に渡すかさゝぎのはし

新院のおほせごとにて百首歌たてまつりけるによめる　　左京大夫顯輔

天の川よこぎる雲や棚機のそらだきもののけぶりなるらむ

寛和二年内裏の歌合によめる　　大中臣能宣朝臣

おほつかなかはりやしにし天の川としにひとたび渡る瀬なれば

七夕をよめる　　修理大夫顯季

天の川たま橋いそぎわたさなむ淺瀬たどるも夜のふけゆくに

橘俊綱伏見の山莊にて七夕後朝のところをよめる　　良暹法師

あふ夜とは誰かは知らぬ棚機のあくる空をもつゝまざらなむ

藤原顯綱朝臣

棚機のまちつるほどの苦しさとあかぬ別れといづれまされる

題しらず　　祝部成仲

天の川かへらぬ水を棚機はうらやましとや今朝はみるらむ

三條太政大臣の家にて八月十五夜に水上月といふことをよめる　　源順

水清みやどれる月のかげさへや千代まで君とすまむとすらむ

題しらず　　右大臣

○かさゝぎのはし　七月七日の夜は織女星が牽牛星に逢ふ爲に、鵲が羽をひろげて天の川に橋をかけて渡すとの信仰があつた。

○そらだきもの　どことなく自分を匂はせるやうに薫く香。

○かはりやしにし　變移したらうか。

○たま橋　一本「たな橋」

○淺瀬たどるも云々　古今集卷四に「天の川淺瀬白波辿りつゝ渡り果てねば明けぞしにける」

○誰かは知らぬ　知らぬ者があらうかい。

○つゝまざらなむ　人々が皆知つてゐるのだから包み忍ぶな。

○まされる　一本「まされり」

○水清み　水が淸いので。

○月のかげ　一本「秋の月」

○すまむ　澄まむ―住まむ。

いかなればおなじ空なる月影の秋しもことに照りまさるらむ

家に歌合し侍りけるによめる　　左衛門督家成

春夏と空やはかはる秋の夜の月しもいかで照りまさるらむ

月を御覽じてよませ給ひける　　三條院御製

秋にまた逢はむあはじも知らぬ身は今宵ばかりの月をだに見む

題しらず　　天台座主明快

ありしにもあらずなりゆく世の中にかはらぬ物は秋の夜の月

關白前太政大臣の家にてよめる　　藤原重基

秋の夜の月の光のもる山は木のしたかげもさやけかりけり

ひえの山の念佛にのぼりて月をみてよめる　　良暹法師

天つ風雲ふきはらふ高嶺にて入るまで見つるあきの夜の月

京極前太政大臣家の歌合によめる　　源頼綱朝臣

秋の夜の月に心のひまぞなき出づるをまつと入るを惜しむと

關白前太政大臣家にて八月十五夜のこゝろをよめる　　藤原朝隆朝臣

ひくこまにかげをならべて逢坂の關路よりこそ月はいでけれ

左衛門督家成が家に歌合し侍りけるによめる　　隆縁法師

○秋しもことに　秋は殊に。
○空やはかはる　空は變らうかい。
○三條院　病身で讓位後盲目になられたといふ不幸な天皇でいらつしやつた。
○ありしにもあらずなりゆく　過去にさうあつた事もさうでなくなつて行く。
○もる山は　漏る―守山(近江國)
○ひえの山　延暦寺のある比叡山
○天つ風の歌　念佛に罪障の雲晴れて西方淨土を觀じた趣を。
○心のひま　心の休まる隙。
○ひくこま　八月十五日は信濃國の勅旨の駒牽だつた。
○かげ　鹿毛―影。

秋の夜の露も曇らぬ月をみておきどころなき我がこゝろかな　大江嘉言

月を待つこゝろをよめる

秋のよの月まちかねておもひやる心いくたびやまを越ゆらむ　藤原忠兼

月浮山水といふ心をよめる

秋山の清水はくまじ濁りなばやどれる月のくもりもぞする　花山院御製

寛和二年内裏歌合によませ給ひける

秋の夜の月にこゝろのあくがれてくもゐに物を思ふころかな　源道濟

題しらず

ひとり居てながむる宿のをぎの葉に風こそわたれ秋の夕ぐれ　大江嘉言

荻の葉にそゝや秋風ふきぬなりこぼれやしぬる露のしら玉　和泉式部

秋ふくは如何なる色の風なれば身にしむばかり哀れなるらむ　曾禰好忠

みよしののきさ山かげにたてる松いく秋風にそなれきぬらむ　藤原顯綱朝臣

○おきどころなき　悦ばしさに…「露の置く」を云ひ懸く。

○くまじ　汲むまい。

○あくがれて　浮れ出て。

○そゝや　其其や(すはやの意味)に荻の葉のそよぐ音をきかしてゐる。

○しむ　沁む―染む。

○きさ山　大和國。

○そなれ　馴れ。「そ」は接頭語。

荻の葉に露吹きむすぶこがらしの音ぞ夜寒になりまさるなる

霧をよめる　　源兼昌

夕霧にこずゑも見えず初瀬山いりあひの鐘の音ばかりして

法輪へまうでけるにさが野の花おもしろく咲きて侍りければ見てよめる　　赤染衞門

秋の野の花見るほどの心をば行くとや云はむとまるとや云はむ

賀茂のいつきときこえて侍りける時本院のすいがきにあさがほの花咲きかゝりて侍りけるをよめる　　禖子内親王

神垣にかゝるとならば朝顔もゆふかくるまで匂はざらめや

堀河院の御時百首歌奉りけるによめる　　隆源法師

ぬしやたれきる人なしに藤ばかま見れば野ごとにほころびにけり

白河院鳥羽殿にて前栽あはせさせ給ひけるによめる　　周防内侍

朝な〳〵つゆおもげなる萩が枝に心をさへもかけて見るかな

敦輔王

荻の葉にことゝふ人もなきものを来る秋ごとにそよと答ふる

題しらず　　曾禰好忠

○こがらし　秋から冬にかけて吹く風。

○初瀬山　大和國磯城郡。

○法輪　寺の名。

○行く　心ゆく(滿足する意味)を云ひ懸けてゐる。
○とまる　心とまる(執心する意味)を云ひ懸けてゐる。
○賀茂のいつき　賀茂神社に仕へる未婚の皇女。齋院。
○すいがき　透垣。
○ゆふかくる　夕かくる—木綿掛くる。

○きる人　著る人。一本「しる人」
○ほころび　花の咲く意味に袴のほころびることを云ひ懸く。
○前栽　庭の植込み。
○心をさへもかけて　露で重い萩の花の面白さに更に我が心をさへかけた意味。

○こととふ人　訪ねる人。
○そよ　荻の葉のそよぐ音に、其よ(さうよの意味)を云ひ懸く。

秋の野のくさむらごとにおく露はよるなく蟲のなみだなるべし　　永源法師

八重葎しげれる宿はよもすがら蟲の音聞くぞとりどころなる　　和泉式部

陸奥國の任はてゝのぼり侍りけるに尾張の國鳴海野に鈴蟲の鳴き侍りけるをよめる　　橘爲仲朝臣

鳴く蟬のひとつ聲にも聞えぬはこゝろ〴〵にものや戀しき

天祿三年女四宮歌合によめる　　橘正通朝臣

古里にかはらざりけり鈴蟲のなるみの野邊のゆふぐれのこゑ

駒迎をよめる　　大藏卿匡房

あき風に露をなみだとなく蟲の思ふこゝろを誰に問はまし

永承五年一宮歌合によめる　　出羽辨

逢坂の杉間の月のなかりせばいくきの駒といかで知らまし

題しらず　　藤原伊家

きく人のなど安からぬ鹿の音は我が妻をこそこひて鳴くらめ

秋萩を草のまくらにむすぶ夜はちかくも鹿の聲をきくかな

○なるべし　一本「なりけり」
○八重葎　雜草の名。
○戀しき　一本「悲しき」
○なるみ　鳴海に「鈴の鳴る」を云ひ懸く。
○いくき　幾寸(いくき)―幾木。馬の長(たけ)は四尺を馬長といひ、それを一寸越すを一寸の馬といひ五寸越せば五寸の馬といふので。
○など安からぬ　聞く人が何として安からず戀しいのか。
○我が妻　一本「我が山」
○こひて　一本「わびて」
○鳴くらめ　「ご」を補ふ。
○草のまくらに結ぶ夜　旅寢の夜

九月十三夜に月照菊花といふ事をよませ給ひける　　新院御製

秋ふかみ花には菊の關なれば下葉に月ももりあかしけり

關白前太政大臣家にてよめる　　源雅光

霜がるゝはじめと見ずばしら菊のうつろふ色をなげかざらまし

題しらず　　道命法師

今年また咲くべき花のあらばこそ移ろふ菊に目離(めが)れをもせめ

曾禰好忠

草がれの冬まで見よと露霜のおきてのこせる白菊の花

宇治前太政大臣白河にて見行客といふ事をよめる　　堀河右大臣

關こゆる人にとはばやみちのくの安達の檀紅葉(まゆみ)しにきや

武藏の國より上り侍りけるに三河の國二村山の紅葉を見てよめる　　橘能元

いくらとも見えぬ紅葉の錦かなたれふたむらの山といひけむ

寛治元年太皇太后宮の歌合によめる　　大藏卿匡房

夕されば何かいそがむもみぢ葉の下てる山はよるも越えなむ

題しらず　　曾禰好忠

山ざとはゆききの道も見えぬまで秋の木の葉にうづもれにけり

○菊の關　花では菊が最後の花だから斯う云ふのであらう。次の歌を參照。

○もり　守り—洩り。

○霜がるゝはじめと見ずば　霜枯れる初めだと見ないで、その色の移ろふのを樂しみ見るならば。

○菊に目離れをもせめ　菊に目離しもしようものを。もう今年は咲く花がないので、色の變る菊にも目離さず眺める意味。此の歌は和漢朗詠集に「不是花中偏愛菊、此花開後更無花」と見える趣と同じ。

○安達の檀　安達原の檀の木。古今集卷二十に「陸奥のま弓我が引かば…」など見える。

○ふたむら　絹二疋をふたむらと數へるので、二村山に云ひ懸く。

○夕されば　夕方が來ると。

○あやおりかけし　綾を織る事。波紋を作ることを云ひ懸く。
○ふる　古る―降る。
○ふき　吹き―葺き。
○障子　一本「屏風」
○網代　木や竹を組んで網代りにして杙に仕組んで魚をとるもの。その杙を網代木といふ。
○おきにけらしな　置いたらしいな。
○いづ方へ　「へ」一本「に」
○雨やどりせよ　雨宿りして秋よ行くな。「せ」一本「て」

春より法輪寺にこもりて侍りける秋大井河に紅葉のひまなく流れけるを見てよめる　　道命法師

春雨のあやおりかけし水のおもにあきはもみぢの錦をぞしく

雨後落葉といふ事をよめる　　源俊頼朝臣

なごりなく時雨の空は晴れぬれどまだふる物は木の葉なりけり

月のあかき夜紅葉の散るをみてよめる　　平兼盛

あれはてて月もとまらぬ我が宿に秋の木の葉を風ぞふきける

一條攝政家の障子に網代に紅葉のひまなく寄りたるかたかきたる所をよめる　　藤原惟成

秋ふかみ紅葉おちしく網代木は氷魚のよるさへあかく見えけり

初霜をよめる　　大中臣能宣朝臣

初霜もおきにけらしな今朝見れば野邊の淺茅も色づきにけり

雨中九月盡といふ事をよめる　　前大納言公任

いづ方へ秋のゆくらむ我がやどに今宵ばかりは雨やどりせよ

詞花和歌集　巻第四

冬

題しらず　　曾禰好忠

なに事も行きていのらむと思ひしに神無月にもなりにけるかな

楸（ひさぎ）おふる澤邊のちはら冬くればひばりの牀ぞあらはれにける

家に歌合し侍りけるに落葉をよめる　　大貳資通

梢にてあかざりしかばもみぢ葉の散りしく庭を拂はでぞ見る

題しらず　　左衞門督家成

色々にそむるしぐれにもみぢ葉はあらそひかねて散りはてにけり

大江嘉言

山ふかみおちて積れるもみぢ葉のかわける上に時雨ふるなり

落葉埋水といふ事をよめる　　惟宗隆頼

今更におのがすみかを立たじとて木の葉の下に鴛ぞ鳴くなる

落葉有聲といふ事をよめる

○神無月　十月の異名。この月は神が皆出雲大社に集まるので神が無い月さいふさの信仰。
○ちはら　茅原。

○梢にてあかざりしかば　まだ梢にある時に見て飽き足らなかつたので。

○色々にの歌　萬葉集巻十に「時雨の雨間なくし降れば槇の葉も爭ひかねて色づきにけり」
○もみぢ葉は　一本「もちぢつゝ」

風ふけば楢の枯葉のそよ〳〵といひ合はせつゝいつか散るらむ

題しらず　　曾禰好忠

外山なる柴のたち枝にふくかぜの音きくをりぞ冬はものうき

讀人しらず

秋はなほ木の下陰もくらかりき月は冬こそ見るべかりけれ

東山に百寺をがみけるに時雨しければよめる　　左京大夫道雅

もろともに山めぐりする時雨かなふるにかひなき身とはしらずや

旅宿時雨といふ事をよめる　　瞻西上人

いほりさす楢の木陰にもる月のくもると見れば時雨ふるなり

天暦の御時御屛風に網代に紅葉おほく寄りたるかたかきける所をよめる　　平兼盛

みやまには嵐やいたく吹きぬらむ網代もたわに紅葉つもれり

鷹狩をよめる　　藤原長能

霰ふるかた野のみ野のかりごろも濡れぬ宿かす人しなければ

堀河院御時百首歌奉りけるによめる　　大藏卿匡房

山ふかみやく炭がまのけぶりこそやがて雪げの雲となりけれ

○そよ〳〵　葉のそよぐ音に其よ其よ（さうぢや〳〵の意味）を云ひ懸く。

○木の下陰　一本「木の葉がくれ」

○百寺　百軒の寺。

○ふる時雨の　降る―身の古る。

○いほりさす　假庵を作る。

○天暦　村上天皇の年號。

○たわに　撓むほどに。

○かた野のみ野　河內國。一般の禁猟地なので、御野と云ふ。

大和守にて侍りける時入道前太政大臣の許にて初雪を見てよめる　藤原義忠朝臣

年をへて吉野の山にみなれたる目にめづらしき今朝のしらゆき

題しらず　大藏卿匡房

おくやまの岩垣もみぢ散りはてて朽葉が上に雪ぞつもれる

大江嘉言

日暮しに山路の昨日しぐれしは富士の高嶺の雪にぞありける

新院くらゐにおはしましし時雪中眺望といふ事をよませ給ひけるによみ侍りける　關白前太政大臣

くれなゐに見えしこずゑも雪ふれば白木綿(しらゆふ)かくる神なびの森

題しらず　和泉式部

まつ人の今もきたらばいかゞせむ蹈まゝくをしき庭の雪かな

歳暮の心をよめる　成尋法師

數ならぬ身にさへ年の積るかな老は人をもきらはざりけり

曾禰好忠

魂祭る年のをはりになりにけり今日にや又もあはむとすらむ

○みなれたる目に　見馴れた目にも。

○日暮し　終日。

○くらゐにおはしましし時　御在位中。

○神なびの森　大和國生駒郡。

○今も　今にも。○蹈まゝくをしき　跡がつくので蹈まむことの惜しい。

○人をもきらはざりけり　人嫌ひをしないことだ。

○魂祭る年のをはり　除日に亡き人の魂を祭ることは報恩經などの心であらう。○あはむ　亡き人に逢はむ。

詞花和歌集　卷第五

賀

一條院上東門院に行幸せさせ給ひけるに　　入道前太政大臣

君が代にあふくま川の底きよみ千年をへつゝすまむとぞ思ふ

正月一日子生みたる人に襁褓つかはすとてよめる　　伊勢大輔

珍らしくけふたち初むる鶴の子は千代のむつきを重ぬべきかな

一條左大臣の家の障子に住吉のかたかきたる所によめる　　大中臣能宣朝臣

過ぎ來にしほどをばすてつ今年より千代はかぞへむ住吉の松

京極前太政大臣家に歌合し侍りけるによめる　　匡房

君が代はくもりもあらじ三笠山みねに朝日のささむ限りは

長元八年宇治前太政大臣の家の歌合によめる　　能因法師

君が代は白雲かゝる筑波嶺のみねのつゞきのうみとなるまで

題しらず　　赤染衛門

榊葉を手にとりもちていのりつる神の代よりも久しからなむ

○あふくま川　阿武隈川（陸奥の名所）に逢ふを云ひ懸く。○すまむ　澄まむ―住まむ。

○むつき　襁褓―正月。

○くもり　一本「かぎり」

○筑波嶺　常陸國の筑波山。○榊葉をの歌　天照大神が岩戸に籠られた時天兒屋根命、太玉命が天香具山の眞賢木をとつて光の回復を祈つたといふ神の御代より久しくあつてくれ。

三條太政大臣の賀の屏風の繪に花見てかへる人かきたる所によめる　中務

あかでのみかへると思へばさくら花折るべき春ぞつきせざりける

ある人の子三人にかうぶりをさせたりけるに又の日つかはしける　清原のもとすけ

松島の磯にむれゐるあしたづのおのがさま／＼見えし千代かな

天喜四年四月晦日后宮の歌合によませ給ひける　後冷泉院御製

長濱の眞砂のかずも何ならじつきせず見ゆる君が御代かな

上東門院御屏風に十二月つごもりのかたかきたる所によめる　前大納言公任

一年を暮れぬとなにか惜しむべきつきせぬ千代の春をまつには

河原院に人々まかりて歌合し侍りけるに松臨江といふことを　惠慶法師

たれにとか池のこゝろも思ふらむそこにやどれる松の千年を

後三條院の住吉まうでによめる　讀人しらず

君が代の久しかるべきためしにや神も植ゑけむすみよしの松

としつなに具して住吉にまうでてよめる　大納言經信

住吉のあらひと神の久しさにまつもいくたび生ひかはるらむ

○あかで　飽かずして。

○かうぶり　冠位。

○あしたづ　葦鶴。

○長濱の歌　金葉集卷五に見える。但し「ならじ」は金葉集「ならず」

○御代　一本「千代」

○つごもり　晦日。

○一年を　「を」一本「の」

○なにか　一本「いかゞ」

○すみよしの松　住吉は松の名所で名高く、住吉神社がある。

○具して　伴つて。

○住吉の歌　拾遺集卷十「天降る現人神（あらひとがみ）の相生を思へば久し住吉の松」卷十二「久しくも思ほえねども住吉の松や二度生ひ變るらむ」

詞花和歌集　巻第六

別

参議廣業たえて後伊豫のかみにてくだりけるにつかはしける　民部内侍

都にておぼつかなさをならはずば旅寢をいかに思ひやらまし

道貞にわすられて後みちの國のかみにてくだりけるに遣はしける　和泉式部

もろともにたたましものをみちのくの衣の關をよそに聞くかな

左京大夫顯輔加賀守にて下り侍りけるにいひつかはしける　源俊頼朝臣

よろこびをくはへて急ぐ旅なればおもへどえこそとゞめざりけれ

橘則光朝臣みちの國のかみにて下り侍りけるに餞し侍るとてよめる　藤原輔尹朝臣

とまりゐて待つべき身こそ老いにけれあはれ別れは人のためかは

物申しける女の齋宮の下り給ひけるともにまかりけるにいひ遣はしける　藤原道經

かへり來む程をもしらで悲しきはよを長月のわかれなりけり

○都にての歌　既に都に於て中絶の爲に覺束なさを習つたので、君の旅寢を十分思ひ遣ることが出來るの意味。

○みちの國のかみ　陸奥守。

○たたまし　忘れられてゐない仲ならば共々に立ちませうものを。「立つ」に「衣を裁つ」を云ひ懸く。

○衣の關　衣川の關。

○よろこび　國司になつた喜び。

○えこそ止めざりけれ　止められ得ないことです。

○あはれ別れは人のためかは　あこの別れは人の爲かい、いや我が爲ぢや。止つてゐて待つ自分はもう老人で君と一生別れとなるやも知れないから。

○よを長月　齋宮の歸京期は天子の御代の長い限りであるから、又齋宮の伊勢への群行は九月なのでこれに九月を云ひ懸けてゐる。

大納言經信太宰帥にて下りけるに川尻にまかりあひてよめる　津守國基

六年にて君は來まさむ住吉のまつべき身こそいたく老いぬれ

つねに侍りける女房の日向の國へ下り侍りけるに餞し給ふとてよませ給ひける　一條院皇后宮

茜(あかね)さす日にむかひても思ひいでよ都は晴れぬながめすらむと

弟子に侍りけるわらはの親に具して人の國へまかりけるにさうぞく遣はすとてよめる　法橋有禪

別れ路のくさ葉をわけむたび衣たつよりかねて濡るゝそでかな

月ごろ人のもとにやどりけるがかへりける日あるじにあひてよめる　玄範法師

また來むとたれにもえこそ言ひおかね心にかなふ命ならねば

もろこしへ渡り侍りけるを人のいさめ侍りければよめる　寂照法師

とゞまらむ止まらじともおもほえず何處(いづく)もつひの住處(すみか)ならねば

人のもとに日ごろ侍りてかへる日あるじにあひていひける　僧都清胤

ふたつなき心を君にとゞめおきて我さへ我にわかれぬるかな

大納言經信太宰帥にて下り侍りけるに俊頼朝臣まかりければいひつかは

○太宰帥　筑前の太宰府の長官。
○川尻　淀河の川尻。
○六年　太宰帥の任限は五年だが道中を加へると足かけ六年になるので。
○まつ　待つ―松。
○茜さす　日の枕詞。
○ながめ　長雨―詠め。詠めとは長目から出た言葉で物思ひに耽つてじつと一所を見つめてゐることを云ふ。
○たつ　裁つ―立つ。
○かねて　豫め。
○えこそ言ひおかね　云ひ置き得ない。
○もろこし　支那。
○おもほえず　思はれない。
○つひ　終。結局。
○ふたつなきの歌　二つとない我が心を君に留め置いたので、自分までも自分に別れてしまつたのです。

しける　　太皇太后宮甲斐

暮はまづそなたをのみぞ眺むべき出でむ日ごとに思ひおこせよ

橘爲仲朝臣みちの國の守にてくだりけるに太皇太后宮の大盤所よりとて誰とはなくて

東路（あづまぢ）のはるけき道を行きめぐりいつかとくべき下ひものせき

修理大夫顯季太宰大貳にて下らむとし侍りけるに馬に具してつかはしける　　權僧正永緣

立ち別れはるかにいきの松なれば戀しかるべき千代の陰かな

あづまへまかりける人の宿りて侍りけるがあかつきに立ちけるによめる　　くゞつなびき

はかなくも今朝の別れの惜しきかないつかは人をながらへて見し

○暮　太宰府は京からは日の沒する西方なので。
○出でむ日　京は太宰府から日の出る東方たので。
○とくべき　君とうち解け語るべき—打寛いで下紐を解くべき（男女の仲だから）
○下ひものせき　陸奥國。
○太宰大貳　太宰府の次官。
○具して　添へて。
○いきの松　筑前國の生の松—行き待つ。
○くゞつなびき　一本「傀儡靡」くぐつは旅人を慰める遊女。
○いつかは人をながらへて見し　一夜の客にはかり逢ふのでいつ末かけて長く相見たか。「か」は反語。「見し」一本「見む」に

詞花和歌集　卷第七

戀　上

戀のうたとてよみ侍りける　　關白前太政大臣

あやしくも我がみ山木のもゆるかな思ひは人につけてしものを

題しらず　　藤原實方朝臣

いかでかはおもひ有りともしらすべき室の八島の煙ならでは

　　隆惠法師

かくとだにいはで果なく戀ひ死なばやがてしられぬ身とやなりなむ

堀河院御時百首歌奉りけるによめる　　大藏卿匡房

思ひかね今日たてそむる錦木の千束もまでた逢ふよしもがな

題しらず　　平兼盛

谷川の岩間をわけてゆく水のおとにのみやは聞かむと思ひし

春立ちける日承香殿女御のもとへつかはしける　　一條院御製

よとともに戀ひつゝ過ぐる年月はかはれどかはる心地こそせね

○我がみ山木　我が身を云ひ懸く○思ひ　ひに火を云ひ懸く。○つけて　思ひを附け—火を點け○室の八島の煙　下野國都賀郡で池から立つ水蒸氣が煙のやうに見えたといふ。○かくとだにいはで　斯やうだとでも云はずに。○錦木　陸奥國の風俗に、戀ふる人の家に錦木を立てると逢はうと思へば取り入れる。取り入れなければ千束まで立てるといふ。錦木とは一尺ほどの彩色施した木。○またで　待たずして。○逢ふよしもがな　逢ふ方法もあればいいな。○谷川の歌　上の句は下の句を云ひ起す序。○思ひし　一本「すらむ」○よとともに　世—夜。○過ぐる　一本「すぐす」○心地こそせね　心地がしない。「こそ」の係りで「ず」が「ね」に。

承曆四年內裏の歌合によめる　　藤原伊家

わが戀はゆめぢにのみぞ慰むるつれなき人も逢ふと見つれば

新院くらゐにおはしましし時うへのをのこども御前にめして寐覺の戀と
いふ事をよませ給ひけるによめる　　左兵衞督公能

慰むるかたもなくてややみなまし夢にも人のつれなかりせば

寬和二年內裏歌合によめる　　藤原惟成

命あらば逢ふよもあらむ世の中になど死ぬばかりおもふ心ぞ

左京大夫顯輔が家に歌合し侍りけるによめる　　大納言成通

よそながら哀れといはむことよりも人傳ならでいとへとぞ思ふ

題しらず　　寬念法師

戀ひ死なば君は哀れといはずともなか〳〵よその人やしのばむ

つれなき女につかはしける　　賀茂成助

いかばかり人のつらさを恨みましうき身の咎と思ひなさずば

左衞門督家成が家に歌合し侍りけるによめる　　藤原頼保

いかならむ言の葉にてか靡くべき戀しといふはかひなかりけり

題しらず　　淨藏法師

○見つれば　一本「見ゆれば」

○公能　一本「公行」

○やみなまし　止むであらう。
○人のつれなかりせば　人がつれなかつたならば。

○など　何として。

○よりも　一本「よりは」
○人傳ならでいとへとぞ思ふ　人づてでなくて自身嫌だと云ひなさいと私は思ふ。
○なか〳〵　却つて。
○人や　一本「人の」
○うき身の咎と　憂き身故の咎だと。「と」一本「の」

○我が爲にの歌　自分につれない人をさし置きながら何の罪もない世を恨むべきでないの意味。
○長らへゆけど　長柄へ行けど―長らへ行けど。
○後れざりけり　尾(つ)いて來たことです。
○年をへて燃ゆてふ不二の山　拾遺集卷十に「千早ぶる神も思ひのあればこそ年經て不二の山は燃ゆらめ」富士山は昔は活火山だったから。
○わびぬれば　思ひ困じると。
○涙か　「か」は感動の助詞。かな
○思へば　一本「思へど」
○心さへ　君の心をまで。
○むすぶの神　緣を結ぶ神。拾遺集卷十九に「君見れば結ぶの神ぞ恨めしきつれなき人をなに作りけむ」
○いかゞはすべき　何としたらよからう。
○賤のをだまき　伊勢物語に「古の賤のをだまき繰返し昔を今になすよしもがな」とある。をだまきは績麻(うみを)を內を空に外を圓く卷いたもの。
○わらはに　一本「わらはを」

我が爲につらき人をばおきながら何のつみなき世をや恨みむ

女をあひかたらひける頃よしありて津の國にながらといふ所にまかりて
かの女のもとにつかはしける　平兼盛

忘るやと長らへゆけど身にそひて戀しき事は後れざりけり

題しらず　讀人しらず

年をへて燃ゆてふ不二の山よりも逢はぬおもひは我ぞまされる

わびぬればしひて忘れむと思へども心よわくも落つる涙か

おもはじと思へばいとゞ戀しきはいづれかわれが心なるらむ

能因法師

心さへむすぶの神やつくりけむ解くるけしきも見えぬ君かな

あだ／＼しくも有るまじかりける女をいと忍びていはせ侍りけるに世に
ちりてわづらはしきさまに聞えければいひたえて後とし月をへて思ひあ
まりていひつかはしける　前大納言公任

一度はおもひ絶えにし世の中をいかゞはすべき賤のをだまき

三井寺に侍りけるわらはに京にいでばかならず告げよと契りて侍りける
を京へいでたりとは聞きけれどおとづれ侍らざりければいひ遣はしける

僧都覺雅

影見えぬきみは雨夜の月なれや出でても人にしられざりけり

さらにゆるぎげもなき女に七月七日つかはしける　大納言道綱

七夕にけさ引く絲の露を重(おも)みたわむけしきを見でややみなむ

戀のうたとてよめる　隆縁法師

身のほどを思ひしりぬることのみやつれなき人のなさけなるらむ

左衞門督家成が津の國の山莊にて旅

わびつゝもおなじ都はなぐさみき旅寢ぞ戀のかぎりなりける

冷泉院春宮と申しける時百首歌奉りけるによめる　源重之

風をいたみ岩うつ波のおのれのみ碎けてものを思ふころかな

堀河院御時百首歌奉りけるによめる　修理大夫顯季

我が戀はよしのの山のおくなれやおもひいれどもあふ人もなし

題しらず　平祐擧

むねは富士そでは清見が關なれや煙もなみもたたぬ日ぞなき

藤原永實

いたづらに千束くちにし錦木をまたこりずまに思ひたつかな

○月なれや　月であるからか。
○さらにゆるぎげもなき女　一向に心の動きさうもない女。
○七夕に……重み　たわむの序。
○見でややみなむ　見ずして止めようものか。
○身のほどをの歌　つれない君の情で私は君に戀すまじき我が身の程を思ひ知つたの意味。
○わびつゝも　戀ひ困じ〳〵しても。
○おなじ都は　君と同じ都に在るうちは。
○戀のかぎり　戀しさの究極。
○風をいたみ　風の甚しさに。
○岩うつ波の　「の」は「の如くに」
○おのれのみ　自分ばかり。相手は岩のやうにつれないので。
○煙もなみも　煙は戀ひ焦れる思ひ、なみは思ひ泣く涙に思ひよせてゐる。
○千束くちにし　千束の錦木が朽ちてしまつた意味。三頁前の錦木の註參照。
○こりずまに　懲りないまゝに。
○思ひたつかな　戀ひ焦れる火が立つ意味を云ひ懸けてゐる。

春になりてあはむとたのめける女のさもあるまじげに見えければいひ遣はしける　道命法師

山ざくらつひに咲くべきものならば人の心をつくさざらなむ

堀河院御時藏人に侍りけるに贈皇后宮の御方に侍りける女を忍びてかたらひ侍りけるをこと人にものいふと聞きて白菊の花にさしつかはしける　源家時

霜おかぬ人の心はうつろひておもがはりせぬしら菊のはな

返し女にかはりて　大納言公實

白菊のかはらぬ色もたのまれず移ろはでやむ秋しなければ

中納言としたゞが家の歌合によめる　藤原顯綱朝臣

紅のこぞめのころもうへに著むこひのなみだの色かはるやと

題しらず　源道濟

しのぶれど涙ぞしるき紅にもの思ふそでは染むべかりけり

文つかはしける女のいかなる事かありけむ今更に返事せず侍りければいひ遣はしける　源雅光

くれなゐに涙のいろもなりにけりかはるは人のこゝろのみかは

○人の心をつくさざらなむ　人に心を使はせるな。

○霜おかぬの歌　白菊は白い霜が置いても面變りしないのでそれを我が心に比してゐる。

○返し　一本「返事」

○移ろはで云々　移ろふことなく濟む秋はないものだから。「し」は强めの助詞。

○こぞめ　濃染め。

○こひのなみだの色かはるやと　戀の涙は色が變るとか聞くので、その色を紛らす爲に濃染の紅の衣を著よう。

○しるき　いちじるく目に立つ。

○染むべかりけり　物思ひのある袖は紅に染めるべきだ。

○返事せず　一本「返事をもせず」

左京大夫顯輔が家に歌合し侍りけるによめる　　平　實　重

戀ひ死なむ身こそ思へば惜しからね憂きもつらきも人の答かは

題しらず　　道　命　法　師

つらさをば君にならひて知りぬるを嬉しき事は誰にとはまし

女を恨みてよめる　　藤原道信朝臣

嬉しきはいかばかりかは思ふらむ憂きは身にしむ物にぞありける

ひえの山に歌合し侍りけるによめる　　心　覺　法　師

戀すれば憂き身さへこそ惜しまるれ同じ世にだに住まむと思へば

題しらず　　大中臣能宣朝臣

御垣守衞士のたく火のよるはもえ晝は消えつゝ物をこそ思へ

讀　人　し　ら　ず

我が戀は蓋身(ふたみ)かはれる玉櫛笥いかにすれどもあふかたぞなき

山寺にこもりて日頃侍りて女のもとへいひつかはしける　　藤原範永朝臣

冰しておとはせねども山川のしたは流るゝものと知らずや

關白前太政大臣の家にてよめる　　藤原親隆朝臣

かぜふけばもしほの煙かたよりになびくを人の心ともがな

○思へば　一本「なか〱」
○人の答かは　人の答かい。
○つらさをばの歌　君につらくされたので、つらさをば君に習つて知つたが、嬉しさは一體誰に問ひませう。
○物にぞありける　一本「こゝちこそすれ」
○御垣守衞士　内裏の御垣を守る所の衞門府の武官の衞士。
○焚く火の　焚く篝火のやうに。
○よるはもえ　よるは思ひが燃え一本「よはもえ」
○晝は消えつゝ　人目を忍んで。
○物をこそ思へ　物思ひをする。
○蓋身　蓋と身。
○あふ　蓋と身と合ふ—思ふ人に逢ふ。
○冰して　冰が張つて。
○もしほの煙　鹽燒く海草の煙。

○瀬を早み　瀬が早いので。
○瀧川の　瀧川のやうに。
○われても　二人の仲は人目にせかれて別れ〳〵になつても。
○飾磨にそむる　播磨國飾磨から染め出す褐色といふことから、次の「あながち」を云ひ起す序。
○くる　一本「くるゝ」
○おとなしのたき　紀伊國。音無くて流るゝ瀧を忍び泣きすることに云ひ寄せてゐる。

題しらず　　新院御製

瀬を早み岩にせかるゝ瀧川のわれてもすゑに逢はむとぞ思ふ

曾禰好忠

播磨なる飾磨にそむるあながちに人を戀しと思ふころかな

冬の頃暮にあはむといひたる女にくらしかねていひつかはしける　　道命法師

ほどもなくくると思ひし冬の日の心もとなきをりもありけり

家に歌合し侍りけるによめる　　中納言俊忠

こひわびてひとりふせやによもすがら落つる涙やおとなしのたき

詞花和歌集　卷第八

戀　下

人しづまりて來(こ)といひたる女のもとへ待ちかねてとくまかりたりければ

かくやは言ひつるとていであはず侍りければいひ入れ侍りける　藤原相如

君をわがおもふ心は大はらや何時(いつ)しかとのみすみやかれつゝ

題しらず　藤原道經

我が戀はあひ初めてこそまさりけれ飾磨(しかま)の褐(かち)の色ならねども

女のもとより曉かへりて立ち歸りいひ遣はしける　清原元輔

夜を深み歸りし空もなかりしをいづくより置く露にぬれけむ

左京大夫顯輔家にて歌合し侍りけるによめる　藤原顯廣朝臣

心をばとゞめてこそは歸りつれあやしや何のくれをまつらむ

女のもとより夜ふかく歸りてあしたに遣はしける　藤原實方朝臣

竹の葉に玉ぬく露にあらねどもまだよをこめておきにけるかな

長月の晦日の日のあしたに初めたる女の許よりかへりて立ち歸りつかは

○人しづまりて來　人がしづまつてから後に來れ。
○かくやは言ひつる　かやうに云つたかい。
○わが　一本「のみ」
○大はら　京都の郊外。
○すみやかれつゝ　炭燒かれ—速やかれ(急かれる意味)。
○あひ初めて　逢ひ初めて—藍染めて。

○いづくより置く　露は空より置くものだが、歸りし空もなかつたと云つたので。

○何のくれをまつらむ　心は既に君の所にとゞめて歸つて來たのだから何が暮れを待つのか怪しまれる。

○よをこめて　竹のよ—夜。

しける　　讀人しらず

皆人の惜しむ日なれどわれはたゞ遲く暮れゆくなげきをぞする

左衞門督家成歌合し侍りけるによめる　　藤原範綱

すみよしのあさ澤小野の忘れ水たえ〴〵ならで逢ふよしもがな

藤原保昌朝臣に具して丹後國へまかりけるに忍びて物いひける男のもとへいひつかはしける　　和泉式部

われのみや思ひおこせむあぢきなく人は行方もしらぬものゆゑ

物いひ侍りける女のもとへいひ遣はしける　　大江爲基

思ふことなくてすぎぬる世の中につひに心をとゞめつるかな

夜がれもせずまうで來ける男の秋立ちける日その夜しもまうでこざりければあしたにいひ遣はしける　　一宮紀伊

常よりも露けかりける今宵かなこれや秋立つはじめなるらむ

女の許に罷りたりけるに親のいさむれば今はえなむ逢ふまじきといはせて侍りければよめる　　坂上明兼

せきとむる岩間の水もおのづから下には通ふものとこそきけ

題しらず　　惠慶法師

○あさ澤小野の忘れ水　これまでは絶え〴〵を起す序。

○人は行方をしらぬ物ゆゑ　君は我が行く方も知らぬものながら。

○つひに心を　つひに君に心を。

○夜がれ　夜離れ。夜離れて寄りつかないこと。

○秋立つ　男の厭き立つを云ひ懸く。

○えなむ逢ふまじき　逢ひ得ますまい。

○せきとむるの歌　堰き止める水でも下には通ふと聞くものを、親の諫めとて通ふ道がないとは思へません。

等思兩人といふ事をよめる　　右大臣

逢ふ事はまばらに編めるいよ簾いよ〳〵人をわびさするかな

をとこに忘られて歎きける頃八月ばかりにまへなる前栽の露をよもすがらながめてよめる　　赤染衞門

何處をもよがるゝ事のわりなきに二つにわくる我が身ともがな

題しらず　　曾禰好忠

諸ともにおきゐる露のなかりせば誰とか秋の夜をあかさまし

新院くらゐにおはしましける時雖契不來戀といふ事をよませ給ひけるによみ侍りける　　關白前太政大臣

きたりとも寐るまもあらじ夏の夜の有明の月も傾きにけり

題しらず　　和泉式部

來ぬ人をうらみもはてじ契りおきしその言の葉もなさけならずや

月のあかかりける夜まうできたりける男の立ちながら歸りにければあしたにいひ遣はしける

夕暮に物思ふことはまさるかと我ならざらむ人にとはばや

涙さへいでにしかたをながめつゝ心にもあらぬ月を見しかな

○いよ簾　伊豫産の簾。いよ〳〵を云ひ起す序。

○人を　一本「われを」

○よがるゝ　夜離るゝ。一本「よがれむ」

○わりなきに　切なさに。

○おきゐる　置き―起き。

○寐るまもあらじ　夜も更けたので逢つても寐る間もあるまい。

○その言の葉もなさけならずや　たとひ僞りでも契つたその言葉も君の情ではないか。

○まさるかと　夕暮になると誰でも物思ひのまさるものかと。

○いでにしかた　「君の出でにし方」を云ひ含めてゐる。

題しらず　　讀人しらず

つらしとて我さへ人を忘れなばさりとて中のたえや果つべき　　平公誠

逢ふことや涙の玉の緒なるらむしばし絕ゆれば落ちてみだるゝ

弟子なりけるわらはの親に具して人の國へあからさまにとてまかりけるが久しく見えざりければたよりにつけていひ遣はしける　　最嚴法師

み狩野の暫(しば)しのこひはさもあらばあれ反(そ)り果てぬるか矢形尾(やかたを)の鷹

たのめたりける男をいまや〳〵と待ちけるにまへなる竹の葉に霰の降りかゝりけるを聞きてよめる　　和泉式部

竹の葉に霰ふる夜はさら〳〵にひとりは寐(ね)べき心地こそせね

程なく絕えにける男のもとへいひ遣はしける　　さがみ

ありふるも苦しかりけりながからぬ人の心をいのちともがな

かよひける女のこと人に物いふと聞きていひつかはしける　　淸原元輔

うきながらさすがに物の戀しきは今はかぎりと思ふなりけり

久しく音せぬ男につかはしける　　俊子內親王家大進

とはぬ間をうらむらさきに咲く藤の何とてまつに懸りそめけむ

○つらしとて　君がつれなくするからとて。
○さりとて　さうつれなくするからとて。
○中のたえや果つべき　二人の仲の絕え果つべきでない。
○緒　組紐。
○絕ゆれば　緒が絕えれば―君の通ひ來ることが絕えれば。
○あからさまにとて　かりそめにとて。一寸とて。
○こひ　「息ひ」か。一本「こゐ」
○反り果てぬるか　反りとは鷹が放れて反れ行くこと。
○矢形尾　矢の形した尾。
○さら〳〵に　霰の竹の葉に當る音に更に〳〵の意味を云ひ懸く。
○絕えにける男　仲の中絕した男
○ありふるもの歌　金葉和歌集卷七に「そら事いひて久しう音せぬ人の許に云ひ遣はしける」として出てゐる。
○こと人　他の人。
○うきながら　人の心は憂きながらも。
○今はかぎり　私との仲は今はこれまで。
○うらむらさき　恨む―裏紫。
○まつ　待つ―松。

男の絶え／＼になりける頃いかにととひたる人の返事によめる　　高階章行朝臣女

思ひやれかけひの水のたえ／＼になり行くほどの心ぼそさを

いとほしく侍りけるわらはの大僧正行尊が許へまかりにければいひ遣はしける　　律師仁祐

鶯は木づたふはなのえだにても谷のふるすを思ひわするな

返事わらはにかはりて　　大僧正行尊

うぐひすは花のみやこも旅なれば谷の古巢をわすれやはする

左衞門督家成が長月の晦日頃に初めていひそめて如何なる事かありけむ絶えて音づれ侍らざりけるがその冬ごろ聞くことのあればはゞかりてえなむ言はぬといはせて侍りける返事によめる　　皇嘉門院出雲

夜をかさね霜と共にしおきぬればありしばかりの夢をだに見ず

家に歌合し侍りけるに逢不遇戀といふことをよめる　　中納言國信

逢ふ事も我が心よりありしかば戀ひは死ぬとも人はうらみじ

藤原仲實朝臣

汲み見てし心ひとつをしるべにて野中の清水わすれやはする

關白前太政大臣の家にてよめる　　藤原基俊

○かけひの水の　筧の水のやうに

○鶯はの歌　鶯をわらはに、花の枝を行尊、谷の古巢を仁祐自身に喩へてゐる。

○わすれやはする　忘れませうかい。

○霜と共にしおきぬれば　君を待つて起きてゐるので。

○ありしばかりの夢　其の頃のやうな夢。

○我が心よりありしかば　我が心から逢つたのだから。

○野中の清水　戀人に喩ふ。

淺茅生にけさおく露の寒けくにかれにし人のなぞやこひしき

心かはりたる男にいひつかはしける　　清少納言

わすらるゝ身はことわりと知りながら思ひあへぬは涙なりけり

久しく音せぬ男にいひつかはしける　　讀人しらず

今よりはとへともいはじわれぞたゞ人を忘るゝ事を知るべき

中納言通俊たえ侍りければいひつかはしける　　讀人しらず

さりとては誰にかいはむ今はたゞ人を忘るゝこゝろをしへよ

返し　　中納言通俊

まだ知らぬことをばいかゞ敎ふべき人を忘るゝ身にしあらねば

おなじ所なる男のかきたえにければよめる　　和泉式部

幾かへりつらしと人をみ熊野のうらめしながら戀しかるらむ

大江公資にわすれられてよめる　　さがみ

夕ぐれは待たれしものを今はたゞ行くらむ方を思ひこそやれ

題しらず　　讀人しらず

忘らるゝ人目ばかりを嘆きにて戀しき事のなからましかば

○寒けくに　寒きに。
○かれにし　離（か）れ—枯れ。
○とへ　訪へ。
○知るべき　知るのがよい。
○さりとてはの歌　それにしても人を忘れる心を誰に云つて敎へて貰はうか。君よ敎へて下さい。
○人を忘るゝ身にしあらねば　私は人を忘れる身ではないから。
○み熊野のうらめし　み—見。浦—恨めし。
○忘らるゝの歌　君に忘れらる人目の恥かしさだけを嘆きにしてゐられるならまだ堪へられように、その上戀しい事が添はつて堪へられない。せめて戀しいことでもなかつたならばなア。

詞花和歌集　卷第九

雜　上

ところ〴〵の名を四季によせて人々歌よみ侍りけるに三島江の春の心をよめる　源頼家朝臣

春霞かすめるかたや津の國のほのみしま江のわたりなるらむ

堀河院の御時らへのをのこども御前にめして歌よませたまひけるに　源俊頼朝臣

須磨の浦にやくしほがまの煙こそ春にしられぬかすみなりけれ

おなじ御時百首歌奉りけるによめる

なみたてる松のしづ枝をくもでにてかすみわたれる天の橋立

播磨寺に侍りける時三月ばかり船よりのぼり侍りけるに津の國にやまぢといふ所に參議爲通朝臣しほゆあみて侍ると聞きてつかはしける　平忠盛朝臣

ながゐすな都の花も咲きぬらむわれもなにゆゑいそぐ船出ぞ

修行しありかせ給ひけるに櫻の花の咲きたりけるもとにやすみ給ひてよ

○ほのみしま江　ほのかに見た—三島江（攝津國）。○わたり　渡り—邊。

○春にしられぬ　春に內密の。

○くもで　蜘蛛手。橋柱に筋かへに打渡した木。○船より　一本「船にて」○しほゆあみて　鹽湯浴びて。○ながゐすな　長居するな。○われもなにゆゑいそぐ船出ぞ　都の花も咲いたであらうから我も自然と急いで船出する意味。○ありかせ　歩かせ。

ませ給ひける　花山院御製

木のもとを栖とすればおのづから花みる人になりぬべきかな

人のもとにまかりたりけるに櫻花おもしろく咲きて侍りければあしたに
あるじのもとへいひ遣はしける　天台座主源心

ちらぬ間にいまひとたびも見てしがな花に先立つ身ともこそなれ

花をしむ心をよめる　大藏卿匡房

春くればあぢかたの海一かたにうくてふ魚(いを)の名こそをしけれ

宇治前太政大臣花見にまかりけると聞きてつかはしける　堀河右大臣

身をしらで人をうらむるこゝろこそ散る花よりもはかなかりけれ

二條關白しら河へ花見になむといはせて侍りければよめる　小式部內侍

春の來ぬところはなきを白河のわたりにのみや花はさくらむ

入道攝政八重山吹をつかはしていかゞ見るといはせて侍りければよめる　大納言道綱母

たれかこの數はさだめしわれはたゞとへとぞ思ふ山吹のはな

新院位におはしましし時皇后宮の御方に上達部らへのをのこどもをめし
て藤花年久といふ事をよませ給ひけるによめる　大納言師頼

○おのづから　自然と。
○花みる人　花を賞する俗人。

○見てしがな　見たいものだ。

○あぢかたの海　安藝國豐田郡か
○うくてふ魚の名　浮くといふ魚
の名(櫻鯛)。

○身をしらで　我が身の散り易い
のを知らずして。

○春の來ぬの歌　春の來ない所は
ないのに、而も白河邊ばかり花は
咲くのだらうか。(二條關白の通
つて來ないことを恨んだのであら
う。)

○この數　八重といふ數。
○とへ　十重-訪へ。

春日山きたの藤なみ咲きしより榮ゆべしとはかねて知りにき

修理大夫顯季みまさかの守に侍りけるとき人々いざなひて右近馬場にまかりて郭公まち侍りけるに俊子内親王の女房の車まうできて連歌し歌よみなどしてあけぼのに歸り侍りけるにかの女房の車より

美作やくめのさら山と思へども和歌の浦とぞいふべかりける

この返しせよといひければよめる　　贈左大臣

和歌の浦といふにて知りぬ風吹かば波のよりこと思ふなるべし

左衞門督家成布引の瀧見にまかりて歌よみ侍りけるによめる　　藤原隆季朝臣

雲居よりつらぬきかくる白たまをたれ布引のたきといひけむ

新院位におはしましし時御前にて水草隔舟といふ事をよみ侍りける　　大藏卿行宗

難波江のしげき蘆間をこぐ船はさをのおとにぞゆく方をしる

題しらず　　律師濟慶

思出もなくてや我が身やみなまし姨捨山の月見ざりせば

父長實信濃守にてくだり侍りけるに共にまかりてのぼりけるころ左京大夫顯輔家に歌合し侍りけるに　　藤原爲眞

○きたの藤なみ　藤原氏に四家があつて北家は不比等の後で、皇后も亦その出なので、それに北の藤なみを喩へてゐる。

○美作やの歌　顯季は美作守なので、美作國の久米の皿山かと思つたら、連歌し、歌よみなどしたので和歌の浦といふべきだつたの意味。

○返しせよ　返歌せよ。

○よりこと思ふなるべし　波のやうに寄つて來て語らへと貴方は私に對して思ふのでせう。

○布引の瀧　攝津國武庫郡。

○布引　上に「白玉を貫きかけて」とあるに對してゐる。

○思出もの歌　私が姨捨山のあの思ひ出多い月を見なかつたならば我が月は一生思出もなくて終つたらう。

名にたかき姨捨山も見しかどもこよひばかりの月はなかりき

月あかく侍りける夜人々まうで來て遊び侍りけるに月入りにければ興つきて各歸りなむとしければよめる

大中臣能宣朝臣

月はいり人は出でなばとまりゐてひとりやわれは空をながめむ

御ぐしおろさせ給ひて後六條院の池に月のうつりて侍りけるを御覽じてよませ給ひける

小一條院御製

池水にやどれる月はそれながらながむる人のかげぞかはれる

左京大夫顯輔中宮亮にて侍りける時下﨟にこえらるべしと聞きて宮の女房の中に歎き申したりけるに返事にたれとはなくて

世の中を歎きないりそ三笠山さし出づる月のすまむかぎりは

田家月といふ事をよませ給ひける

新院御製

月きよみ田中にたてるかりいほのかげばかりこそ曇りなりけれ

新院位におはしましし時月あかく侍りける夜女房につけて奉りける

太政大臣

すみのぼる月の光にさそはれて雲の上まで行くこゝろかな

あれたるやどに月のもりて侍りけるをよめる

良暹法師

○月はいりの歌　入り、出で、とまりなど言葉の使ひ方に注意。
○御ぐしおろさせ給ひて　剃髮なさつて。
○それながら　そのまゝながら。
○こえらるべし　官が越えられるだらう。
○嘆きないりそ　嘆き入るな。
○すまむ　澄まむ―住まむ。
○月きよみ　月の淸いので。
○かりいほ　假庵。
○雲の上　宮中の意味を含む。

板間より月のもるをも見つるかな宿はあらして住むべかりけり

題しらず　内大臣

隈もなくしのだの森の下晴れて千枝のかずさへ見ゆる月かげ

山家月をよめる　源道濟

さびしさに家出しぬべき山里をこよひの月に思ひとまりぬ

新院殿上にて海路月といふ事をよめる　平忠盛朝臣

行く人も天のとわたるこゝちして雲のなみぢに月をみるかな

題しらず　橘爲義朝臣

君まつと山の端いでてやまの端にいるまで月をながめつるかな

堀河院御時中宮の御方にまゐりて女房に物申しける程に月の山の端より立ちのぼりけるを見て女の月はまつにかならず出づるなむ哀れなるといひければよめる　大納言公實

いかなれば待つには出づる月かげのいるを心に任せざるらむ

題しらず　花山院御製

こゝろみにほかの月をも見てしがなわが宿からの哀れなるかと

月のあかく侍りける夜前大納言公任まうできたりけるをする事侍りて遅

○しのだの森　和泉國。
○月かげ　一本「月かた」

○天のとわたるこゝちして　月が海に映るので天路をわたる心地して。

○待つには出づる　待てば必ずに出て來る。
○いるを　入るのを。
○ほかの月　他から見る月。
○見てしがな　見たいな。
○わが宿からの哀れなるかと　我が宿から見る月なのであはれなのかと。
○あかく　明るく。

く出であひければ待ちかねて歸り侍りにければつかはしける　中務卿具平親王

恨めしくかへりけるかな月夜には來ぬ人をだに待つとこそきけ

屏風の繪に山のみねにゐて月見たる人かきたる所によめる　大江嘉言

かぐ山の白雲かゝるみねにてもおなじたかさぞ月は見えける

家に歌合し侍りけるによめる　左京大夫顯輔

夜もすがら富士の高嶺に雲きえて清見が關にすめるつきかげ

山城守になりてなげき侍りける頃月のあかかりける夜まうで來りける人のいかゞ思ふととひはべりければよめる　藤原輔尹朝臣

山城のいはたの森のいはずともこゝろの中をてらせ月かげ

久しく音もせぬ人のもとへ月のあかかりける夜いひつかはしける　中原長國

月にこそむかしのことは覺えけれわれを忘るゝ人にみせばや

山科寺にまかりけるに宗延法師にあひて終夜物いひ侍りけるに有明の月の三笠山よりさしのぼりけるを見てよめる　琳賢法師

ながらへば思出にせむおもひ出でよ君とみかさの山の端のつき

京極前太政大臣家歌合によめる　大藏卿匡房

あふさかの關の杉原したはれて月のもるにぞまかせざりける

○恨めしくの歌　古今集卷十五に「月夜には來ぬ人待たるかき曇り雨も降らなむわびつゝも寢む」とある。
○歸りける　「け」一本「つ」
○かぐ山　大和國磯城郡。一本「かこ山」
○たかさぞ　「ぞ」一本「に」
○つきかげ　一本「つきかな」
○とひ　一本「いひ」
○山城のいはたの森の　「いはず」を云ひ起す序。
○覺え　思はれ。思ひ出され。
○みせばや　月を見せたい。
○君とみかさの山　「君と見る」を云ひ懸く。
○杉原　一本「杉むら」
○もる　關を守る—月の洩る。

つくしより歸りまうで來てもとすみける所の有りしにもあらず荒れたりけるに月のいとあかく侍りければよめる　　帥前内大臣

つく〴〵と荒れたる宿をながむれば月ばかりこそ昔なりけれ

題しらず　　高松上

深く入りてすまばやと思ふ山の端をいかなる月の出づるなるらむ

たがひにつゝむ事ありける男のたやすく逢はずとうらみければ　　和泉式部

おのが身のおのが心にかなはぬを思はば物はおもひしりなむ

忍びける男のいかゞ思ひけむ五月五日の朝にあけて後歸りて今日あらはれぬるなむ嬉しきといひたりける返事によめる

菖蒲草かりにもくらむ物ゆゑにねやのつまとや人の見るらむ

保昌に忘られて侍りけるころ兼房朝臣のとひて侍りければよめる

人しれず物おもふことはならひにき花にわかれぬ春しなければ

藤原盛房かよひける女をかれ〴〵になりて後神無月の二十日頃に時雨のしける日何事かといひつかはしたりければ母の返事にいへりける　　讀人しらず

おもはれぬ空のけしきを見るからに我もしぐるゝ神無月かな

題しらず　　待賢門院堀河

○つく〴〵と　一本「つれ〴〵と」
○昔　昔のまゝ。
○思はば　君が思ひ知るならば。
○かりにもくらむ　刈り(假り)にも來らむ。
○ねやのつま　根の端(つま)—閨の妻。
○ならひにき　馴れてしまつた。
○花にわかれぬ春しなければ　花に別れない春といふものは無いから。
○母の返事　女の母の返事。
○おもはれぬ　思はれぬ—面晴れぬ。
○見るからに　見るにつれて。
○神無月　十月。

あだ人はしぐるゝ夜半の月なれやすむとてえこそ頼むまじけれ

たえにける男の五月ばかりに思ひかけずまうできたりければよめる

讀人しらず

たが里にかたらひかねて郭公かへるやま路のたよりなるらむ

たのめたる夜見えざりける男の後にまうできたりけるに出であはざりければ言ひわづらひてつらき事をしらせつるなどいはせたりければよめる

清少納言

よしさらばつらさは我にならひけり頼めて來ぬはたれか教へし

かきたえたる男のいかゞ思ひけむきたりけるがかへりける曉に雨のいたくふりければ朝にいひつかはしける

江侍從

かづきけむ袂は雨にいかゞせし濡るゝはさても思ひしれかし

題しらず

曾禰好忠

ふかくしも頼まざらなむ君ゆゑに雪ふみ分けて夜な〳〵ぞ行く

いたく忍びける男の久しく音せざりければいひつかはしける

赤染衞門

世の人のまだしらぬまの薄冰見わかぬほどに消えねとぞ思ふ

いひわたりける男の八月ばかりに袖の露けさなどいひたりける返事によ

○月なれや　月であるからか。
○すむ　澄む—住む。
○たが里にの歌　君はあだ人だから、誰の里に語らひをした歸り序でに立ち寄つたのか。相手をほとゝぎすに喩ふ。
○たのめたる夜　相手が來ると頼みにしてゐた夜。
○わづらひて　一本「わびて」
○よしさらばの歌「つらきことを知らせつる」の言葉に答へて、よしや、つらさは私に習つたとしても、では、頼みに待つたのに來なかつた仇心は誰が君に敎へたのか
○かづきけむの歌　雨にあつて歸る時、被つた袂はいかゞ濡れたことでせう。それによつて涙で我が袖の濡れることを思ひ知つて下さい。「かし」は强めの助詞。
○まだしらぬま「まだ知らぬ間」に沼を云ひ懸く。
○見わかぬほどに　見分けない程に。志がどうせ薄いのなら顯はれない内に。
○消えね　消えてしまへ。
○袖の露けさ　涙で。

める　　和泉式部

秋はみな思ふことなき荻の葉もすゑたわむまで露はおきけり

藤原隆時朝臣ものいひ侍りける女をたえにければ弟忠清かよひ侍りけるも程なく忘れ侍りければ忠清が弟隆重にあひぬと聞きてかの女にいひつかはしける　　藤原忠清

いかなればおなじ流れの水にしもさのみは月のうつるなるらむ

題しらず　　さがみ

住吉のほそ江にさせるみをつくし深きにまけぬ人はあらじな

物思ひける頃よめる　　大納言道綱母

降る雨のあしとも落つる涙かなこまかに物を思ひくだけば

思ふ事侍りける頃いのねられず侍りければ終夜ながめ明して有明の月の隈なく侍りけるが俄にかきくらししぐれけるを見てよめる　　赤染衛門

神無月ありあけの空のしぐるゝをまた我ならぬ人や見るらむ

忍び〳〵に物思ひけるころよめる　　出羽弁

しのぶるも苦しかりけりかずならぬ身には涙のなからましかば

忍びたる男のなりける衣をかしがましとておしのけければよめる　　和泉式部

○思ふことなき荻の葉も　何の物思ひもない荻の葉でも。
○露はおきけり　だから君の袖の露も物思ひの故とは私には思はれない。
○たえにければ　仲絶えたので。
○おなじ流れの水　忠清兄弟に喩ふ。
○月　その兄弟にも心の移った女に喩ふ。
○うつる　一本「やどる」
○ほそ江　攝津國の細江。
○みをつくし　澪標—身を盡し。
○深きにまけぬ云々　澪標のさしてある深い水脈の様な深い思ひに負けないやうな男はあるまいな。
○いのねられず　眠られず。
○我ならぬ人や見るらむ　私以外の人が見るだらうや。「や」は反語。
○なりける衣　鳴りける衣。衣ずれの音を立てた衣。
○かしがまし　やかましい。

○音せぬ「音沙汰せぬ」意味を云ひ懸く。
○なる　鳴る—成る。
○立ちおくれなば云々　君に死に後れるならば長らへてゐまい。
○忍びけりやと　戀ひ忍んでをるかと。
○佐野のふな橋　上野國群馬郡。
○おとすなり　音すなり。
○たなれ　手馴れ。
○長元　後一條天皇の年號。
○よりも　「も」は感動の助詞。
○あらはれ　現はれ—洗はれ。
○こはせ　一本「こはせ」
○ね　根—泣(ね)。
○うき　浮泥(うき)—憂き。
○身を　一本「世を」
○たかんな　筍(たけのこ)。
○かへしても　御子の花山院にかへしても。
○このよ　花山院の齡。

音せぬはくるしきものを身に近くなるとていとふ人もありけり

おもくわづらひけるに立ちおくれなばえなむながらふまじきといひたる男の返事によめる　大貳三位

人の世にふたゝび死ぬるものならば忍びけりやと心みてまし

題しらず　左大辨俊雅母

夕霧に佐野のふな橋おとすなりたなれの駒の歸りくるかも

長元八年宇治前太政大臣の家に歌合しけるにかちがたのをのこども住吉にまうでて歌よみ侍りけるによめる　式部大輔資業

住吉のなみにひたれる松よりも神のしるしぞあらはれにける

ものへまかりける道に人のあやめをひきけるを長き根やあるとこはせけるををしみ侍りければよめる　周防内侍

いかでかくねを惜しむらむ菖蒲草うきには聲もたてつべき身を

冷泉院へたかんな奉らせ給ふとてよませ給ひける　花山院御製

世の中にふるかひもなき竹の子はわがへむとしを奉るなり

御かへし　冷泉院御製

年へぬる竹の齡をかへしてもこのよをながくなさむとぞ思ふ

男をうらみてよめる　　和泉式部

あしかれと思はぬ山の峯にだにおふなるものを人のなげきは

津の國に古曾部といふ所にこもりて前大納言公任のもとへいひつかはしける　　能因法師

ひたぶるに山田もる身となりぬれば我のみ人をおどろかすかな

後二條關白はかなき事にてむつかり侍りければ家の中には侍りながら前へもさしいで侍らで女房の中にいひ入れ侍りける　　源仲正

三笠山さすがに陰にかくろひてふるかひもなきあめの下かな

おほやけの御かしこまりにて侍りけるを僧正源覺申しゆるして侍りければそのよろこびに五月五日まかりてよめる　　平致經

君ひかずなりなましかば菖蒲草いかなるねをか今日はかけまし

長恨歌の心をよめる　　源道濟

思ひかね別れし野邊をきてみれば淺茅が原に秋かぜぞ吹く

陸奥國の任はてて上り侍りけるにたけぐまの松のもとにてよめる　　橘爲仲朝臣

古里へわれはかへりぬ武隈（たけぐま）のまつとはたれに告げよとか思ふ

世にしづみて侍りけるころ春日の冬のまつりに幣たてまつりけるに思ひ

○おふ　負ふ―生ふ。
○なげき　「き」に木を云ひ懸く。
○ひたぶるに　ひたすらに。
○山田もる身　山田を守る身。
○我のみ人をおどろかす　自分はかり便りして人を驚かすが、人は相手にしてくれない。
○むつかり　怒り。
○ふるかひもなき　降る―經る。御蔭蒙りながら御前に出られないので。
○あめ　雨―天。
○おほやけの御かしこまり　天皇の御勘當。
○君ひかずなりなましかば　君が引かなくなつたならば「引く」に贔屓する意味を云ひ懸く。
○長恨歌　唐の白樂天が楊貴妃と玄宗皇帝との戀愛生活を歌ひ、その別離の恨みをのべた長詩。
○思ひかねの歌　長恨歌の「馬嵬坡下泥土中、不レ見ニ玉顏一空死處、君臣相顧盡沾レ衣」の趣を。
○古里へ　一本「古里に」
○武隈　陸前國。
○まつとは　松―待つ。松が又の國司に誰を待つとは。一本「まつとも」
○春日　藤原氏の祖神春日神社。

ける事をみてぐらに書きつけ侍りける　　左京大夫顯輔

枯れはつる藤の末葉(うらは)のかなしきはたゞ春の日をたのむばかりぞ

帥前内大臣あかしに侍りける時戀ひかなしみて病になりてよめる　　高内侍

夜の鶴みやこの内にこめられて子を戀ひつゝもなき明かすかな

堀河院の御時百首歌奉りけるによめる　　大納言師頼

身のうさは過ぎぬる方を思ふにもいま行末のことぞかなしき

大藏卿匡房

題しらず　　大納言伊通

埋木のしたは朽つれどいにしへの花の心は忘れざりけり

小野宮右大臣のもとにまかりて昔のことなどいひてよめる　　清原元輔

今はたゞむかしぞ常に戀ひらるゝ殘りありしを思出にして

題しらず　　賀茂政平

老いてのち昔をしのぶ涙こそこゝら人目をつゝまざりけれ

新院のおほせにて百首歌奉りけるによめる　　藤原季通朝臣

ゆく末のいにしへばかり戀しくば過ぐる月日も歎かざらまし

厭ひてもなほ惜しまるゝわが身かな二度くべきこの世ならねば

○みてぐら　御幣。
○藤の末葉　顯輔は北家の藤原氏なので自分を藤の末葉に喩へてゐる。
○春の日　春日の神を云ひ含む。
○あかし　明石。
○夜の鶴の歌　白氏文集に「五絃彈々第四絃冷々、夜鶴憶ㇾ子籠中鳴。」の趣を。
○みやこ　「こ」に籠(こ)を云ひ懸く。
○過ぎぬる　一本「過ぎにし」
○いま　一本「なほ」
○花の心　盛んだつた頃の心。
○常に　一本「更に」
○こゝら人目　多くの人の外見。一本「よその人目」
○ゆく末のいにしへばかり戀しくば　行末が過去ほどに戀しいならば。
○くべき　來ることの出來る。

（廣田　攝津國武庫郡の廣田神社のある所。

（我が身ひとつもしづまざりけり　自分一身ばかりも沈淪しない事た、月も同じく沈んでゐるのた。

神祇伯顯仲廣田にて歌合し侍るとて寄月述懐といふ事をよみてといひ侍りければ遣はしける

左京大夫顯輔

難波江の蘆間に宿る月みれば我が身ひとつもしづまざりけり

詞花和歌集　卷第十

雜　下

みやこに住み侘びてあふみにたなかみといふ所にまかりてよめる　源俊頼朝臣

葦火たくまやの棲(すみか)は世の中をあくがれ出づるかどでなりけり

女どもの澤に若菜摘むを見てよめる

しづのめがゑぐ摘む澤の薄冰いつまでふべき我が身なるらむ

四位して殿上おりて侍りけるころ鶴鳴皐といふことをよめる　藤原公重朝臣

むかし見し雲居をこひてあしたづの澤邊になくや我が身なるらむ

新院六條殿におはしましける時月あかくはべりける夜御船にめして月前言志といふ事をよませ給ひけるによめる　右近中將教長

三日月のまた有明になりぬるやうき世をめぐるためしなるらむ

櫻花のちるを見てよめる　藤原實方朝臣

散る花に又もやあはむおぼつかな其の春までと知らぬ身なれば

世の中さわがしく聞えけるころよめる　增基法師

○たなかみ　近江國栗太郡。
○まや　雨下。棟の兩側に破風を設けて前後に雨滴の落ちるやうに葺き下した家造り。
○出づる　一本「そむる」
○ゑぐ　芹の一種。
○薄冰　薄冰のやうに。
○ふべき　經ることの出來る。
○四位して　四位に敍せられて。

○三日月の歌　人間の榮枯を月の滿缺に喩へた歌。

○おぼつかな　おぼつかない。

朝なく〳〵鹿のしがらむ萩が枝のすゑ葉の露のありがたの世や

秋の野をすぎまかりけるに尾花の風になびくを見てよめる　源　親　元

花すゝき招かばこゝにとまりなむいづれの野邊もつひのすみかぞ

心地れいならずおぼされける頃よみ給ひける　四　條　中　宮

よそに見し尾花が末の白露はあるかなきかの我が身なりけり

世の中はかなくおぼえさせ給ひけるころよませたまひける　花　山　院　御　製

かくしつゝ今はとならむときにこそ悔しき事のかひもなからめ

いりあひの鐘の聲を聞きてよめる　和　泉　式　部

夕暮はものぞ戀しき鐘の音をあすも聞くべき身とし知らねば

大納言忠敎身まかりける後の春鶯の鳴くを聞きてよめる　藤　原　敎　良　母

うぐひすのなくに涙の落つるかなまたもや春にあはむとすらむ

はかなき事のみおほく聞えけるころよめる　法　橋　清　昭

皆人の昔がたりになり行くをいつまでよそに聞かむとすらむ

夏の夜はしに出でゐてすゞみ侍りけるに夕闇のいとくらくなりければよめる　神　祇　伯　顯　仲

このよだに月まつほどは苦しきにあはれいかなる闇に惑はむ

○しがらむ　纏はる。
○ありがたの世や　生き存へることの有り難い世ぢや。
○つひのすみか　終局の住居。
○れいならず　不例に。不快に。
○かくしつゝ　かやうにうか〳〵として。
○今はと　今はこれまでと。
○身とし知らねば　身とは分らないから。「し」は强めの助詞。
○身まかりける後　なくなつた後
○すらむ　一本「思へば」
○皆人のの歌　人は死んで人の昔語になつて行くのを、自分はいつまでよそごとに聞かうとするのだらう。やがて我が身も人の昔語になるのだらう。

病おもくなり侍りけるころ雪のふるを見てよめる　　良暹法師

おぼつかなまだ見ぬみちをしでの山雪ふみわけて越えむとすらむ

大江擧周(たかちか)の朝臣おもくわづらひてかぎりに見え侍りければよめる　　赤染衞門

かはらむといのる命はをしからでさても別れむことぞ悲しき

病重くなり侍りければ三井寺へまかりて京の坊にうゑおきて侍りける八重紅梅を今は花咲きぬらむ見ばやといひ侍りければ折りにつかはして見せければよめる　　大僧正行尊

この世にはまたも見るまじ梅の花ちりぢりならむ事ぞ悲しき

その後程なく身まかりにけるとぞ

人の四位をとらせて侍りければ　　讀人しらず

此の身をば空しき物と知りぬればつみえむ事もあらじとぞ思ふ

題しらず　　増基法師

我が思ふことのしげきにくらぶればしのだの森の千枝はものかは

大江以言

網代には沈む水屑(みくづ)もなかりけり宇治のわたりに我やすままし

大原に住みはじめけるころ俊綱朝臣のもとへいひつかはしける　　良暹法師

○しでの山　死後死者の辿り行くといふ山。
○擧周　赤染衞門の子。
○かぎりに　今は最期に。
○かはらむとの歌　子の擧周の命に代つて死なうと祈る命は惜しくはなくて、さうして擧周に別れるのが悲しいのです。
○坊　僧の寢泊りする家屋。
○見ばや　見たい。
○折りにつかはして見せければ　折りに人をやつて行尊に見せたので。
○見る　一本「逢ふ」
○つみえむ　椎を摘み得む。椎―四位。
○しげき　思ふ事の繁き―木の繁き。
○ものかは　物かい。物の數でもない。
○網代にはの歌　自分が世に沈んで浮ばないのみ詠み述べた歌。

大はらやまだすみがまもならはねば我が宿のみぞ煙たえける

題しらず　　賢智法師

なみだがはその水上をたづぬれば世のうきめより出づるなりけり

この集撰ぶとて家集こひて侍りければよめる　　太政大臣

思ひやれ心のみづのあさければかきながすべき言の葉もなし

周防内侍あまになりぬと聞きていひ遣はしける　　大藏卿匡房

かりそめの浮世の闇をかき分けてうらやましくも出づる月かな

法師になりてのち左京大夫顯輔が家にて歸雁をよめる　　沙彌蓮寂

歸る雁西へゆきせばたまづさに思ふことをば書きつけてまし

題しらず　　讀人しらず

身をすつる人は誠に捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけれ

藤原實宗常陸の介に侍りける時大藏省の使(つかひ)ども嚴しくせめければ匡房にいひに侍りければ遠江にきりかへて侍りければいひ遣はしける　　太皇太后宮肥後

筑波山ふかくうれしとおもふかな濱名の橋にわたすこゝろを

下﨟にこえられて堀河關白のもとに侍りける人のもとへおとゞにも見せよとおぼしくてつかはしける　　大中臣能宣朝臣

○すみがま　炭竈－住み。
○煙たえける　清貧の様を云ふ。
○うきめ　憂き目。
○この集　詞花和歌集。
○月　煩惱の闇をかき分けて悟りに入つた周防内侍を喩ふ。
○捨つるかは　捨てるのかい。
○大藏省のつかひ　諸國の貢進を致させる使者か。
○遠江にきりかへて　常陸國からとるべき物を遠江國からとつて。
○筑波山　常陸國の深山。
○濱名の橋　遠江國の橋。

○星をいたゞく　堀河關白を星に喩へてゐるのであらう。
○しも　霜（白髮）―下（下官）。
○白河院　一本「堀河院。」
○おそく下りければ　下ることが遲れたので。
○月　天皇に喩ふ。
○さやに　さやかに。
○とゞこほる　滯る―氷る。
○まつ　松―待つ。
○白河のながれ　白河院の流れたる新院（崇德院）を指す。
○百とせ　人生百二十。
○蝶の夢　莊子に「昔者莊周夢爲二胡蝶一　々然胡蝶也。自喩適レ志與。不レ知レ周也。」とある。
○はゝその杜　山城國相樂郡の柞森に母を云ひ懸く。
○こほり　郡。一本「こころ」

年をへて星をいたゞく黒髪のひとよりしもになりにけるかな

白河院位におはしましける時修理大夫顯季につけて申さする事侍りける
を宣旨のおそく下りければその冬ごろいひつかはしける　津守國基

雲の上は月こそさやに冴えわたれまだとゞこほるものや何なる

かへし　修理大夫顯季

とゞこほることはなけれど住吉のまつ心にや久しかるらむ

新院位におはしましける時うへのをのこどもを召して述懷の歌よませ給
ひけるに白河院の御事忘るゝ時なくおぼえ侍りければ　大納言成通

白河のながれをたのむこゝろをば誰かは空にくみて知るべき

堀河院御時百首歌奉りける中に　大藏卿匡房

百とせの花に宿りて過してきこのよは蝶の夢にぞありける

むすめのさうし書かせけるおくに書きつけける　源義國妻

木の下（もと）にかきあつめたる言の葉をはゝその杜のかたみとは見よ

左京大夫顯輔近江守に侍りける時とほきこほりにまかりけるに便り（たより）につ
けていひ遣はしける　關白太政大臣

思ひかねそなたの空をながむればたゞ山の端にかゝる白雲

新院位におはしましし時海上遠望といふことをよませ給ひけるによめる

わたの原こぎ出でてみれば久方の雲居にまがふ沖つしら波

後冷泉院御時大嘗會主基方御屏風に備中國高倉山にあまたの人花摘みたるかたかきたる所によめる　　藤原家經朝臣

うちむれて高くら山につむものはあらたなる世のとみ草の花

今上大嘗會悠紀方御屏風に近江國板倉の山田に稻をおほく刈りつめりこれを人見たるかたかきたる所をよめる　　左京大夫顯輔

板くらの山田につめるいねを見て治まれる世のほどを知るかな

圓融院御時堀河院に二たび行幸せさせ給ひけるによめる　　曾禰好忠

水上のさだめてければきみが代にふたゝびすめる堀河のみづ

有馬の湯にまかりたりけるによめる　　宇治前太政大臣

いざやまたつゞきも知らぬ高嶺にてまづくる人にみやこをぞ問ふ

熊野へまうでけるみちにて月をみてよめる　　道命法師

都にてながめし月のもろともに旅のそらにも出でにけるかな

はりまに侍りける時月を見てよめる　　帥前内大臣

都にてながめし月をみるときは旅のそらともおぼえざりけり

○わたの原　海原。
○久方の　雲の枕詞。
○雲居　雲の居る天。
○まがふ　紛れて辨別し難い。古文眞寶王勃序に「秋水與₂長天₁一色。」と同樣な心持。
○あらたなる　一本「あらたなき」
○とみ草　稻のこと。
○ほど　程度。
○堀河院　藤原兼通の家。
○水上のさだめてければ　兼通在世の程にすでに行幸を仰いでおいたからの心持であらう。
○有馬の湯　攝津國。
○つゞき　一本「たづき」
○ながめし　「し」は過去を表はす助動詞「き」の連體形だから過去にながめた意味。

信濃守にてくだりけるに風越(かざこし)のみねにてよめる　藤原家經朝臣

かざこしの峯の上にて見るときは雲は麓のものにぞありける

藤原賴任朝臣美濃守にて下り侍りける供にまかりてその後年月をへてかの國の守に成りてくだり侍るとて垂井といふいづみを見てよめる　藤原隆經朝臣

昔見したる井の水はかはらねどうつれるかげぞ年をへにける

帥前内大臣はりまへまかりけるともにて川じりをいづる日よめる　大江正言

おもひ出もなきふる里の山なれど隱れ行くはた哀れなりけり

三條太政大臣身まかりて後月をみてよめる　前大納言公任

いにしへを戀ふる淚にくらされておぼろに見ゆる秋の夜の月

むすめにおくれて歎き侍りける人に月のあかかりける夜いひつかはしける　堀河右大臣

その事と思はぬだにもあるものを何ごゝちして月を見るらむ

あはたの右大臣身まかりにける頃よめる　藤原相如

夢ならでまたも逢ふべき君ならば寐られぬいをも歎かざらまし

堀河の中宮かくれ給ひてわざの事はててのあしたによませ給ひける　圓融院御製

○風越のみね　信濃國伊那郡。
○垂井　美濃國不破郡。
○かげ　自分の影。
○おもひ出もの歌　拾遺集卷六に出た。作者は弓削よしとき。
○くらされて　暗まされて。
○むすめにおくれて　女に死なれて。
○その事との歌　これと云つて思ふことがなくてさへ月を見ると憂愁を感じるものを、まして愛兒を失つた君の心はどんなであらうの意味。
○夢ならで　夢でなくて。現實に。榮華物語見はてぬ夢の卷にも見える。
○い　睡眠。
○わざの事　葬送のこと。

おもひかねながめしかども鳥部山はては煙も見えずなりにき

一條攝政身まかりにける頃よめる　　少将義孝

ゆふまぐれ木茂(こしげ)き庭をながめつゝ木の葉とともに落つるなみだか

子のおもひに侍りけるころ人のとひて侍りければよめる　　待賢門院安藝

人しれず物思ふをりもありしかどこの事ばかり戀しきはなし

兼盛子におくれて歎くと聞きていひ遣はしける　　清原元輔

おひたたで枯れぬと聞きしこの本のいかで嘆きの森となるらむ

天暦のみかどかくれおはしまして七月七日御忌果ててちり〳〵にまかり出でけるに女房の中におくり侍りける

今日よりは天の川霧たちわかれ如何なる空にあはむとすらむ

かへし　　讀人しらず

七夕はのちの今日をも賴むらむ心ぼそきはわが身なりけり

むすめにおくれて服著はべるとてよめる　　神祇伯顯仲

あさましや君にきすべき墨染のころもの袖をわれぬらすかな

大江匡衡身まかりて又の年の春花を見てよめる　　赤染衞門

こぞの春ちりにし花も咲きにけりあはれ別れのかからましかば

○鳥部山　京都市東山の邊。昔火葬場のあつたところ

○子のおもひ　子の喪。

○この事　此の事—子の事。

○おひたたで　生ひ立たずして。
○嘆き　「き」に木を云ひ懸く。
○天暦のみかど　村上天皇。

○のちのけふ　來年の今日。

○服　喪服。
○君にきすべき　我が娘たる君に著せるのが順序であるべき。
○こぞ　去年。
○あはれ別れのかからましかば　あゝ別れといふものがかやうであつたならばなア。

左兵衞督公行妻におくれて侍りける頃女房につけて申さする事侍りける

御返しによませ給ひける　　新院御製

いづる息いるを待つ間も難き世を思ひしるらむ袖はいかにぞ

後冷泉院御時藏人にて侍りけるに御門かくれおはしましければよめる　　藤原有信朝臣

涙のみ袂にかゝる世のなかに身さへ朽ちぬることぞかなしき

をとこにおくれてよめる　　讀人しらず

をり〳〵のつらさを何に歎きけむやがてなき世もあればありけり

人の四十九日の誦經文にかきつけける

人をとふかねの聲こそ哀れなれいつか我が身にならむとすらむ

にひまゐりして侍りける女のまへゆるされて後程なく身まかりにければ　　四條中宮

悔しくも見初めけるかななべて世の哀れとばかり聞かましものを

いなりのとりゐに書きつけて侍りける　　讀人しらず

かくてのみよにありあけの月ならば雲かくしてよ天くだる神

おやの所分(そうぶん)をゆゑなく人におしとられけるをこの事ことわり給へといな

○難き世を　生存することの難い世を。
○身さへ　我が身までも。天皇の御蔭ばかり蒙ることが出來なくなつたので。
○かなしき　一本「こひしき」
○をとこ　夫。
○つらさ　夫のつれなさ。
○なき世　亡き世。
○人をとふ　人を弔ふ。
○我が身に　我が身の上に。
○にひまゐり　新參。
○まへゆるされて後　中宮の御前に出ることをゆるされて後。
○なべて世の　一般の世の。
○かくてのみよにありあけの月ならば　かやうに所願も成就せずにのみ世に生きて在るならばの意味に在明月を云ひ懸く。
○雲かくしてよ　雲で月をかくせよ—我が身を此の世から隱せよ。
○天くだる　雲の緣語で雨降るを云ひ懸く。
○所分　所領。
○ことわり給へ　裁判して下さい

○長きよ　未來の生々世々。
○思へかし　思ひなさいよ。
○賀茂のいつき　齋院。
○思へどもいむとて　佛を思つても神は佛を忌むとて。
○其方　極樂淨土のあるといふ西方。
○ねをのみぞなく　唯泣きに泣く
○信解品　法華經第二卷。
○卽身成佛　聖無動尊大威怒王祕密陀羅尼經之序に「見₂我心₁者發₂菩提心₁、聞₂我名₁者斷ㇾ惑修ㇾ善、聽₂我說₁者得₂大智慧₁知₂我身₁者卽身成佛。」
○つとめて後　修行勤行して後はじめて。
○願成佛道　法華經安品樂行に、「願成₂佛道₁令₂衆生亦爾₁。」
○よそになど　何とし我が心をよそにして。
○いかで　どうかして。
○常在靈鷲山　法華經壽量品の句
○世の中の歌　佛は常に靈鷲山に在つて實には滅度しないが五欲の衆生が佛は常在不滅だと見るなら憍恣厭怠して難遭恭敬の心がないだらうとて方便に涅槃を現じたといふ趣を。
○浮雲　五欲の衆生に喩ふ。
○月　佛に喩ふ。

りにこもりて祈し申しける法師の夢に社の中よりいひ出し給ひける歌

長きよの苦しきことを思へかしなに歎くらむかりのやどりを

賀茂のいつきときこえける時に西にむかひてよめる　　選子内親王

思へどもいむとていはぬ事なれば其方（そなた）に向きてねをのみぞなく

信解品周流諸國五十餘年といふ心を　　神祇伯顯仲

あくがるゝ身のはかなさは百年の半ば過ぎてぞおもひ知らるゝ

卽身成佛といふ事をよめる　　讀人しらず

露の身のきえて佛になることはつとめて後ぞ知るべかりける

舍利講のついでに願成佛道の心を人々によませ侍りけるによめる　　關白前太政大臣

よそになど佛のみちをたづねけむ我が心こそしるべなりけれ

左京大夫顯輔

いかでわが心の月をあらはして闇にまどへる人をてらさむ

常在靈鷲山のこゝろをよめる　　登蓮法師

世の中の人のこゝろの浮雲にそらがくれするありあけの月

詞花和歌集終

千載和歌集

千載和歌集序

やまとみこと歌は、ちはやぶる神代より始まりて、ならの葉の名におふ宮に廣まれり。玉しきたひらの都にしては、延喜の聖の御代には古今集を撰ばれ、天暦のかしこき御時には後撰集をあつめ給ひ、白河の御代には後拾遺を勅せしめ、堀河の先帝はもゝちの歌を奉らしめ給へり。おほよそこのことわざ、我が世の風俗として、これを好みもてあそべば、名を世々に殘し、これを學びたづさはらざるは、おもてを墻にしてたてらむが如し。かかりければ、此の世に生まれ、我が國にきたりと來たる人は、たかきもくだれるも、この歌をよまざるはすくなし。聖德太子は片岡山の御事をのべ、傳敎大師は我がたつ杣の言の葉をのこせり。よりて世々の御門もこの道をばすて給はざるをや。たゞし、又集を撰びたまふあとは、なほまれになむありける。我が君世をしろしめして、保ちはじめ給ふとなづけし年より、もゝしきの古きあとをば、紫の庭、玉の臺、千年ひさしかるべきみぎりと磨きおき給ひ、藐姑射の山のしづかなるすみかを

ば、青き谷、菊の水よろづ代すむべき境としめ定め給ふ。かれこれおし合はせて、みそぢあまり三かへりの春秋になむなりにける。あまねき御うつくしみ、秋津島の外まで及び、廣き御惠み、春の園の花よりもかうばし。近うなれつかうまつり、遠くきき傳ふるたぐひまで、事にふれ折にのぞみて、むなしくすぐさぬ情おほし。春の花のあした、秋の月の夕、おもひをのべ、心をうごかさずといふことなし。ある時には絲竹の聲しらべをとゝのへ、あるときはやまともろこしの歌ことばをあらそふ。敷島の道もさかりにおこりて、心の泉古よりも深く、詞の林昔よりもしげし。こゝに今の世の道をこのむともがらの言の葉をもきこしめし、昔の時のをりにつけたる人の心をも見そなはさむ事によりて、後拾遺集に撰び殘されたる歌、かみ正暦のころほひより、下文治の今に至るまでのやまとうたを、えらび奉るべき仰せごとなむありける。かの御時よりこの方、年はふたもゝちあまりに及び世はとつぎ餘り七世になむなりにける。過ぎにし方も年久しく、今ゆくさきも遙かにとゞまらむ爲、此の集を名づけて千載和歌集といふ。かの後拾遺集の後、同じく勅撰になずらへて撰べるところ、金

葉、詞花のふたつの集あり。然れども部類ひろからず、歌の數少なくして、殘れる歌多し。その外今の世までの歌をとり撰べるならし。抑この歌の道をまなぶる事をいふに、唐國日の本のひろきふみの道をもまなびず、鹿の園、鷲の嶺の深き御法をさとるにしもあらず、唯假字のよそぢ餘り七文字のうちを出でずして、心に思ふ事をことばにまかせていひ連ぬるならひなるが故にこそ、三十もじあまり一文字をだによみ連ねつるものは、出雲八雲の底を凌ぎ、敷島やまとみことのさかひに入りすぎにたりとのみ思へるなるべし。しかはあれども、まことには、鑽ればいよ〳〵堅く、仰げば彌高きものは、このやまと歌の道になむありける。春の林の花、秋の山の木の葉、錦いろ〳〵に、玉こゑ〴〵なりとのみ思へれど、山の井の深き名をからざること多く、難波江のあしのをかしきふしあることは難くなむありけれど、かつはこのむ心ざしを憐み、かつは道をたやさざらむが爲に、瓦のまど、柴の庵の言の葉をも、見るによろしく、聞くにさかえざるをばもらす事なし。勒して千うた二百ちあまり二十卷とせり。古より勅をうけたまはりて集を撰ぶこと、あるひはその位たかく、或はその品

下れるも、久しく此の道をまなび、ふかく其の心をさとれるともがらは、つとめ來れる中に、松の戸ぼそに遁れ、苔の袂にしをれたるもの、これをえらべるあとなむなかりけれど、宇治山の僧喜撰といひけるなむ、すべらぎのみことのりをうけたまはりて倭歌の式をつくりける。式を作り、集を撰ぶ、かの昔のあとにより、今このなずらへあるが上に、和歌の浦の道にたづさひては七十のしほに過ぎ、我がのりのすべらぎにつかへたてまつりては、六十になむあまりにければ、家々の言の葉、浦々の藻鹽草、かきあつめたてまつるべき勅をもうけたまはれるならし。この集かくこのたびしるしおかれぬれば、住吉の松の風久しく傳はり、玉津島の浪ながくしづかにして千々の春秋をおくり、世々の星霜をかさねざらめや。文治三の年の秋長月の中のとをかに、えらびたてまつりぬるになむありける。

千載和歌集　巻第一

春歌上

春たちける日よみ侍りける　　源俊頼朝臣

春のくるあしたの原を見わたせばかすみも今日ぞたちはじめける

堀河院御時百首歌奉りける時よめる　　中納言國信

みむろやま谷にや春のたちぬらむ雪のしたみづ岩たゝくなり

百首歌たてまつりける時初春の心をよめる　　待賢門院堀河

雪ふかき岩のかけ道あとたゆる吉野のさとも春はきにけり

堀河院御時百首の歌奉りける時殘雪をよめる　　前中納言匡房

道たゆといとひしものを山里に消ゆるは惜しきこその雪かな

承暦二年内裏後番の歌合に鶯をよめる　　藤原顯綱朝臣

春たてば雪のした水うちとけて谷のうぐひす今ぞなくなる

後冷泉院御時皇后宮の歌合によみ侍りける　　大納言隆國

山里のかきねに春やしらるらむ霞まぬさきにうぐひすの鳴く

○あしたの原　大和國。

○みむろやま　大和國。

○雪のしたみづ　雪の解けて岩に滴る水。

○岩のかけ道　古今集巻十八に「世に經れば憂さこそ増れみ吉野の岩のかけ道踏みならしてむ」

○しらるらむ　知られるたらう。一本「しるからむ」

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時十首の歌よませ侍りけるによめる　　源俊頼朝臣

煙かとむろの八島を見しほどにやがても空のかすみぬるかな

右大臣に侍りける時家に歌合し侍りけるに霞の歌とてよみ侍りける　　攝政前右大臣

かすみしく春のしほぢを見わたせばみどりを分くる沖つしら波

堀河院の御時百首の歌のうち霞の歌とてよめる　　前中納言匡房

わぎも子が袖ふる山も春きてぞかすみの衣たちわたりける

霞の歌とてよめる　　刑部卿頼輔

春くれば杉のしるしも見えぬかな霞ぞたてる三輪のやまもと

左兵衛督隆房

見わたせばそことしるしの杉もなしかすみのうちや三輪の山もと

待賢門院堀河

百首歌奉りける時子の日の心をよめる

ときはなる松もや春をしりぬらむはつねを祝ふ人にひかれて

家に侍りける女房のもとに睦月七日前中宮の女房若菜をつかはしたりけるを聞きてつかはしける　　治部卿通俊

○むろの八島　下野國。

○しほぢ　潮路。

○袖ふる山　袖振る—袖振山（大和國吉野郡）

○春くればの歌　古今集卷十八に「我が庵は三輪の山本戀しくばとぶらひ來ませ杉立てる門」次の見渡せばの歌も、亦この歌を本歌にしたものであらう。

○ときはなる松もや春を知りぬらむ　常に變色しない松でも春を知つたらうか。

○はつね　正月の初子の日の祝ひ

○女房　一本「をんな」

うらやまし雪の下草かき分けてたれをとぶひの若菜なるらむ

堀河院の御時百首歌奉りけるうち若菜の歌とてよめる　源俊頼朝臣

春日野の雪をわか菜につみそへて今日さへ袖のしをれぬるかな

睦月の二十日頃雪の降りて侍りける朝に家の梅を折りてとしよりの朝臣につかはしける　權中納言俊忠

咲きそむる梅の立枝に降る雪のかさなる數をとへとこそ思へ

かへし　源俊頼朝臣

梅が枝に心もゆきて重なるを知らでや人のとへといふらむ

梅の木に雪のふりけるに鶯のなきければよめる　左京大夫顯輔

梅が枝に降りつむ雪はうぐひすの羽風にちるも花かとぞみる

永保二年二月后の宮にて梅花久薫といへる心をよみ侍りける　久我前太政大臣

かをる香の絶えせぬ春は梅のはな吹きくる風やのどけかるらむ

堀河院の御時百首の歌奉りける時梅花の歌とてよめる　大納言師頼

今よりは梅さくやどは心せむ待たぬに來ます人もありけり

前中納言匡房

にほひもて分かばぞ分かむ梅の花それとも見えぬ春の夜の月

○たれをとぶひ　誰を訪らふ—飛火野（大和國添上郡）。

○春日野　大和國添上郡。

○睦月　正月。

○咲きそむるの歌　降る雪の重なる程屢訪へと思ふの意味。拾遺集卷一「我が宿の梅の立ち枝や見えつらむ思ひの外に君が來ませる」

○心もゆきて　行き—雪。

○永保　白河天皇の年號。

○今よりはの歌　これも拾遺集卷一の「思ひの外に君が來ませる」の歌によつたか。

○にほひもての歌　匂ひによつて辨別するならば辨別しよう。梅と月光とを。古今集卷一「月夜にはそれとも見えず梅の花香を尋ねてぞ知るべかりける」

崇徳院に百首の歌奉りける時よみ侍りける　　大炊御門右大臣

梅の花折りてかざしにさしつれば衣におつるゆきかとぞ見る

題しらず　　和泉式部

梅が香におどろかれつゝ春の夜のやみこそ人はあくがらしけれ

藤原道信朝臣

さよふけて風や吹くらむ花の香の匂ふこゝちの空にするかな

皇太后宮大夫俊成

春の夜はのきばの梅をもる月のひかりも薫る心地こそすれ

百首の歌めしける時梅の歌とてよませ給うける　　崇徳院御製

春の夜は吹きまふ風のうつり香に木ごとに梅と思ひけるかな

梅花夜薫といへる心をよめる　　源俊頼朝臣

梅が香はおのが垣根をあくがれてま屋のあまりに隙もとむなり

題しらず　　右大臣

うめが香にこゝろうつりせば鶯のなくひと枝は折らましものを

二品法親王

梅が枝の花に木づたふうぐひすの聲さへにほふ春のあけぼの

㈠梅の花折りての歌　朗詠集に、「折二梅花一而挿レ頭二月之雪滿レ衣」とある。

㈡梅が香にの歌　古今集巻一に、「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るゝ」

○あくがれて　浮れ出て。

○もる　守る—洩る。

○ま屋　兩下。棟の兩側に破風を作り、前後に雨滴が落ちるやうに葺き下した家造り。

○ちらさぬ　祕藏して外に散らさぬ。
○わくるこゝろ　君に分けて上ぐる赤心。
○いろに見ゆらむ　梅の花の色に見られるでらう。
○このめはる雨　木芽張る―春雨
○かぞいろ　父母。朗詠集に「養得自爲花父母。」と見える。
○とや　一本「とも」
○片岡　大和國生駒郡。

○ふるは　一本「ふれは」

○みこもり　水籠り。蘆の下萌えること。
○つらむ　一本「ぬらむ」
○玉江の沼　越前國。

權大納言實家

風わたる軒端の梅にうぐひすの鳴きて木づたふ春のあけぼの

中院(なかのゐん)にありける紅梅のおろし枝遣はさむなど申しけるを又の年の二月ばかり花咲きたるおろし枝に結びつけて皇太后宮大夫俊成の許に遣はし侍りける

大納言定房

昔よりちらさぬやどの梅の花わくるこゝろはいろに見ゆらむ

堀河院の御時百首の歌奉りける時春雨の心をよめる

前中納言匡房

よも山にこのめはる雨降りぬればかぞいろはとや花のたのまむ

藤原基俊

春雨のふりそめしより片岡のすそ野のはらぞ淺みどりなる

題しらず

和泉式部

つれ〴〵とふるは涙のあめなるを春のものとや人の見るらむ

堀河院の御時百首の歌の中に早蕨をよめる

藤原基俊

みやま木のかげ野の下のした蕨もえ出づれども知る人もなし

崇德院に百首の歌奉りける時春駒の歌とてよめる

藤原清輔朝臣

みこもりにあしの若葉やもえつらむ玉江の沼をあさる春駒

堀河院の御時百首の歌のうち歸雁のうたとてよめる　源俊頼朝臣

春くればたのむの雁もいまはとてかへる雲路におもひたつなり

歸雁の心をよみ侍りける　左近中將良經

ながむれば霞めるそらの浮雲とひとつになりぬ歸るかりがね

從三位頼政

天つ空ひとつに見ゆるこしの海の波をわけても歸る雁がね

祝部宿禰成仲

かへる雁いく雲居ともしらねども心ばかりをたぐへてぞやる

崇德院に百首の歌奉りける時春の歌とてよめる　藤原季通朝臣

春はなほ花のにほひもさもあらばあれたゞ身にしむは曙のそら

百首の歌めしける時春の歌とてよませ給うける　崇德院御製

あさ夕に花まつ程は思ひねの夢のうちにぞ咲きはじめける

待賢門院堀河

いづかたに花咲きぬらむと思ふよりよもの山邊にちる心かな

白河院花御らんじにおはしましけるに召しなかりければよみて奉り侍りける　京極前太政大臣

○たのむ　田面(たのも)―頼む。

○天つ空　滕王閣序に「秋水共長天一色、又雁陣驚寒聲斷衡陽之浦」などの趣。

○たぐへて　副(そ)へて。

○思ひねの夢　思うて寢る夢。

山櫻たづぬと聞くにさそはれぬ老のこゝろのあくがるゝかな

鳥羽院位おりさせ給うて後白河に御幸ありて花御らんじける日よみ侍りける

花園左大臣

かげきよき花のかゞみと見ゆるかなのどかに澄めるしら河の水

徳大寺左大臣

よろづよの花のためしやけふならむ昔もかかる春しなければ

近衛殿に渡らせ給うて歸らせ給ひける日遠尋山花といへる心をよませ給うける

崇徳院御製

尋ねつる花のあたりになりにけりにほふにしるし春のやまかぜ

法性寺入道前太政大臣

歸るさをいそがぬほどの道ならばのどかに峯の花は見てまし

寛治八年さきのおほきおほいまうち君の高陽院の家の歌合に櫻の歌とて

中納言女王

山櫻にほふあたりのはるがすみ風をばよそに立ちへだてなむ

藤原顯綱朝臣

花ゆゑにかゝらぬ山ぞなかりける心は春のかすみならねど

○けふならむ　今日は鳥羽上皇の御幸の日だから斯う云ふ。

○にほふにしるし　匂ふのによつて顯著である。

○歸るさをいそがぬほどの道　歸り途をいそがないですむほどの遠くない道。

○へだてなむ　隔ててくれ。一本「隔つらむ」

○かゝらぬ　心のかゝらぬ。

○昨日けふ　昨日は白河院御幸の日で、今日は歌を奉らせられた日なので斯う云ふ。
○かぎり　一本「ためし」

○み雪　「み」は接頭語。

○花の袂　花を折つた袂。
○日はなし　一本「日ぞなき」

○かりにだに　假りにでも。
○散らぬ花さく　散ることない花の咲く。

○いくしは　幾入。入とは染液に染物を浸すこと。上に心に染むと云つたので。

○たかまの山　大和國南葛城郡。

京極の家にて十種供養し侍りける時白河院御幸せさせ給ひて又の日歌奉らせ給うけるによみ侍りける

京極前太政大臣

さくらばなおほくの春にあひぬれど昨日けふをやかぎりにはせむ

後二條關白内大臣

花ざかり春のやまべを見わたせば空さへにほふ心地こそすれ

右衛門督基忠

咲きにほふ花のあたりは春ながら絶えせぬ宿のみ雪とぞ見る

毎朝見花といへる心をよみ侍りける

中院右大臣

たづねきて手折るさくらの朝露に花の袂の濡れぬ日はなし

東山に花見侍りける日よみ侍りける

右大臣

かりにだに厭ふ心やなからまし散らぬ花さくこの世なりせば

十首の歌人のよませ侍りけるとき花の歌とて

前左衛門督公光

みな人のこゝろにそむる櫻花いくしほとしに色まさるらむ

崇徳院に百首の歌奉りける時花の歌とてよめる

左京大夫顯輔

かづらきやたかまの山のさくら花くもゐのよそに見てや過ぎなむ

前參議教長

山ざくらかすみこめたるありかをばつらきものから風ぞしらする

藤原淸輔朝臣

神がきのみむろの山は春きてぞ花のしらゆふかけて見えける

夜思山花といへる心を　仁和寺後入道法親王覺性

夜もすがら花のにほひを思ひやるこゝろや嶺に旅寢しつらむ

尋深山花といへる心をよみ侍りける　攝政前右大臣

咲きぬやとしらぬ山路にたづね入る我をば花のしをるなりけり

尋花日暮れぬといへる心をよめる　源俊頼朝臣

暮れはてぬかへさは送れ山櫻たがために來てまどふとか知る

花の歌とてよめる　道因法師

花ゆゑにしらぬ山路はなけれどもまどふは春の心なりけり

賀茂の社の歌合とて人々よみ侍りける時花の歌とてよめる　藤原公時朝臣

年を經ておなじさくらの花の色を染めますものは心なりけり

藤原公衡朝臣

花ざかりよもの山邊にあくがれてはるは心の身にそはぬかな

春日の社の歌合とて人々よみ侍りける時よめる　顯昭法師

○つらきものから　つれないものながら。

○しらゆふ　白木綿。

○しをる　一本「しをり」しるべ。

○かへさ　歸る時。

○たがために來て云々　誰のために來て惑ふのではない、皆山櫻ゆゑだと山櫻よ思召せ。

○染めます　色を染め增す—心を

○みかさ　水嵩。
○青根　大和國吉野郡の青根嶽。
○讀人しらず　平家物語によると薩摩守平忠度の作。
○さゞなみ　近江國の地名。
○しがの都　天智天皇の都。
○昔ながらの　昔のまゝの。長良山(近江國滋賀郡)を云ひ懸く。
○たかさごのをのへ　播磨國加古郡の高砂附近の尾上。
○圓位法師　俗名佐藤義清。後に西行と改めた人。
○はなは老こそ　櫻の花は老いるに從つて(人間とは反對に)。

吉野川みかさはさしもまさらじを青根を越すやはなのしら波

故郷花といへる心をよみ侍りける　　讀人しらず

さゞなみやしがの都はあれにしを昔ながらの山ざくらかな

日吉のやしろの歌合とて人々よみ侍りける時よめる　　祝部宿禰成仲

さゞなみや志賀の花園見るたびにむかしの人のこゝろをぞ知る

花の歌とてよめる　　賀茂成保

たかさごのをのへの櫻さきぬれば梢にかゝるおきつしらなみ　　圓位法師

おしなべて花の盛りになりにけり山の端ごとにかゝる白雲　　藤原爲業

吉野山はなのさかりになりにけり絶ゆるときなき峯のしらくも

毎春花芳といへる心をよめる　　源仲正

春をへてにほひを添ふるやま櫻はなは老こそさかりなりけれ

百首の歌奉りける時よみ侍りける　　待賢門院堀河

白雲とみねのさくらは見ゆれども月のひかりは隔てざりけり　　上西門院兵衛

花の色に光さしそふはるの夜ぞ木の間の月は見るべかりける

歌合し侍りける時花の歌とてよめる　　太宰大貳重家

をはつ瀬の花のさかりを見わたせば霞にまがふ峯のしら雲

藤原範綱

さゞなみやながらのやまの嶺つゞき見せばや人にはなの盛りを

十首の歌人々によませ侍りける時花の歌とてよみ侍りける　　皇太后大夫俊成

み吉野の花のさかりをけふ見ればこしのしらねに春風ぞ吹く

○をはつ瀬　大和國磯城郡。

○見せばや　見せたい。

○こしのしらね　越の白嶺。

〔鳥羽殿　一本「鳥羽院」

○花も日數も　花も散り積り日數も積り。

○みこ　親王。

○みねのしら雲　尙盛りの櫻もあるのを白雲と見なしてゐる。

○寬治　堀河天皇の年號。

千載和歌集　卷第二

春歌下

鳥羽殿におはしましけるころ常見花といへる心をのこどもつかうまつりけるついでによませ給うける　　白河院御製

咲きしより散るまで見れば木のもとに花も日數も積りぬるかな

みこにおはしましける時鳥羽殿に渡らせ給へりけるころ池上花といへる心をよませ給うける　　院御製

池水にみぎはのさくら散りしきて波の花こそさかりなりけれ

山の花の心をよみ侍りける　　大宮前太政大臣

白雲とみねには見えてさくらばな散ればふもとの雪にぞありける

百首の歌たてまつりける時花の歌とて　　藤原季通朝臣

吉野やま花はなかばに散りにけりたえ〴〵殘るみねのしら雲

寬治八年さきのおほきおほいまうち君の高陽院の家の歌合に櫻をよめる　　周防內侍

○みぞれし　霙（雨に雪のまじつたもの）した。

○をし　惜しいし。

○ちゞに　千箇に。

○さくらの衣　表白に裏赤。

○ちらましや　散りませうや「や」は反語。

○風を櫻のこゝろとおもはば　櫻が風をば心あつて散らすのだと思ふならば。

やま櫻をしむ心のいくたびか散るこのもとに行きかへるらむ

後朱雀院の御時うへのをのこどもひんがし山の花見侍りけるに雨のふりにければ白河殿にとまりておの〳〵歌よみ侍りけるによみ侍りける　　大納言長家

はる雨にちる花見ればかきくらしみぞれし空のこゝちこそすれ

落花滿山路といへる心をよめる　　赤染衛門

踏めばをし踏までは行かむ方もなしこゝろづくしの山櫻かな

堀河院の御時百首の歌奉りける時櫻をよめる　　前中納言匡房

山櫻ちゞに心のくだくるは散る花ごとに添ふにやあるらむ

藤原仲實朝臣

はなのちる木のしたがげのおのづから染めぬさくらの衣をぞきる

藤原基俊

春をへて花ちらましやおくやまの風を櫻のこゝろとおもはば

崇徳院の御時十五首の歌奉りける時花の歌とてよみ侍りける　　右兵衛督公行

あらしふく志賀の山邊のさくら花ちれば雲居はさゝ波ぞたつ

百首の歌奉りける時よめる　　前參議親隆

春風に志賀のやまごえ花ちればみねにぞ浦のなみは立ちける

花の歌とてよみ侍りける　左近中將良經

櫻さく比良の山かぜ吹くまゝに花になりゆく志賀のうらなみ

花留客といへる心をよみ侍りける　右近大將實房

ちりかゝる花の錦は著たれども歸らむことぞ忘られにける

落花の心をよめる　權大納言實國

あかなくに袖につゝめば散る花の嬉しと思ふになりぬべきかな

久我内大臣の家にて身にかへて花を惜しむといへる心をよめる　權中納言通親

櫻花憂き身にかふるためしあらば生きて散るをば惜しまざらまし

花の歌とてよめる　俊惠法師

み吉野のやました風やはらふらむ梢にかゝるはなのしらゆき

源有房

一枝は折りてかへらむ山ざくら風にのみやは散らしはつべき

道因法師

散る花を身にかふばかり思へどもかなはで年の老いにけるかな

俊盛法師

○櫻さく　一本「櫻花」
○比良の山　近江國滋賀郡。

○あかなくに　飽かないので。
○袖につゝめば　古今集卷十七に「嬉しきをなにに包まむ唐衣袂豐かにたてと云はましを」
○憂き身にかふる　我が憂き身に代へる。

○み吉野のやま　「み」は接頭語。

○風にのみやは散らしはつべき　風にばかり散らし果ててよいものか。

あかなくに散りぬる花のおもかげや風にしられぬ櫻なるらむ

源　仲綱

山ざくら散るを見てこそおもひ知れたづねぬ人は心ありけり

花の散るを見てよみ侍りける　道命法師

よそにてぞ聞くべかりける櫻花目のまへにても散らしつるかな

池に櫻のちるを見てよみ侍りける　能因法師

櫻ちるみづの面にはせきとむる花のしがらみ掛くべかりけり

花浮澗水といへる心をよみ侍りける　花園左大臣

やま風にちりつむ花しながれずば如何で知らまし谷川の水

山家落花といへる心をよめる　前大納言俊實

花のみな散りてののちぞ山里のはらはぬ庭は見るべかりける

花落客稀といへる心をよめる　藤原基俊

故郷は花こそいとゞ忍ばるれ散りぬるのちは訪ふ人もなし

みちの國にまかりける時なこその關にて花の散りければよめる　源義家朝臣

吹く風をなこそのせきとおもへども道もせに散るやま櫻かな

小野の氷室山のかたに殘りの花尋ね侍りける日僧都證觀が坊にてこれか

○花のおもかげや云々　花の面影といふものは風も散らすことが出來ないので、これは風に知られない櫻なのだらう。

○たづねぬ人は心ありけり　なるほど花を尋ねない人は風情があるのだ。なぜなら散るのを見るのはつらいからだつた。

○しがらみ　竹や木を杙に打つて水流を堰き止めるもの。

○谷川の水　一本「谷の下水」

○いとゞ　いと〳〵。一層。

○なこその關　勿來(なこ)そ(來るな)の意味を云ひ懸く。

○道もせに　道も狹きほどに。

○小野の氷室山　山城國愛宕郡。

れ歌よみけるによめる　源仲正

したさゆるひむろの山のおそざくら消えのこりける雪かとぞ見る

百首の歌奉りける時春の歌とてよめる　前參議親隆

鏡山ひかりは花の見せければちり積みてこそさびしかりけれ

藤原季通朝臣

心なきわが身なれども津の國のなにはの春にたへずもあるかな

堀河院の御時の百首のうち呼子鳥をよめる　前中納言匡房

思ふことちえにやしげき呼子鳥しのだの森のかたに鳴くなり

おなじ百首のときすみれをよめる　中納言國信

今宵寢てつみてかへらむ菫さく小野のしばふは露しげくとも

修理大夫顯季

雉子なくいは田の小野のつぼ菫しめさすばかりなりにけるかな

嘉承二年后の宮の歌合に菫をよめる　源顯國朝臣

道遠みいり野のはらのつぼすみれ春のかたみにつみて歸らむ

堀河院の御時の百首のうち款冬をよめる　前中納言匡房

春ふかみ井手のかは水かげ添はばいくへか見えむ山吹のはな

○したさゆるひむろ　下冱ゆる氷室と云ひ懸く。
○鏡山　近江國蒲生郡。
○ちり　散り—塵。
○さびし　寂し—錆。
○心なきの歌　後拾遺集卷一に、「心あらむ人に見せばや津の國の難波あたりの春の景色を」
○思ふことの歌　古歌に、「和泉なる信田の森の楠の葉の千枝に分れて物をこそ思へ」
○呼子鳥　郭公鳥か。
○今宵寢ての歌　萬葉集卷八に「春の野にすみれつみにと來し吾ぞ野をなつかしみ一夜ねにける」
○しばふは　一本「しばふに」
○いは田の小野　山城國宇治郡。
○しめさす　他領を禁じる爲に標幟をする。我が遊興の地として占める。
○かたみ　形身—籠(かたみ)。
○のうち　一本「の歌奉りける時」
○井手のかは　山城國綴喜郡。

やまぶきの花咲きにけり蛙なく井手のさと人いまやとはまし　藤原基俊

堀河院の御時肥後が家によき山吹ありときこし召して召しければ奉ると
て結びつけ侍りける　二條太皇太后宮肥後

九重にやへ山吹をうつしては井手のかはづのこゝろをぞくむ

水邊山吹といへる心をよめる　藤原範綱

吉野川岸のやまぶき咲きぬれば底にぞふかき色は見えける

藤原定經

くちなしの色にぞすめる山吹のはなの下ゆく井手のかはみづ

山吹をよめる　惟宗廣言

いかなれば春をかさねて見つれども八重にのみさく山ぶきの花

百首の歌奉りける時やまぶきの歌とてよめる　藤原清輔朝臣

山吹の花のつまとは聞かねども移ろふなべに鳴くかはづかな

土御門右大臣の家に歌合しける時藤花をよめる　康資王母

いづかたににほひますらむ藤のはな春と夏との岸をへだてて

永承六年内裏の歌合に藤花をよみ侍りける　中納言祐家

○くむ　一本「しる」

○くちなしの色　山梔（くちなし）の實で染めた色。黄色。

○つま　妻。

○移ろふなべに　色の變ると同時にそれを歎いて。

○春と夏との岸　藤の花は春から夏にかけて吹くものなので。

九重にさけるを見れば藤のはな濃きむらさきの雲ぞ立ちける

百首の歌奉りける時よみ侍りける　大炊御門右大臣

年ふれどかはらぬ松をたのみてやかゝりそめけむ池の藤なみ

やよひのつごもりの頃白河殿に御かたたがへの行幸ありける夜春殘二日といへる心をうへのをのこどもつかうまつりけるついでによませ給うける　二條院御製

われもまた春とともにや歸らましあすばかりをばこゝに暮して

百首の歌めしけるとき暮の春の心をよませたまうける　崇德院御製

花は根にとりは古巢に歸るなり春のとまりを知る人ぞなき

三月のつごもりによみ侍りける　中務卿具平のみこ

命あらばまたもあひみむ春なれど忍びがたくてくらす今日かな

式子内親王

ながむれば思ひやるべきかたぞなき春のかぎりの夕暮のそら

百首の歌奉りける時暮の春の心をよみ侍りける　大納言隆季

くれてゆく春はのこりも無きものを惜しむ心のつきせざるらむ

三月盡の心をよみ侍りける　久我內大臣

○むらさきの雲　九重（宮中）を紫庭とも云ふからであらう。
○立ちける　一本「立ちぬる」

○やよひのつごもり　三月晦日。
○かたたがへ　太白星のある方向を避けて他出すること。

○あすばかり　明後日は三月盡（春の末日）なので、明日だけ。

○花は根にの歌　朗詠集閏三月詩に「花悔レ歸レ根無レ益悔鳥期入レ谷定レ延期」とある。
○とまり　停泊所。

○思ひやる　思ひを遣る。

入日さす山の端さへぞ恨めしきくれずば春のかへらましやは　藤原定成

幾返り今日に我が身の逢ひぬらむ惜しきは春の暮るゝのみかは　源仲綱

身のうさも花見しほどは忘られき春のわかれを歎くのみかは　藤原經家朝臣

行路三月盡といへる心をよめる

いづかたと春のゆくへは知らねども惜しむ心のさきに立つらむ　琳賢法師

三月盡の日皇太后宮大夫俊成の許によみて遣はしける

もろともにおなじ都は出でしかどつひにも春に別れぬるかな　法印靜賢

花はみなよもの嵐にさそはれてひとりや春のけふは行くらむ　權大僧都範玄

閏三月盡によみ侍りける

花の春重なるかひぞなかりける散らぬ日數のそはばこそあらめ　前大僧正覺忠

海路三月盡といへる心をよめる

惜しめどもかひもなぎさに春くれて波とともにぞたち別れぬる　前中納言匡房

堀河院の御時百首の歌奉りける時春の暮の心をよめる

○くれずは春のかへらましやは　日が暮れないならば春も歸りはしまいものを。
○惜しきは云々　惜しいのは春の暮れるばかりではない。年月も惜しい。
○暮るゝ　一本「過ぐる」
○忘られき　忘られた。
○のみかは　ばかりかい。「か」は反語。

○さきに　春より前に。

○行路　旅行中。

○重なるかひ　三月の閏月が重なる效。
○散らぬ日數の云々　花の散らない日數が添ふならば效もあらうものを。
○かひもなぎさ　「效も無き」を云ひ懸く。

つねよりも今日のくるゝを惜しむかないま幾度の春としらねば

前齋宮河内

けふ暮れぬ花の散りしもかくぞありし二度(ふたたび)春はものを思ふよ

○つねよりも　いつよりも。

○けふ暮れぬの歌　花の散つた時も今日の暮れたのやうに惜しまれた。春といふものは二度物思ひするものだな。

千載和歌集　巻第三

夏歌

堀河院の御時百首の歌奉りける時更衣(ころもがへ)のこゝろをよみ侍りける　前中納言匡房

夏衣はなのたもとは脱ぎかへて春のかたみもとまらざりけり　藤原基俊

今朝かふる蟬の羽衣きて見れば袂に夏はたつにぞありける

崇徳院に百首の歌奉りける時夏のはじめの歌とてよめる　藤原實清朝臣

あかでゆく春のわかれにいにしへの人やう月といひ初めけむ

卯花をよめる　左京大夫顯輔

むら〳〵に咲けるかきねの卯の花は木の間の月のこゝちこそすれ

暮見卯花といへる心をよみ侍りける　右近大將實房

ゆふ月夜ほのめくかげも卯の花のさける垣根はさやけかりけり

卯花の歌とてよみ侍りける　仁和寺入道法親王

玉川とおとにききしは卯の花を露のかざれる名にこそありけれ

○かふる　替へる。
○蟬の羽衣　裏のないすゞし。
○う月　卯月（四月）―憂き月。
○ゆふ月夜　夕方の月。
○おとにききしは　評判に聞いたのは。
○卯の花を　一本「卯花の」
○露の　露の玉が。

白河院鳥羽殿におはしましける時をのこども歌合し侍りけるに卯花をよめる　　藤原季通朝臣

見てすぐる人しなければうの花のさけるかきねやしら河の關

遠村卯花といへる心をよめる　　賀茂政平

うの花のよそめなりけり山ざとのかきねばかりに降れるしら雪

卯花隣宅といへる事をよめる　　藤原敎經朝臣

うの花のかきねとのみや思はまし賤のふせやに煙たたずば

山里にこれかれまかりて歌よみ侍りけるに野草をよめる　　藤原定通

燒きすてしふる野のを野のま葛原玉まくばかりなりにけるかな

堀河院の御時百首の歌奉りける時あふひをよめる　　藤原もととし

あふひ草照る日はかみの心かは影さすかたにまづなびくらむ

賀茂の齋院おり給ひて後祭の御生(みあれ)の日人の葵を奉りけるに書きつけられて侍りける　　前齋院式子内親王

神山のふもとになれしあふひ草ひきわかれても年ぞへにける

仁和寺のみこの許にて郭公の歌五首よみ侍りける時よめる　　按察使公通

郭公まつはひさしき夏の夜をねぬに明けぬとたれかいひけむ

○見て過ぐる　「見で過ぐる」かとも云ふが如何。
○しら河の關　知らないのかの意味を云ひ懸く。
○よそめ　餘所目に見た目。

○ふる野　大和國山邊郡。

○あふひ草　向日葵。日に向つて傾く花。
○心かは　心かな。
○影　神影—日光。
○神山　賀茂のこと。
○あふひ　葵—逢ふ日。
○ねぬに明けぬ　寢ないのに明けた。朗詠集に「夏の夜を寢ぬに明けぬと云ひ置きし人は物をや思はざりけむ」

修理大夫顯季歌合し侍りけるに郭公をよめる　藤原道經

ふた聲ときかでや止まむ郭公まつにねぬ夜のかずはつもりて

郭公の歌とてよめる　賀茂重保

郭公しのぶるほどはやまびこのこたふる聲もほのかにぞする

山寺にこもりて侍りけるに郭公のなかざりければよめる　道命法師

あやしきは待つ人からか郭公なかぬにさへも濡るゝ袖かな

題しらず　康資王母

寐ざめするたよりにきけば郭公つらき人をも待つべかりけり

刑部卿頼輔母

郭公またもやなくと待たれつゝ聞く夜しもこそ寐られざりけれ

覺盛法師

またで聞く人にゝはばや郭公さても初音やうれしかるらむ

崇德院に百首の歌奉りける時よめる　前參議教長

たづねても聞くべきものを郭公ひとだのめなる夜半のひとこゑ

遠聞郭公といふ心を　權大納言實家

思ひやる心もつきぬほとゝぎす雲のいくへのほかに鳴くらむ

○やまびこ　こだま。
○する　一本「聞く」
○あやしきはの歌　時鳥の鳴くべき時に鳴かないのは待つ人によるのだらうか。鳴かないでさへ我が袖は涙で濡れるの意味。
○つらき人をも待つべかりけり　つれない人でも待ちつけようか。
○聞く夜しも　「し」は强めの助詞
○またで聞く人　待たないで偶然にほとゝぎすの聲を聞く人。
○さても　待たないでも。
○つきぬ　盡きた。

暮天郭公といへる心をよみ侍りける　仁和寺法親王守覺

ほとゝぎすなほ初聲をしのぶやま夕ゐる雲のそこに鳴くなり

郭公の歌とてよめる　藤原清輔朝臣

かざごしをゆふ越えくれば郭公ふもとの雲のそこになくなり

從三位頼政

ひと聲はさやかに鳴きてほとゝぎす雲路はるかに遠ざかるなり

右大臣に侍りける時家に百首の歌よませ侍りけるに郭公の歌とてよみ侍りける　攝政前右大臣

おもふことなき身ならずば郭公夢に聞く夜もあらましものを

曉聞郭公といへる心をよみ侍りける　右大臣

ほとゝぎす鳴きつるかたを眺むればたゞ有明の月ぞ殘れる

郭公の歌とてよめる　權大納言實國

なごりなく過ぎぬなるかな郭公こぞかたらひし宿としらずや

權大納言宗家

夕月夜いるさのやまの木隱(こがく)れにほのかに名のるほとゝぎすかな

前左衞門督公光

○しのぶやま　信夫山。
○かざごし　信濃國伊那郡。
○おもふことの歌　せめて物思ひがない身であるならば、夢にでもほとゝぎすを聞く夜もあらうものを。
○かた　方角。
○こぞ　去年。
○いるさのやま　但馬國出石郡。夕月の入るを云ひ懸ける。
○名のる　名を告げる。鳴く。

○聞きもわかれぬ一聲　それと聞き分けも出來ない一聲。
○よも　四方。

○けるに　一本「ける時に」

○いかに待ちてか　どういふ風に待つてか。

○つくしはてつる　ほとゝぎすを聞かうと心を盡し果てた。

○ひきなつくしそ　引き盡すなよ
○かりね　刈り根—假寢。

○越せ　「ば」を補ふ。

○ね　根—泣。

○皇太后宮　一本「枇杷皇太后宮」

○よそふる袖は誰となけれど　誰の袖と擬するではないが。

ほとゝぎす聞きもわかれぬ一聲によもの空をも眺めつるかな

攝政右大臣の時の歌合に郭公の歌とて　皇太后宮大夫俊成

すぎぬるか夜半のねざめのほとゝぎす聲は枕にある心地して

右大將實房中將に侍りける時十五首の歌よませ侍りけるによめる　道因法師

夜を重ね寐ぬより外にほとゝぎすいかに待ちてかひと聲は聞く

郭公をよみ侍りける　權中納言長方

こゝろをぞつくしはてつる郭公ほのめく宵のむらさめの空

久我内大臣の家にて旅宿菖蒲といへる心をよめる　前中納言雅頼

都人ひきなつくしそあやめ草かりねのとこの枕ばかりは

菖蒲の歌とてよみ侍りける　攝政前右大臣

五月雨にぬれ〳〵ひかむ菖蒲草ぬまの岩がきなみもこそ越せ

内大臣良通

軒ちかく今日しもきなく郭公ねをやあやめに添へてふくらむ

後朱雀院の御時長久二年五月一品内親王の歌合に花橘をよめる　皇太后宮の五節

たゞならぬ花橘のにほひかなよそふる袖は誰となけれど

題しらず　藤原もとゝし

風にちる花たちばなに袖しめて我が思ふ妹がたまくらにせむ

藤原家基

うき雲のいさよふよひの村雨におひ風しるく匂ふたちばな

左大辨親宗

我が宿の花たちばなに吹く風をたが里よりとたれ眺むらむ

花橘薫枕といへる心をよめる　藤原公衡朝臣

をりしもあれ花たちばなのかをるかな昔をみつる夢のまくらに

百首の歌めしけるとき花橘の歌とてよませ給うける　崇徳院御製

五月雨に花たちばなのかをる夜は月すむ秋もさもあらばあれ

題しらず　無品親王輔仁

五月雨におもひこそやれいにしへの草のいほりの夜半のさびしさ

堀河院の御時百首の歌奉りけるとき五月雨の歌とてよめる　藤原基俊

いとゞしくしづの庵のいぶせきに卯の花くたし五月雨ぞ降る

源俊頼朝臣

おぼつかないつか晴るべきわび人のおもふ心や五月雨の空

中院入道左大臣中將に侍りけるとき歌合し侍りけるに五月雨の歌とてよ

○袖しめて　袖に匂ひを染ましめて。
○いさよふ　行かうとして行きやらぬ。
○しるく　いちじるしく。
○たれ　一本「たが」
○をりしもあれ　折もあれ。
○いぶせきに　むさ〳〵しいのに
○卯の花くたし　卯の花を腐らし
○わび人　思ひわびる人。

める

五月雨に淺澤沼のはなかつみかつ見るまゝに隱れゆくかな　　藤原顯仲朝臣

崇德院に百首の歌奉りける時よめる　　左京大夫顯輔

五月雨に日數へぬれば刈りつみし閑野(しづや)の小菅くちやしぬらむ

前參議親隆

五月雨は水の水嵩(みかさ)やまさるらしみをのしるしも見えずなり行く

皇太后宮大夫俊成

五月雨はたく藻の煙うちしめりしほたれまさる須磨のうら人

藤原淸輔朝臣

時しもあれ水の水菰(みこも)をかりあげて乾(ほ)さでくたしつ五月雨のそら

待賢門院安藝

五月雨はあまのもしほ木朽ちにけり浦邊に煙たえてほど經ぬ

攝政右大臣に侍りける時百首の歌よませ侍りけるに五月雨の心をよめる　　源行賴朝臣

五月雨に室のやしまを見わたせば煙は波のうへよりぞ立つ

旅泊五月雨といへる心をよめる　　源仲正

○はなかつみ　眞菰のこと。「かつ見る」を云ひ起す序。

○閑野の小菅　神樂歌に「しづやの小菅鎌もて刈らば生ひむや、小菅。」と見える。

○五月雨は　一本「五月雨に」

○みをのしるし　水脈の標。澪標(みをつくし)。

○しほたれ　鹽垂れ。

○乾さでくたしつ　乾さずに腐らした。

○もしほ木　藻鹽を焚く木。

○室のやしま　下野國。常に池から水氣の上る所。

月前郭公といへる心をよめる　賀茂成保

五月雨はとまの雫にそで濡れてあなしほとけの波のうきねや

雨中郭公といへる心をよみ侍りける　按察使資賢

五月雨の雲のたえまに月さえて山ほとゝぎす空になくなり

關路郭公といへる心をよめる　中納言師時

をちかへり濡るともきなけ郭公いまいくかかは五月雨の空

後一條院の御八講に菩提樹院に參りて侍りけるに神樂岡にて郭公の鳴きければよめる　律師慶暹

あふさかの山ほとゝぎす名のるなり關もる神やそらにとふらむ

瞻西上人雲居寺(うんごじ)の房にて未飽郭公といへる心をよみ侍りける　源俊頼朝臣

古をこひつゝひとり越えくればなきあふ山のほとゝぎすかな

堀河院の御時きさいの宮にて閏五月郭公といへる心をよみ侍りける　權中納言俊忠

などてかく思ひそめけむほとゝぎす雪のみ山の法の聲かは

同じ御時百首の歌奉りけるとき照射(ともし)の心をよみ侍りける　前中納言匡房

さつきやみふたむらやまの郭公みねつゞきなく聲をきくかな

○とま　菅か茅を編んで船などの屋根を覆ふもの。
○あなしほとけの　あゝ纜解けの　一本「あなしほたれの」

○をちかへり　若復り。一本「おちかへり」
○きなけ　來鳴け。
○いまいくかかは　さみだれの空も今幾日あらうか。もう幾日もない。
○關もる神やそらにとふらむ　關の明神が空に名を問ふのだらうか

○なきあふ　自分と泣き合ふ。

○雪のみ山の法の聲かは　諸行無常是生滅法のことで、あとの生滅滅已寂滅爲樂を云ひのこして聞き飽かないその御法の聲でもないのに、ほとゝぎすの聲をなんとしてかやうに思ひ染めたのだらう。
○ふたむらやま　三河國の二村山それに閏で五月が二つある心持を云ひ懸けてゐる。
○照射　鹿を寄せて射る爲に火串といふものに焚く火。

照射する宮城が原のした露にしのぶもぢずりかわくまぞなき

修理大夫顯季

五月やみさやまの峯にともす火は雲の絶間の星かとぞ見る

權中納言俊忠中將に侍りけるとき歌合し侍りけるに照射の歌とてよめる

藤原顯綱朝臣

さつきやみしげき端山にたつ鹿はともしにのみぞ人にしらるゝ

ともしの歌とてよめる

大藏卿行宗

ともするほぐしの松ももえつきて歸るに迷ふしもつ闇かな

讀人しらず

山ぶかみほぐしの松はつきど鹿ぬれにおもひはなほかくるかな

賀茂重保

ともする火串を妻と思へばやあひ見て鹿の身をこがすらむ

百首の歌奉りけるとき螢の歌とてよめる

藤原季通朝臣

昔わがあつめし物を思ひ出でて見馴れ顏にも來る螢かな

題しらず

源俊頼朝臣

哀れにもみさをにもゆる螢かな聲たてつべきこの世とおもふに

○宮城が原　陸前國。
○しのぶもぢずり　陸奥の信夫地方から出る亂れ模樣で、狩衣に用ゐられる。
○かわくま　一本「かわくよ」
○さやまの峯　武藏國北多摩郡。

○ともしにのみぞ　照射によってばかり。

○ほぐし　火串。
○しもつ闇　下つ闇。月の下旬の闇。

○おもひ　火を云ひ懸く。

○思へばや　思ふからか。
○あひ見て　火串に相見て。
○こがすらむ　射られることを云つたのであらう。

○たてつべき　一本「立てぬべき」

あさりせし水のみさびに閉ぢられてひしの浮葉に蛙なくなり

水草隔船といへる心をよみ侍りける　　法性寺入道前太政大臣

夏ふかみ玉江にしげる葦の葉のそよぐや船の通ふなるらむ

百首の歌の中に鵜川の心をよませ給うける　　崇徳院御製

早瀬川みをさかのぼる鵜飼舟まづこの世にもいかゞくるしき

撫子の花の盛りなりけるを見てよめる　　和泉式部

見るになほこの世のものとおぼえぬは唐撫子の花にぞありける

松下逐涼といへる心をよみ侍りける　　中務卿具平親王

常夏の花もわすれて秋風をまつの陰にて今日はくれぬる

冰室をよみ侍りける　　仁和寺入道法親王覺性

はる秋ものちのかたみはなきものを冰室ぞ冬のなごりなりける

百首の歌奉りける侍りける時冰室の歌とて詠み侍りける　　大炊御門右大臣

あたりさへ涼しかりけり冰室山まかせしみづの冰るのみかは

題しらず　　法印慈圓

山かげや岩もる淸水おとさえて夏のほかなるひぐらしの聲

藤原道經

○みさび　水銹。

○玉江　越前國。

○みを　水脈。
○まづこの世にもいかゞくるしき　早い瀬を上ると同時に殺生するから後世の罪は更に深いので。
○物と　一本「物に」

○常夏の花　夏一ぱい咲く花なのでこの名がある。
○まつ　待つ—松。

○冰室山　山城國。
○冰るのみかは　冰るのみぢやない。
○夏のほかなる　夏とも思はれない。

ゆふされば玉ゐるかずも見えねども關の小川のおとぞすゞしき

俊惠法師

岩間もる清水を宿にせきとめてほかより夏をすごしつるかな

顯昭法師

さらぬだに光すゞしき夏の夜の月をしみづに宿しつるかな

泉邊納涼といへる心をよめる　法眼實快

堰きとむる山下水にみがくれてすみけるものを秋のけしきは

夏夜曉月といへる心をよめる　藤原經家朝臣

我ながらほどなき夜半やをしむらむなほ山の端にありあけの月

夏月をよめる　祝部宿禰成仲

夏の夜の月の光はさしながら如何にあけぬるあまの戸ならむ

雨後月明といへる心をよめる　俊惠法師

夕立のまだ晴れやらぬ雲間よりおなじ空ともみえぬ月かな

大宮の前太政大臣の家にて夏月如秋といへる心をよめる　藤原敦仲

小萩はらまだ花さかぬ宮城野の鹿やこよひの月に鳴くらむ

草花先秋といへる心をよめる　顯昭法師

○ゆふされば　夕方が來ると。
○關の小川　近江國の逢坂關近くにある川。
○ほかより夏を　夏を宿に入れないで。
○やごしつるかな　一本「やごしてぞ見る」
○みがくれて　水に隱れて—身隱れて。
○すみ　澄み—住み。
○我ながら　月自身ながら。
○をしむらむ　一本「をしからむ」
○さしながら　月光はさしながら—戸は鎖しながら。
○あけぬる　明けぬる—開けぬる
○宮城野　陸前國。
○鹿やこよひの月に鳴くらむ　夏の月なのに今宵は秋の月のやうだから。

夏ごろも裾野の原をわけゆけばをりたがへたる萩が花ずり

松風秋近といへる心をよめる　藤原親盛

あき風は波とともにや越えぬらむまだきすゞしき末のまつ山

刑部卿賴輔歌合し侍りけるに納涼の心をよみ侍りける　前參議教長

岩たゝく谷の水のみおとづれて夏にしられぬみやまべの里

藤原盛方

岩間より落ちくる瀧のしら絲はむすばで見るも涼しかりけり

百首の歌奉りけるとき水無月のみそぎをよめる　藤原季通朝臣

今日くれば麻の立枝にゆふかけて夏みなづきの祓をぞする

皇太后宮大夫俊成

いつとても惜しくやはあらぬ年月をみそぎにすつる夏の暮かな

みな月祓をよめる　讀人しらず

みそぎする川瀬にさ夜やふけぬらむかへる袂に秋かぜぞふく

○をりたがへたる　折(時季)を違へた。
○萩の花ずり　萩の花が衣にうつつたのが摺つたやうに見えるので云ふ。夏衣、裾野は縁語。
○まだき　まだ早い時期ゆゑ。
○末のまつ山　陸奧國の名所。古今集卷二十に「君を舍きてあだし心を我が持たば末の松山波も越えなむ」
○夏にしられぬ　夏に知られればやはり暑いわけだが、涼しい所を見ると夏にしられないの意味。
○むすばで　結ばで—掬ばで。
○麻の立枝にゆふかけて　六月祓の時の具。ゆふは木綿。
○夏みなづき　夏六月—夏皆盡き
○祓　一本「禊(みそぎ)」
○いつとても惜しくやはあらぬ年月を　いつの年月でも惜しくないことはないのに。
○みそぎ　夏の終りに行はれる。水に身をそゝいで身心の汚れを流し捨てる行事。
○すつる　御祓に年月を流し捨てる。
○さ夜　「さ」は接頭語。

千載和歌集　卷第四

秋歌上

秋立日よみ侍りける　侍從の乳母

秋たつと聞きつるからにわが宿の萩の葉風のふきかはるらむ

二品法親王

淺ぢふの露けくもあるか秋來ぬと目にもさやかに見えけるものを

百首の歌奉りけるとき秋立心をよめる　待賢門院堀河

秋の來るけしきの森の下風にたちそふものはあはれなりけり

皇太后宮大夫俊成

八重葎さしこもりにし蓬生にいかでか秋の分けてきつらむ

初秋の心をよめる　寂然法師

秋はきぬ年はなかばにすぎぬとや荻ふく風のおどろかすらむ

讀人しらず

木の葉だにいろづくほどはあるものを秋かぜふけばちる涙かな

○聞きつるからに　聞いたと同時に。
○らむ　一本「かな」
○あるか　あるかな。
○秋來ぬと　古今集卷四に「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」
○けしきの森　大隅國始良。
○八重葎の歌　貫之集に「訪ふ人も無き宿なれど來る春は八重葎にもさはらざりけり」
○年は　一本「年も」
○いろづくほどは　散る前に色づく期間は。

社頭立秋といへる心をよめる　賀茂重政

神山のまつ吹く風もけふよりは色はかはらでおとぞ身にしむ

郁芳門院の前栽合(せんざいあはせ)に荻をよめる　大藏卿行宗

ものごとに秋のけしきはしるけれどまづ身にしむは荻の上かぜ

初秋の心を　源俊頼朝臣

秋風や涙もよほすつまならむおとづれしより袖のかわかぬ

七夕の心をよみ侍りける　攝政前右大臣

たなばたの心のうちやいかならむ待ち來し今日の夕ぐれの空

百首の歌奉りけるとき七夕の心をよめる　大納言隆季

棚機の天つひれ吹くあき風に八十のふなつを御ふねいづらし

堀河院の御時百首の歌奉りける時よみ侍りける　二條太皇太后宮肥後

たなばたのあまの羽衣かさねてもあかぬ契りやなほむすぶらむ

前齋宮河内

戀ひ〳〵てこよひばかりや棚機の枕にちりのつもらざるらむ

七夕の心をよめる　源俊頼朝臣

七夕の天の河原の岩まくら交しもはてず明けぬこの夜は

○色はかはらで　色はもとのまゝで。

○しるけれど　いちじるしいが。

○つま　端。

○天つひれ　領巾(ひれ)は婦人の領(えり)にかけたきれで、織女星のことなので天つひれと云つたのだ。

○八十のふなつを　多數の船津を「を」一本「に」

○あまの羽衣　天女の衣。

○あかぬ契り　一年に一度きり逢へないので。

○戀ひ〳〵ての歌　金葉集卷三に見える。

○天の河原の岩まくら　牽牛星と天の川の川邊で逢ふので斯ういふ

○明けぬ　明けた。

百首の歌の中に七夕の心をよませ給うける　崇徳院御製

たなばたに花ぞめ衣ぬぎかせばあかつき露のかへすなりけり

七夕後朝の心をよみ侍りける　土御門右大臣

天の川こゝろをくみて思ふにも袖こそ濡るれあかつきの空

堀河院の御時百首の歌奉りけるとき刈萱をよみ侍りける　大納言師頼

秋くればおもひみだるゝかるかやの下葉や人のこゝろなるらむ

題しらず　親王家甲斐

おしなべて草葉のうへをふく風にまづしたをるゝ野邊の刈萱

雲居寺瞻西上人房にて歌合し侍りける時よめる　藤原道經

ふみしだき朝ゆく鹿や過ぎぬらむしどろに見ゆる野路のかる萱

草花告秋といへる心をよめる　法印靜賢

秋きぬと風もつげてし山里になほほのめかす花すゝきかな

題しらず　讀人しらず

いかなれば上葉をわたる秋風に下をれぬらむ野邊のかるかや

和泉式部

人もがな見せもきかせも萩がはな咲く夕かげのひぐらしの聲

○花ぞめ衣　露草の花染めの衣。

○こゝろをくみて　稀に逢ふ瀬の名殘を思ひやつて。

○おしなべて　おし靡けて。

○ふみしだき　ふみ亂して。
○しどろに　秩序なく亂れて。
○野路　一本「野邊」

○ほのめかす　秋の來た事を…。

○人もがな見せもきかせも　見せも聞かせもする人もあればいいがな。

藤原伊家

秋山のふもとをこむるうす霧はすそ野の秋のまがきなりけり

藤原基俊

宮城野の萩やをじかの妻ならむ花さきしよりこゑの色なる

長覺法師

こゝろをば千草のいろに染むれどもそでにうつるは萩がはなずり

堀河院の御時百首の歌奉りける時よみ侍りける　　大納言師頼

露しげきあしたの原の女郎花ひとえだ折らむ袖はぬるとも

法性寺入道前太政大臣の家にて女郎花隨風といへる心をよめる　　前中納言雅兼

をみなへし靡くを見ればあき風のふきくる末もなつかしきかな

歎くこと侍りけるとき女郎花をみてよみ侍りける　　前左衞門督公光

をみなへし涙に露やおきそふる手折ればいとゞ袖のしをるゝ

題しらず　　藤原行家

吹く風にをれふしぬれば女郎花まがきぞ花のまくらなりける

攝政前右大臣家に歌合し侍りけるとき野徑秋夕といへる心をよめる　　藤原盛方朝臣

○あしたの原　大和國。

夕されば萱がしげみに鳴きかはす蟲のねをさへ分けつゝぞゆく

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる　源俊頼朝臣

さま〴〵にこゝろぞとまる宮城野の花のいろ〳〵蟲のこゑ〴〵

野花留客といへる心をよめる

秋くれば宿にとまるを旅寢にて野邊こそ常のすみかなりけれ

百首の歌奉りけるとき秋の歌とて詠める　藤原季通朝臣

野分する野邊のけしきを見わたせば心なき人あらじとぞ思ふ

皇太后宮大夫俊成

夕されば野邊のあきかぜ身にしみて鶉なくなり深草の里

題しらず　源俊頼朝臣

何となくものぞかなしき菅原やふしみの里の秋のゆふぐれ

百首の歌よませ侍るとき草花の心をよみ侍りける　攝政前右大臣

さま〴〵の花をば宿にうつしうゑつ鹿の音さそへ野邊のあき風

野花露といへる心をよみ侍りける　二品親王

秋の野の千草のいろにうつろへば花ぞかへりて露をそめける

題しらず　法印慈圓

○夕されは　夕方になると。
○野分　秋から冬にかけて吹く烈風。
○見わたせば　一本「見る時は」
○心なき人　情趣を感じない人。
○深草の里　山城國紀伊郡。
○ふしみの里　山城國紀伊郡。
○かへりて　露が花を染めるのでなくて却つて花が露を。

○露こぼるらむ　涙のやうた露がこぼれるのだらう。

○龍田姫　大和國紅葉の名所の龍田山の女神。秋の女神である。
○かざし　簪。
○緒をよわみ　緒が弱いので。

○さが　世のさが(習ひ)―嵯峨。

○宿かれて　宿離れして。

草木まで秋のあはれをしのべばや野にも山にも露こぼるらむ

崇徳院に百首の歌奉りける時よめる　侍賢門院堀河

はかなさを我が身のうへによそふれば袂にかゝる秋のゆふつゆ

藤原清輔朝臣

龍田姫かざしの玉の緒をよわみ亂れにけりと見ゆるしら露

題しらず　藤原季經朝臣

ゆふまぐれ荻ふく風のおときけば袂よりこそつゆはこぼるれ

圓位法師

おほかたの露には何のなるならむ袂におくは涙なりけり

法輪寺にまうで侍りけるに嵯峨野の花をみてよめる　道命法師

はなすゝき招くはさがと知りながら止まるものは心なりけり

ひさしく住まず侍りける所に秋頃まかりわたりてよみ侍りける　前大納言公任

時しもあれ秋ふる里にきてみれば庭は野邊ともなりにけるかな

住み侍りける山里をしばし外に侍りて歸りたりけるに前栽のいたく萎れ(しをれ)たりければよめる　小辨

宿かれて幾日もあらぬに鹿のなく秋の野邊ともなりにけるかな

思野花といへる心をよめる　藤原伊家

今はしもほに出でぬらむあづま路の岩田の小野のしののをすゝき

秋の歌とてよみ侍りける　攝政前右大臣

夕されば小野のあさぢふたまちりて心くだくる風の音かな

前大僧正覺忠

ときはなる靑葉の山も秋くれば色こそかへね寂しかりけり

月の歌あまたよみ侍りける時よめる　權大納言實家

秋の夜の心をつくすはじめとてほのかに見ゆる夕月夜かな

月の歌三十首よませ侍りける時よみ侍りける　法性寺入道前太政大臣

秋の月たかねの雲のあなたにて晴れゆく空のくるゝ待ちけり

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる　源俊頼朝臣

こがらしの雲ふきはらふ高嶺よりさえても月のすみのぼるかな

隆源法師

いづこにも月はわかじを如何なればさやけかるらむ更科の山

攝政右大臣家に百首の歌よませ侍りけるとき月の歌とてよめる　藤原隆信朝臣

いでぬより月見よとこそさえにけれ姨捨山のゆふぐれの空

○今はしも　「し」は强め、「も」は感動の助詞。
○岩田の小野　遠江國磐田郡。
○たまちりて　露の玉が散つて。
○靑葉の山　若狹國大飯郡。
○色こそかへね　「ど」を補ふ。
○秋の夜のの歌　古今集卷四に、「木の間より洩り來る月の影見れば心盡しの秋は來にけり」
○夕月夜　夕月。
○わかじを　分け隔てはあるまいに。
○更科　信濃國更級郡の姨捨山。

月の歌とてよみ侍りける　　前中納言雅頼

くまもなきみそらに秋の月すめば庭には冬のこほりをぞしく

皇太后宮大夫俊成十首の歌よみ侍りける時よみて遣はしける中に月の歌　　右大臣

月みればはるかに思ふさらしなの山も心のうちにぞありける

權中納言俊忠の桂の家にて水上月といへる心をよみ侍りける　　源俊頼朝臣

あすもこむ野路の玉川はぎこえていろなる波に月やどりけり

百首の歌の中に月の歌とてよませ給うける　　崇德院御製

玉よする浦わの風に空はれてひかりをかはす秋の夜のつき

大炊御門右大臣

さ夜ふけて富士の高嶺にすむ月は煙ばかりや曇るなるらむ

皇太后宮大夫俊成

石ばしる水のしらたまかず見えてきよたき川にすめる月かな

藤原清輔朝臣

しほがまの浦ふく風に霧はれて八十島かけてすめる月かげ

法性寺入道前太政大臣內大臣に侍りけるとき月每秋友といへる心をよま

○中に　一本「中の」

○あすもこむ　明日も來よう。○野路の玉川　近江國栗太郡。

○玉よする　月光の宿つた波の寄せることか。

○しほがまの浦　陸前國。○八十島　多數の島。

せ侍りける時よめる　源俊頼朝臣

思ひぐまなくても年のへぬるかなもの言ひかはせ秋の夜の月

藤原基俊

山の端にますみのかゞみかけたりと見ゆるは月の出づるなりけり

藤原道經

秋の夜や天の川瀨は冰るらむ月のひかりの冱えまさるかな

法性寺入道前太政大臣の家に月の歌よませ侍りける時よめる　太宰大貳重家

遠ざかるおとはせねども月きよみ冰とみゆる志賀のうらなみ

百首の歌よみ侍りけるとき月の歌とてよみ侍りける　右衛門督頼實

つねよりも身にぞしみける秋の野に月すむ夜半の荻のうは風

海邊月といへる心をよめる　俊惠法師

ながめやる心のはてぞなかりけるあかしの沖にすめる月かげ

賀茂社の後番の歌合とて神主重保歌よませ侍りける時よめる　權中納言長方

やほかゆく濱の眞砂をしきかへて玉になしつる秋の夜の月

藤原公時朝臣

岩間ゆくみたらし川の音さえて月やむすばぬこほりなるらむ

○思ひぐまなくても　月光の限なきことを云ひ懸く。

○ますみ　ま澄み。「ま」は接頭語。

○遠ざかるの歌　後拾遺集卷六に「さ夜更くるまゝに汀や冰るらむ遠ざかり行く志賀の浦波」

○やほかゆく濱　八百日も行く長い濱。

湖上月といへる月をよめる　藤原顯家朝臣

月かげはきえぬ氷と見えながらさゞなみよする志賀の唐崎

月前蟲といへる心をよめる　頼圓法師

照る月のかげさえぬれば淺茅原ゆきのしたにも蟲はなくなり

月照草露といへる心をよめる　藤原親盛

あさぢ原葉末にむすぶ露ごとにひかりを分けて宿る月かな

題しらず　藤原清輔朝臣

ふけにける我がよの秋ぞ哀れなるかたぶく月はまたもいでなむ

刑部卿頼輔

身のうさの秋はわするゝものならば涙くもらで月は見てまし

紫式部

おほかたの秋のあはれをおもひやれ月に心はあくがれぬとも

前大納言成通

類(たぐひ)なくつらしとぞおもふ秋の夜の月を殘して明くるしのゝめ

法性寺入道前太政大臣の家にて澗底月といへる心をよみ侍りける　源俊頼朝臣

照る月の旅寢のとこやしもとゆふかづらき山の谷川の水

○ゆきのした　月光が白雪のやうに見えることから斯ういふ。

○月かな　一本「月かげ」

○ふけにける　秋の更けにける—我が年齢のふけにける。○我がよ　我が齢。

○いでなむ　一本「いでけり」○涙くもらで　涙に目が曇らずして。

○あくがれぬとも　あこがれたとても。

○しもとゆふ　笞結ふ葛とかゝる言葉で葛城の枕詞。○かづらき山　大和國南葛城郡。

千載和歌集　卷第五

秋歌　下

題しらず　　大貳三位

はるかなるもろこしまでも行くものは秋のねざめの心なりけり

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる　　藤原仲實朝臣

山ざとはさびしかりけりこがらしの吹く夕暮のひぐらしの聲

崇德院に百首の歌奉りけるとき秋の歌とてよめる　　藤原季通朝臣

あきの夜は松をはらはぬ風だにも悲しきことの音をたてずやは

法性寺入道前太政大臣前内大臣に侍りける時の家の歌合に野風といへる心をよめる　　藤原時昌

露さむみうらがれもてく秋の野にさびしくもある風の音かな

承曆二年内裏の歌合によめる　　藤原正家朝臣

夕されば小野の萩原ふく風にさびしくもあるか鹿の鳴くなる

堀河院の御時百首の歌奉りける時　　二條太皇太后宮肥後

○松をはらはぬ　白氏文集「第一第二絃索々秋風拂レ松疎韻落。」とある。

○たてずやは　立てないものか。「やは」は反語。

○うらがれもてく　裏枯れ持て來

○承曆　白河天皇の年號。

○さびしくもあるか　「か」は感動の助詞。

みむろ山おろす嵐のさびしきにつまとふ鹿の聲たぐふなり

大納言公實

そまがたに道やまどへるさを鹿の妻とふ聲のしげくもあるかな

題しらず　　輔仁のみこ

秋の夜はおなじ尾上になく鹿のふけゆくまゝに近くなるかな

田上の山里にて鹿のなくを聞きてよみ侍りける　　源俊頼朝臣

さを鹿の鳴く音は野邊にきこゆれど涙は牀のものにぞありける

百首の歌奉りける時よめる　　待賢門院堀河

さらぬだにゆふべ寂しきやま里の霧のまがきにを鹿なくなり

夜泊鹿といふ心をよめる　　刑部卿範兼

みなと川うきねのとこに聞ゆなりいく田の奥のさを鹿の聲

藤原隆信朝臣

うきねする猪名のみなとにきこゆなり鹿の音おろす峯の松風

俊惠法師

夜をこめて明石のせとを漕ぎ出づれば遙かにおくるさを鹿のこゑ

道因法師

○たぐふ　副はる。
○そまがた　杣山のやうな形の山
○尾上　峯の上。
○涙は牀のもの　涙は我が牀にこぼれるもの。
○みなと川、いく田　共に攝津國
○うきね　浮寢(旅泊)。
○猪名のみなと　攝津國豊能郡。
○せと　狹門。海峽。

みなと川夜船こぎいづるおひ風にしかの聲さへせとわたるなり

鹿聲兩方といふ心を　　覺延法師

宮城野の小萩が原をゆくほどは鹿の音をさへわけて聞くかな

鹿の歌とてよめる　　左京大夫修範

さを鹿のつまとふ聲もいかなれやゆふべは分きてかなしかるらむ

左京大夫秀能

聞くまゝにかたしく袖のぬるゝかな鹿のこゑにも露やそふらむ

法印慈圓

山里のあかつきがたの鹿の音は夜半のあはれのかぎりなりけり

俊惠法師

外(よそ)にだに身にしむ暮の鹿の音をいかなる妻かつれなかるらむ

道因法師

ゆふまぐれさてもや秋はかなしきと鹿の音きかぬ人にとはばや

賀茂政平

つねよりも秋の夕をあはれとは鹿の音にてや思ひそめけむ

惟宗廣言

○せとわたるなり　狹門を渡る。「なり」一本「かな」

○わけて　踏み分けて。つまり左右に鹿の音の聞えることを云ふ。

○ゆふべは分きて　夕方はとりわけて。

○かたしく袖　片敷く袖。獨寢の袖。

○かぎり　最上。

○外にだに身にしむ　餘所耳に聞いてさへ身にしみる。

○いかなる妻かつれなかるらむ　どんなに鹿の妻がつれなくてあんなに鳴かれるのだらう。

○さても　そのまゝでも（鹿の音など聞かないでも）。

○あはれ　しみ〴〵と胸に應へること。

さびしさを何にたとへむを鹿なく深山のさとのあけがたの空

長覺法師

いかばかり露けかるらむさを鹿の妻こひかぬる小野の草ぶし

寂蓮法師

をのへより門田にかよふ秋風にいな葉をわたるさを鹿の聲

題しらず　讀人しらず

おどろかす音こそよるの小山田はひとなきよりも寂しかりけれ

源兼昌

我が門のおくてのひたに驚きてむろのかり田に鳴ぞたつなる

寂蓮法師

蟲のねは淺茅がもとにうづもれて秋は末葉の色にぞありける

藤原兼實朝臣

秋の夜のあはれは誰もしるものを我のみとなくきりぎりすかな

蟲聲非一といふ心をよみ侍りける　左近中將良經

さまざまのあさぢが原の蟲のねをあはれひとつに聞きぞなしつる

百首の歌奉りける時よみ侍りける　大炊御門右大臣

○草ぶし　鹿が野邊の草に臥すこと。
○いな葉をわたる　風に誘はれ來て稻の葉をわたる。
○おどろかす　引板、鳴子などが音して鹿などを驚かす。
○おくてのひた　晩稻の引板。
○むろ　むろのはやわせ。早稻の一種。
○かり田　刈田。
○哀れひとつに　あはれといふ感じ一つに。

○秋深くの歌　毛詩七月篇に「七月在野、八月在宇、九月在戸、十月蟋蟀入二我牀下一。」
○保延　崇德天皇の年號。
○さりともと　それにしてもと。
○あだし野　仇なる野。山城國嵯峨の奥。
○ひとり秋なる　月ばかり秋氣色の。
○色は　一本「色も」
○うねればや　移るからか。
○名にながるらむ　名月と世に流傳するのだらう。
○ちゞに　千箇に。千片に。

夜をかさね聲よわりゆく蟲のねに秋のくれぬる程をしるかな

蛬の近くなきけるをよませ給ける　　花山院御製

秋深くなりにけらしなきりぎりす牀(ゆか)のあたりに聲きこゆなり

保延のころほひ身を恨むる百首の歌よみ侍りけるとき蟲の歌とてよめる

さりともとおもふ心も蟲の音もよわり果てぬる秋の暮かな

道性法親王

題しらず

蟲の音もまれになり行くあだし野にひとり秋なる月のかげかな

式子内親王

草も木も秋のすゑ葉は見えゆくに月こそ色はかはらざりけれ

後冷泉院の御時九月十三日夜月宴侍りけるによみ侍りける

大宮の右のおほいまうち君

すむ水にさやけき影のうつればや今宵の月の名にながるらむ

十三夜の心をよめる　　讀人しらず

あきの月ちゞに心をくだき來てこよひ一夜にたへずもあるかな

月前擣衣といへる心を　　仁和寺入道法親王覺性

さ夜ふけてきぬたの音ぞたゆむなる月を見つゝや衣うつらむ

堀河院の御時百首の歌奉りけるとき擣衣の心をよみ侍りける　大納言公實

戀ひつゝや妹がうつらむ唐衣きぬたの音のそらになるまで

源俊賴朝臣

まつかぜの音だにあきはさびしきに衣うつなりたまがはの里

藤原基季

たが爲にいかに打てばか唐衣ちたびやちたび聲のうらむる

旅宿擣衣といへる心をよめる　俊盛法師

衣うつ音をきくにぞ知られぬる里とほからぬ草まくらとは

霧の歌とてよめる　法師宗圓

夕霧や秋のあはれをこめつらむ分け入るそでに露のおきそふ

暮尋草花といへる心をよませ給うける　崇德院御製

秋深みたそがれ時のふぢばかま匂ふは名のる心地こそすれ

百首の歌奉りける時よめる　前參議親隆

いかにしていはまも見えぬ夕ぎりにとなせの筏おちてきつらむ

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りけるとき家の歌合に殘菊をよめる　藤原基俊

○そらになるまで　音が空に響くまで―心が空になる程。

○たまがはの里　攝津國三島郡。

○ちたびやちたび　千度八千度。

○里とほからぬ草枕とは　自分が人里から遠からぬ旅枕に在るといふことは知られた。

○たそがれ時　誰そ彼時。夕暮時。

○名のる　「彼は誰ぞ」と問はれたのに對して名のる。

○となせ　戸難瀨。大井川の上流

月照菊花といへる心をよみ侍りける　　内大臣

今朝見ればさながら霜をいたゞきておきなさびゆく白菊の花

籬菊如雪といへる心をよみ侍りける　　前大僧正行慶

白菊の葉におく露にやどらずば花とぞ見ましてらす月かげ

菊の歌とてよめる　　祐盛法師

雪ならばまがきにのみは積らじと思ひとくにぞしらぎくの花

百首の歌よみ侍りけるとき菊の歌とてよめる　　藤原家隆

朝なくまがきの菊のうつろへば露さへ色のかはりゆくかな

崇德院に百首の歌奉りけるとき秋の歌とてよめる　　藤原季通

冴えわたる光を霜にまがへてや月にうつろふしら菊のはな

瞻西上人雲居寺にて結緣經の後宴に歌合し侍りけるに野風の心をよめる　　藤原基俊

ことくに悲しかりけりむべしこそあきの心を愁へといひけれ

紅葉の心をよみ侍りける　　仁和寺後入道法親王覺性

秋にあへずさこそは葛の色づかめあな恨めしの風のけしきや

初時雨ふる程もなくしもとゆふかづらき山は色づきにけり

○さながら　そのまゝ。
○おきなさびゆく　翁になり行く
○花とぞ見まし　月影を花と見るだらうに。
○思ひとく　了解する。
○うつろへば　色が變ると。
○露さへ色の　その色をうつしてゐる露までも色が。
○ことくにの歌　朗詠集に「物色自堪傷二客意一。宜下將二愁字一作中秋心上。」
○むべしこそ　成程な。尤もぢや
○あへず　堪へず。

覺延法師

むら雲のしぐれて染むるもみぢ葉は薄く濃くこそ色も見えけれ

秋の歌とてよめる　藤原定家

しぐれ行くよもの梢の色よりも秋はゆふべのかはるなりけり

題しらず　道命法師

おぼろけの色とや人の思ふらむをぐらの山をてらすもみぢ葉

宇治の前太政大臣紅葉見侍りけるによめる　小弁

君見むとこゝろやしけむ龍田ひめもみぢのにしき色をつくせり

紅葉留客といへる心をよめる　素意法師

故鄕にとふ人あらばもみぢ葉のちりなむ後をまてと答へよ

歌合し侍りけるとき紅葉の歌とてよめる　左京大夫顯輔

山姫にちへの錦を手向けても散るもみぢ葉をいかにとゞめむ

月照紅葉といへる心をのこ共つかう奉りける時よませ給うける　院御製

もみぢ葉に月の光をさしそへてこれやあかぢの錦なるらむ

嘉應二年法住寺殿の殿上の歌合に闘路落葉といへる心をよみ侍りける　右のおほいまうち君

○おぼろけの色　普通一般の色。

○こゝろやしけむ　注意したらう

○故鄕にの歌　詞花集卷一に「新院の仰せごとにて百首の歌奉りけるに詠める―右近中將教長朝臣。故鄕に訪ふ人あらば山櫻散りなむ後を待てと答へよ」

○山姫　山の女神。

○嘉應　高倉天皇の年號。

山おろしに浦づたひする紅葉かないかゞはすべき須磨の關守

大納言實房

清見潟せきにとまらでゆく船は嵐のさそふ木の葉なりけり

權中納言實守

もみぢ葉を關もる神に手向けおきて逢坂山をすぐる木がらし

左大辨親宗

もみぢ葉のみな紅に散りしより名のみなりけり白川の關

從三位頼政

都にはまだあを葉にて見しかどももみぢ散りしく白川のせき

湖上落葉といへる心をよめる　　刑部卿範兼

さゝ波や比良の高嶺の山おろしに紅葉を海のものとなしつる

百首の歌奉りける時よめる　　藤原清輔朝臣

たつた山松のむらだちなかりせばいづくか殘るみどりならまし

題しらず　　覺盛法師

秋といへば岩田の小野のはゝそ原時雨もまたず紅葉しにけり

近衞院の御時禁庭落葉といへる心をよめる　　藤原公重朝臣

○山おろし　山おろしの風。
○いかゞはすべき須磨の關守　いかに關守でも紅葉を止めるわけにはいかないがどうしたものでせう須磨の關守よ。

○關もる神　關の明神。

○名のみなりけり　川が紅葉で紅になつてゐるので白川とは名のみである。
○白川の關　岩代國。

○むらだち　群立ち。

○岩田の小野　山城國宇治郡。
○はゝそ　柞。

庭のおもに散りてつもれるもみぢ葉は九重にしく錦なりけり　俊惠法師

大井川に紅葉見にまかりてよめる

今日みれば嵐の山は大井川紅葉吹きおろす名にこそありけれ　道因法師

大井川ながれておつる紅葉かなさそふは峯の嵐のみかは　藤原清輔朝臣

百首の歌の中に紅葉をよめる

今ぞしる手向の山はもみぢ葉のぬさと散りかふ名にこそありけれ　祝部成仲

落葉の心をよめる

龍田山ふもとの里はとほけれど嵐のつてにもみぢをぞ知る　賀茂成保

吹きみだるはゝそが原を見わたせばいろなき風も紅葉しにけり　藤原朝仲

松間落葉といへる心をよめる

色かへぬ松ふく風の音はして散るははゝその紅葉なりけり　惟宗廣言

故郷落葉といへる心をよめる

ふるさとの庭は木の葉にいろかへてかはらぬ松ぞ綠なりける　法橋慈辨

題しらず

○九重に　幾重にも―宮中に。

○手向の山　大和國。古今集卷九に「此のたびは幣も取り敢へず手向山紅葉の錦神のまに〳〵」

○嵐のつてに　嵐がつてとなつて散らしてくれたので。

○風も紅葉しにけり　風も紅葉の色に染つた。

ちりつもる木の葉も風にさそはれて庭にも秋のくれにけるかな

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる　　源俊頼朝臣

秋の田に紅葉ちりける山里をこともおろかに思ひけるかな

百首の歌よませ侍りけるとき紅葉の歌とてよみ侍りける　　攝政前右大臣

散りかゝる谷の小川の色づけば木の葉や水のしぐれなるらむ

落葉浮水といへる心をよみ侍りける　　後三條内大臣

くれてゆく秋をばみづやさそふらむ紅葉ながれぬ山川ぞなき

百首の歌めしけるとき九月盡の心をよませ給うける　　崇徳院御製

もみぢ葉のちりゆく方をたづぬれば秋もあらしの聲のみぞする

山寺秋暮といへる心をよみ侍りける　　前大僧正覺忠

さらぬだに心ぼそきを山ざとの鐘さへ秋のくれを告ぐなり

雲居寺の結縁經の後宴に歌合し侍りけるに九月盡の心をよみ侍りける　　瞻西上人

からにしき幣にたちもてゆく秋もけふや手向の山路こゆらむ

源俊頼朝臣

あけぬともなほ秋風はおとづれて野邊のけしきよ面がはりすな

○おろかに　疎略に。

○木の葉や　一本「もみぢや」

○水の　一本「秋の」

○みづやさそふらむ　水が誘ふのだらうか。

○あらし　あらじ—嵐。

○さらぬだに　さうでなくてさへ

○鐘さへ　鐘までが。

○からにしき幣にたちもてゆく　紅葉の唐錦を幣に裁つて持つて行く。

○あけぬとも　秋の最後の日の今夜が明けても。

承暦二年內裏の歌合に紅葉をよめる　前中納言匡房

龍田山ちるもみぢ葉を來てみれば秋は麓にかへるなりけり

百首の歌奉りけるとき九月盡の心をよめる　花園左大臣家小大進

今宵まで秋はかぎれとさだめける神代もさらに恨めしきかな

○麓に　紅葉が秋の去るのと同時に麓に散るので斯う云ふ。

千載和歌集　巻第六

冬歌

堀河院の御時百首の歌奉りけるとき初冬の心をよみ侍りける　大納言公實

昨日こそ秋はくれしかいつの間に岩間の水のうす冰るらむ

源俊頼朝臣

いかばかり秋のなごりを眺めましけさは木の葉に嵐ふかずば

藤原仲實朝臣

いづみ川水のみわだのふしづけに岩間のこほる冬は來にけり

百首の歌めしけるとき初冬の心をよませ給うける　崇徳院御製

ひまもなく散るもみぢ葉にうづもれて庭のけしきも冬ごもりけり

大炊御門右大臣

さま〳〵の草葉も今は霜がれぬ野邊より冬はたちて來つらむ

大納言隆季

すむ水を心なしとは誰かいふ冰ぞ冬のはじめをも知る

○嵐ふかずば　嵐が吹かないならば（木の葉も散らないので）。
○いづみ川　山城郡相樂郡。
○みわだ　川の曲つた所。
○ふしつけ　魚を集める爲に柴を切り浸しおくもの。
○岩間の　一本「柴間も」

前參議教長

秋のうちは哀れしらせし風の音のはげしさ添ふる冬は來にけり

花園左大臣家小大進

わぎもこが上裳の裾の水なみにけさこそ冬はたちはじめけれ

山家初冬をよめる　　藤原孝善

いつのまに筧のみづのこほるらむさこそ嵐の音のかはらめ

題しらず　　和泉式部

外山ふく嵐のかぜのおと聞けばまだきに冬のおくぞ知らるゝ

百首の歌奉りけるとき初冬の歌とてよみ侍りける　　大炊御門右大臣

はつしもや置きはじむらむ曉の鐘のおとこそほのきこゆなれ

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる　　前中納言匡房

高砂のをのへの鐘の音すなりあかつきかけて霜やおくらむ

藤原基俊

楸生ふる小野の淺茅におく霜の白きを見れば夜やふけぬらむ

冬の初めの歌とて　　藤原定家

冬來ては一夜ふたよを玉笹の葉わけのしものところせきまで

○風の音の　「の」一本「も」

○わぎもこ　一本「わがせこ」

○まだきに　まだ早きに。

○はじむらむ　一本「はじめけむ」

○高砂のの歌　支那に豊山といふ所があつて、其の嶺にある鐘は霜の降るのを俟つて鳴つたといふ。これと同じ心持の歌か。

○ところせきまで　所狹いまで。

題しらず　藤原もととし

霜さえて枯れゆく小野の岡べなる楢のひろ葉にしぐれ降るなり

馬内侍

寐覺して誰かきくらむこの頃の木の葉にかはるよはの時雨を

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りけるとき家の歌合に時雨をよめる　源定信

おとにさへ袂をぬらすしぐれかなまきの板屋の夜半の寐覺に

崇徳院に百首の歌奉りけるとき落葉の歌とてよめる　皇太后宮大夫俊成

まばらなる槇の板屋に音はしてもらぬ時雨や木の葉なるらむ

時雨の歌とてよめる　仁和寺後入道法親王

木の葉ちるとばかり聞きてやみなましもらで時雨の山巡りせば

曉更時雨といへる心をよみ侍りける　攝政前右大臣

ひとりねの涙やそらにかよふらむ時雨にくもるありあけの月

藤原隆信朝臣

うたゝねの夢や現に通ふらむ覺めてもおなじ時雨をぞ聞く

時雨の歌とてよめる　従三位頼政

○板屋　板葺きの屋。
○こばかり　こだけ。
○現　現實。
○従三位頼政　一本「前右京權大夫頼政」

山めぐり雲のしたにやなりぬらむすそ野の原に時雨すぐなり　源師光

しぐれゆく遠の外山の峯つゞきうつりもあへず雲かゝるらむ　道因法師

嵐ふく比良のたかねのねわたしにあはれしぐるゝ神無月かな

堀河院の御時百首の歌奉りけるときの時雨の歌　中納言國信

深山べのしぐれてわたる數ごとにかごとがましき玉かしはかな　源俊頼朝臣

木の葉のみ散ると思ひし時雨には涙もたへぬものにぞありける　二條太皇太后宮肥後

ふりはへて人もとひこぬ山里は時雨ばかりぞ過ぎがてにする

圓位法師人々にすゝめて百首の歌よませ侍りけるとき時雨の歌とてよめる　藤原定家

しぐれつるまやの軒端の程なきにやがてさしいる月のかげかな　讀人しらず

たまづさに涙のかゝるこゝちしてしぐるゝ空に鴈のなくなり

○すぐなり　一本「するなり」
○かゝる　一本「かへる」
○ねわたしに　嶺を渡って吹き下す風に。
○時雨の歌　一本「時雨を詠める」
○かごとがましき　かこち言云ふやうにはら〳〵音する。
○涙もたへぬ　木の葉ばかりでなく、涙も散るのを堪へない。
○ふりはへて　わざ〳〵。
○とひこぬ　一本「かよはぬ」
○まや　両方へ雨の落ちるやうに葺き下した屋造り。
○程なきに　軒の端の狭いのにの意味を云ひ懸く。

山家時雨といへる心を　源仲頼

嶺ごえに楢の葉つたひ音づれてやがて軒端にしぐれ來にけり

題しらず　紀康宗

曉のねざめに過ぐる時雨こそ漏らでも人のそで濡らしけれ

落葉の心をよめる　藤原盛雅

散りはてて後さへ風をいとふかな紅葉をふけるみやまべの里

中納言定頼世をのがれてのち山里に侍りける頃遣はし侍りける　中納言定頼女

都だにさびしさまさるこがらしに嶺の松かぜ思ひこそやれ

宇治にまかりて侍りける時よめる　中納言定頼

朝ぼらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の網代木

堀河院の御時百首の歌奉りける時鷹狩をよめる　藤原仲實

矢形尾(やかたを)の目白(ましろ)の鷹を引きすゑて宇陀の鳥立(とだち)を狩りくらしつる　隆源法師

ふる雪にゆくへも見えずはし鷹のをぶさの鈴のおとばかりして　源俊頼朝臣

ゆふまぐれ山かたつきて立つ鳥の羽音に鷹をあはせつるかな

○嶺ごえに　峯越しに。

○紅葉をふける　山家の屋根に散つた紅葉が丁度屋根を葺いたやうに積つてゐるのを云ふ。

○こがらしに　木枯の風に。

○嶺の松かぜ　山里の冬の樣をいふ。

○網代木　魚とる簗に竹や木をあんだ網代りのものを仕かけた杙。

○矢形尾　矢の形した尾。

○宇陀　大和國の禁獵地。

○鳥立　鳥の集まるやうにした所

○をぶさの鈴　鷹の尾房につけた鈴。

○山かたつきて　山片付きて。

○妹許と　妹の許へと。萬葉集巻七に「佐保川にあそぶ千鳥のさ夜ふけてそのこゑ聞けはいねがてなくに」拾遺集巻四に「思ひかね妹がり行けは冬の夜の川風寒み千鳥鳴くなり」
○なれも　汝も。
○かなしき　一本「かなしや」
○こゝろならず　心から進まず。
○きよき河　大和國。
○ながゐの浦　攝津國。夜も長きを云ひ懸く。
○ほの〴〵と　上から蘆の穗を云ひ懸く。
○かたみに　互に。
○もろ聲に　同音に。
○水の上とやよそに見む　水鳥を水の上のものと餘所事に見ようかい、それ所か。

傅大納言道綱家の歌合に千鳥をよめる　藤原なかたふ

妹許(いもがり)と佐保の川邊をわけゆけば小夜か更けぬる千鳥鳴くなり

千鳥をよめる　皇太后宮大夫俊成

須磨の關ありあけの空になく千鳥かたぶく月はなれもかなしき

道因法師

岩こゆるあらいそ波にたつ千鳥こゝろならずや浦づたふらむ

右大臣

あかつきになりやしぬらむ月影のきよき河原に千鳥なくなり

法印靜賢

霜さえて小夜もながゐの浦さむみ明けやらずとや千鳥なくらむ

賀茂成保

霜がれの難波の葦のほの〴〵と明くるみなとに千鳥鳴くなり

水鳥をよめる　源親房

かたみにや上毛の霜を拂ふらむともねの鴛のもろ聲になく

題しらず　紫式部

水鳥を水の上とやよそに見むわれもうきたる世をすぐしつゝ

堀河院の御時百首の歌奉りける時よめる　　前中納言匡房

みづとりの玉藻のとこのうき枕ふかきおもひは誰かまされる

百首の歌めしける時よませ給うける　　崇徳院御製

このころのをしのうきねぞ哀れなる上毛のしもよ下のこほりよ

左京大夫顯輔

難波がた入江をめぐるあしがもの玉藻の牀のうきねすらしも

冰初結といへることを　　權中納言經房

をしどりのうきねの牀やあれぬらむつらゝゐにけり昆陽(こや)の池水

水鳥の歌とてよめる　　道因法師

鴨のゐる入江の葦は霜がれておのれのみこそ青ばなりけり

賀茂重保

おく霜を拂ひかねてやしをれ伏すかつみが下に鴛のなくらむ

月前水鳥といへる心をよめる　　前左衞門督公光

葦がものすだく入江の月かげはこほりぞ波のかずにくだくる

冬月といへる心をよめる　　平實重

夜をかさねむすぶ冰のしたにさへ心ふかくもすめる月かな

○うき枕　浮き枕―憂き枕。

○このころの　一本「このころは」

○あしがも　葦にゐる鴨。

○つらゝゐにけり　冰柱が生じたことよ。「り」一本「る」

○昆陽の池　攝津國。

○青ば　青葉―青羽。

○かつみ　眞菰のこと。

○すだく　集まる。

氷の歌とてよめる　　左京辨親宗

いづくにか月はひかりをとゞむらむやどりし水も氷ゐにけり

藤原成家朝臣

冬くればゆくてに人はくまねども氷ぞむすぶ山の井のみづ

道因法師

月のすむそらには雲もなかりけりうつりしみづは氷へだてて

百首の歌めしける時氷の歌とてよませ給うける　　崇徳院御製

つらゝゐてみがける影の見ゆるかなまことにいまや玉川の水

皇太后宮大夫俊成

月さゆるこほりの上に霰ふりこゝろくだくる玉がはのさと

閑居聞霰といへる心をよみ侍りける　　左近中將良經

さゆる夜のまきのいたやのひとり寝にこゝろくだけと霰ふるなり

山家雪朝といへる心をよめる　　大納言經信

あさどあけて見るぞさびしき片岡のならの廣葉にふれるしら雪

百首の歌の中に雪の歌とてよませ給うける　　崇徳院御製

夜をこめて谷の戸ぼそに風さむみかねてぞしるき嶺のはつ雪

○ゆくて　行く序でに
○むすぶ　結ぶ｜掬ぶ。
○まことにいまや玉川の水　玉を琢くといふ心持を添へて、眞にこれでこそ名に負ふ玉川の水ぢや。
○くだくる　霰の玉が水の上に碎ける｜心の碎ける。
○あさど　朝の戸。
○片岡　大和國。
○かねて　豫め。
○しるき　著しい。

藤原季通朝臣

さえわたる夜半のけしきに深山べの雪のふかさを空にしるかな

藤原清輔朝臣

消ゆるをや都の人はをしむらむ今朝やま里にはらふしら雪

雪の歌とてよめる　藤原資隆朝臣

霜がれのまがきのうちの雪見れば菊よりのちの花もありけり

題しらず　仁和寺後入道法親王

たとへても言はむかたなし月かげに薄雲かけて降れるしらゆき

前参議教長

みやま路はかつちる雪にうづもれていかでか駒のあとをたづねむ

京極前太政大臣の高陽院の家の歌合に雪の歌とてよめる　治部卿通俊

おしなべて山のしら雪つもれどもしるきは越の高嶺なりけり

藤原顕綱朝臣

外山にはしばの下葉もちりはててをちの高嶺にゆき降りにけり

源俊頼朝臣

ふる雪に谷のかけはしうづもれてこずゑぞ冬の山路なりける

○うちの雪見れば　一本「うちに雪ふれば」

○菊よりのちの花　朗詠集に「不ニ是花中偏愛レ菊、此花開後更無花。」のあるのによつて雪を菊より後の花に見立てて斯う云ふ。

○かけて　懸けて。

○みやま路はの歌　韓非子に「管仲從ニ桓公一伐ニ孤竹ㇾ、春往冬返。迷惑失レ道、管仲曰老馬之智可レ用也、乃放レ馬而隨レ之遂得レ道。」

○しるきは　著しいのは。

○越　今の北陸地方の古稱。

○をち　遠方。彼方。

○こずゑぞ冬の山路なりける　雪が高く積つたので。

うへのをのこども百首の歌奉りける時雪の歌とてよませ給うける　二條院御製

雪つもるみねにふぶきや渡るらむこしのみ空にまよふしら雲

遍昭寺にて池邊雪といへる心をよみ侍りける　二品法親王

波かけばみぎはの雪もきえなましこゝろありても冰る池かな

雪の歌とてよみ侍りける　右大臣

山里のかきねは雪にうづもれて野邊とひとつになりにけるかな

右近大將實房

あともたえしをりも雪にうづもれてかへる山路にまよひぬるかな

從三位頼政

こえかねて今ぞ越路をかへる山雪ふる時の名にこそありけれ

顯昭法師

波間より見えしけしきぞかはりぬる雪ふりにけり松がうら島

攝政右大臣に侍りける時百首の歌よませ侍りけるとき雪の歌とてよめる

藤原良清

ふぶきするながらの山を見わたせばをのへをこゆる志賀の浦波

醍醐の清瀧のやしろに歌合し侍りける時よめる　讀人しらず

○波かけば　波がかゝつたならば

○しをり　道しるべ。

○越路を　一本「越路に」
○かへる山　越前國。
○雪ふる時の名　雪がふると越えかねて歸るので、歸山といふ名は雪がふる時の名であるんだ。
○松がうら島　陸前國。

○ながらの山、志賀の浦　共に近江國滋賀郡。

○友こそなけれ　白樂天が竹を愛して友とした故事によつて詠んだ歌。

○よ深き雪　竹のよ（節と節との間）ー夜。

○えだよりほかの花　枝に咲いた以外の花。

○跡　人の足跡。

○鈴鹿山　伊勢國鈴鹿郡。

○かばかりこそは春もにほはめ　春でもかほど匂ひませうか。

ふる雪にのきばの竹もうづもれて友こそなけれ冬のやまざと

行路雪といへる心をよめる　　西住法師

駒のあとはかつ降る雪にうづもれておくるゝ人や路まどふらむ

題しらず　　坂上明兼

呉竹のをれふすおとのなかりせばよ深き雪をいかで知らまし

雪の歌とてよめる　　藤原爲季

眞柴かる小野の細道あとたえて深くも雪のなりにけるかな

俊惠法師

雪ふれば木々の梢にさきそむるえだよりほかの花もちりけり

關路滿雪といへる心をよみ侍りける　　内大臣

ふるまゝに跡たえぬれば鈴鹿山ゆきこそ關のとざしなりけれ

年内に梅の花の咲きけるを見てよみ侍りける　　天台座主明快

山里の垣根の梅はさきにけりかばかりこそは春も匂はめ

雪中歳暮といへる心をよみ侍りける　　前大納言實長

かきくらし越路も見えずふる雪にいかでか年のかへりゆくらむ

籠り居て侍りける年の暮によめる　　前左衞門督公光

○さりとも　それにしても。
○かへらむことは夜の間と思ふに　一夜の程には二度年が立ち返るたらうと思ふにつけても。
○忍ぶ昔に云々　立ち返る年が、懐かしい昔に返るのだつたならはなア。
○おどろかれぬる　驚かれた―目覚された。
○かしらおろして　剃髪して。
○都にて　自分がまだ俗人で都に居た時には。
○知りてや年の今日は暮るらむ　一本「知らでや今日の年は暮れなむ」

さりともと歎き〳〵てすごしつる年も今宵にくれはてにけり

年の暮の心をよめる　　相摸

哀れにも暮れゆく年の日数かなかへらむことは夜の間と思ふに

歳暮述懐のこゝろをよめる　　惟宗広言

数ならぬ身には積らぬ年ならば今日のくれをも歎かざらまし

源光行

をしめどもはかなく暮れてゆくとしの忍ぶ昔にかへらましかば

歳暮の心をよみ侍りける　　前律師俊宗

一年ははかなき夢の心地して暮れぬる今日ぞおどろかれぬる

かしらおろして後大原に籠りゐて侍りけるに閑中歳暮といへる心を上人どもよみ侍りけるによみ侍りける　　民部卿親範

都にて送り迎ふといそぎしを知りてや年の今日はくるらむ

千載和歌集　巻第七

離別歌

宇佐の使の餞しける所にてよみ侍りける　藤原實方朝臣

むかし見し心ばかりをしるべにておもひぞおくるいきの松原

有國大貳になりて下りける時よみ侍りける　前大納言公任

別れよりまさりて惜しき命かな君にふたゝび逢はむとおもへば

遠所にまかりける人のまうで來て曉歸りけるに九月盡くる日蟲の音あはれなりければ　紫式部

なきよわるまがきの蟲もとめがたき秋の別れやかなしかるらむ

堀河院の御時百首の歌奉りける時別の心をよみ侍りける　大納言公實

かへりこむ程もさだめぬわかれ路は都の手ぶりおもひでにせよ　前中納言匡房

行末をまつべき身こそ老いにけれわかれは道の遠きのみかは　源俊頼朝臣

○宇佐の使　豐前國宇佐八幡への勅使。その使に餞してゐる所で實方が詠んだ歌である。
○いきの松原　筑前國。

○とめがたき　秋の行くのを止め難い。

○都の手ぶり　都の風俗。萬葉集卷五に「天離る鄙に五年住ひつゝ都の手ぶり忘らえにけり」

○道の遠きのみかは　道の遠いことばかりではない。

忘るなよかへる山路におとたえて日數は雪のふりつもるとも

修業に出で立ち侍る時いつほどにか歸りまうで來べきと人のいひ侍りければよめる　大僧正行尊

歸り來む程をばいつといひおかじ定めなき身は人だのめなり

百首の歌奉りける時わかれの心を　左京大夫顯輔

たのむれど心かはりてかへり來ばこれぞやがての別れなるべき

上西門院兵衛

限りあらむ道こそあらめこの世にて別るべしとは思はざりしを

參議資通大貳はててのぼりけるに筑前守にて侍る時つかはしける　藤原經衡

行く君をとゞめまほしく思ふかな我も戀しきみやこなれども

かへし　太宰大貳資通

年へたる人のこゝろをおもひやれ君だに戀ふる花のみやこを

修行に出でて熊野にまうで侍りける時人につかはしける　道命法師

もろともに行くひともなき別れ路に涙ばかりぞとまらざりける

人の法會行ひける導師に越前國にまかりて上りなむとする時彼の國の顧主わかれ惜しみけるによめる　天台座主源心

○日數は雪のふりつもるとも　日數は古り積り雪が降り積るとも。

○身は　一本「世は」

○心かはりてかへり來ば　君が心變りして歸來するならば。

○限りあらむ道こそあらめ　死別には別れがあらうが。

○とゞめまほしく　止めたく。

○年へたる　太宰の五年の任限まで都を別れて經てゐた。一本「年つもる」

○とまらざりける　後に止らない意味を云ひ懸く。

○導師に　法會の時の引導者として。

永らへてあるべき身とし思はねば忘るなとだにえこそ契らね

筑紫にまかれりける男京に上るとてかどでの所より女の許にのぼるべき心地なむせぬなど言へりける返しに遣はしける　　讀人しらず

あはれとし思はむ人は別れしを心は身よりほかのものかは

離れける男の遠きほどにゆくをいかゞ思ふといひて侍りければ遣はしける　　和泉式部

別れてもおなじ都にありしかばいとこのたびの心地やはせし

成尋法師入唐し侍りける時よみ侍りける　　成尋法師母

忍べどもこのわかれ路を思ふにはからくれなゐの涙こそふれ

百首の歌よみ侍りける時わかれの心をよめる　　僧都覺雅

心をも君をも宿にとめ置きて涙とともに出づるたびかな

夏の頃こしの國にまかりける人の秋は必ずのぼりなむ待てといひけるが冬になるまでのぼりまうでこざりければ遣はしける　　西住法師

待てといひて頼めし秋も過ぎぬれば歸る山路の名ぞかひもなき

源惟盛年頃侍ふ者にて箏の琴などをしへ侍りけるを土佐國にまかりける時川尻まで送りにまうで來りけるに青海波の祕曲の琴柱たつること教へ

○だに　一本「だも」
○えこそ契らね　契り得ない。
○筑紫　九州の古稱。
○かどで　首途の所より。
○のぼるべき心地なむせぬ　君を殘して上京すべき心持がしない。
○あはれとし　自分を眞にあはれと。「し」は助詞。
○心は身よりほかのものかは　心は別れ去る身より外のものである筈がない。
○ほどに　一本「ところに」
○別れても　以前に離別した時は
○このたびの心地やはせし　此の度の旅別のやうな心地はしたらうか(しなかつた)。今度ほどに悲しくはなかつたの意味。
○からくれなゐ　唐紅に唐を云ひ懸く。
○とめ置きて　一本「とゞめ置きて」
○こしの國　越は今の北陸道地方の古稱。
○歸る山路の名ぞかひもなき　歸山(越前國)といふ名も效がない。

侍りてその曲の譜かきて給ふとて奥に書き付けて侍りける　入道前太政大臣

をしへ置くかたみをふかく忍ばなむ身は青海の波にながれぬ

人に餞し侍りける曉よみ侍りける　右衛門督頼實

わするなよ姨捨山の月見てもみやこを出づるありあけの空

百首の歌よみ侍りけるとき別れの心を　藤原定家

わかれても心へだつなたびごろも幾重かさなる山路なりとも

○忍ばなむ　忍び給へ。
○青海の波　土佐國に波路を凌いで流人となつたことに名曲の青海波を云ひ懸けてゐる。保元元年八月三日に宇治左大臣の子師長が土佐に流された時のことであらう。

○心へだつな　心を分け隔つな。

千載和歌集　巻第八

羇旅歌

題しらず　藤原範永朝臣

ありあけの月も淸水に宿りけりこよひは越えじ逢坂のせき

法性寺入道太政大臣内大臣に侍りけるとき關路月といへる心をよみ侍りける　中納言師俊

播磨路や須磨の關屋の板びさし月もれとてやまばらなるらむ

月前旅宿といへる心をよめる　藤原基俊

あたら夜を伊勢の濱荻をりしきて妹戀しらに見つる月かな

堀河院の御時百首の歌奉りける時旅の歌とてよめる　中納言國信

波の上に有明の月を見ましやは須磨の關屋に宿らざりせば

行路雪といへる心をよみ侍りける　八條前太政大臣

夜な〳〵の旅寢のとこに風さえて初雪ふれるさやの中やま

海づらに船ながらあかしてよみ侍りける　和泉式部

○せき　一本「やま」

○播磨路や　播磨へ行く路の。
○月もれ　守れ—洩れ。

○あたら夜を　惜しむべき夜を。
○伊勢の濱荻　蘆のこと。
○妹戀しらに　妹を戀しがつて。

○見ましやは　見ようかい。

○行路雪　一本「行路初雪」

○さやの中山　遠江國小笠郡。

水の上に浮寢をしてぞ思ひしるかかれば鴛は鳴くにぞありける

丹後國にまかりける時よめる　　赤染衞門

思ふことなくてや見ましよさの海天の橋立みやこなりせば

攝津國に住み侍りけるを美濃國にくだる事ありてあづさの山にてよみ侍りける　　能因法師

宮木引くあづさの杣をかきわけて難波の浦をとほざかりぬる

大隅の任はてて上らむとしけるを大貳さたすることまだしとてとゞめければよめる　　津守有基

住の江のまつらむとのみ歎きつゝ心つくしに年を經るかな

天仁元年齋宮羣行の時忘井といふ所にてよめる　　齋宮甲斐

わかれゆく都のかたの戀しきにいざむすび見むわすれ井のみづ

法性寺入道内大臣の時に歌合に旅宿鴈といへる心を　　源雅光

小夜ふかきくもゐの鴈もおとすなり我ひとりやは旅の空なる

百首の歌めしける時旅の歌とてよませ給うける　　崇德院御製

かりごろも袖の涙にやどる夜は月も旅寢のこゝちこそすれ

松が根の枕もなにかあだならむたまの牀とてつねのとこかは

○思ふことなくてや　物思ひなしにや。「や」一本「ぞ」

○よさの海天の橋立　丹後國與謝郡。

○宮木　家屋の材木。

○あづさの杣　近江國坂田郡。

○大貳さたすることまだしとて　太宰大貳より大隅守に沙汰すべきことがまだあるとて。

○住の江の　一本「住の江に」

○まつ　待つ―松。

○心つくし　心盡し―筑紫。

○天仁　鳥羽天皇の年號。

○齋宮羣行　伊勢神宮の齋宮が伊勢に下ること。

○わすれ井のみづ　伊勢國。都の戀しさを忘れようの意味を云ひ懸く。

○くもゐの　一本「くもゐに」

○かりごろも　一本「からごろも」

○あだならむ　徒なる假寢であらうか。

○たまの牀とて云々　九重の玉の牀だとて常住の牀かい。

花咲きし野邊のけしきも霜がれぬこれにてぞ知る旅の日數を　大炊御門右大臣

さらしなや姨捨山に月みむと都に誰かわれを知るらむ　藤原季通朝臣

道すがら心もそらに眺めやる都の山のくもがくれぬる　待賢門院堀河

さゝの葉をゆふ露ながら折りしけば玉ちる旅の草まくらかな　同院安藝

皇太后宮大夫俊成

浦づたふいその苫屋のかぢ枕きゝもならはぬ波の音かな

世をそむきて後修行し侍りけるに海路にて月を見てよめる　圓位法師

わたの原はるかに波をへだて來て都にいでし月を見るかな

高野にまうで侍りける道にてよみ侍りける　高野法親王覺法

さだめなきうき世の中としりぬればいづこも旅の心地こそすれ

下野國にまかりける時尾張國なるみといふ所にてよみ侍りける　前中納言師仲

おぼつかないかになるみの果てならむ行方もしらぬ旅のかなしさ

○玉ちる　一本「玉しく」。玉は露の玉。

○苫屋　苫を葺いた屋。

○わたの原　海原。
○都にいでし月　昔都に出た。
○高野　紀伊國伊都郡。金剛峯寺のある所。

○なるみ　鳴海—成る身。

○かくまでは　かほどまでは。
○しぐるとも　時雨が降つても。
○しるよしありて　知行するわけがあつて。

○ともやなからむ　友がないだらう。
○影はなれなば　我が影が離れたならば。
○あさたつ　麻裁つ―朝立つ。
○しのぶもぢずり　奥州信夫郡から出る亂れ模様の帛。
○わきぞかねまし　風の音と時雨の音とを辨別しかねるだらう。

あづまの方に罷りける時ゆくさき遙かにおぼえ侍りければよめる　左京大夫脩範

日をへつゝ行くにはるけき道なれどすゑを都と思はましかば

海邊時雨といへる心をよみ侍りける　讀人しらず

かくまではあはれならじをしぐるとも磯の松が根まくらならずば

尾張國にしるよしありてしばし侍りける頃人の許より都のことは忘れぬるといひて侍りければ遣はしける　道因法師

月見ればまづ都こそ戀しけれ待つらむとおもふ人はなけれど

夜逢坂の關を過ぐるとてよめる　祝部成仲

逢坂の關には人もなかりけりいはまの水のもるにまかせて

中院の右大臣の家にて獨行關路といへる心をよみ侍りける　大納言定房

こえて行くともやなからむ逢坂の關のしみづの影はなれなば

客衣露重といへる心をよみ侍りける　前大僧正覺忠

旅衣あさたつ小野の露しげみしぼりもあへずしのぶもぢずり

住吉の社の歌合とて人々よみ侍りけるとき旅宿時雨といへる心をよみ侍りける　右近大將實房

風のおとにわきぞかねまし松が根の枕にもらぬ時雨なりせば

もしほ草しきつの浦の寐覺には時雨にのみや袖はぬれける　俊惠法師

玉藻ふく磯屋がしたにもる時雨たびねの袖もしほたれよとや　源仲綱

草枕おなじたびねの袖にまた夜半の時雨もやどはかりけり　太皇太后宮小侍從

家に百首の歌よませ侍りけるとき旅の歌とてよみ侍りける

はる〴〵とつもりの沖をこぎゆけば岸の松風とほざかるなり　攝政前右大臣

わたの原しほぢ遙かに見わたせば雲と波とは一つなりけり　刑部卿頼輔

あはれなる野島が崎のいほりかな露おくそでに波もかけけり　皇太后宮大夫俊成

旅宿の心をよみ侍りける

よしさらば磯のとまやに旅寢せむ波かけずとて濡れぬ袖かは　二品親王

旅の歌とてよみ侍りける

旅の世にまた旅寢して草まくら夢のうちにもゆめを見るかな　法印慈圓

○しきつの浦　攝津國。

○しほたれよ　潮垂れよ—萎れよ

○やどはかりけり　時雨が我が旅寢の袖に宿をば借りた。

○つもりの沖　攝津國住吉郡。

○しほぢ　潮路。海路。

○野島が崎　淡路國津名郡。

○波かけずとて濡れぬ袖かは　波がかけなくてもどうせ涙で濡れる袖だ。

○旅の世に　夢のやうなはかない旅の世の中に。

○いつもかく　いつでも斯やうに
○物やかなしき　物悲しいか。
○こゑこそ袖の波はかけけれ　千鳥の聲のもの悲しさに袖の濡れることを云ふ。

○つひにとまらむ蓬生　命の終に止らう蓬の原。死後の草陰。

○なごりまでこそ袖はぬれけれ　時雨の名殘にまで涙で袖は濡れた。
○もる　洩る―守る。
○不破の關屋　美濃國不破郡。
○夢をもえこそとほさざりけれ　霰が洩るので夢も見通し得なかつた。
○心のほかなること　意外な事。治承元年六月俊寛などと共に鬼界島に流されたこと。

草まくらかりねの夢にいくたびか馴れし都にゆきかへるらむ　右兵衛督隆房

關路曉月といへる心をよめる　法眼兼覺

いつもかくありあけの月のあけがたは物やかなしき須磨の關守

百首の歌よみ侍りけるとき旅の歌とてよめる　藤原家隆

旅寢する須磨の浦路のさよ千鳥こゑこそ袖の波はかけけれ

修行にまかりありきけるに野中に宿して侍りける夜旅の枕の露けく侍りけるによめる　圓玄法師

かくしつゝつひにとまらむ蓬生（よもぎふ）の思ひしらるゝ草まくらかな

旅の歌とてよめる　權律師覺辨

旅寢する木のした露の袖にまたしぐれ降るなり小夜の中山

攝政右大臣の時家の歌合に旅の歌とてよめる　藤原資忠

旅寢するいほりをすぐる村時雨なごりまでこそ袖はぬれけれ

旅の歌とてよめる　大中臣親宗

霰もる不破の關屋にたびねして夢をもえこそとほさざりけれ

心のほかなることありて知らぬ國に侍りける時よめる　平康頼

○さつまがた沖の小島　薩摩國の沖の鬼界島。この二首の歌は平家物語にも見える。

○雪ふりにける　雪降り—行き古り。「ける」一本「けり」

○やどかる　宿借る。

かくばかり憂き身のほどもわすられてなほ戀しきは都なりけり

さつまがた沖の小島に我はありと親にはつげよ八重の潮風

羇中歳暮といへる心をよめる　　僧都印性

あづま路も年も末にやなりぬらむ雪ふりにける白河の關

圓位法師がよませける百首の歌の中に旅の歌とてよめる　　寂蓮法師

いはねふみ峯の椎柴をりしきて雲にやどかる夕暮のそら

千載和歌集　卷第九

哀傷歌

花のさかりに藤原爲頼などともにて石藏にまかれりけるを中將宣方朝臣などか斯くと侍らざりけむ後の度には必ず侍らむと聞えけるを其の年中將も爲頼も身まかりにける又の年彼の花を見て大納言公任につかはしける　　中務卿具平のみこ

春くれば散りにし花も咲きにけりあはれ別れのかからましかば

かへし　　前大納言公任

行きかへる春やあはれと思ふらむちぎりし人の又もあはねば

主なき家の櫻を見てよめる　　藤原範永朝臣

うゑおきし人のかたみと見ぬだにも宿の櫻をたれか惜しまぬ

彈正尹爲尊のみこにおくれ侍りてよめる　　和泉式部

をしきかな形見にきたる藤衣たゞこのごろに朽ちはてぬべし

煩ひ侍りけるがいとゞよわくなりにけるに如何なるかたみにかありけむ

○石藏。
○などか斯くと侍らざりけむ　どうしてかやうだと私にも告げて下さらないのですか。
○身まかりにける又の年　死去した翌年。
○かからましかば　斯やうであるならばなア。
○ちぎりし人　宣方のことか。一本「ちりにし人」
○見ぬだにも　見ないででも。
○藤衣　喪服。

山吹なるきぬをぬぎて女につかはしける　藤原道信朝臣

口なしの園にやわが身入りにけむ思ふことをもいはでやみぬる

又云ふ身まかりてのち女の夢にみえてかく詠み侍りけるとも

中將道信朝臣身まかりにけるを送りをさめての朝によめる　藤原賴孝

思ひかねきのふの空を眺むればそれかと見ゆる雲だにもなし

世のはかなきことをよませ給うける　花山院御製

うつゝとも夢ともえこそわき果てねいづれの時をいづれとかせむ

一條院かくれ給うての又の年彼の院の花を見てよめる　源道濟

櫻花見るにも悲しなか〳〵にことしの春は咲かずぞあらまし

親しかりける人身まかりけるによめる　道命法師

おくれじと思へど死なぬ我が身かなひとりやしらぬ道をゆくらむ

花山院かくれさせ給うての頃よみ侍りける　藤原長能

おいらくの命のあまり長くして君にふたゝびわかれぬるかな

後一條院かくれさせ給うての年郭公のなきけるによませ給うける　上東門院

一聲も君に告げなむほとゝぎすこのさみだれは闇にまよふと

枇杷殿の皇太后宮わづらひ給ひけるとき所をかへて試みむとて外に渡り

○山吹なるきぬ　表黃、裏紅の衣。
○口なし　山梔（植物の名）―くちなし色（黃色）―口無し（無言）
○眺むれば　一本「眺むれど」
○それかと見ゆる雲　昨日立ち上つた火葬の煙の名殘かと見える雲
○えこそわき果てね　辨別し果て得ない。
○なか〳〵に　却つて。寧ろ。
○おくれじと　死に後れまいと。
○おいらく　老いること。
○ふたゝび　花山院は急に出家讓位され、又急に崩じたので斯う云ふ。
○一聲も　一聲でも。
○告げなむ　告げ申せ。
○まよふ　一本「まどふ」ほとゝぎすは冥途へ行き交ふといふ信仰があつたので斯う云ふ。

給へりけるをかくれ給ひてのち陽明門院一品親王と申しける枇杷殿にか
へり給へりけるにふかき御帳のうちに菖蒲くすだまなどの枯れたるが殘
りたるを見てよみ侍りける　辨乳母

菖蒲草なみだの玉にぬきかへてをりならぬねをなほぞ掛けつる

かへし　江侍從

玉ぬきし菖蒲の絲はありながらよどのはあれむ物とやはみし

大納言長家大納言齊信の女にすみ侍りけるを女身まかりける頃法住寺に
こもりゐて侍りけるに遣はしける　大貳三位

かなしさをかつは思ひも慰めよたれもつひにはとまるべきかは

かへし　大納言長家

誰も皆とまるべきにはあらねども後るゝほどはなほぞ悲しき

一條院かくれさせ給へりける年の秋月を見てよみ侍りける　承香殿女御

おほかたにさやけからぬか月影はなみだ曇らぬ人に見せばや

後一條院四月にかくれさせ給ひける年の九月に中宮又かくれ給ひにける
四十九日末つかた宮々上東門院に渡り給ひ侍りける日人々別れをしみけ
るによみ侍りける　小辨命婦

○くすだま　藥草を玉にして絲で飾りお呪ひに掛けたもの。
○殘りたる　一本「侍りける」
○をりならぬね　折でない根。根に泣を云ひ懸く。
○よどの　夜殿―淀野。
○あれむ　一本「あれぬ」
○とまるべきかは　この世に止る筈のものかい。
○後るゝ　人に死に後れる。
○おほかたに　一般に。特に私一人でなく。
○中宮　藤原道長の女威子。

悲しさにそへてもものの悲しきは別れのうちの別れなりけり

同じ年の冬御禊大嘗會など過ぎて十二月つごもり大納言長家二條院の一品内親王と申しける時まゐりて侍りけるによみ侍りける　　前中宮宣旨

うきもののさすがに惜しき今年かな遠ざかりなむ君が別れに

かへし　　大納言長家

悲しさはいとゞぞまさる別れにし今年も今日をかぎりと思へば

遠き所に行きにける人のなくなりにけるを親はらからなど都に歸り來て悲しき事いひたるにつかはしける　　紫式部

いづかたの雲路としらばたづねましつら離れけむ鴈のゆく末

恆德公かくれ侍りて後かの常に見侍りける鏡の物の中に侍りけるを見てよみける　　藤原道信朝臣

年をへて君が見なれしまます鏡むかしの影はとまらざりけり

上東門院に參りて侍りけるに一條院の御事などおぼし出でたる御氣色なりける朝奏りける　　赤染衞門

つねよりもまた濡れそひし袂かなむかしをかけて落ちし涙に

御かへし　　上東門院

○別れのうち　一本「別れののち」
○同じ年　長元九年。
○うきものの　憂い年ながらも。
○いとゞぞまさる　一層増る。
○はらから　同胞。
○つら　列。
○離れけむ　一本「離れたる」
○ゆく末　一本「行方を」
○むかしをかけて　昔の事（一條院の事）をもかねて思ひ出して。

現とも思ひわかれで過ぐるまに見し世の夢をなにかたりけむ

あがたに侍りけるほどに京なる女身まかりぬと聞きていそぎのぼり侍りける道にてよめる　源實基朝臣

都へと思ふにつけてかなしきは誰かは今はわれを待つらむ

藏人に侍りけるとき親のおもひになりにける秋うへのをのこども嵯峨野に花見にゆくと聞きてつかはしける　平雅康

もろともに春の花をば見しものを人におくるゝ秋ぞかなしき

右衞門督基忠かくれ侍りて後かの家につかはしける　前中納言匡房

花と見し人はほどなくちりにけり我が身も風を待つとしらなむ

後三條院かくれさせ給うて諒闇のころよみ侍りける　藤原顯綱朝臣

かわく世もなき墨染の袂かな朽ちなば何をかたみにもせむ

少將に侍りけるとき大納言忠家かくれ侍りける後五月五日中納言國信中將に侍りけるとき消息して侍りけるついでに遣はしける　權中納言俊忠

墨染の袂にかゝるねを見ればあやめも知らぬなみだなりけり

かへし　中納言國信

あやめ草うきねを見ても涙のみかゝらむ袖をおもひこそやれ

○かたりけむ　一本「語るらむ」
○あがた　國司（地方官）の任國。
○親　一本「母」
○おもひ　喪。
○しらなむ　知りなさい。
○諒闇　天子が喪に籠られる事。
○墨染の袂　喪服の袂。
○かゝるね　根—泣。
○あやめ　菖蒲—文目。文目も知らぬ涙はわけも知らぬ涙。
○うきね　浮き根—憂き泣。

女におくれて歎き侍りけるころ肥後がもとよりとひ侍りけるに遣はしける

藤原基俊

思ひやれむなしき牀をうちはらひ昔をしのぶそでのしづくを

贈皇后苡子かくれ侍りにける後硯の箱など取りしたゝめけるに物に書きつけておかれ侍りける歌

胸にみつおもひをだにもはるかさで煙とならむことぞかなしき

あひ知れりける女身まかりにけるとき月を見てよめる

藤原有信朝臣

もろともに有明の月を見しものをいかなる闇に君まよふらむ

人のわざしける導師にて諷誦文よみけるに歌の侍りければよみ侍りける

慶範法師

うちならす鐘の音にや長き夜も明けぬなりとは思ひしるらむ

待賢門院かくれさせ給うて後いみはててかた〳〵にかへらせ給ひける日

崇徳院御製

かぎりありて人はかた〳〵別るとも涙をだにもとゞめてしがな

御かへし

上西門院兵衛

ちり〳〵に別るゝ今日の悲しさに涙しもこそとまらざりけれ

○はるかさで　晴らさずして。
○煙　火葬の煙。
○月を　一本「月も」
○わざ　葬送の事。
○長き夜　長夜の闇。
○かた〳〵に　方々に。
○止めてしがな　止めたいものだ

語らひけるわらはの思はずにうとくなりにける後なくなりにけるを人のとぶらひて侍りければよめる　　静嚴法師

かなしさをこれよりけにや思はましかねて習はぬ別れなりせば

服に侍りける時ある上人の來れりけるが墨染の袈裟を忘れてとりに遣はすとて　　天台座主勝範

墨染の色はいづれもかはらぬを濡れぬや君がころもなるらむ

わづらはせ給うけるとき鳥羽殿にて郭公の鳴きけるを聞かせ給うてよませ給うける　　鳥羽院御製

つねよりもむつましきかな郭公しでの山路のともと思へば

美福門院の御服にて侍りけるを宣旨にてぬぎ侍るとてよめる　　久我内大臣

こゝろざし深くそめてし藤衣きつる日かずの淺くもあるかな

中納言伊實六條の家にて身まかりにけるを後のわざなどはてて九條の堂に歸り侍りける時柱にかきつけ侍りける　　大宮前太政大臣

たぐひなく憂きこと見えし宿なれどそも別るゝは悲しかりけり

大納言公實身まかりて後かの遠忌の日よみ侍りける　　花園左大臣の室

かぞふれば昔がたりになりにけり別れは今の心地すれども

○けにや　殊にや。
○かねて習はぬ別れなりせば　豫め習はない別れであつたならば。つまり死別前に別れてゐたので斯う云ふ。
○濡れぬや　袖で濡れない衣だ。「や」は疑問。
○しでの山路　死んでから行く冥途の山路。
○淺く　上の「深く」に對する語。
○後のわざ　死後のいとなみ。
○そも別るゝは　その宿でも別れるのは。
○今の　たつた今の。

大炊御門の右大臣かくれ侍りて後七月七日母の三位の許に消息のついでに遣はし侍りける　權大納言實家

棚機(たなばた)にことしはかさぬ椎柴のそでしもことに露けかりけり

かへし　三位

椎柴のつゆけき袖は棚機もかさぬにつけてあはれとや見む

待賢門院かくれさせ給ひて後法金剛院にて郭公の鳴き侍りけるに　仁和寺入道法親王

故郷にけふ來ざりせばほとゝぎす誰と昔をこひてなかまし

二條院かくれさせ給ひて御わざの夜よみ侍りける　法印澄憲

常に見し君がみゆきを今日とへばかへらぬ旅ときくぞかなしき

大炊御門の右大臣身まかりて後かのしるしおきて侍りける私記どもの侍りけるを見てよみ侍りける　右大臣

敎へおくその言の葉を見るたびに又とふ方のなきぞ悲しき

母の二位身まかりて後よみ侍りける　民部卿成範

鳥部山おもひやるこそ悲しけれひとりや苔のしたに朽ちなむ

母の服に侍りける程に又紀伊三位身まかりにける時よみ侍りける　藤原貞憲朝臣

○法金剛院　もと待賢門院の住所

○私記　一本「日記」

○こふ　問ふ。

○鳥部山　山城國洛東の火葬場のあつた所。

かぎりありて二重はきねど藤衣なみだばかりを重ねつるかな

忍びてもの申しける女身まかりにける時よめる　　左京大夫秀能

三年まで馴れしは夢の心地して今日ぞうつゝの別れなりける

後入道法親王かくれ侍りて後いりがたまで月を見てよみ侍りける　　僧都印性

入りぬるか飽かぬわかれの悲しさを思ひしれとや山の端の月

親の墓にまかりて侍りけるに知らぬつかどもの多く見え侍りければよめる　　左京大夫脩範

野邊みれば昔の跡や誰ならむその世もしらぬ苔のしたかな

奈良に侍從と申しけるわらはのいづみ川に身をなげて侍りければよめる　　僧都範玄

何事のふかきおもひにいづみ川そこの玉藻としづみはてけむ

花園の左大臣の家に童にて侍りけるを笙を敎へ侍るとて給へりける笛を年經て後かのために佛供養し侍りけるとき笛にそへて侍りける　　法印成清

おもひきや今日うちならす鐘の音に傳へし笛の音を添へむとは

わづらふこと侍りけるとき母にさきだたむことを歎き思ひ侍りけるをそのたびおこたりて後また母身まかりにける時よめる　　靜緣法師

○二重はきねど　藤衣（喪服）は二重には著ないが。一本「きねは」

○うつゝ　現實。

○入りぬるか　月は入つたのか。

○野邊みれはの歌　白氏文集に、「古墓何世人、不レ知姓與レ名、化生道傍土、年々春草生。」と見える。
○いづみ川　山城國。

○かのために　左大臣の爲に。

さきだたむことをうしとぞ思ひしに後れてもまた悲しかりけり

周防の國に父のまかりくだりけるがかの國にて身まかりにけると聞きて急ぎ下りける時よめる　藤原親盛

待つらむと思はばいかにいそがまし跡を見るだにまよふ心を

仁和寺法親王蓮花門院にてかくれ侍りける後月忌の日かの墓所にまかりけるに山に雲かゝりて心ぼそく侍りければよめる　覺蓮法師

山の端にたなびく雲や行方なくなりし煙のかたみなるらむ

父の中納言顯長が墓所の堂深草の里に侍りけるにまかりてよめる　法眼長眞

としをへて昔をしのぶ心のみうきにつけてもふかくさの里

母の身まかりにける時よめる　顯昭法師

たらちめやとまりて我を惜しままし かはるにかふる命なりせば

同行の上人西住秋の頃わづらふ事ありてかぎりに見え侍りければよめる　圓位法師

もろともに眺めながめて秋の月ひとりにならむことぞ悲しき

西住法師身まかりける時をはり正念なりけるよし聞きて圓位法師の許につかはしける　寂然法師

○跡を見るだに　父の亡き跡を行き見るにでも。

○煙　火葬の煙。

○ふかくさの里　深草の里―深くなり行く。

○たらちめ　母親。

○かはるにかふる命なりせば　私が母の命に代つて死んだならば。「かふる」一本「かはる」

○かぎり　今を限り。

○圓位法師　西行法師の以前の法名。

○をはり正念　臨終まで心亂さず正しいこそ。

亂れずとをはり聞くこそ嬉しけれさても別れはなぐさまねども

圓位法師

かへし

この世にてまたあふまじき悲しさにすゝめし人ぞ心みだれし

○すゝめし人　西住法師に臨終正念をすゝめた自分が却つて。

千載和歌集　卷第十

賀歌

みこにおはしましける時鳥羽殿に渡らせ給へりける頃八條院内親王と申しける時かの御かたにて竹遐年友といへる心を講ぜられけるによませ給うける　院御製

幾千代とかぎらざりける呉竹や君がよはひのたぐひなるらむ

後三條内大臣

うゑて見るまがきの竹の節ごとにこもれる千よは君ぞかぞへむ

皇太后宮大夫俊成

わが友と君がみかきの呉竹は千よに幾よのかげをそふらむ

祝の心をよみ侍りける　大宮前太政大臣

君が代は天のかご山出づる日のてらむ限りは盡きじとぞおもふ

堀河院の御時立春の朝に今日の心つからまつるべきよし侍りければ奏し侍りける　源俊頼朝臣

○みこ　親王。

○千よ　千代―千よ(竹のよ)よとは節と節との間の部分。

○わが友　白樂天が竹を愛して我が友とした故事によるか。
○みかき　御垣―見る。

○天のかご山　大和國磯城郡。一本「天のかぐ山」

君がためみたらし川を若水にむすぶや千代のはじめなるらむ

同じ御時后の宮にて花契遐年といへる心を上のをのこどもつかうまつりけるによませ給うける　堀河院御製

千年までをりて見るべき櫻花こずゑ遙かに咲きそめにけり

鳥羽院位おりさせ給うての頃庭花年久といへる心をかれこれつかうまつりけるによみ侍りける　大納言忠敎

ほり植ゑし若木の梅にさく花は年もかぎらぬにほひなりけり

堀河院御時鳥羽殿に行幸の日池上花といへる心をよみ侍りける　權中納言俊忠

千年すむ池のみぎはの八重櫻かげさへ底にかさねてぞ見る

白河院鳥羽殿におはしましける時松契遐年といふ心をよめる　源俊頼朝臣

神代よりひさしかれとやうごきなき岩根に松の種をまきけむ

京極の前のおほきおほいまうち君の高陽院の家の歌合に祝の心をよみ侍りける

落ちたぎつやそ宇治川のはやき瀨に岩こす波は千代のかずかも

二條太皇太后宮賀茂のいつきと申しけるとき本院にて松映水といへる心をよみ侍りける　京極前太政大臣

○みたらし川　賀茂神社附近の川
○若水に　若がへる水として。

○櫻花　一本「梅の花」

○やそ宇治川　八十氏―宇治川（山城國宇治郡）。

千早振いつきの宮のありす川松とともにぞ影はすむべき

堀河院の御時百首の歌奉りける時子の日の心をよめる　　二條太皇太后宮肥後

行末をまつぞ久しき君がへむ千代のはじめの子の日と思へば

祝の心をよめる　　藤原基俊

奥山のやつをのつばき君が代にいくたび陰をかへむとすらむ

保延二年法金剛院に行幸ありて菊契多秋といへる心をよみ侍りける　　法性寺入道前太政大臣

君が代をなが月にしも白菊の咲くや千歳のしるしなるらむ

花園左大臣

八重菊のにほひにしるし君が代はちとせの秋を重ぬべしとは

八條前太政大臣

千早ぶる神代のことも人ならばとはましものを白菊のはな

百首の歌めしけるとき祝の心をよませ給ける　　崇徳院御製

吹く風も木々の枝をばならさねど山は久しきこゑぞきこゆる

二條院の御時大内におはしまして初めて花有喜色といへる心をよませ給ひけるによみ侍りける　　左大臣

○千早振　神に關したものに冠らせる枕詞。
○いつきの宮　賀茂大神の齋院。
○ありす川　齋院の居られる本院の傍の川。有栖川。
○まつ　待つ—松。

○やつをのつばき　莊子に「古有二大椿一以二八千歳一爲レ春、八千歳爲レ秋。」とある。

○なが　永月—九月。

○しるし　著しい。顯著だ。

○人ならば　白菊の花が人であるならば。

○山は久しきこゑぞ聞ゆる　漢の武帝が嵩高に上つたら山が萬歳を三唱したといふ故事による。

○左大臣　一本「右大臣」

○初櫻　一本「花櫻」
○つる　一本「たづ」
○よみ　一本「よませ」
○はこやの山　仙人の住んだといふ山。これから仙洞（上皇御所）のことを云ふ。
○浦島が子　一本「浦島の子」。雄略天皇の二十二年に蓬萊山に行つて三百餘年經て歸國したといふ。
○尾上　峯の上。
○友とこそ見め　友と見む。
○松こそ君がかげをたのまむ　松の方が却つて君の御蔭を賴んで長壽であらう。
○よろづ代まで　萬歲樂なので。

千代ふべきはじめの春と知りがほにけしきことなる初櫻かな

うへのをのこども百首の歌奉りけるとき祝の心をよませ給ひける　二條院御製

白雲にはねうちかけて飛ぶつるの遙かに千代のおもほゆるかな

百首の歌よみ給ひける時の祝の歌　式子內親王

動きなきなほ萬代ぞたのむべきはこやの山の峯のまつかぜ

攝政右大臣に侍りけるとき百首の歌よませ給ひけるに祝の歌五首が中に
よみ侍りける　皇太后宮大夫俊成

百千たび浦島が子はかへるともはこやの山はときはなるべし

二條院の御時大炊御門高倉の內裏に侍りけるに同じ西のまちの家にては
じめて詩歌講じ侍りけるに鶴契遐年といへる心をよみ侍りける　大炊御門右大臣

幾千代とかぎらぬ田鶴の聲すなり雲居のちかき宿のしるしに

閑院の家にてはじめて對松爭齡といへる心をよみ侍りける　入道前關白太政大臣

千年ふる尾上の小松うつしうゑてよろづ代までの友とこそ見め

源通能朝臣

萬代もすむべきやどに植ゑつれば松こそ君がかげをたのまめ

高倉院の御時內裏にまゐり侍りけるにうへの御笛に萬歲樂ふかせ給ひけ

るをはじめて承りて又の日女房の中に申し侍りける　右大臣

笛の音のよろづ代までときこえしを山もこたふるこゝちせしかな

入道右大臣はじめて中院の家に住み侍りけるとき祝の心をよめる　修理大夫顯季

羣れてゐる田鶴のけしきにしるきかな千年すむべき宿の池水

橘俊綱朝臣の伏見の家にかつらをほりうゑさせ給ひけるによめる　賀茂成助

みづがきの桂をうつす宿なれば月見むことぞ久しかるべき

俊綱朝臣さぬきの守にまかりけるとき祝の心をよめる　藤原孝善

君が代にくらべていはば松山の松の葉かずはすくなかりけり

後一條院の御時長和五年大嘗會主基(すき)方の御屏風に備中國長田(ながた)山の麓に琴ひき遊びたる所をよめる　善滋爲政朝臣

千代とのみおなじことをぞしらぶなる長田の山の峯の松風

白河院の御時承保元年大嘗會主基方の稻舂歌神田の郷をよめる　前中納言匡房

千はやぶる神田の里のいねなれば月日とともに久しかるべし

院の御時の久壽二年大嘗會悠紀(ゆき)方の風俗歌近江國わか松の森をよめる　宮内卿永範

すべらぎのすゑ榮ゆべきしるしには木だかくぞなる若松の森

○みづがきの桂　賀茂の神木。それに月中に桂があるといふ信仰を云ひ含めてゐる。

○君が代に　君の齡に。

○松山　讃岐國溫泉郡。

○おなじこと　同じ事―同じ琴。

○神田の郷　丹波國多紀郡。

○院の御時　一本「後白河院の御時」

○風俗歌　地方の民謠。

平治元年大嘗會悠紀方の風俗歌近江國千坂の浦をよめる　　参議俊憲

君が代のかずにはしかじかぎりなき千坂の浦の眞砂なりとも

同じ御時大嘗會主基方稲春歌丹波國雲田村をよめる　　刑部卿範兼

天地（あめつち）のきはめも知らぬ御代なれば雲田の村の稲をこそつめ

高倉院御時仁安三年大嘗會悠紀方の御屏風の歌　　宮内卿永範

霜ふれどさかえこそませ君が代にあふさか山のせきの杉むら

今上の御時元暦元年大嘗會悠紀方の風俗の歌三神山をよめる　　藤原季經朝臣

ときはなる御神の山の杉むらや八百萬代のしるしなるらむ

○平治　二條天皇の年號。
○しかじ　とても及ぶまい。
○天地のきはめも知らぬ　長久な天地と同様に窮まりも知らぬ。
○さかえこそませ　隆え増す。
○今上　後鳥羽天皇。
○三神山　近江國の三上山か。

千載和歌集　卷第十一

戀歌一

堀河院の御時百首の歌奉りけるとき初戀の心をよめる　　源俊頼朝臣

難波江の藻にうづもるゝ玉かしはあらはれてだに人をこひばや

二條太皇太后宮肥後

まだしらぬ人をはじめて戀ふるかなおもふ心よ道しるべせよ

前齋宮河内

わりなしや思ふ心の色ならばこれぞそれとも見せましものを

權中納言俊忠中將に侍りけるとき歌合し侍りけるに初戀の心をよめる

後二條關白家筑前

おもふよりいつしか濡るゝ袂かな涙ぞ戀のしるべなりける

女につかはしける　　藤原長能

藻くづ火のいそまを分くる漁船(いさりぶね)ほのかなりしに思ひそめてき

題しらず　　輔仁親王

○玉かしは　玉堅磐。堅い岩。次のあらはれを云ひ起す序。

○わりなしやの歌　仕方ないな。この君を思ふ心が色であるならはこれこの通りとでもいつて見せようものを。

○藻くづ火のいそまを分くる漁船　藻屑を焚く漁船が磯間を分け行くやうに。「ほのか」と云ひ起す序

○色にいでじ　色に出すまい。
○人は　一本「人を」
○たれともしら雲の　誰とも知らずを云ひ懸く。
○たへぬ　堪へぬ。一本「絶えぬ」
○せまほしきかな　したいな。
○おほかたの　普通一樣の。
○世のつねのとや　私の戀も亦世の一般の戀だとや。
○いはでの山　磐手山(陸奥國)【云はで。
○高砂の…吹く風の　音を云ひ起す序。
○荒磯の歌　荒磯の岩にうちかけて碎ける波を、自分の戀心に思ひよそへてゐる。
○せきわびて　一本「せきかねて」
○知らなむ　知つて下さい。

いかにせむ思ひを人にそめながら色にいでじと思ふ心を

徳大寺左大臣

ひとめ見し人はたれともしら雲のうはの空なる戀もするかな

中院右大臣

つゝめども涙に袖のあらはれて戀すと人にしられぬるかな

大納言成通

つゝめどもたへぬ思ひになりぬれば問はず語りのせまほしきかな

大炊御門右大臣

百首の歌奉りけるとき戀の歌とてよめる

おほかたの戀する人にききなれて世のつねのとや君思ふらむ

左京大夫顯輔

思へどもいはでの山に年を經て朽ちやはてなむ谷のうもれ木

高砂の尾上の松にふく風のおとにのみやは聞きわたるべき

待賢門院堀河

荒磯の岩にくだくる波なれやつれなき人にかくるこゝろは

上西門院兵衛

岩間ゆくやました水をせきわびてもらす心のほどを知らなむ

權中納言俊忠の家の歌合に戀の歌とてよめる　藤原基俊

みこもりに言はでふるやの忍草しのぶとだにも知らせてしがな

人に遣はしける　藤原長能

思ふことといは間にまきし松の種千代とちぎらむ今はねざせよ

うるまの島の人こゝにはなたれ來てこゝの人の物いふを聞きも知らでなむあるといふ比かへり事せぬ女に遣はしける　前大納言公任

おぼつかなうるまの島の人なれやわがことの葉をしらず顔なる

雨のふる日しのびたる人につかはしける　堀河右大臣

人しれずものおもふころの袖みれば雨も涙もわかれざりけり

權中納言としたゞかつらの家にてなき名たつ戀といへる心をよみ侍りける　源俊頼朝臣

たちしより晴れずもものを思ふかななき名や野邊の霞なるらむ

戀の歌とてよめる　源明賢朝臣

歎きあまり知らせそめつる言の葉も思ふばかりは言はれざりけり

百首の歌よみ侍りけるとき戀の歌とてよみ侍りける　右大臣

人しれぬ木の葉の下のうもれみづ思ふこゝろをかき流さばや

○みこもり　水籠り。
○言はでふるや　言はで經る―古屋。
○忍草　萱草。忍ぶの序。
○知らせてしがな　知らせたいな
○思ふこといは間　思ふこと云はむ―岩間。
○ねざせよ　寢させよ―根ざせよ
○うるまの島　未詳。言葉の通じない序に使はれてゐるのだから、内地の島ではあるまい。
○たちし　無き名が―霞が。
○晴れず　無き名が―霞が。

題しらず　　久我内大臣

こひしとも言はぬにぬるゝ袂かなこゝろをしるは涙なりけり

従三位頼政

思へどもいはでしのぶのすりごろも心のうちに亂れぬるかな

寂然法師

陸奥のしのぶもぢずり忍びつゝいろには出でじ亂れもぞする

藤原清輔朝臣

なには女のすくもたく火の下焦れ上はつれなきわが身なりけり

歌合し侍りけるとき忍戀のこゝろをよめる　　刑部卿頼輔

戀ひ死なば世の果(はか)なきにいひなしてなき後(あと)までも人にしられじ

顯昭法師

ひとしれぬ涙の川のみなかみやいはでの山の谷のしたみづ

題しらず　　讀人しらず

いかにせむ御垣が原につむ芹のねにのみ泣けどしる人のなき

戀の百首の歌よみ侍りけるとき寄霞戀といへる心をよめる　　賀茂重保

つれもなき人の心やあふ坂のせき路へだつる霞なるらむ

○こひしとも云はぬに　戀しいとも心に出して云はないのに。

○いはでしのぶのすりごろも　言はで忍ぶ—岩手信夫。信夫地方から出す摺衣は亂れ模樣なので。亂るの序に用ゐられた。伊勢物語に「陸奥の信夫もぢ摺たれ故に亂れそめにし我ならなくに」

○すくも　葦の根。又藻屑の事ともいふ。
○下焦れ　心の下に戀ひ焦れることを云ひ懸く。

○いひなして　一本「いひおきて」

○いはでの山　言はで—磐手山、(奥州)

○御垣が原　大和國。
○芹のねに　根—泣。
○泣けど　一本「泣くと」

○あふ坂　逢坂—逢ふ。

戀の歌とてよめる　　藤原清輔朝臣

涙川うきねのとりとなりぬれど人にはえこそみなれざりけれ

二條院の御時うへのをのこども百首の歌たてまつりける時よめる　　源のみちよしの朝臣

我が戀は尾花吹きこす秋風の音にはたてじ身にはしむとも

横川(よかは)のふもとなる山寺にこもりゐける時いとよろしきわらはの侍りければよみて遣はしける　　仁昭法師

世をいとふはしと思ひし通ひ路にあやなく人を戀ひわたるかな

題しらず　　花園左大臣

たよりあらば蜑の釣船ことづてむ人をみるめに求めわびぬと

大宮前太政大臣

またもなくたゞ一すぢに君を思ふ戀路に迷ふ我やなになる

前中納言伊房

君こふる身はおほ空にあらねども月日をおほく過しつるかな

きさいの宮にはじめてまゐりける女房ことひくを聞かせ給うてよみてたまひける　　二條院御製

○うきね　浮き寝—憂き泣。
○とりと　一本「とこに」
○ぬれど　一本「ぬれば」
○百首の　一本「これかれ」

○尾花吹きこす秋風の　薄を吹き越える秋風の音はしないで身に染むやうに。

○はし　端—橋。
○あやなく　わけもなく。

○たよりあらばの歌　伊勢物語に「みるめ刈る方やいづこぞ方さしてわれに敎へよ蜑の釣船」
○みるめ　海松—見る目。

琴の音にかよひそめぬる心かな松吹く風にあらぬ身なれど

百首の歌よみ給ひけるとき戀の歌　式子内親王

はかなしや枕さだめぬうたゝ寐にほのかにまよふゆめの通ひ路

百首歌よみ侍りけるとき戀の心をよみはべりける　右大臣

さきにたつ涙とならば人しれず戀路にまどふみちしるべせよ

題しらず　刑部卿頼輔

ながらへばつらき心もかはるやとさだめなき世を頼むばかりぞ

源有房

もらさばや忍びはつべき涙かは袖のしがらみかくとばかりは

源師光

戀しさを憂き身なりとてつゝみしはいつまでありし心なるらむ

藤原惟規

頼めとやいなとやいかにいな舟のしばしと待ちしほども經にけり

賢智法師

かくばかり色に出でじと忍べども見ゆらむものをたへぬ氣色(けしき)は

賀茂重保

夏にいりて戀まさるといへる心をよめる

○身なれど　一本「わが身も」

○はかなしやの歌　古今集卷十一に「宵々に枕定めむ方も無しいかに寢し夜か夢に見えけむ」

○人しれず　一本「人しれぬ」

○つらき心も變るやと　君のつれない心も變るかと。

○もらさばや　漏らしたい。

○忍びはつべき涙かは　どうせ忍び果てることの出來る涙かい。

○かく　柵を懸く―斯く。

○つゝみしは　包み忍んだのは。

○いなとや　いやとか。

○いな舟　稻舟。古今集卷二十の「最上川上れば下る稻舟のいなにはあらずこの月ばかり」の歌を受けて詠んだ歌。

○見ゆらむものを　貴方に見られようものを。

○たへぬ氣色は　私の堪へ忍ばれない樣子は。

人しれずおもふ心はふかみ草はなさきてこそ色に出でけれ

題しらず　　津守國光

日を經つゝしげさはまさる思草あふ言の葉のなどなかるらむ

大中臣清文

おつれども軒にしられぬ玉水は戀のながめの雫なりけり

源季貞

ひとしれずおもひそめてし心こそいまは涙の色となりけれ

祐盛法師

いろ見えぬこゝろのほどを知らするは袂を染むる涙なりけり

大中臣定雅

わが袂は信夫（しのぶ）の奥のますげ原つゆかゝるとも知る人のなき

祝部宿禰成仲

君こふる涙しぐれと降りぬればしのぶの山も色づきにけり

二條院前皇后宮常陸

いかにせむ忍ぶの山のした紅葉しぐるゝまゝに色のまさるを

賀茂重延

○ふかみ草　牡丹の異名―深み。

○しげさ　思ひの繁さ。

○など　なんとして。

○軒にしられぬ玉水　雨ではなくて涙なので。

○ながめ　長目（物思ひ）―長雨。

○涙の色　上に「思ひ染めて―」とあるに對する。

○袂を染むる涙　紅涙。

○つゆかゝるとも　涙の露がかゝつても。

○しのぶの山も色づきにけり　忍んだ心も色に出たの意味を云ひ懸く。

いつしかと袖に時雨のそゝぐかな思ひは冬のはじめならねど　従三位頼政

攝政右大臣のとき百首の歌の中に忍戀の心をよみ侍りける

あさましやおさふる袖の下くゞる涙のすゑを人や見つらむ　皇嘉門院別當

忍びねの袂は色に出でにけりこゝろにも似ぬわが涙かな　左兵衛督隆房

女のなき名たつよし恨みて侍りければ遣はしける

おなじくば重ねてしぼれぬれ衣さてもほすべきなき名ならじを　讀人しらず

かへし

流れてもすゝぎやすると濡衣ひとは著すとも身にはならさじ　大納言宗家

戀の歌とてよみ侍りける

ひと目をばつゝむと思ふにせきかねて袖にあまるは涙なりけり　右京大夫季能

つれなさにいはで絶えなむと思ふこそあひ見ぬ先の別れなりけれ　法眼實快

よそ人にとはれぬるかな君にこそ見せばやとおもふ袖の雫を　藤原伊綱

○冬のはじめ　時雨は冬のはじめに降るものなので斯う云ふ。

○忍びね　忍び泣き。
○こゝろにも似ぬ　忍ぶ心にも似ない。

○重ねて　實際に逢つて名を立てて。
○さてもほすべき　このまゝで乾し得る。
○なき名ならじを　無實の浮名でもあるまいから。
○ならさじ　馴らすまい。

○つゝむ　忍び包む。

○絶えなむ　思ひ切らう。
○あひ見ぬ先　戀人にまだ逢ひもしない先。

○つれなくぞの歌　古今集卷十二に「いとせめて戀しき時はむば玉の夜の衣を返してぞぬる」
○夢にも見ゆる　夢にまでも君はつれなく見える。
○うらみむ　裏見むー恨みむ。
○返しやはせし　衣を返しはしなかつた。
○逢ひ見ての後の　一度でも君に逢ひ見てから後の。
○思へば　一本「なりせば」
○照射　鹿を集め射る爲に火串に火をともしたもの。
○かくしをるらむ　斯く萎るらむ
○室の八島　下野國。
○宿もがな　宿もあればいいがな
○戀　戀の「ひ」に火をかけてある

つれなくぞ夢にも見ゆるさよ衣うらみむとては返しやはせし

攝政右大臣の時家の歌合に戀の歌とてよめる　藤原季經朝臣

思ひ出づるその慰めもありなまし逢ひ見て後のつらさ思へば

おなじ家に百首の歌よみ侍りけるとき初戀の心をよみ侍りける　皇太后宮大夫俊成

照射(ともし)する端山がすそのした露やいるより袖はかくしをるらむ

忍戀

いかにせむ室の八島に宿もがな戀のけぶりを空にまがへむ

千載和歌集　巻第十二

戀歌　二

堀河院の御時百首の歌奉りけるとき戀の心をよみ侍りける　　大納言公實

思ひあまり人にとはばや水無瀨川むすばぬ水に袖はぬるやと

題しらず　　花園左大臣

果なくも人に心をつくすかな身のためにこそ思ひそめしか

二條太皇太后宮大貳

戀ひそめし人はかくこそつれなけれ我が涙しも色かはるらむ

白河院三條殿におはしましける時をのこども戀の歌よみ侍りけるによめる　　前中納言雅兼

かゝりける涙と人も見るばかりしぼらじ袖よ朽ちはてねたゞ

權中納言俊忠家に戀の十首の歌よみ侍りける時いのれども不逢戀といへる心を　　源俊頼朝臣

うかりける人を初瀨の山おろし烈しかれとは祈らぬものを

○水無瀨川　攝津國三島郡。
○むすばぬ　一本「やたらば」
○つくす　使ひへらす。
○思ひそめしか　「ど」を補ふ。
○かくこそつれなけれ　斯やうに戀りなくつれないが。
○朽ちはてね　朽ち果てよ。
○うかりける人　自分につれなくした人。
○初瀨　大和國磯城郡。初瀨寺觀音のある所。

おなじ十首の中に誓ふ戀といへる心をよめる　　修理大夫顯季

うれしくば後の心を神もきけ引くしめなはの絶えじとぞ思ふ

午臥無實戀　　藤原顯仲朝臣

結びおくふしみの里の草枕とけで止みぬる戀にもあるかな

來不留戀　　權中納言俊忠

戀ひ〳〵てかひもなぎさに沖つ波よせてはやがて立ち歸れとや

女につかはしける　　徳大寺左大臣

いかで我がつれなき人に身をかへて戀しき程を思ひしらせむ

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時家の歌合に戀の心をよめる　　源　雅光

玉藻かる野島の浦のあまだにもいとかく袖は濡るゝものかは

中院入道右大臣中將に侍りける時歌合し侍りけるに戀の歌とてよめる　　藤原重基

あふことをその年月とちぎらねば命やこひの限りなるらむ

藤原宗兼朝臣

戀ひわたる涙の川に身をなげむこの世ならでも逢瀬ありやと

○うれしくば　我がしめ繩引いて信ずる心を嬉しく思ひ給はば。
○引くしめなはの　しめ繩のやうに。
○絶えじ　仲絶えまい。
○ぞ思ふ　一本「おもへば」
○とけで止みぬる　打解けずして止んだ。
○かひ　貝—效。
○なぎさ　渚—無き。
○いかで　どうかして。
○かへて　入れ替へて。
○程　程度。
○野島の浦　淡路國津名郡。一本「野島が浦」
○なるらむ　一本「なるべき」
○この世ならでも　後の世にでも

○はし　橋—端。
○くる　來る—繰る。
○わぶる　一本「わたる」。
○濡れし數かな　濡れた數には入らない。
○さながら　そのまゝに。
○いせを　伊勢男。
○さらば　それではせめて。
○みるめ　海松—見る目。
○逢ふとみつるに　君に逢ふと見たことによつて。
○さむる現も夢ならぬかは　覺める現實だとて夢でないものか。
○つらからむ　つらいのだらうか
○誰に　つれない君以外の他人。
○果て　身の果て。
○逢ふよりほかのしがらみぞなき　逢ふといふことより外に涙川を堰き止める柵はない。

百首の歌奉りけるとき戀の歌とてよめる　　前參議親隆

陸奥の十綱のはしにくるつなの絶えずも人にいひわたるかな

逐日增戀といへる心をよませ給ひける　　院御製

戀ひわぶる今日の涙にくらぶればきのふの袖は濡れし數かは

題しらず　　右大臣

朝まだき露をさながら笹めかる賤が袖だにかくは濡れじを

權大納言實國

潮たるゝいせをの蜑や我ならむさらばみるめをかるよしもがな

權大納言實家

よしさらば逢ふとみつるに慰まむさむる現(うつゝ)も夢ならぬかは

右衞門督賴實

いかばかり思ふと知りてつらからむあはれ涙の色を見せばや

俊惠法師

戀ひしなむ命を誰にゆづり置きてつれなき人の果てをみせまし

從三位賴政

せきかぬる涙の川の早き瀨は逢ふよりほかのしがらみぞなき

藤原顯方

我が戀は年ふるかひもなかりけりうらやましきは宇治の橋守

道因法師

なれてのちしなむ別れのかなしきに命にかへぬ逢ふこともがな

賀茂重保

錦木のちつかに限りなかりせばなほこりずまに立てましものを

百首の歌奉りけるとき戀の歌とてよめる　前參議教長

いかばかり戀路は遠きものなれば年はゆけども逢瀬なからむ

時々物申しかはしける人に名のたつは知らぬかと人のつげければよめる　三のみこの家越後

なれて後つらからましにくらぶればなき名は事の數ならぬかな

大納言しげみち少將に侍りける時名の立つこと侍りけるをおなじくば誠になさばやといひ遣はしてければよみて遣はしける　法性寺入道前太政大臣家參河

逢ひ見むとおもひなよりそ白波の立ちけむ名だに惜しき汀を

後三條内大臣家に歌合し侍りけるとき戀の歌とてよめる　道因法師

戀ひしなむ身は惜しからず逢ふことにかへむ程までと思ふばかりぞ

○我が戀はの歌　古今集卷十七に「ちはやぶる宇治の橋守なれをしぞあはれとは思ふ年の經ぬれば」
○命にかへぬ逢ふこと　命に替へないですむ逢ふ事。
○錦木　一尺ばかりの彩色した棒で奥州の風俗に逢はうとする女の家の前にこれを立てると、逢はうと思へば取入れる。取入れなければ千束まで立てるといふ。
○こりずまに　懲りないまゝに。
○逢瀬　逢ふ所。
○名の　一本「なき名」
○なれて後つらからましに　君と馴れての後のつらさに。
○おもひなよりそ　思ひ寄るなよ
○白波の　「立ち」の序。
○惜しき汀を　「惜しき身」を云ひ懸く。
○惜しからず　一本「惜しからじ」
○かへむ　取換へよう。

贈左大臣長實八條の家にて戀の心をよめる　　左京大夫顯輔

今はさは逢ひ見むまではかたくとも命とならむ言の葉もがな

題しらず　　平忠盛朝臣

ひとかたになびく藻しほの煙かなつれなき人のかからましかば　　藤原通經

戀ひわびぬちぬの壯夫（ますらを）ならなくに生田の川に身をやなげまし　　寂超法師

命をばあふにかへむと思ひしを戀ひ死ぬとだに知らせてしがな　　源師光

戀しともまたつらしとも思ひやる心いづれか先にたつらむ　　道因法師

逢ふならぬ戀慰めのあらばこそつれなしとても思ひたえなめ　　顯昭法師

つれなさに今は思ひもたえなましこの世ひとつの契りなりせば　　源慶法師

うたゝねの夢に逢ひ見て後よりは人もたのめぬ暮ぞまたるゝ

○さは　さやうには。

○かからましかば　斯やうであるならばなア。

○ちぬの壯夫ならなくに　ちぬの壯夫ではないに。萬葉集大和物語に、津の國の蘆屋里の女が、ちぬ男うなひ男二人と三角關係から、女が生田川へ投身したので二人の男も後から投身したといふ話が見える。

○逢ふならぬの歌　君に逢ふといふこと以外に、戀の慰めのあるならば、君がつれないとて思ひ切らうに。

○この世ひとつの契りなりせば　前生からの契りだから。

○人もたのめぬ　人も賴まれぬ。

朝恵法師

あはれとも枕ばかりや思ふらむ涙たえせぬ夜半のけしきを

忍戀のこゝろをよみ侍りける　二條院内侍參河

こゝろも手におつる涙のいろなくば露とも人にいはましものを

殷富門院大輔

思ふこと忍ぶにいとゞ添ふものはかずならぬ身の嘆きなりけり

右大臣に侍りけるとき家に歌合し侍りける時戀の歌とてよみ侍りける

攝政前右大臣

行きかへる心に人のなるればやあひ見ぬさきに戀しかるらむ

寄鄕戀といへる心をよめる　左衛門督家通

あふ事をさりともとのみ思ふかな伏見の里の名をたのみつゝ

忍びて暮にまうのぼるべきよし侍りける人につかはしける　二條院御製

などやかくさも暮れがたき大空ぞ我が待つ事はありとしらずや

百首の歌の中に戀のこゝろを　式子内親王

袖のいろは人のとふまでなりもせよ深き思ひを君したのまば

契暮秋戀といへる心をよみ侍りける　左近中將良經

○こゝろも手　袖。

○かずならぬ身の嘆き　自分が君を相手にするだけの身でないといふ嘆き。

○人のなるればや　人が馴れるからか。

○さりともと　それにしても。

○などや　一本「なぞや」や何としてか。

○袖のいろ　君を戀うて泣く涙で濡れた袖の色。

○君し　君が。「し」は强めの助詞

あきはをし契りは待たるとにかくに心にかゝるくれの空かな

戀の歌とてよめる　　藤原成家朝臣

戀をのみしぐるゝそらのうき雲はくもりもあへず袖ぬらしけり

忍傳書戀といへる心をよめる　　藤原家實

磯がくれかきはやれども藻鹽草たちくる波にあらはれやせむ

題しらず　　藤原家隆

くれにとも契りて誰か歸るらむ思ひたえたるあけぼのの空

讀人しらず

契りおくその言の葉に身をかへて後の世にだに逢ひ見てしがな

大内にて月あかかりける夜人々あそびけるをほのかにみて心あくがるゝよしいひて侍りける人の返事につかはしける　　殷富門院尾張

誰ゆゑかあくがれにけむ雲間より見し月影はひとりならじを

戀爲後世妨といへる心をよめる　　藤原家基

こえやらで戀路にまよふあふ坂や世を出ではてぬ關となるらむ

乍臥無實戀といへる心をよめる　　西住法師

手枕のうへにみだるゝ朝寐髪したにとけずと人は知らじな

○かきはやれども　掻遣れども。
○あらはれ　洗はれ―現はれ。

○誰か　他の人は。
○思ひたえたる　自分は君との仲を思ひたえた。

○契りおく　後の世に逢はうと。
○後の世にだに　次の世にでも。
○大内　大内裏。皇居。

○誰ゆゑか　一本「誰ゆゑに」

○逢坂　戀人に逢ふことを云ひ懸く。
○世を出ではてぬ　塵の世を出離しきれない。
○人は知らじな　外の人は知るまいな。

題しらず　　従三位頼政

我が袖の潮のみちひる浦ならば涙のよらぬをりもあらまし

法印靜賢

潮たるゝ袖のひるまはありやともあはでの浦の蜑にとはばや

俊惠法師

思ひきや夢をこの世のちぎりにて覺むる別れをなげくべしとは

藤原隆信朝臣

我ゆゑの涙とこれをよそに見ばあはれなるべき袖のうへかな

賀茂政平

逢ふことのかくかたければつれもなき人の心や岩木なるらむ

源光行

こひ死なむ涙のはてやわたり川深きながれとならむとすらむ

寄石戀といへる心を　　二條院讃岐

我が袖は汐干に見えぬ沖の石の人こそ知らね乾くまもなし

題しらず　　民部卿成範

かゝりける歎きは何のむくいぞと知る人あらば問はましものを

○涙　「波」を云ひ懸く。

○あはでの浦　逢はで―阿波手浦（尾張國海東郡）。

○思ひきや　初めは思つたかい。
○夢を　夢の中で契るのを。

○よそに　餘所目に。

○かたければ　難ければ―固ければ。
○つれ　同情。
○岩木　白氏文集に「人非二木石一皆有レ情。」
○わたり川　冥途にあるといふ三途川。
○沖の石の　沖の石のやうに。
○人こそ知らね　人には知られないが。
○なし　一本「なき」

戀ひ死なむことぞはかなき渡川逢瀨ありとは聞かぬものゆゑ　　太宰大貳重家

石淸水の歌合とて人々よみ侍りける時寄松戀といへる心をよみ侍りける

妹が邊(あたり)ながるゝ川の瀨によらば泡となりても消えむとぞ思ふ　　刑部卿範兼

はかなしな心つくしに年をへていつとも知らぬあふの松原　　權中納言經房

戀の歌とてよめる

おもひ寐の夢だに見えで明けぬれば逢はでも鳥の音こそつらけれ　　寂蓮法師

夜もすがらもの思ふ頃は明けやらぬ閨の隙さへつれなかりけり　　俊惠法師

いたづらにしをるゝ袖をあさ露にかへる袂とおもはましかば　　僧原是忠

戀ゆゑはさもあらぬ人ぞ恨めしき我よそならばとはましものを

思ひせく心のうちのしがらみも堪へずなりゆくなみだ川かな　　藤原親盛

○逢瀨ありとは云々　後世に逢ふ折があるとは聞かないので。

○よらば　寄れるならば。

○石淸水　男山八幡宮。

○心つくし　心盡し―筑紫。

○あふの松原　「逢ふ」を云ひ懸く

○夢だに見えで　夢さへ見られないで。

○逢はでも　君に實際に逢はないでも。

○鳥の音　夜明けを告げる鷄の音

○夜もすがら　一晩中。

○もの思ふ頃　もの思ひする頃。

○閨の隙さへ　寢室の隙間までも明けやらずして。

○戀ゆゑは　戀の爲には。

○我よそならば云々　私がはたで見てゐる人ならば、何か物思ひでもあるかと問はうものを。

○思ひせく　涙を洩らすまいと思つて堰き止める。

○しがらみも　「も」一本「は」

○なりゆく　一本「なりぬる」

靜緣法師

おのづからつらき心もかはるやと待ち見むほどの命ともがな

むつましくはならで忘られにける人に遣はしける

大江維順がむすめ

忘らるゝうき名はさても立ちにけり心のうちは思ひわけども

晩風催戀といへる心をよめる

藤原顯家朝臣

よとともにつれなき人を戀草のつゆこぼれ增す秋のゆふ風

題しらず

源師光

戀しさをいかゞはすべき思へども身は數ならず人はつれなし

女のもとに遣はしける

權大納言實國

戀ひしなば我ゆゑとだに思ひ出でよさこそはつらき心なりとも

左衞門督家通

一向（ひたすら）に恨みしもせじ前の世にあふまでこそは契らざりけめ

思ひながら色には出でざりけるを女の許にて鏡をかりてその裏にかきつけ返し侍りける

藤原公衡朝臣

增鏡こゝろもうつるものならばさりとも今はあはれとや見む

法住寺殿の殿上の歌合に臨期違約戀といへる心をよめる

權中納言通親

○おのづから　自然と。
○つらき心もかはるやと　君のつれない心も變る時もあるかと。
○思ひわけども　道理と思ひ分けて居るが。
○よとともに　夜—世。
○つゆ　涙の露。
○我ゆゑとだに　自分故に戀ひ死んだのだとでも。
○あふまでこそは　逢ふといふことまでは。
○契らざりけめ　「は」を補ふ。一本「契らざるらめ」
○こゝろ　一本「思ひ」
○さりとも　あんなにつれないにしても。
○あはれと　私を…。

藤原盛方朝臣

いましばしそらだのめにも慰めで思ひたえぬる宵のたまづさ

杣川のあさからずこそ契りしかなどこのくれをひきたがふらむ

皇太后宮大夫俊成

思ひきや榻(しぢ)のはしがきかきつめて百夜も同じまろねせむとは

○そらだのめにも慰めで　空頼みにでも慰めないで。「慰めで」一本「慰まで」

○このくれ　木の榑—此の暮。

○榻のはしがき　古今集巻十五に「曉の鴫の羽根搔き百羽搔き君が來ぬ世はわれぞ數書く」とある歌を讀み違へて「曉の榻の端書き百夜書ききみが來ぬ夜はわれぞ數書く」と讀んだことから斯う云ふ。榻とは車の轅をのせる臺。

○まろね　ごろ寝。

千載和歌集　巻第十三

戀歌三

題しらず　　藤原實方朝臣

契りこしことの違ふぞたのもしきつらさもかくや變ると思へば

相模

知らじかしおもひも出でぬ心にはかく忘られずわれ嘆くとも

藤原長能

つれもなくなりぬる人の玉章(たまづさ)をうき思出のかたみともせじ

やはらかに寝(ね)る夜もなくて別れぬる夜々の手枕いつか忘れむ

ふん月の七日の夜大納言朝光ものいひ侍りけるを又の日心あるさまに人のいひ侍りければ遣はしける　　小大君

棚機にかしつと思ひしあふ事をその夜なき名の立ちにけるかな

びはどのの皇太后宮にまゐりて侍りけるに辨のめのとのはかまのこしのいでたる御まへなる硯を引きよせてそのこしに書きつけ侍りける　　宇治前太政大臣

○つらさもかくや變ると思へば　君のつれなさも、契つて來た事が違ふと同様に、やはり變るのかと思ふと。

○知らじかし　知るまいよ。

○われ　一本「わが」

○やはらかに寝る夜もなくて　催馬樂に「貫河の瀬々の手枕やはらかに寝る夜はなくて親さくる夫。」と見える。

○ふん月　七月の異稱。

○かしつ　逢ふ事を借した（そして自分は逢はなかつた）。

○とけぬ　心の打解けぬ。
○人の戀ふるに　君が私を戀ふるので。
○誰がつらきとか　誰が私につれないとてか。
○しづ　筬つ―賤。
○くるしき　苦しき―繰る。
○麻手　麻布。
○萱筵　これまでは序。
○行く方もなき　心の慰める方もない。
○しるければ　顯著なので。
○えこそかこたざりけれ　かこつけることが出來ない。

うらめしや結ぼほれたる下ひものとけぬや何の心なるらむ　辨のめのと

かへし

下紐は人の戀ふるにとくなれば誰がつらきとか結ぼほるらむ　大納言公實

堀河院の御時百首の歌奉りけるとき戀の心をよめる

ひとり寝る我にて知りぬ池水につがはぬをしのおもふ心を　中納言師時

戀をのみしづのをだまきくるしきは逢はで年ふる思ひなりけり　源俊頼朝臣

中院の右大臣中將に侍りけるとき歌合し侍りけるによめる

麻手ほすあづまをとめの萱筵しきしのびてもすぐすころかな　修理大夫顯季

よとともに行く方もなき心かな戀は道なきものにぞありける　僧都覺雅

旅の戀の心をよめる

旅衣なみだの色のしるければ露にもえこそかこたざりけれ

堀河院の御時艷書の歌をうへのをのこどもによませさせ給ひて歌よむ女房のもとに遣はしけるを大納言公實は康資の王の母に遣はしけるを又周防の内侍にも遣はしけると聞きてそねみたる歌を送りて侍りければ遣は

しける　　　　大納言公實

滿つ潮の末葉をあらふながれ蘆の君をぞ思ふうきみしづみみ

中將に侍りけるとき歌合し侍りけるに戀の歌とてよめる　　　權中納言俊忠

我が戀はあまの刈る藻に亂れつゝ乾くときなき波のした草

法性寺入道内大臣に侍りける時の歌合に尋失戀といへる心をよめる　　　藤原時昌

なほざりに三輪の杉とは敎へおきて尋ぬる時はあはぬ君かな

法性寺殿にて五月の御供花の時をのこども歌よみ侍りけるに契後隱戀と
いへる心をよみ侍りける　　　皇太后宮大夫俊成

たのめこし野邊の道芝夏ふかしいづくなるらむもずの草ぐき

題しらず　　　法性寺入道前太政大臣

冬の日を春よりながくなすものは戀ひつゝ暮す心なりけり

位の御時皇太后宮はじめてまゐり給へりける後の朝に遣はしける　　　院御製

萬世を契りそめつるしるしにはかつ〴〵今日の暮ぞひさしき

おなじ御時忍びてはじめてまうのぼりて侍りける人に朝まつりごとの程

○ながれ蘆の　流蘆のやうに。一本「亂れ蘆の」
○うきみしづみみ　浮いたり沈んだりして。一本「浮き沈みつゝ」
○あま　海人。

○三輪の杉　古今集卷十八に「我が庵は三輪の山もと戀しくはとぶらひ來ませ杉立てる門」

○もずの草ぐき　百舌鳥が草を潜ること。萬葉集卷十に「春されはもずの草ぐき見えねどもわれは見遣らむ君があたりは」

○萬世を　萬世までと。
○かつ〴〵　先づ〳〵。
○まうのぼりて　參り上りて。
○朝まつりごとの程　早朝羣臣の出仕するに見えて萬の政事を聞召す事の爲に。

まぎれさせ給ふことありて暮れにける夕つ方つかはされける

今朝とはぬつらさに物は思ひしれ我もさこそは恨みかねしか　待賢門院加賀

花園左大臣につかはしける

かねてより思ひし事ぞふし柴のこるばかりなる歎きせむとは　前參議敎長

百首の歌奉りけるとき戀の心をよめる

戀しさは逢ふを限りと聞きしかどさてしもいとゞ思ひそひけり　左京大夫顯輔

よそにしてもどきし人にいつしかと袖の雫をとはるべきかな　待賢門院堀河

長からむ心もしらず黑髮のみだれて今朝はものをこそ思へ　上西門院兵衞

宵のまもまつに心やなぐさむと今來むとだにたのめおかなむ　待賢門院安藝

磯馴木のそなれ〳〵てむす苔のまほならずとも逢ひ見てしがな　從三位賴政

後朝戀の心をよめる

人はいさあかぬ夜牀にとゞめつる我が心こそ我を待つらめ

○我もさこそは恨みかねしか　自分も平生君が問はないのをさやうに恨みかねたのだ。
○こる　伐る—懲る。
○歎き　「き」に「木」を云ひ懸く。
○逢ふを限り　逢ふまでの期限。
○さてしも　逢つても。
○いとゞ　一層。
○よそにして　餘所事にして。
○もどきし人　もどかしく思はれた人。
○とはるべきかな　問はれねばならないやうになつたことよ。
○長からむ心　契りの長くあらう心。
○黑髮の　黑髮のやうに。
○ものをこそ思へ　物思ひする。
○今來むとだに　すぐ來ようとでも。
○むす苔の　これまでは序。
○まほならずとも　眞實でなくても。
○いさ　どうだか知らないが。
○とゞめつる　留め置いて歸つて來た。

忍びたる所にまかりて有明の月に夜ふかく歸りて遣はしける　權中納言通親

おもへたゞ入りやらざりしありあけの月よりさきにいでし心を

攝政右大臣の時家の歌合に旅宿逢戀といへる心をよめる　皇嘉門院別當

難波江の葦のかりねの一よ故みをつくしてや戀ひわたるべき

初逢戀の心をよめる　藤原公衡朝臣

戀ひ〳〵てあふ嬉しさをつゝむべき袖は涙にくちはてにけり

藤原隆信朝臣

君やそれありしつらさはたれなれば恨みけるさへいまは悔しき

夢中契戀といへる心をよめる　參議俊憲

すがたこそ寐覺の牀に見えずとも契りしことのうつゝなりせば

中納言國信しのびて物申して後つかはしける　前齋院新肥前

あづまやのあさきの柱我ながらいつふしなれて戀しかるらむ

寄枕戀といへる心をよみ侍りける　久我內大臣

つゝめども枕は戀を知りぬらむ涙かゝらぬ夜半しなければ

夏の戀の心をよめる　前中納言雅賴

戀すればもゆる螢もなく蟬もわが身のほかのものとやは見る

○かりね　刈り根—假寢。
○一よ　節と節との間をよと云ひそれに夜を云ひ懸く。
○みをつくしてや　澪標—身を盡して。「や」は疑問の助詞。
○戀ひ〳〵ての歌　古今集卷十七に「嬉しさを何に包まむ唐衣袂豐かに裁てと云はましを」拾遺集卷十一に「人知れぬ涙に袖は朽ちにけり逢ふ夜もあらば何に包まむ」
○ありしつらさは　嘗てあつたつらさは。
○たれなれば　君以外の人であるからか。
○いまは悔しき　一本「悔しかるらむ」
○あさきの柱　淺木の柱。節のある柱。「ふしなれて」を起す序。
○もゆる螢もなく蟬も　古今集卷十一に「明け立てば蟬のをりはへ鳴き暮し夜は螢の燃えこそ渡れ」
○わが身のほかのものとやは見る　我が身の內のものと見る意味。

題しらず　右大臣

引きかけて涙を人に包むまにうらや朽ちなむ夜半のころもは

百首の歌奉りけるとき戀の歌とてよめる　前参議親隆

しほたるゝ伊勢をの蜑の袖だにもほすなる隙(ひま)はありとこそ聞け

歌合し侍りける時よめる　藤原清輔朝臣

しばしこそ濡るゝ袂もしぼりしか涙にいまはまかせてぞ見る

顯昭法師

よしさらば涙に朽ちねから衣ほすも人目を忍ぶかぎりぞ

題しらず　道因法師

おもひわびさても命はあるものを憂きにたへぬは涙なりけり

藤原仲實朝臣備中守にまかれりけるとき具してくだりたりけるを思ひうすくなりて後月をみてよみ侍りける　遊女戸々

数ならぬ身にも心のありがほにひとりも月を眺めつるかな

契日中戀といへる心をよめる　中原清重

涙にや朽ちはてなましから衣そでのひるまとたのめざりせば

鳥羽院御時藏人所に侍りけるとき女にかはりてよめる　藤原成親

引きかけて　涙を覆ふために額に夜の衣を引きかけて。
○ほすなる　乾すといふ。
○しばしこそ　暫しの間は。
○まかせて　自由にさせて。
○朽ちね　朽ちよ。
○さても　それにしても。
○うきにたへぬは　憂さに忍びあへぬものは。
○備中守　一本「備中國」
○ひとりも　獨りでも。
○ひるま　干る間—晝間。

かれはつる小笹がふしを思ふにもすくなかりけるよゝの數かな

寄催馬樂戀といへる心をよめる　藤原伊經

分けきつる小笹が露のしげければ逢ふ道にさへぬるゝ袖かな

旅戀といへる心をよめる　讀人しらず

おきて行く涙のかゝるくさまくら露しげしとや人のあやめむ

月前戀といへる心を

涙をもしのぶるころのわが袖にあやなく月の宿りぬるかな

稱他人戀といへる心をよみ侍りける　内大臣

しのびかね今は我とやなのらまし思ひ捨つべき氣色ならねば

女に忍びてかたらふこと侍りけるを聞ゆることの侍りければ遣はしける　左近中將良經

知られても厭はれぬべき身ならずば名をさへ人に包ましやは

左近衞督隆房

いづくより吹きくる風の散らしけむ誰もしのぶの森の言の葉

題しらず　從三位頼政

おもひかね夢に見ゆやとかへさずば裏さへ袖は濡らさざらまし

○かれ　枯れ―離れ。
○ふし　節―臥し。
○よゝ　竹のよゝ―夜々。
○催馬樂　當時の俗謠の名。
○逢ふ道　催馬樂に「逢ふ路のしのの小薄早引かず……」
○人のあやめむ　人が怪しむだらう。
○あやなく　つまらなく。
○稱他人戀　自分の名を名のらずに他人の名を借りて云ひよる戀。
○思ひ捨つべき氣色ならねば　相手の女の氣色が…。
○知られても　自分の名を…。
○名をさへ人に包ましやは　名までを君に隱さうものかい。
○聞ゆること　外に洩れ聞えること。
○しのぶの森　陸奥國。
○かへさずは　衣を返して著ないならば。古今集卷十二に「いとせめて戀しき時はむばたまの夜の衣を返してぞ著る」衣を返して著るのは夢に逢ふため。
○裏さへ袖は　袖は表ばかりでなく裏までも。

くり返しくやしきものは君にしもおもひよりけむ賤のをだ巻　　源師光

いとはるゝ身をうしとてや心さへわれをはなれて君にそふらむ　　藤原隆親

あぢきなくいはで心を盡すかなつゝむ人目も人のためかは　　源光行

くれなゐに萎れし袖も朽ちはてぬあらばや人に色もみすべき　　皇太后宮若水

命こそおのが物から憂かりけれあればぞ人をつらしとも見る　　皇嘉門院尾張

契ること侍りけるを忘れたる女につかはしける　　右近中將忠良

何とかやしのぶにはあらでふるさとの軒端にしげる草の名ぞうき

夢中契戀といへる心をよめる　　太皇太后宮小侍從

見し夢の覺めぬやがての現にて今日とたのめしくれを待たばや

人につかはしける　　二條院御製

知るらめや落つる涙の露とともにわかれの牀にきえて戀ふとは

○うしとて　一本「うらみて」
○心さへわれをはなれて　我が心までも我が身を離れて。

○あぢきなく　無益に。
○いはで　口に云はないで。
○人のためかは　人のためかい。

○おのが物から　自分の物ながら
○あれはぞ　命があるからこそ。

○草の名　忘れ草。

○見し夢の　今夜逢はうと見た夢の。
○覺めぬやがての現にて　覺めないそのまゝが現實であつて。
○今日と　今日逢ひに來ると。
○知るらめや　知るだらうか。
○わかれの　一本「わかれし」

○かごとばかりの　僅かばかりの

○すがはら　菅原―契りをする。
○ふし見　伏見（山城國）―伏し見る。

御返事　　讀人しらず

まだしらぬ露おく袖を思ひやれかごとばかりの袂のなみだに

右大臣に侍りけるとき百首の歌よませ侍りけるとき後朝の歌とてよみ侍りける　　攝政前右大臣

かへりつるなごりの空を眺むればなぐさめがたき有明の月

皇太后宮大夫俊成

忘るなよ世々の契りをすがはらやふし見の里のありあけのそら

千載和歌集　卷第十四

戀歌四

題しらず　　和泉式部

如何にしてよるの心をなぐさめむ晝はながめにさても暮しつ

これもみなさぞな昔の契りぞとおもふものからあさましきかな

昔御らんじける人の近き程にわたりける由きかせ給うてつかはしける　　花山院御製

よそにては中々さてもありにしをうたてもの思ふ昨日今日かな

久しくまらで來ざりける人のおとづれたりける返事に遣はしける　　小式部

思ひ出でて誰をか人のたづねまし憂きにたへたる命ならずば

太宰帥敦道のみこ中たえ侍りけるころ秋つかた思ひ出でてものして侍りけるによみ侍りける　　和泉式部

待つとてもかばかりこそはあらましか思ひもかけぬ秋の夕暮

題しらず

○ながめ　長目。ぢつと一所を見つめて物思ひに耽ること。
○昔の契り　前世の約束。
○おもふものから　思ふものながら。

○中々　却って。
○うたて　餘りに。

○憂きにたへたる命ならずば　私が憂さに命を堪へて保たなかつたならば。
○ものして　一本「まをして」

○待つ　一本「いつ」
○かばかりこそはあらましか　かほどのことではあつたらうが。

ほどふれば人は忘れてやみぬらむ契りしことを猶たのむかな

女のもとより夜ふかく歸りてつかはしける　藤原實方朝臣

竹の葉に玉ぬく露にあらねどもまだよをこめておきにけるかな

堀河院御時百首の歌奉りけるとき戀の心をよめる　藤原基俊

木のまより領巾(ひれ)振る袖をよそに見ていかゞはすべき松浦さよ姫

藤原仲實朝臣

まぶしさす賤男の身にもたへかねて鳩ふく秋の聲たてつなり

法性寺入道前太政大臣内大臣に侍りける時の家にて寄花戀といへる心をよめる　源雅光

吹く風にたへぬ梢の花よりもとゞめがたきは涙なりけり

遇不逢戀といへる心をよみ侍りける　大納言成通

あひみむといひ渡りしは行末の物思ふことのはしにぞありける

權中納言俊忠中將に侍りけるとき歌合し侍りけるに戀の歌とてよめる

伊豫三位

戀ひわびてあはれとばかりうち歎くことよりほかの慰(なぐさ)めぞなき

おなじ家に十首の戀の歌よみ侍りけるとき來不留戀といへる心をよみ侍

○やみならむ　一本「やみぬれど」

○竹の葉にの歌　詞花和歌集卷八に見える。

○松浦さよ姫　昔大伴狹手彥出征の時、その思ひ人の佐用姫は領巾振山で領巾を振つて別れを惜しんださいふ。

○まぶし　狩の時に木などを折りさして隱れゐる所。

○鳩ふく　手を合はせて鳩のまねして吹き鳴らして狩人の合圖とすること。

○たへぬ　堪へられない。

○はし　橋―端。

○うづら鳴く…玉小菅　「刈り」を云ひ起す序。
○かり　刈り―假。
○書きもおかせで　書きも置かせずして殘念だつた意味。
○にほのうみ　鳰の海。琵琶湖。
○みるめ　海松―見る目。
○をがやの軒　小萱で葺いた軒。
○しのぶ草　しのびの序。
○しかまの市　播磨國飾磨郡の市(互に物を換へる所)
○すがたの池　戀をするに、菅田池(大和國添上郡)を云ひ懸く。
○水草ゐて　水草が生じて。「澄まで」を云ひ起す序。
○あさまの野邊　信濃國北筑摩郡か。「野邊」一本「野ら」
○かくは　かほどは。

りける

權中納言師時

たちかへる人をも何かうらみまし戀しさをだにとゞめざりせば

藤原道經

うづら鳴くしづやに生ふる玉小菅かりにのみ來て歸る君かな

たえて後のかたみといへる心をよみ侍りける

久我內大臣

わかれてはかたみなりける玉章を慰むばかり書きもおかせで

崇德院に百首の歌奉りけるとき戀の歌とてよめる

上西門院兵衞

わが袖の涙やにほのうみならむかりにも人をみるめなければ

前參議親隆

あづまやのをがやの軒のしのぶ草しのびもあへずしげる思ひに

皇太后宮大夫俊成

戀をのみしかまの市にたつ民のたへぬ思ひに身をやかへてむ

待賢門院安藝

戀をのみすがたの池に水草ゐてすまでやみなむ名こそ惜しけれ

藤原清輔朝臣

露ふかきあさまの野邊にをかや刈る賤が袂もかくは濡れじを

のを」
○さしもやは　それほどでもあるまい。
○なれる姿　戀に痩せた姿。
○いかに　一本「いかゞ」
○忘れば　忘れることも。
○かはしま　交し―川島。
○淺からなくに　淺くないのに。

百首の歌よみけるとき戀の歌とてよめる　顯昭法師

人づてはさしもやはとも思ふらむ見せばや君になれる姿を

女のかよふ人あまたきこゆるに遣はしける　平實重

淺ましやさのみはいかに信濃なる木曾路の橋のかけわたるらむ

題しらず

人の上と思はばいかにもどかましつらきも知らず戀ふる心を

契りける事たがひにける女に遣はしける　參議爲通

契りしももろともにこそ契りしか忘れば我も忘れましかば

忍びて物いひ侍りける女の常に心ざしなしとゑんじければ遣はしける　從三位季行

君にのみしたのおもひはかはしまの水の心は淺からなくに

うへのをのこども老後戀といへる心をつかうまつりけるによませ給うける　院御製

おもひきや年のつもるはわすられて戀に命のたえむものとは

題しらず　藤原季通朝臣

歎きあまりうき身ぞ今はなつかしき君ゆゑ物を思ふと思へば　従三位頼政

水莖はこれをかぎりとかきつめてせきあへぬものは涙なりけり

むつきのついたちごろ忍びたる所に遣はしける　二條院御製

たれもよもまだ聞きそめじ鶯の君にのみこそ音しはじむれ

御返事　讀人しらず

鶯はなべてみやこになれぬらむ古巣にねをば我のみぞなく

寄源氏物語戀と云ふ心をよみ侍りける

見せばやな露のゆかりの玉かつら心にかけてしのぶけしきを

逢坂の名を忘れにし中なれど堰きやられぬは涙なりけり

二條院の御時うへのをのこども百首の歌奉りけるとき忍戀の心をよめる　刑部卿範兼

月まつと人には言ひてながむれば慰めがたき夕ぐれの空

題しらず　藤原爲實

蘆の屋のかりそめ臥しは津の國のながらへ行けど忘れざりけり　圓位法師

○歎きあまり　歎きが餘つては。
○水莖　便りの文。
○かきつめて　書き集めて。
○よも　一本「よに」
○鶯の　一本「鶯は」
○なべて　普く。
○ね　音—泣。
○見せばやなの歌　源氏物語の玉鬘卷の文によつた歌。
○逢坂　「逢ふ」ことを云ひ懸く。源氏物語關屋卷に「行くと來とせき止めがたき涙をや絶えぬ淸水と人は見るらむ」
○月まつと　實際は人を待つのを
○蘆の屋　攝津國武庫郡。
○かりそめ　刈り初め—假初。
○ながらへ　長柄へ（攝津國）—長らへ。

知らざりき雲居のよそに見し月の影を袂にやどすべしとは

逢ふと見しその夜の夢のさめであれな永き眠りは憂かるべけれど

空人法師

秋風のうき人よりもつらきかな戀せよとては吹かざらめども

源仲綱

寄浦戀といへる心をよめる

心さへ我にもあらずなりにけり戀はすがたのかはるのみかは

二條院内侍參河

戀の歌とてよめる

待ちかねて小夜もふけひの浦風にたのめぬ波のおとのみぞする

讚岐

百首の歌よませ侍りけるとき遇不逢戀の心をよみ侍りける

一夜とて夜がれし牀のさむしろにやがても塵の積りぬるかな

攝政前右大臣

ながらへてかはる心を見るよりは逢ふに命をかへてましかば

在所不言戀といへる心をよみ侍りける

前中納言雅頼

逢ふことのありしところし變らずば心をだにもやらましものを

移香増戀といへる心をよみ侍りける

權中納言經房

うつり香に何しみにけむ小夜衣忘れぬつまとなりけるものを

○袂にやどす　涙で濡れた袂に映す。

○さめであれな　覺めずにあれよ「な」は感動の助詞。

○空人　一本「空仁」

○秋風の　秋風が。

○すがたのかはるのみかは　姿が痩せて變るばかりではない。

○ふけひの浦　和泉國泉南郡。上から夜も更けと云ひ懸く。

○夜がれし　夜離れした。

○かへてましかば　替へてしまふならばなア。

○ありしところ　在つた所。

○つま　妻—端。

あけぐれの空をともに眺めける女また逢ふまでのかたみに見むと申しける後遣はしける　右近中將忠良

忘れぬや忍ぶやいかに逢はぬ間の形見と聞きしあけぐれの空

歌合し侍りけるとき戀の歌とてよめる　俊惠法師

おもひかねなほ戀路にぞかへりぬる恨みは末もとほらざりけり

殷富門院大輔

見せばやな雄島の蜑の袖だにも濡れにぞぬれし色はかはらず

隔川戀といへる心をよめる　從三位賴政

山城のみつのの里にいもをおきて幾たびよどに船よばふらむ

絶久戀といへる心をよみ侍りける　藤原隆信朝臣

人しれず結びそめてし若草の花のさかりも過ぎやしぬらむ

稀會不絶戀　藤原顯家朝臣

いかなれば流れはたえぬ中川に逢ふ瀬のかずのすくなかるらむ

攝政右大臣の時百首の歌よませ侍りけるとき遇不逢戀をよめる　源仲綱

すみなれしさのの中川瀬だえして流れかはるは涙なりけり

初疎後思戀といへる心をよめる　一條院讚岐

○あけぐれ　夜が明けようとして暫く暗くなる時。
○忘れぬや　忘れたか。

○なほ戀路にぞかへりぬる　やはり君を戀ふる戀路に戻つた。
○恨みは末もとほらざりけり　君を恨み通せないの意味。
○雄島の蜑の袖だにも　雄島（奥州）の海の袖でも。
○濡れにぞぬれし色はかはらず　濡れに濡れたが私の涙の袖のやうには色は變らない。

○結びそめてし　契りを…。
○若草の花　妻のこと。

○中川　山城國京都市内。仲を云ひ懸く。

○さのの中川　上野國群馬郡か。

今さらに戀しといふもたのまれずこれも心のかはると思へば

戀の歌とてよめる　　太皇太后宮小侍從

戀ひそめし心のいろのなになれば思ひかへすに返らざるらむ

道因法師

伊勢島やいちしの浦のあまだにもかづかぬ袖は濡るゝものかは

遇不逢戀といへる心をよめる　　俊惠法師

思ひきやうかりし夜半の鷄の音をまつことにして明すべしとは

夏夜戀といへる心をよめる　　法印靜賢

唐衣かへしては寢じなつの夜は夢にもあかでひとわかれけり

戀の歌とてよみ侍りける

身のうさを思ひ知らでや止みなまし逢ひ見ぬ先のつらさなりせば

攝政右大臣のとき家の歌合に戀の心をよみ侍りける　　皇太后宮大夫俊成

逢ふ事は身をかへてとも待つべきによゝを隔てむ程ぞ悲しき

攝政家丹後

題しらず　　民部卿成範

おもひねの夢に慰む戀なれば逢はねど暮のそらの待たるゝ

○今さらにの歌　これまでつらくした君が今更に戀しいと云つても頼みにならない。
○戀ひそめし　戀ひ初めし—濃染めし。
○なになれば　何であるからか。
○返らざるらむ　染色とちがつて心の色はさめ返らないのだらう。
○いちしの浦　伊勢國壹志郡。
○かづかぬ袖　水を潜らない袖。
○濡るゝものかは　濡れるものかい。
○うかりし夜半　嘗ては君と逢つて明ける鷄の音を憂く思つた夜半
○まつことにして　今はその鷄の音を待つことにして。
○かへしては寢じ　衣を返しては著て寢まい。衣を返すとは夢見る爲のお呪ひであつた。
○夢にも　夢の中でも。
○思ひ知らでや止みなまし　思ひ知らないで濟んだらうに。
○身をかへてとも　來世に身を替へてもと。
○よゝ　世々。
○夢に慰む戀　逢ふ夢を見て心を慰む我が戀。

戀ひ侘びてうち寐る宵の夢にだに逢ふとは人の見えばこそあらめ

忍びてもの申し侍りける女のせうそこをだに通はし難く侍りけるをからの枕のしたに師子つくりたるが口のうちに深くかくしてつかはし侍りける　権大納言實家

侘びつゝはなれだに君が牀なれよかはさぬ夜半の枕なりとも

かへし　讀人しらず

歎きつゝかはさぬ夜半のつもるには枕もうとくならぬものかは

題しらず　左近中將忠良

これはみな思ひしことぞ馴れしより哀れなごりを如何にせむとは

権中納言通親

死ぬとても心をわくるものならば君に殘してなほや戀ひまし

○逢ふとは人の見えばこそあらめ　人が逢ふと見えるならば心も慰まうに。
○からのまくら　唐物の枕。
○師子　獅子。
○なれだに君が牀なれよ　お前でもせめて君の牀に馴れよ。「君が」一本には「君に」
○かはさぬ　枕を交さぬ。
○思ひしことぞ　かねて思つた事だ。
○なごり　一本「なげき」
○心をわくるものならば　心を身から分けて殘し置くものならば。

千載和歌集 卷第十五

戀歌五

題しらず　　相摸

假寐(うたゝね)に果(はか)なくさめし夢をだにこの世にまたは見でや止みなむ

　　和泉式部

ねをなけば袖に朽ちてもうせぬめりなほ憂き事ぞつきせざりける

ともかくも言はばなべてになりぬべし音になきてこそ見すべかりけれ

ありあけの月見すさみておきていにし人の名殘をながめしものを

　　紫式部

忘るゝは憂世のつねと思ふにも身をやるかたのなきぞ侘しき

左大將朝光がちかごとぶみを書きてかはりおこせよと責め侍りければ遣はしける　　馬内侍

ちはやぶる賀茂の社の神もきけ君わすれずばわれもわすれじ

語らひける人の久しく音づれざりければ遣はしける　　大貳三位

○假寐にの歌　古今集卷十二「うたゝ寐に戀しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき」
○見でや　見ないで。
○ねをなけば　泣きに泣くと。
○うせぬめり　失せてしまふやうだ。
○なべてに　尋常一般に。
○おきて　起きて—自分を置きて
○侘しき　一本「悲しき」
○ちかごとぶみ　誓ひ言の文。
○ちはやぶる　神に關した枕詞。

うたがひし命ばかりはありながら契りし中のたえぬべきかな

もとしりて侍りける男のこと人にもの申すと聞きてふみ遣はしたりければいひ遣はしける　相模

かり人はとがめもやせむ草茂みあやしき鳥のあとのみだれを

女のふかき山にも入らまほしきよしいひて侍りければ遣はしける　大納言たゞのぶ

山よりも深きところをたづね見ば我が心にぞ人はいるべき

時々もの申しける女の許に文を遣はしたりけるをよもあらじとて返して侍りければ遣はしける　藤原つねひら

いにしへもこえ見てしかば逢坂はふみたがふべき中の道かは

むすめの許に通ふ男の狩になむまかるとて太刀をこひにおこせて侍りければ女にかはりて遣はしける　赤染衛門

かりにぞといはぬ先より頼まれずたちとまるべき心ならねば

中納言國信の家の歌合に戀の心をよめる　藤原基俊

人心なにを頼みて水無瀬川せゞのふるぐひ朽ちはてぬらむ

堀河院の御時百首の歌奉りけるとき恨みの心をよめる　隆源法師

恨みずば忘れぬ人もありなまし思ひしらでぞあるべかりける

○うたがひし命ばかりは　契った仲を續けたい希望から命の絕えようことを疑ったがその命だけは。
○こと人にもの申すと聞いて　相摸が他の人に語らふといふことをもと相摸の知つてゐた男が聞いて
○かり人　狩人。男に喩へてゐる
○草茂み　草の茂さに。これは男がちつとも尋ねないことを喩へてゐる。
○あやしき鳥　相摸に云ひよる人他の人に喩へてゐる。
○我が心に　我が心こそ君に深いので…。
○いにしへもの歌　昔も逢うた仲なのを、文を取り違へる道である筈がないの意味。ふみ(文—踏み)
○おこせて　よこして。
○かりに　狩に—假に。
○頼まれず　頼みにされない。
○たちとまる　立止る—太刀止る
○せゞのふるぐひ　川瀨々々の古杙のやうに。
○恨みずばの歌　恨まないならば忘れない人もありはしよう。

花園左大臣の家に侍りける女にまだ中納言など申しける頃もの申し渡りけるをかれ〴〵になりにければ思ひたえにけむ前山城守なりけるものにもの申すと聞きていひ遣はしける　中院右大臣

まことにやみとせも待たで山城のふしみのさとににひ枕する

かくいひて侍りければあやなくかの男にあはずなむなりにけるとなむ

百首の歌奉りけるとき戀の歌とてよめる　待賢門院堀河

うき人をしのぶべしとは思ひきや我が心さへなどかはるらむ

上西門院兵衛

うかりける世々の契りをおもふにもつらきはいまの心のみかは

前參議親隆

知るなればいかに枕のおもふらむ塵のみつもる牀のけしきを

題しらず　右大臣

はかなくもこむ世をかけて契るかな二度(ふたたび)おなじ身ともならじを

右近中將忠良

思ひ出でよ夕の雲もたなびかばこれや歎きにたえぬけぶりと

左兵衞督隆房

○まことにや　本當ですか。
○みとせも云々　伊勢物語に「あら玉の年の三年を待ちわびてたゞ今宵こそ新枕すれ」
○あやなく　意外に。
○うき人　自分につれなくする人
○世々の契り　前世の契り。
○いまの心のみかは　此の世の心ばかりではない。
○歎き　「き」に「木」を云ひ懸く。
○たえぬ　一本「たへぬ」

○戀ひ死なばの歌　古歌に「魂は見つ主は誰とも知らねども結び止めつ下がひのつま」源氏物語葵卷に「嘆きわび空に亂るゝ我が魂を結びとゞめよ下がひのつま」

○變りゆくけしき　男の心の變り行く様子。
○見ても　見るにつけても。
○あだに　はかなく。
○君やあらぬ　君はもとの君でないか。

○なげけとて月やはものを思はする　月が嘆けとて私に物思ひさせるのかい。いや皆戀ゆゑだ。

○久方の　月の枕詞。
○月ゆゑにやは戀ひそめし　月故に戀ひそめたのではないのに。

戀ひ死なばうかれむ魂よ暫しだに我が思ふ人のつまにとゞまれ

太皇太后宮小侍従

君こふとうきぬる魂の小夜ふけていかなるつまに結ばれぬらむ

二條院讃岐

君戀ふる心の闇をわびつゝはこの世ばかりと思はましかば

殷富門院大輔

變りゆくけしきを見ても生ける身の命をあだに思ひけるかな

俊惠法師

君やあらぬ我が身やあらぬおぼつかな頼めし事のみな變りぬる

圓位法師

もの思へどかからぬ人もあるものをあはれなりける身の契りかな

月前戀といへる心をよめる

なげけとて月やはものを思はするかこちがほなる我が涙かな

寂超法師

久方の月ゆゑにやは戀ひそめしながむればまづ濡るゝ袖かな

戀の歌とてよめる

祐盛法師

つらしとも恨むる方ぞなかりける憂きをいとふは君ひとりかは　　藤原隆親

思ひしる心のなきを歎くかなうき身ゆゑこそ人もつらけれ　　源有房

思ふをもわするゝ人はさもあらばあれ憂きを忍ばぬ心ともがな　　惟宗廣言

はかなくぞ後の世までと契りけるまだきにだにもかはる心を　　源仲頼

厭はるゝその由縁(ゆかり)にていかなれば戀は我が身を離れざるらむ

隔海路戀といへる心をよめる　　鴨長明

思ひあまりうち寐る宵のまぼろしも波路を分けて行きかよひけり

たえて久しくなりにけるをとこ思ひ出でて今よりはあだなる心あらじな
ど言ひければ遣はしける　　土御門前齋院中將

年ふれど憂き身は更にかはらじをつらさも同じつらさなるらむ

百首の歌めしけるとき戀の歌とてよませ給ひる　　崇徳院御製

なげくまに鏡の影もおとろへぬ契りしことのかはるのみかは

○君ひとりかは　あへて君獨りではない。
○思ひしる心　物の道理を思ひ知る心。
○うき身ゆゑこそ　我が身が憂き身であるからこそ。
○思ふをも　こちらから思ふものをも。
○憂きを忍ばぬ心ともがな　憂き人を忍ばない我が心であつてほしい。
○まだきにだにも　まだ今の世に於てさへ早くも。
○その由縁にて　そのゆかりで、我が身から戀も離れるべきであるのに。
○今よりは　今後は。
○つらさも同じつらさなるらむ　君のつらい心も元と同じつらさであるだらう。
○鏡の影　鏡に映る我が身の影。

左京大夫顯輔

年ふれどあはれにたえぬ涙かなこひしき人のかからましかば

藤原季通朝臣

いまはたゞおさふる袖も朽ちはてて心のまゝに落つるなみだか

皇太后宮大夫俊成

奥山の岩がきぬまのうきぬなは深きこひぢに何みだれけむ

敷きしのぶ牀だにたへぬ涙にも戀はくちせぬものにぞありける

藤原清輔朝臣

朝夕にみるめをかづく蜑だにもうらみはたえぬものとこそきけ

上西門院兵衞

何せむに空だのめとてうらみけむ思ひたえたるくれもありけり

戀の歌とてよめる　殷富門院大輔

なほざりの空だのめとて待ちし夜の苦しかりしぞ今は戀しき

題しらず　攝政右大臣

をしみかねげに言ひしらぬ別れかな月もいまはのありあけの空

右近大將實房

○かからましかば　戀しい人も亦かやうに涙と同じく絶えないでくれたらなア。

○なみだか　「か」は感動の助詞。

○うきぬなは　浮蓴。「ぬなは」は蓴菜。これまでは「こひぢ」を云ひ起す序。
○こひぢ　戀路―泥。

○みるめ　海松―見る目。
○うらみ　浦見―恨み。

○たえたる　一本「たえぬる」

○苦しかりしぞ　苦しかつたことか。

戀ひわぶる心はそらにうきぬれど涙のそこに身は沈むかな

隔關路戀といへる心をよめる　　前中納言雅頼

思ひかね越ゆる關路に夜をふかみ八聲の鳥にねをぞそへつる

九月つごもりに女につかはしける　　權中納言通親

世にしらぬ秋のわかれにうち添へて人やりならずものぞ悲しき

戀の歌とてよめる　　藤原經家朝臣

契りしにあらずなるとの濱千鳥跡だに見せぬうらみをぞする

藤原定家

しかばかり契りし中も變りけるこの世に人を頼みけるかな

秋夜戀といへる心をよめる　　顯昭法師

秋の夜をもの思ふことのかぎりとはひとり寐ざめの枕にぞしる

十首の歌人のよませ侍りける時よめる　　前參議教長

よしさらば君に心はつくしてむまたも戀しき人もこそあれ

暮戀故人といへる心を　　仁和寺後入道法親王覺性

なき人を思ひ出でたる夕ぐれは恨みしことぞくやしかりける

題しらず　　源俊頼朝臣

○しづむ　上の「ゐきぬれど」に對する。

○夜をふかみ　夜が深いので。

○八聲の鳥　數多く鳴く鳥の聲。鷄の聲。

○ね　音—泣。

○世にしらぬ秋のわかれ　九月盡のことは世に知られてゐるが我が身に祕められた別れ。

○なると　阿波國の鳴門。上から契つたやうにもあらずなる意味を云ひ懸く。

○しかばかり　さほどに。

○かぎり　極限。

○つくしてむ　つくし果てよう。

○またも戀しき人もこそあれ　又人を戀して苦しむこともあらうから。

これを見よ六田(むつた)のよどにさでさしてしをれし賤の麻衣かは

笹めかるあれ田の澤にたつ民も身のためにこそ袖もぬるらめ

馬内侍

笹の葉に霰ふる夜の寒けきにひとりは寢なむものとやは思ふ

和泉式部

うらむべき心ばかりはあるものをなきになしても訪はぬ君かな

○六田のよど　大和國吉野郡。
○さで　叉手網。魚をすくひ取る網。
○しをれし賤の麻衣かは　水で萎れた賤の麻の衣ではなく、我が涙で濡れた袖ですよ。
○民も身のためにこそ袖もぬるらめ　民も自分の身の爲に袖も濡れるでせうが、私の袖は君の爲に濡れます。
○ひとりは寢なむものとやは思ふ　獨寢するものとは思はない。相手の來ないのを恨む心持。
○なきになして　一向に自分をないものに見なして。

千載和歌集　巻第十六

雑歌上

上東門院より六十賀おこなひ給ひける時よみ侍りける　法成寺入道前太政大臣

かぞへしる人なかりせばおく山の谷の松とや年をつままし

上東門院入内の時御屏風に松ある家に笛ふきあそびしたる人ある所をよみ侍りける　大納言齊信

笛竹のよふかき聲ぞきこゆなる峯のまつかぜ吹きやそふらむ

一條院の御時皇后宮五節奉られける時辰の日かしづき十二人わらは下づかへまで青摺をなむ著せられたりけるに兵衞といふが赤紐のとけたりけるをこれ結ばばやといふを聞きて中將實方朝臣よりてつくろふとて足びきの山井の水はこほれるを如何なるひものとくるなるらむと言ふを聞きて返事によみ侍りける　皇后宮清少納言

うは冰あはに結べるひもなればかざす日影にゆるぶばかりぞ

十二月ばかりに門をたゝきかねてなむ歸りにしと恨みたりける男としか

○かぞへしる人　六十歳の賀であることを數へ知る人。上東門院を指す。
○谷の松と　谷の松と共に。
○よふかき　竹のよの深き―夜の深き。
○五節　五節の舞。
○辰の日　豊明節會の日。
○かしづき　五節の舞姫の傅。
○青摺　青摺の衣。
○足びきの歌　後拾遺集卷十九に見える。「山井」に「山藍」を「冰も」に「紐」を云ひ懸く。
○うは冰　枕草子には「薄ごほり」とある。
○あはに　淡に。淡く。
○ひも　冰も―紐。
○日影　日光―日陰かづら。
○としかへりて　年が改まつて。

へりて門はあきぬらむやといひて侍りければ遣はしける　　上東門院紫式部

たが里の春のたよりにうぐひすの霞にとづるやどを訪ふらむ

藤原實方朝臣のとのゐ所にもろともに臥して曉かへりて朝につかはしける　　藤原道信朝臣

いもと寢ておきゆく朝の道よりもなか〳〵ものの思はしきかな

二月ばかり月のあかき夜二條院にて人々あまたゐあかして物語などし侍りけるに內侍周防よりふして枕をがなと忍びやかにいふを聞きて大納言忠家これを枕にとてかひなをみすの下よりさし入れて侍りければよみ侍りける　　周防內侍

春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそをしけれ

といひ出し侍りければ返事によめる　　大納言忠家

契りありてはるの夜ふかき手枕をいかゞかひなき夢になすべき

一條院御時皇后宮に清少納言はじめて侍りける頃三月ばかりに二三日まかり出で侍りけるにかの宮よりつかはされて侍りける　　皇后宮定子

いかにして過ぎにし方を過しけむ暮しわぶてふ昨日今日かな

御かへし　　清少納言

○たが里の春のたよりに　誰の里を訪うた春のついでに。

○なか〳〵　却って。

○夢ばかりなる　夢ほどの。
○かひなく　效なく―腕。

○契りありて　すでに君とは契りがあって。相手をいやがらせに斯う云ったと見る方がよいだらう。

○過ぎにし方　過去。
○昨日今日かな　昨日今日の過しわびるつらさよ。

雲の上もくらしかねたる春の日を所がらともながめつるかな

いぶかしく覺されける人のむすめの女房のつぼねにゆかりありて忍びて
方違（かたゞへ）にまゐれりけるを曉とく出でにければ遣はしける　　選子内親王

あひ見むと思ひしことをたがふればつらき方にもさだめつるかな

選子内親王に侍りける右近後の齋院にまゐりて御禊のいだし車にのると
聞きて又の日つかはしける　　齋院中將

みそぎせし鴨の川波立ちかへりはやく見しせに袖はぬれきや

祭のつかひにて神だちの宿所より齋院の女房につかはしける　　藤原實方朝臣

ちはやぶるいつきの宮の旅寢にはあふひぞくさの枕なりける

彈正尹爲尊のみこかくれ侍りて後太宰帥敦道のみこ花たち花をつかはし
ていかゞ見るといひて侍りければ遣はしける　　和泉式部

かをる香によそふるよりは郭公きかばや同じ聲やしたると

上西門院賀茂のいつきと申しけるをかはらせ給ひて唐崎にはらへし給ひ
ける御ともにて女房のもとにつかはしける　　八條前太政大臣

昨日までみたらし川にせしみそぎ志賀の浦波たちぞかはれる

賀茂のいつきかはり給うてのち唐崎のはらへ侍りけるまたの日雙林寺の

○雲の上も　雲上。皇后を指す。
○所がらとも　自分が里で暮しかねたのも場所がらだとゆつくり詠め暮しました。
○いぶかしく　ゆかしく。
○たがふれば　違へたので。
○つらき方に　その方角はつらい方と。
○御禊のいだし車　毎年賀茂の祭の前に午日に齋院が禊した時その供奉の女房の乘つた車。
○後の齋院　選子内親王より後の齋院。馨子内親王か。
○はやく見しせ　選子内親王に仕へた時のことを云ふ。
○あふひ　葵—逢ふ日。
○同じ聲やしたると　同じ聲がしたかと。爲尊親王と敦道親王とは御兄弟であるといふ心持から。
○みたらし川　賀茂の社の傍を流れる川。
○志賀の浦波　賀茂の齋院が下りられる時は必ず志賀の唐崎（近江國）で祓されたから。

○八年まで　伊通は右兵衛督で八年あつたので云ふ。それは武官なので弓箙を負ふので借りたのだが今返したのである。

○上卿　節會、祭事などに事を奉行する長官。○忍摺　忍ぶもぢずり。奥州の信夫地方から出た亂れ模樣の帛。

○昨日見しの歌　伊勢物語に「春日野の若紫の摺衣忍ぶの亂れ限り知られず」○箏つたへにまうでむ　箏を傳授されに參り出ませう。○よもぎがもと　紫式部自身の家を云ふ。○蟲の音　箏の琴を云ふ。

みこのもとより昨日は何事かなど侍りけるかへり事につかはされ侍りける

式子内親王

御手洗やかげたえはつる心地して志賀の波路に袖ぞぬれこし

右兵衛督に侍りけるとき中院右大臣中納言に侍りけるに弓をかりおきて侍りけるをつかさ辭し申してこもりゐ侍りける時かの弓をかへしおくるとて添へてつかはし侍りける

大宮前太政大臣

八年まで手ならしたりし梓弓かへるをみるに音ぞなかれける

かへし

中院右大臣

なにかそれおもひ捨つべきあづさ弓また引きかへす時もありなむ

右大將兼長春日の祭の上卿に立ち侍りけるともに藤原範綱が子清綱が六位に侍りけるに忍摺の狩衣をきせて侍りけるををかしく見えければ又の日範綱がもとにさし置かせける

左京大輔顯輔

昨日見ししのぶもぢずり誰ならむ心のほどぞかぎり知られぬ

上東門院に侍りけるを里に出でたりける頃女房のせうそこのついでに箏つたへにまうでむといひて侍りければ遣はしける

紫式部

露しげきよもぎがもとの蟲の音をおぼろげにてや人のたづねむ

二條院の御時とし頃おほうちまもる事をうけたまはりて御垣のうちに侍りながら昇殿はゆるされざりければ行幸ありける夜月のあかかりけるに女房のもとに申し侍りける　　従三位頼政

ひと知れぬ大内山のやまもりは木がくれてのみ月を見るかな

三條の女御琮子遁世の後あふぎがみに月いだしてつかはし侍るとて添へて侍りける　　權中納言實綱

秋をへてひかりを增せと思ひしにおもはぬ月の影にもあるかな

月爲友といへる心を　　仁和寺後入道法親王

とふ人に思ひよそへてみる月のくもるはかへる心地こそすれ

月の歌あまたよませ侍りける時よみ侍りける　　法性寺入道前太政大臣

さゝなみやくにつみ神のうらさびてふるき都に月ひとりすむ

天の原そらゆく月は一つにてやどらぬ水のいかでなからむ

題しらず　　中務卿具平親王

ひとりゐて月をながむる秋の夜はなに事をかは思ひのこさむ

赤染衛門

もの思はぬ人もや今宵ながむらむ寐られぬまゝに月を見るかな

○昇殿　殿上に昇ること。

○大内山　宮中を山に擬へて云ふ

○木がくれて　地下(ヂゲ)で昇殿せずにの意味を云ひ含めてゐる。

○あふぎがみに月いだして　扇の地紙に月の出た繪を描いて。

○ひかりを增せ　威光を增せ。

○おもはぬ　思ひがけぬ。遁世をしたことを指す。

○ふるき鄕　志賀は舊く天智天皇時代の都であつた。

○やどらぬ　月光の宿らない。

○なに事をかは思ひのこさむ　何事を思ひ殘すことがあらうや。ちぢに心を盡すので思ひ殘す所もないの意味。

○もの思はぬ人　物思ひのない人

相摸

ながめつゝ昔も月は見しものをかくやは袖のひまなかるべき

和泉式部

ひとりのみ哀れなるかとわれならぬ人にこよひの月を見せばや

思ふこと侍りける頃月のいみじくあかく侍りけるによみ侍りける　　久我内大臣

かくばかりうき世の中の思ひ出に見よともすめる夜半の月かな

山家月といへる心をよみ侍りける　　皇太后宮大夫俊成

住みわびて身をかくすべき山里にあまりくまなき夜半の月かな

百首の歌奉りけるとき月の歌とてよめる　　前參議親隆

播磨がた須磨の月よみそらさえて繪島がさきに雪ふりにけり

月の歌十首よみ侍りける時　　藤原家基

さよ千鳥ふけひの浦におとづれて繪島が磯に月かたぶきぬ

俊惠法師

いかだおろす清瀧川にすむ月は棹にさはらぬこほりなりけり

賀茂成保

天の原すめるけしきは長閑にてはやくも月の西へゆくかな

○かくやは袖のひまなかるべき　かやうに袖の干る間のない筈があらうか。

○ひとりのみ　自分獨りばかり。

○すめる　澄める―住める。

○月よみ　月の神。こゝは月のこと。

○繪島がさき　淡路國津名郡。

○ふけひの浦　和泉國泉南郡。「夜の更け」を云ひかく。

○清瀧川　山城國葛野郡。

顯昭法師

寂しさにあはれもいとゝまさりけりひとりぞ月は見るべかりける

藤原清輔朝臣

今よりは更けゆくまでに月は見じそのこととなく涙落ちけり

年頃修行にまかりありきけるが歸りまうで來て月前述懷といへる心をよめる　登蓮法師

もろともに見し人いかになりにけむ月は昔にかはらざりけり

都をはなれて遠くまかる事侍りけるとき月を見てよみ侍りける　法印靜賢

あかなくにまたもこの世にめぐりこば面がはりすな山の端の月

月の歌あまたよみ侍りける時いさよひの月の心をよめる　源仲正

果(はか)なくも我がよのふけを知らずしていさよふ月を待ちわたるかな

見月戀故人といへる心をよめる　源仲綱

さきだちし人はやみにや迷ふらむいつまで我も月を眺めむ

百首の歌奉りけるとき月の歌とてよめる　待賢門院堀河

殘りなく我がよふけぬと思ふにもかたぶく月にすむこゝろかな

從一位藤原宗子やまひ重くなりて久しくまゐり侍らで心細きよしなど奏

○更けゆくまでに月は見じ　ちゞの思ひが起るから更け行くまで月は見まい。

○そのことゝなく　何の事といふこともなく。

○あかなくに　飽かない故。

○我がよ　夜―齡。

○いさよふ月　出ようとして出やらぬ月。萬葉集卷七に「山のはにいさよふ月を出でむかと待ちつゝ居るに夜ぞくだちける」

○すむ　澄む―住む。

せさせて侍りけるに遣はしける　　近衛院御製

うき雲のかゝるほどだにあるものをかくれな果てそ有明の月

箕面の山寺に日頃こもりて出で侍りけるあかつき月のおもしろく侍りければよめる　　仁和寺後入道法親王覺性

木の間もるありあけの月の送らずばひとりや山のみねを出でまし

月の歌とてよみ侍りける　　道性法親王

琴の音を雪にしらぶときこゆなり月さゆる夜の峯のまつかぜ

權中納言長方

あかで入らむなごりをいとゞ思へとや傾くまゝにすめる月かな

殷富門院にて人々百首の歌よみ侍りけるとき月の歌とてよめる　　藤原定家

いかにせむさらで憂世はなぐさまずたのみし月も涙おちけり

題しらず　　藤原家隆

山ふかき松のあらしを身にしめて誰かねざめに月をみるらむ

八條院六條

まつ程もいとゞこゝろぞなぐさまぬ姨捨山のありあけの月

法師實修

○うき雲のかゝるほどだにあるものを　浮き雲(病氣に譬ふ)のかゝる程でさへ心苦しいものを。
○かくれな果てそ　隱れ果てるなよ。月を藤原宗子に譬ふ。
○箕面　攝津國豐能郡。

○琴の音　峯の松風の音を云ふ。

○さらで　さうでなくても。
○たのみし月も　心慰むかと頼みにした月を見ても。

○こゝろぞなぐさまぬ　古今集卷十七に「我が心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」

世をいとふ心は月をしたへばや山の端にのみおもひ入るらむ　藤原隆親

さびしさも月見るほどはなぐさみぬ入りなむ後をとふ人もがな

寒夜月といへる心をよみ侍りける　圓位法師

霜さゆる庭の木の葉をふみ分けて月は見るやととふ人もがな

世をのがれて後西山にまかりこもるとて人につかはしける　平實重

住みなれし宿をば出でて西へゆく月をしたひて山にこそいれ

故郷月をよめる　俊惠法師

ふるさとの板井のしみづ水草ゐて月さへすまずなりにけるかな

水上月といへる心を　藤原家基

さもこそは影とゞむべきよならねど跡なき水に宿る月かな

賀茂社後番歌合に月の歌とてよめる　藤原親盛

何となくながむる袖のかわかぬは月のかつらの露やおくらむ

山家曉霰といへる心をよめる　大江公景

ましばふくやどの霰に夢さめて有明がたの月を見るかな

山家月をよめる　靜蓮法師

○したへばや　慕ふからか。

○板井　板で圍つた井。古今集卷二十に「我が門の板井の清水里遠み人し汲まねば水草ゐにけり」

○さもこそは影とゞむべきよならねど　誰とてもさやうには影を此の世にとゞむべきではないが。

○月のかつら　月中には桂の木があるといふ信仰が支那から入つてゐた。

○ましばふく　柴を屋根に葺く。

○山の端　月の出る所を云ふ。

○まや　兩方に破風を設けて兩側に雨を落すやうに葺き下した屋造り。

○のちに　一本「あさに」

○六十　六十歳。

あしびきの山の端ちかくすむとても待たでやは見るありあけの月

月照寒草といへる心をよめる　紀康宗

もろともに秋をやしのぶ霜枯のをぎの上葉をてらす月かげ

月照山水といへる心を　法眼長眞

ますげ生ふる山下水にやどる夜は月さへ草のいほりをぞさす

山の端の月といへる心をよめる　藤原爲忠

ふかき夜の露ふきむすぶこがらしに空さえのぼる山の端の月

荒屋月といへる心を　覺延法師

山風にまやのあしぶき荒れにけりまくらにやどる夜半の月かげ

題しらず　法印慈圓

山ふかみ誰またかかるすまひして槇の葉わくる月を見るらむ

月かげのいりぬるのちに思ふかな迷はむやみの行くゑの空

攝政前右大臣の家に百首の歌よませ侍りけるとき月の歌の中によめる　俊惠法師

この世にて六十(むそぢ)はなれぬ秋の月しでの山路もおもがはりすな

月の歌とてよめる　圓位法師

來む世には心の中にあらはさむ飽かでやみぬる月のひかりを　皇太后宮大夫俊成

二條院の御時四代まで侍臣なる事をおもひてよみ侍りける

いかなれば沈みながらに年をへて代々の雲居の月をみるらむ　藤原基俊

堀河院の御時百首の歌奉りけるとき述懷の心をよめる

唐國に沈みし人もわが如くみよまで遇はぬなげきをばせし

僧都光覺維摩會の講師の請を申しけるをたび〳〵漏れにければ法性寺入道前太政大臣に恨み申しけるをしめぢがはらと侍りけれど又その年も漏れにければ遣はしける

ちぎりおきしさせもが露を命にてあはれ今年の秋もいぬめり　源俊頼朝臣

運を恥づる百首の歌よみ奉りける中によめる

世の中のありしにもあらずなりゆけば涙さへこそ色變りけれ　覺審法師

述懷の心をよめる

すぎ來にしよそぢの春の夢の世は憂きより外のおもひ出ぞなき　經因法師

果なしや憂き身ながらも過ぎぬべき此の世をさへも忍びかぬらむ

天王寺にまうでて侍りけるに長柄にてこゝなむ橋のあとと申すを聞きて

○心の中に　心月輪の意味。
○沈みながらに　崇德、近衞、後白河、二條の四代に仕へて上達部にならないまゝで。
○代々の雲居　四代の帝居。
○唐國に沈みし人　漢武故事に、「上至二郎署舍一見二一老郎鬢眉皓白一、問何時爲レ之、對曰臣姓名駟、文帝時爲二郎文一、帝好老而臣尚少、陛下好少而臣已老、是以三葉不レ遇也、上感二其言一擢爲二會稽都尉一。」と見える。
○光覺　基俊の子。
○しめぢがはら　古歌に「唯頼めしめぢが原のさしも草われ世の中に在らむ限りは」とあるのによつて我を頼めの意味で云つたのだ。
○させもが露を命にて　さしも草の露の御言葉を命にして。
○あはれ　あゝ。
○いぬめり　往くやうです。
○ありしにもあらずなりゆけば　昔あつたやうでもなくなつて行くので。
○よそぢ　四十。
○憂き身ながらも過ぎぬべき　憂き身でありながらも過し得べき。
○天王寺　攝津國の四天王寺。
○ながらの橋　長柄に「長らふ」の意味を云ひ懸く。

よみ侍りける　　源俊頼朝臣

ゆく末を思へばかなし津の國のながらの橋も名はのこりけり

長柄の橋のわたりにて　　道命法師

何事もかはり行くめる世の中に昔ながらの橋ばしらかな

おなじ所にて　　道因法師

今日見ればながらの橋は跡もなし昔ありきと聞きわたれども

津守國基身まかりてのち住吉にもすまずなりにけるを有基に具してあからさまに下りてはべりけるに人の心もかはりて見えはべりければ松のもとを削りて書きつけ侍りける　　津守景基

人ごゝろあらずなれども住吉の松のけしきは變らざりけり

吉野の瀧をよめる　　中納言經忠

白雲にまがひやせまし吉野やま落ちくる瀧のおとなかりせば

さがの大覺寺にまかりてこれかれ歌よみ侍りけるによみ侍りける　　前大納言公任

瀧の音はたえて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞えけれ

屏風に瀧落ちたる所をよめる　　藤原長能

○むかしながらの　「昔のまゝ」の意味に「長柄」を云ひ懸く。

○身まかりて　死歿して。
○具して　伴つて。
○あからさまに　假初に。
○人ごゝろあらずなれども　人心は昔のやうではなくなつたけれど。

○白雲にまがひやせまし　瀧を白雲と見紛ひするだらうに。

○瀧の音はの歌　拾遺集卷八に見える。

ぬけば散るぬかねばみだる足引の山よりおつる瀧のしらたま

京極前太政大臣布引の瀧見侍りける時よみ侍りける　　六條右大臣

水のいろのたゞ白雲と見ゆるかな誰さらしけむぬのびきの瀧

龍門寺にまうでて仙室に書きつけ侍りける　　能因法師

あしたづにのりて通へる宿なればあとだに人は見えぬなりけり

おなじ龍門の心をよめる　　藤原清輔朝臣

やまびとの昔のあとを來て見ればむなしき牀をはらふ谷風

布引瀧をよめる　　藤原良清

音にのみ聞きしはことのかずならで名よりもたかき布引の瀧

むろのやしまをよめる　　藤原顯方

たえずたつ室の八島の煙かな如何につきせぬおもひなるらむ

堀河院の御時百首歌奉りけるとき橋の歌とてよみ侍りける　　大納言師頼

かづらきや渡しも果てぬもの故にくめの岩橋苔生ひにけり

おなじ御時うへのをのこども題をさぐりて歌つかうまつりけるに釣舟を
とりてよみ侍りける　　權中納言俊忠

いかりおろす方こそなけれ伊勢の海の潮瀬にかゝる蜑(あま)のつり舟

○ぬけば　緒に貫けば。
○しらたま　白い水玉。
○誰さらしけむ　誰が晒したのだらう。次の「布」に續く。
○ぬのびきの瀧　攝津國武庫郡。
○あしたづにのりて　鶴は仙人の乘物なので云ふ。
○やまびとの歌　朗詠集に山中有二仙室一の菅三品の詩に「石牀留洞嵐空拂。」とある意味。
○名よりも　名聲よりも。
○室の八島　下野國。既に度々見えた。
○かづらきやの歌　役行者が大和國の葛城神に命じて葛城山から金峯山に岩橋を架けさせたといふ傳說によつた歌。
○いかり　一本「いは」。碇は重い石で舟を停泊させる爲に重しに用ゐる石。

○いらこがさき　參河國渥美郡。
○野島がさき　淡路國。
○廣田社　攝津國武庫郡。
○見えずなるを　「見えずなる」に鳴尾（攝津國）を云ひかく。
○おまへの沖　攝津國武庫郡。
○波のかく　寄せ懸く―描く。

百首の歌の中に松をよめる　修理大夫顯季

玉藻かるいらこがさきの岩根松いくよまでにか年のへぬらむ

夏草をよめる　源俊頼朝臣

潮みてば野島がさきの小百合葉に波こす風の吹かぬ日ぞなき

廣田社の歌合とて人々よみ侍りけるとき海上眺望といへる心をよみ侍りける　權大納言實家

今日こそは都のかたの山の端も見えずなるをの沖に出でけれ

權中納言實宗

播磨がた須磨のはれまに見渡せば波は雲居のものにぞありける

右衛門督頼實

はるばるとおまへの沖をみわたせば雲居にまがふあまの釣舟

眺望の心をよめる　圓玄法師

なにはがたしほ路はるかに見わたせば霞にうかぶ沖のつりぶね

藤原重綱

春がすみ繪島が崎をこめつれば波のかくとも見えぬ今朝かな

和歌浦をよみ侍りける　祝部宿禰成仲

○わかの浦　和歌の浦(紀伊國)に若い意味をいひ懸く。

ゆく年は波とともにやかへるらむ面がはりせぬわかの浦かな

千載和歌集　卷第十七

雜歌中

五十御賀過ぎて又の年の春鳥羽殿の櫻のさかりに御前の花を御覽じてよませ給うける　鳥羽院御製

心あらばにほひを添へよさくら花のちの春をばたれか見るべき

落花の心をよみ侍りける　仁和寺後入道法親王覺性

はかなさを恨みもはてじ櫻花うき世はたれも心ならねば

僧都賴實身まかりて後またの年の春禪定院の花さかりなるを見てよみ侍りける　僧正寺範

宿もやど花もむかしに匂へどもぬしなき色は寂しかりけり

かしらおろして後東山の花見ありき侍りけるに圓城寺の花おもしろかりけるを見てよみ侍りける　前中納言基長

いにしへにかはらざりけり山ざくらはなは我をばいかゞ見るらむ

遁世の後はなの歌とてよめる　皇太后宮大夫俊成

○のちの春をば誰か見るべき　來年の春をば誰が見ると定まつて居らうか。「見る」一本「知る」

○心ならねば　心のまゝでないから。

○宿もやど　宿も昔の宿で。

○我をば　我が變つた姿をば。

○雲のうへ　宮中。
○花は數にも　花は私を數とも。

○山路をふかみ　山路が深いので

○住まなくに　住まないのに。
○谷の戸をの歌　拾遺集卷十六には「右衞門督公任こもり侍りける頃、四月一日に云ひ遣はしける。左大臣」として載せられて結句は「春や過ぎぬる」となつてゐる。法性寺は法成寺の誤りで、藤原道長のことであらう。
○かくてだに　かやうに君が來た夜でさへ。
○おもひ知らなむ　思ひ知つて下さい。
○除目　大臣以外の諸臣の任官式
○つかさ　官職。

雲のうへの春こそさらに忘られね花は數にもおもひいでじを

石山にたび／＼詣で給ひけるをはてのたび關の清水のもとに御車とゞめてこのたびばかりやと心ぼそく御覽じてよませ給うける　東三條院

あまたたび行きあふ坂の關水に今はかぎりの影ぞかなしき

山にのぼりてしばし行ひなどし侍りける時よみ侍りける　前大納言公任

今はとて入りなむ後ぞおもほゆる山路をふかみ訪ふ人もなし

春の頃あはたにまかりてよめる

うき世をば峯のかすみやへだつらむなほ山ざとは住みよかりけり

數くこと侍りける頃よめる　和泉式部

花さかぬ谷のそこにも住まなくに深くもものを思ふ春かな

前大納言公任長谷(ながたに)といふ所にこもりゐける時つかはしける　法性寺入道前太政大臣

谷の戸をとぢやはてつる鶯のまつにおとせではるの暮れぬる

山寺にこもりて侍りけるころ雨降りて心細かりけるに人のまうできて歌などよみけるついでによめる　道命法師

かくてだになほ哀れなるおく山に君こぬよゝをおもひ知らなむ

除目(ぢもく)の頃つかさ給はらで歎き侍りける時範永がもとに遣はしける　大江公資

○年ごとに　毎年の除目に拜任せず。
○散るを見て　我が我執の心のないのを見て。
○人とぶらはば　人が弔つてくれるならば。
○おもひはかへす　思ひ返す。
○櫻花　一本「山櫻」
○むなしき色に　空なる迷ひに。
○常なきもの　無常なもの。

年ごとに涙の川にうかべども身はなげられぬものにぞありける

寄霞述懷の心をよめる　源仲正

思ふことなくてや春をすごさましうき世へだつる霞なりせば

世をのがれて後白河の花を見てよめる　圓位法師

散るを見て歸るこゝろや櫻花むかしにかはるしるしなるらむ

花の歌あまたよみ侍りける時

花にそむ心のいかで殘りけむ捨て果ててきとおもふわが身に

佛には櫻の花をたてまつれわがのちの世を人とぶらはば

世をそむきて又の年の春花を見てよめる　寂然法師

この春ぞおもひはかへす櫻花むなしき色に染めしこゝろを

題しらず

世の中を常なきものと思はずばいかでか花のちるに堪へまし

都うつりなど聞えける又の年の春白河の花ざかりに女の手にて花の下におとしおきて侍りける　讀人しらず

かくばかり憂世の末にいかにして春はさくらの猶にほふらむ

花ざかりに法成寺にまゐりて金堂のまへの花ちるを見てよみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

ふりにけり昔を知らばさくら花ちりの末をもあはれとは見よ

依花待客といへる心をよめる　　源定宗朝臣

やまざくら花をあるじと思はずば人をまつべき柴の庵かは

圓位法師がすゝめ侍りける百首の歌の中に花の歌とてよめる　　藤原定家

いづくにて風をも世をもうらみまし吉野の奥も花は散りけり

花の歌とてよめる　　源季廣

深く思ふことし叶はばこむ世にも花見る身とやならむとすらむ

家に櫻をうゑてよみ侍りける　　源師教朝臣

老が世に宿に櫻をうつし植ゑてなほこゝろみに花をまつかな

高倉院春宮の御時權亮に侍りけるを參議にてほどへ侍りける頃賀茂社の歌合とて人々よみ侍りけるに述懐の歌とてよみ侍りける　　權中納言實守

くらゐやま花をまつこそ久しけれ春の都にとしは經しかど

崇德院の御時十五首歌奉りけるとき述懐の心をよみ侍りける　　右兵衛督公行

春日山まつにたのみをかくるかな藤の末葉のかずならねども

歎くこと侍りける頃よみ侍りける　　前左衛門督公光

○ふりにけり　一本「ふりにけむ」
○ちりの末　散り―塵。俊成は道長の五代の末流なので云ふ。

○いづくにて…恨みまし　どこに行つて恨みませうか。
○吉野の奥も　吉野の奥でも。

○こむ世　來世。

○こゝろみに　老いた身で明日をも分らないが、ひよつとして長らへ居るかと試みに。

○くらゐやま　位階を山に喩へてゐる。

○春の郷　「春宮」を云ひかけてゐる。
○藤の末葉　藤原氏の末流。

もの思ふ心や身にもさきだちてうき世を出でむしるべなるべき

述懷の歌とてよめる　　俊惠法師

數ならで年へぬる身は今さらに世をうしとだに思はざりけり

　　道因法師

述懷の歌よみ侍りけるとき昔白河院につかうまつりける事を思ひ出でてよめる　　藤原家基

いつとても身のうき事はかはらねど昔は老を歎きやはせし

廣田社の歌合によめる　　藤原盛方朝臣

いにしへも底にしづみし身なれどもなほ戀しきは白河の水

右大將實房中將に侍りける時十首歌よませ侍りけるに述懷歌とてよめる　　中原師尙

あはれてふ人もなき身をうしとても我さへいかゞ厭ひ果つべき

學文料申し侍りけるをたまはらず侍りける時人のとぶらへるかへり事によみて遣はしける　　大江匡範

數ならぬ身をうきぐもの晴れぬかなさすがに家の風はふけども

おもひやれとよにあまれる燈火のかゝげかねたる心ぼそさを

○數ならで　人數でなくて。

○昔は老を歎きやはせし　昔は老を歎いたことがあつたかい。今はこの憂さまで添はつたの意味。

○十首　一本「十五首」

○さすがに家の風はふけども　中原氏は明經の儒家であつて、師尙も大外記、四位になされたので、さすがに家風は相續しはしたが。

○學文料　昔は燈燭料として學窗の燈を掲ぼつ一晝夜大學寮で勉强したのだ。

○とよにあまれる　匡範は儒業十餘代經たことに十夜も餘つたと云ひ懸けてゐる。

○燈火のかゝげかねたる　貧しくて家業の相續し難い歎きを云ふ。

○思ひ忍ぶ　忍草を云ひかく。
○ふるや　經る—古屋。
○引く人　後援する人の意味を云ひかく。
○隙ゆく駒　早く過ぎ去る月日。漢書の張良傳「人生一世之間如白駒過隙。」と見える。
○いけらぬ物　生きてあらぬ物。
○つかさめし　京官の除目。每年春行はれた。
○みがくれて　水隱れて—身隱れて。
○思はぬ磯の波に　思ひもしない國の國守となつての意味。
○たなかみの山　近江國栗太郎。
○訪ふにつけても　み山おろしが訪ふにつけても。
○ありなしに　有るか無きかに。

題しらず

世のうさを思ひ忍ぶと人も見よかくてふるやの軒のけしきを　　藤原公重朝臣

引く人もなくて捨てつるあづさ弓こゝろづよきも甲斐なかりけり　　藤原是忠

いかで我が隙ゆく駒をひきとめて昔にかへる道をたづねむ　　一條院內侍參河

攝政右大臣のとき家の歌合に述懷の歌とてよめる　　源師光

今はたゞいけらぬ物に身をなして生まれぬ後の世にもふるかな

つかさめしに伊勢になりけるを辭し申しける時大僧正行尊がもとに遣はしける　　源俊重

いかにせむいせの濱荻みがくれておもはぬ磯の波にくちなば

たなかみの山里に住み侍りける頃風はげしかりける夜よめる　　源俊頼朝臣

槇の戸をみ山おろしにたゝかれて訪ふにつけてもぬるゝ袖かな

山田の庵にけぶりの立ちけるを見てよめる　　橘盛長

小山田の庵にたく火のありなしに立つ煙もやくもとなるらむ

堀河院の御時百首の歌奉りけるとき山家の心をよめる　　二條太皇太后宮肥後

山里の柴をり〳〵に立つけぶり人まれなりとそらに知るかな

九月(ながつき)のつごもりがたにわづらふ事ありてたのもしげなく覺えければ久しくとはぬ人につかはしける　　藤原基俊

秋はつる枯野の蟲の聲たえばありやなしやを人のとへかし

女のもとにまかりて月のあかく侍りけるに空のけしきもの心細く侍りければよみ侍りける　　藤原道信朝臣

この世には住むべき程やつきぬらむ世の常ならずものの悲しき

題しらず　　和泉式部

命あらばいかさまにせむ世をしらぬ蟲だに秋はなきにこそなけ

紫式部

數ならで心に身をばまかさねど身にしたがふは心なりけり

常よりも世の中はかなく聞えける頃さがみが許につかはしける　　藤原兼房朝臣

哀れとも誰かは我を思ひ出でむある世にだにも訪ふひともなし

前大納言公任ながたにに住み侍りける頃風はげしかりける夜の朝つかはしける　　中納言定頼

ふるさとの板間の風にねざめして谷のあらしを思ひこそやれ

○柴をり〳〵　「柴を折り」に「折折」を云ひかく。
○枯野の蟲の聲たえば　枯野の蟲のやうな自分の消息が絶えたなら
○ありやなしやを　安否を。伊勢物語に「名にし負はばいざ言問はむ都鳥我がおもふ人は有り無しやと」
○世を知らぬ蟲だに　かやうな憂世を知らない蟲でも。
○數ならでの歌　文選の歸去來賦の「既以自以心爲形役。」の心持。
○哀れとも　我が亡き後は…。
○ある世にだにも　自分が生きて世にある内にでも。

○谷風のの歌　榮華物語には「山里の谷の嵐の寒きには…」とある。
○このもと　木の本ー子の許。
○法性寺　法成寺の誤りか。道長は公任より七年前に出家した。
○取りかはし　互にやりとりして
○おなじとし　道長も公任も生まれ年が同じなので云ふ。但しこの歌は榮華物語には「後れじと契り交して著るべきを君が衣にたち後れけり」と見える。
○ちぎりしあれば　「し」は助詞。
○それながら　そのまゝながら。
○むぐら　葎。雑草の名。
○かけひ　地上に架して水を通じる樋。

かへし　　前大納言公任

谷風の身にしむごとに故郷のこのもとをこそおもひやりつれ

前大納言公任入道しはべりてながたにに侍りけるとき僧の装束法服など
おくるとて遣はしける　　法性寺入道前太政大臣

いにしへは思ひかけきや取りかはしかく著むものと法のころもを

かへし　　入道大納言公任

おなじとしちぎりしあれば君がきる法の衣をたちおくれめや

三條院かくれさせ給うて後かの院のまへを過ぎけるに松の梢はおなじさ
まにてついがき所々くづれたるにむぐらの茂りたるを見て其の内に江侍
従が侍りけるに遣はしける　　辨のめのと
　おなじとしの人になむ侍りける

むかし見し松の梢はそれながらむぐらの門をさしてけるかな

一品聰子内親王仁和寺に住みはべりける冬の頃かけひのこほりを三のみ
このもとにおくられて侍りければ遣はしける　　輔仁のみこ

山里のかけひの水のこほれるは音きくよりもさびしかりけり

かへし　　聰子内親王

山里のさびしきやどの住家にもかけひの水のとくるをぞ待つ　太皇太后宮

大納言實家のもとに三十六人集をかりて返しつかはしけるなかに故大炊御門の右大臣の書きて侍りけるさうしに書きておしつけられて侍りける

この本にかきあつめたる言の葉をわかれし秋の形見とぞ見る

かへし　權大納言實家

このもとにかく言の葉を見るたびにたのみし陰のなきぞ悲しき

高野にまうで侍りけるとき山路にてよみ侍りける　仁和寺法親王守覺

跡たえて世をのがるべき道なれや岩さへ苔のころもきにけり

述懐の心をよみ侍りける

おもひ出のあらば心もとまりなむいとひやすきは憂世なりけり

大峯とほり侍りけるとき笙の岩屋といふ宿にてよみ侍りける　前大僧正覺忠

やどりする岩屋のとこの苔筵いく夜になりぬいこそねられね

述懐の歌とてよみ侍りける　大納言宗家

身のほどをしらずと人や思ふらむかくうきながら年をへぬれば　右近中將忠良

○かけひの水のとくるをぞ待つ　暖かくなれば人が訪うてもくれようから…。
○大炊御門の右大臣　太皇太后宮や權大納言實家等の父公能のこと
○この本に　子の許に—木の本に
○かき　書き—掻き。
○言の葉　言葉—木の葉。
○たのみし陰　父のこと。
○跡たえて　憂世に跡を絶つて。
○苔のころも　僧侶の衣。
○おもひ出のあらば　樂しい思出があるならば。
○いこそねられね　寐られぬ。一本「寐こそやられぬ」

そむかばやまことの道はしらずとも憂世をいとふしるしばかりに

二條太皇太后宮別當

杣川（そまがは）におろす筏のうきながら過ぎゆくものはわが身なりけり

百首歌の中に述懐歌とてよめる　藤原定家

おのづからあればある世にながらへて惜しむと人に見えぬべきかな

攝政家丹後

うしとても厭ひもはてぬ世の中をなか／＼何におもひしりけむ

題しらず　法印倫圓

のぼるべき路にぞまよふ位山これより奥のしるべなければ

十月に重服になりて侍りける又の年の春傍官ども加階し侍りけるを聞きてよめる　中納言長方

もろびとの花さく春をよそに見てなほしぐるゝは椎しばの袖

題しらず　藤原顯方

憂き瀬にもうれしき瀬にも先にたつ涙はおなじなみだなりけり

遠き國に侍りける時おなじさまなる者どもことなほりのぼると聞えけるとき共のうちに漏れにけりと聞きて都の人のもとに遣はしける　前右兵衛督惟方

○そむかばや　憂世を背き離れたい。
○誠の道　菩提の道。
○筏の　筏のやうに。
○おのづからあればある世に　自然と長らへてあるので長らへ居る世の中に。
○なか／＼　却って。
○のぼるべき　法印以上の位に昇るべき。
○重服　重い服忌。
○傍官　傍輩。
○加階　位階の昇進。
○椎しばの袖　長方は官は中納言で位は四位だつたから云ふのであらう。
○顯方　一本「顯賢」
○憂き瀬　「瀬」とは場合の意味。一本「憂き世」後撰集卷十六に「嬉しきも憂きも心は一つにてわかれぬものは涙なりけり」
○うれしき瀬　一本「うれしき世」
○遠き國に侍りける時　遠流されてゐた時。
○おなじさまなる者ども　共に流されてゐた人。
○ことなほり　赦免されて。

この瀨にもしづむときけば涙川ながれしよりも濡るゝ袖かな

世をそむかむと思ひたちける頃よめる　　空人法師

斯くばかり憂き身なれどもすて果てむと思ふになれば悲しかりけり

心の外なることにて知らぬ國にまかりけるを事なほりて京にのぼりて後
日吉の社にまゐりてよみ侍りける　　平康頼

思ひきや志賀の浦波立ち返りまたあふみともならむものとは

述懷の歌よみ侍りける時　　登蓮法師

かくばかり憂き世の中を忍びても待つべきことの末にあるかは

修行にまかりありきける時よめる　　覺禪法師

思ひかねあくがれ出でてゆく道はあゆぐ草葉に露ぞこぼるゝ

世のつねなきことを思ひてよめる　　權僧正永縁

夢とのみこの世の事の見ゆるかなさむべき程はいつとなけれど

わづらふ事ありて雲林院なる所にまかりけるに人のとぶらへりければ遣
はしける　　良暹法師

この世をば雲の林にかどでして煙とならむゆふべをぞ待つ

題しらず　　讀人しらず

○この瀨　「この機會」の意味を云ひ懸く。
○憂き身　一本「憂世」
○知らぬ國　薩摩國の鬼界島。
○あふみ　近江―逢ふ身。
○末にあるかは　行末にあらうかい。
○あゆぐ　ゆるぐ。
○さむべき程　覺めるべき時期。
○雲の林　雲林院を云ふ。
○煙　火葬の煙。

○この世の後も　この夢のやうな世の後の世にも。

○夢にも夢を見ずばこそあらめ　夢の中にも夢見ることがあるのだから。

○思ひわかでも　思辨せずに。

○御嶽　大和國吉野郡金峯山。

憂き事のまどろむほどは忘られてさむれば夢の心地こそすれ

紫式部

何處とも身をやる方のしられねばうしと見つゝも永らふるかな

述懐百首の歌の中に夢の歌とてよめる　皇太后宮大夫俊成

うき夢はなごりまでこそ悲しけれこの世の後もなほや歎かむ

百首の歌奉りけるとき無常の心をよめる　藤原季通朝臣

うつゝをも現といかゞ定むべき夢にも夢を見ずばこそあらめ

厭ひてもなほ忍ばるゝ我が身かなふたゝび來べきこの世ならねば

上西門院兵衞

これや夢いづれか現(うつゝ)はかなさを思ひわかでも過ぎぬべきかな

花園左大臣家小大進

明日しらぬみむろの峯のねなし草何あだし世に生ひはじめけむ

前大僧正覺忠御嶽より大峯にまかり入りて神仙といふ所にて金泥法華經書き奉りて埋み侍るとて五十日ばかりとゞまりて侍りけるに房覺熊野のかたよりまかり入りけるにつけて言ひおくりける　前大納言成道

をしからぬ命ぞさらにをしまるゝ君がみやこに歸り來るまで

かへし　前大僧正覺忠

憂世をば捨てて入りにし山なれど君がとふにや出でむとすらむ

閑居水聲といへる心をよみ侍りける　仁和寺法親王守覺

岩そゝぐ水よりほかに音せねば心ひとつにすましてぞ聞く

高野に參りて侍りけるに奥の院に寂蓮法師が庵室にまかりたりけるに哀れに見えければかへりて遣はしける　權大納言實國

たれもみな露の身ぞかしと思ふにも心とまりし草の庵かな

秋の頃山に登りて横川の安樂の五僧の許にまかれりけるに正法房の障子に書き付け侍りける　藤原公衡朝臣

なほざりにかへる袂はかはらねど心ばかりぞ墨染の袖

題しらず　法印慈圓

おふけなくうき世の民におほふかなわがたつ杣にすみ染の袖

寂蓮法師

寂しさにうき世をかへて忍ばずばひとり聞くべき松の風かは

殷富門院大輔

つくづくと思へばかなし曉の寐覺も夢を見るにぞありける

○音せねば　音沙汰しないので。
○心とまりしくさの庵かな　君の草庵に心がとまつたことです。出家といふことが慕はれたの意味。
○横川の安樂　比叡山の三塔の一横川の安樂院。
○五僧　五僧坊。正法房はこの一つだといふ。
○障子　襖。唐紙。
○かはらねど　俗體のまゝだが。
○墨染の袖　墨染に籠めた意味。
○おふけなく　負ふ氣なく。身分不相應にも。
○おほふ　覆ふ。
○わがたつ杣　比叡山。傳教大師の歌に「阿耨多羅三藐三菩提の佛たち我が立つ杣に冥加あらせたまへ」
○すみ染　住み―墨染。多分慈圓が天台座主になつた時の詠歌か。
○うき世をかへて　憂世を山居に代へて。
○かは　かい。反語。
○寐覺　目が覺めても夢の世だから。

まどろみてさても止みなば如何(いか)せむ寐覺ぞあらぬ命なりける　西住法師

先だつを見るはなほこそ悲しけれ後(おく)れはつべきこの世ならねば　六條院宣旨

さまかへむと思ひたつ人のものあはれなる夕暮に箏のことひくを聞きて　二條太皇太后宮式部

いまはとてかきなす琴のはての緒の心細くもなりまさるかな

題しらず　空人法師

大井河となせの瀧に身をなげて早くと人にいはせてしがな

病ありて東山なる所に侍りけるをよろしくなりて後いかゞと人のとひて侍りける返事によめる　大江公景

鳥邊山君たづぬとも朽ちはてて苔の下にはこたへざらまし

題しらず　法眼兼覺

分けわびて厭ひし庭の蓬生も枯れぬと思へばあはれなりけり

賀茂社の歌合に述懐の歌とてよめる　寂蓮法師

世の中のうきは今こそ嬉しけれ思ひ知らずばいとはましやは

○まどろみて　一本「まどろまで」

○後れはつべき　一生生きながらへ果て得る。

○かきなす　掻き鳴らす。

○はての緒　巾の絃(琴の第十三絃)。「心細く」といふための序。

○となせの瀧　戸無瀬。山城國葛野郡。

○早くと　早くなくなつたと惜しみ。

○鳥邊山君たづぬとも　死後君が訪ねても。鳥邊山は山城國の火葬場のあつた所。

○思ひ知らずばいとはましやは　世の憂いことを思ひ知らないならば出家したらうかい。

山寺にこもりゐ侍りけるに房にとゞまりたる人のいつか出でむずると言ひて侍りければ遣はしける　　覺俊上人

世をそむき草の庵にすみ染の衣のいろはかへるものかは

源清雅九月ばかりにさまかへて山寺に侍りけるを人のとひて侍りける返事せよと申し侍りければよみて遣はしける　　源通清

思ひやれならはぬ山にすみぞめの袖に露おく秋のけしきを

題しらず　　圓位法師

あかつきの嵐にたぐふ鐘の音をこゝろの底にこたへてぞ聞く

述懷百首の歌よみ侍りけるとき鹿の歌とてよめる　　皇太后宮大夫俊成

いづくにか身を隱さまし厭ひ出でてうき世に深き山なかりせば

世の中よ道こそなけれおもひ入る山の奥にもしかぞ鳴くなる

秋の頃山寺にてよみ侍りける　　藤原良清

思ふことありあけ方の鹿の音はなほ山深くいへゐせよとや

題しらず　　藤原家隆

見るゆめの過ぎにしかたをさそひきて覺むる枕も昔なりせば

太宰大貳重家入道身まかりて後山寺懷舊といへる心をよめる　　藤原有家朝臣

○すみ染　住み―墨染。
○かへるものかは　返るものではない。「歸る」を云ひ懸く。

○たぐふ　副ふ。
○鐘の音　無常をつげる鐘の音。

○道こそなけれ　思ひ入る道はないものだ。
○しかぞ鳴くなる　鹿が物悲しく鳴いて、心を憂くさせる意味。
○いへゐ　家居を定めること。

○過ぎにしかた　過去のこと。
○覺むる枕も昔なりせば　覺めた枕も同じく昔であつたならなア。

初瀬山いりあひの鐘を聞くたびにむかしの遠くなるぞ悲しき

春の頃久我にまかれりけるついでに父のおとゞの墓所のあたりの花ちりけるを見てむかし花惜しみ侍りけるこゝろざしなど思ひ出でてよみ侍りける

権中納言通親

ちりつもる苔のしたにも櫻花をしむ心やなほのこるらむ

かしらおろし侍りて後前中納言雅頼まだ小男に侍りける時はじめて昇殿申させ侍りけるを許されて侍りければよみて奏せさせ侍りける

入道前中納言雅兼

嬉しさをかへすぐ\もつゝむべき苔の袂の狹(せば)くもあるかな

還昇(くわんしよう)して侍りける人のもとにつかはし侍りける

藤原季經朝臣

うれしさをよその袖までつゝむかなたち歸りぬるあまの羽衣

今上の御時五節のほど侍從定家あやまちある樣にきこしめす事ありて殿上除かれて侍りけるその年も暮れにける又の年のやよひのついたち頃に院におほんけしき給ふべきよし左少辨定長が許に申し侍りけるにそへて侍りける

入道皇太后宮大夫俊成

あしたづの雲路まよひし年くれて霞をさへやへだて果つべき

この由を奏し申し侍りければいとかしこく哀れがらせおましまして今は

○初瀬山　大和國の初瀬寺のある所。

○むかしの遠くなる　昔が遠ざかる。つまり鐘の鳴る度に日が暮れ行くので。

○かしらおろし　剃髮し。

○嬉しさをの歌　古今集卷十七に「嬉しさを何に包まむ唐衣袂豐かに裁てと云はましを」

○還昇　一たん殿上から地下に下りて又殿上ゆるされること。

○今上　土御門天皇。

○あしたづ　雲鶴。殿上を除かれた定家のこと。

○霞をさへ　霞の立つ春をまで。

○けふやはるらむ　今日は還昇をゆるされて心も晴れるだらう。「けふ」一本では「いま」

はや還昇仰せ下すべきよし御けしきありて心はるゝよしのかへし仰せつかはせと仰せ出されければよみて遣はしける　藤原定長朝臣

あしたづの霞をわけて歸るなりまよひし雲路けふやはるらむ

この道の御あはれびむかしの聖代にも異ならずとなむときの人申し侍りける

千載和歌集 巻第十八

雑歌下

短歌

堀河院の御時百首歌奉りけるとき述懐の歌によみて奉りける　源俊頼朝臣

もがみがは　瀬々のいはかど　わきかへり　おもふこゝろは
おほかれど　行くかたもなく　せかれつゝ　そこのもくづと
なることは　藻にすむむしの　われかれと　おもひ知らずは
なけれども　いはではえこそ　なぎさなる　かたわれぶねの
うづもれて　引くひともなき　なげきすと　なみの起ち居に
あふげども　むなしきそらは　みどりにて　言ふこともなき
かなしさに　ねをのみなけば　からころも　おさふるそでも
朽ちはてぬ　なにごとにかは　あはれとも　おもはむひとに
あふみなる　うち出のはまの　うちいでて　言ふともたれか

○もがみがは　出羽國の最上川。
○いはかど　岩角のやうに。
○おほかれど　一本「多けれど」
○そこのもくづと　堀河百首では「底のみくづ」とある。
○われから　蟲の名。それに「自分ゆゑに」の意味を云ひ懸く。
○いはではえこそなぎさなる　「云はないではあり得ない」意味を云ひ懸く。
○なげき　「歎き」に「木」を云ひ懸く。
○うち出のはまの　「うちいでて」を云ひ起す序。

○さゝがにの　蜘蛛の。次のい(蜘蛛の巣)にかゝる。
○ことをのきばに　堀河百首に「事をは軒に」とある。
○をしふべき　同書に「思ふべき」
○あづさのそま　近江國。
○せりつみし　古歌に「芹つみし昔の人も我が如く心に物のかなはざりけむ」呂氏春秋に「野人美レ芹願レ獻二之至尊一」と見える。
○くものうへ　禁中。
○つきのかつらし折られねば　月の桂が折られないので。學問の功もないので。
○うけらがはなの　朮の花のやうに。「發」を云ひ懸けてゐる。
○うつぶしそめのあさごろも　僧侶の衣。
○のちの世をだに　せめて後世をでも願はう。
○ほだしにて　束縛となつて。
○いつつのとを　五十。
○過ぎしにばかりすぐすとも　今まで過したほどの五十年を今後更に過しても。

さゝがにの　いかさまにても　かきつがむ　ことをのきばに
吹くかぜの　はげしきころと　知りながら　うはのそらにも
をしふべき　あづさのそまに　みや木ひき　みかきがはらに
せりつみし　むかしをよそに　聞きしかど　我が身のうへに
なりはてぬ　さすがに御代の　はじめより　くものうへには
かよへども　なにはのことも　ひさかたの　つきのかつらし
折られねば　うけらがはなの　咲きながら　ひらけぬことの
いぶせさに　よものやま邊に　あくがれて　このもかのもに
立ちまじり　うつふしぞめの　あさごろも　はなのたもとに
ぬぎかへて　のちの世をだに　と思へども　おもふひと〳〵
ほだしにて　行くべきかたも　まどはれぬ　かかるうき身の
つれもなく　經にけるとしを　かぞふれば　いつつのとをに
なりにけり　いま行くすゑは　いなづまの　ひかりの間にも
さだめなし　たとへばひとり　ながらへて　過ぎにしばかり
すぐすとも　ゆめにゆめ見る　こゝちして　ひまゆくこまに
ことならじ　さらにもいはじ　ふゆがれの　尾ばながすゑの

○もとのしづく　僧正遍昭の歌に「末の露本の雫や世の中に後れ先立つ例なるらむ」
○しづむべき　堀河百首に「賴むべき」
○あらそひて　はかなさを露と爭うて。
○なほふるさとに　尙經る—古里
○すみの江　「住み」を云ひ懸く。
○みくま野　「見」を云ひ懸く。
○はま木綿　濱おもと。重ねの序
○なる尾のまつ　攝津國。一本松で寂しく立つてゐるので、つれづれにと云ひ起す序。
○かきつめて　書き集めて。
○知られむ　堀河百首に「しれらむ」
○くもとりの　「あや」の序。
○實なしぐり　「うづもれむ」の序
○いく田のもりの　「いく」の序。
○海士のたくなは　「くりかへし」の序。
○こゝろに添はぬ　身の心のまゝにならぬ。
○影なれやの歌　金葉集巻九に。

つゆなれば　あらしをだにも　待たずして　もとのしづくと
なりはてむ　ほどをばいつと　知りてかは　くれにとだにも
しづむべき　かくのみつねに　あらそひて　なほふるさとに
すみの江の　しほにたゞよふ　うつせがひ　うつしごゝろも
うせはてて　あるにもあらぬ　世のなかに　またなにごとを
みくま野の　うらのはま木綿(ゆふ)　かさねつゝ　うきに堪へたる
ためしには　なる尾のまつの　つれ〴〵と　いたづらごとを
かきつめて　あはれ知られむ　行くすゑの　ひとのためには
おのづから　しのばれぬべき　身なれども　はかなきことも
くもとりの　あやにかなはぬ　くせなれば　これもさこそは
實なしぐり　くち葉がしたに　うづもれめ　それにつけても
津のくにの　いく田のもりの　いくたびか　海士のたくなは
くりかへし　こゝろに添はぬ　身をうらむらむ

反歌

世の中は憂き身にそへる影なれや思ひすつれど離れざりけり

百首歌めしける時よませ給うける　崇德院御製

○やまとのうた　和歌。
○いづものみやのやくも　素盞男尊の「八雲立つ出雲八重垣つまごみに八重垣作るその八重垣を」
○もゝくさ　百種。諸種。
○ほりかはのながれを汲みて　堀河院の百首の歌召した先例によつて。
○さゝなみの　「寄り來る」の序。
○なにはのうらの　「なに」の序。
○はづかしのもり　山城國。「恥かし」を云ひ懸く。
○たにのうもれ木　この言葉や終りの「あまごろも」「漕ぎはなれし世」などの言葉によれば堀河は出家したらしい。
○あやめ　文目。わきまへ。
○なみにたゞよふ　「訪ふ人も無み」を云ひ懸く。

しきしまや　やまとのうたの　つたはりを　聞けばはるかに
ひさかたの　あまつかみ代に　はじまりて　三十文字あまり
ひと文字は　いづものみやの　やくもより　おこりけりとぞ
しるすなる　それよりのちは　もゝくさの　ことの葉しげく
ちり〴〵に　かぜにつけつゝ　きこゆれど　ちかきためしに
ほりかはの　ながれを汲みて　さゝなみの　より來るひとに
あつらへて　つたなきことは　はま千どり　あとをすゑまで
とゞめじと　おもひながらも　津のくにの　なにはのうらの
なにとなく　ふねのさすがに　このことを　しのびならひし
なごりにて　世のひとぎきは　はづかしの　もりもやせむと
おもへども　こゝろにもあらず　かきつらねつる

おなじ百首奉りける時のなが歌　　待賢門院堀河

とき知らぬ　たにのうもれ木　朽ちはてて　むかしのはるの
こひしさに　なにのあやめも　わかずのみ　かはらぬつきの
かげ見ても　しぐれに濡るゝ　袖のうらに　しほたれまさる
あまごろも　あはれをかけて　訪ふひとも　なみにたゞよふ

○なぐさのはま　紀伊國海草郡。
○ふるのやしろ　大和國布留の社
○そのかみに　その當時に。
○もみぢのした葉　自分の和歌を謙遜して云ふ。
○おいそのもり　近江國蒲生郡。
○たづぬれど　一本「たづぬれば」
○あらし　あらし—嵐。
○みづぐき　筆蹟。
○かくれなく　一本「かぎりなく」
○をしどり　「名を惜し」を云ひ懸く。
○憂き　「鴛鴦の浮き」を云ひ懸く。

○しもつふさのかみ　下總守。

つりぶねの　漕ぎはなれにし　世なれども　きみにこゝろを
かけしより　しげきうれへも　わすれぐさ　わすれがほにて
すみの江の　まつのちとせの　はる〴〵と　こずゑはるかに
さかゆべき　ときはのかげを　たのむにも　なぐさのはまい
なぐさみて　ふるのやしろの　そのかみに　いろふかからで
わすれにし　もみぢのした葉　のこるやと　おいそのもりに
たづぬれど　いまはあらしに　たぐひつゝ　しもかれ〴〵に
おとろへて　かきあつめたる　みづぐきに　あさきこゝろの
かくれなく　ながれての名を　をしどりの　憂きためしにや
ならむとすらむ

旋頭歌

しもつふさのかみにまかれりけるを任はてて上りたりける頃みなもとの
としよりの朝臣につかはしける　源仲正

あづまぢの　やへの霞を　わけきても
君にあはねば　なほへだてたる　こゝちこそすれ

かへし　源俊頼朝臣

かきたえし　まゝの繼橋　ふみ見れば
　へだてたる　かすみもはれて　むかへるがごと

百首歌たてまつりけるとき旅の心をよめる　左京大夫顯輔

あづまぢの　野島が崎の　はまかぜに
　わがひも結ひし　いもがかほのみ　おもかげに見ゆ

折句歌

二條院のおほん時こいたじきといふ五字を句の上におきて旅のこゝろを　源雅重朝臣

駒なべていざ見にゆかむ龍田川しら波よする岸のあたりを

なもあみだの五字を句のかみにおきて旅の心をよめる　仁上法師

なにとなくものぞ悲しきあき風の身にしむ夜半の旅の寐覺は

物名

さみだれをよめる　和泉式部

○まゝの繼橋　下總國東葛飾郡。
○ふみ見れば　踏み見れば―文見れば。
○むかへるがごと　對面したやうだ。
○野島が崎　近江國。
○こいたじき　宮中の殿上にある板敷。この五文字を各句の上に用ゐて歌を詠んだのである。
○なもあみだ　南無阿彌陀。
○物名　物の名を一寸わからないやうに詠み込んだ歌。

夜の程にかりそめ人やきたりけむ淀の水薦(みこも)のけさみだれたる

すたれかは　中納言定頼

跡たえてとふべき人も思ほえずたれかは今朝の雪をわくらむ

かきのから　大貳三位

さかき葉はもみぢもせじを神がきのからくれなゐに見え渡るかな

ふりつゞみ　二條太皇太后宮肥後

池もふりつゝみ崩れて水もなしうべ勝間田にとりも居ざらむ

かるかや　源俊頼朝臣

我が駒をしばしとかるかやま城のこはたの里にありと答へよ

まゝ木のやたて

御倉やまきのやたてて住むたみは年をつむともくちじとぞ思ふ

からかみのかたき

よとともに心をかけて頼めどもわれからかみのかたきしるしか

とりはゝき　刑部卿頼輔母

秋の野に誰を誘はむ行き返りひとりははぎを見るかひもなし

百首うたたてまつりける時かくし題の歌きり〴〵す　待賢門院堀河

○かりそめ人　刈り初め人―假初人。
○かきのから　蠣の殼。
○ふりつゞみ　振つて鳴らす鼓。
○うべ　成程。
○勝間田　大和國生駒郡。
○しばしとかるか　暫し貸せとて借るか。
○こはたの里　萬葉集卷十一に「山科のこはたの山を馬はあれどかちより吾が來汝を念ひかねて」
○まゝ木のやたて　木と竹とを繼ぎ合はせた矢立。
○御倉やま　因幡國か。
○まきのやたてて　槇の屋立てて
○年を　一本「年の」
○からかみのかたき「骸(カラ)が身の堅き」か。無病堅固の意味。
○かみのかたきしるしか　神の難き驗かな。
○とりはゝき　鳥帚。
○ははぎ　「箒萩」か。

秋はきりきりすぎぬれば雪降りてはるゝ間もなき深山邊のさと　僧都有慶

みづのみ

稻荷山しるしの杉のとしふりてみつのみやしろ神さびにけり

かさぎのいはや　登蓮法師

名にし負はゞ常に萬木（ゆるぎ）の森にしもいかでかさきのいはやすく寐（ね）る

誹諧歌

花のもとにより臥してよみ侍りける　道命法師

あやしくも花のあたりにふせるかなをらば咎むる人やあるとて

卯花をよめる　源俊頼朝臣

うの花よいでことゞしかけ島の波もさこそは岩をこえしか

五月五日菖蒲をよめる　道因法師

けふかくる袂に根ざせ菖蒲草うきは我が身にありと知らずや

ともしをよめる　橘俊綱朝臣

照射（ともし）して箱根の山に明けにけりふたよりみより逢ふとせしまに

みな月のつごもりがたはたおりの鳴くをききてよめる　江侍從

○みつのみやしろ　山城國紀伊郡の稻荷神社は三座で上中下の社があるので云ふ。

○名にし負はゞ　名に負ふならば

○萬木の森　近江國。搖ぎを云ひかく。

○いかでかいはやすく寐る　なんとして眠りを安らかに寐ようか。

○をらば　折らば―居らば。

○いで　まア

○ことゞし　仰山に。

○さこそは岩をこえしか　さやうに岩を越えた。

○うき　憂き―浮沼（ウキ）。

○ふたよりみより　二寄り三寄り鹿が寄ることゝ度重なることゝ。それに箱の緣語で「蓋より身より」と云ひ懸けてゐる。

○逢ふ　「蓋と身が合ふ」意味を云ひ懸く。

夏の中ははた隠れてもあらずしており立ちにける蟲のこゑかな

題しらず　　輔仁親王

秋來れば秋のけしきも見えけるを時ならぬ身と何にいふらむ

萩の露の玉と見ゆとて折りけれども露もなかりければよめる　　藤原爲頼朝臣

朝露を日たけて見ればあともなし萩の上葉にものやとはまし

崇德院に百首歌奉りけるとき秋の歌とてよめる　　花園左大臣家小大進

つばな生ひし小野の芝生の朝露をぬき散らしける玉かとぞみる

野花をみて道にとゞまるといへる心をよめる　　僧都範玄

落ちにきと語らばかたれ女郎花こよひは花のかげに宿らむ

九月十三夜によめる　　賀茂まさひら

暮の秋ことにさやけき月影は十夜（とよ）にあまりてみよとなりけり

隔我聞他戀といへる心をよめる　　顯昭法師

板びさしさすやかや屋のしぐれこそ音し音せぬかたはわくなれ

堀河院の御時百首のうち戀歌とてよめる　　藤原基俊

笛竹のあな淺ましのよの中やありしやふしの限りなるらむ

旅　戀　　源俊頼朝臣

○はた　傍―機。
○おり立ち　下り立ち―織り裁ち
○蟲の聲　機織蟲の聲。
○時ならぬ「時節にあはぬ」に「時季でないを」を云ひ懸く。
○上葉　一本「うら葉」
○つばな　茅花。
○ぬき散らし　茅花を抜き散らし―玉を拔き散らし。
○落ちにきと　古今集卷四に遍昭の「名にめでて折れるばかりぞ女郎花我落ちにきと人に語るな」
○みよ　三夜―見よ。十三夜なので十夜に餘りて三夜となりけりと云つたのである。
○板びさしさすやかや屋　板廂をさす萱屋。
○音し音せぬ　板には音し萱には音しない。これに音沙汰するしないを云ひ懸く。
○あな　あゝ。これに笛の穴を云ひ懸く。
○よ　世―竹のよ。
○ふし　臥し―節。

したひくる戀の奴のたびにても身のくせなれや夕とゞろきは

百首歌奉りけるに戀の歌とてよめる　　待賢門院堀河

逢ふことのなげきの積る苦しさをおへかし人のこりはつるまで

六波羅密寺の講の導師にて高座にのぼる程に聽聞の女房あしをつみ侍りければよめる　　良喜法師

人の足をつむにて知りぬ我が方へふみ遣(おこ)せよと思ふなるべし

山寺にこもりて侍りけるとき心ある文を女のしば〳〵遣はし侍りければよみ遣はしける　　空人法師

おそろしや木曾のかけぢの丸木橋ふみ見るたびに落ちぬべきかな

賀茂社にこもりて侍りけるに政平つねにまうできて歌よみ笛吹きなどしてあそびける傍なるつぼねにこもりたる人をも知りてそなたへも罷りなどしけるがその人出でて後久しくまうで來ざりければ遣はしける　　心覺法師

笛竹のこちくと何におもひけむ鄰に音はせしにぞありける

あづまの方にまかりけるに八橋にてよめる　　道因法師

八橋のわたりに今日もとまるかなこゝに住むべきみかはと思へど

女をかたらひ侍りけるをいかにも有るまじき事なり思ひ絶えねといひ侍

〇夕とゞろき　夕方胸の打騷ぐこと。
〇なげき　「木」を云ひ懸く。
〇おへかし　負へよ。「かし」は强めの助詞。
〇こり　懲り—伐(コ)り。
〇つむ　つめる。
〇ふみ　文—踏み。
〇空人　一本「空仁」
〇かけぢ　崖路。
〇ふみ　踏み—文。
〇落ちぬ　隨落する意味を云ひ懸く。
〇つぼね　局。部屋。
〇こちく　胡竹—此方來(コチク)。
〇鄰に音はせし　鄰の局に訪づれた意味を云ひ懸く。つまりこちらへ來るのに鄰の局に來るのが目的だつたのだの意味。文選の思舊賦序に「鄰人有ニ吹レ笛者一發レ聲寥亮」など見える。
〇八橋　三河國碧海郡。
〇みかは　身かは—三河。

○よもわれ　よも我は君から割れようかい。
○やま烏頭は白く云々　燕の太子丹が秦に人質となつたが、歸らうとした時、秦王が「烏が頭白く、馬が角を生じたら歸さう。」と云つた故事。
○歌のかみ　歌の頭の一字。
○よみ路　歌を詠み—黄泉路（ヨミヂ）。
○午の貝　午の刻に吹く貝。
○未のあゆみ　摩訶摩耶經に「譬如下旃陀羅驅レ羊至二屠所一歩歩近中死地上人命亦如レ是。」とある意味に午の刻の次の未の刻の近づくことを云ひ懸けてゐる。
○つとめて　勤行して。

りければよめる　　安性法師

つらしとてさてはよもわれやま烏頭は白くなる世なりとも

あみだの小呪の文字を歌のかみにおきて十首よみ侍りけるにおくにかき侍りける　　源俊頼朝臣

上にをける文字はまことのもじなれば歌もよみ路を助けざらめや

山寺に詣でたりけるとき貝吹けるを聞きてよめる　　赤染衛門

今日もまた午の貝こそふきつなれ未のあゆみ近づきぬらむ

題しらず　　空也上人

極樂は遙けきほどと聞きしかどつとめていたる所なりけり

千載和歌集　巻第十九

釋教歌

維摩經十喩この身は水の泡のごとしといへる心をよみ侍りける　前大納言公任

こゝに消えかしこに結ぶ水の泡の憂世に廻る身にこそありけれ

うかべる雲のごとしといへる心を

定めなき身は浮雲によそへつゝはてはそれにぞなり果てぬべき

三身如來を觀ずる心をよませ給うける　花山院御製

世の中は皆佛なりおしなべていづれの物とわくぞはかなき

法華經藥草喩品の心をよみ侍りける　僧都源信

大空の雨はわきてもそゝがねどうるふ草木はおのがさまざま

菩提といふ寺に結緣の講しけるとき聽聞にまうでたりけるに人のもとよりとく歸りねといひたりければ遣はしける　清少納言

求めてもかゝる蓮の露をおきてうき世にまたは歸るものかは

後冷泉院の御時皇后宮に一品經供養せられけるとき壽量品のこゝろをよ

○この身は水の泡のごとし　方便品に「是身如泡不得久立。」

○うかべる雲のごとし　方便品に「是身如浮雲須臾變滅。」

○それにぞ　一本「そらにぞ」

○三身　法身、報身、應身。

○藥草喩品　佛の平等の說法が衆生の性に隨つて受ける所が同じでないのを一味の雨に諸の藥草が種種大小その潤ひを受けることが異なる如しと說いてゐる。

○結緣　佛に緣を結ぶこと。

○とく歸りね　早く歸れ。

める　藤原國房

月影のつねにすむなる山の端をへだつる雲のなからましかば

寄月念極樂といへる心をよみ侍りける　堀河入道右大臣

入る月を見るとや人は思ふらむ心をかけて西にむかへば

天王寺にまゐりて舍利ををがみ侍りてよみ侍りける　瞻西上人

薪つき煙もすみて逝にけむこれやなごりと見るぞかなしき

御嶽にまうではべりける精進のほど金泥の法華經書き奉りてかの御山にをさめたてまつらむとてまゐり侍りけるとき思ふ心や侍りけむ物に書きつけおきて侍りける　藤原敎家朝臣

夢さめむその曉をまつほどの闇をも照らせのりのともし火

かくてまうで侍りて後御山にてなむ身まかりにけるその後故郷にてこの歌を見いでて侍りけるとなむ

三十三所の觀音をがみ奉らむとて所々まゐり侍りけるとき美濃の谷汲にて油の出づるを見てよみ侍りける　前大僧正覺忠

世を照らす佛のしるしありければまだともしびも消えぬなりけり

あなほの觀音を見たてまつりて

○月影の　一本「月の影」
○山　靈鷲山。
○舍利　佛骨。
○薪つき　佛の入滅を云ふ。法華經に「如薪盡火滅。」
○御嶽　大和國の金峯山。
○精進　御嶽に詣でる爲に千日精進することを御嶽精進。
○その曉　彌勒菩薩の出世の曉。
○油の出づる　延暦年間谷汲に寺を建立した當時より、岩から油が涌き出て殿前の常燈にして來たといふ。
○あなほの觀音　丹波國桑田郡。佛師の感世が宇治宮成に殺された時觀音が身代りになつたといふ話が元亨釋書に見える。

みるまゝに涙ぞおつる限りなき命にかはるすがたと思へば

提婆品の心をよめる　　僧都覺雅

千年までむすびし水も露ばかり我が身のためと思ひやはせし

陀羅尼品の受持法華名者福不可量何況擁護具足受持といふわたりを誦して持經者の結緣たのもしくや侍りけむよみ侍りける　　前大僧正快修

うれしくぞ名をたもつだにあだならぬ御法の花にみを結びける

阿彌陀の十二光佛の御名よみ侍りける中に智慧光佛の心をよめる　　源俊頼朝臣

わびびとの心のうちをよそながら知るやさとりの光なるらむ

百首の歌めしけるとき普門品弘誓深如海の心をよませ給うける　　崇徳院御製

ちかひをばちひろの海にたとふなり露もたのまば數に入りなむ

おなじ百首のとき華嚴經の心をよめる　　前參議教長

果(はか)なくぞみよの佛と思ひけるわが身ひとつにありと知らずて

即身成佛の心を

照る月の心の水にすみぬればやがてこの身に光をぞます

法華經信解品の心をよみ侍りける　　前大僧正覺忠

歸りても入りぞわづらふ槇の戶をまどひ出でにし心ならひに

○提婆品　法華經にあり、佛が阿私仙人(今の提婆)に千年給仕して薪伐り水汲んで求法辛苦したのも皆我が身の爲ではなく衆生濟度の爲であるといふ。

○十二光佛　無量壽經に「是故無量壽佛號無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、燄王光佛、淸淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛。」とある。

○わびびと　後世を望み歎く人。

○知るや　知つて來迎引接あるのは。

○露も　露ほどの少しでも。

○みよの佛と　三世の佛とは外にあるものと。

○照る月　悟りの月。

○ます　一本「さす」

○歸りてもの歌　長者の稚子が五十餘年流浪して、父に廻りあつたが年來の貧しさに習うて、其の家に入り煩つたといふ。經に「猶處門外止宿草庵自念貧事我無此物。」

冬のころ後入道法親王高野にこもりて侍りけるにおくり給ける　崇德院御製

降る雪は谷の戸ぼそをうづむとも三世（みよ）の佛の日やてらすらむ

御返事　仁和寺後入道法親王覺性

照らすなる三世（みよ）の佛の朝日には降る雪よりもつみや消ゆらむ

百首の歌の中に法文の歌の中に普賢願の唯此願王不相捨離といへる心を　式子内親王

ふるさとをひとりわかるゝ夕にも送るは月の影とこそ聞け

百首の歌よませ侍りけるとき法文の歌に五智如來をよみ侍りけるに平等性智の心をよみ侍りける　攝政前右大臣

人ごとにかはるは夢のまどひにて覺むればおなじ心なりけり

維摩經十喩此身如水中月といへる心をよめる　宮内卿永範

すめば見ゆにごればかくる定めなきこの身や水にやどる月かげ

比叡の山に堂衆學徒不和の事出で來りて學徒皆ちりけるとき千日の山ごもりみちなむ事もちかくひじりの跡をたえむ事を歎きてかすかに山洞にとゞまりて侍りけるほどに冬にもなりにければ雪ふりたる朝に尊圓法師のもとに遣はしける　法印慈圓

○朝日　一本「光」

○普賢願　華嚴經普賢行願品に「臨命終時最後刹那一切諸根悉皆散壞一切親屬悉皆捨離一切威勢悉皆退失輔相大臣宮城內外象馬車乘珍寶伏藏如是一切無復相隨唯此願王不相捨離於一切時引導一刹那中那得從生極樂世界。」

○月の影　たゞひとり願王に從ふ彌陀一佛を月の光に譬へてゐる。この歌の下句一本「月の光こそ聞く」

○五智如來　菩提心論に「五方佛位各表一智也。」

○平等性智　同書に「南方寶生佛由成平等性智亦名灌頂智也。」

○人ごとにの歌　人每に五欲の迷ひで六道四生さま〴〵の有樣があるが、一念開悟すれば三世の諸佛の內證も同じき理であることを云ふ。

○ひじりの跡をたえむ事　傳教大師以來の相續の跡を絕やさうこと

○ふりたる　一本「ふりたりける」

いとゞしくむかしの跡やたえなむと思ふもかなし今朝のしら雪

かへし　　尊圓法師

君が名ぞなほあらはれむ降る雪に昔のあとはうづもれぬとも

法華經弟子品內祕菩薩行の心をよみ侍りける　　左近中將良經

獨りのみくるしき海を渡るとやそこをさとらぬ人は見るらむ

攝政前右大臣家に百首の歌よませ侍りけるとき法文の歌の中に般若經の心をよめる　　藤原隆信朝臣

呉竹のむなしと說けることの葉は三世の佛のはゝとこそ聞け

おなじ百首のとき色卽是空空卽是色の心をよめる　　攝政家丹後

空しきも色なるものと悟ればや春のみ空のみどりなるなむ

法華經我等長夜修習空法の心をよめる　　前中納言師仲

長き夜もむなしきものとしりぬれば早く明けぬる心地こそすれ

壽量品の心をよめる　　圓位法師

鷲の山月を入りぬと見る人は暗きにまよふこゝろなりけり

瞻西上人雲居寺の極樂堂に堀河右大臣まゐりて歌よみ侍りけるによめる　　神祇伯顯仲

○弟子品　五百弟子授記品に「內祕菩薩行外現是聲聞。」

○呉竹のの歌　大智度論「般若波羅蜜畢竟空是三世十方諸佛之母。」

○色卽是空空卽是色　般若心經の文句。

○我等長夜云々　信解品の文。

○鷲の山　靈鷲山。

いさぎよき池に影こそうかびぬれ沉みやせむと思ふ我が身を

大品經の常啼菩薩の心をよめる　　寂超法師

朽ちはつる袖にはいかゞつゝまし空しと說ける御法ならずば

維摩經十喩此の身は夢の如しといへる心をよめる　　藤原資隆朝臣

見るほどは夢もゆめとも知られねば現も今はうつゝと思はじ

登蓮法師

驚かぬわが心こそ憂かりけれはかなき世をば夢と見ながら

高野にまゐりてよみ侍りける　　寂蓮法師

あかつきを高野の山にまつほどや苔のしたにも有明の月

煩惱卽菩提の心をよめる　　式子内親王家中將

おもひとく心ひとつになりぬれば氷も水もへだてざりけり

觀音のちかひを思ひてよみ侍りける　　前大納言時忠

たのもしき誓ひは春にあらねども枯れにし枝も花ぞ咲きける

法華經序品の心をよめる　　藤原伊綱

春ごとになげきしものを法の庭ちるがうれしき花もありけり

受記品の心をよめる　　右京大夫季能

○常啼菩薩　大品般若經に「及至啼泣七夜如喪一子。」
○此の身は夢の如し　維摩經方便品に「此身如夢爲虛妄見。」
○ゆめとも　一本「ゆめとは」
○あかつき　彌勒菩薩が出世して三會をする曉。
○煩惱卽菩提　煩惱も開悟すれば卽ち菩提である。
○枯れにし枝も花ぞ咲きける。千手陀羅尼經に「此大神呪々乾枯樹尙得生枝柯葉華菓何況有識衆生身有病患治之不差者必無此延。」
○法華經序品　釋迦如來が妙法蓮華經を說かうとして靈鷲山で無量義處三昧といふ禪定に入つた時、曼陀羅花と曼珠沙華などの四種の花が降つたといふ趣を。

○漸見濕土泥云々　成佛の水を求めるのに阿含、方等、般若などは乾いた土で猶遠いが法華經は濕土泥で水に近いことを知るやうに成佛に近い。
○ほりかねの井　武藏國入間郡。
○提婆品　前に出た。
○勸持品　釋迦如來が姨の憍曇彌の憂色あるのを知つて將來の世に作佛して一切衆生喜見如來と稱すべしと授記した趣を。
○うらみける　一本「うらみつる」
○如日月光明云々　如來の滅後に此の妙法を說き廣める人は衆生の暗を滅すること日月の諸の幽かに冥い所をも照らし除くやうだ。
○勸發品　一本「普賢品」
○さらにまた　釋尊の說法は嚴王品で終つたのを、普賢菩薩が更に法華の說法を勸發して聽聞してゐると蓮華を降らし種々の音樂をしたといふ。
○くれがたの空　勸發品は二十八軸の終りなのでかう云ふ。
○滿三七日云々　勸發品の文。三七日の間、心に精進すれば我六牙の白象に乘つて現じ、說法して利益悅喜せしめよう。

水草（みくさ）のみ茂き濁りと見しかどもさても月すむ江にこそありけれ

法師品漸見濕土泥決定知近水の心をよみ侍りける　皇太后宮大夫俊成

武藏野のほりかねの井もあるものを嬉しくも水の近づきにけり

提婆品をよめる　顯昭法師

谷水を結べばうつる影のみやちとせをおくる友となりけむ

勸持品をよめる　法橋奉覺

朽ちはててあやふく見えしをばただの板田の橋も今渡すなり

藤原敦仲

うらみけるけしきや空に見えつらむ姨捨山を照らす月かげ

神力品如日月光明能除諸幽冥の心をよめる　蓮上法師

日のひかり月の影とぞ照らしけるくらき心のやみ晴れよとて

勸發品の心をよめる　皇太后宮大夫俊成

さらにまた花ぞちりしく鷲の山のりの筵のくれがたの空

滿三七日已乘六牙白象の心をよめる　中原有安

待ちいでていかに嬉しく思ふらむはつかあまりの山の端の月

雪朝聞法といふ心を　中原清重

朝まだき御法(のり)の庭にふる雪はそらより花のちるかとぞ見る

山階寺の涅槃會の暮方に遮羅入滅の昔を思ひてよみ侍りける　　惠章法師

望月の雲がくれけむいにしへのあはれを今日の空に知るかな

涅槃經の如於鏡中見諸色像の心をよめる　　俊秀法師

清くすむ心のそこをかゞみにてやがてぞうつる色もすがたも

火盛久不燃といへる心をよめる　　寂然法師

煙だにしばしたなびけ鳥邊山たち別れにしかたみとも見む

阿彌陀經の心をよめる　　平康頼

鳥の音も波の音にぞかよふなるおなじ御法を聞けばなりけり

天王寺の御幸のとき古寺忍昔といへる心をよめる　　藤原定長朝臣

世を救ふ跡はむかしにかはらねどはじめたてけむ時をしぞ思ふ

天王寺にまゐりて遺身舍利を禮してよめる　　天台座主明雲

常ならぬためしは夜半の煙にて消えぬ名殘を見るぞうれしき

往生講式かき侍りけるとき教化の歌よみ侍りける　　律師永觀

みな人をわたさむと思ふ心こそ極樂にゆくしるべなりけれ

○遮羅入滅　釋尊が遮羅雙樹の下で入滅したこと。

○火盛久不燃　罪業報應經に「水流不常滿火盛不久燃。」

○鳥の音もの歌　觀無量壽經に「如意珠玉涌出金色微妙光明其光化爲百寶色鳥和鳴哀雅常讃念佛念法念僧。」

○世を救ふ跡　聖德太子が救世の御願で四天王寺を建てられた跡。

○消えぬ名殘　佛舍利の遺つて居ることを云ふ。

○わたさむ　生死の海を悟りの彼岸へ渡し濟ふことを「わたす」といふ。

千載和歌集　卷第二十

神祇歌

後一條院の御時はじめて春日社に行幸(みゆき)ありけるに一條院の御時の例をおぼしめしいださせ給うてよませ給うける　　上東門院

三笠山さして來にけりいそのかみふるきみゆきの跡をたづねて

長元八年關白左大臣歌合し侍りけるのち左方の人よろこびに住吉に詣でて歌よみ侍りけるに左の頭にてよみ侍りける　　大納言經輔

住吉のなみも心をよせければうべぞみぎはに立ちまさりける

白河法皇熊野へまゐらせ給うける御供にてしほやの王子の御前にて人々歌よみ侍りけるによみはべりける　　後三條内大臣

思ふことくみてかなふる神なれば鹽やに跡をたるゝなりけり

百首の歌めしけるとき神祇歌とてよませ給うける　　崇德院御製

道のべのちりに光をやはらげて神の佛となのるなりけり

藤原清輔朝臣

○春日社　大和國の春日神社。藤原氏の祖神。

○さして　笠をさす意味を云ひ懸く。

○いそのかみ　「ふる」の枕詞。

○よろこび　御禮。

○うべぞ　成程。

○みぎは　汀—右。

○しほやの王子　熊野九十九王子の一。

○くみてかなふる　願人の心を酌んで成就させる。酌みてに潮を汲む意味を云ひ懸く。

○ちりに光をやはらげて　和光同塵。衆生濟度の一方便である。

○あめ　天―雨。
○さし　榊葉をさし―笠をさし。
○つもりの浦　攝津國住吉郡。
○沈みし　世に沈淪した。
○哀れしるらむ　一本「あはれと思はむ」
○とひてまし　問ひませう。
○昔もかくやすみのえの月　昔もかやうに住吉の月は澄んだか。
○ゆきあひのひま　枝をさし合うた隙。

天のしたのどけかれとやさかき葉を三笠の山にさしはじめけむ

大納言隆季

中納言家成住吉にまうでて歌よみ侍りける時よめる

神代よりつもりの浦に宮居して經ぬらむ年のかぎり知らずも

右大臣

大納言辭し申して出で仕へず侍りけるとき住吉の社の歌合とて人々よみけるに述懷の歌とてよみ侍りける

數ふれば八年經にけりあはれわが沈みしことは昨日と思ふに

そののち神感あるやうに夢想ありて大納言にも還任して侍りけるとなむ

皇太后宮大夫俊成

おなじ歌合に

いたづらにふりぬる身をも住吉のまつはさりとも哀れしるらむ

右大臣

おなじ歌合に社頭月といへる心をよみ侍りける

ふりにける松ものいはばとひてまし昔もかくやすみのえの月

俊惠法師

住吉の松のゆきあひのひまよりも月さえぬれば霜はおきけり

權大納言實國

廣田社の歌合とて人々歌よみ侍りけるとき社頭雪といへる心をよみ侍りける

おしなべてゆきのしらゆふかけてけりいづれ榊の梢なるらむ

有馬の湯に忍びて御幸ありける御供に侍りけるに湯の明神をば三輪の明神となむ申し侍ると聞きてものにかきつけて侍りける　按察使資賢

めづらしき御幸をみ輪の神ならばしるしあり馬の出湯(いでゆ)なるべし

熊野にまうでて侍りけるとき發心門の王子にてよみ侍りける　權中納言經房

うれしくもかみに誓ひをしるべにて心をおこす門に入りぬる

三輪の社にて霞をよめる　僧都範玄

杉がえを霞こむれど三輪の山かみのしるしはかくれざりけり

藏人にならぬ事をなげきて年來(としごろ)賀茂社にまうで侍りけるを二千三百度にもあまりけるとき貴布禰の社にまうでて杜にかきつけける　平實重

今までになどしづむらむきぶね川かばかり早き神をたのむに

かくて後なむ程なく藏人になり侍りける近衞院の御時なり

片岡のはふりにて侍りけるをおなじ社の禰宜にわたらむと申しける頃よみて物に書き付け侍りける　賀茂政平

さりともとたのみぞかくる木綿襷(ゆふだすき)わがかたをかの神と思へば

その後なむ禰宜にまかりなりにける

○ゆきのしらゆふ　白木綿のやうな雪。
○有馬の湯　攝津國有馬郡。
○み輪　「見る」を云ひ懸く。
○しるしあり馬　驗の有り—有馬
○出湯　溫泉。
○發心門の王子　熊野九十九王子の一。
○心をおこす門　菩提心を發（オコ）す門。發心門。
○杉がえ　三輪山は昔から杉で名高い。萬葉集にも「三諸の神の神杉」などと見える。三輪山は三室山とも云ふ。
○しるし　驗—印。
○きぶね川　山城國愛宕郡。
○かばかり早き神　貴船川の流れの樣にかほどに驗應の速かな神。
○片岡　賀茂八所の一。
○はふり　神主の一種。
○かたをか　「肩」を云ひ懸く。

百首歌の中に神祇の歌よませ給ひける　式子内親王

さりともとたのむ心は神さびてひさしくなりぬ賀茂のみづ垣

賀茂社の歌合とて人々すゝめてよみ侍りける時述懷の歌によめる　賀茂重保

君をいのる願ひを空にみてたまへわけいかづちの神ならばかみ

おなじき社の後番の歌合のとき月の歌とてよめる　皇太后宮大夫俊成

きぶね川たまちる瀬々のいはなみに冰をくだく秋の夜の月

述懷の歌の中によみ侍りける　法印慈圓

わがたのむ日よしの影はおく山の柴の戸までもささざらめやは

日吉の大宮の本地を思ひてよみ侍りける　法橋性憲

いつとなくわしのたかねに澄む月の光をやどすしがのから崎

日吉の社に御幸侍りける時あめのふり侍りけるその時になりて霽れにければよみ侍りける　中原師尚

御幸する高根のかたに雲はれて空に日吉のしるしをぞ見る

高野の山を住みうかれて後伊勢の國二見の浦の山寺に侍りけるに太神宮の御山をば神路山と申す大日如來の御垂跡を思ひてよみ侍りける　圓位法師

深くいりて神路の奥をたづぬればまたうへもなき峯のまつ風

○わけいかづちの神　賀茂の上社賀茂分雷神を祭つて居る。この神は上天したと傳へられる。
○日よしの影　日吉社の御蔭―日の影(光)。日吉社は比叡山の鎭守である。
○本地　日吉の大宮の本地は釋迦如來だといふ。
○わしのたかね　靈鷲山。
○光をやどす　佛が神として跡を垂れた意味を云ふ。
○しがのから崎　日吉社は志賀郡なので云ふ。一本「しがの浦波」
○大日如來の御垂跡　聖武天皇の天平十三年十一月十五日に天皇の夢に皇大神宮が日輪は是れ毘盧舍那(大日如來)也として日輪の形を現じた由が元亨釋書に見える。つまり本地が佛でそれの垂跡が神であるといふ所謂本地垂跡説である。
○深くいりて　深く神道の奥を探ね入つて。
○うへもなき　無上の大毘盧舍那佛を云ふ。

治承四年遷都のとき伊勢太神宮にかへり參りて君の御祈念し申し侍りて
よみ侍りける　大中臣爲定朝臣

月讀の神し照らさばあま雲のかゝるうき世も晴れざらめやは

そののち世の中なほり侍りけるとなむ

石淸水社に歌合とて人々よみ侍りけるとき社頭月といへる心をよめる　能蓮法師

石淸水きよきながれの絶えせねば宿る月さへ隈なかりけり

長元九年後朱雀院の御時大嘗會主基(すき)方の神あそびの歌丹波國神なび山を
よめる　藤原義忠朝臣

ときはなる神なび山のさかき葉をさしてぞ祈るよろづよのため

治暦四年後三條院の御時大嘗會主基方神樂(かみあそび)の歌いはや山をよめる　藤原經衡

うごきなく千代をぞ祈るいはや山とる榊葉のいろかへずして

寛治元年堀河院の御時の大嘗會悠紀(ゆき)方神あそびの歌諸神鄕(もろがみのさと)をよめる　前中納言匡房

いにしへの神の御代よりもろ神の祈るいはひは君が世のため

久壽二年院の御時大嘗會悠紀方の神樂の歌近江國木綿園(ゆふその)をよめる　宮内卿永範

○月讀の神　伊勢内宮にもある。
○神あそびの歌　神樂歌。
○いはや山　備中國。
○諸神鄕　近江國。

神うくる豐のあかりにゆふ園の日影かづらぞはえまさりける

嘉應元年高倉院の御時大嘗會悠紀方の神あそびの歌近江國守山をよめる

すべらぎを八百萬代の神もみなときはにまもる山の名ぞこれ

壽永元年大嘗會主基方の歌よみて奉りけるとき神樂の歌丹波國神南備山をよめる

權中納言兼光

三島木綿かたに取り懸けかみなびの山のさかきをかざしにぞする

元暦元年今上の御時大嘗會悠紀方の歌奉りける神あそびの歌近江國諸神鄕をよめる

藤原季經朝臣

もろがみの心にいまぞかなふらし君を八千代と祈るまことは

おなじ大嘗會の主基方の歌よみたてまつりける神樂の歌丹後國千年山をよめる

藤原光範朝臣

ちとせやま神の代させる榊葉のさかえまさるは君がためとか

○神うくる　神を請待する。大嘗會は天子親しく天照大神を祭られるので。

○すべらぎ　天皇。

○ときはに　永久に。

○三島木綿　伊豆國三島から出る木綿で、それを肩に取りかけて神を祭るもの。神樂歌の韓神に「三島木綿肩に取掛けね韓神のからをぎせんや…」と見える。

○神の代させる　神の時代にさした。

○をはりみだるな　臨終正念せしめよ。

或本

卷第十九

在曉を高野の山下思ひとく心上

寂照法師

ひとすぢに心かくれぱむかふなる蓮のいとよをはりみだるな

千載和歌集終

新古今和歌集

新古今和歌集序

夫和歌者。羣德之祖。百福之宗也。玄象天成。五際六情之義未レ著。素鵞地靜。三十一字之詠甫興。爾來源流寔繁。長短雖レ異。或舒二下情一而達レ聞。或宣二上德一而致レ化。或屬二遊宴一而書レ懷。或採二艷色一而寄レ言。誠是理レ世撫レ民之鴻徽。賞レ心樂レ事之龜鑑者也。是以聖代明時。集而錄レ之。各窮二精微一。何以漏脫。然猶崑嶺之玉。採レ之有レ餘。鄧林之材。伐レ之無レ盡。物旣如レ此。歌亦宜レ然。仍詔下參議右衞門督源朝臣通具 大藏卿藤原朝臣有家左近衞權 中將藤原朝臣定家前上總介藤原朝臣家隆左近衞權少將藤原朝臣雅經等上。不レ擇二貴賤高下一。令レ撫二錦句玉章一。神明之詞。佛陀之作。爲レ表二希夷一雜而同隸。始二於曩昔一。迄二于當時一。彼此總編各俾二呈進一。每レ至二玄圃花芳之朝。璅砌風涼之夕一。斟二難波津之遺流一。尋二淺香山之芳躅一。式吟式詠。拔二犀象之牙角一。無レ黨無レ偏。採二翡翠之羽毛一。裁成而得二二千首一。類聚而爲二二十卷一。名曰二新古今和歌集一矣。時令節物之篇。屬二四序一而星羅。衆作雜詠之什。竝二羣品一而雲布。綜緝之致。蓋云備矣。伏惟。

來レ自二代邸一。而踐二
天子之位一。謝二於漢宮一。而追二汾陽之蹤一。
今上陛下之嚴親也。雖レ無レ隙二帝道之諮詢一。口域朝廷之本主也。爭不レ賞二我國
之習俗一。方今荃宰合レ體。華夷詠レ仁。風化之樂二萬春一。春日野之草悉靡。月宴之
契二千秋一。秋津洲之塵惟靜。誠膺二無爲有截之時一。可レ顧二染レ毫採レ翰之志一。故撰二
此一集一。永欲レ傳二百王一。彼上古之萬葉集者。蓋是倭歌之源也。編次之起。因准
之儀。星序惟邈。煙鬱難レ披。延喜有二古今集一。四人含二綸命一而成レ之。天曆有二後
撰集一。五人奉二絲言一而成レ之。其後有二拾遺後拾遺金葉詞花千載等集一。雖レ出二於
聖王數代之勅一。殊恨爲二撰者一身之最一。因レ玆。訪二延喜天曆二朝之遺美一。定二法
河洮虛五輩之英豪一。排二神仙之居一。展二刊修之席一而已。斯集之爲レ體也。先抽二萬
葉集之中一。更拾二七代集之外一。深索而微長無レ遺。廣求而片善必擧。但雖レ張二網
於山野一。微禽自逃。雖レ連二筌於江湖一。小鮮偷漏。誠當二視聽之不レ達。定有二篇章
之猶遺一。今只隨二採得一。且所二勒終一也。抑於二古今一者不レ載二當代之御製一。自二後
撰一而初加二其時之天章一。各考二一部一不レ滿二十篇一。而今所レ入之自詠。已餘三二十

首一。六義若相兼一兩雖レ可レ足。依レ無二風骨之絶妙一還有二露詞之多加一。偏以二耽レ道之思一。不レ顧二多情之眼一。凡厥取捨者。嘉尙之餘。特運二沖襟一。伏羲基二皇德一。而四十萬年。異域自雖レ觀二聖造之書史一焉。神武開二帝功一而八十二代。當朝未レ聽二敍策之撰集一矣。定知天下之都人士女。謳二歌斯道之遇逢一矣。不四獨記三仙洞無何之郷有二嘲風弄月之興一。亦欲レ呈三皇家元久之歲有二溫レ故知レ新之心一。修撰之趣。不レ在レ茲乎。于レ時聖曆乙丑。王春三月云爾。

來レ自ニ代邸一。而踐ニ
天子之位一。謝ニ於漢宮一。而追ニ汾陽之蹤一。
今上陛下之嚴親也。雖レ無レ隙ニ帝道之諮詢一。日域朝廷之本主也。爭不レ賞ニ我國之習俗一。方今荃宰合レ體。華夷詠レ仁。風化之樂ニ萬春一。春日野之草悉靡。月宴之契ニ千秋一。秋津洲之塵惟靜。誠膺ニ無爲有截之時一。可レ頤ニ染レ毫採レ牋之志一。故撰ニ此一集一。永欲レ傳ニ百王一。彼上古之萬葉集者。蓋是倭歌之源也。編次之起。因准之儀。星序惟邈。煙鬱難レ披。延喜有ニ古今集一。四人含ニ綸命一而成レ之。天曆有ニ後撰集一。五人奉ニ綵言一而成レ之。其後有ニ拾遺後拾遺金葉詞花千載等集一。雖レ出ニ於聖王數代之勅一。殊恨爲ニ撰者一身之最一。因レ玆。訪ニ延喜天曆二朝之遺美一。定ニ法河泲虛五輩之英豪一。排ニ神仙之居一。展ニ刊修之席一而已。斯集之爲レ體也、先抽ニ萬葉集之中一。更拾ニ七代集之外一。深索而微長無レ遺。廣求而片善必擧。但雖レ張ニ網於山野一。微禽自逃。雖レ連ニ筌於江湖一。小鮮偷漏。誠當ニ視聽之不レ達。定有ニ篇章之猶遺一。今只隨ニ採得一。且所ニ勒終一也。抑於ニ古今一者不レ載ニ當代之御製一。自ニ後撰一而初加ニ其時之天章一。各考ニ一部ニ不レ滿ニ十篇一。而今所レ入之自詠。已餘ニ三十

首一。六義若相兼一兩雖レ可レ足。依レ無二風骨之絶妙一還有二露詞之多加一。偏以二耽レ
道之思一。不レ顧二多情之眼一。凡厥取捨者。嘉尙之餘。特運二沖襟一。伏義基二皇德一。而
四十萬年。異域自雖レ觀二聖造之書史一焉。神武開二帝功一而八十二代。當朝未レ聽二
叙策之撰集一矣。定知天下之都人士女。謳二歌斯道之遇逢一矣。不四獨記三仙洞無何
之鄕有二嘲風哢月之興一。亦欲レ呈三皇家元久之歲有二溫レ故知レ新之心一。修撰之趣。
不レ在レ茲乎。于レ時聖曆乙丑。王春三月云爾。

かたそぎの言葉を殘し、傳教大師は、我が立つそまの思ひを陳べ給へり。かくの如き、しらぬ昔の人の心をもあらはし、ゆきて見ぬさかひの外の事をも知るはこの道ならし。抑、むかしはいつたび讓りし跡を尋ねて、天日嗣の位にそなはり、今はやすみしる名をのがれて、はこやの山にすみかをしめたりといへども、すべらぎは怠る道をまもり、星の位は政（まつりごと）をたすけし契りを忘れずして、天の下しげきことわざ、雲の上のいにしへにも變らざりければ、萬の民、春日野の草の靡かぬ方なく、四方の海、秋津島の月しづかに澄みて、和歌の浦の跡をたづね、敷島の道をもてあそびつゝ、この集をえらびて、ながき世につたへむとなり。かの萬葉集は歌のみなもとなり。時移り事隔たりて、今の人知ることかたし。延喜の聖（ひじり）の御代には、四人に勅して、古今集を撰ばしめ、天暦のかしこき帝は、五人におほせて、後撰集を集めしめ給へり。其ののち拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載等の集は、みな一人これをうけたまはれる故に、聞きもらし、見およばざるところもあるべし。よりて古今後撰の跡を改めず、五人の輩を定めて、しるし奉らしむるなり。その上、みづから定めみづからみがける

ことは、遠く唐の文の道をたづぬれば、濱千鳥の跡ありといへども、吾が國やまと言の葉の始まりて後、吳竹の世々に、かかる例なむなかりける。このうち、みづからの歌を載せたること、ふるきたぐひあれど、十首には過ぎざるべし。しかるを、今かれこれえらべるところ、三十首に餘れり。これみな、人の目立つべきいろもなく、心とゞむべきふしもありがたき故に、かへりていづれとわき難ければ、もりの朽葉かずつもり、みぎはの藻屑かき捨てずなりぬることは、道にふけるおもひ深くして、後のあざけりをかへりみざるなるべし。時に元久二年三月二十六日になむしるしをはりぬる。目をいやしみ、耳をたふとぶあまり、石の上ふるき跡を恥づといへども、ながれをくみて源をたづぬるゆゑに、とみの緒川の絕えせぬ道をおこしつれば、露霜はあらたまるとも、松吹く風のちりうせず、春秋はめぐるとも、空ゆく月の雲なくして、此の時に逢へらむものはこれを喜び、この道を仰がむものは今を忍ばざらめかも。

○ふりにし　降りにし―古りにし
○來にけらし　來たらしい。
○天のかぐ山　大和國生駒郡。
○春ともしらぬ　春であるとも知らない。
○跡こそ見えね　春の跡は見えないが。
○唐までも行く春　春は東より來ると信じられたので、更に西の支那へまでも行く春。

新古今和歌集　巻第一

春歌上

春立つ心をよみ侍りける　　攝政太政大臣

み吉野は山もかすみてしら雪のふりにし里に春は來にけり

春の初めのうた　　太上天皇

ほの〴〵と春こそ空に來にけらし天のかぐ山かすみたなびく

百首の歌奉りしとき春の歌　　式子内親王

山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえ〴〵かゝる雪のたま水

五十首の歌奉りし時　　宮内卿

かきくらし猶ふる里の雪のうちに跡こそ見えね春は來にけり

入道前關白太政大臣右大臣に侍りけるとき百首の歌よませ侍りけるに立春の心を　　皇太后宮大夫俊成

今日といへば唐（もろこし）までも行く春を都にのみと思ひけるかな

題しらず　　俊惠法師

春といへば霞みにけりなきのふまで波間に見えし淡路島山　西行法師

岩間とぢし冰もけさは解けそめて苔のした水みちもとむらむ

讀人しらず

かぜまぜに雪は降りつゝしかすがに霞たなびき春は來にけり

時はいま春になりぬとみ雪降る遠き山邊にかすみたなびく

堀河院の御時百首の歌奉りけるに殘りの雪の心をよませ侍りける　權中納言國信

春日野の下萌えわたる草の上につれなく見ゆる春のあわゆき

題しらず　山邊赤人

あすからは若菜摘まむとしめし野に昨日も今日も雪は降りつゝ

天暦の御時屏風の歌　壬生忠見

春日野の草はみどりになりにけり若菜つまむと誰かしめけむ

崇德院に百首の歌奉りけるとき春の歌　前參議教長

わか菜つむ袖とぞ見ゆる春日野のとぶひの野邊の雪のむらぎえ

延喜の御時屏風に　紀貫之

ゆきて見ぬ人もしのべと春の野のかたみに摘める若菜なりけり

○みちもとむらむ　流れ行く道を求めるだらう。

○しかすがに　さすがに。

○しめし野　占めた野。

○天暦　村上天皇の年號。

○延喜　醍醐天皇の年號。

○かたみ　形身―籠(カタミ)。

述懐百首の歌よみ侍りけるに若菜　　皇太后宮大夫俊成

澤に生ふる若菜ならねどいたづらに年をつむにも袖はぬれけり

日吉社によみて奉りける子の日の歌

さゞ浪や志賀の濱松ふりにけり誰が世に曳ける子の日なるらむ

百首の歌奉りし時　　藤原家隆朝臣

谷川のうち出づる波も聲立てつうぐひすさそへ春の山かぜ

和歌所にて關路鶯といふことを　　太上天皇

うぐひすの鳴けどもいまだ降る雪に杉の葉しろきあふさかの山

堀河院に百首の歌奉りけるとき殘雪の心をよみ侍りける　　藤原仲實朝臣

春きては花とも見よとかた岡の松のうは葉にあわ雪ぞふる

題しらず　　中納言家持

まきもくの檜原のいまだ曇らねば小松が原にあわゆきぞ降る

讀人しらず

いまさらに雪降らめやも陽炎（かげろふ）のもゆる春日となりにしものを

凡河内躬恒

いづれをか花とはわかむ故郷（ふるさと）のかすがの原にまだ消えぬ雪

○いたづらに　空しく。官位など低くて。
○つむ　積む—摘む。

○さゞ浪や　志賀の枕詞。
○誰が世に曳ける云々　何時の代に誰か子の日に曳いた松であらう

○谷川のの歌　古今集巻一に「谷風に解くる氷のひまごとに打出づる浪や春の初花」「花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯誘ふしるべにはやる」
○うぐひすのの歌　古今集巻一に「梅が枝に來居る鶯春かけて鳴けども未だ雪は降りつゝ」

○まきもく　大和國磯城郡。
○曇らねば　「霞まねば」の意味か

○わかむ　區分しよう。

家の百首の歌合に餘寒の心を　　攝政太政大臣

空はなほかすみもやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月

和歌所にて春山月といふ心をよめる　　越前

やまふかみ猶かげさむし春の月そらかきくもり雪は降りつゝ

詩を作らせて歌に合はせ侍りしに水鄕春望といふことを　　左衞門督通光

みしま江や霜もまだひぬ葦の葉につのぐむほどのはる風ぞ吹く

藤原秀能

夕月夜しほみちくらし難波江の葦のわか葉を越ゆるしらなみ

春の歌とて　　西行法師

降りつみし高嶺のみゆき解けにけり淸瀧川のみづのしら波

源重之

梅が枝にものうきほどにちる雪を花ともいはじ春の名だてに

山邊赤人

あづさ弓はる山ちかく家居してたえず聞きつるうぐひすの聲

讀人しらず

うめが枝に啼きてうつろふ鶯のはね白妙にあわゆきぞ降る

○かげ　月の影。月光。

○みしま江　攝津國三島。
○つのぐむ　芽ぐむ。

○夕月夜　夕方の月。
○しほみちくらし　潮が滿ちて來るらしい。

○淸瀧川　山城國葛野郡。

○名だてに　春の遲れることの不名譽さに對して。

○あづさ弓　春の枕詞。

百首の歌奉りし時　惟明親王

鶯のなみだの冰柱うち解けてふるすながらや春を知るらむ

題しらず　志貴皇子

岩そゝぐたるひのうへの早蕨の萌え出づる春になりにけるかな

百首の歌奉りし時　前大僧正慈圓

あまのはら富士の煙のはるのいろの霞になびくあけぼのの空

崇徳院に百首の歌奉りける時　藤原清輔朝臣

あさがすみ深くみゆるや煙たつむろの八島のわたりなるらむ

晩霞といふことをよめる　後徳大寺左大臣

なごのうみの霞の間より眺むれば入日をあらふおきつ白浪

をのこども詩を作りて歌に合はせ侍りしに水郷春望といふことを　太上天皇

見わたせば山もとかすむ水無瀬川ゆふべは秋となに思ひけむ

攝政太政大臣の家の百首の歌合に春曙といふ心をよみ侍りける　藤原家隆朝臣

霞立つすゑの松山ほの〴〵と浪にはなるゝよこぐもの空

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに　藤原定家朝臣

はるの夜の夢のうき橋とだえして峯にわかるゝ横雲のそら

○たるひ　垂る氷。冰柱。
○煙の　煙が。
○むろの八島　下野國。
○なごのうみ　越中國射水郡。
○見わたせばの歌　増鏡で人に知られてゐる。見渡すと麓の霞む水無瀬川の春の夕景は何とも云へず風情がある。今まで夕方は秋に限るとなぜ思つたのだらう。
○すゑの松山　奧州の名所。
○浪に　浪から。

○知るらめや　知るだらうか。

○おほぞらの歌　後に「照りもせず曇りも果てぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき」と見える。

○あるじをばの歌　新撰朗詠集に「不レ定レ家尋レ花而不レ問レ主。」

○梅が香に　「問はましものを」につゞく。

○簷もる月の影ぞあらそふ　簷洩る月も光をうつさうと梅の香と爭ふ。

○たが袖ふれし　古今集卷一に「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖觸れし宿の梅ぞも」

○春やむかしの月　古今集卷十五に「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つは元の身にして」

きさらぎまで梅の花咲き侍らざりける年よみ侍りける　中務

知るらめや霞のそらをながめつゝ花もにほはぬ春をなげくと

守覺法親王の家の五十首の歌に　藤原定家朝臣

おほぞらは梅のにほひに霞みつゝ曇りもはてぬ春の夜の月

題しらず　宇治前關白太政大臣

折られけり紅にほふ梅のはな今朝しろたへにゆきは降れれど

垣ねの梅をよみ侍りける　藤原敦家朝臣

あるじをば誰ともわかず春はたゞ垣ねのうめをたづねてぞ見る

梅花遠薫といへる心をよみ侍りける　源俊頼朝臣

心あらば問はましものを梅が香にたが里よりか匂ひ來つらむ

百首の歌奉りし時　藤原定家朝臣

梅の花にほひをうつす袖のうへに簷もる月の影ぞあらそふ

千五百番歌合に　藤原家隆朝臣

うめが香にむかしをとへば春の月こたへぬ影ぞ袖にうつれる

右衛門督通具

梅の花たが袖ふれしにほひぞと春やむかしの月にとはばや

皇太后宮大夫俊成女

うめの花あかぬ色香もむかしにて同じかたみの春の夜の月

梅花にそへて大貳三位につかはしける　　權中納言定頼

來ぬ人によそへて見つる梅のはな散りなむ後のなぐさめぞなき

かへし　　大貳三位

春ごとに心をしむる花の枝に誰がなほざりのそでか觸れつる

二月雪落衣といふことをよみ侍りける　　康資王母

梅ちらす風もこえてや吹きつらむ薰れる雪の袖にみだるゝ

題しらず　　西行法師

とめこかし梅さかりなるわが宿をうときも人は折りにこそよれ

百首の歌奉りしに春の歌　　式子内親王

ながめつる今日は昔になりぬとも軒端の梅はわれを忘るな

土御門内大臣の家に梅香留袖といふことをよみ侍りける　　藤原有家朝臣

散りぬればにほひばかりを梅の花ありとや袖にはる風の吹く

題しらず　　八條院高倉

ひとりのみながめて散りぬ梅の花知るばかりなる人は訪ひこで

○二月雪落衣　朗詠集に「折二梅花一而挿レ頭、二月之雪落レ衣。」

○とめこかし　求めて來いよ。一本「とひこかし」

○にほひばかりを　我が袖には匂ひばかり殘つてゐるのを。

○はる風の　一本「春風ぞ」

○訪ひこで　訪ひ來ずして。

文集嘉陵春夜の詩に不明不暗朧々月といへることをよみ侍りける　大江千里

照りもせず曇りもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき

祐子内親王藤壺にすみ侍りけるに女房うへ人などさるべきかぎりものがたりして春秋の哀れいづれにか心ひくなど爭ひ侍りけるに人々おほく秋に心をよせ侍りければ　菅原孝標女

あさみどり花もひとつに霞みつゝおぼろに見ゆる春の夜の月

百首の歌奉りし時　源具親

難波潟かすまぬ浪もかすみけりうつるも曇るおぼろ月夜に

攝政太政大臣の家の百首の歌合に　寂蓮法師

いまはとてたのむの鴈もうちわびぬ朧月夜のあけぼののそら

刑部卿頼輔歌合し侍りけるによみて遣はしける　皇太后宮大夫俊成

聞く人ぞ涙は落つるかへる鴈なきて行くなるあけぼのの空

題しらず　讀人しらず

故郷にかへるかりがねさ夜更けて雲路にまよふ聲きこゆなり

歸鴈を　攝政太政大臣

わするなよたのむの澤を立つかりも稲葉の風の秋の夕暮

○しくもの　及ぶもの。
○さるべきかぎり　相當のものは悉く。
○あさみどりの歌　春に心の引かれるといふことを例をあげて語つてゐる。
○かすみけり　水へ映る月影も霞んだ空のまゝにかすんで居る。
○いまは　今は歸らう。
○たのむ　田の面。

百首の歌奉りし時

歸る鴈いまはの心ありあけに月と花との名こそ惜しけれ

守覺法親王の五十首の歌に　藤原定家朝臣

霜まよふそらにしをれし鴈がねの歸るつばさに春雨ぞふる

閑中春雨といふことを　大僧正行慶

つく〴〵と春のながめの寂しきはしのぶにつたふ簷の玉水

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた　伊勢

水の面にあやおりみだる春雨や山のみどりをなべて染むらむ

百首の歌奉りし時　攝政太政大臣

ときはなる山の岩根にむすこけの染めぬみどりにはる雨ぞふる

清輔朝臣の許にて雨中苗代といふことをよめる　勝命法師

あめ降れば小田のますらを暇あれや苗代みづを空にまかせて

延喜の御時御屏風に　凡河内躬恆

春雨のふりそめしより青柳のいとのみどりぞ色まさりける

題しらず　太宰大貳高遠

うちなびき春は來にけり青柳のかげふむみちに人のやすらふ

○霜まよふ　去年の秋霜に迷ふ意味か。

○ながめ　長雨―詠め。

○なべて　一樣に。

○染めぬみどり　染めたのでもない綠に。

○空にまかせて　雨降る空にまかせて、わざ〳〵苗代へ水を引かないで濟むので。

○うちなびき　おしなべて。

みよし野のおほ川のべのふる柳かげこそ見えね春めきにけり　　輔仁親王

百首の歌の中に

嵐ふく岸の柳のいなむしろ織りしく波にまかせてぞ見る　　崇徳院御製

建仁元年三月歌合に霞隔遠樹といふことを

たか瀨さすむつだのよどの柳原みどりもふかく霞む春かな　　權中納言公經

百首の歌よみ侍りけるとき春の歌とてよめる

はるかぜの霞ふき解くたえまより亂れてなびく青柳の絲　　殷富門院大輔

千五百番歌合に春の歌

しら雲のたえまに靡くあをやぎの葛城やまにはる風ぞ吹く　　藤原雅經

青柳のいとに玉ぬくしら露のしらず幾世のはるか經ぬらむ　　藤原有家朝臣

薄くこき野邊のみどりのわか草にあとまで見ゆる雪のむらぎえ　　宮内卿

題しらず

荒小田の去年(こぞ)の古根のふるよもぎ今は春べとひこばえにけり　　曾禰好忠

○かげこそ見えね　「ど」を補ふ。

○いなむしろ　柳の絲の先が水に浸つたのが稻莚に似たのを云ふ。

○たか瀨さす　高瀨舟（底が淺くて平たい船）を棹さす。○むつだのよど　大和國の六田の淀。

○青柳のいとに玉ぬくしら露の　知らずを云ひ起す序。

○薄くこきの歌　增鏡に見える。野邊の若草の絲の濃淡によつて雪のむらに消えた跡までも見分けられるの意味。○ひこばえにけり　ひこばえが生えたことだ。

壬生忠見

やかずとも草は萌えなむ春日野をたゞ春の日にまかせたらなむ

西行法師

よしの山さくらが枝に雪散りて花おそげなる年にもあるかな

白河院鳥羽におはしましけるとき人々山家待花といへる心をよみ侍りけるに

藤原隆時朝臣

櫻花さかばまづ見むとおもふまに日かず經にけりはるの山里

亭子院の歌合に

紀貫之

わがこゝろ春の山邊にあくがれてなが〳〵し日を今日もくらしつ

攝政太政大臣家の百首の歌合に野遊の心を

藤原家隆朝臣

おもふどちそこともしらず行き暮れぬ花の宿かせ野邊の鶯

百首の歌奉りし時

式子内親王

いま櫻咲きぬと見えてうすぐもり春に霞める世のけしきかな

題しらず

讀人しらず

ふして思ひ起きてながむる春雨に花の下紐いかに解くらむ

中納言家持

○やかずとも　古草を火で燒かないでも。
○春の日に　日―火。
○まかせたらなむ　任せてあれよ。
○雪散りて　花の代りに雪が散つて。

○おもふどちの歌　古今集巻二に「思ふどち春の山邊にうち羣れてそことも云はぬ旅寢してしが」

○花の下紐云々　花の咲くのを花が下紐を解くと云つてゐる。

行かむ人こむひとしのべ春がすみたつたの山のはつ櫻ばな

花の歌とてよみ侍りける　　西行法師

よしの山去年のしをりの道かへてまだみぬ方の花をたづねむ

和歌所にて歌つかうまつりしに春の歌とてよめる　　寂蓮法師

かづらきや高間のさくら咲きにけり立田の奥にかゝるしら雲

題しらず　　讀人しらず

石の上ふるきみやこを來てみれば昔かざしし花咲きにけり

源公忠朝臣

春にのみ年はあらなむ荒小田をかへすがへすも花を見るべく

八重櫻を折りて人の遣はして侍りければ　　道命法師

白雲のたつたの山の八重ざくらいづれを花とわきて折りけむ

百首の歌奉りし時　　藤原定家朝臣

しら雲の春はかさねてたつた山をぐらの峯に花にほふらし

題しらず　　藤原家衡朝臣

吉野山はなやさかりに匂ふらむふるさと去らぬ峯の白雲

和歌所の歌合に羇旅花といふことを　　藤原雅經

○去年のしをりの道　去年の春花見に來て枝などを折つて、道しるべとしたもののある道。

○高間　大和國南葛城郡。

○石の上　「ふる」の枕詞。

○昔かざしし　昔髪にさした。

○春にのみ年はあらなむ　一年中春でのみあつてほしい。

○かへすがへすも　「山田を返す」と云ひ懸けてゐる。

○わきて　區別して。

○にほふ　色艶よくかゞやく。

岩根ふみかさなる山を分けすてて花もいくへのあとのしら雲

五十首の歌奉りし時

前大僧正慈圓

尋ね來て花にくらせる木の間より待つとしもなき山の端の月

故郷花といへる心を

右衞門督通具

ちり散らず人もたづねぬふるさとの露けき花に春風ぞ吹く

千五百番歌合に

正三位秀能

いそのかみふる野の櫻たが植ゑて春は忘れぬかたみなるらむ

藤原有家朝臣

花ぞ見るみちの芝草ふみわけてよし野の宮の春のあけぼの

朝日かげにほへる山のさくら花つれなく消えぬ雪かとぞ見る

○花もいくへのあとのしら雲　後の方に立つ白雲は今見て來た幾重にも重なる花であらう。

○待つとしもなき　待つとも無き「し」は助詞。

○散り散らずの歌　拾遺集卷一に「散り散らず聞かまほしきを故郷の花見て歸る人も逢はなむ」

○いそのかみの歌　後撰集卷二に「石の上布留の山邊の櫻花植ゑけむ時を知る人ぞ無き」

○つれなく　無情に。

新古今和歌集　卷第二

春歌下

釋阿和歌所にて九十の賀し侍りしをり屏風に山に櫻咲きたる所を　太上天皇

櫻咲くとほやま鳥のしだり尾のながながし日もあかぬ色かな

千五百番歌合に春の歌　皇太后宮大夫俊成

いく年の春に心をつくし來ぬあはれと思へみよし野の花

百首の歌に　式子内親王

はかなくて過ぎにしかたを數ふれば花にもの思ふ春ぞへにける

内大臣に侍りけるとき望山花といへる心をよみ侍りける　京極前關白太政大臣

しら雲のたなびくやまの八重櫻いづれを花と行きて折らまし

祐子内親王の家にて人々花の歌よみ侍りけるに　權大納言長家

花のいろにあまぎる霞立ちまよひ空さへ匂ふ山ざくらかな

題しらず　山邊赤人

百敷のおほみや人はいとまあれや櫻かざして今日もくらしつ

○釋阿　藤原俊成の法名。

○やま鳥のしだり尾のながながし日　拾遺集卷十三に「あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を獨りかも寢む」

○はかなくて過ぎにしかた　つまらなく過して來た以前のこと。

○あまぎる　天にかゝる。

○百敷の　大宮の枕詞。

在原業平朝臣

花にあかぬ歎きはいつもせしかども今日の今夜に似る時はなし

凡河内躬恒

寢も安くねられざりけり春の夜は花の散るのみ夢に見えつゝ

伊勢

やまざくら散りてみ雪にまがひなばいづれか花と春に問はなむ

貫之

わが宿のものなりながら櫻花ちるをばえこそとゞめざりけれ

寛平の御時きさいの宮の歌合に

讀人しらず

かすみたつ春の山邊にさくらばなあかず散るとや鶯のなく

題しらず

赤人

春雨はいたくなふりそ櫻花まだ見ぬ人に散らまくも惜し

貫之

花の香に衣はふかくなりにけり木のしたかげの風のまにまに

千五百番歌合に

皇太后宮大夫俊成女

風かよふ寐ざめの袖の花の香にかをる枕の春の夜のゆめ

○今日の今夜　この歌は伊勢物語には「昔春宮の女御の御方の花の賀に召しあげられたりけるに」と詞書されてゐる。

○まがひなば　見紛ふならば。

○ものなりながら　ものでありながら。

○まだ見ぬ人に　まだ見ない人のために。

○散らまく　散らむこと。

守覺法親王五十首の歌よませ侍りける時　　藤原家隆朝臣

この程は知るも知らぬも玉鉾の行きかふ袖は花の香ぞする

攝政太政大臣の家に五首の歌よみ侍りけるに　　皇太后宮大夫俊成

またや見むかた野のみのの櫻がり花の雪ちる春のあけぼの

花の歌よみ侍りけるに　　祝部成仲

散り散らずおぼつかなきは春霞たつたの山の櫻なりけり

山里にまかりてよみ侍りける　　能因法師

山里の春の夕ぐれ來て見ればいりあひの鐘に花ぞ散りける

題しらず　　惠慶法師

櫻ちる春の山邊はうかりけり世をのがれにとこしかひもなく

花見侍りける人にさそはれて讀みける　　康資王母

山ざくら花の下風吹きにけり木のもとごとの雪のむらぎえ

題しらず　　源重之

はるさめのそほ降る空のをやみせずおつる涙に花ぞ散りける

鴈がねの歸る羽風やさそふらむ過ぎ行く峯の花ものこらぬ

百首の歌めししとき春の歌　　源具親

○知るも知らぬも　知る人も知らない人も。
○玉鉾の　道の枕詞から道の意味に用ゐられた。
○またや見む　再び見られようか
○かた野　河内國北河内郡。

○山里　一本「山寺」

○こし　來た。

○雪のむらぎえ　雪のやうに花のむらに消えること。

○はるさめ…降る空の　「の」は「と同樣に」
○をやみせず　小止みもなく。

ときしもあれたのむの雁のわかれさへ花ちるころのみ吉野の里

見山花といへる心を　　大納言經信

山ふかみ杉のむらだち見えぬまで尾上の風に花の散るかな

堀河院の御時百首の歌奉りけるに花の歌　　大納言師頼

木のもとの苔の緣もみえぬまで八重ちりしける山ざくらかな

花の十首の歌よみ侍りけるに　　左京大夫顯輔

麓までをのへの櫻ちり來ずばたなびく雲と見てや過ぎまし

花落客稀といふことを　　刑部卿範兼

花ちれば訪ふひと稀になりはてていとひし風の音のみぞする

題しらず　　西行法師

ながむとて花にもいたく馴れぬれば散る別れこそ悲しかりけれ

越前

山里のにはよりほかの道もがな花ちりぬやと人もこそとへ

五十首の歌奉りし中に湖上花を　　宮内卿

花さそふ比良の山風ふきにけり漕ぎ行く舟のあと見ゆるまで

羇路花を

○雁のわかれさへ　雁の別れまでも添はる。

○麓までの歌　遠く見ると雲のやうだつたが麓に散つて來たので櫻だと分つたの意味。

○いとひし風　花を散らすので…

○ながむとて　物思ひしてぼつと詠めがちで來たので。

○はかの道もがな　外の道もあればいいな。散り敷く花を踏むのが惜しいので。

○比良の山　近江國滋賀郡。

○吹くからに　吹くにつれて。
○せきのすぎ村　逢坂關の杉羣。

○あまぎる　天霧る。

○あまのはごろも撫づ　佛說に天女が羽衣で磐石を撫で滅すといふことがある。

○最勝四天王院　山城國白河にあつた。

○櫻色の歌　昨日まで見えた櫻色の春風はもう跡形もないが、もし人が訪ねるならば敷いた雪とでも見るだらう。
○消えずはありとも雪かとも見よ　消えないであつても　せめて雪かとも見て慰みたまへ。古今集卷一「今日來ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや」
○明日よりさきの　右の古今集の歌によつて云つた詞。

あふさかや木ずゑの花を吹くからに嵐ぞかすむせきのすぎ村

百首の歌奉りしとき春の歌
二條院讃岐

山たかみ峯のあらしにちる花の月にあまぎるあけがたの空

百首の歌めしたるとき春の歌
崇德院御製

やま高み岩根の櫻ちるときはあまのはごろも撫づるとぞ見る

春日社の歌合とて人々歌よみ侍りけるに
刑部卿頼輔

散りまがふ花のよそめは吉野山あらしにさわぐ峯の白雲

最勝四天王院の障子に吉野山かきたる所
太上天皇

みよし野のたかねの櫻ちりにけりあらしも白き春のあけぼの

千五百番歌合に
藤原定家朝臣

櫻色の庭のはるかぜあともなし問はばぞ人のゆきとだに見む

ひととせ忍びて大内の花見にまかりて侍りしに庭に散りて侍りし花を硯のふたに入れて攝政の許に遣はし侍りし
太上天皇

今日だにも庭を盛りとうつる花消えずはありとも雪かとも見よ

かへし
攝政太政大臣

さそはれぬ人のためとや殘りけむ明日よりさきの花の白雪

○移ろひぬ　色がさめた。
○風よりさきに　風が吹いて散らない前に。

○とへ　問へ—十重。

○たえて　甚しくの意味の絕えてを云ひ懸く。
○つれなき　一本「つねなき」
○うき世を花の　花が憂世を。
○誘ふ風あらば　古今集卷十八に「わびぬれば身を浮草の根を絕えて誘ふ水あらば行なむとぞ思ふ」
○外にもいはじ　外の物にたとへて云ふも及ばない。

○のこりの春　花を見るべき殘りの齡の春。

○わかれむ春は　私と死に別れよう春は。
○心つくしを　私の…。
○そをだに　それをたにせめて。

家の八重櫻を折らせて惟明親王の許につかはしける　　式子內親王

八重にほふ軒端のさくら移ろひぬ風よりさきにとふ人もがな

かへし　　惟明親王

つらきかな移ろふまでに八重櫻とへともいはで過ぐる心は

五十首の歌奉りし時　　藤原家隆朝臣

櫻花ゆめかうつゝか白雲のたえてつれなき峯のはるかぜ

題しらず　　皇太后宮大夫俊成女

恨みずやうき世を花の厭ひつゝ誘ふ風あらばと思ひけるをば　　後德大寺左大臣

はかなさを外にもいはじ櫻ばなさきては散りぬあはれ世のなか

入道前關白太政大臣の家に百首の歌よませ侍りける時　　俊惠法師

ながむべきのこりの春をかぞふれば花とともにも散る涙かな

花の歌とてよめる　　殷富門院大輔

花もまたわかれむ春は思ひ出でよ咲き散るたびの心つくしを

千五百番歌合に　　左近中將良平

ちる花のわすれがたみの峯の雲そをだにのこせ春の山かぜ

落花といふことを　　藤原雅經

花さそふなごりを雲に吹きとめてしばしはにほへ春の山風

題しらず　　後白河院御歌

をしめども散りはてぬればさくら花いまは梢をながむばかりぞ

殘春の心を　　攝政太政大臣

よし野山はなのふるさとあと絶えてむなしき枝に春風ぞふく

題しらず　　大納言經信

ふるさとの花のさかりは過ぎぬれどおもかげ去らぬ春の空かな

百首の歌の中に　　式子內親王

花は散りそのいろとなく眺むればむなしき空に春雨ぞふる

小野宮のおほきおほいまうちぎみ月輪寺に花見侍りける日よめる　　淸原元輔

たがためにあすは殘らむ山櫻こぼれてにほへ今日のかたみに

曲水の宴をよめる　　中納言家持

から人の舟をうかべて遊ぶてふ今日ぞわがせこ花かづらせよ

紀貫之曲水宴し侍りける時月入花灘暗といふ事をよみ侍りける　　坂上是則

花流す瀬をも見るべき三日月のわれて入りぬる山のをちかた

○なごり　名殘の香。

○ふるさと　降る里―故里。

○おもかげ去らぬ　面影は過ぎずに殘つてゐる。

○そのいろとなく　何を眺めることなく。

○曲水宴　曲つた小流に臨んで上流に杯を泛べ、それが流れ下るまでに詩を作つて酒をのむ宴。
○わがせこ　我が夫子(セコ)よ。
○花かづらせよ　花で鬘をせよ。

雲林院の櫻見にまかりけるに皆散りはてて僅かにかた枝に殘りて侍りければ　　眞　遍　法　師

たづねつる花も我が身もおとろへて後の春ともえこそちぎらね

千五百番歌合に　　寂　蓮　法　師

おもひたつとりは古巣もたのむらむ馴れぬる花のあとの夕暮

散りにけり哀れうらみの誰なれば花のあとゝふ春の山かぜ　　權中納言公經

春ふかく尋ねいるさの山の端にほの見し雲の色ぞのこれる　　攝政太政大臣

百首の歌奉りし時　　藤原家隆朝臣

初瀨山うつろふ花に春くれてまがひし雲ぞ峯にのこれる

よしの川岸の山吹さきにけり嶺のさくらは散り果てぬらむ　　皇太后宮大夫俊成

堀河院の御時百首の歌奉りけるに　　權中納言國信

駒とめてなほ水かはむ山吹の花のつゆそふ井手のたま川

岩根こすきよたき川のはやければ浪をりかくるきしの山吹

○はつかに　わづかに。

○後の春ともえこそちぎらね　この後の春の逢はうとも契り得ない

○おもひたつの歌　鳥は歸るのに古巣をも賴むであらう。自分はこの夕暮に馴れた花の去つた跡を賴まう。

○哀れうらみの誰なれば　あゝかく散つたうらみは誰のわざでなく風自らのわざなので。

○花のあとゝふ　花の散つた後を弔ふ。

○まがひし雲　花と見紛うた雲。

○なほ　それでも。

○水かはむ　水を飮ませよう。

○井手のたま川　山城國綴喜郡。

○をりかくる　折り懸ける。

題しらず　　原見王

かはづなくかみなび川に影見えていまか咲くらむ山吹の花

延喜十三年亭子院の歌合の歌　　藤原興風

足びきのやまぶきの花ちりにけり井手の蛙はいまや鳴くらむ

飛香舍にて藤花の宴侍りけるに　　延喜御歌

かくてこそ見まくほしけれ萬代をかけてしのべる藤なみのはな

天暦四年三月十四日藤壺にわたらせ給ひて花惜しませ給ひけるに　　天暦御製

團居(まとゐ)して見れどもあかぬ藤浪のたたまく惜しき今日にもあるかな

清愼公の家の屛風に　　貫之

くれぬとは思ふものから藤の花さけるやどには春ぞひさしき

藤の松に懸れるをよめる

みどりなる松に懸れる藤なれどおのが頃とぞ花は咲きける

春のくれがた實方朝臣のもとに遣はしける　　藤原道信朝臣

ちりのこる花もやあるとうちむれてみ山がくれを尋ねてしがな

修行し侍りける頃春の暮によみける　　大僧正行尊

木(こ)の下(もと)のすみかも今はあれぬべし春し暮れなば誰か訪ひこむ

○延喜　醍醐天皇の年號。

○かくてこそ見まくほしけれ　かやうにて見たいものだ。

○天暦　村上天皇の年號。

○たたまく　立たまく—經(タ)たまく。たたむこと。

○思ふものから　思ふものながら

○春ぞひさしき　藤原氏の前途を祝してゐるのである。

○みどりなる松　常磐なる松。

○おのが頃こぞ　自分の時節には

○ちりのこる花もやある　散り殘る花もやあるかと。

○尋ねてしがな　尋ねたいな。

○木の下のすみか　出家は樹下石上を栖とするので斯う云ふ。

○おつる　落ちて行く。

○花ゆゑ　花があるのでせめてそれを見るついでに訪ねてくれるかと。

○石の上ふるのわさ田を　序。
○うちかへし　返す／＼も。

○あすよりは　花の春が去つた明日からは。
○誰かはとはむ　誰が訪ねようや

五十首の歌奉りし時　寂蓮法師

暮れて行く春のみなとは知らねども霞におつる宇治の柴舟

山家の三月盡をよみ侍りける　藤原伊綱

こぬまでも花ゆゑ人の待たれつる春もくれぬるみ山邊のさと

題しらず　皇太后宮大夫俊成女

石の上ふるのわさ田をうちかへし恨みかねたる春のくれかな

寛平の御時后の宮の歌合の歌　讀人しらず

待てといふにとまらぬものと知りながらしひてぞ惜しき春の別れは

山家暮春といへる心を　宮内卿

柴の戸をさすや日かげのなごりなく春暮れかゝる山の端の雲

百首の歌奉りし時　攝政太政大臣

あすよりは志賀の花園まれにだに誰かはとはむ春のふるさと

新古今和歌集　巻第三

夏歌

題しらず　　持統天皇御歌

春すぎて夏來にけらししろたへの衣ほすてふ天のかぐ山

素性法師

をしめどもとまらぬ春もあるものをいはぬにきたる夏衣かな

更衣をよみ侍りける　　前大僧正慈圓

ちりはてて花のかげなき木の下にたつことやすき夏ごろもかな

春を送りて昨日の如しといふことを　　源道濟

夏衣きていくかにかなりぬらむのこれる花は今日も散りつゝ

夏の初めの歌とてよみ侍りける　　皇太后宮大夫俊成女

をりふしもうつればかへつ世の中の人のこゝろの花染の袖

卯花如月といへる心をよませ給ひける　　白河院御歌

卯の花のむら〳〵咲ける垣根をば雲間の月のかげかとぞ見る

○春すぎての歌　萬葉集卷一に「春過ぎて夏來るらし白妙の衣乾したり天の香具山」
○しろたへの　白色の。
○きたる　來たる—著たる。

○散りはての歌　古今集卷二に「今日のみと春を思はぬ時だにもたつ事やすき花の陰かは」
○たつ　立つ—裁つ。
○きて　夏衣著て—夏が來て。

○かへつ　更へた。
○世の中の人の心の花染の袖　古今集卷十五に「色見えで移ろふものは世の中の人の心の花にぞありける」

題しらず　　太宰大貳重家

卯の花の咲きぬるときは白妙の波もて結へる垣根とぞ見る

齋院に侍りけるとき神館(かんたち)にて　　式子内親王

忘れめやあふひを草にひき結びかりねの野邊の露のあけぼの

葵をよめる　　小侍從

いかなればそのかみ山のあふひ草年は經れども二葉なるらむ

最勝四天王院の障子に淺香の沼かきたる所　　藤原雅經

野邊はいまだ淺香の沼にかる草のかつみるまゝに茂るころかな

崇德院に百首の歌奉りけるとき夏の歌　　待賢門院安藝

櫻あさのおふの下草しげれたゞあかで別れし花の名なれば

題しらず　　曾禰好忠

花ちりし庭の木の間も茂りあひてあま照る月のかげぞまれなる

藤原元眞

かりに來(く)と恨みし人の絶えにしを草葉につけてしのぶ頃かな

延喜御歌

夏草はしげりにけりなたまぼこのみち行く人も結ぶばかりに

○神館　賀茂の祭の時、假に神館を建てて齋院が一夜そこに泊られた。
○あふひ　神館を葵で飾った。
○草に　草枕に。
○そのかみ山　その當時の意味を云ひかく。
○二葉　この山の葵は二葉草とも云はれたので。
○淺香の沼　奥州。古今集卷十四「陸奥の淺香の沼の花がつみ且見る人に戀ひや渡らむ」
○かつみる　かつみ(眞菰)―且見る。
○櫻あさ　麻の名。
○おふ　生ふ―麻生(伊勢國)
○花の名　櫻をいふ花の名。
○かりに　刈りに―假に。
○草葉につけて　草葉の茂るにつけて。
○たまぼこの　「道」の枕詞。

夏草はしげりにけりと郭公などわが宿にひとこゑもせぬ

人麿

鳴く聲をえやは忍ばぬほとゝぎす初卯の花のかげにかくれて

賀茂に詣で侍りけるに人の郭公なかなむと申しけるあけぼの片岡の木梢をかくしみえ侍りければ

紫式部

郭公こゑ待つほどは片岡のもりのしづくに立ちやぬれまし

賀茂に籠りたりける曉郭公のなきければ

辨乳母

ほとゝぎす深山出づなる初聲をいづれの里のたれか聞くらむ

題しらず

讀人しらず

五月山卯の花月夜ほとゝぎす聞けどもあかずまた啼かむかも

中納言家持

おのが妻こひつゝ鳴くや五月やみ神南備山(かみなびやま)のやまほとゝぎす

大中臣能宣朝臣

郭公ひとこゑ鳴きていぬる夜はいかでか人のいをやすくぬる

大納言經信

郭公なきつゝ出づる足引のやまとなでしこ咲きにけらしも

○なぞ　何としても。
○えやは忍ばぬ　忍ばずしてあり得ようかい。
○片岡のもりの　賀茂に在る。
○五月山　攝津國豐能郡。
○また啼かむかも　又啼いてくれ
○神南備山　大和國生駒郡。
○いぬる　去(イ)ぬる—寐ぬる
○いをやすくぬる　安らかに寐られようか。
○足引の　山の枕詞。

ふた聲と鳴きつときかば郭公ころもかたしきうたゝねはせむ

待客聞郭公といへる心を　　白河院御歌

ほとゝぎすまだうちとけぬ忍びねは來ぬ人を待つわれのみぞ聞く

題しらず　　花園左大臣

聞きてしもなほぞねられぬ郭公まちし夜頃のこゝろならひに

神たちにて郭公を聞きて　　前中納言匡房

卯の花の垣ねならねどほとゝぎす月のかつらの陰になくなり

入道前關白右大臣に侍りけるとき百首の歌よませ侍りける時ほとゝぎすの歌　　皇太后宮大夫俊成

むかし思ふ草の庵のよるの雨に涙なそへそ山ほとゝぎす

雨そゝぐはな橘に風すぎてやまほとゝぎすくもに鳴くなり

題しらず　　相摸

聞かでたゞ寐なましものを郭公なかなかなりや夜半のひところ

寛治八年前太政大臣の高陽院の歌合に郭公を　　紫式部

誰が里もとひもやくるとほとゝぎす心の限りまちぞわびまし　　周防内侍

○ころもかたしき　衣片敷き。獨寢して。

○忍びね　音―泣。

○聞きてしも　聞いても。
○こゝろならひに　心の習慣で。

○月のかつら　月の桂に神館の葵かつらを云ひかけてゐるのか。

○草の庵のよるの雨　白樂天の詩に「蘭省花時錦帳下廬山夜雨草庵中。」
○涙なそへそ　涙を添へるなよ。

○聞かでたゞ　聞かないでたゞ。
○なかなかなりや　むしろ聞かない方が樂しみであらうよ。

○まちぞわびまし　一本「まつぞわびしき」

○待ちかね山　待ちかねる―待兼山(攝津國)。
○出でじ　舟を出すまい。○いくよあかし　幾夜明さうとも―明石(播磨國)。
○郭公の歌　後拾遺集卷三に「東路の思ひ出にせむ郭公老曾の森の夜半の一聲」○おいその森　近江國。
○思ひぞあへぬ　ほとゝぎすが鳴いたのだとは…。
○ありあけの歌　古今集卷十三に「有明のつれなく見えし別れより曉ばかり憂きものはなし」
○月ゆゑよりも　月が入るのが恨めしいよりも。
○待たぬに出でぬれど　待たなくても山から出たが。○なほ山深き　時鳥は山が深くて出でやらぬ。

夜をかさね待ちかね山の郭公くもゐのよそにひと聲ぞ聞く

海邊郭公といふことをよみ侍りける　按察使公通

ふた聲ときかずば出でじ郭公いくよあかしのとまりなりとも

百首の歌奉りしとき夏の歌の中に　民部卿範光

郭公なほひとこゑはおもひ出でよおいその森の夜半のむかしを

郭公をよめる　八條院高倉

一聲は思ひぞあへぬほとゝぎすたそがれ時の雲のまよひに

千五百番歌合に　攝政太政大臣

ありあけのつれなく見えし月は出でぬ山郭公まつ夜ながらに

後徳大寺左大臣の家に十首の歌よみ侍りけるによみて遣はしける　皇太后宮大夫俊成

我が心いかにせよとてほとゝぎす雲間の月のかげになくらむ

郭公の心をよみ侍りける　前太政大臣

郭公なきているさの山の端は月ゆゑよりもうらめしきかな

權中納言親宗

ありあけの月は待たぬに出でぬれどなほ山深きほとゝぎすかな

杜間郭公といふことを　藤原保季朝臣

過ぎにけり信太(しのだ)の杜(もり)のほとゝぎす絶えぬしづくを袖にのこして

題しらず　　藤原家隆朝臣

いかにせむ來ぬ夜あまたの郭公またじとおもへば村雨のそら

百首の歌奉りしに　　式子内親王

聲はして雲路にむせぶほとゝぎす涙やそゝぐよひの村さめ

千五百番歌合に　　權中納言公經

ほとゝぎす猶うとまれぬ心かなながなくさとのよその夕ぐれ

題しらず　　西行法師

聞かずともこゝをせにせむ郭公やまだの原のすぎのむらだち

郭公ふかき峯より出でにけり外山のすそにこゑの落ち來る

山家曉郭公といへる心を　　後徳大寺左大臣

小笹ふくしづのまろやのかりの戸をあけがたになく郭公かな

五首の歌人々によませ侍りけるとき夏の歌とてよみ侍りける　　攝政太政大臣

うちしめり菖蒲ぞかをるほとゝぎすなくや五月の雨のゆふぐれ

述懷によせて百首の歌よみ侍りける時　　皇太后宮大夫俊成

今日はまた菖蒲のねさへかけ添へてみだれぞまさる袖の白玉

○信太の杜　和泉國泉北郡。
○絶えぬしづく　涙のこと。
○いかにせむの歌　拾遺集卷十三に「頼めつゝ來ぬ夜あまたになりぬれば待たじと思ふぞ待つに勝れる」
○聲はしての歌　古今集卷三に「聲はして涙は見えぬ時鳥我が衣手の濡(ヒ)づを借らなむ」
○ほとゝぎすの歌　古今集卷三に「郭公汝(ナ)が鳴く里のあまたあれば猶うとまれぬ思ふものから」
○こゝをせにせむ　こゝを(聞く)場所にしよう。
○やまだの原　伊勢國度會郡。
○まろや　假屋。
○あけがた　開け—明け。
○ね　根—泣(ネ)。
○白玉　藥玉に涙の白玉を云ひそへてゐる。

五月五日藥玉つかはし侍りける人に　　大納言經信

あかなくにちりにし花のいろ〳〵はのこりにけりな君が袂に

局ならびに住み侍りける頃五月六日もろともにながめあかしてあしたに

長き根をつゝみて紫式部に遣はしける　　上東門院小少將

なべて世のうきに流るゝ菖蒲草けふまでかゝる根はいかゞ見る

かへし　　紫式部

何事とあやめはわかで今日もなほ袂にあまるねこそ絶えせね

山畦早苗といへる心を　　大納言經信

早苗とる山田のかけひもりにけり引くしめ繩に露ぞこぼるゝ

釋阿に九十の賀給はせ侍りしとき屛風に五月雨　　攝政太政大臣

小山田にひくしめ繩のうちはへて朽ちやしぬらむ五月雨のころ

題しらず　　伊勢大輔

いかばかり田子のもすそもそほつらむ雲間も見えぬ頃の五月雨

大納言經信

みしまえの入江の眞菰雨ふればいとゞしをれて刈る人もなし

前中納言匡房

○藥玉　藥草を玉にして色絲をつけ懸けてお呪ひにしたもの。
○あかなくに　飽きたらずして。

○うき　浮沼(ウキ)

○あやめ　菖蒲―文目(差別)
○袂にあまるね　長い根―繁き泣

○うちはへて　打延へて。

○田子　農夫。
○そぼつ　濡れる。

○みしま江　攝津國三島江。

眞菰かる淀のさは水ふかけれどそこまで月の影はすみけり

雨中木繁といふ心を　　藤原基俊

玉がしはしげりにけりな五月雨に葉守の神のしめはふるまで

百首の歌よませ侍りけるに　　入道前關白太政大臣

さみだれはをふの河原の眞菰草からでや浪の下に朽ちなむ

五月雨の心を　　藤原定家朝臣

玉鉾のみち行く人のことづても絶えてほどふる五月雨のそら

荒木田氏良

さみだれの雲のたえまを眺めつゝ窗より西に月を待つかな

百首の歌奉りし時　　前大納言忠良

あふちさく外面(そとも)の木かげ露おちて五月雨はるゝ風わたるなり

五十首の歌奉りし時　　藤原定家朝臣

さみだれの月はつれなきみ山よりひとりも出づる郭公かな

大神宮に奉りし夏の歌の中に　　太上天皇

郭公くもゐのよそに過ぎぬなり晴れぬおもひのさみだれの頃

建仁元年三月歌合に雨後郭公といへる心を　　二條院讃岐

○葉守の神　葉を守る神。
○しめはふるまで　一本「しめわぶるまで」しめはしめ繩。

○ほどふる　經る—降る。

○西に　月の東から出るのを待つたが遂に出ないで時間を經過してしまつたので。

○あふち　樗。木の名。

○月はつれなき　待つても出ないので斯う云ふ。
○ひとりも　獨りでも。

さみだれの雲間の月のはれゆくをしばし待ちける郭公かな

題しらず　皇太后宮大夫俊成

たれかまた花たちばなにおもひ出でむわれも昔の人となりなば

右衞門督通具

行くすゑを誰しのべとて夕風にちぎりか置かむ宿のたちばな

百首の歌奉りしとき夏の歌　式子內親王

かへり來ぬ昔を今とおもひねの夢のまくらに匂ふたちばな

前大納言忠良

橘のはな散る軒のしのぶ草むかしをかけてつゆぞこぼるゝ

五十首の歌奉りし時　前大僧正慈圓

さつきやみみじかき夜半のうたゝねに花橘のそでにすゞしき

題しらず　讀人しらず

たづぬべき人はのきばの故鄕にそれかとかをる庭のたちばな

ほとゝぎす花たちばなの香をとめて鳴くはむかしの人や戀しき

皇太后宮大夫俊成女

橘のにほふあたりのうたゝねは夢もむかしの袖の香ぞする

○しばし待ちける　暫く待つて晴れて後に鳴いた。

○ちぎりか置かむ　契り置くのか

○昔を今と　昔をいまのやうに思ひ。

○むかしをかけて　昔を兼ね思うて。

○つゆ　涙の露。

○人はのきは　「人は退(ノ)き」を云ひ懸く。

○とめて　求めて。

○むかしの人や戀しき　古今集卷三に「五月待つ花橘の香を嗅げば昔の人の袖の香ぞする」

○昔の袖　昔の人の袖。

藤原家隆朝臣

ことしよりはな咲き初むる橘のいかでむかしの香に匂ふらむ

守覺法親王五十首の歌よませ侍りける時　藤原定家朝臣

夕ぐれはいづれの雲のなごりとて花たちばなにかぜの吹くらむ

堀河院の御時后の宮にて閏五月郭公といふ心をのこどもつかうまつりけるに　權中納言國信

郭公さつきみなづきわきかねてやすらふ聲ぞ空にきこゆる

題しらず　白河院御歌

庭のおもは月もらぬまでなりにけり梢に夏のかげしげりつゝ

惠慶法師

わが宿のそともに立てる楢の葉のしげみにすゞむ夏は來にけり

攝政太政大臣の家の百首の歌合に鵜河をよみ侍りける　前大僧正慈圓

鵜かひ舟あはれとぞ見るものゝふのやそうぢ川の夕闇の空

寂蓮法師

うかひぶね高瀨さしこすほどなれやむすぼほれゆく篝火の影

千五百番歌合に　皇太后宮大夫俊成

○いづれの雲　何人が死して後になつた雲。

○さつきみなつきわきかねて　五月と六月とを差別しかねて。五月の次に閏五月が入つたので。

○そとも　外面。

○ものゝふの　八十氏河の枕詞。
○うぢ川　山城國宇治郡。

○高瀨　高い淺瀨。

大井川かゞりさし行くうかひ舟いく瀬に夏の夜をあかすらむ

藤原定家朝臣

久方の中なる河の鵜かひ舟いかにちぎりてやみを待つらむ

百首の歌奉りし時　攝政太政大臣

いさり火のむかしの光ほの見えて葦屋の里に飛ぶ螢かな

式子内親王

窓ちかき竹の葉すさぶ風の音にいとゞみじかきうたゝねの夢

鳥羽にて竹風夜涼といふことを人々つかうまつりしに　春宮權大夫公繼

まど近きいさゝむら竹かぜ吹けば秋におどろく夏の夜の夢

五十首の歌奉りしとき　前大僧正慈圓

むすぶ手に影みだれ行く山の井のあかでも月のかたぶきにけり

最勝四天王院の障子に清見關かきたる所　權大納言通光

清見潟つきはつれなき天の戸をまたでもしらむ浪のうへかな

家の百首の歌合に　攝政太政大臣

かさねても涼しかりけり夏衣うすきたもとに宿るつきかげ

攝政太政大臣の家にて詩歌を合はせけるに水邊自秋涼といふことをよみ

○かゞり　かゞり火。

○久方の中なるの歌　古今集卷十八に「久方の中に生ひたる里なれば光をのみぞ頼むべらなる」久方は月の枕詞であるが月のことも云ふ。月中に桂がある信仰から久方の中なる川とは桂川。

○むかしの光　伊勢物語に「晴るる夜の星か河邊の螢かも我が住む方の蜑の焚く火か」

○まど近きの歌　朗詠集に「風生竹夜窓間臥。」

○むすぶ手に　水を掬ぶ手によつて。古今集卷八に「掬ぶ手の雫に濁る山の井の飽かでも人に別れぬるかな」

○影　山の井に映る月影。

○清見潟　駿河國庵原郡。

○つきはつれなき　月がつれなく殘つてゐる。

○かさねても　夏衣を。同時に月影を。

侍りける　　有家朝臣

涼しさは秋やかへりてはつせ川ふるかはの邊の杉のしたかげ

題しらず　　西行法師

道の邊に清水ながるゝ柳影しばしとてこそ立ちとまりつれ

よられつる野もせの草のかげろひて涼しく曇るゆふだちの空

崇德院に百首の歌奉りける時　　藤原清輔朝臣

おのづから涼しくもあるか夏ごろも日もゆふぐれの雨のなごりに

千五百番歌合に　　權中納言公經

露すがる庭の玉ざゝうちなびきひとむら過ぎぬゆふだちの雲

雲隔遠望といへる心をよみ侍りける　　源俊頼朝臣

十市には夕だちすらしひさかたの天のかぐ山雲がくれ行く

夏月をよめる　　從三位頼政

庭のおもはまだかわかぬに夕立の空さりげなくすめる月かな

百首の歌の中に　　式子内親王

夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたぶく山にひぐらしのこゑ

千五百番歌合に　　前大納言忠良

〇はつせ川　夏でも涼しいので、秋が却つて恥かしい意味を云ひ懸く。

〇しばしとて　暫時と思つて。
〇立ちとまりつれ　「ここ」を補ひ、つい時間を過した意味。
〇よられ　撚られ。
〇野もせの　野も狭いほどの。

〇あるか　あるかな。
〇日もゆふぐれ　紐結ふ—日も夕暮。

〇十市　大和國十市郡。
〇すらし　するらしい。
〇天のかぐ山　十市郡。

〇さりげなく　さうした夕立のあつたといふ様子もなく。

夕づく日さすや庵の柴の戸にさびしくもあるかひぐらしの聲

百首の歌奉りし時　攝政太政大臣

秋ちかきけしきの杜(もり)に鳴く蟬のなみだの露や下葉そむらむ

二條院讃岐

なく蟬のこゑもすゞしき夕ぐれに秋をかけたるもりのした露

螢の飛びのぼるを見てよみ侍りける　壬生忠見

いづちとかよるは螢の上るらむ行きがたしらぬ草の枕に

五十の首歌奉りし時　攝政太政大臣

螢とぶ野澤にしげる蘆の根のよな〳〵したに通ふあき風

刑部卿賴輔歌合しはべりけるに納涼をよみ侍りける　俊惠法師

楸(ひさぎ)おふるかた山かげにしのびつゝ吹きけるものを秋のはつ風

瞿麥露滋といふことを　高倉院御歌

しらつゆの玉もて結へるませのうちに光さへ添ふとこなつの花

夕顏をよめる　前太政大臣

白露のなさけ置きけることの葉やほの〴〵見えし夕顏の花

百首の歌よみ侍りける中に　式子內親王

○夕づく日　夕日。
○さす　日が差す―戸を鎖(サ)す
○あるか　「か」は感動の助詞。
○けしきの杜　大隅國始良郡。
○秋をかけたる　秋をかねたる。
○よる　寄る―夜。
○草の枕に　旅寢に。
○よな　蘆のよ（節と節との間の部分）に夜なを云ひ懸く。よなよなは夜毎に。
○しのびつゝ　ひそかに。
○はつ風　一本「夕ぐれ」
○玉もて結へる　露の玉が置いてそれで結うたやうな。
○ませ　ませ垣。目の荒い垣。
○白露のの歌　源氏物語夕顏卷に「心あてにそれかとぞ見る白露の光添へたる夕顏の花」「寄りてこそそれかとも見め黃昏にほの〴〵見つる花の夕顏」

黄昏(たそがれ)の軒端の荻にともすればほにいでぬ秋ぞしたにことゝふ

夏の歌とてよみ侍りける　　前大僧正慈圓

雲まよふゆふべに秋をこめながら風もほに出でぬ荻のうへかな

大神宮に奉りし夏の歌の中に　　太上天皇

やまざとのみねのあま雲とだえしてゆふべ涼しきまきの下露

文治六年女御入内の屏風に　　入道前關白太政大臣

岩井くむあたりの小笹玉こえてかつぐ〳〵むすぶ秋のゆふ露

千五百番歌合に　　宮内卿

かたえさす麻生(をふ)の浦梨(うらなし)はつ秋になりもならずも風ぞ身にしむ

百首の歌奉りし時　　前大僧正慈圓

夏衣かたへ涼しくなりぬなり夜や更けぬらむゆきあひの空

延喜の御時月次の屏風に　　壬生忠岑

夏はつるあふぎと秋の白露といづれかさきにおかむとすらむ

貫之

みそぎする河の瀨見ればから衣ひもゆふぐれに波ぞ立ちける

○ほにいでぬ秋　穗のやうに外面にあらはに出ない秋。次の歌參照
○したにことゝふ　忍び〳〵に言問ふ。

○岩井くむ　岩の所にある井水を汲む。
○玉　水玉。

○かたえさすの歌　古今集卷二十に「麻生(ヲフ)の浦に片枝さし覆ひ生る梨の成りも成らずも寢て語らはむ」
○かたへ涼しく　古今集卷三に「夏と秋と行きかふ空の通ひ路はかたへ涼しき風や吹くらむ」
○さきに　一本「まづは」
○おかむ　扇を舍かむ―白露が置かむ。
○みそぎ　六月祓ひに行はれる禊
○ひもゆふぐれ　紐結ふ―日も夕暮。

新古今和歌集　巻第四

秋歌上

題しらず　　中納言家持

かみなびの三室のやまの葛かづらうら吹きかへす秋は來にけり

百首の歌に初秋の心を　　崇徳院御歌

いつしかと荻の葉むけの片よりにそゝや秋とぞ風もきこゆる

藤原季通朝臣

此の寐ぬる夜の間に秋は來にけらし朝けの風の昨日にも似ぬ

文治六年女御入內の屛風に　　後徳大寺左大臣

いつも聞く麓の里とおもへども昨日にかはる山おろしの風

百首の歌よみける中に　　藤原家隆朝臣

きのふだにとはむと思ひし津の國の生田の森に秋は來にけり

最勝四天王院の障子に高砂かきたる所　　藤原秀能

吹くかぜの色こそ見えね高砂のをのへの松に秋は來にけり

○うら吹きかへす　葛の葉の裏を吹き返す。

○荻の葉むけの片よりに　荻の葉を片よりに吹き向けて。

○そゝや　風のそよぐ音に「其ぞや」を云ひ懸く。

○朝け　朝。

○きのふだに　夏の內の昨日でも　詞花集卷三に「君住まば問はましものを津の國の生田の森の秋の初風」

○色こそ見えね　「ど」を補ふ。

百首の歌奉りし時　　皇太后宮大夫俊成

ふしみ山松のかげより見わたせば明くる田の面に秋風ぞふく

守覺法親王五十首の歌よませ侍りける時　　藤原家隆朝臣

明けぬるか衣手さむしすがはらや伏見のさとの秋のはつ風

千五百番歌合に　　攝政太政大臣

深草の露のよすがをちぎりにてさとをばかれず秋は來にけり

右衞門督通具

あはれ又いかにしのばむ袖のつゆ野はらの風にあきは來にけり

源具親

敷妙（しきたへ）のまくらのうへに過ぎぬなり露をたづぬる秋のはつかぜ

顯昭法師

水莖の岡のくず葉もいろづきて今朝うらがなしあきの初風

越前

あきはたゞ心よりおくタ露を袖のほかとも思ひけるかな

五十首の歌奉りしとき秋の歌　　藤原雅經

昨日までよそにしのびし下荻のすゑ葉の露にあき風ぞ吹く

○ふしみ山　山城國紀伊郡。
○ふしみ　伏し見る意味を云ひ懸く。

○深草　山城國紀伊郡。深い草を云ひ懸く。
○よすが　より所。
○かれず　離れず—枯れず。
○袖の露　袖をぬらす涙の露。

○敷妙の　「枕」の枕詞。

○水莖の岡　近江國蒲生郡。

○袖のほかと　袖に外の木草にのみ露は置くものと。

○よそにしのびし　外へ聞えないやうに忍んで吹いた。

題しらず　西行法師

おしなべて物を思はぬ人にさへ心をつくる秋のはつかぜ

崇徳院に百首の歌奉りける時　皇太后宮大夫俊成

あはれいかに草葉の露のこぼるらむ秋風たちぬ宮城野の原

中納言中將に侍りけるとき家に山家早秋といへる心をよませ侍りけるに　法成寺入道前關白太政大臣

水澀(みしぶ)つき植ゑし山田に引板(ひた)はへてまた袖ぬらす秋は來にけり

題しらず　中務卿具平親王

朝霧やたつたの山の里ならで秋來にけりと誰か知らまし

夕暮は荻吹く風のおとまさる今はたいかに寐覺せられむ

後徳大寺左大臣

ゆふされば荻の葉むけを吹く風にことぞともなく涙落ちけり

崇徳院に百首の歌奉りし時　皇太后宮大夫俊成

をぎの葉も契りありてや秋風のおとづれそむるつまとなるらむ

題しらず　七條院權大夫

秋來ぬと松ふく風もしらせけりかならず荻のうは葉ならねど

○あはれ　あゝ。
○宮城野の原　陸前國。
○引板　なるこ板。
○はへて　延へて。
○たつたの山　朝霧の立つを云ひ懸く。
○さとならで　里ならずしては。
○ゆふされば　夕方になると。
○ことぞともなく　何故といふ事も無く。
○契りありてや　前の契りがあつてか。
○つま　端―妻。

題を探りこれかれ歌よみたるに信太（しのだ）の杜の秋風をよめる　藤原經衡

日をへつゝ音こそまされいづみなる信太のもりの千枝の秋かぜ

百首の歌に　式子内親王

うたゝねの朝けの袖にかはるなりならす扇のあきのはつ風

題しらず　相撲

手もたゆくならすあふぎのおき所わするばかりに秋風ぞふく

大貳三位

秋かぜは吹きむすべどもしら露のみだれて置かぬ草の葉ぞなき

曾禰好忠

あさぼらけ荻の上葉の露見ればやゝはださむし秋のはつかぜ

小野小町

吹きむすぶ風はむかしの秋ながらありしにも似ぬそでの露かな

延喜の御時月次の屛風に　紀貫之

大空をわれもながめて彦星の妻まつ夜さへひとりかもねむ

題しらず　山邊赤人

このゆふべ降り來る雨はひこぼしのと渡る舟の櫂のしづくか

○信太の杜の千枝の秋風　古歌に「和泉なる信田の森の楠の葉の千枝に分れて物をこそ思へ」

○ならす扇のあきのはつ風　手馴らした扇が秋の初風に（かはる）。

○ありしにも似ぬ　我が身の昔あつたやうでもない。

○彦星　牽牛星。

○妻　織女星。

○このゆふべの歌　古今集巻十七に「我か上に露ぞ置くなる天の川とわたる船の櫂の雫か」

宇治前關白太政大臣の家に七夕の心をよみ侍りける　　權大納言長家

年を經てすむべき宿の池水は星合のかげもおもなれやせむ

花山院の御時七夕の歌つかうまつりけるに　　藤原長能

袖ひぢて我が手にむすぶ水の面に天つ星合のそらをみるかな

七月七日たなばた祭する所にてよみける　　祭主輔親

雲間より星合の空を見わたせばしづごゝろなき天の川なみ

七夕の歌とてよみ侍りける　　太宰大貳高遠

たなばたのあまの羽衣うちかさね寢るよすゞしきあき風ぞふく

　　小辨

たなばたの衣のつまは心して吹きなかへしそ秋のはつ風

　　皇太后宮大夫俊成

たなばたのとわたる舟のかぢの葉にいく秋かきつ露の玉づさ

百首の歌の中に　　式子內親王

ながむれば衣手すゞしひさ方のあまの河原の秋のゆふぐれ

家に百首の歌よみ侍りける時　　入道前關白太政大臣

いかばかり身にしみぬらむ棚機のつま待つよひの天の川かぜ

○年を經て　年を經るにつれて。○星合のかげも　織女牽牛二星の逢ふ影も度々映すので。○おもなれ　面馴れ。○袖ひぢて　袖を濡らして。

○しづごゝろ　靜かな心。

○心して　注意して。

○かぢの葉にいく秋かきつ　梶の葉に幾枚書いたことか。七夕の夜は思ふことを梶の葉に書いて祭ると思ふことがかなふと云はれる。○衣手　袖。

○もみぢの橋　古今集卷四に「天の川紅葉の橋に渡せはや棚機つめの秋をしも待つ」

○わくらばに　たまさかに。
○よる　寄る―夜。

○思ひけぬ　思ひ消えぬ。

○鹿のしがらみ　浮いて流れない萩の花が鹿のしがらみをふせたやうに見えるのを云ふ。詞花集卷十にも「朝な〳〵鹿のしがらむ萩が枝の」などと見えた。
○かりごろも　狩衣。

○つきぐさの花ずりごろも　古今集卷四に「月草に衣は摺らむ朝露に濡れての後は移ろひぬとも」

七夕のこゝろを　　權中納言公經

星合のゆふべ涼しきあまの河もみぢの橋をわたる秋風

待賢門院堀河

たなばたの逢ふ瀬たえせぬ天の河いかなる秋かわたりそめけむ

女御徽子女王

わくらばに天の川浪よるながら明くる空にはまかせずもがな

大中臣能宣朝臣

いとゞしく思ひけぬべし棚機のわかれの袖に置けるしら露

中納言兼輔の家の屛風に　　紀貫之

棚機はいまやわかるゝあまのがは河霧たちてちどり鳴くなり

堀河院の御時百首の歌の中に萩をよみ侍りける　　前中納言匡房

河水に鹿のしがらみかけてけり浮きてながれぬ秋萩のはな

題しらず　　從三位賴政

かりごろも我とは摺らじ露しげき野原の萩の花にまかせて

權僧正永緣

秋萩ををらではすぎじつきぐさの花ずりごろも露にぬるとも

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに　　顯昭法師

萩がはなま袖にかけて高圓(たかまど)のをのへのみやに領巾(ひれ)ふるやたれ

題しらず　　祐子内親王家紀伊

置くつゆのしづごゝろなく秋風に亂れてさける眞野の萩原

人麿

秋萩のさきちる野邊の夕露にぬれつゝ來ませ夜はふけぬとも

中納言家持

さを鹿のあさ立つ小野のあき萩にたまと見るまでおけるしら露

凡河内躬恒

秋の野をわけゆく露にうつりつゝ我が衣手は花の香ぞする

小野小町

誰をかもまつちの山のをみなへし秋とちぎれる人ぞあるらし

藤原元眞

をみなへし野邊のふるさと思ひ出でて宿りし蟲のこゑや戀しき

千五百番歌合に　　左近中將良平

夕されば玉ちる野邊の女郎花まくらさだめぬあき風ぞふく

○ま袖　「ま」は接頭語。
○高圓のをのへの宮　孝謙天皇の頃の離宮。大和國添上郡。
○領巾　細い巾で婦人が領(エリ)にかけた物。人を招く時などに振る。
○眞野の萩原　大和國か。

○さを鹿　さ小鹿。「さ」は接頭語。
○小野　一本「野邊」

○まつちの山　待つ―眞土山(大和國宇智郡)。
○秋と　秋に逢はうと。
○野邊のふるさと　もと在った野邊。今は庭に移されてゐるのでかう云ふ。
○宿りし蟲　野邊に在った頃宿った蟲。
○玉　露の玉―涙の玉。
○あき　「厭き」を云ひ懸く。

蘭をよめる　　公猷法師

ふぢばかま主は誰ともしら露のこぼれて匂ふ野邊のあきかぜ

崇徳院に百首の歌奉りし時　　藤原清輔朝臣

薄霧のまがきの花の朝じめり秋はゆふべとたれかいひけむ

入道前關白太政大臣右大臣に侍りけるとき百首の歌よませ侍りけるに　　皇太后宮大夫俊成

いとかくや袖はしをれし野邊に出でてむかしも秋の花は見しかど

筑紫に侍りけるとき秋野を見てよみ侍りける　　大納言經信

花見にと人やりならぬ野邊に來て心のかぎり盡しつるかな

題しらず　　曾禰好忠

おきて見むと思ひしほどに枯れにけり露よりけなる朝がほの花　　貫之

山賤(やまがつ)のかきほにさける朝顔はしのゝめならで逢ふよしもなし　　坂上是則

うらがるゝ淺茅がはらの刈萱(かるかや)のみだれて物を思ふころかな　　人麿

○主は誰とも　古今集巻四に「主知らぬ香こそ匂へれ秋の野に誰が脱ぎかけし藤袴ぞも」
○しら露　「知らぬ」を云ひ懸く。
○朝じめり　朝じめりの様は眞になつかしい。
○秋はゆふべと　秋は夕がいいとは。
○いとかくや袖はしをれし　そんなに甚しく袖に萎れたらうか。
○筑紫　九州の古稱。
○露よりけなる　露より殊にはかない。
○しのゝめ　夜明け方。
○うらがるゝ　下葉から枯れる。
○刈萱の　刈萱と同様に。

さをしかのいる野のすゝきはつ尾花いつしか妹が手枕にせむ

讀人しらず

小倉山ふもとの野邊の花すゝきほのかに見ゆるあきの夕暮

女御徽子女王

百首の歌に

ほのかにも風はふかなむ花すゝきむすぼほれつゝ露にぬるとも

式子内親王

攝政太政大臣の家に百首の歌よませ侍りけるに

花薄まだ露ふかし穂に出でてながめじとおもふ秋のさかりを

八條院六條

和歌所の歌合に朝草花といふことを

野邊ごとにおとづれわたる秋風をあだにもなびく花薄かな

左衛門督通光

題しらず

あけぬとて野邊より山にいる鹿のあと吹きおくる萩の下かぜ

前大僧正慈圓

崇德院の御時百首の歌めしけるに荻を

身にとまるおもひを荻のうは葉にてこのごろ悲しゆふぐれの空

大藏卿行宗

秋歌よみ侍りけるに

みのほどを思ひつゞくる夕暮の荻の上葉に風わたるなり

源重之女

○ふかなむ　吹いてくれ。

○まだ露ふかし　拾遺集卷十二に「忍ぶれば苦しかりけりしの薄秋の盛りになりやしなまし」

○穂に出でて　外面に出して。

○あだにも　徒らにも。

○あけぬ　夜が明けた。

○荻のうは葉にて　荻の上葉として。思ひが荻の上葉となつて。

秋はたゞものをこそ思へ露かゝる荻のうへ吹く風につけても

堀河院に百首の歌奉りける時　　藤原基俊

秋風のやゝはだ寒く吹くなべに荻のうは葉の音ぞかなしき

百首の歌奉りし時　　攝政太政大臣

荻の葉にふけば嵐の秋なるを待ちける夜半のさをしかのこゑ

おしなべて思ひしことのかず〳〵になほ色まさる秋の夕暮

題しらず

暮れかゝるむなしき空の秋を見ておぼえずたまる袖の露かな

家に百首の歌合し侍りけるに

もの思はでかかる露やは袖におくながめてけりな秋のゆふぐれ

をのこども詩を作りて歌に合はせ侍りしに山路秋行といふことを　　前大僧正慈圓

み山路やいつより秋の色ならむ見ざりし雲のゆふぐれの空

題しらず　　寂蓮法師

さびしさはその色としもなかりけり槇たつ山の秋のゆふぐれ

西行法師

こゝろなき身にもあはれはしられけり鴫立つ澤の秋の夕ぐれ

○ものをこそ思へ　物思ひする。
○吹くなべに　吹くと同時に。
○嵐の秋なるを　嵐が秋であるのを。
○おしなべて　一通りに。
○おぼえず　思はず。
○かかる露やは袖におく　かやうな露は袖に置かうかい。
○ながめてけりな　物思ひして詠めたことだ。
○いつより秋の色ならむ　いつより紅葉して秋の色であるんだらう
○見ざりし雲　今まで見なかつた紅の雲。
○その色としもなかりけり　どの色と定めて寂しくもないことだ。(どの色となく寂しいの意味)
○こゝろなき　俗念のない。
○鴫立つ澤　鴫の飛び立つ澤。

西行法師すゝめて百首の歌よませ侍りけるに　藤原定家朝臣

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやのあきの夕暮

五十首の歌奉りし時　藤原經

たへてやは思ひありともいかゞせむ葎のやどの秋のゆふぐれ

秋の歌とてよみ侍りける　宮内卿

思ふことさしてそれとはなきものを秋のゆふべを心にぞとふ

鴨長明

秋風のいたり至らぬ袖はあらじたゞわれからの露の夕ぐれ

西行法師

覺束な秋はいかなるゆゑのあればすゞろに物の悲しかるらむ

式子内親王

それながら昔にもあらぬ秋風にいとゞながめをしづの苧環（をだまき）

題しらず　藤原長能

ひぐらしのなく夕暮ぞうかりけるいつもつきせぬ思ひなれども

和泉式部

秋來ればときはの山の松風もうつるばかりに身にぞしみける

○花も紅葉もなかりけり　花も紅葉もありはしない。（いらないといふ意味）。
○とまや　苫を葺いた屋。
○たへてやは　いかゞせむ。いかがこらへて居らうかい。
○思ひありとも　伊勢物語に「思ひあらば葎の宿に寝もしなむひじき物には袖をしつゝも」
○さして　指して。
○われからの露　我が心からの涙の露。
○すゞろに　自然と。
○それながら　同じ昔の秋風ながら。
○昔にもあらぬ　我が身の…。
○しづの苧環　「詠めをしつ」と云ひ懸る。
○うつるばかりに　色に出るほど

曾禰好忠

あき風のよもに吹き來る音羽山なにの草木かのどけかるべき

相摸

あかつきの露もなみだもとゞまらで恨むるかぜの聲ぞのこれる

法性寺入道前關白太政大臣の家の歌合に野風

藤原基俊

高圓(たかまど)の野路のしの原末さわぎそゝやこがらし今日吹きぬなり

千五百番歌合に

右衞門督通具

ふか草の里の月影さびしさもすみこしまゝの野邊のあき風

五十首の歌奉りしとき杜間月といふことを

皇太后宮大夫俊成女

大荒木のもりの木の間をもりかねて人だのめなる秋の夜の月

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに

藤原家隆朝臣

有明の月まつ宿の袖のうへに人だのめなる宵のいなづま

攝政太政大臣の家の百首の歌合に

藤原有家朝臣

かぜわたる淺茅がするの露にだに宿りもはてぬよひの稻妻

水無瀬にて十首の歌奉りし時

左衞門督通光

武藏野やゆけども秋のはてぞなきいかなる風の末に吹くらむ

○よもに　四方に。
○音羽山　山城國宇治郡。

○あかつきの歌　朗詠集七夕詩に「風從昨夜聲彌怨。露及明朝淚不禁。」
○野風　一本、野風を。
○そゝや　そよぐ音に「其そや」と云ひ懸く。そそやは「すはや」の意味。
○すみこしまゝの　昔から住み來しまゝの。

○大荒木のもり　山城國乙訓郡。
○人だのめなる　人が心頼みにしてゐる。

○露にだに　はかない露にさへ。
○宿りもはてぬ　宿りも果てないはかない。
○秋のはてぞなき　どこまで行つても秋の風情である。

百首の歌奉りしとき月の歌に　　前大僧正慈圓

いつまでか涙くもらで月は見し秋待ちえても秋ぞこひしき

式子内親王

眺めわびぬ秋より外の宿もがな野にも山にも月やすむらむ

題しらず　　圓融院御歌

月影のはつ秋風とふき行けば心づくしに物をこそおもへ

三條院御歌

足引の山のあなたに住む人はまたでや秋の月を見るらむ

雲間微月といふことを　　堀河院御歌

しきしまやたかまど山の雲間よりひかりさしそふ弓張の月

題しらず　　堀河右大臣

人よりも心のかぎりながめつる月はたれともわかじものゆゑ

橘爲仲朝臣

あやなくも曇らぬ宵をいとふかなしのぶの里の秋の夜の月

法性寺入道前關白太政大臣

風吹けばたまちる萩のした露にはかなくやどる野邊の月かな

○いつまでかの歌　秋の月は冴えてゐるのにいつまで涙にくもらない月を見たことか。だから秋にはなつても秋が戀しいことだ。(さえた秋の月を見たいので。)
○野にも山にも月やすむらむ　秋より外の宿をほしくても野にも山にも到る所月は澄まないだらう。(涙のために。)

○またで　待たないで。月の出る山の向うに住んでゐるので。

○しきしまや　枕詞。

○あやなくも　無上に。
○しのぶの里　陸奥國。

従三位頼政

こよひたれ篶(すゞ)吹く風を身にしめて吉野のたけの月を見るらむ

法性寺入道前關白太政大臣の家に月の歌あまたよみ侍りけるに　太宰大貳重家

月見れば思ひぞあへぬ山高みいづれの年の雪にかあるらむ

和歌所の歌合に湖邊月といふことを　藤原家隆朝臣

鳰(にほ)の海や月のひかりのうつろへば浪の花にも秋は見えけり

百首の歌奉りしとき秋の歌の中に　前大僧正慈圓

ふけ行かばけぶりもあらじ鹽竈のうらみなはてそ秋の夜の月

題しらず　皇太后宮大夫俊成女

ことわりの秋にはあへぬ涙かな月の桂もかはるひかりに

藤原家隆朝臣

ながめつゝ思ふもさびしひさかたの月の都のあけがたの空

五十首の歌奉りしとき月前草花　攝政太政大臣

故郷のもとあらの小萩さきしより夜な／＼庭の月ぞうつろふ

建仁元年三月歌合に山家秋月といふことをよみ侍りし

ときしもあれふる里人は音もせでみやまの月に秋風ぞ吹く

○篶　笹。

○いづれの年の雪　月光を雪に見立てゝゐる。

○鳰の海　琵琶湖のこと。
○浪の花にも秋は見えけり　古今集巻五に「草も木も色かはれども わたつみの浪の花にぞ秋なかりける」

○うらみなはてそ　恨み果てるなよ。「浦見」を云ひ懸く。

○あへぬ　こらへぬ。
○月の桂もかはるひかりに　古今集巻四に「久方の月の桂も秋はなほ紅葉すればや照りまさるらむ」
○月の都　月宮殿。

○もとあらの小萩　本の粗(アラ)い小萩。

○音もせで　音沙汰もせず。

八月十五夜和歌所の歌合に深山月といふことを

深からぬ外山のいほの寐覺だにさぞな木の間の月はさびしき

月前松風　　寂蓮法師

月はなほもらぬ木の間も住吉の松をつくして秋かぜぞふく

鴨長明

ながむればちゞにもの思ふ月にまた我が身ひとつの嶺のまつ風

山月といふことをよみ侍りける　　藤原秀能

あしびきの山路の苔の露のうへにねざめ夜深き月を見るかな

八月十五夜和歌所の歌合に海邊秋月といふことを　　宮内卿

こゝろある雄島のあまの袂かな月やどれとは濡れぬものから

宜秋門院丹後

わすれじな難波の秋の夜半の空こと浦にすむ月は見るとも

鴨長明

松島やしほくむ蜑の秋の袖月はもの思ふならひのみかは

題しらず　　七條院大納言

こと問はむ野島が崎のあまごろもなみと月とにいかゞしをるゝ

○寐覺だに　寐覺に見るにでも。

○木の間も　一本「木の間を」

○松をつくして　松のある限り。

○ちゞ　千箇に、様々に。

○我が身ひとつの嶺のまつ風　私一身には月の外に更に嶺の松風があるので。

○月やどれとはぬれぬものから　月に宿れといふために濡れたのではないながら。

○わすれじな　忘れまいな。

○こと浦に　他の浦に。

○蜑の秋の袖　物思ひのない海人の袖に月が宿つて居るのを見ると

○月はもの思ふならひのみかは　月は物思ひする人に宿る習ひばかりではない。

○野島が崎　淡路國津名郡。

○月やをしまの　「月を惜しむのか」の意味に雄島を云ひ懸く。
○あまの原　蒼―天の原。

○心に曇る　心に晴れない。

○いづくにか今宵の月の曇るべき　いづくに於ても今宵の明月の曇る筈があらうか。
○小倉の山も名をやかふらむ　をぐら(小倉)といふ名を變へようか

○かはらじな　變るまいな。

○たのめたる人　來るだらうと心頼みの人。
○寢べきこゝちこそせね　寢られる心地がしない。

○かげとこそ見れ　影と見る。
○袖にうつらぬ折しなければ　月見れば涙で袖が濡れて月の映らない折がないから。

和歌所の歌合に海邊月を　藤原家隆朝臣

秋の夜の月やをしまのあまの原あけがた近き沖の釣舟

題しらず　前大僧正慈圓

うき身にはながむるかひもなかりけり心に曇るあきの夜の月

大江千里

いづくにか今宵の月の曇るべき小倉の山も名をやかふらむ

源道濟

心こそあくがれにけれ秋の夜のよぶかき月をひとり見しより

上東門院小少將

かはらじな知るもしらぬも秋の夜の月まつほどの心ばかりは

和泉式部

たのめたる人はなけれど秋の夜は月見て寢べきこゝちこそせね

月を見て遣はしける　藤原範永朝臣

みる人の袖をぞしぼる秋の夜は月にいかなる影かそふらむ

かへし　相模

身に添へるかげとこそ見れ秋の月袖にうつらぬ折しなければ

永承四年内裏の歌合に　大納言經信

月かげのすみわたるかな天の原くも吹きはらふ夜半のあらしに

題しらず　左衞門督通光

たつた山夜はにあらしの松ふけば雲にはうとき峯の月かげ

崇德院に百首の歌奉りけるに　左京大夫顯輔

秋風にたなびく雲のたえ間よりもれ出づる月の影のさやけさ

題しらず　道因法師

山の端に雲のよこぎる宵の間は出でても月ぞなほ待たれける

殷富門院大輔

ながめつゝ思ふにぬるゝ袂かな幾世かは見む秋の夜の月

式子内親王

宵の間にさてもねぬべき月ならば山の端ちかきものは思はじ

ふくるまで眺むればこそ悲しけれ思ひも入れじ秋の夜の月

五十首の歌奉りし時　攝政太政大臣

雲はみなはらひはてたる秋かぜを松にのこして月を見るかな

家に月五十首の歌よませ侍りける時

○あらしの　嵐が。
○松ふけば　松を吹けば。

○出でても　山から出ても雲がさへぎるので。

○思ふに　我が身の老を思ふに。
○幾世かは見む　もう行末幾世見られようかい。

○さてもねぬべき月ならば　そのまゝに寢られるやうな月ならば。
○思ひも入れじ　思ひ入れて更けるまで眺めることをしまい。宵の内に切り上げようの意味。

○松にのこして　秋風が松にだけ吹いて。
○月を　晴れた月を。

月だにもなぐさめがたき秋の夜のこゝろも知らぬ松の風かな

藤原定家朝臣

さむしろや待つ夜のあきの風更けて月をかたしく宇治の橋ひめ

題しらず　　右大將忠經

秋の夜の長きかひこそなかりけれ待つにふけぬる有明の月

五十首の歌奉りけるに野徑月　　攝政太政大臣

ゆくすゑは空もひとつの武藏野に草の原より出づるつきかげ

雨後月　　宮内卿

月をなほ待つらむものかむらさめの晴れゆく雲のすゑの里びと

題しらず　　右衞門督通具

秋の夜はやどかる月も露ながら袖に吹きこす荻のうはかぜ

源家長

秋の月しのにやどかるかげたけて小笹が原に露ふけにけり

元久元年八月十五夜和歌所にて田家見月といふことを　　前太政大臣

風わたる山田のいほをもる月や穗浪にむすぶこほりなるらむ

和歌所の歌合に田家月を　　前大僧正慈圓

○月だにも　月だけ見ても。
○こゝろも知らぬ松の風かな　心得もなく更に私の心を慰めがたくする松の風よ。
○さむしろやの歌　古今集卷十四に「さ筵に衣片敷き今宵もやわれをも待つらむ宇治の橋姫」
○空もひとつの　野と空とが一つになつてゐる。
○月をなほ待つらむものか　やはり月を待つだらう。
○雲のすゑの里びと　雲のある彼方の方にある里人。
○やどかる月も　露に宿を借りる月をも。
○露ながら　露に宿つたまゝ。
○袖に　涙で濡れた袖に。
○いほ　庵。
○もる　洩る―守る。

鴈の來るふしみの小田に夢さめて寢ぬ夜の庵に月を見るかな

皇太后宮大夫俊成女

稻葉ふく風にまかせてすむ庵は月ぞまことにもりあかしける

題しらず

あくがれて寢ぬ夜の塵のつもるまで月に拂はぬ牀のさむしろ

大中臣定雅

秋の田のかりねの牀のいなむしろ月宿れともしける露かな

左京大夫顯輔

崇德院の御時百首の歌めしけるに

あきの田に庵さす賤の苫をあらみ月と共にやもり明かすらむ

式子內親王

百首の歌奉りしとき秋の歌に

秋の色はまがきにうとくなり行けど手枕なるゝ閨の月影

太上天皇

秋の歌の中に

あきの露や袂にいたくむすぶらむ長き夜あかずやどる月かな

左衞門督通光

千五百番歌合に

さらにまた暮をたのめと明けにけり月はつれなき秋の夜のそら

二條院讚岐

經房卿の家の歌合に曉月の心をよめる

○ふしみ　臥し見―伏見（山城國）
○かりね　刈り根―假寢。
○しける　敷ける
○庵さす　庵を作る。
○苫をあらみ　苫葺きが粗いので
○なるゝ　馴れる。
○暮をたのめ　暮れるのを頼みにせよ。

大方のあきのねざめの露けくばまた誰が袖にありあけの月

五十首の歌奉りし時　藤原雅經

はらひかねさこそは露のしげからめ宿るか月の袖のせばきに

○大方の　世の中一般の。
○露けくば　露けきものならば。
○誰が袖にありあけの月　自分以外に誰の袖にこの有明の月は宿つてあるのだらう。
○はらひかねの歌　拂つても〳〵拂ひかねるほど、さやうに露が繁くあらうが、而も月が袖の狹いのに宿ることよ。

新古今和歌集　巻第五

秋歌　下

和歌所にてをのこども歌よみ侍りしに夕鹿といふことを　　藤原家隆朝臣

した紅葉かつちる山の夕時雨ぬれてやひとり鹿の鳴くらむ

百首の歌奉りし時　　入道左大臣

山おろしに鹿の音高くきこゆなり尾上の月にさ夜や更けぬる

寂蓮法師

野分（のわき）せし小野の草ぶしあれはててみ山に深きさをしかの聲

題しらず　　俊恵法師

嵐吹く眞葛が原になく鹿はうらみてのみや妻を戀ふらむ

前中納言匡房

妻戀ふる鹿のたちどをたづぬれば狹山（さやま）がすそに秋風ぞふく

百首の歌奉りしとき秋の歌　　惟明親王

み山邊の松のこずゑをわたるなりあらしにやどすさを鹿の聲

○ひとり　片戀で妻に逢はないので獨り。

○尾上　山上。

○野分　秋から冬にかけて吹く烈風。

○うらみて　裏見て（風で葛の葉が返るので）恨みて（妻に逢へないので）

○たちど　立ち所。

○狹山　武藏國北多摩郡か。

○あらしにやどす　嵐に副ひて渡る。

晩聞鹿といふことをよみ侍りし　土御門内大臣

我ならぬ人もあはれやまさるらむ鹿なく山の秋の夕ぐれ

百首の歌よみ侍りけるに　攝政太政大臣

たぐへくる松の嵐やたゆむらむ尾上にかへるさをしかの聲

千五百番歌合に　前大僧正慈圓

なく鹿のこゑに目ざめてしのぶかな見はてぬ夢の秋のおもひを

家に歌合し侍りけるに鹿をよめる　權中納言俊忠

夜もすがらつま戀ふ鹿の鳴くなべに小萩が原の露ぞこぼるゝ

題しらず　源道濟

寐覺してひさしくなりぬ秋の夜は明けやしぬらむ鹿ぞ鳴くなる

西行法師

小山田の庵ちかく鳴く鹿の音におどろかされて驚かすかな

白河院鳥羽におはしましけるに田家秋興といへることを人々よみ侍りけるに　中宮大夫師忠

やまざとの稻葉の風に寐覺して夜ぶかく鹿のこゑをきくかな

郁芳門院の前栽合(せんざいあはせ)によみ侍りける　藤原顯綱朝臣

○我ならぬ人　自分以外の人。

○たぐへくる　鹿の聲が副うて來る。

○たゆむらむ　風勢が撓んだのだらうか。

○尾上にかへる　尾上にかへるやうに聲が段々遠ざかる。

○しのぶ　懷かしな。

○鳴くなべに　鳴くにつれて。

○おどろかされて驚かすかな　鹿の聲に目覺めさせられて、又鳴子など引いて鹿を驚かすことだ。

○稻葉の風　稻の葉をそよがす風

獨寢やいとゞさびしきさを鹿のあさふす小野の葛のうら風

題しらず　　俊惠法師

立田山こずゑまばらになるまゝに深くも鹿のそよぐなるかな

祐子内親王の家の歌合の後鹿の歌よみはべりけるに　　權大納言長家

過ぎて行く秋の形見にさを鹿のおのが鳴く音も惜しくやあるらむ

攝政太政大臣の家の百首の歌合に　　前大僧正慈圓

わきてなど庵もるそでのしをるらむ稻葉にかぎる秋の風かは

題しらず　　讀人しらず

あき田もるかり庵つくり我がをれば衣手寒し露ぞおきける

前中納言匡房

秋くれば朝けの風の手をさむみ山田の引板(ひた)をまかせてぞ聞く

善滋爲政朝臣

ほとゝぎすなく五月雨にうゑし田をかりがね寒み秋ぞくれぬる

中納言家持

今よりは秋風さむくなりぬべしいかでかひとり長き夜をねむ

人麿

○そよぐ　落葉を踏み分けてそよそよ音させる。
○わきて　とりわけて。
○など　何として。
○手をさむみ　引板を引く手が寒いので。
○かりがね　刈りが根—鴈がね。

○わさ田　早稻の田。

○草葉には　草葉に置いたのは。

○なにごとをかは思ひおくらむ　何事を物思ひして、かやうに白露(淚の露に喩ふ)が置くのだらうか

秋されば雁のはかぜに霜ふりてさむき夜な〱時雨さへ降る

さを鹿の妻とふ山の岡べなるわさ田はからじ霜はおくとも

貫之

かりてほす山田の稻は袖ひぢてうゑし早苗と見えずもあるかな

菅贈太政大臣

草葉にはたまと見えつゝわび人の袖のなみだの秋のしらつゆ

中納言家持

わがやどの尾花がすゑの白露のおきし日よりぞ秋風も吹く

惠慶法師

秋といへばちぎり置きてや結ぶらむ淺茅が原の今朝のしらつゆ

人麿

秋さればおく白露にわが宿の淺茅がうは葉いろづきにけり

天暦御歌

おほつかな野にも山にもしら露のなにごとをかは思ひおくらむ

堀河右大臣

後冷泉院みこの宮と申しけるとき尋野花といへる心を

露しげみ野邊をわけつゝから衣ぬれてぞかへる花のしづくに

閑庭露滋といふことを　藤原基俊

庭の面にしげる蓬にことよせてこゝろのまゝに置ける露かな

白河院にて野草露滋といへる心をのこどもつかうまつりけるに　贈左大臣長實

あきの野の草葉おしなみ置く露にぬれてや人のたづね行くらむ

百首の歌奉りし時　寂蓮法師

もの思ふそでより露やならひけむ秋風ふけばたへぬものとは

秋の歌の中に　太上天皇

露は袖にもの思ふ頃はさぞな置くかならず秋のならひならねど

野原より露のゆかりをたづね來て我が衣手に秋風ぞ吹く

題しらず　西行法師

きりぎりす夜寒に秋のなるまゝによわるか聲の遠ざかり行く

守覺法親王の家の五十首の歌の中に　藤原家隆朝臣

蟲の音もながき夜あかぬ故郷になほおもひ添ふ秋風ぞふく

百首の歌の中に　式子内親王

あともなき庭の淺茅にむすぼほれ露のそこなるまつ蟲のこゑ

題しらず　藤原輔尹朝臣

○草葉おしなみ　草葉を押し靡け

○露やならひけむ　露は習うたのだらうか。

○たへぬものとは　堪へられないものといふことをば。

○さぞな置く　さやうに置くわい

○露のゆかり　露のゆかりの涙。

○遠ざかり行く　聲の細り行くのを云ふ。

○秋風　一本「松風」

○あともなき　人が訪ねないので人跡もない。

○むすぼほれ　心が—露が。

○まつ蟲　待つ—松蟲。

秋風は身にしむばかり吹きにけり今や打つらむ妹がさごろも

前大僧正慈圓

ころも打つ音は枕にすがはらやふしみの夢を幾夜のこしつ

千五百番歌合に秋の歌　權中納言公經

ころもうつみ山のいほのしば／＼も知らぬ夢路にむすぶ手枕

和歌所の歌合に月のもとに衣をうつといふことを　攝政太政大臣

さとは荒れて月やあらぬとうらみてもたれ淺茅生に衣うつらむ

宮内卿

まどろまで眺めよとてのすさびかな麻のさ衣月にうつころ

千五百番歌合に　藤原定家朝臣

秋とだに忘れむとおもふ月影をさもあやにくに打つ衣かな

擣衣をよみ侍りける　大納言經信

ふる郷に衣うつとは行く鴈やたびの空にもなきて告ぐらむ

中納言兼輔の家の屏風の歌　貫之

鴈なきてふく風さむみから衣きみ待ちがてに打たぬ夜ぞなき

擣衣の心を　藤原雅經

○今や打つらむ　今や砧で打つたらう。

○すがはら　音の爲る意味を菅原に云ひ懸く。
○ふしみ　臥し見―伏見。
○夢を幾夜のこしつ　夢を幾夜見果てなかつたか。
○しば／＼も　柴々も―屢も。

○月やあらぬ　月は昔のまゝであらぬかい。

○まどろまで　まどろまないで。
○すさび　手ずさみ。

○秋とだに　秋は特に月があはれなので、せめて秋といふことをでも。
○あやにくに　生憎に。秋といふことを思ひ知らせるやうに。
○衣うつとは　衣擣(ウ)つといふことをば。

○きみ待ちがてに　君を待ちかねて。

みよし野の山の秋風さ夜ふけてふるさと寒く衣うつなり

式子内親王

千度うつきぬたの音に夢さめてものおもふ袖の露ぞくだくる

百首の歌奉りし時

更けにけり山の端近く月さえてとをちの里にころもうつ聲

九月十三夜月くまなく侍りけるを眺めあかしてよみける　　道信朝臣

秋はつるさ夜ふけがたの月見れば袖ものこらず露ぞおきける

百首の歌奉りし時　　藤原定家朝臣

ひとりぬる山鳥の尾のしだり尾に露おきまがふとこの月影

攝政太政大臣大將に侍りけるとき月の歌五十首よませ侍りけるに　　寂蓮法師

人目見し野邊のけしきはうらがれて露のよすがに宿る月かな

月の歌とてよみ侍りける　　大納言經信

秋の夜は衣さむしろ重ねても月のひかりにしくものぞなき

九月朔日がたに　　花山院御歌

秋の夜ははや長月になりにけりことわりなりや寐覺せらるゝ

五十首の歌奉りし時　　寂蓮法師

○みよし野の歌　古今集卷六に「み吉野の山の白雪積るらし故郷寒くなり增るなり」

○露ぞくだくる　涙の露が碎けて數を添へる意味。

○とをちの里　大和國十市郡。

○袖ものこらず　袖の隅から隅まで餘す所なく。

○ひとりぬるの歌　拾遺集卷十三に「あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寢む」

○人目見し　花盛りには人目の見た。

○うらがれて　離れて―枯れて。

○露のよすがに　露をよすがにして。

○さむしろ　寒し―さ筵。

○しく　若く―敷く。

○長月　九月の異稱。夜の長いのを云ひ懸く。

むらさめの露もまだひぬ槇の葉に霧立ちのぼる秋のゆふ暮

秋の歌とて　太上天皇

寂しさはみ山のあきのあさぐもり霧にしをるゝ槇の下露

河霧といふことを　左衞門督通光

あけぼのや河瀨のなみのたかせ舟くだすか人の袖のあきぎり

堀河院の御時百首の歌奉りけるに霧をよめる　權大納言公實

麓をば宇治の川霧たちこめて雲居に見ゆる朝日やまかな

題しらず　曾禰好忠

山里に霧のまがきの隔てずばをちかた人の袖も見てまし

清原深養父

なく鴈の音をのみぞきく小倉やま霧たちはるゝ時しなければ

人麿

かきほなる荻の葉そよぎ秋風の吹くなるなべに鴈ぞなくなる

秋風に山とび越ゆる鴈がねのいや遠ざかりくもがくれつゝ

凡河内躬恒

初鴈の羽かぜ涼しくなるなべにたれか旅寢の衣かへさぬ

○むらさめ　驟雨。夕立のやうな暴り降る雨。
○ひぬ　干ぬ。

○たかせ舟　波の高い―高瀨舟。
○人の袖の秋霧「人の袖が隱れるほどの秋霧の中を」の意味か。

○麓をばの歌　拾遺集卷二に「河霧の麓をこめて立ちぬれば空にぞ秋の山は見えける」
○雲居　雲の居る所。
○霧のまがきの　霧が籬となつて

○吹くなるなべに　吹くと同時に

○ころもかへさぬ　衣を返して著ると、思ふことを夢見るといふ信仰から云ふ。

かりがねは風にきほひて過ぐれども我が待つ人の言傳(ことづて)もなし　讀人しらず

横雲の風にわかるゝしのゝめに山飛びこゆるはつ鴈のこゑ　西行法師

しらくもを翼にかけてゆくかりの門田のおもの友したふなる　前大僧正慈圓

五十首の歌奉りしとき月前聞鴈といふことを

大江山かたぶく月の影さえて鳥羽田のおもに落つる鴈がね　朝恵法師

題しらず

むらくもや鴈の羽風にはれぬらむ聲きく空にすめるつきかげ　皇太后宮大夫俊成女

吹きまよふ雲居をわたる初鴈のつばさにならすよもの秋風　藤原家隆朝臣

詩に合はせし歌の中に山路秋行といへることを

秋風の袖に吹きまくみねの雲をつばさにかけて鴈もなくなり　宮内卿

五十首の歌奉りしとき菊籬月といへる心を

霜をまつ籬の菊の宵の間に置きまがふいろは山の端の月　花園左大臣室

鳥羽院の御時内裏より菊を召しけるに奉るとて結びつけ侍りける

○横雲の風にわかるゝ　横雲が風で吹き分けられる。
○大江山　丹後國與謝郡。
○鳥羽田　山城國紀伊郡。
○朝恵　一本「俊恵」
○鴈の羽風に　鴈の羽風によつて
○霜をまつ　霜を待つほどに吹ききつた。
○置きまがふ　霜を置き紛れる。

権中納言定頼

九重にうつろひぬとも菊の花もとのまがきを思ひ忘るな

中務卿具平親王

今よりはまた咲く花もなきものをいたくな置きそ菊の上の露

枯れ行く野邊のきり〴〵すを

秋風にしをるゝ野邊の花よりも蟲の音いたくかれにけるかな

題しらず　大江嘉言

寐ざめするそでさへさむく秋の夜の嵐ふくなりまつ蟲の聲

千五百番歌合に　前大僧正慈圓

秋をへてあはれも露もふかくさの里とふものは鶉なりけり

左衛門督通光

入日さすふもとの尾花うちなびき誰あき風にうづら鳴くらむ

題しらず　皇太后宮大夫俊成女

あだにちる露のまくらに臥しわびて鶉なくなりとこの山風

千五百番歌合に

とふ人もあらし吹きそふ秋は來て木の葉に埋む宿のみちしば

色かはる露をば袖に置き迷ひうらがれてゆく野邊の秋かな

○九重　宮中。

○今よりはまた咲く花もなきものを　朗詠集に「是花中偏愛レ花。此花開後更無レ花。」

○ふかくさの里　山城國。「あはれも露も深い」を云ひ懸く。

○誰あき風に「誰の厭き心を憂きここに思つて」の意味を云ひ懸く

○あだに　はかなく。

○あらし　有らじ—嵐。

○色かはる　草の色の變ると共に露の色もかはる。

秋の歌とて　　太上天皇

秋ふけぬ鳴けやしも夜のきりぎりすやゝ影さむし蓬生の月

百首歌奉りし時　　攝政太政大臣

きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしき獨りかもねむ

千五百番歌合に　　春宮權大夫公繼

ねざめする長月の夜のとこさむみ今朝ふく風に霜やおくらむ

和歌所にて六首の歌つかうまつりしとき秋の歌　　前大僧正慈圓

秋深き淡路の島のありあけにかたぶく月をおくる浦風

暮秋の心を

ながつきもいく有明になりぬらむ淺茅の月のいとゞさびゆく

攝政太政大臣大將に侍りけるとき百首の歌よませ侍りけるに　　寂蓮法師

鵲のくものかけはし秋くれて夜半にはしもや冱えわたるらむ

櫻のもみぢ始めたるを見て　　中務卿具平親王

いつのまに紅葉しぬらむ山櫻きのふか花の散るを惜しみし

紅葉透霧といふことを　　高倉院御歌

薄霧の立ちまふやまの紅葉(もみぢは)はさやかならねどそれと見えけり

○さむしろに　寒きにーさ筵に。

○かたぶく月をおくる浦風　傾く月を送るやうに西方へ吹く浦風。

○鵲のくものかけはし秋くれて　七月七日の夕鵲が、天の川に羽を擴げて織女星を渡すといふ傳說から、その橋も秋が去つたので。

○きのふか花の散るを惜しみし　花の散るのを惜しんだのは昨日のことゝ思つたのに。

秋の歌とてよめる　　八條院高倉

神なびの三室のこずゑいかならむなべての山も時雨するころ

最勝四天王院の障子に鈴鹿川かきたる所　　太上天皇

すゞか川ふかき木の葉に日かずへて山田の原の時雨をぞきく

入道前關白太政大臣の家に百首の歌よみ侍りけるに紅葉を　　皇太后宮大夫俊成

こゝろとや紅葉はすらむ立田やま松は時雨に濡れぬものかは

大井川にまかりて紅葉見侍りけるに　　藤原輔尹朝臣

思ふことなくてぞ見ましもみぢ葉を嵐の山の麓ならずば

題しらず　　曾禰好忠

入日さす佐保の山べの柞原(はゝそはら)くもらぬあめと木の葉ふりつゝ

百首の歌奉りし時　　宮内卿

たつたがは嵐や峯によわるらむ渡らぬ水もにしき絶えけり

左大將に侍りけるとき家に百首の歌合の侍りけるに柞をよみ侍りける　　攝政太政大臣

はゝそ原しづくも色やかはるらむ杜のしたぐさ秋ふけにけり

藤原定家朝臣

○神なびの三室　大和國。
○なべての　一般の。
○すゞか川　伊勢國鈴鹿郡。
○山田の原　鈴鹿川の川上。
○こゝろとや紅葉はすらむ　自分の心からで紅葉はするのだらうか
○松は時雨にぬれぬものかは　松だとて時雨にぬれないものかい。やはりぬれるのに紅葉しないのを見ると、他の木々は心がらで紅葉するのだらうか。
○思ふことなくてぞ見まし　物思ひなしに見ようものを。
○嵐の山の麓ならずば　紅葉を吹き散らす嵐といふ名の山の麓でないならば。
○佐保の山　大和國添上郡。
○たつたがはの歌　古今集卷五に「立田川紅葉亂れて流るめり渡らば錦中や絕えなむ」
○秋ふけにけり　秋がふけてしまつたから、やがて紅葉しようから

散りかゝる紅葉の色はふかけれど渡ればにごる山川の水

題しらず　柿本人麿

飛鳥川もみぢ葉ながるかづらきのやまの秋風吹きぞしぬらし

権中納言長方

あすかがは瀬々に波よるくれなゐや葛城山の木がらしの風

長月の頃水無瀨に日頃侍りけるに嵐の山のもみぢ涙にたぐふよし申し遣はして侍りける人のかへりごとに　権中納言公經

もみぢ葉をさこそ嵐のはらふらめこの山もとも雨の降るなり

家に百首の歌合し侍りける時　攝政太政大臣

立田姫いまはのころの秋風にしぐれをいそぐ人の袖かな

千五百番歌合に　権中納言兼宗

行く秋のかたみなるべき紅葉もあすは時雨と降りやまがはむ

紅葉見にまかりてよみ侍りける　前大納言公任

うち羣れてちる紅葉をたづぬれば山路よりこそ秋はゆきけれ

津の國に侍りける頃道濟が許に遣はしける　能因法師

夏草のかりそめにとてこしかども難波の浦に秋ぞ暮れぬる

○飛鳥川　大和國高市郡。
○かづらきの山　大和國南葛城郡
○くれなゐや　紅葉の色の紅を云ふ。
○水無瀨　攝津國三島郡。
○さこそ嵐のはらふらめ　嵐がさやうに拂ふのであらう。
○しぐれをいそぐ　立田姫が時雨をいそぐ。
○人の袖　秋の別れを惜しんで泣く人の袖をも染めさせる事を云ふ
○降りやまがはむ　見紛うて降るであらう。
○うち羣れて　羣つて。
○かりそめに　刈初に—假初に。

暮の秋思ふこと侍りける頃

かくしつゝ暮れぬる秋と老いぬればしかすがになほ物ぞ悲しき

守覺法親王

五十首の歌よませ侍りけるに

身にかへていざさは秋を惜しみ見むさらでももろき露の命を

前太政大臣

閏九月盡の心を

なべて世の惜しさにそへて惜しむかな秋より後の秋のかぎりを

○かくしつゝ　斯やうになし〳〵して。
○暮れぬる秋と　暮れた秋と共に
○老いぬれば　自分も老いたので
○しかすがに　さすがに。
○いざさは　さあさらば。
○さらでも　秋に身を代へないでも。
○もろき露の命を　どうせ脆い露のやうな命なのを。

○おき明かす　起き—置き。
○霜こそむすべ　露が霜を結ぶ
○神無月　十月の異稱。
○そこはかとなく　何といふことなく。
○名取川　陸奥國。
○やなせ　魚をとる爲に簗をうつた川瀬。
○いづれゐせきの水のしがらみ　紅葉が流れないのが柵かけたやうなので、何れが本當の柵かの意味

新古今和歌集　卷第六

冬歌

五百番歌合に初冬の心をよめる　皇太后宮大夫俊成

おき明かす秋のわかれの袖のつゆ霜こそむすべ冬や來ぬらむ

天暦の御時神無月（かみなづき）といふ事を上におきて歌つかうまつりけるに　藤原高光

神無月かぜに紅葉の散るときはそこはかとなく物ぞかなしき

題しらず　源重之

名取川やなせの浪もさわぐなり紅葉やいとゞよりてせくらむ

後冷泉院の御時うへのをのこども大井川にまかりて紅葉浮水といへる心をよみ侍りける　藤原資宗朝臣

いかだしよ待てこと問はむ水上はいかばかり吹く山の嵐ぞ

大納言經信

散りかゝる紅葉ながれぬ大井川いづれゐせきの水のしがらみ

大井川にまかりて落葉滿水といへる心をよみ侍りける　藤原家經朝臣

高瀬舟しぶくばかりにもみぢ葉の流れてくだる大井がはかな　　源俊頼朝臣

深山落葉といへる心を

日暮るればあふ人もなしまさき散る峯の嵐の音ばかりして　　藤原清輔朝臣

題しらず

おのづから音するものは庭のおもに木の葉吹きまく谷のゆふ風　　前大僧正慈圓

春日社の歌合に落葉といふことをよみて奉りし

木の葉ちる宿にかたしく袖の色をありとも知らでゆく嵐かな　　右衛門督通具

木の葉散る時雨やまがふ我が袖にもろき涙の色と見るまで　　藤原雅經

うつりゆく雲にあらしの聲すなり散るかまさきのかづらきの山　　七條院大納言

初時雨しのぶの山のもみぢ葉を嵐吹けとは染めずやあるらむ　　信濃

しぐれつゝ袖もほしあへず足曳の山の木の葉にあらし吹くころ　　藤原秀能

○しぶく　行き澀る。

○まさき　まさきの葛。

○袖の色を　紅涙で紅葉の色に染つた袖の色を。

○時雨や　「や」は感動の助詞。

○聲すなり　聲がすることよ。
○まさきのかづらきの山　まさき葛を葛城山に云ひ懸く。
○初時雨　初めて紅葉を染めた時雨。
○あるらむ　一本「ありけむ」

○みだれて　木の葉が—心が。

○のこる　散り殘る。

○からにしき　散りあへず枝に殘つた紅葉を唐錦に見たててそれを秋のかたみかと云つてゐる。

○それにも　その木の葉の降るのにも物思ひして。

○冬は葉守のかみな月　冬は葉を守る神のない神無月なので。

○まばらになりぬ　葉が散つてまばらになつた。

○心あるべき　心すべき。

山里の風すさまじき夕暮に木の葉みだれてものぞかなしき

祝部成茂

冬の來て山もあらはに木の葉降りのこる松さへ嶺にさびしき

五十首の歌奉りし時　　宮内卿

からにしき秋のかたみやたつた山散りあへぬ枝にあらし吹くなり

賴輔卿の家の歌合に落葉の心を　　藤原資隆朝臣

時雨かと聞けば木の葉の降るものをそれにも濡るゝわが袂かな

題しらず　　法眼慶算

ときしもあれ冬は葉守のかみな月まばらになりぬもりの柏木

津守國基

いつの間に空のけしきのかはるらむ烈しきけさの木枯の風

西行法師

月を待つたかねの雲ははれにけり心あるべきはつ時雨かな

前大僧正覺忠

神無月きゞの木の葉はちりはてて庭にぞ風の音はきこゆる

清輔朝臣

○時雨を聞きわかで　時雨であるのを聞き分けずして。
○紅葉に　散る紅葉の爲に。

○などよとともに　「よ」は竹のよと世とを云ひ懸く。

○ときはの杜　常に色變らぬ森に常磐の森(山城國)を云ひ懸く。

○冬を淺み　冬が淺いので。
○まだき時雨と　早くも時雨だと
○堪へざりけりな　老の涙の雨の堪へ得ないで降るのをも。

柴の戸に入口の影はさしながらいかにしぐるゝ山邊なるらむ

山家時雨といへる心を　　藤原隆信朝臣

くもはれて後もしぐるゝ柴の戸や山風はらふ松のしたつゆ

寛平の御時后の宮の歌合に　　讀人しらず

神無月しぐれ降るらし佐保山のまさきのかづら色まさりゆく

題しらず　　中務卿具平親王

木がらしの音に時雨を聞きわかで紅葉にぬるゝ袂とぞ見る

中納言兼輔

時雨ふるおとはすれども呉竹のなどよとともに色もかはらぬ

十月ばかり常磐の杜を過ぐとて　　能因法師

しぐれのあめ染めかねてけり山城のときはの杜の槇の下葉は

題しらず　　清原元輔

冬を淺みまだき時雨とおもひしを堪へざりけりな老のなみだも

鳥羽殿にて旅宿時雨といふことを　　後白河院御歌

まばらなるしばのいほりに旅寢して時雨にぬるゝさ夜衣かな

時雨を　　前大僧正慈圓

やよ時雨もの思ふ袖のなかりせば木の葉の後になにを染めまし

冬の歌の中に　　太上天皇

深みどりあらそひかねていかならむ間なく時雨のふるの神杉

題しらず　　人麿

しぐれの雨まなくし降れば槇の葉もあらそひかねて色づきにけり

和泉式部

世の中に猶もふるかなしぐれつゝ雲間の月のいでやと思へば

百首の歌奉りしに　　二條院讃岐

折こそあれながめにかゝる浮雲の袖もひとつに打ちしぐれつゝ

題しらず　　西行法師

あきしのやとやまの里やしぐるらむ伊駒の嶽に雲のかゝれる

道因法師

はれ曇り時雨は定めなきものをふりはてぬるは我が身なりけり

千五百番歌合に冬の歌　　源具親

いまはまた散らでもまがふ時雨かなひとりふりゆく庭の松風

題しらず　　俊恵法師

○やよ　やれ。

○あらそひかねていかならむ　時雨と争ひかねていかになるだらう紅葉をするだらうか。次の歌の詞による。

○ふるの神杉「時雨の降る」に「布留の神」を云ひ懸く。大和國山邊郡の布留神社。

○ふる　經る―降る。

○いでや　どりやの意味に世を出でむの意味を云ひ懸く。

○ながめ　長雨―長目（物思ひしてぢつと詠めること）。

○あきしの　大和國平群郡の秋篠

○伊駒の嶽　河内國中河内郡。

○ふり　時雨の降り―我が身の古り。

○いまはまた　これまでは木の葉が散つたのを時雨と紛うたが、今はまた。

○散らでもまがふ　松風だから散らないでも時雨と聞き紛ふ。

みよし野の山かき曇りゆき降れば麓の里はうちしぐれつゝ

百首の歌奉りし時　　入道左大臣

まきのやに時雨の音のかはるかな紅葉やふかく散り積るらむ

千五百番歌合に冬の歌　　二條院讃岐

世にふるは苦しきものを槇の屋にやすくも過ぐるはつ時雨かな

題しらず　　源信明朝臣

ほのぼのと有明のつきの月影に紅葉ふきおろす山おろしの風

中務卿具平親王

もみぢ葉をなに惜しみけむ木の間よりもりくる月は今宵こそ見れ

宜秋門院丹後

吹きはらふ嵐の後の高峯より木の葉くもらで月や出づらむ

春日社の歌合に曉月といふことを　　右衞門督通具

霜こほる袖にもかげはのこりけり露よりなれしありあけの月

和歌所にて六首の歌奉りしに冬月　　藤原家隆朝臣

ながめつゝいくたび袖にくもるらむ時雨に更くる有明の月

題しらず　　源泰光

○世にふるは苦しきものを　世の中に經るのは苦しいものを。
○やすくも　安らかにも。上の苦しきに對してゐる。
○有明のつきの　家集には「明くる有明の」とある。
○もみぢ葉をなに惜しみけむ　紅葉の散るのを何故に惜しんだのだらう。
○今宵こそ見れ　紅葉が散つたからこそ洩れ來る月を今宵見られるのだ。
○木の葉くもらで　木陰が月に障らずして。
○霜こほる袖　はじめ露だつたのが霜と凍つた袖。
○露よりなれし　露の時から映り馴れた。
○袖にくもるらむ　袖の涙に宿つた有明の月の曇ることだらう。

定めなくしぐるゝ空のむら雲にいくたびおなじ月をまつらむ

千五百番歌合に　　源具親

いまよりは木の葉がくれもなけれども時雨にのこるむら雲の月

題しらず

はれ曇るかげを都にさき立ててしぐると告ぐる山の端の月

五十首の歌奉りし時　　寂蓮法師

たえ〴〵に里わく月の光かなしぐれをおくる夜半のむらくも

雨後冬月といふ心を　　良暹法師

今はとて寝なましものをしぐれつる空とも見えず澄める月かな

題しらず　　曾根好忠

露霜の夜半におきゐて冬の夜の月見るほどに袖はこほりぬ

前大僧正慈圓

もみぢ葉はおのが染めたる色ぞかし外(よそ)げに置けるけさの霜かな

西行法師

小倉山ふもとのさとに木の葉ちれば梢にはるゝ月を見るかな

五十首の歌奉りしに　　藤原雅經

○木の葉がくれもなけれども　皆散り果てたので…。
○時雨にのこるむら雲の月　時雨が薹雲に殘つてなほ月は隱れがちであるの意味。
○かげ　月光。

○たえ〴〵に　きれ〴〵に。
○里わく　晴れた里と曇つた里とを差別する。

○寝なましものを　寝ようとしたものを、意外にも。

○おのが　紅葉自身が。
○外げに見える　紅葉の色とは全く別に白くてよそ〳〵しげに見える。

秋の色をはらひ果ててや久方の月のかつらに木がらしのかぜ

題しらず　　　式子内親王

風さむみ木の葉はれゆく夜な〳〵にのこるくまなき庭の月かげ

殷富門院大輔

我が門のかり田のおもにふす鴫の牀あらはなる冬の夜の月

藤原清輔朝臣

冬がれの杜の朽葉の霜のうへに落ちたる月のかげのさむけさ

千五百番歌合に　　　皇太后宮大夫俊成女

さえわびてさむる枕に影見れば霜ふかき夜のありあけの月

右衛門督通具

霜むすぶ袖のかたしきうちとけて寝ぬ夜の月の影ぞさむけき

五十首の歌奉りし時　　　藤原雅經

影とめし露のやどりを思ひ出でて霜にあととふ淺茅生の月

橋上霜といへることをよみ侍りける　　　法印幸清

かたしきの袖をや霜にかさぬらむ月に夜がるゝ宇治のはし姫

題しらず　　　源重之

○月のかつらに　月の桂にさへ。
○かり田　刈り田。
○さむけさ　一本「さやけさ」
○霜ふかき夜　霜も夜もふかき晩
○袖のかたしき　袖を片敷き。
○霜にあととふ　霜になつても露だつた跡を訪ふ。
○かたしきの歌　古今集巻十四に「さ筵に衣片敷き今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」
○夜がるゝ　待つ人の來らぬ。
○宇治のはし姫　宇治橋附近の遊女。

夏刈の荻のふる枝は枯れにけり羣れ居し鳥は空にやあるらむ　藤原道信朝臣

冬の歌の中に　太上天皇

さ夜ふけて聲さへさむき葦鶴（あしたづ）はいくへの霜か置きまさるらむ

百首の歌奉りし時　攝政太政大臣

ふゆの夜の長きをおくる袖ぬれぬ曉がたのよものあらしに

崇德院の御時百首の歌奉りけるに　藤原淸輔朝臣

笹の葉はみやまもさやにうちそよぎ氷れる霜をふく嵐かな

題しらず　皇太后宮大夫俊成女

君來ずばひとりや寢なむ笹の葉のみ山もそよにさやぐ霜夜を

百首の歌の中に　前大僧正慈圓

しもがれはそこことも見えぬ草の原たれに問はまし秋の名ごりを

題しらず　曾根好忠

霜さゆる山田のくろのむらすゝき刈る人なしに殘るころかな

中納言家持

草の上にこゝら玉ゐし白露をした葉のしもとむすぶ冬かな

○夏刈のの歌　後拾遺集卷三に「夏刈の玉江の蘆を踏みしだき羣れゐる鳥の立つ空ぞ無き」

○おくる　過す。

○笹の葉はの歌　萬葉集卷二に「笹の葉はみ山もさやに亂れども我は妹思ふ別れ來ぬれば」

○しもがれはの歌　源氏物語の花宴卷に「憂き身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ」
○そこことも見えぬ　そこに秋の名殘があると見えぬ。
○くろ　畔。

○こゝら　あまた。

かさゝぎの渡せる橋におく霜のしろきを見れば夜ぞふけにける　延喜御歌

うへのをのこども菊合し侍りけるついでに　延喜御歌

しぐれつゝ枯れゆく野邊の花なれど霜のまがきに匂ふ色かな　中納言兼輔

延喜十四年尙侍藤原滿子に菊の宴給はせける時

菊のはな手折りては見じ初霜のおきながらこそ色增りけれ　中納言兼輔

同じ御時大井川に行幸侍りける日

かげさへに今はと菊のうつろふは浪のそこにも霜やおくらむ　坂上是則

題しらず

野邊みれば尾花がもとの思ひぐさ枯れゆく冬になりぞしにける　和泉式部

津の國の難波のはるは夢なれや蘆の枯葉に風わたるなり　西行法師

崇德院に十首の歌奉りける時

冬ふかくなりにけらしな難波江の靑葉まじらぬ葦のむらだち　大納言成通

題しらず

さびしさに堪へたる人のまたもあれな庵をならべむ冬の山ざと　西行法師

あづまに侍りけるとき都の人に遣はしける　康資王母

○かさゝぎの渡せる橋　淮南子に「七月七日夜烏鵲塡レ河成レ橋以度ニ織女一」とある傳へによつて天上にある橋。それから宮中の階をも云ふ。

○見じ　見まい。

○初霜のおきながら云々　初霜が置いたまゝで初めて色が增るのだから。

○かげさへに　川の水に映る影までも。

○なりぞしにける　一本「なりにけるかな」

○津の國の難波　後拾遺集卷一に「心あらむ人に見せばや津の國の難波わたりの春の景色を」

○夢なれや　夢であるんだらうか

○なりにけらしな　なつたらしいな。

○わすれ水　忘水。武藏國。

○たるひ　垂氷。氷柱。

○かつ氷りかつはくだくる　氷ったり碎けたりする。

○袖の氷　袖の氷った涙。
○とけて　打解けて。
○橋姫のの歌　古今集卷十四の「さ筵に…宇治の橋姫」の歌による

あづま路のみちの冬草しげり合ひてあとだに見えぬわすれ水かな

冬の歌とてよみ侍りける　守覺法親王

むかし思ふさ夜のねざめの牀さえて涙もこほる袖の上かな

百首の歌奉りし時

立ちぬるゝ山のしづくも音たえて槇の下葉にたるひしにけり

題しらず　皇太后宮大夫俊成

かつ氷りかつはくだくる山川の岩間にむせぶあかつきの聲

攝政太政大臣

消えかへり岩間にまよふ水の泡のしばし宿かるうす氷かな

まくらにも袖にも涙つらゝゐてむすばぬ夢を問ふあらしかな

五十首の歌奉りし時

みなかみやたえ〴〵こほる岩間より清瀧川にのこるしら波

百首の歌奉りし時

かたしきの袖の氷もむすぼほれとけて寢ぬ夜の夢ぞみじかき

最勝四天王院の障子に宇治川かきたる所　太上天皇

橋姫のかたしき衣さむしろに待つ夜むなしき宇治のあけぼの

前大僧正慈圓

あじろ木にいさよふ浪の音ふけてひとりや寢ぬる宇治の橋姫

百首の歌の中に　　式子内親王

見るまゝに冬は來にけり鴨のゐる入江のみぎは薄こほりつゝ

攝政太政大臣の家の歌合に湖上冬月　　藤原家隆朝臣

志賀の浦や遠ざかり行く浪間よりこほりて出づる有明の月

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに　　皇太后宮大夫俊成

ひとり見る池の氷にすむ月のやがて袖にもうつりぬるかな

題しらず　　山邊赤人

うば玉の夜の更けゆけば楸(ひさぎ)おふる淸きかはらに千鳥なくなり

佐保のかはらに千鳥の鳴きけるをよみ侍りける　　伊勢大輔

行く先は小夜ふけぬれど千鳥鳴くさほの河原は過ぎうかりけり

みちのくにまかりける時よみ侍りける　　能因法師

夕されば汐風こしてみちのくの野田のたまがは千鳥なくなり

題しらず　　重之

白波に羽うちかはし濱千鳥かなしきものは夜のひとこゑ

○あじろ木　魚をとる簀の網代りに竹や木を編んだものをしつらへた杙。

○いさよふ浪　流れやらぬ浪。萬葉集卷三に「物部(モノノフ)の八十氏河のあじろ木にいさよふ浪の行くへ知らずも」

○志賀の浦やの歌　後拾遺集卷六に「さ夜ふくるまゝに汀や氷るらむ遠ざかり行く志賀の浦浪」

○袖にも　袖の涙にも。

○うば玉の　夜の枕詞。

○淸きかはら　大和國。

○夕されば　夕方が來ると。

○みちのく　滿ち—陸奥。

○白波にの歌　古今集卷四に「白雲に羽打交し飛ぶ鴈の數さへ見ゆる秋の夜の月」

後德大寺左大臣

夕なぎにと渡る千鳥浪間より見ゆるこじまの雲に消えぬる

堀河院に百首の歌奉りけるに　祐子内親王家紀伊

うら風に吹上の濱のはまちどり浪たちくらし夜はに鳴くなり

五十首の歌奉りし時　攝政太政大臣

月ぞすむたれかはこゝにきの國や吹上の千鳥ひとりなくなり

千五百番歌合に　正三位季能

さよ千鳥こゑこそ近くなるみがたかたぶく月に汐や滿つらむ

最勝四天王院の障子に鳴海の浦かきたる所　藤原秀能

かぜ吹けばよそになるみのかたおもひ思はぬ浪になく千鳥かな

おなじ所　權大納言通光

浦人のひもゆふぐれになるみがたかへる袖より千鳥なくなり

文治六年女御入內の屛風に　正三位季經

風さゆるとしまが磯のむら千鳥起居(たちゐ)は浪のこゝろなりけり

五十首の歌奉りし時　藤原雅經

はかなしやさても幾夜かゆくみづに數かき侘ぶるをしの獨寢

○吹上の濱　紀伊國海草郡。○くらし　來るらしい。

○たれかはこゝにきの國や　「たれがこゝに來たらうや」を「紀伊の國」に云ひ懸く。○なくなり　一本「なくらむ」○近くなるみがた　近くなる—鳴海潟(尾張國愛知郡)。

○なるみのかたおもひ　鳴海潟に片思ひと云ひ懸く。

○浦人の　「かへる」に懸る。○ひもゆふぐれ　日も夕暮—紐結ふ。

○としまが磯　攝津國。

○はかなしやの歌　古今集卷十一に「行く水に數書くよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」

堀河院に百首の歌奉りけるに　河内

水鳥のかもの浮寢のうきながら浪のまくらに幾夜へぬらむ

題しらず　湯原王

吉野なるなつみのかはの川よどに鴨ぞ鳴くなる山かげにして

能因法師

閨のうへに片枝さしおほひそともなる葉廣柏にあられ降るなり

法性寺入道前關白太政大臣

さゞなみや志賀の唐崎かぜさえて比良の高嶺にあられ降るなり

人麿

矢田の野に淺茅いろづく荒乳やま嶺の泡雪さむくぞあるらし

雪のあした基俊が許へ申し遣はし侍る　贍西上人

つねよりも篠屋の軒ぞ埋もるゝ今日はみやこに初雪やふる

かへし　藤原基俊

降る雪にまことにしのやいかならむけふは都に跡だにもなし

冬の歌あまたよみ侍りけるに　權中納言長方

初雪のふるの神杉うづもれてしめ結ふ野邊は冬ごもりけり

○水鳥のかもの浮寢の　水鳥の鴨が浮いたまゝで寢るやうに。
○なつみのかは　大和國吉野郡。
○そとも　外面。
○さゞなみや　志賀の枕詞。
○矢田の野　越前國。
○荒乳やま　越前國敦賀郡。
○篠屋　篠で葺いた屋。
○ふる　降る―布留（大和國）
○けり　一本「せり」

思ふこと侍りける頃初雪ふり侍りける日　紫式部

ふればかく憂さのみまさる世を知らで荒れたる庭につもる初雪

百首の歌に　式子内親王

さむしろの夜半の衣手さえ〳〵てはつ雪しろしをかのべの松

入道前關白右大臣に侍りけるとき家の歌合に雪をよめる　寂蓮法師

降りそむる今朝だに人の待たれつるみやまの里の雪の夕暮

雪のあした後徳大寺左大臣の許につかはしける　皇太后宮大夫俊成

けふは若し君もや問ふとながむればまだ跡もなき庭の雪かな

かへし　後徳大寺左大臣

いまぞ聞く心はあともなかりけり雪かきわけて思ひやれども

題しらず　前大納言公任

しらやまに年ふる雪やつもるらむ夜半に片しく袂さゆなり

夜深聞雪といふことを　刑部卿範兼

明けやらぬ寐ざめの牀にきこゆなりまがきの竹の雪のしたをれ

うへのをのこども曉望山雪といへる心をつかうまつりけるに　高倉院御歌

音羽山さやかに見する白雪をあけぬと告ぐるとりの聲かな

○ふれば　雪の降ればー世に經れば。

○さむしろ　さ筵。敷物。「さ」は接頭語。

○降りそむる今朝だに人の待たれつる　雪の降り初めた今朝でさへ人が待たれた。

○けふは若し君もや問ふと　今はもしや君が訪ふかと。

○跡　人跡。

○いまぞ聞くの歌　私の心は雪掻き分けて君に思ひをやつてゐるのに跡がないとの事ですが、して見ると心には跡がないのですね。私は初めて伺ひましたの意味。

○しらやま

○あけぬと　夜が明けたと。

紅葉の散れりける上に初雪の降りて侍りけるを見て上東門院に侍りける女房に遣はしける　藤原家經朝臣

山里は道もや見えずなりぬらむ紅葉とともに雪の降りぬる

野亭雪をよみ侍りける　藤原國房

寂しさをいかにせよとて岡邊なる楢の葉しだり雪のふるらむ

百首の歌奉りし時　藤原定家朝臣

駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮

攝政太政大臣大納言に侍りける時山家雪といふ事をよませ侍りけるに

まつ人のふもとの道は絶えぬらむ軒端の杉にゆきおもるなり

おなじ家にて所の名を探りて冬の歌よませ侍りけるに伏見の里の雪を　藤原有家朝臣

夢かよふみちさへ絶えぬ呉竹のふしみの里の雪のしたをれ

家に百首の歌よませ侍りけるに　入道前關白太政大臣

ふる雪にたく藻の煙かきたえてさびしくもあるか鹽竈のうら

題しらず　赤人

田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺にゆきは降りつゝ

○しだり　しだれ。

○駒とめての歌　萬葉集卷三に「苦しくもふり來る雨かみわが崎狹野の邊に家もあらなくに」

○まつ人のふもとの道　待つ人の來る麓の道。

○夢かよふみちさへ絶えぬ　雪の下折れの音に夢路までも絶えた。

○あるか　あるかな。

○鹽竈のうら　陸前國。

○田子の浦にの歌　萬葉集卷三では「田兒の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞふじの高嶺に雪はふりける」とある。

延喜の御時歌奉れと仰せられければ　　紀貫之

雪のみやふりぬとは思ふ山里にわれもおほくの年ぞつもれる

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに　　皇太后宮大夫俊成

雪降れば嶺のまさか木うづもれて月にみがける天のかぐ山

題しらず　　小侍從

かきくもり天ぎる雪のふる里をつもらぬさきに問ふ人もがな

前大僧正慈圓

庭の雪に我が跡つけて出でつるを訪はれにけりと人やみるらむ

ながむればわが山の端に雪白しみやこの人よあはれとも見よ

曾禰好忠

ふゆ草のかれにし人のいまさらに雪ふみわけて見えむものかは

雪の朝大原にてよみ侍りける　　寂然法師

たづね來てみちわけわぶる人もあらじ幾重もつもれ庭の白ゆき

百首の歌の中に　　太上天皇

このごろは花も紅葉も枝になししばしな消えそ松のしらゆき

千五百番歌合に　　右衞門督通具

○ふりぬ　降りぬ―古りぬ。

○月にみがける　月で磨いたやうに輝く。

○天ぎる　天霧る。
○ふる里　雪の降る里―古里。
○問ふ人もがな　問ふ人もあれはいいがな。
○我が跡　我が足跡。
○訪はれにけりと　他の人に訪はれたのだと。

○ふゆ草の　冬の草のやうに。
○かれにし　枯れにし―離れにし
○見えむものかは　見られようものかい。

○しばしな消えそ　せめて松の白雪よ暫しは消えるなよ。

草も木も降りまがへたる雪もよに春待つ梅のはなの香ぞする

百首歌めしたる時　　崇德院御歌

み狩するかた野のみのに降る霰あなかままだき鳥もこそたて

内大臣に侍りけるとき家の歌合に　　法性寺入道前關白太政大臣

みかりすと鳥立の原をあさりつゝ交野の野邊に今日もくらしつ

京極關白前太政大臣の高陽院歌合に　　前中納言匡房

御狩野はかつふる雪にうづもれて鳥立も見えず草隱れつゝ

鷹狩の心をよみ侍りける　　左近中將公衡

かりくらしかた野の眞柴折りしきて淀の川瀨の月を見るかな

埋火をよみ侍りける　　權僧正永緣

なかなかに消えはきえなで埋火のいきてかひなき世にもあるかな

百首の歌奉りし時　　式子内親王

日かずふるゆきげにまさる炭竈のけぶりもさびし大原のさと

歳暮に人に遣はしける　　西行法師

おのづからいはぬを慕ふ人やあると休らふほどに年の暮れぬる

年の暮によみ侍りける　　上西門院兵衛

○かた野のみの　河内國の交野は一般の禁獵地なので御野といふ。
○あなかま　あゝやかましい。

○鳥立の原　鳥の立つ原。

○なかなかに　なまなかに。
○埋火の　埋火のやうに世に埋もれて。

○ふる　日數の經る―雪の降る。
○ゆきげに　雪解時に。

○おのづから　「慕ふ」に懸る。
○いはぬを　訪うて來いと云はないのを。
○休らふ　ぐづぐづしてゐる。

かへりては身にそふ物と知りながら暮れ行く年をなに慕ふらむ　皇太后宮大夫俊成女

隔てゆくよゝの面影かきくらし雪とふりぬる年のくれかな　大納言隆季

あたらしき年や我が身にとめくらむ隙ゆく駒に道をまかせて　俊恵法師

俊成卿の家に十首歌よみ侍りけるに歳暮の心を

なげきつゝ今年も暮れぬ露のいのち生けるばかりを思出にして　小侍従

百首の歌奉りし時

思ひやれ八十の年の暮なればいかばかりかは物はかなしき　西行法師

題しらず

昔おもふ庭にうき木をつみ置きて見し世にも似ぬ年の暮かな　攝政太政大臣

いそのかみふる野の小笹霜をへてひとよばかりに残るとしかな　前大僧正慈圓

年のあけて憂世の夢のさむべくば暮るともけふは厭はざらまし　權律師隆聖

○かへりては　年といふものは歸り來ては。

○隔てゆくの歌　次第に隔て行く年々の事を思ひ出しても忘れがちで其の面影もハッキリせずに雪と共に老の積つた歳暮ぢや。

○とめくらむ　求めて來るだらう

○隙ゆく駒　年月の早いのに喩ふ莊子の知北遊篇に見える。

○八十の年の暮なれば　普通でさへさうなのに、まして八十歳の老齡の歳暮なのだから。

○昔おもふ　靈鷲山の昔を思ふ。

○うき木　盲龜の浮木を年木として歳暮に薪を積むことがある。　莊嚴論に「盲龜値二浮木孔一。」

○見し世　俗人の時見た世。

○いそのかみ　「ふる」の枕詞。

○さむべくは　覺めるものならば

○暮るとも　暮れるとも。

朝ごとのあか井の水に年くれて我が世のほどのくまれぬるかな　入道左大臣

百首の歌奉りし時

いそがれぬ年のくれこそあはれなれ昔はよそに聞きし春かは　和泉式部

年の暮に身の老いぬることを歎きてよみはべりける

かぞふれば年の殘りもなかりけり老いぬるばかり悲しきはなし

入道前關白百首の歌よませ侍りけるとき歳暮の心をよみて遣はしける　後德大寺左大臣

いはばしる初瀨の川の浪まくらはやくも年のくれにけるかな

土御門内大臣の家にて海邊歳暮といへる心をよめる　藤原有家朝臣

行く年ををしまの海士の濡衣かさねて袖になみやかくらむ　寂蓮法師

老の浪越えける身こそあはれなれ今年もいまはすゑのまつ山

千五百番歌合に　皇太后宮大夫俊成

けふ毎に今日や限りと惜しめどもまたも今年に逢ひにけるかな

○朝ごとのあか井　朝毎に佛に供へる爲の閼伽水を汲む井。
○我が世のほどのくまれぬるかな　我が齡の殘りの程が知られたの意味。
○いそがれぬ　心の急がれぬ。
○よそに聞きし春かは　昔に餘所事に聞いた春かい。

○いはばしる　石走る。

○行く年を　「重ねて」に懸る。

○いまはすゑのまつ山　「今は末」に「末の松山」(奥州)を云ひ懸く。古今集卷二十に「君を舍きて仇し心を我が持たば末の松山浪も越えなむ」
○けふ毎に　除目のある今日毎に
○今日や限りと　此の除目を限りと。
○今年に　今年の除目に。除目とは大臣以外の諸臣の任官式。

○ゆるされて　御免あつて。
○たかき屋にの歌　延喜六年の日本紀竟宴和歌に藤原時平の作「高殿に上りて見れば天の下四方に煙りて今ぞ富みぬる」
○はつ春の歌　萬葉集卷二十に「二年(天平寶字)春正月三日召二侍從竪子王臣等一令レ侍二於内裏之東屋垣下一卽賜二玉帚一肆宴。于レ時内相藤原朝臣奉レ勅宣二諸王卿等一隨レ堪任レ意作レ歌竝賦レ詩仍應二詔旨一各陳二心緒一作レ歌賦レ詩。」と題してこの歌を載せ、次に「右一首右中辨大伴宿禰家持作。」と註してある。
○子の日　古正月初の子の日に郊外に出て小松を引いて遊宴する習慣があつた。
○ひかでや　姫小松を引かずしてや。
○ゆふだすき　木綿襷。「かけて」の枕詞。
○かけて　兼ねて。
○山あゐの色　山藍で摺つた靑摺の衣の色。

新古今和歌集　卷第七

賀歌

みつぎ物ゆるされて國富めるを御覽じて　仁德天皇御歌

たかき屋にのぼりて見れば煙たつ民の竈はにぎはひにけり

題しらず　讀人しらず

はつ春の初子のけふのたま箒(はゝき)手にとるからにゆらぐ玉の緒

子日をよめる　藤原清正

子の日してしめつる野邊の姫小松ひかでや千世の陰をまたまし

題しらず　紀貫之

君が世の年のかずをばしろたへの濱のまさごと誰かしきけむ

亭子院の六十の御賀の屏風に若菜摘める所をよみ侍りける

若菜おふる野邊といふ野邊を君がため萬代しめて摘まむとぞ思ふ

延喜の御時屏風の歌

ゆふだすき千年をかけて足曳の山あゐの色はかはらざりけり

祐子内親王の家にて櫻を　　土御門右大臣

君が世にあふべき春のおほければ散るとも櫻飽くまでぞ見む

七條の后の宮の五十の賀の屏風に　　伊勢

住の江のはまの眞砂をふむたづは久しき跡をとむるなりけり

延喜の御時屏風の歌　　貫之

としごとに生ひそふ竹のよゝをへて變らぬ色を誰とかは見む

題しらず　　躬恒

千年ふるをのへの松は秋風のこゑこそかはれ色はかはらず

藤原興風

やまがはの菊のした水いかなれば流れて人の老をせくらむ

延喜の御時屏風の歌に　　貫之

いのりつゝなほ長月の菊の花いづれの秋か植ゑてみざらむ

文治六年女御入内の屏風の歌　　皇太后宮大夫俊成

山びとの折る袖にほふきくの露うちはらふにも千代は經ぬべし

貞信公の家の屏風に　　元輔

神無月もみぢも知らぬ常磐木によろづ代かゝれ峯のしらくも

○たづは　一本「たづも」

○誰とかは見む　誰と見ようか。誰でもない、君と見よう。

○聲こそかはれ　「ど」を補ふ。

○老をせく　老を止める。支那の南陽の　縣に、上に大菊のある谷川の水は甘くて飲むと長壽だといふ故事から菊を長壽の花として祝つた。

○山びと　山住みの人。古今集卷五に「濡れて乾す山路の菊の露のまにいつか千年を我は經にけむ」

題しらず　　伊勢

やま風はふけど吹かねどしら波のよする岩ねは久しかりけり

後一條院生まれさせ給へりける九月月くまもなかりける夜大二條關白中將に侍りけるとき若き人々さそひ出でて池の舟にのせて中島の松陰さしまはすほどをかしく見え侍りければ　　紫式部

くもりなく千年にすめる水の面にやどれる月の影ものどけし

永承四年内裏の歌合に池の水といふ心を　　伊勢大輔

池水の世々に久しくすみぬればそこの玉藻もひかり見えけり

堀河院の大嘗會の御禊に日頃雨ふりてその日になりて空はれて侍りければ紀伊典侍に申しける　　六條右大臣

君が代の千年のかずもかくれなく曇らぬ空のひかりにぞ見る

天喜四年后の宮の歌合に祝の心をよみ侍りける　　前大納言隆國

すみの江の生ひそふ松の枝ごとに君が千年の數ぞこもれる

寛治八年關白太政大臣の高陽院の歌合に祝の心を　　康資王母

萬代をまつの尾山のかげしげみ君をぞいのるときはかきはに

後冷泉院をさなくおはしましけるとき卯杖の松を人の子に給はせけるに

○やどれる月　後一條院に擬ふ。

○千年の數も　千年の數をも。

○まつの尾山　萬代を待つに松尾山(山城國)を云ひ懸く。
○ときはかきはに　常磐堅磐に。永久に堅固に。
○卯杖の松　卯杖(正月上の卯の日に兵衞府から奉つた五色の絲で卷いた杖)に添へた松。

よみ侍りける　大貳三位

あひおひのをしほの山の小松原いまより千代の陰を待たなむ

永保四年内裏の子日に　大納言經信

子の日する御垣のうちの小松原千代をばほかのものとやは見る

權中納言通俊

ねの日する野邊の小松を移しうゑて年のを長く君ぞひくべき

承暦二年内裏の歌合に祝の心をよみ侍りける　前中納言匡房

君が代はひさしかるべしわたらひや五十鈴の川のながれ絶えせで

題しらず　讀人しらず

ときはなる松にかゝれる苔なれば年のを長きしるべとぞ思ふ

二條院の御時花有喜色といふ心を人々つかうまつりけるに　刑部卿範兼

君が世に逢へるはたれも嬉しきを花は色にも出でにけるかな

おなじ御時南殿の花の盛りに歌よめと仰せられければ　三河内侍

身にかへて花も惜しまじ君が代に見るべき春のかぎりなければ

百首の歌奉りし時　式子内親王

あめのしためぐむ草木のめもはるに限りもしらぬ御世の末々

○をしほの山　山城國乙訓郡。
○待たなむ　待ち給へ。
○御垣のうち　禁中。
○ほかのものとやは見る　外の物と見ようかい。君のものと見る。
○年のを　年の緒。
○わたらひ　伊勢國度會郡。
○五十鈴の川　伊勢神宮附近を流れる川。
○苔　女蘿の類か。
○色に　喜びを色に。
○身にかへて　身に替へてまで。
○めぐむ　芽ぐむ―惠む。
○めもはるに　芽も張るに―目も遙かに。

京極殿にて初めて人々歌つかうまつりしに松有春色といふ事をよみ侍りし　攝政太政大臣

おしなべて木のめもはるの淺みどり松にぞ千世の色はこもれる

百首の歌奉りし時

敷島ややまとしまねも神代より君がためとやかため置きけむ

千五百番歌合に

ぬれてほす玉ぐしの葉の露霜にあま照るひかり幾世へぬらむ

祝の心をよみ侍りける　皇太后宮大夫俊成

君が代は千代ともささじ天の戸やいづる月日のかぎりなければ

千五百番歌合に　藤原定家朝臣

我が道をまもらば君をまもるらむよはひはゆづれ住よしの松

八月十五夜和歌所の歌合に月多秋友といふことをよみ侍りし　寂蓮法師

たかさごのまつも昔になりぬべしなほ行くすゑは秋の夜の月

和歌所の開闔(かいかふ)になりて初めて參りし日奏しはべりし　源家長

もしほ草かくともつきじ君が代のかずによみおく和歌の浦なみ

建久七年入道前關白太政大臣宇治にて人々に歌よませ侍りけるに　前大納言隆房

○松にぞ　とりわけて松に。

○敷島や　「やまと」の枕詞。○やまとしまね　大和島根。日本國土。○かため　神話によると、この國土はもと漂蕩してゐたのを神が堅めたものだと云ふ。○玉ぐし　神前にさした賢木。○あま照るひかり　天に照る光。

○ささじ　指さじ—鎖さじ。

○我が道をまもらば　和歌の道を守る神ならば。○よはひはゆづれ　松の齢をば君に讓れ。

○昔に　枯れて、昔のことに。

○開闔　其所の奉行の役。

○かく　搔く—書く。○よみ　算(ヨ)み—詠み。○和歌の浦　紀伊國海草郡。

うれしさやかたしく袖につゝむらむ今日待ちえたる宇治の橋姫

嘉應元年入道前關白太政大臣宇治にて河水久澄といふ事を人々よませ侍りけるに　　藤原清輔朝臣

年へたる宇治の橋守こと問はむいく代になりぬ水のみなかみ

日吉の禰宜成仲七十の賀し侍りけるに遣はしける

なゝそぢにみつの濱松おいぬれど千代の殘りはなほぞ遙けき

百首の歌よみ侍りけるに　　後徳大寺左大臣

八百日(やほか)ゆくはまの眞砂を君が代の數に取らなむ沖つ島もり

家に歌合し侍りけるに春の祝の心をよみはべりける　　攝政太政大臣

かすが山みやこの南しかぞおもふ北の藤なみはるに逢へとは

天暦の御時の大嘗會主基(すき)備中國中山　　讀人しらず

常磐なる吉備の中山おしなべて千年をまつの深きいろかな

長和五年の大嘗會悠紀方の風俗歌近江國朝日郷　　祭主輔親

あかねさす朝日の郷のひかげ草豐のあかりのかざしなるべし

永承元年の大嘗會悠紀方の屛風近江國守山をよめる　　式部大輔資業

すべらぎを常磐かきはにもる山の山人ならし山かづらせり

○つゝむ　一本「あまる」
○今日待ちえたる　宇治關白の來る今日を待ち得た。
○みつの濱松　七十歳に滿つに攝津國の三津の濱を云ひ懸く。
○千代の殘り　千年から七十をとつてもその殘りは。
○八百日ゆくの歌　拾遺集卷十四に「八百日行く濱の眞砂と我が戀と何れまされり沖つ島守」
○みやこ　今の京都。
○しかぞおもふ　さう思ふ。
○北の藤なみ　北家の藤原氏を喩ふ。
○はるに逢へ　春に逢つて盛えよ
○吉備　備前、備中、備後の古稱
○まつ　待つ―松。
○あかねさす　日の枕詞。
○豐のあかり　大嘗會の翌日の宴會。
○すべらぎ　天皇。
○もる山　「守る」を云ひ懸く。
○山人ならし　山人なるらし。古今集卷二十に「卷向(マキモク)の穴師の山の山人と人も見るかに山葛せよ」

寛治二年の大嘗會の屏風に鷹の尾山をよめる　　前中納言匡房

とやかへる鷹の尾山の玉つばき霜をば經とも色はかはらじ

久壽二年の大嘗會悠紀方の屏風に近江國鏡山をよめる　　宮内卿永範

くもりなき鏡の山の月を見てあきらけき世をそらに知るかな

平治元年の大嘗會主基方の辰日參入音聲生野をよめる　　刑部卿範兼

大江山こえていく野の末とほみ道ある世にも逢ひにけるかな

仁安元年の大嘗會悠紀歌奉りけるに稲春歌　　皇太后宮大夫俊成

あふみのやさかたの稲をかけ積みて道ある御世のはじめにぞつく

仁安元年の大嘗會主基方の稲春歌丹波國長田村をよめる　　權中納言兼光

神代より今日のためとや八束穗(やつかほ)に長田の稲のしなひそめけむ

元暦元年の大嘗會悠紀歌青羽山　　式部大輔光範

立ちよればすゞしかりけり水鳥の青羽のやまの松のゆふかぜ

建久九年の大嘗會主基の屏風に松井　　權中納言資實

常磐なる松井の水をむすぶ手の雫ごとにぞ千代は見えける

○とやかへる　鳥屋に歸るの意味で鷹の形容語句にあらう。

○辰日參入音聲　大嘗會第二日辰日に兩國司が風俗を奏す儀鸞門より歌ひながら參入す。國司、音聲人、歌女、男樂人の順で參入する。その歌を參入音聲といふ。

○いく野　行くー生野（丹波國）。

○稲春歌　神に供へる稲を春く時の歌。

○神代より　日本紀神代卷に「因定天邑君、即以其稲種、始植于天狹田及長田、其秋垂穎八握莫々然甚快也。」とある。

○八束穗　八握みもある長い穗。

○青羽山　近江國。

新古今和歌集　巻第八

哀傷歌

題しらず　　僧正遍昭

すゑの露もとのしづくや世の中のおくれ先立つためしなるらむ

小野小町

あはれなり我が身のはてや淺緑つひには野邊のかすみと思へば

醍醐の帝かくれ給ひてのち彌生のつごもりに三條右大臣に遣はしける　　中納言兼輔

さくら散る春の末にはなりにけりあま閒も知らぬながめせしまに

正暦二年諒闇の春櫻の枝につけて道信朝臣に遣はしける　　實方朝臣

墨染のころもうき世の花ざかりをり忘れても折りてけるかな

かへし　　道信朝臣

あかざりし花をや春も戀ひつらむありし昔を思ひ出でつゝ

彌生の頃人に後れて歎きける人の許に遣はしける　　成尋法師

○世の中の　世の中の人の。
○おくれ先立つためし　後れ先立ちはあつても何れも消える例。

○あま閒　雨の晴れ閒。

○諒闇　天子が喪に服すること。
○ころも　衣—頃も。
○をり忘れても　花をもてはやす折でないのを忘れて。

花櫻まださかりにて散りにけむなげきのもとを思ひこそやれ

人の櫻を植ゑ置きてその年の四月なくなりにける又の年初めて花咲きたるを見て　大江嘉言

花みむと植ゑけむ人もなきやどの櫻は去年の春ぞ咲かまし

年頃すみ侍りける女の身まかりにける四十九日はててなほ山里に籠り居てよみ侍りける　左京大夫顯輔

たれもみな花の都に散りはててひとりしぐるゝ秋のやまざと

公守朝臣の母身まかりて後の春法金剛院の花を見て　後德大寺左大臣

花見てはいとゞ家路ぞ急がれぬ待つらむとおもふ人しなければ

定家朝臣母のおもひにはべりける春の暮に遣はしける　攝政太政大臣

はる霞かすみし空のなごりさへ今日をかぎりの別れなりけり

前大納言光頼春身まかりけるを桂なる所にてとかくして歸り侍りけるに　前左兵衞督惟方

たちのぼる煙をだにも見るべきに霞にまがふはるのあけぼの

六條攝政かくれ侍りて後植ゑおき侍りける牡丹の咲きて侍りけるを折りて女房の許より遣はして侍りければ　太宰大貳重家

○なげき　歎きに木を云ひ懸く。

○公守朝臣の母　左大臣の奥方。

○家路ぞ急がれぬ　家に待つ人もないので家路が急がれない。

○かすみし空のなごりさへ　亡き人の火葬の煙で霞んでゐた空の名殘までも春霞と共に。

かたみとて見れば歎きのふかみ草なになかなかの匂ひなるらむ

稚き子の亡せにけるが植ゑおきたりける菖蒲を見てよみ侍りける　高陽院木綿四手

菖蒲草たれしのべとか植ゑおきてよもぎが下の露と消えけむ

歎くこと侍りける五月五日人の許へ申しつかはしける　上西門院兵衛

けふくれどあやめもしらぬ袂かな昔を戀ふるねのみかゝりて

近衞院かくれ給ひにければ世をそむきて後五月五日皇嘉門院に奉られける　九條院

菖蒲草ひきたがへたる袂にはむかしを戀ふるねぞかゝりける

御かへし　皇嘉門院

さもこそはおなじ袂の色ならめ變らぬねをもかけてけるかな

すみ侍りける女なくなりにける頃藤原爲頼朝臣の妻身まかりにけるに遣はしける　小野宮右大臣

よそなれど同じ心ぞかよふべき誰も思ひのひとつならねば

かへし　藤原爲頼朝臣

ひとりにもあらぬ思ひはなき人も旅のそらにや悲しかるらむ

小式部内侍露おきたる萩織りたる唐衣をきて侍りけるを身まかりて後上

○ふかみ草　牡丹の異名。

○あやめ　菖蒲—文目（辨別）。
○ね　根—泣。
○世をそむきて　出家して。

○九條院　近衞院の中宮。

○皇嘉門院　崇德院の中宮で九條院とは姉妹でいらせられる。

○思ひのひとつならねば　貴方とても自分の妻ばかりでなく我が妻をも喪いて下さるでせうから。
○ひとりにもあらぬ思ひは　誰も思ひがひとつでないから。
○なき人も　亡き人も同じ心に通うて。
○旅　死出の旅。
○小式部内侍　和泉式部の娘。

東門院より尋ねさせ給ひたるに奉るとて　　和泉式部

おくと見し露もありけりはかなくて消えにし人をなにに喩へむ

御かへし　　上東門院

思ひきやはかなく置きし袖のうへの露を形見にかけむものとは

白河院の御時中宮おはしまさで後その御方は草のみ茂りて侍りけるに七月七日わらはべの露とりはべりけるを見て　　周防内侍

あさぢ原はかなくおきし草のうへの露をかたみと思ひかけきや

一品資子内親王にあひて昔の事ども申しいだしてよみ侍りける　　女御徽子女王

袖にさへ秋のゆふべは知られけり消えし淺茅が露をかけつゝ

例ならぬ事重くなりて御ぐしおろし給ひける日上東門院中宮と申しける時遣はしける　　一條院御歌

秋風の露のやどりに君を置きて塵を出でぬることぞ悲しき

秋の頃幼き子におくれたる人に　　大貳三位

わかれけむ名殘の袖もかわかぬに置きや添ふらむ秋のゆふ露

かへし　　讀人しらず

置き添ふる露とともには消えもせで涙にのみもうき沈むかな

○露とり　七夕の手向の歌を書くには露を硯水にするので…。
○思ひかけきや　思ひかけたらうかい。
○昔の事ども　村上天皇の御事であらう。
○女御　村上天皇の女御。
○例ならぬ事　病氣。
○露のやどり　はかない世のこと
○塵を出でぬること　出家した事
○置きや添ふらむ　置き添ふのたらうか。

○廉義公　藤原賴忠。實賴の子。
○清愼公　藤原實賴。

○つゆばかり　露ほど。

○さらでだに　さうでなくてさへ

○秋のさが野　秋のさが（習ひ）に嵯峨野。
○きり〴〵す　實國に喩ふ。
○うき世のさがの野邊　これも「憂世のさが（習ひ）」に「嵯峨の野」を云ひ懸く。

廉義公の母なくなりて後女郎花を見て　　清愼公

女郎花みるにこゝろはなぐさまでいとゞ昔の秋ぞこひしき

彈正尹爲尊親王におくれて歎き侍りける頃　　和泉式部

ねざめする身を吹きとほす風の音を昔は袖のよそに聞きけむ

從一位源師子かくれ侍りて宇治より新少將が許につかはしける　　知足院入道前關白太政大臣

袖ぬらす萩のうは葉のつゆばかり昔忘れぬ蟲の音ぞする

法輪寺に詣ではべるとて嵯峨野に大納言忠家が墓の侍りけるもとにまかりてよみ侍りける　　權中納言俊忠

さらでだに露けき嵯峨の野邊に來て昔の跡にしをれぬるかな

公時卿の母身まかりて歎き侍りける頃大納言實國のもとに申し遣はしける　　後德大寺左大臣

かなしきは秋のさが野のきり〴〵すなほ故鄕に音をやなくらむ

母の身まかりにけるを嵯峨のほとりにをさめける夜よみける　　皇太后宮大夫俊成女

今はさはうき世のさがの野邊をこそ露消えはてし跡と忍ばめ

母身まかりにける秋野分しける日もと住み侍りける所にまかりて　　藤原定家朝臣

たまゆらの露もなみだもとゞまらずなき人戀ふる宿のあきかぜ　藤原秀能

父秀宗身まかりての秋寄風懷舊といふことをよみ侍りける

つゆをだに今はかたみの藤衣あだにも袖を吹くあらしかな　殷富門院大輔

久我内大臣春の頃うせて侍りける年の秋土御門内大臣中將に侍りける時遣はしける

秋ふかき寐覺にいかゞ思ひ出づるはかなく見えし春の夜のゆめ　土御門内大臣

かへし

見しゆめを忘るゝ時はなけれども秋のねざめはげにぞ悲しき　大納言實家

忍びて物申しける女身まかりて後その家にとまりてよみ侍りける

なれし秋のふけし夜牀はそれながら心のそこの夢ぞかなしき　西行法師

みちのくにへまかりける野中に目に立つ樣なる塚の侍りけるを問はせ侍りければこれなむ中將の墓と申すと答へければ中將とはいづれの人ぞと問ひ侍りければ實方朝臣の事となむ申しけるに冬の事にて霜枯の薄ほのぼの見えわたりて折節もの悲しく覺え侍りければよめる

朽ちもせぬその名ばかりを止めおきて枯野の薄かたみにぞ見る　大僧正慈圓

同行なりける人うち續きはかなくなりにければ思ひ出でてよめる

○たまゆらの　瞬間の。

○藤衣　喪服。

○見しゆめを　夢のやうにはかなく亡くなつた人を。

○なれし　馴れた。

○ふけし　秋と共に夜の更けた。

○それながら　そのまゝながら。

○みちのくに　陸奥國。

故鄕を戀ふるなみだやひとり行くともなき山の道しばの露

母のおもひに侍りける秋法輪寺に籠りて嵐のいたく吹きければ　皇太后宮大夫俊成

うき世には今はあらしの山風にこれやなれ行くはじめなるらむ

定家朝臣の母身まかりて後秋の頃墓所近き堂にとまりてよみ侍りける

まれにくる夜半もかなしき松風をたえずや苔のしたに聞くらむ

堀河院かくれ給ひて後神無月風の音あはれに聞えければ　久我太政大臣

物おもへば色なき風もなかりけり身にしむ秋の心ならひに

藤原定通身まかりて後月あかき夜人の夢に殿上になむ侍るとてよみける

ふるさとを別れし秋をかぞふれば八年になりぬありあけの月

源爲義朝臣身まかりにける又の年月をみて　能因法師

いのちあればことしの秋も月は見つわかれし人にあふ夜なきかな

世の中はかなく人々多くなくなり侍りける頃中將宣方朝臣身まかりて十月ばかり白川の家にまかりけるに紅葉の一葉殘れるを見つけて

けふ來ずば見でややままし山里の紅葉も人もつねならぬ世に

十月ばかり水無瀬に侍りし頃前大僧正慈圓の許へぬれて時雨のなど申し

○母のおもひ　母の喪。
○あらし　在らじ―嵐。
○なれ行く　出家しての山住ひに馴れ行く。
○色なき風　紀友則の歌に「吹き寄れば身にも染みける秋風を色無き物と思ひけるかな」
○いのちあれば　命があるので。
○けふ來ずば見でややままし　今日來ないならば見ないでしまつたらう。
○つねならぬ世に　無常な世であるから。
○ぬれて時雨の　御製中の詞であらう。

遣はして次の年の神無月無常の歌あまたよみて遣はし侍りし中に　太上天皇

おもひいづるをりたく柴の夕煙むせぶもうれし忘れがたみに

かへし　前大僧正慈圓

思ひ出づるをりたく柴ときくからにみだれ知られぬゆふ煙かな

雨中無常といふことを　太上天皇

なき人のかたみの雲やしぐるらむゆふべの雨に色は見えねど

枇杷皇太后宮かくれて後十月ばかり彼の宮の人々の中に誰ともなくてさし置かせける　相模

神無月しぐるゝころもいかなれや空に過ぎにし秋のみやびと

右大將通房身まかりて後手習ひすさび侍りける扇を見出してよみ侍りける　土御門右大臣女

手すさびのはかなき跡と見しかども長き形見になりにけるかな

齋宮女御の許にて先帝の書かせ給へりけるさうしを見侍りて　馬内侍

尋ねても跡はかくてもみづぐきのゆくへも知らぬ昔なりけり

かへし　女御徽子女王

いにしへのなきに流るゝ水莖は跡こそ袖のうらによりけれ

○をりたく　「おもひ出づる折」に「折り焚く」を云ひ懸く。

○みだれ知られぬ　心の亂れの限り知られない。一本に「類知られぬ」又「類悲しき」とある。

○かたみの雲　火葬の煙を云ひ添へてゐる。

○いかなれや　いかにしてか。

○みづぐき　斯くても見るに水莖を云ひ懸く。

○袖のうら　袖の裏―袖の浦（出羽國）

恒徳公かくれてのち女の許に月あかき夜忍びてまかりてよみ侍りける　藤原道信朝臣

ほしもあへぬ衣の闇にくらされて月ともいはず迷ひぬるかな

入道攝政のために萬燈會行はれ侍りけるに　東三條院

水底(みなそこ)にちゞの光はうつれどもむかしの影は見えずぞありける

公忠朝臣身まかりにける頃よみ侍りける　源信明朝臣

ものをのみ思ひ寐ざめのまくらには涙かゝらぬあかつきぞなき

一條院かくれ給ひにければその御事をのみ戀ひ歎き給ひて夢にほのかに見え給ひければ　上東門院

逢ふことも今はなきねの夢ならでいつかは君をまたは見るべき

後朱雀院かくれ給ひて上東門院白川に籠り給ひにけるを聞きて　女御藤原生子

うしとては出でにし家を出でぬなりなど故郷に我が歸りけむ

をさなかりける子の身まかりにけるに　源道濟

はかなしと言ふにもいとゞ涙のみかゝるこの世を頼みけるかな

後一條院の中宮かくれ給ひて後人の夢に

故郷にゆく人もがな告げやらむ知らぬ山路にひとりまどふと

○衣の闇　喪服の墨染なのを云ふ

○ちゞの光　千箇の光。萬燈の影

○むかしの影　亡き人の影。

○なきね　逢ふ事も無きに泣き寢を云ひ懸く。

○出でにし家を出でぬなり　一度出た京極殿を又出て白川殿にこもつたことを云ふ。この歌榮華物語の根合卷に見える。

○など　何として。

○故郷　父の大二條殿をいふのか

○かゝる　涙のかゝる－斯かる。

○知らぬ山路　死出の山路。

小野宮右大臣身まかりぬと聞きてよめる　　權大納言長家

玉の緒の長きためしにひく人も消ゆれば露にことならぬかな

小式部内侍身まかりて後常にもちて侍りける手箱を誦經にせさすとてよみ侍りける　　和泉式部

こひわぶと聞きにだに聞け鐘の音にうち忘らるゝ時のまぞなき

上東門院の小少將身まかりて後常にうちとけてかき遣はしける文の物の中にはべりけるを見出でて加賀少納言が許につかはしける　　紫式部

誰か世にながらへて見む書きとめし跡は消えせぬ形見なれども

かへし　　加賀少納言

なき人をしのぶる事もいつまでぞ今日のあはれはあすのわが身を

僧正明尊かくれて後久しくなりて房なども岩倉に取り渡して草生ひ侍りてことざまになりにけるを見て　　律師慶暹

亡き人の跡をだにとて來て見ればあらぬ里にもなりにけるかな

世のはかなき事を歎く頃みちのくにに名ある所々かきたる繪を見侍りて

見し人のけぶりになりし夕より名もむつましきしほがまの浦

後朱雀院かくれ給ひて後源三位が許へ遣はしける　　辨乳母

○玉の緒の長きためしにひく人も　長壽の例に引く人でも。小野宮右大臣は八十八歲の高齢で亡くなつたので。
○誦經にせさす　誦經の爲に布施として送る。
○鐘の音に　誦經の時の鐘の音に
○誰か世に長らへて見む　誰が長らへて見るだらう。
○いつまでぞ　いつまで續くことか。
○あすのわが身を　明日は我が身の上に廻つて來ることなのを。
○あらぬ里　前とは全く變つた里
○名もむつましきしほがまの浦　煙立つ所なので…。

あはれ君いかなる野邊のけぶりにてむなしき空の雲となりけむ

かへし　　源三位

おもへ君もえし煙にまがひなで立ちおくれたる春のかすみを

大江嘉言對馬守になりて下るとて難波堀江の葦のうらばにとよみて下り侍りにける程に國にてなくなりにけると聞きて　　能因法師

あはれ人けふのいのちを知らませばなにはの葦に契らざらまし

題しらず　　大江匡衡朝臣

夜もすがら昔のことを見つるかな語るやうつゝ有りし世や夢

俊頼朝臣身まかりて後常に見ける鏡を佛に作らせ侍るとてよめる　　新少將

うつりけむ昔の影やのこるとて見るに思ひのますかゞみかな

通ひける女のはかなくなり侍りにける頃書きおきたるふみども經の料紙になさむとて取りいでて見はべりけるに　　按察使公通

かきとむる言の葉のみぞ水莖の流れてとまるかたみなりけり

禎子内親王かくれ給ひて後悰子内親王かはり居侍りぬと聞きてまかりて見ければ何事もかはらぬやうに侍りけるもいとゞ昔思ひ出でられて女房に申し侍りける　　中院右大臣

○思へ君　思ひやつて下さい、君よ。
○もえし煙にまがひなで　後朱雀院を火葬申した煙に乳母である我も紛ひ得ずして。
○立ちおくれたる春のかすみを　死に後れた自分のこと。
○難波堀江の葦のうらばに　後拾遺集卷八に「命あらばいま歸り來む津の國の難波堀江の蘆のうら葉に」とある。
○けふのいのちを知らませば　今日の命を知るならば。
○語るやうつゝ有りし世や夢　語る今の世が現實なのか、又は過去に有つた世が夢なのか。
○鏡を佛に　鏡を以て佛像に。
○經の料紙になさむとて　經を書く用紙に漉き直させようとて。

有栖川おなじながれはかはらねど見しや昔のかげぞわすれぬ

権中納言通家の母かくれ侍りにける秋摂政太政大臣のもとに遣はしける　　皇太后宮大夫俊成

かぎりなき思ひのほどの夢のうちは驚かさじと歎きこしかな

かへし　　摂政太政大臣

見し夢にやがて紛れぬわが身こそ問はるゝけふもまづ悲しけれ

母のおもひに侍りける頃又なくなりにける人のあたりより問ひ侍りければ遣はしける　　藤原清輔朝臣

世の中は見しも聞きしもはかなくてむなしき空の煙なりけり

無常の心を　　西行法師

いつ歎きいつ思ふべきことなれば後の世しらで人の過ぐらむ

前大僧正慈圓

皆人の知り顔にして知らぬかなかならず死ぬるならひありとは

きのふ見し人はいかにと驚けばなほ長き夜の夢にぞありける

蓬生にいつか置くべき露の身はけふの夕暮あすのあけぼの

我もいつぞあらましかばと見し人を忍ぶとすればいとゞ添ひ行く

○有栖川　齋院の居られる本院の傍に在る川。○見しや昔のかげぞわすれぬ　袖中抄には「昔の影の見えばこそ有らめ」とある。

○思ひのほどの夢のうちは　夢のやうに忌中を過す間は。○驚かさじと云々　驚かして其の夢を覺しては却つて御思ひの増すことと思つて、さうしまいと自分一人歎息して過した。○見し夢にの歌　夢のやうに亡くなつた人に、直に紛れて自分も共に死ななかつた我が身は君から問はれる今日も先づこれが悲しい。

○いつ歎きいつ思ふべき事なれば　後世に惡道に墮ちる事を歎き極樂に生まれる事を思ふのはいつといふことはなく皆現世以外の事ではないのに。○知らぬかな　後世の營みをすべきなのに、しないのを見ること。○驚けば　目覺めても。一本「驚けど」○我もいつぞ　我もいつ死者の數に入るのか。○あらましかばと　拾遺集卷二十に「世の中に在らましかばと思ふ人なきが多くもなりにけるかな」

前參議教長高野に籠りゐて侍りけるが病かぎりになりぬと聞きて賴輔卿まかりけるほどに身まかりぬと聞きてつかはしける　寂蓮法師

たづね來ていかにあはれと眺むらむあとなき山のみねの白雲

人におくれて歎きける人に遣はしける　西行法師

なきあとの面影をのみ身にそへてさこそは人の戀しかるらめ

なげくこと侍りける人問はずと恨み侍りければ

あはれとも心に思ふほどばかりいはれぬべくは問ひこそはせめ

無常の心を　入道左大臣

つくづくと思へばかなしいつまでか人の哀れをよそに聞くべき

左近中將通宗が墓所にまかりてよみ侍りける　土御門内大臣

後れゐて見るぞ悲しきはかなさを憂き身の跡になに賴みけむ

覺性法親王かくれ侍りて周忌のはてに墓所にまかりてよみ侍りける　前大僧正慈圓

そこはかと思ひつゞけて來てみれば今年の今日も袖はぬれけり

母のために粟田口の家にて佛供養し侍りける時はらから皆まうできあひて古きおもかげなど更にしのび侍りける折しも雨かきくらし降り侍りけ

○さこそは　さやうには。

○心に思ふほどばかり　心に思ふ程を。

○いはれぬべくは　口に出して云はれるものならば、お訪ねしませうに。

○よそに聞くべき　よそごとに聞けるだらうか、何れは我が身の上のあはれになるのだらう。

○後れゐて　死に後れて。

○憂き身の跡になにたのみけむ　かやうにはかない人を我が身の跡に殘つて跡を弔はれようとなぜ賴みにしたのだらう。

○そこはかと　何といふこともなくの意味に「墓」を云ひ懸く。

れぱかへるとてかの堂の障子にかきつけ侍りける　右大將忠經

たれもみな涙の雨にせきかねぬ空もいかゞはつれなかるべき

なくなりたる人の數をそとばにかきて歌よみ侍りけるに　法橋行遍

見し人は世にもなぎさの藻鹽草かき置くたびに袖ぞしをるゝ

子の身まかりにける次の年の夏かの家にまかりたりけるに花橘の薫りければよめる　祝部成仲

あらざらむのち忍べとや袖の香を花たちばなにとゞめ置きけむ

能因法師身まかりて後よみ侍りける　藤原兼房朝臣

在りし世に暫しも見ではなかりしを哀れとばかりいひて止(や)みぬる

妻なくなりて又の年の秋の頃周防内侍が許へ申しつかはしける　權中納言通俊

とへかしなかたしく藤の衣手になみだのかゝる秋のねざめを

堀河院かくれ給ひて後よめる　權中納言國信

君なくてよるかたもなき青柳のいとゞうき世ぞおもひみだるゝ

通ひける女山里にてはかなくなりにければつれ〴〵とこもりゐて侍りけるがあからさまに京へまかりて曉歸るに鳥なきぬと人々いそがし侍りければ　左京大夫顯輔

○空もいかゞはつれなかるべき　空とてもなんとしてつれなくして居られようか。

○なぎさ　「世にも無き」を「渚」に云ひ懸く。

○あらざらむのち　亡き後に。

○在りし世に　生きて居つた世に　○見ではなかりしを　見參らせずにはゐなかつたのを。

○とへかしな　問ひ給へよ。

○いとゞ　「青柳の絲」を云ひ懸く

○あからさまに　かりそめに。

いつのまに身を山がつになしはてて都を旅と思ふなるらむ　人麿

奈良の帝をさめ奉りけるを見て

久方のあめにしをるゝ君ゆゑに月日もしらで戀ひわたるらむ

題しらず　小野小町

あるはなくなきは數そふ世の中にあはれいづれの日まで歎かむ　在原業平朝臣

しら玉かなにぞと人の問ひしとき露とこたへてけなましものを

更衣の服にて參れりけるを見給ひて　延喜御歌

年ふればかくもありけり墨染のこは思ふてふそれかあらぬか

おもひにて人の家に宿れりけるをその家に忘草の多く侍りければあるじに遣はしける　中納言兼輔

なき人をしのびかねてはわすれ草おほかる宿にやどりをぞする

病にしづみて久しく籠りゐて侍りけるがたま／＼よろしうなりて内にまゐりて右大辨公忠藏人に侍りけるに逢ひて又あさてばかり參るべきよし申してまかり出でにけるまゝにやまひ重くなりて限りに侍りければ公忠朝臣につかはしける　藤原季繩

○久方のの歌　萬葉集卷二に「高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麿作歌」として、長歌を掲げた次に「久堅の天知らしぬる君故に月日も知らに戀ひ渡るかも」

○あるはなくなきは數そふ　生きてある人は無く、亡き人は數の加はる。

○しら玉かの歌　伊勢物語に詳しい。

○けなましものを　消えたらうものを。

○こは思ふてふそれかあらぬか　これは我が思ふといふその人かさうでないか。

○おもひ　喪。

悔しくぞ後に逢はむと契りける今日をかぎりといはましものを

母の女御かくれ侍りて七月七日よみ侍りける　中務卿具平親王

墨染の袖はそらにもかさなくにしぼりもあへず露ぞこぼるゝ

うせにける人のふみの物の中なるを見出でてそのゆかりなる人の許につかはしける　紫式部

暮れぬ間の身をば思はで人の世のあはれを知るぞかつははかなき

○今日をかぎりと　今日かぎり逢ふまいと。

○かさなくに　織女星に貸さないのに。

○暮れぬ間の歌　拾遺集巻二十に「明日知らぬ我が身と思へど暮れぬ間の今日は人こそかなしかりけれ」

新古今和歌集　巻第九

離別歌

みちのくに下り侍りける人に裝束おくるとてよみ侍りける　　紀貫之

玉鉾のみちの山風さむからばかたみがてらに著なむとぞおもふ

題しらず　　伊勢

忘れなむ世にも越路のかへる山いつはた人に逢はむとすらむ

あさからず契りける人の行き別れ侍りけるに　　紫式部

北へゆく鴈のつばさにことづてよ雲のうはがきかき絶えずして

ゐなかへまかりける人に旅衣つかはすとて　　大中臣能宣朝臣

秋霧のたつ旅ごろも置きてみよ露ばかりなるかたみなりとも

みちのくに下り侍りける人に　　貫之

見てだにもあかぬこゝろを玉鉾の道のおくまで人の行くらむ

逢坂の關近きわたりに住み侍りけるに遠き所にまかりける人に餞し侍りて　　中納言兼輔

○玉鉾の　「道」の枕詞。
○著なむ　來なむをいひ懸く。
○かへる山　越前國南條郡。
○いつはた　何時將た—五幡（イツハタ）（越前國）
○雲のうはがき　雲の上掻き（鴈が雲の上を飛ぶこと）—雲の上書き（雲翰。手紙のこと）。
○たつ　立つ—裁つ。
○置きて　留め置いて。
○道のおく　陸奥國を云ひ懸く。

逢坂のせきに我が宿なかりせばわかるゝ人はたのまざらまし

寂昭上人入唐し侍りけるに裝束おくりけるに立ちけるをしらで追ひて遣はしける　讀人しらず

きならせと思ひしものを旅ごろもたつ日も知らずなりにけるかな

かへし　寂昭法師

これやさは雲のはたてに織ると聞くたつことしらぬ天の羽衣

題しらず　重之

ころも川みなれし人の別れには袂までこそ浪はたちけれ

みちのくにの介にてまかりけるとき範永朝臣の許につかはしける　高階經重朝臣

ゆく末にあふくま河のなかりせばいかにかせまし今日の別れを

かへし　藤原範長朝臣

君にまたあふくま河をまつべきにのこり少なきわれぞ悲しき

太宰帥隆家くだりけるに扇賜ふとて　枇杷皇太后宮

涼しさはいきのまつ原まさるとも添ふる扇の風なわすれそ

亭子院宮の瀧御覽じにおはしましける御ともに素性法師めし具せられてまゐりけるを住吉のこほりにていとま給はせて大和につかはしけるによ

○わかるゝ人はたのまざらまし　別れる人には再び逢ふことを頼まないだらうに。(逢ふといふ名の逢坂の關に我が宿があるから再び逢ふことを頼むのだ)。

○きならせ　著馴らせ―來馴らせ

○たつ日も知らずなりにけるかな　裁つ(立つ)日も知らないやうになつた。暇乞もしてくれないので

○法師　一本「上人」

○雲のはたて　雲の「端手」に「機」を云ひ懸く。

○たつ　裁つ―立つ。

○天の羽衣　縫目がないといふ。

○みなれし　水(ミ)馴れし―見馴れし。

○みちのくにの介　陸奥介。國司の第二等官。

○あふくま河　奥州の川の名に「逢ふ」を云ひ懸く。

○のこり少なき　老いて餘齢の少ない。

○いきのまつ原　筑前國早良郡。

○宮の瀧　大和國吉野郡。

○具せられ　伴はれ。

○住吉のこほり　住吉郡。

みはべりける　　一條右大臣

神無月まれの御幸にさそはれて今日別れなばいつか逢ひみむ

題しらず　　大江千里

わかれての後も逢ひみむと思へどもこれを何れの時とかは知る

成尋法師入唐し侍りけるに母のよみ侍りける

もろこしも天の下にぞあるときく照る日の本を忘れざらなむ

修行に出で立つとて人の許につかはしける　　道命法師

別れ路はこれや限りのたびならむ更にいくべきこゝちこそせね

老いたる親の七月七日筑紫へ下りけるに遙かにはなれぬる事を思ひて八日の曉追ひて舟にのる所につかはしける　　加賀左衞門

あまの河そらに聞えし舟出にはわれぞまさりて今朝はかなしき

實方朝臣みちのくにへ下り侍りけるに餞すとてよみ侍りける　　中納言隆家

別れ路はいつもなげきの絶えせぬにいとゞかなしき秋の夕ぐれ

かへし　　藤原實方朝臣

とゞまらむ事は心にかなへども如何にかせまし秋のさそふを

七月ばかり美作へくだるとて都の人につかはしける　　前中納言匡房

○これを何れの時とかは知る　この次の逢ふ時を何日と知らうかい

○照る日の本　日の照る下の意味に日本國の意味を云ひ懸く。
○忘れざらなむ　忘れ給ふな。

○かぎりの　この限りの。
○たび　旅—度。
○いくべき　行く—生く。

○追ひて　追ひついて。

○そらに聞えし舟出には　織女星が牽牛星と別れるときの舟出よりは。

○いつも　四季の如何を問はずいつでも。
○いとゞ　一層。
○とゞまらむ事は心にかなへども　任じられても留まらうといふことは我が心次第ではあるが。
○秋の誘ふを　秋が我が身を誘ふのをどうしようもないの意味。

都をばあきとともにぞ立ち初めし淀の河ぎりいく夜へだてつ

みこの宮と申しけるとき太宰大貳實政學士にて侍りける甲斐守にて下り侍りけるに餞たまはすとて　　後三條院御歌

思ひ出でばおなじ空とは月を見よほどは雲ゐにめぐり逢ふまで

みちのくにの守もとよりの朝臣久しくあひみぬよし申していつ上るべしともいはず侍りければ　　藤原基俊

かへり來むほど思ふにも武隈のまつわが身こそいたく老いぬれ

修行に出で侍りけるによめる　　大僧正行尊

思へども定めなき世のはかなさにいつを待てともえこそ頼めね

俄に都をはなれて遠くまかりけるに女につかはしける　　讀人しらず

ちぎり置くことこそ更になかりしかかねて思ひしわかれならねば

別れの心をよめる　　俊惠法師

かりそめの別れとけふを思へども今やまことの旅にもあるらむ

登蓮法師

歸りこむほどをや人に契らまし忍ばれぬべきわが身なりせば

守覺法親王五十首の歌よませ侍りける時　　藤原隆信朝臣

○ほどは雲ゐにめぐりあふまで　再び雲居（禁中）で巡り逢ふまでの程は。

○まつ　松―待つ。

○思へども　歸り來るのを待てといひたく思ふが。

○えこそ頼めね　不定の世だから頼み難い。（いつ死ぬかもわからないから。）

○かねて　豫め。前以て。

○まことの旅　死出の旅を云ふ。

○忍ばれぬべき　人に忍ばれるやうだ。

たれとしも知らぬわかれの悲しきは松浦の沖をいづる船びと

登蓮法師筑紫へまかりけるに　　俊惠法師

はる／＼と君がわくべき白波をあやしやとまる袖にかけつる

みちのくにへまかりける人に餞し侍りけるに　　西行法師

君いなば月待つとてもながめやらむあづまのかたの夕ぐれの空

遠き所に修行せむとて出で立ちけるに人々別れ惜しみてよみ侍りける

頼めおかむ君も心やなぐさむと歸らむことはいつとなくとも

さりともとなほ逢ふことを頼むかな死出の山路をこえぬわかれは

遠き所へまかりけるとき師光餞しはべりけるによめる　　道因法師

歸り來むほどを契らむと思へども老いぬる身こそ定めがたけれ

題しらず　　皇太后宮大夫俊成

かりそめの旅の別れとしのぶれど老は涙もえこそとゞめね

祝部成仲

別れにし人はまたもやみわの山すぎにしかたを今になさばや

藤原定家朝臣

忘るなよやどる袂はかはるともかたみにしぼる夜半の月影

○たれとしも知らぬわかれ　誰とも知らぬ人の別れ。
○松浦　筑前國にあつて支那へ渡る湊。
○わくべき　分け行くべき。
○とまる袖にかけつる　あとに留まる袖にかけたことよ（涙の事）。
○君いなば　君が東方の陸奥國へ行くならば。
○月待つとても　私は月の出るのを待つとても。
○頼めおかむ　歸つて再び逢ふことを頼み置かう。
○死出の山路をこえぬわかれは　死別といふのでもないから。

○しのぶれど　堪へるけれども。
○老の涙もえこそとゞめね　老といふものは涙もろいもの故涙をも止め得ない。
○みわの山　「又もや見む」を三輪山（大和國）に云ひ懸く。
○すぎにしかたを今になさばや　過去を今になしたい。「過ぎ」を「杉」に云ひ懸く。三輪山の杉は名高いので。
○やどる袂　月影の映る袂。
○かたみに　互に。
○しぼる　涙の袖を絞る。

都の外へまかりける人によみておくりける　　惟明親王

なごりおもふ袂にかねて知られけり別るゝ旅のゆくすゑの露

筑紫へまかりける女に月出したる扇をつかはすとて　　讀人しらず

都をばこゝろの空に出でぬとも月見むたびに思ひおこせよ

遠き國へまかりける人に遣はしける　　大藏卿行宗

別れ路は雲ゐのよそになりぬともそなたの風のたよりすぐすな

人の國へまかりける人に狩衣つかはすとてよめる　　藤原顯綱朝臣

色ふかく染めたる旅のかり衣かへらぬまでのかたみとも見よ

○なごりおもふ　別れて後の戀しさを別れぬ前から思ふ。○かねて　豫め。前以て。○ゆくすゑの露「前途の露」に「これから後の涙の露」を云ひ懸く。○月出したる扇　月を描いた扇。

○すぐすな　通ひ過すな。

○かへらぬまで　「色のかへらぬまで」に「歸京せぬまで」の意味を懸く。

新古今和歌集　巻第十

羇旅歌

和銅三年三月藤原の宮より奈良の宮に遷らせ給うける時　　元明天皇御歌

とぶ鳥の飛鳥の里をおきていなば君があたりは見えずかもあらむ

天平十二年十月伊勢國に行幸し給ひける時　　聖武天皇御歌

いもに戀ひわかの松原見わたせば汐干のかたにたづ鳴きわたる

唐(もろこし)にてよみ侍りける　　山上憶良

いざ子どもはや日の本へ大伴のみつのはま松まち戀ひぬらむ

題しらず　　人麿

あまざかるひなの長路を漕ぎくれば明石のとより大和島みゆ

篠の葉はみ山もよそに亂るなりわれは妹思ふわかれ來ぬれば

帥の任はてて筑紫より上り侍りけるに　　大納言旅人

こゝにありて筑紫やいづこ白雲のたなびく山の西にあるらし

題しらず　　讀人しらず

○藤原の宮より奈良の宮に　「飛鳥の宮より藤原の宮に」の誤りか
○とぶ鳥の　飛鳥の枕詞。
○飛鳥の里　天武天皇の時の都。大和國高市郡。
○いなば　去らば。
○わかの松原　伊勢國阿藝郡。
○みつのはま松　攝津國大阪。
○あまざかる　天離る。「ひな」の枕詞。
○漕ぎくれば　萬葉集には「戀ひ來れば」
○明石のと　明石の狹門。
○篠の葉は　一本「篠の葉の」
○そよに　一本「そよこ」。萬葉集では「さやに」
○帥　太宰權帥。
○筑紫　九州の古稱。
○西にあるらし　萬葉集では「方にし有るらし」

○見やはとがめぬ　見咎めないだらうか。

○宇都の山邊の　「うつゝ」の序。

○ゆふ風　草枕結ふ―夕風。

○山のかけはし今日や越えなむ　貫之集に「山の棚橋我も渡らむ」

○東路や　一本「東路の」

○さやのなか山　遠江國。「さやか」を云ひ起す序。

○見えぬ雲居に世をやつくさむ　古鄕の見えない遙かな所で世を盡し果てようか。

○都鳥ありやと　伊勢物語に「名にし負はばいざ言問はむ都鳥我が思ふ人は有りや無しやと」

あさ霧にぬれにし衣ほさずしてひとりや君がやま路こゆらむ

東(あづま)の方にまかりけるに淺間の嶽に煙のたつを見てよめる　在原業平朝臣

しなのなる淺間のたけに立つ煙をちこち人の見やはとがめぬ

駿河の國宇都の山にあへる人につけて京へつかはしける

駿河なる宇都の山邊のうつゝにも夢にも人に逢はぬなりけり

延喜の御時屛風の歌　紀貫之

くさまくらゆふ風さむくなりにけり衣うつなる宿やからまし

題しらず

しら雲のたなびき渡るあしびきの山のかけはし今日や越えなむ

壬生忠岑

東路やさやのなか山さやかにも見えぬ雲居に世をやつくさむ

伊勢より人に遣はしける　女御徽子女王

人をなほうらみつべしや都鳥ありやとだにも問ふを聞かねば

題しらず　菅原輔昭

讀人しらず

まだしらぬ故鄕人は今日までに來むと賴めしわれを待つらむ

しながどり猪名野をゆけばありま山ゆふ霧たちぬ宿はなくして

神風の伊勢のはま荻をりふせて旅寢やすらむあらきはまべに

亭子院御ぐしおろして山々寺々に修行し給ひけるころ御供に侍りて和泉の國日根といふ所にて人々歌よみ侍りけるによめる　橘　良利

故郷のたびねの夢に見えつるは恨みやすらむまたと問はねば

信濃のみさかのかたかきたる繪に園原といふ所に旅人宿りて立ちあかしたる所を　藤原輔尹朝臣

たちながら今宵は明けぬ園原や伏屋といふもかひなかりけり

題しらず　御形宣旨

都にて越路のそらをながめつゝ雲居といひしほどに來にけり

入唐し侍りける時いつほどか歸るべきと人のとひ侍りければ　法橋奝然

旅ごろもたちゆく浪路とほければいさしら雲のほどもしられず

しきづの浦にまかりて遊びけるに舟にとまりてよみ侍りける　藤原實方朝臣

舟ながらこよひばかりは旅寢せむしきづの波に夢はさむとも

いそのへちのかたに修行し侍りけるにひとり具したりける同行を尋ねうしなひてもとの岩屋のかたへかへるとてあま人の見えけるに修行者見え

○しながどり　「猪名野」の枕詞。
○猪名野、ありま山　攝津國河邊郡。
○神風の　「伊勢」の枕詞。
○はま荻　蘆のこと。
○園原　信濃國伊那郡。
○伏屋　「伏す家」の意味を云ひ懸く。
○雲居といひしほどに　都であの邊は雲居だと云つた程の道程に。
○たち　裁ち―立ち。
○いさしら雲　「いさ知らず」を云ひ懸く。「いさ」は「どうだか」の意味。
○しきづ　攝津國の敷津の浦。
○いそのへち　地名。

ばこれを取らせよとてよみ侍りける　　大僧正行尊

わがごとくわれを尋ねばあま小舟人もなぎさの跡とこたへよ

湖の舟にて夕立のしぬべきよし申しけるを聞きてよみ侍りける　　紫式部

かきくもりゆふたつ浪のあらければ浮きたる舟ぞしづこゝろなき

天王寺に参りけるに難波の浦にとまりてよみ侍りける　　肥後

小夜ふけてあしのすゑ越す浦風にあはれ打ちそふ波の音かな

旅の歌とてよみ侍りける　　大納言經信

たびねして曉がたの鹿の音にいなばおしなみ秋風ぞ吹く

惠慶法師

わぎも子がたびねの衣うすきほどよきて吹かなむ夜半の山かぜ

後冷泉院の御時うへのをのこども旅の歌よみ侍りけるに　　左近中將隆綱

葦の葉をかりふくしづの山里にころもかたしき旅寢をぞする

賴み侍りける人におくれて後初瀬にまうでて夜とまりたりける所に草をむすびて枕にせよとて人のたびて侍りければよみ侍りける　　赤染衞門

ありし世のたびは旅ともあらざりきひとり露けきくさ枕かな

堀河院の百首の歌に　　權中納言國信

○わがごとくわれを尋ねば　私のやうに同行の人も私を尋ねるならば。

○しづこゝろなき　靜かな心がない。

○いなばおしなみ　稻葉を押靡けて。

○わぎも子　我が妹子。
○よきて　避(ヨ)けて。
○吹かなむ　吹いてくれ。

○かりふく　刈り葺く。

○たびて　賜ひて。
○ありし世のの歌　賴み侍りける人(夫)の生きてゐたさき共に詣でた時の旅の夜は此の度のわびしい旅に比べれば旅でもなかつた。
○くさ枕　「旅」の枕詞。

山路にてそぼちにけりなしら露のあかつきおきの木々のしづくに　大納言師賴

水邊旅宿といへる心をよめる　源師賢朝臣

くさまくら旅寢の人はこゝろせよ有明の月もかたぶきにけり

田上（たなかみ）にてよみ侍りける　大納言經信

磯なれぬこゝろぞ堪へぬたびねする蘆のまろ屋にかゝるしら浪

題しらず

たびねする蘆のまろやの寒ければ爪木こりつむ舟いそぐなり

旅宿雪といへる心をよみ侍りける　修理大夫顯季

み山路に今朝やいでつる旅びとのかさしろたへに雪つもりつゝ

松が根に尾花かりしき夜もすがらかたしく袖に雪はふりつゝ

みちのくにに侍りける頃八月十五夜に京を思ひ出でて大宮の女房の許に遣はしける　橘爲仲朝臣

みし人もとふの浦風おとせぬにつれなく澄める秋の夜の月

せきとの院といふ所にて羇中見月といふ心を　大江嘉言

くさ枕ほどぞ經にけるみやこ出でていく夜か旅の月に寢ぬらむ

○磯なれぬこゝろぞ堪へぬ　磯に馴れない都人の心には堪へられない。
○蘆のまろ屋　蘆葺きの假屋。
○田上　近江國。
○爪木　薪。

○今朝やいでつる旅びとの　今朝は出發したらうその旅人の。

○みし人も　都にゐた時見た人も
○とふの浦風おとせぬに　都人の風の便りもないに。間ふ——十符の浦(陸前國)。
○せきとの院　山城國乙訓郡。

守覺法親王家に五十首の歌よませ侍りけるに旅の歌　皇太后宮大夫俊成

なつかりの蘆のかりねもあはれなり玉江の月のあけがたの空

立ちかへりまたも來てみむ松島やをしまのとまや波にあらすな

藤原定家朝臣

こと問へよおもひおきつの濱千鳥なく／＼出でしあとの月かげ

藤原家隆朝臣

野邊の露うらわの浪をかこちても行くへも知らぬ袖の月かげ

攝政太政大臣

旅の歌とてよめる

もろともに出でし空こそ忘られね都の山のありあけの月

西行法師

題しらず

都にて月をあはれと思ひしは數にもあらぬすさびなりけり

月見ばとちぎりて出でしふるさとの人もや今宵袖ぬらすらむ

家隆朝臣

五十首の歌奉りし時

明けばまた越ゆべき山のみねなれや空ゆく月のすゑのしらくも

藤原雅經

故鄕のけふの面かげさそひ來と月にぞちぎる小夜のなかやま

○かりね　刈根—假寢。
○玉江　越前國。
○松島、をしま　共に奥州。
○こと問へよ　尋ねよ。
○おもひおきつ　思ひ置きつ—沖津濱（和泉國）。
○かこちても　かこつけ歎いても
○行くへも知らぬ　行末も分らぬ
○もろともに出でし　以前君と共に旅に出た。
○數にもあらぬ　今旅の空で月をあはれと思ふのに較べては…。
○すさび　一本「すまひ」
○月見ばと　月を見たなら自分を忍び給へと。
○故鄕のけふの面かげさそひ來と　別れた當時の面影は月に浮ぶが今の面影が見たいから誘うて來いと。

和歌所の月の十首の歌合の次に月前旅といへる心を人々つかうまつりし
に　攝政太政大臣

忘れじとちぎりて出でしおもかげは見ゆらむものを故郷の月

旅の歌とてよみ侍りける　前大僧正慈圓

あづまぢの夜半のながめを語らなむ都の山にかゝる月かげ

海邊重夜といへる事をよみ侍りし　越前

いく夜かは月をあはれとながめきて波にをりしく伊勢のはまをぎ

百首の歌奉りしとき　宜秋門院丹後

しらざりし八十瀬の波をわけ過ぎて片しくものは伊勢のはま荻

題しらず　前中納言匡房

風さむみ伊勢のはまをぎわけ行けば衣かりがね浪に鳴くなり

権中納言定頼

いそ馴れで心もとけぬ菰まくら荒くなかけそ水のしらなみ

百首の歌奉りしに　式子内親王

ゆくすゑは今いくよとかいはしろの岡のかやねに枕むすばむ

まつが根のをしまが磯のさ夜枕いたくなぬれそあまの袖かは

○おもかげは見ゆらむものを　私の面影は故郷の月に見えるだらうものを（少しも便りがないのはどうしたのだらうの意味）。

○語らなむ　都人に私の代りに語つてくれ。

○八十瀬　多數の川瀬。

○風さむみ　風が寒いので。

○衣かりがね　「衣を借り」を「雁がね」に云ひ懸く。

○菰まくら　眞菰の枕。

○いはしろ　紀伊國。

○いたくなぬれそ　ひどく濡れるな。

○あまの袖かは　浦人の袖ではないに。

千五百番歌合に　皇太后宮大夫俊成
かくてしもあかせばいく夜過ぎぬらむ山路の苔のつゆの筵に

旅にてよみ侍りける　權僧正永緣
しら雲のかゝるたび寢もならはぬに深き山路に日は暮れにけり

暮望行客といへる心を　大納言經信
夕日さすあさぢが原のたび人はあはれいづくに宿をかるらむ

攝政太政大臣の家の歌合に羇中晩嵐といふことをよめる　藤原定家朝臣
いづくにか今宵は宿をかり衣ひもゆふぐれの嶺のあらしに

旅の歌とてよめる　藤原家隆朝臣
旅人のそで吹きかへすあきかぜに夕日さびしき山のかけはし

藤原雅經
ふるさとに聞きしあらしのこゑも似ずわすれね人をさやのなか山

源家長
白雲のいくへの峯をこえぬらむ馴れぬあらしに袖をまかせて

けふは又しらぬ野原に行きくれぬいづれの山か月は出づらむ

○かくてしもあかせば　斯やうにして夜を明すこ。

○宿をかり衣　「宿を借り」に「狩衣」を云ひ懸く。○ひもゆふぐれ　日も夕暮—紐結ふ。

○わすれね人を　人を忘れよ。

○いづれの山か　どの山からか。

和歌所の歌合に羇中暮といふことを　皇太后宮大夫俊成女

故郷も秋はゆふべをかたみとて風のみおくる小野のしの原

雅經朝臣

いたづらに立つや淺間の夕けぶり里とひかぬるをちこちの山

宜秋門院丹後

都をばあまつ空とも聞かざりきなに眺むらむ雲のはたてを

藤原秀能

くさ枕ゆふべのそらを人問はばなきても告げよはつかりのこゑ

旅の心を　有家朝臣

ふしわびぬ篠の小笹のかりまくらはかなの露や一よばかりに

石清水の歌合に旅宿嵐といふことを

岩が根のとこにあらしを片しきてひとりや寢なむ小夜のなか山

旅の歌とて　藤原業清

たれとなき宿の夕を契りにてかはるあるじを幾夜とふらむ

羇中夕といふことを　鴨長明

枕とていづれの草にちぎるらむ行くをかぎりの野べの夕ぐれ

○風のみおくる　便りをせずに風ばかりを送る。

○いたづらに立つ　宿を借りるべき宿の煙ではなく徒らに立つ。伊勢物語に「信濃なる淺間の嶽に立つ煙をちこち人の見やは咎めぬ」

○都をばの歌　古今集卷十一に「夕暮は雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を戀ふとて」

○たれとなき宿　誰と云つて思ひ設けない宿。

○かはる　宿る度に變る。

○行くをかぎりの　行く所を限りとする。

東の方へまかりける道にてよみ侍りける　　民部卿成範

道のべの草の青葉に駒とめてなほふるさとをかへり見るかな

長月の頃初瀬に詣でける道にてよみ侍りける　　禪性法師

初瀬山ゆふこえ暮れて宿とへば三輪の檜(ひ)はらに秋風ぞ吹く

旅の歌とてよめる　　藤原秀能

さらぬだに秋の旅寢はかなしきに松に吹くなり牀の山風

攝政太政大臣の家の歌合に秋旅といふことを　　藤原定家朝臣

忘れなむまつとな告げそなかなかにいなばの山の峯のあき風

百首の歌奉りしとき旅の歌　　藤原家隆朝臣

ちぎらねど一夜はすぎぬ清見がた波に別るゝあかつきの空

千五百番歌合に

ふるさとにたのめし人もすゑの松まつらむ袖になみや越すらむ

歌合し侍りけるとき旅の心をよめる　　入道前關白太政大臣

日をへつゝ都しのぶの浦さびて波より外のおとづれもなし

堀河院の御時百首の歌奉りけるとき旅の歌　　藤原顯仲朝臣

さすらふる我が身にしあれば象潟(きさがた)やあまの苫屋に數多たび寢ぬ

○牀の山風　「牀」に「鳥籠(トコ)の山」(近江國犬上郡)を云ひ懸く。

○忘れなむの歌　古今集卷八に「立ち別れいなばの山の峯に生ふるまつとし聞かば今歸り來む」

○ちぎらねど　かねて此所に旅寢しようとは思ひ契らなかつたが。

○すゑの松　「待つ」を云ひ起す序

○しのぶの浦　「都を忍ぶ」に「信夫浦」(奥州)を云ひ懸く。

○象潟　出羽國。

○たび寢ぬ　度―旅。

入道前關白の家の百首の歌に旅の心を　　皇太后宮大夫俊成

難波人あし火たくやに宿かりてすゞろに袖のしほたるゝかな

題しらず　　僧正雅緣

また越えむ人もとまらばあはれ知れわがをりしける嶺の椎柴

前右大將賴朝

みちすがら富士の煙もわかざりき晴るゝ間もなき空のけしきに

述懷百首の歌よみ侍りけるに旅の歌　　皇太后宮大夫俊成

世の中はうきふししげし篠原や旅にしあればいも夢に見ゆ

千五百番歌合に　　宜秋門院丹後

おほつかな都にすまぬみやこ鳥こととふ人にいかゞこたへし

天王寺へ參り侍りけるに俄に雨降りければ江口に宿をかりけるにかし侍らざりければよみ侍りける　　西行法師

世のなかを厭ふまでこそかたからめ假のやどりを惜しむ君かな

かへし　　遊女妙

世をいとふ人とし聞けばかりの宿に心とむなと思ふばかりぞ

和歌所にてをのこども旅の歌つかうまつりしに　　藤原定家朝臣

○すゞろに　自然と。

○わかざりき　見分がつかなかつた。

○うきふし　浮き節—憂き節。
○いも　妹(イモ)が。

○都にすまぬみやこ鳥　伊勢物語に「京には見えぬ鳥なりければ皆人見知らず、渡守に問ひければ是れなむ都鳥といふを聞きて。名にし負はばいざ言問はむ都鳥我が思ふ人は有りや無しやと」

○かたからめ　難からめど。

○心とむな　心をとめるな。

袖にふけさぞな旅寢の夢も見じおもふかたより通ふうら風　家隆朝臣

たび寢するゆめぢはゆるせ宇都の山關とは聞かず守る人もなし

詩を歌に合はせ侍りしに山路秋行といへる心を　藤原定家朝臣

みやこにも今や衣をうつの山ゆふしもはらふ蔦のしたみち

袖にしも月かゝれとは契りおかず涙はしるや宇都のやまごえ　鴨長明

立田やま秋行く人のそでを見よ木々のこずゑはしぐれざりけり　前大僧正慈圓

百首の歌奉りしとき旅の歌

さとり行くまことの道に入りぬれば戀しかるべき故鄕もなし　寂蓮法師

初瀨に詣でてかへさに飛鳥川のほとりに宿りて侍りける夜よみ侍りける

ふるさとへ歸らむことはあすか川わたらぬさきに淵瀨たがふな

東の方にまかりけるによみ侍りける　西行法師

年たけてまた越ゆべしとおもひきや命なりけり小夜のなか山

○さぞな旅寢の夢も見じ　さぞかし旅寢では夢も見まい。
○うつの山　「衣を擣つ」に「宇都の山」を云ひ懸く。
○月かゝれとは　月が映れとは。
○そでを見よ　紅涙に染つた袖を見よ。
○木々のこずゑは　紅涙に染つた袖にくらべては。
○まことの道　佛道。
○故鄕　娑婆世界の故里。
○あすか川　明日―飛鳥川。
○淵瀨たがふな　古今集卷十八に「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀨になる」
○おもひきや　思つたらうかい。
○命なりけり　命があるからだ。

旅の歌とて

思ひおく人のこゝろにしたはれて露わくる袖のかへりぬるかな

熊野へまかり侍りしに旅の心を　　太上天皇

見るまゝに山風あらくしぐるめり都もいまは夜さむなるらむ

○人のこゝろに　故郷の人が我が心に。
○かへり　返りー歸り。
○しぐるめり　時雨降るらしい。

新古今和歌集　卷第十一

戀歌一

題しらず　讀人しらず

よそにのみ見てや止みなむかづらきや高間の山のみねの白ゆき

音にのみありと聞きこしみ吉野の瀧は今日こそ袖に落ちけれ

人麿

あしびきの山田もる庵におく鹿火(かざ)の下こがれつゝ我が戀ふらくは

石(いそ)の上(かみ)ふるのわさ田のほには出でず心のうちに戀ひやわたらむ

女に遣はしける　在原業平朝臣

春日野のわかむらさきの摺衣しのぶの亂れかぎり知られず

中將更衣に遣はしける　延喜御歌

むらさきの色に心はあらねども深くぞ人を思ひそめつる

題しらず　中納言兼輔

みかの原わきてながるゝ泉河いつ見きとてか戀しかるらむ

○高間の山　大和國南葛城郡。
○音にのみ　評判にばかり。
○瀧は今日こそ袖に落ちけれ　戀の涙の初めて落ちたのを云ふ。
○鹿火　鹿など防ぐ爲の焚き火。
○石の上　「ふる」の枕詞。
○わさ田　早稻田。
○ほに　穂に(外面に)。
○春日野の歌　伊勢物語に詳しい。
○みかの原、泉河　共に山城國相樂郡、泉河までは「いつみき」を云ひ起す序。

平定文の家の歌合に　　坂上是則

その原やふせやに生ふる帚木のありとは見えてあはぬ君かな

人の文つかはして侍りける返事にそへて女につかはしける　　藤原高光

年をへて思ふこゝろのしるしにぞ空もたよりの風は吹きける

九條右大臣の女に初めてつかはしける　　西宮前左大臣

年月は我が身にそひて過ぎぬれど思ふこゝろの行かずもあるかな

かへし　　大納言俊賢母

もろともに哀れといはずば人知れぬ問はずがたりを我のみやせむ

天曆の御時の歌合に　　中納言朝忠

人傳(づて)に知らせてしがな隱沼(かくれぬ)のみこもりにのみ戀ひやわたらむ

はじめて女に遣はしける　　太宰大貳高遠

みこもりの沼の岩垣つゝめども如何なるひまに濡るゝ袂ぞ

いかなる折にかありけむ女に　　謙德公

からごろも袖に人目はつゝめどもこぼるゝものは涙なりけり

左大將朝光五節の舞姫奉りけるかしづきを見てつかはしける　　前大納言公任

あまつ空とよのあかりに見し人のなほ面かげのしひてこひしき

○帚木の　帚木のやうに。信濃の園原にある帚木は遠く見ると帚の形だが、近く見るとそれに似た形もないと云ふ。
○空も　空にも。
○行かず　行かずに滿足せぬ意味を含む。
○もろともに哀れと云はずば　たとひ自分は思ふ心があつても…。
○隱沼の　隱沼のやうに。
○みこもり　水籠り―身籠り。
○みこもりの沼の岩垣　「つゝめども」の序。
○かしづき　舞姫の傅。十一月豐明節會に舞はせる舞姫を五節の舞姫といふ。

つれなく侍りける女に師走のつごもりに遣はしける　謙德公

あら玉のとしにまかせて見るよりはわれこそ越えめ逢坂の關

堀河關白ふみなど遣はして里はいづくぞと問ひ侍りければ　本院侍從

我が宿はそこともなにか敎ふべきいはでこそ見め尋ねけりやと

かへし　忠義公

わが思ひそらの煙となりぬれば雲居ながらもなほ尋ねてむ

題しらず　貫之

しるしなき煙を雲にまがへつゝ世をへて富士の山と燃えなむ

清原深養父

煙立つ思ひならねど人しれず侘びてはふじのねをのみぞなく

女に遣はしける　藤原惟成

かぜ吹けば室のやしまの夕煙心のそらに立ちにけるかな

文遣はしける女に同じつかさのかみなりける人通ふと聞きてつかはしける　藤原義孝

しら雲の嶺にしもなどかよふらむ同じみかさの山のふもとを

題しらず　和泉式部

○師走のつごもり　十二月の晦日
○あら玉の　「年」の枕詞。
○われこそこえめ　我は越えよう
○そことも　何處だとも。
○いはでこそ見め　云はないで逢はう。
○雲居ながらも　雲居の空ながらも。
○富士の山　もと噴火してゐたので斯う云ふ。
○ふじのね　富士の嶺に音(ネ)を云ひ懸く。
○室のやしま　下野國にあつて水煙の立つ所といふ。
○みかさ　近衞の大將、中將、少將を云ふ。白雲を女に、嶺麓を大將少將に喩ふ。義孝は少將だつたから。

○かくやいぶき　「斯くや云ふ」に膽吹山を云ひ懸く。膽吹山はさしも草(艾草)の產地。
○さしも　さやうにも。
○燃え　艾草の燃え—思ひの燃え
○筑波山　常陸國。
○障らざりけり　障りはない。

○こゝろをつくば山　心を著くと云ひ懸く。

○山下みづの　「の」は「のやうに」
○涌きやかへらむ　涌き返るだらう。

○おもひやりても　我が物としないで…。

○おく山の…初鴈の　「はつか」を云ひ起す序。
○はつかに　僅かに。
○見でややみなむ　見ないで濟まさうかい。
○大空をの歌　大和物語に詳しい

けふもまたかくやいぶきのさしも草さらば我のみ燃えや渡らむ

源重之

筑波山は山しげ山しげけれど思ひ入るには障らざりけり

大中臣能宣朝臣

また通ふ人ありける女の許につかはしける

われならぬ人にこゝろをつくば山したに通はむ道だにやなき

大江匡衡朝臣

はじめて女に遣はしける

ひと知れず思ふこゝろはあしびきの山下みづの涌きやかへらむ

清原元輔

女を物ごしにほのかに見てつかはしける

にほふらむかすみのうちの櫻花おもひやりても惜しき春かな

大中臣能宣朝臣

年を經ていひわたり侍りける女のさすがにけぢかくはあらざりけるに春の末つ方いひつかはしける

幾かへり咲きちる花をながめつゝもの思ひくらす春に逢ふらむ

躬恒

題しらず

おく山の峯とびこゆる初鴈のはつかにだにも見でややみなむ

亭子院御歌

大空をわたる春日の影なれやよそにのみしてのどけかるらむ

正月雨降り風吹きける日女に遣はしける　謙徳公

はるかぜの吹くにもまさる涙かな我がみなかみも氷とくらし

たび〳〵返事せぬ女に

水のうへに浮きたる鳥の跡もなくおぼつかなさを思ふころかな

題しらず　曾禰好忠

かた岡の雪間にねざすわか草のほのかに見てし人ぞ戀しき

返事せぬ女の許につかはさむとて人のよませ侍りければ二月ばかりによみ侍りける　和泉式部

跡をだに草のはつかに見てしがな結ぶばかりのほどならずとも

題しらず　藤原興風

霜の上に跡ふみつくる濱千鳥ゆくへもなしと音をのみぞなく

中納言家持

秋はぎの枝もとをゝに置く露の今朝きえぬともいろに出でめや

藤原高光

あき風にみだれてものは思へどもはぎの下葉の色はかはらず

忍草の紅葉したるにつけて女の許に遣はしける　花園左大臣

○我がみなかみ　「我が身」に「水上」を云ひ懸く。

○鳥の跡もなく　「鳥の跡」は文字つまり便りも來ずの意味。

○かた岡の…若草の　「ほのかに」の序。

○跡をだに　跡をでも。返事をでも。

○跡ふみつくる濱千鳥　文のこと

○とをゝに　たわゝに。撓む程に　○露の　露の如くに。命が…。○いろに出でめや　我が戀を素振に出さうものか。

○はぎの下葉の色はかはらず　戀を色に出さないことを云ふ。

○しのぶ　「忍草」に「戀を忍ぶ」を云ひ懸く。
○いそのかみふるの神杉　「ふり」を云ひ起す序。
○我がこひは　我が戀を喩へれば
○槇の下葉　時雨に濡れても色づかないものなので斯う云ふ。
○しぐれの　時雨が。
○もり　漏り―森。
○袖に螢を　後撰集巻四に「桂のみこの螢を捕へてといひ侍りければ童のかざみの袖に包みて。包めども隱れぬ物は夏蟲の身より餘れる思ひなりけり」と見える。
○あらまし　豫定。
○玉の緒　命。
○絶えね　絶えよ。
○忍ぶることの　心に戀を包み忍ぶことが。

わが戀もいまは色にや出でなまし軒のしのぶも紅葉しにけり
攝政太政大臣

和歌所の歌合に久忍戀といふことを

いそのかみふるの神杉ふりぬれどいろには出でず露もしぐれも
太上天皇

小野宮の歌合に忍戀の心を

我がこひは槇の下葉にもる時雨ぬるとも袖の色にいでめや
前大僧正慈圓

百首の歌奉りし時よめる

わがこひは松をしぐれの染めかねて眞葛がはらに風さわぐなり
攝政太政大臣

家に歌合し侍りけるに夏戀の心を

空蟬（うつせみ）のなく音やよそにもりの露ほしあへぬ袖を人のとふまで
寂蓮法師

おもひあれば袖に螢をつゝみてもいはばや物をとふ人はなし
太上天皇

水無瀨にてをのこども久戀といふことをよみ侍りしに

思ひつゝ經にける年のかひやなき唯あらましの夕暮のそら
式子内親王

百首の歌の中に忍戀を

玉の緒よたえなば絶えね長らへば忍ぶることのよわりもぞする

忘れてはうち歎かるゝゆふべかな我のみ知りてすぐる月日を

わが戀はしる人もなしせく牀の涙もらすなつげのをまくら

百首の歌よみ侍りけるとき忍戀　入道前關白太政大臣

忍ぶるに心のひまはなけれどもなほ漏るものは涙なりけり

冷泉院みこの宮と申しける時さぶらひける女房を見かはしていひわたり侍りける頃手習しける所にまかりてものに書きつけ侍りける　謙德公

つらけれど恨みむとはた思ほえずなほ行くさきを賴む心に

かへし　讀人しらず

雨こそは賴まばもらめたのまずば思はぬ人と見てをやみなむ

題しらず　紀貫之

風ふけばとはに浪こす磯なれや我がころも手のかわくときなき

道信朝臣

須磨の蜑の浪かけ衣外(よそ)にのみ聞くは我が身になりにけるかな

くすだまを女につかはすとて男にかはりて　三條院女藏人左近

ぬまごとに袖ぞぬれけるあやめ草こゝろに似たる根をもとむとて

五月五日馬内侍に遣はしける　前大納言公任

郭公いつかと待ちしあやめ草今日はいかなるねにかなくべき

○せく　人に知られまいと堰き止める。

○つげのをまくら　黃楊の小枕。

○おもほえず　思はれず。

○雨こそは賴まばもらめ　雨こそは賴むならば洩らうが。「賴む木陰に雨洩る」の諺による。

○たのまずば思はぬ人と見てをやみなむ　私は君が私を賴まないならば思はない人と見て止まうに。（賴むならば思ふ人と見ようの意味。）

○とはに　永久に。

○磯なれや　伊勢物語には「岩なれや」とある。

○ころも手　袖。

○外にのみ聞くは　今までは餘所事にばかり聞いたが。今は。

○ぬれける　一本「ぬれぬる」

○こゝろに似たる根　我が深い心に似た深く生えた長い根。

○もとむ　一本「たづぬ」

かへし　馬内侍

五月雨はそらおぼれする郭公ときに鳴くねは人もとがめず

兵衛佐に侍りけるとき五月ばかりによそながら物申しそめて遣はしける

法性寺入道前攝政太政大臣

郭公こゑをばきけど花の枝にまだふみなれぬものをこそおもへ

かへし

馬内侍

ほとゝぎす忍ぶるものを柏木のもりても聲のきこえけるかな

郭公のなきけるは聞きつやと申しける人に

こゝろのみ空になりつゝほとゝぎす人だのめなるねこそなかるれ

題しらず　伊勢

みくま野の浦よりをちに漕ぐ舟の我をばよそに隔てつるかな

難波潟みじかき葦のふしの間もあはで此の世をすぐしてよとや

人麿

みかりする狩場のをのの楢柴のなれはまさらで戀ぞまされる

讀人しらず

うど濱の疎くのみやは世をばへむ波のよる〳〵逢ひ見てしがな

○そらおぼれ　空とぼけ。
○ときに　その時候に。
○ふみなれぬ　踏み―文。
○柏木　兵衛の異名なので云ふ。
○もり　森―漏り。
○みくま野の…漕ぐ舟の　「よそに」を云ひ起す序。
○難波潟…葦の　「節の間」を云ひ起す序。
○ふしの間も　少しの間でも。
○あはで　君に逢はないで。
○すぐしてよ　過せよ。
○みかりする…楢柴　の序。
○なれ　馴れ。
○うど濱の　「疎く」の序。有度濱は駿河國安倍郡。
○よる〳〵　寄る―夜。

○東路の…常陸帶の　序。
○かごとばかりも　少し許りでも
○難からめ　「ど」を補ふ。
○いかで　どうかして。
○見てまし　一本「見せまし」
○音羽川　山城國。
○わたらば　君の前を通らば。
○見えなむ　涙の袖に映つて見えよう。
○水莖の…木の葉を　序。
○吹きかへし　繰り返し。
○ふみつけよ　踏み―文。
○見てもしのばむ　せめて…。
○おもひ　「ひ」に「火」を云ひ懸く
○久米路の橋　例の葛城神が渡し果てなかつたといふかけ橋。物の遂げないことを云ひ表はす序。
○このみ輪　木の實―此の三輪。
○しらなくに　知らないのに。
○杉　「過ぎ」を云ひ懸く。

東路の道のはてなる常陸帶のかごとばかりも逢はむとぞおもふ

濁江のすまむことこそ難からめいかでほのかに影を見てまし

時雨ふる冬の木の葉のかわかずぞ物おもふ人の袖はありける

ありとのみ音に聞きつゝ音羽川わたらば袖にかげも見えなむ

水莖のをかの木の葉を吹きかへしたれかは君を戀ひむと思ひし

わが袖にあとふみつけよ濱千鳥あふことかたし見てもしのばむ

女の許よりかへり侍りけるに程もなく雪のいみじう降りければ　中納言兼輔

冬の夜のなみだにこほる我が袖の心とけずも見ゆる君かな

題しらず　藤原元眞

しもこほり心もとけぬ冬の池に夜更けてぞなく鴛のひとこゑ

なみだ川身もうくばかり流るれど消えぬは人のおもひなりけり

女に遣はしける　實方朝臣

いかにせむ久米路の橋の中空に渡しもはてぬ身とやなりなむ

女の杉の實を包みておこせて侍りければ

誰ぞこのみ輪の檜原もしらなくに心の杉のわれをたづぬる

題しらず　小辨

我が戀はいはぬばかりぞ難波なる蘆のしのやの下にこそたけ

伊勢

わがこひは荒磯の海の風をいたみしきりに寄する波のまもなし

人に遣はしける　　藤原清正

須磨の浦に蜑のこりつむ藻鹽木のからくも下に燃え渡るかな

題しらず　　源景明

あるかひもなぎさに寄する白波のまなくもの思ふ我が身なりけり

貫之

あしびきの山下たぎつ岩なみのこゝろ碎けて人ぞこひしき

あしびきの山したしげきなつ草のふかくも君をおもふころかな

坂上是則

をじかふす夏野の草の道をなみしげき戀路にまどふころかな

曾根好忠

蚊遣火のさ夜ふけ方の下こがれ苦しや我が身人しれずのみ

由良のとをわたる舟人かぢを絶えゆくへもしらぬ戀の路かな

鳥羽院の御時うへのをのこども寄風戀と云ふ心をよみ侍りけるに　　權中納言師時

○下にこそたけ　下燃えに焚く。
○荒磯の海　越中國。
○風をいたみ　風の痛さに。風の激しさに。
○須磨の…藻鹽木の　序。
○なぎさ　「效も無き」を云ひ懸く
○たぎつ　急流する。
○岩なみの　岩波のやうに。
○なつ草の　これまでは深くの序
○道をなみ　道が無いので。
○由良のと…かぢを絶え　「ゆく方も知らぬ」の序。由良の門は紀伊國。「絶え」は「斷ち」の意味。

追風にやへの汐路を行く舟のほのかにだにも逢ひ見てしがな

攝政太政大臣

百首の歌奉りしに

楫を絶え由良のみなとによる舟のたよりも知らぬおきつ汐かぜ

式子内親王

題しらず

しるべせよ跡なき浪に漕ぐ舟の行方もしらぬ八重のしほ風

權中納言長方

紀の國やゆらの湊に拾ふてふたまさかにだに逢ひみてしがな

權中納言師俊

法性寺入道前關白太政大臣の家の歌合に

つれもなき人のこゝろのうきにはふあしの下根のねをこそは泣け

攝政太政大臣

和歌所の歌合に忍戀をよめる

難波人いかなる江にか朽ち果てむ逢ふことなみにみをつくしつゝ

皇太后宮大夫俊成

隱名戀といへる心を

蜑のかるみるめを波にまがへつゝ名草の濱をたづねわびぬる

相摸

題しらず

逢ふまでのみるめ刈るべきかたぞなきまだ浪なれぬ磯の蜑びと

業平朝臣

○追風に…行く舟の　序。
○楫を絶えの歌　右の「由良の門を」の歌によつたもの。
○紀の國や…拾ふてふ　「たまさか」を云ひ起す序。
○たまさかに　「玉」に云ひ懸く。
○逢ひ見てしがな　逢ひ見たいな
○うき　浮沼―憂き。
○ね　根―泣。
○逢ふことなみに　逢ふ事が無いので。「無み」に「浪」を云ひ懸く。
○みをつくし　身をつくし―澪標(水脈を示す杙)。
○みるめ　海松―見る目。
○まがへ　一本「まかせ」
○名草の濱　紀伊國海草郡。
○かた　潟―方。

○みるめ刈るの歌　伊勢物語に詳しい。

みるめ刈るかたやいづくぞ棹さしてわれに敎へよ蜑のつりぶね

新古今和歌集　卷第十二

戀歌二

五十首の歌奉りしに寄雲戀　　皇太后宮大夫俊成女

下もえに思ひ消えなむけぶりだに跡なき雲のはてぞ悲しき

攝政太政大臣の家の七首の歌合に　　藤原定家朝臣

なびかじなあまの藻鹽火たきそめて煙は空にくゆりわぶとも

百首の歌奉りしとき戀歌　　攝政太政大臣

戀をのみすまの浦人もしほたれほしあへぬ袖の果てをしらばや

戀の歌とてよめる　　二條院讚岐

みるめこそ入りぬる磯の草ならめ袖さへ波の下に朽ちぬる

年を經たる戀といへる心をよみ侍りける　　俊頼朝臣

きみ戀ふとなるみの浦の濱ひさぎしをれてのみも年をふるかな

忍戀の心を　　前太政大臣

知るらめや木の葉ふりしく谷水のいはまに洩らすしたの心を

○跡なき雲　跡の殘らぬ雲。逢ふ人もない我が身を思ひ寄せた歌。

○戀をのみすま　戀をのみする意味を須磨に云ひ懸く。

○みるめこその歌　萬葉集卷七「鹽滿ては入りぬる磯の草なれや見らく少なく戀ふらくの多き」

○知るらめや　知るたらうか。

左大將に侍りけるとき家に百首の歌合し侍りけるに忍戀の心を　　攝政太政大臣

もらすなよ雲居の嶺のはつしぐれ木の葉は下に色かはるとも

戀歌あまたよみ侍りけるに　　後德大寺左大臣

かくとだに思ふこゝろをいはせ山下ゆく水の草がくれつゝ

殷富門院大輔

もらさばや思ふこゝろをさてのみはえぞ山しろの井手の柵

忍戀の心を　　近衞院御歌

戀しともいはば心のゆくべきにくるしや人目つゝむおもひは

見れど逢はぬ戀といふ心をよみ侍りける　　花園左大臣

ひと知れぬ戀に我が身はしづめどもみるめに浮くは涙なりけり

題しらず　　神祇伯顯仲

ものおもふといはぬばかりは忍ぶともいかゞはすべき袖の雫を

忍戀の心を　　清輔朝臣

人しれずくるしきものはしのぶ山下はふ葛のうらみなりけり

和歌所の歌合に忍戀の心を　　雅經

消えねたゞしのぶの山の嶺のくもかゝる心のあともなきまで

○いはせ山　「思ふ心を云はず」に岩瀨山(大和國)を云ひ懸く。
○下ゆく水の　下行く水のやうに
○えぞ山しろの　「得ぞ止まぬ」の意味を「山城の」と云ひ懸く。

○心のゆく　心がせい〳〵する。

○みるめに　海松―見る目。

○くるしき　繰る―苦しき。
○しのぶ山　「心に忍ぶ」に「信夫山」を云ひ懸く。
○うらみ　裏見―恨み。
○消えね　消えよ。
○かゝる心の　君に懸る我が心。

千五百番歌合に　　左衛門督通光

限りあればしのぶの山のふもとにも落葉がうへの露ぞいろづく

二條院讃岐

うちはへてくるしきものは人目のみしのぶの浦のあまの栲繩(たくなは)

和歌所の歌合に依忍埒戀といふことを　　春宮權大夫公繼

しのばじよ岩間づたひの谷川も瀨をせくにこそ水まさりけれ

題しらず　　信濃

人もまだふみ見ぬ山のいはがくれ流るゝ水を袖にせくかな

西行法師

遙かなるいはのはざまにひとり居て人目おもはでもの思はばや

數ならぬ心の咎になしはてじ知らせてこそは身をもうらみめ

水無瀨の戀の十五首の歌合に夏戀を　　攝政太政大臣

草ふかき夏野わけ行くさを鹿の音をこそ立てねつゆぞこぼるゝ

入道前關白右大臣に侍りける時百首の歌人々によませ侍りけるに忍戀の心を　　太宰大貳重家

のちの世をなげく涙といひなしてしぼりやせまし墨ぞめの袖

○露ぞいろづく　紅涙のこと。

○ふみ見ぬ　「逢はぬ」意味を。○いはがくれ　云ひ出さぬ意味を云ひ懸く。

○なしはてじ　一本「なしはてで」○知らせてこそは　我が心を打明けての上で。

○立てね　「ど」を補ふ。

○のちの世をなげく　後世に惡道に墮ちることを嘆く。○墨ぞめの袖　僧衣の袖。

大納言成道ふみ遣はしけれどつれなかりける女を後の世まで恨み殘るべきよし申しければ　　讀人しらず

玉章のかよふばかりになぐさめて後の世までのうらみ殘すな

前大納言隆房中將に侍りけるとき右近馬場のひをりの日まかれりけるに物見侍りける女車より遣はしける

例（ためし）あればながめはそれと知りながらおぼつかなきは心なりけり

かへし　　前大納言隆房

いはぬより心や行きてしるべするながむる方を人の問ふまで

千五百番歌合に　　左衞門督通光

ながめ侘びそれとはなしにものぞおもふ雲のはたての夕暮の空

雨のふる日女に遣はしける　　皇太后宮大夫俊成

思ひあまりそなたの空をながむればかすみを分けて春雨ぞふる

水無瀨の戀の十五首の歌合に　　攝政太政大臣

山がつの麻のさごろも梭をあらみ逢はで月日やすぎふける庵

欲言出戀といへる心を　　藤原忠定

おもへどもいはで月日はすぎの門さすがにいかゞ忍び果つべき

○ひをりの日　大内の馬場で五月五日に左近、四日に右近のあらてつがひが終つて後、まてつがひに列する筈に射手が裝ひ美しく更にあらてつがひを試みてから、大内へ乘り込む當日の稱。

○ながめ　誰を指してのながめ。

○いはぬよりの歌　私が眺めするのは君故だが、私が云はない内に我が戀ふる心が先に君へ行つて知らしたのだらうの意味。

○山がつの歌　古今集卷十五に「須磨の蜑の鹽燒き衣をさをあらみ間遠にあれや君が來まさぬ」拾遺集卷十二に「杉板もて葺ける板間の逢はざらばいかにせむとか我が寢そめけむ」

○すぎ　過ぎ―杉。

百首の歌奉りし時　　皇太后宮大夫俊成

逢ふことはかた野の里のさゝの庵しのにつゆちる夜半の牀かな

入道前關白右大臣にはべりけるとき百首の歌の中に忍戀

ちらすなよ篠のは草のかりにても露かゝるべき袖のうへかは

題しらず　　藤原元眞

白玉か露かと問はむ人もがなもの思ふ袖をさしてこたへむ

女に遣はしける　　藤原義孝

いつまでの命もしらぬ世の中につらき歎きのやまずもあるかな

崇徳院に百首の歌奉りける時　　大炊御門右大臣

我が戀はちぎの片そぎかたくのみ行きあはで年の積りぬるかな

入道前關白の家に百首の歌よみ侍りけるとき逢はぬ戀といふ心を　　藤原基輔朝臣

いつとなく鹽燒くあまの苫廂ひさしくなりぬ逢はぬおもひは

夕戀といふことをよみ侍りける　　藤原秀能

藻鹽やくあまの磯屋のゆふ煙たつ名もくるしおもひ絶えなで

海邊戀といふことをよめる　　定家朝臣

須磨の蜑の袖に吹きこす鹽風の馴るとはすれど手にもたまらず

○かたの　「難し」を「交野」に云ひ懸く。
○しのに　繁くの意味を云ひ懸く
○かりにても　刈り—假（かりそめの意味）。
○白玉か露か　伊勢物語に「白玉か何ぞと人の問ひしとき露と答へて消なましものを」
○ちぎ　神殿の棟に打ちちがへにした木。
○片そぎ　千木の片一方をそいだもの。これまでは「かたく」の序。
○いつとなくの歌　伊勢物語に「波間より見ゆる小島の濱びさし久しくなりぬ君に逢ひ見で」
○絶えなで　一本「きえなで」
○馴る　心に馴れる。

攝政太政大臣の家の歌合によみ侍りける　　寂蓮法師

ありとても逢はぬためしの名取川朽ちだに果てね瀬々の埋木

千五百番歌合に　　攝政太政大臣

なげかずよ今はた同じ名とり川せゞのうもれ木朽ち果てぬとも

百首の歌奉りし時　　二條院讃岐

涙川たぎつこゝろの早き瀬をしがらみかけてせく袖ぞなき

攝政太政大臣百首の歌よませ侍りけるに　　高松院右衛門佐

よそながらあやしとだにも思へかし戀せぬひとの袖のいろかは

戀の歌とてよめる　　讀人しらず

忍びあまり落つる涙をせき返しおさふる袖ようき名もらすな

入道前關白太政大臣の家の歌合に　　道因法師

くれなゐに涙の色のなり行くを幾しほまでと君にとはばや

百首の歌の中に　　式子内親王

ゆめにても見ゆらむものを歎きつゝうち寝る宵の袖のけしきは

かたらひ侍りける女の夢に見えて侍りければよみける　　後徳大寺左大臣

覺めて後夢なりけりと思ふにもあふは名殘の惜しくやはあらぬ

○ありとても歌　古今集卷十三に「陸奥に在りといふなる名取川なき名とりては苦しかりけり」「名取川瀬々の埋木現はればいかにせむとか逢ひ見そめけむ」
○果てぬ　一本「果てね」

○しがらみ　木や竹を杙にからみつけて水を堰くもの。

○よそながら　君を戀ふとは知らないでも…。

○幾しほまでと　幾入染め上ぐるまで君はつれなくするのかと。

○ゆめにても　せめて夢にでも。

○惜しくやはあらぬ　惜しくあるまいかい。

千五百番歌合に　　攝政太政大臣

身にそへるその面影も消えななむ夢なりけりと忘るばかりに

題しらず　　大納言實家

夢の中に逢ふと見えつる寢ざめこそつれなきよりも袖は濡れけれ

五十首の歌奉りし時　　前大納言忠良

たのめおきし淺茅がつゆに秋かけて木の葉ふりしく宿の通ひ路

隔河忍戀といふことを　　正三位經家

忍びあまり天の河瀬に事よせむせめては秋を忘れだにすな

遠きさかひを待つ戀といへる心を　　賀茂重政

頼めてもはるけかるべきかへる山いくへの雲の下に待つらむ

攝政太政大臣の家の百首の歌合に　　中宮大夫家房

逢ふ事はいつといぶきの嶺に生ふるさしも絶えせぬ思ひなりけり

家隆朝臣

ふじのねの煙もなほぞ立ちのぼる上なきものはおもひなりけり

名立戀といふ心をよみ侍りける　　權中納言俊忠

なき名のみ立田の山に立つ雲のゆくへもしらぬ眺めをぞする

○消えななむ　消えてくれ。

○つれなきよりも　君が現實につれなくすることよりも。

○たのめおきしの歌　伊勢物語に「秋かけて云ひしながらも有らなくに木の葉降りしくえにこそありけれ」

○秋かけて　秋にかけて。

○せめては秋を　秋の七月七日は一年に一度二星が逢ふので斯う云ふ。

○頼めても　歸つて來るのを頼みにしても。

○いぶき　「いふ」に「膽吹山」を云ひ懸く。

○さしも　膽吹山のさしも草（艾草）に「然しも」を云ひ懸く。

○おもひ　「ひ」に「火」を云ひ懸く

百首の歌の中に戀の心を　　惟明親王

逢ふことのむなしき空の浮雲は身を知る雨のたよりなりけり

左衛門督通具

わが戀はあふをかぎりの賴みだに行くへもしらぬ空の浮雲

皇太后宮大夫俊成女

水無瀨の戀の十五首の歌合に春戀の心を

おもかげの霞める月ぞやどりける春やむかしの袖のなみだに

冬戀　　定家朝臣

とこの霜まくらの氷きえ侘びぬむすびもおかぬ人の契りに

攝政太政大臣の家の百首の歌合に曉戀　　有家朝臣

つれなさのたぐひまでやはつらからぬ月をもめでじあり明の空

宇治にて夜戀といふ事ををのこどもつかうまつりしに　　藤原秀能

そでの上にたれゆゑ月は宿るぞとよそになしても人のとへかし

久戀といへることを　　越前

夏引の手びきの絲の年へても絶えぬおもひにむすぼほれつゝ

家に百首の歌合し侍りけるに祈戀といへる心を　　攝政太政大臣

いく夜我なみにしをれてきぶね川そでに玉ちる物思ふらむ

○身を知る雨　憂き身の程を知つて流す淚の雨。

○わが戀はの歌　古今集卷十二に「我が戀は行方も知らず果てもなし逢ふを限りと思ふばかりぞ」

○春やむかしの　古今集卷十五に「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つは元の身にして」

○つれなさの歌　在明の月はつれない君の類程つれないので。古今集卷十三に「有明のつれなく見えし別れより曉ばかり憂きものはなし」

○そでの上に　淚の袖の上に。

○よそになしても　よそ事にしてでも。

○夏引の手びきの絲の　蠶の絲のやうに。

○きぶね川　「來」を云ひ懸く。

○玉ちる物思ふらむ　後拾遺卷二十に「奥山にたぎりて落つる瀧つ瀨の玉ちるばかり物な思ひそ」

○初瀬山　大和國磯城郡。
○そをだに　それだけでもを。
○逢ふにかへつと　逢ふに命を換へたと。
○あすしらぬの歌　拾遺集巻十一に「いかにして暫し忘れむ命だにあらば逢ふ世の有りもこそすれ」
○人のこゝろはうつ蟬の「人の心は憂き」を云ひ懸く。
○うつ蟬の　現し身の。
○ありへば　生き長らへて在り經たならば。いつかは。

定家朝臣

年もへぬいのるちぎりは初瀬山をのへのかねのよその夕ぐれ

かたおもひの心をよめる　皇太后宮大夫俊成

うき身をば我だにいとふ厭へたゞそをだに同じ心と思はむ

題しらず　權中納言長方

戀ひしなむ同じ憂名をいかにして逢ふにかへつと人にいはれむ

殷富門院大輔

あすしらぬ命をぞ思ふおのづからあらば逢ふ世を待つにつけても

八條院高倉

つれもなき人のこゝろはうつ蟬のむなしき戀に身をやかへてむ

西行法師

なにとなくさすがに惜しき命かなありへば人やおもひ知るとて

思ひ知る人あり明のよなりせばつきせず身をば恨みざらまし

新古今和歌集　巻第十三

戀歌　三

中關白かよひそめ侍りける頃　　儀同三司母

わすれじの行末まではかたければ今日をかぎりの命ともがな

忍びたる女をかりそめなる所にゐてまかりてかへりて朝につかはしける　　謙徳公

かぎりなく結びおきける草まくらいづこのたびを思ひわすれむ

題しらず　　業平朝臣

思ふには忍ぶる事ぞまけにける逢ふにしかへばさもあらばあれ

人の許にまかりそめて朝に遣はしける　　廉義公

昨日まで逢ふにしかへばと思ひしをけふは命の惜しくもあるかな

百首の歌に　　式子内親王

逢ふことをけふまつが枝の手向草いく夜しをるゝ袖とかは知る

頭中將に侍りける　五節所のわらはに物申し初めて後尋ねて遣はしける

○たかければ　むづかしいから。
○今日をかぎりの　心の變らない……。

○いづこのたび　何處の旅―何時此の度。

○思ふには　思ふ心には。
○逢ふにしかへば　逢ふことに代へるならば。この歌伊勢物語に詳しい。
○けふは　君に逢つての今日からは。

○逢ふことをの歌　萬葉集卷一に「白浪の濱松が枝の手向草幾代までにか年の經ぬらむ」
○まつ　待つ―松。

源正清朝臣

戀しさに今日ぞたづぬる奥山のひかげの露に袖はぬれつゝ

題しらず　西行法師

逢ふまでの命もがなと思ひしは悔しかりける我がこゝろかな

三條院女藏人左近

人ごゝろうす花ぞめのかり衣さてだにあらで色やかはらむ

興風

逢ひ見てもかひなかりけりうば玉のはかなき夢におとる現（うつ）は

實方朝臣

なか〳〵に物思ひ初めてねぬる夜ははかなき夢もえやは見えける

忍びたる人と二人ふして　伊勢

夢とても人にかたるな知るといへば手枕ならぬ枕だにせず

題しらず　和泉式部

枕だにしらねばいはじ見しまゝに君かたるなよ春の夜のゆめ

人に物いひはじめて　馬内侍

わすれても人に語るなうたゝねの夢見てのちもながかりし夜を

○ひかげ　日陰蔓。

○悔しかりける　逢つたらいよいよ戀しくて命が欲しくなつたので逢ふまでの命が欲しいなど思つたのは、本當に悔まれることだ。

○うす花ぞめ　縹色染め。

○さてだにあらで　人心が薄いのでその縹色のまゝでさへあらずして。

○うば玉の　「夢」の枕詞。

○なか〳〵に　却つて。

○えやは見えける　見られ得ようかい。

○枕だにしらねば　枕でさへ知らないのだから。

○ながかりし　一本「ながからぬ」

女に遣はしける　藤原範永朝臣

つらかりし多くの年はわすられてひと夜の夢をあはれとぞ見し

題しらず　高倉院御歌

けさよりはいとゞ思ひをたきましてなげきこりつむ逢坂の山

初會戀の心を　俊頼朝臣

蘆の屋のしづはた帶の片結び心やすくもうち解くるかな

題しらず　讀人しらず

かりそめにふしみの野邊のくさ枕つゆかゝりきと人にかたるな

人知れず忍びけることを文などちらすと聞きける人に遣はしける　相摸

いかにせむ葛のうら吹く秋風に下葉の露のかくれなき身を

題しらず　實方朝臣

あけがたきふた見の浦による浪の袖のみ濡れておきつしま人

伊勢

逢ふことのあけぬ夜ながら明けぬれば我こそかへれ心やは行く

九月十日餘に夜ふけて和泉式部が門をたゝかせ侍りけるに聞きつけざりければ朝に遣はしける　太宰帥敦道親王

○つらかりし　つらくされた。
○ひと夜の夢　一夜逢つた夢。

○思ひ　「ひ」に「火」を云ひ懸く。
○なげき　「き」に「木」を云ひ懸く
○こりつむ　伐り積む。

○蘆の屋の…片結び　「解くる」の序。

○つゆかゝりき　露懸りき—露はざも斯くありき。

○下葉の露の　「の」は「のやうに」

○あけがたき　蓋の開けがたき—夜の明けがたき。
○おきつしま人　「起きつ」を云ひ懸く。
○我こそかへれ　「ぞ」を補ふ。

秋の夜の有明の月の入るまでにやすらひかねて歸りにしかな

題しらず　道信朝臣

こゝろにもあらぬ我が身のゆきかへり道の空にて消えぬべきかな

近江更衣に給はせける　延喜御歌

はかなくも明けにけるかな朝露のおきての後ぞ消えまさりける

御返し　更衣源周子

朝露のおきつる空もおもほえず消えかへりつる心まどひに

題しらず　圓融院御歌

おき添ふる露やいかなる露ならむ今はきえねと思ふわが身を

謙徳公

思ひ出でて今はけぬべし終夜（よもすがら）おきうかりつるきくの上の露

清愼公

うば玉の夜のころもをたちながらかへる物とはいまぞしりぬる

夏の夜女の許にまかりて侍りけるに人しづまるほど夜いたく更けて逢ひて侍りければよめる　藤原清正

みじか夜ののこりすくなく更けゆくはかねてものうき曉の空

○おきて　置きて―起きて。

○おきつる　置きつる―起きつる
○まどひに　一本「ならひに」

○きえね　消えよ。
○身を　一本「身に」

○思ひ出でての歌　古今集卷十一に「音にのみきくの白露夜はおきて晝は思ひにあへず消ぬべし」
○けぬべし　消えぬべし。
○おき　置き―起き。
○上のつゆ　一本「うはつゆ」
○うば玉の　「夜」の枕詞。
○たち　裁ち―立ち。

○かねて　前以て。明けない前に

女みこに通ひそめて朝につかはしける　大納言清蔭

明くといへばしづこゝろなき春の夜の夢とや君をよるのみは見む

彌生の頃終夜物語して歸り侍りにける人のけさはいとゞ物思はしきよし申し遣はしたりけるに　和泉式部

けさはしも歎きもすらむいたづらに春の夜ひとよ夢をだに見で

題しらず　赤染衛門

心からしばしとつゝむものからに鴫のはねがきつらき今朝かな

忍びたる所よりかへりてあしたに遣はしける　九條入道右大臣

侘びつゝも君が心にかなふとて今朝も袂をほしぞわづらふ

小八條の御息所に遣はしける　亭子院御歌

手枕にかせるたもとのつゆけさは明けぬと告ぐる涙なりけり

題しらず　藤原惟成

しばし待てまだ夜はふかし長月の有明のつきは人まどふなり

前栽の露おきたるをなどか見ずなりにしと申しける女に　實方朝臣

おきて見ば袖のみぬれていとゞしく草葉の玉のかずやまさらむ

二條院の御時曉かへりなむとする戀といふ事を　二條院讃岐

○つゝむものからに　包むものながら。

○ほしぞわづらふ　乾し煩ふ。

○手枕に　君の手枕として。

○人まどふ　人が有明の月には夜が明けたのかと惑ふ。

○前栽　植込。

明けぬれどまだきぬ〴〵になりやらで人の袖をも濡らしつるかな

題しらず　西行法師

面影のわすらるまじきわかれかななごりを人の月にとゞめて

後朝戀の心を　攝政太政大臣

またも來む秋をたのむの鴈だにも鳴きてぞかへる春のあけぼの

女の許にまかりてこゝち例ならず侍りければ歸りて遣はしける　賀茂成助

たれ行きて君につげましみち芝の露もろともに消えなましかば

女の許に物をだに云はむとてまかりけるに空しくかへりて朝に　左大將朝光

消えかへりあるかなきかの我が身かな恨みてかへる道芝の露

三條關白の女御入內のあしたに遣はしける　花山院御歌

朝ぼらけおきつる霜の消えかへり暮まつほどの袖を見せばや

法性寺入道前關白太政大臣の家の歌合に　藤原道經

にはに生ふる夕かげ草の下露やくれを待つ間の涙なるらむ

題しらず　小侍從

待つよひに更けゆく鐘の聲きけばあかぬわかれの鳥はものかは

藤原知家

○きぬ〴〵　男女の逢つて別れる翌朝。

○なごりを人の月にとゞめて　人の名殘を月に留めて。

○たのむ　賴む―田の面。

○物をだに云はむ　せめて物をでも云はう。

○朝ぼらけ　夜明け方。

○待つよひにの歌　君を待つ時に更け行く鐘の音を聞くこと、朝の飽かぬ別れに鳴く鳥の聲など物でもない。この歌平家物語に見える。

これもまた長き別れになりやせむ暮を待つべきいのちならねど

西行法師

有明はおもひ出あれや横雲のたゞよはれつるしのゝめの空

清原元輔

大井川ゐせきの水のわくらばにけふはたのめし暮にやはあらぬ

今日と契りける人のあるかと問ひ侍りければ　讀人しらず

夕暮に命かけたるかげろふのありやあらずや問ふもはかなし

西行法師人々に百首の歌よませ侍りけるに　定家朝臣

あぢきなくつらき嵐の聲もうしなど夕暮に待ちならひけむ

戀の歌とて　太上天皇

頼めずば人をまつちの山なりと寢なましものをいさよひの月

水無瀬にて戀十五首の歌合に夕戀といへる心を　攝政太政大臣

何ゆゑと思ひもいれぬゆふべだにまち出でしものを山の端の月

寄風戀　宮内卿

聞くやいかに上の空なる風だにもまつに音する習ひありとは

題しらず　西行法師

○有明は　有明の月を見ると。
○たゞよはれつる　別れかねて自然と躊躇した。
○水のわくらばに　「水の涌く」を云ひ懸く。
○わくらば　「たま〳〵」を云ひ懸く。
○暮にやはあらぬ　暮ではないか。
○かげろふの　朝生まれて夕死ぬ蜉蝣のやうに。
○うし　つらい。
○など夕暮に待ちならひけむ　何として夕方になると　人を待つ習ひになつたのだらう。
○頼めずは　來ると頼まないならば。
○まつち　待つ—待乳山。
○いさよひの月　十六日の月。
○まち出でしものを　物思ひして眺めてゐる内に月が出たものを。
○まつに音する　松に音を立てる—待つに音づれる。

○いかゞふくの歌　後拾遺集卷十七に「松風は色や綠に吹きつらむ物思ふ人の身にぞ染みぬる」

○ながら山　「無きながら」を云ひ懸く。長柄山は近江國。

○いま來むと　やがて來ようと。

○いたくなふけそ　ひどく更けるな。

○君くや　君が來るか。
○明けなましかば　明けてくれたならばなあ。

○歸るさのものとや人のながむらむ　我が待つ人は自分が外の人の許に通つての歸り道だと眺めるだらう。

人は來で風のけしきも更けぬるにあはれに鴈のおとづれて行く

八條院高倉

いかゞふく身にしむ色のかはるかなたのむる暮の松風のこゑ

鴨長明

頼めおく人もながらの山にだに小夜ふけぬれば松風のこゑ

藤原秀能

いま來むとたのめしことを忘れずばこの夕ぐれの月やまつらむ

待戀といへる心を　　式子內親王

きみ待つと閨へも入らぬ槇の戸にいたくなふけそ山の端の月

戀の歌とてよめる　　西行法師

頼めぬに君くやとまつ宵の間の更けゆかでたゞ明けなましかば

定家朝臣

歸るさのものとや人のながむらむ待つ夜ながらの有明の月

題しらず　　讀人しらず

君こむといひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの戀ひつゝぞふる

人麿

衣手に山おろし吹きて寒き夜を君來まさずばひとりかも寢む

左大將朝光久しう音づれ侍らで旅なる所に來逢ひて枕のなければ草を結びてしたるに　馬内侍

逢ふことはこれや限りのたびならむ草のまくらも霜がれにけり

天暦の御時閒遠にあれやと侍りければ　女御徽子女王

なれゆくは浮世なればや須磨の蜑の鹽燒衣まどほなるらむ

逢ひて後あひがたき女に　坂上是則

霧ふかきあきの野なかの忘水たえまがちなる頃にもあるかな

三條院みこの宮と申しけるとき久しう問はせ給はざりければ　安法法師女

世のつねの秋風ならば荻の葉にそよとばかりの音はしてまし

題しらず　中納言家持

あしびきの山のかげ草結びおきて戀ひやわたらむ逢ふよしをなみ

延喜御歌

東路にかるてふ萱の亂れつゝ束の閒もなく戀ひやわたらむ

權中納言敦忠

むすび置きし袂だに見ぬはな薄かるともかれじ君しとかずば

○山おろし　山下しの風。
○限りの　限りとしての。
○たび　度─旅。
○霜がれ　枯れ─離れ。
○天暦　村上天皇の年號。
○閒遠にあれや　古今集卷十五に「須磨の蜑の鹽燒き衣筬を粗み閒遠に有れや君がきまさぬ」
○浮世なればや　憂世の習ひであるからか。
○霧ふかき…忘水　序。
○世のつねの歌　後撰集卷十二に「秋風の吹くにつけても訪はぬかな荻の葉ならば音はしてまし」
○山のかげ草　山陰に生えた草。
○逢ふよしをなみ　逢ふ方法がないので。
○かるてふ　刈るといふ。
○束の閒　僅かの閒。
○袂だに見ぬ　花薄を結びおいた人の袂でも見えない。
○かるともかれじ　枯る─離る。

百首の歌の中に　源重之

霜のうへに今朝ふる雪の寒ければかさねて人をつらしとぞ思ふ

題しらず　安法法師女

ひとりふす荒れたる宿の牀の上にあはれいく夜の寐覺しつらむ

源重之

山城のよどの若菰(わかごも)かりに來て袖濡れぬとはかこたざらなむ

貫之

かけて思ふ人もなければ夕されば面かけ絶えぬ玉かづらかな

宮仕しける女をかたらひ侍りけるにやんごとなき男の入りたちていふけしきを見て恨みけるを女あらがひければよみ侍りける　平定文

いつはりをたゞすの森の木綿襷かけつゝちかへわれを思はば

人に遣はしける　鳥羽院御歌

いかばかり嬉しからましもろともに戀ひらるゝ身も苦しかりせば

かた思ひの心を　入道前關白太政大臣

我ばかりつらきを忍ぶ人やあるといま世にあらば思ひあはせよ

攝政太政大臣の家の百首の歌合に契戀の心を　前大僧正慈圓

○かりに　刈りに—假に。
○かこたざらなむ　かこつけないやうにしてほしい。
○かけて思ふ人　私をかけて思ふ人。
○夕されば　夕方が來ると。
○玉かづら　玉鬘した面影。
○たゞすの森　僞りを正す—糺の森(山城國)
○我ばかりつらきを忍ぶ人やある　自分ほどつらきを忍ぶ人があるかい。
○いま世にあらば　私が戀ひ死んで君が世に生きながらへてあるならば。

たゞ賴めたとへば人のいつはりをかさねてこそはまたも恨みめ

女を恨みて今はまからじと申して後なほ忘れがたく覺えければ遣はしける

左衞門督家通

つらしとは思ふものからふし柴のしばしもこりぬ心なりけり

賴むる事侍りける女わづらふこと侍りけるをおこたりて久我内大臣の許につかはしける

讀人しらず

賴めこし言の葉ばかり留め置きて淺茅がつゆと消えなましかば

かへし

久我内大臣

あはれにも誰かは露を思はまし消え殘るべきわが身ならねば

題しらず

小侍從

つらきをも恨みぬわれに習ふなよ憂き身を知らぬ人もこそあれ

殷富門院大輔

なにか厭ふよもながらへじさのみやは憂きに堪へたる命なるべき

刑部卿賴輔

戀ひ死なむ命はなほも惜しきかな同じ世にあるかひはなけれど

西行法師

○たゞ賴め　とやかくと人を疑はずに、たゞ一向に私の云ふことを賴め。

○ふし柴の　「暫し」を云ひ起す序　○こりぬ　伐りぬ―懲りぬ。

○賴めこし　賴みにして來た。　○消えなましかば　我が身は…。　○あはれにも誰かは露を思はまし　誰が生き長らへて露をあはれにも思はうか。　○つらきをも　人のつらいことをも。　○憂き身を　自分の憂き身故といふことを。　○知らぬ人もこそあれ　「ば」を補ふ。　○なにか厭ふ　なぜそんなに私を厭ふのか。　○よもながらへじ　君に厭はれなくてもよもや生き長らへはしまい。　○さのみや云々　そんなに憂くされることに堪へ得る我が命ではないから。　○なほも　ひよつとして逢ふ機會もあるかと猶も。

あはれとて人の心のなさけあれな數ならぬにはよらぬ歎きを

身を知れば人のとがとも思はぬに恨み顔にも濡るゝ袖かな　　皇太后宮大夫俊成

女に遣はしける

よしさらば後の世とだに賴めおけつらさに堪へぬ身ともこそなれ　　藤原定家朝臣母

かへし

たのめ置かむたゞさばかりを契りにて浮世の中の夢になしてよ

○あれな　有れよ。

○身を知れば　我が身の分を知るので。

○後の世とだに　後の世に逢はうとでも。

○つらさに　君につらくされることに。

○身ともこそなれ　「ば」を補ふ。

○さばかりを契りにて　それだけのことを契りにして。

新古今和歌集　巻第十四

戀歌四

中將に侍りけるとき女に遣はしける　　清愼公

よひ〳〵に君をあはれとおもひつゝ人にはいはで音をのみぞなく

かへし　　讀人しらず

君だにもおもひ出でける宵々を待つはいかなる心地かはする

少將滋幹につかはしける

戀しさに死ぬるいのちを思ひ出でて問ふひとあらばなしと答へよ

恨むる事侍りて更にまうで來じと誓ひごとして二日ばかりありてつかはしける　　謙德公

別れては昨日けふこそ隔てつれ千世しも經たる心地のみする

かへし　　惠子女王

昨日ともけふとも知らずいまはとてわかれしほどの心まどひに

入道攝政久しくまうで來ざりける頃鬢かきて出でけるゆするつきの水入

○死ぬるいのちを　死ぬる私の命を。
○なしと　既に此の世にはないと

○千世しも　千世も。「し」は助詞

○わかれしほどの心まどひに　別れた時分の心惑ひで昨日とも今日とも知らない。
○ゆするつき　鬢たらひの一種で臺や蓋のあるもの。

れながらはべりけるを見て　右大將道綱母

絶えぬるか影だに見えば問ふべきを形見の水は水草ゐにけり

内に久しく參り給はざりける頃五月五日後朱雀院の御返事に　陽明門院

かたぐ＼にひき別れつゝ菖蒲草あらぬねをやはかけむと思ひし

題しらず　伊勢

言の葉のうつろふだにもあるものをいとゞ時雨の降りまさるらむ

右大將道綱母

吹く風につけても問はむさゝがにの通ひし道は空にたゆとも

后の宮久しく里におはしける頃つかはしける　天暦御歌

葛の葉にあらぬ我が身も秋風のふくにつけつゝうらみつるかな

久しくまゐらざりける人に　延喜御歌

霜さやぐ野邊の草葉にあらねどもなどか人目のかれ增るらむ

御かへし　讀人しらず

淺茅生ふる野べやかるらむ山賤(やまがつ)の垣ほの草はいろもかはらず

春になりてと奏し侍りけるがさもなかりければ内よりいまだ年もかへら

ぬにやと宣はせたりける御返事を楓の紅葉につけて　女御徽子女王

○形見の水　形の映るのを見る水
○水草ゐにけり　水が古くなつて水草が生じたるの意味。
○内　内裏。
○ね　根―泣。

○さゝがに　蜘蛛。

○うらみ　裏見―恨み。

○かれ　枯れ―離れ。

○垣ほの草　自分の心に喩ふ。

霞むらむほどをもしらずしぐれつゝ過ぎにし秋の紅葉をぞ見る

御かへし　天暦御歌

今こむと頼めつゝふる言の葉ぞ常磐にみゆる紅葉なりける

女御のしもに侍りけるに遣はしける　朱雀院御歌

玉鉾の道ははるかにあらねどもうたて雲居にまどふころかな

御かへし　女御凞子女王

思ひやる心はそらにあるものをなどか雲ゐに逢ひ見ざるらむ

麗景殿女御參りて後雨降り侍りける日梅壺の女御に　後朱雀院御歌

春雨のふりしくころは青柳のいとみだれつゝ人ぞこひしき

御返し　女御藤原生子

青柳のいとみだれたるこの頃はひとすぢにしも思ひよられじ

又つかはしける　後朱雀院御歌

あを柳の絲はかた〴〵なびくとも思ひそめてむ色はかはらじ

御返し　女御生子

淺みどりふかくもあらぬ青柳はいろかはらじといかゞたのまむ

早うもの申しける女にかれたる葵をみあれの日つかはしける　實方朝臣

○ふる　古る—降る。
○常磐に見ゆる　不變さうに見えた。
○玉鉾の　「道」の枕詞。
○雲居　遙か彼方といふ意味に、皇居の意味を云ひ懸く。
○いと　絲—甚。
○よられじ　拗(ヨ)られじ—寄られじ。
○あを柳の絲　天皇自身に喩ふ。
○みあれの日　賀茂神社の祭日。

古のあふひと人はとがむともなほそのかみの今日ぞわすれぬ　讀人しらず

かへし

かれにける葵のみこそ悲しけれあはれと見ずや賀茂のみづがき　天暦御歌

廣幡の御息所につかはしける

逢ふことをはつかに見えし月影のおぼろげにやはあはれとも思ふ　伊勢

題しらず

さらしなや姨捨山のあり明のつきずもものを思ふころかな　中務

いつとてもあはれと思ふを寝ぬる夜の月は朧げなく〳〵ぞ見し　躬恆

さらしなの山より外にてる月もなぐさめかねつこのごろの空　讀人しらず

天の戸をおしあけがたの月見ればうき人しもぞ戀しかりける

ほの見えし月をこひしとかへるさの雲路の浪にぬれて來しかな　紫式部

人に遣はしける

入る方はさやかなりける月影をうはの空にも待ちしよひかな

○あふひ　逢ふ日―葵。
○そのかみ　その當時。

○かれ　離れ―枯れ。
○賀茂のみづがき　葵をかけるので斯う云ふ。

○はつかに　僅かに。それに二十日の月を云ひ懸く。
○おぼろけ　大方。「朧月」を云ひ懸く。
○あり明のつきずも　「有明の月」に「盡きずも」を云ひ懸く。

○さらしなの歌　古今集に「我が心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」
○外に　ほかに。更科山以外の山に。
○あけがた　押開け―明け方。
○ほの見えし　戀人をほのかに見たことを云ふ。
○ぬれて　涙に濡れたことを云ふ

○入る方　人の歸る方を云ふ。

かへし　　讀人しらず

さしてゆく山の端もみなかき曇りこゝろの空に消えし月かげ

題しらず　　藤原經衡

いまはとてわかれしほどの月をだに涙にくれてながめやはせし

肥　後

面影のわすれぬ人によそへつゝ入るをぞしたふ秋の夜の月

後徳大寺左大臣

うき人の月は何ぞのゆかりぞと思ひながらもうちながめつゝ

西行法師

月のみやうはの空なるかたみにて思ひも出でばこゝろかよはむ

くまもなきをりしも人を思ひ出でて心と月をやつしつるかな

もの思ひて眺むるころの月の色に如何ばかりなる哀れそふらむ

八條院高倉

曇れかしながむるからに悲しきは月におぼゆる人の面かげ

百首の歌の中に　　太上天皇

わすらるゝ身を知る袖の村雨につれなくやまの月は出でけり

○ほど　時分。
○ながめやはせし　眺めたかい。眺めたかつたので心も慰まないの意味。

○うき人の月は何ぞのゆかりぞと思ひながらも　月はつれない人の何の緣があるのだと思ひながらも
○かたみにて　形見なれど。
○心と月を　一本「すゞろに月を」

○ながむるからに　眺めると同時に。
○月におぼゆる　月を見ると思ひ出される。

千五百番歌合に　攝政太政大臣

めぐりあはむかぎりはいつと知らねども月なへだてそよその浮雲

我がなみだもとめて袖にやどれ月さりとて人の影は見えねど

權中納言公經

戀ひわぶる涙や空にくもるらむひかりもかはる閨の月かげ

左衞門督通光

いくめぐり空ゆく月もへだてきぬちぎりし中はよそのうき雲

右衞門督通具

いま來むと契りしことは夢ながら見し夜に似たる有明の月

有家朝臣

忘れじと言ひしばかりの名殘とてその夜の月は廻り來にけり

題しらず　攝政太政大臣

おもひ出でてよな〳〵月に尋ねずば待てと契りし中や絶えなむ

家隆朝臣

忘るなよ今はこゝろの變るともなれしその夜のありあけの月

法眼宗圓

○月なへだてそ　月を隔てるな。

○我がなみだ　我が涙を。

○いくめぐりの歌　拾遺集卷八に「忘るなよ程は雲居に隔つとも空行く月の廻りあふまで」

○おもひ出でて　月夜には來るから待てと云つた言葉を。

そのまゝにまつの嵐もかはらぬを忘れやしぬる更けし夜の月　　藤原秀能

人ぞ憂きたのめぬ月はめぐり來てむかし忘れぬ蓬生のやど

八月十五夜和歌所にて月前戀といふことを　　攝政太政大臣

わくらばに待ちつる宵もふけにけりさやは契りし山の端の月　　有家朝臣

來ぬ人をまつとはなくて待つ宵のふけ行く空の月もうらめし

千五百番歌合に　　皇太后宮大夫俊成女

松山とちぎりし人はつれなくて袖越すなみにのこる月かげ

經房卿の家の歌合に久戀を　　二條院讃岐

習ひこしたがいつはりもまだ知らで待つとせしまの庭の蓬生

攝政太政大臣の家に百首の歌よみ侍りけるに　　寂蓮法師

あとたえて淺茅が末になりにけりたのめしやどの庭のしらつゆ

題しらず　　左衞門督通光

來ぬ人を思ひ絶えたるにはの面の蓬が末ぞまつにまされる

尋ねても袖にかくべきかたぞなき深きよもぎの露のかごとを

○まつ　待つ—松。
○人ぞ憂き　人はつれないのに。
○たのめぬ月　頼みにしない月。
○わくらばに　たまたまに。
○さやは契りし　さやうに契つたかい。
○來ぬ人を　契りも絶えたので來るわけのない人を。
○松山との歌　古今集二十に「君をおきて仇し心を我が持たば末の松山波も越えなむ」
○習ひこしたがいつはりも　世の習ひとなつて來た誰の僞りも。
○庭の蓬生　庭は荒れて蓬が生じてしまつたこと。
○來ぬ人をの歌　拾遺集卷三に「たのめつゝ來ぬ夜あまたになりぬればまたじと思ふぞ待つにまされる」
○尋ねても　君が尋ねて來ても。
○袖にかくべきかたぞなき　口説を君に云ひ得ない意味。
○露のかごとを　露ほどの口説をでも。

藤原保季朝臣

形見とてほの踏み分けし跡もなし來しはむかしのにはの荻原

法橋行遍

なごりをば庭の淺茅にとゞめおきて誰ゆゑ君がすみうかれけむ

攝政太政大臣の家の百首の歌合に

定家朝臣

忘れずばなれし袖もやこほるらむ寢ぬ夜の牀の霜のさむしろ

家隆朝臣

風吹かば嶺にわかれむ雲をだにありしなごりのかたみとも見よ

百首の歌奉りし時

攝政太政大臣

いはざりき今こむまでの空の雲月日へだてゝもの思へとは

千五百番歌合に

家隆朝臣

思ひ出でよ誰がかねごとのすゑならむ昨日の雲のあとの山かぜ

二條院の御時艶書の歌めしけるに

刑部卿範兼

忘れゆく人ゆゑ空をながむればたえ〴〵にこそ雲も見えけれ

題しらず

殷富門院大輔

忘れなば生けらむものかと思ひしにそれもかなはぬ此の世なりけり

○ほの　ほのかに。

○忘れずば　我が思ふやうに君も私を忘れないならば。

○風吹かばの歌　古今集卷十二に「風吹けば峯に別るゝ白雲の絕えてつれなき人の心か」名殘とは別れた後の名殘を云ふ。

○今こむまでの　やがて來るまでの。

○月日へだててものおもへとは　月日を隔てて物思ひせよとは契らなかつたの意味。

○誰がかねごと　誰の誓ひ言。楚の襄王が夢に巫山の神女と會した故事で、旦に朝雲となり暮に行雨となつて現はれると契つたこと。

○艶書　懸想文。

○生けらむものか　生きてあらうものか。思ひ死にするたらうの意味。

西行法師

疎くなる人をなにとて恨むらむ知られず知らぬ折もありしに
いまぞ知る思ひ出でよと契りしは忘れむとてのなさけなりけり

建仁元年三月歌合に逢不遇戀の心を　土御門内大臣

あひ見しは昔がたりのうつゝにてそのかね言を夢になせとや

權中納言公經

哀れなるこゝろの闇のゆかりとも見し夜の夢をたれかさだめむ

右衛門督通具

契りきや飽かぬわかれに露おきし曉ばかりかたみなれとは

寂蓮法師

恨みわび待たじいまはの身なれども思ひなれにし夕ぐれの空

宜秋門院丹後

わすれじの言の葉いかになりにけむ賴めしくれは秋風ぞ吹く

家に百首の歌合し侍りけるに　攝政太政大臣

おもひ兼ねうちぬる宵もありなまし吹きだにすさべ庭の松風

有家朝臣

○思ひ出でよと契りしは　初めに君が思ひ出せと契つたのは。
○忘れむとてのなさけ　思ひ出すのは忘れたからのことだから云ふ
○昔がたりのうつゝにて　君を逢ひ見たのは昔語りながら現實なのに。
○哀れなるこゝろの　「の」は「が」の意味。
○契りきや　誓つたかい。
○露　涙の露。
○おきし　置きし—起きし。
○言の葉　秋風に散る木の葉を云ひ懸く。
○秋風　男の厭き風を云ひ懸く。
○吹きだにすさべ　吹きすさびでもせよ。

○さらでだに　さうでなくてさへ
○うらみむ　裏見む―恨みむ。古今集卷四に「我妹子が衣の裾を吹き返しうら珍しき秋の初風」
○心には　物思ひする心には。
○ゆふまぐれ　夕間暮に、云ふを云ひ懸く。
○心のほかに聞く　無關心に聞く
○心あらば　風よ心あるならば。
○吹かずもあらなむ　吹かずにあつてくれ。
○空しき牀　獨寢の牀。
○身は　身には。

さらでだにうらみむとおもふ吾妹子(わぎもこ)がころもの裾に秋風ぞふく　讀人しらず

題しらず

心にはいつも秋なる寐ざめかな身にしむ風のいく夜ともなく　西行法師

入道前關白太政大臣の家の歌合に

あはれとて問ふ人のなどなかるらむものおもふ宿の荻のうは風　俊惠法師

題しらず

わが戀はいまを限りとゆふまぐれ荻ふく風の音づれて行く　式子内親王

家の歌合に

いまはたゞ心のほかに聞くものを知らずがほなる荻のうは風　攝政太政大臣

いつも聞くものとや人の思ふらむ來ぬ夕暮のまつかぜの聲　前大僧正慈圓

和歌所にて歌合し侍りしに逢不遇戀の心を

心あらば吹かずもあらなむよひ〳〵に人まつやどの庭の松風　寂蓮法師

里は荒れぬ空しき牀のあたりまで身はならはしの秋風ぞ吹く　太上天皇

水無瀬の戀の十五首の歌合に

さとはあれぬ尾上の宮のおのづからまち來し宵も昔なりけり

有家朝臣

もの思はでたゞ大かたの露にだに濡るればぬるゝ秋のたもとを

雅經

草枕むすび定めむかた知らずならはぬ野邊の夢のかよひ路

和歌所の歌合に深山戀といふことを

家隆朝臣

さてもなほ問はれぬ秋のゆふは山雲ふく風もみねに見ゆらむ

藤原秀能

思ひ入るふかき心のたよりまで見しはそれともなき山路かな

題しらず

鴨長明

ながめてもあはれと思へおほかたの空だにかなし秋のゆふぐれ

千五百番歌合に

右衞門督通具

ことの葉のうつりし秋も過ぎぬれば我が身時雨とふる涙かな

定家朝臣

消えわびぬうつろふ人の秋の色に身をこがらしの森の下露

攝政太政大臣の家の歌合に

寂蓮法師

○尾上の宮の　「おのづから」を云起こす序。
○大かたの　普通の。
○秋のたもとを　「を」は感動の助詞。
○草枕　旅の枕。
○ゆふは山　夕暮の端山。
○見ゆらむ　あの人にも見えるだらうに。
○まで　までに。
○見しは　見た山路は。
○それともなき　それほどに深くもない。
○おほかたの空だにかなし　物思ひのない時に見る普通の空でさへ秋の夕暮は悲しい。
○うつりし　變つた。
○身をこがらし　「身をこがす」を「木枯の森（駿河國）」に云ひ懸く。

來ぬ人をあきのけしきや更けぬらむうらみに弱る松蟲のこゑ

戀の歌とてよみ侍りける　太上天皇

わがこひは庭のむらはぎうら枯れて人をも身をもあきの夕ぐれ

被忘戀の心を　定家朝臣

袖の露もあらぬ色にぞ消えかへる移ればかはるなげきせしまに

家隆朝臣

むせぶとも知らじな心かはら屋にわれのみ消たぬしたの煙は

皇太后宮大夫俊成女

知られじなおなじ袖には通ふとも誰がゆふ暮とたのむ秋風

前大僧正慈圓

露はらふ寐ざめはあきのむかしにて見はてぬ夢に殘るおもかげ

攝政太政大臣の家の百首の歌合に尋戀

こゝろこそ行くへもしらぬ三輪の山すぎの木末のゆふ暮の空

式子内親王

百首の歌の中に

さりともと待ちし月日もうつりゆくこゝろの花の色にまかせて

生きてよもあすまで人は辛からじこの夕暮をとはばとへかし

〇來ぬ人を　六百番歌合は「來ぬ人の」とある。
〇あき　厭き—秋。
〇うらみに　人を恨んで。
〔松蟲　待ち弱る自分のことを云ふ。
〇あらぬ色　とんでもない色。
〇移ればかはる　時の移るにつれて心の變る。
〇心かはら屋　「心變る」は「瓦屋」を云ひ懸く。
〇おなじ袖には　我が袖にも人の袖にも同樣に。
〇露はらふ　涙の露を云ひ懸く。
〇寐ざめはあきのむかしにて　寐覺に思へば厭きられたのは秋の昔であつて。
〇見はてぬ夢に殘るおもかげ　逢ふと見た見果てない夢に面影のみ殘つてゐるの意味。
〇こゝろこその歌　女の心底は分らないが、敎へた家に尋ねて來たの意味。古今集卷十八に「我が庵は三輪の山もと戀しくばとぶらひ來ませ杉立てる門」
〇さりともと　それにしてもと。
〇生きてよもあすまで人は辛からじ　こんなに君につらくされるのでよも明日までもつらさに堪へて生きてこの上君に辛くされもしますまい。

曉戀の心を　　前大僧正慈圓

あかつきの涙やそらにたぐふらむ袖に落ち來る鐘のおとかな

千五百番歌合に　　權中納言公經

つく〴〵と思ひあかしのうら千鳥なみの枕になく〳〵ぞ聞く

定家朝臣

たづね見るつらき心のおくの海よ汐干のかたの言ふかひもなし

水無瀨の戀の十五首の歌合に　　雅經

見しひとの面かげとめよ清見がた袖にせきもる浪の通ひぢ

皇太后宮大夫俊成女

ふりにけり時雨は袖に秋かけていひしばかりを待つとせしまに

かよひこしやどの道芝かれ〴〵に跡なき霜のむすぼほれつゝ

○思ひあかしのうら　「思ひ明し」に「明石の浦」を云ひ懸く。
○おくの海　出雲國の意宇の海の誤りかといふ。
○汐干のかた　人の心の淺いことを云ふ。
○かひ　貝―效。
○せきもる　關守る―堰き洩る。
○涙の通ひぢ　涙の流れる道を云ふ。
○秋かけて　秋に逢はうと約束して。
○かれ〴〵　枯れ―離れ。

新古今和歌集　卷第十五

戀歌五

水無瀬の戀の十五首の歌合に　　藤原定家朝臣

しろたへの袖のわかれに露おちて身にしむいろの秋風ぞふく

藤原家隆朝臣

思ひいる身は深草のあきの露たのめしすゑや木がらしの風

前大僧正慈圓

野邊の露はいろもなくてやこぼれつる袖より過ぐる荻の上かぜ

題しらず　　左近中將公衡

戀ひわびて野邊のつゆとは消えぬとも誰か草葉をあはれとや見む

右衛門督通具

とへかしな尾花がもとの思草しをるゝ野邊のつゆはいかにと

家に戀の十五首の歌よみ待りける時に　　權中納言俊忠

夜の間にもきゆべきものを露霜のいかに忍べとたのめ置くらむ

○袖のわかれ　男女の曉の別れ。

○たのめしすゑや木がらしの風　頼みにした果ては木枯の風に露が散らされるやうに身は散り果てるだらう。

○袖より過ぐる荻の上かぜ　荻の上風が袖より過ぎる頃。

○消えぬとも　消えても。

○とへかしな　問ひ給へよ。「かし」「な」共に助詞。

○十五首　一本「十首」

○露霜の　露霜は。

題しらず　道信朝臣

あだなりと思ひしかども君よりは物わすれせぬ袖の上の露

藤原元眞

おなじくは我が身も露と消えななむきえなば辛き言の葉もみじ

たのめて侍りける女の後に返りごとをだにせず侍りければかの男にかはりて　和泉式部

いま來むといふ言の葉もかれ行くによな〱露の何におくらむ

頼めたる事あとなくなり侍りにける女久しくありてとひて侍りける返事に　藤原長能

あだ言の葉におく霜の消えにしをあるものとてや人のとふらむ

藤原惟成に遣はしける　讀人しらず

うちはへていやは寢らるゝ宮城野の小萩が下葉色に出でしより

かへし　藤原惟成

萩の葉や露のけしきもうちつけにもとより變る心あるものを

題しらず　花山院御歌

よもすがら消えかへりつる我が身かなゝみだの露に結ぼほれつゝ

○あだなりとの歌　露をあだなものと思つたが、君よりはあだでなくて物忘れをしないの意味。

○消えななむ　消えてしまひたい

○かれ　枯れ―離れ。

○露の何におくらむ　すでに葉が枯れたのに何にたよつて露が置くのだらう。

○あだ言の葉　仇な言葉に木の葉を云ひ懸く。

○霜の　霜のやうに私の身は。

○いやは寢らるゝ　寢られようかい。

○色に出でしより　戀心が外に出て以來。

○うちつけに　突然。

久しくまゐらぬ人に　光孝天皇御歌

君がせぬわが手枕はくさなれやなみだの露の夜な〳〵ぞ置く

御かへし　讀人しらず

露ばかりおくらむ袖はたのまれずなみだの川のたきつ瀬なれば

みちのくの安達に侍りける女に九月ばかりに遣はしける　重之

思ひやるよそのむら雲しぐれつゝあだちの原に紅葉しぬらむ

思ふ事侍りける秋の夕暮ひとりながめてよみ侍りける　六條右大臣室

身に近くきにけるものを色かはる秋をばよそに思ひしかども

題しらず　相模

いろかはる萩のした葉を見てもまづ人の心の秋ぞ知らるゝ

稲妻は照らさぬ宵もなかりけりいづらほのかに見えしかげろふ　謙徳公

ひと知れぬ寐覺の涙ふりみちてさもしぐれつる夜半のそらかな　光孝天皇御歌

涙のみうき出づる蜑の釣竿のながき夜すがら戀ひつゝぞぬる　坂上是則

○くさなれや　草であるのだらうか。

○露ばかり　露ほどの少しばかり

○たのまれず　頼みにならない。

○なみだの川のたきつ瀬なれば　君を思ふ涙は瀧の瀬ですから。

○よそのむら雲しぐれつゝ　よそ心が出て私に心がはりしての意味

○身に近くきにけるものを　我が身の上に近く來たものを。

○よそに思ひしかども　よそ事に考へてゐたが。

○稲妻はの歌　電光も蜉蝣も共にはかない物だが、電光は毎晩照らすのに蜉蝣はほのかに見えただけだの意味。蜉蝣をつれなくなつた人に喩ふ。

○さも　さほども。

○うき出づる　海人が海底から浮び出ることに涙の浮き出ることを云ひ懸く。

○釣竿の　釣竿のやうに。

まくらのみ浮くと思ひしなみだ川いまは我が身のしづむなりけり

讀人しらず

おもほえず袖にみなとの騒ぐかなもろこし舟の寄りしばかりに

いもが袖わかれし日より白妙の衣かたしき戀ひつゝぞ寢る

逢ふことのなみの下草みがくれてしづごゝろなくねこそ泣かるれ

浦にたく藻鹽の煙なびかめや四方のかたよりかぜは吹くとも

わするらむと思ふ心の疑ひにありしよりけにものぞ悲しき

憂きながら人をばえしも忘れねばかつ恨みつゝなほぞこひしき

命をばあだなるものと聞きしかどつらきがためは長くもあるかな

いづ方に行き隠れなむ世の中に身のあればこそ人もつらけれ

いままでに忘れぬ人は世にもあらじ己がさま〴〵年のへぬれば

玉水を手にむすびてもこゝろみむぬるくば石の中もたのまじ

山城の井手の玉水手に汲みて頼みしかひもなき世なりけり

君があたり見つゝを居らむ伊駒やま雲なかくしそ雨はふるとも

中空に立ちゐる雲のあともなく身のはかなくもなりぬべきかな

雲のゐる遠山鳥のよそにてもありとし聞けばわびつゝぞぬる

○しづむ　上の「浮く」に對する詞

○おもほえず　思ひもかけず。

○もろこし舟の寄りしばかりに　伊勢物語では、五條なる女をえ得ずてこぶらへる人に返したる歌で、「寄りし」とはその人の訪れたことを云ふ。

○なみ　涙―無み。

○ねこそ泣かるれ　根こそ無かるれ―泣きこそ泣かるれ。

○なびかめや　靡かうかい。

○けに　殊に。この歌伊勢物語に。

○憂きながらの歌　伊勢物語に。

○隠れなむ　隠れたい。

○石の中　清水は石の間から涌き出るものなので斯う云ふ。

○雲の　雲のやうに。

○遠山鳥の　遠い山の山鳥のやうに、山鳥は晝は雌雄一所にあつても夜は山の尾を隔てて寢る故に、「よそに」を云ひ起す序。

ひるは來てよるは別るゝ山鳥のかげみるときぞ音はなかれける

我もしかなきてぞ人に戀ひられし今こそよそに聲をのみ聞け

人丸

夏野ゆく牡鹿の角のつかのまも忘れずぞ思ふ妹がこゝろを

なつぐさの露分ごろもきもせぬになどわが袖のかわくときなき

八代女王

御禊するならの小川のかは風に祈りぞわたるしたに絕えじと

淸原深養父

うらみつゝ寢る夜の袖のかわかぬは枕のしたに潮や滿つらむ

中納言家持に遣はしける　山口女王

葦べより滿ち來る潮のいやましに思ふか君がわすれかねつる

鹽竈のまへにうきたる浮島のうきて思ひのある世なりけり

題しらず　赤染衞門

いかにねて見えしなるらむ假寢(うたゝね)の夢より後はものをこそおもへ

參議篁

うち解けてねぬもの故に夢を見てもの思ひまさる頃にもあるかな

○我もしか　然―鹿。この歌大和物語に。
○夏野ゆく…角の　序。
○つかのまも　少しの間も。
○ならの小川　山城國。
○したに絕えじと　人に知られても心の下には絕えまいと。
○滿ち來る潮の　「の」は「思やうに」
○思ふか　思ふからか。
○浮島の　これまでは序。
○見えし　夢が…。

春の夜の夢にありつと見えつれば思ひたえにし人ぞ待たるゝ　　伊勢

春の夜の夢のしるしは辛くとも見しばかりだにあらばたのまむ　　盛明親王

ぬる夢に現(うつゝ)のうさも忘られて思ひなぐさむほどぞはかなき　　女御徽子女王

春の夜女の許にまかりて遣はしける　　能宣朝臣

かくばかり寝で明しつる春の夜にいかに見えつる夢にかありけむ

題しらず　　寂蓮法師

なみだ河身もうきぬべき寐覺かなはかなき夢の名殘ばかりに

百首の歌奉りしに　　家隆朝臣

あふとみて事ぞともなく明けにけりはかなの夢の忘れがたみや

題しらず　　基俊

牀(ゆか)近くあなかま夜半のきりぎりす夢にも人の見えもこそすれ

千五百番歌合に　　皇太后宮大夫俊成

あはれなりうたゝねにのみ見し夢のながき思ひにむすぼほれなむ

○ありつと　二人の仲がつゞいてゐたと。
○思ひたえにし人　仲のすつかり絶えた人が。
○見しばかりだにあらばたのまむ　夢に見た程度のつれなさならばあの人を頼みに出來ようものを。
○ぬる夢に　寢て逢つた夢を見て
○現のうさ　現實のつれなさ。
○寢で明しつる　寢ないで語り明した。
○いかに見えつる夢にか　寢ずに語り明したことを夢に見なしてゐる。
○明けにけり　一本「明けぬなり」
○牀近く　一本「牀近し」
○あなかま　あゝやかましい。
○むすぼほれ　心が結ぼほれ。

題しらず　　定家朝臣

かきやりしその黑髮の筋ごとにうちふすほどは面影ぞたつ

和歌所の歌合に遇不逢戀の心を　　皇太后宮大夫俊成

夢かとよ見しおもかげもちぎりしも忘れずながら現(うつゝ)ならねば

戀の歌とて　　式子内親王

はかなくぞ知らぬいのちを歎きこし我がかね言のかはりける世に

辨

過ぎにける世々の契りもわすられていとふ憂身の果てぞはかなき

崇德院に百首の歌奉りけるとき戀の歌　　皇太后宮大夫俊成

おもひわび見し面影はさておきて戀せざりけむをりぞ戀しき

題しらず　　相摸

流れ出でむ浮名にしばしよどむかなもとめぬ袖に淵はあれども

をとこの久しく音づれざりけるが忘れてかと申し侍りければよめる　　馬内侍

つらからば戀しきことは忘れなで添へてはなどかしづ心なき

昔みける人賀茂祭の次第司(しだいし)に出で立ちてなむまかり渡るといひて侍りけ

○かきやりし　共に寢た夜掻きやつた。
○うちふすほどは　打臥す程には
○夢かとよ　夢かよまア。
○見しおもかげもちぎりしも　以前に見た面影も又契つたのも。
○はかなくぞ知らぬいのちを歎きこし　我が命の知り難きをはかなくも歎いて來た。
○世々　前世のこと。
○見し面影はさておきて　過去に見た君の面影はさておいて。
○もとめぬ　一本「沐らぬ」
○忘れなで　忘れないで。
○添へて　辛さに戀しさを添へて
○次第司　祭事の行列、往來の次第などを司る役であらう。

○君しまれ　君しもあれ。「し」は助詞。
○榑　壁柱。
○朽木の杣　近江國甲賀郡。
○そまびとの　これまでは「くれ」の序。
○くれ　榑—暮。
○おのづからさこそはあれと　君が訪れないのは心からではなく自然故障などあつてのことゝ。
○習はねば　慣れないので。
○悔しきに　かやうな人に逢ひそめた後悔に。
○歎かじな　歎くまいな。
○人につらかりし　人につれなくした。
○この世ながらのむくい　前世の報いまでもなく…。
○ありへば　有り經たならば。
○つらきぞ長きかたみなりける　つらきことは長く忘れられないで殘るの意味。

れば
君しまれみちのゆききを定むらむ過ぎにし人をかつ忘れつゝ

年頃絶えにける女の榑(くれ)といふもの尋ねたりけるにつかはすとて　藤原仲文
花咲かぬ朽木の杣のそまびとの如何なるくれにおもひいづらむ

久しく音せぬ人に　大納言經信母
おのづからさこそはあれと思ふまに誠に人のとはずなりぬる

忠盛朝臣かれ〴〵になりて後いかゞ思ひけむ久しく音づれぬ事を恨めしくやなどいひて侍りければ返事に　前中納言教盛母
習はねば人の問はぬもつらからで悔しきにこそ袖はぬれけれ

題しらず　皇嘉門院尾張
歎かじな思へば人につらかりしこの世ながらのむくいなりけり

和泉式部
如何にしていかに此の世にありへばか暫しもものを思はざるべき

深養父
嬉しくば忘るゝこともありなましつらきぞ長きかたみなりける

素性法師

逢ふことのかたみをだにも見てしがな人は絶ゆとも見つゝ忍ばむ

小野小町

わが身こそあらぬかとのみ辿(たど)らるれ問ふべき人に忘られしより

能宣朝臣

葛城(かづらき)や久米路にわたす岩橋の絶えにし中となりや果てなむ

祭主輔親

いまはとも思ひな絶えそ野中なる水のながれは行きてたづねむ

伊勢

おもひいづや美濃のを山の一つ松契りしことはいつも忘れず

業平朝臣

出でていにし跡だにいまだ變らぬに誰が通ひ路と今はなるらむ

梅の花香をのみ袖にとゞめおきてわが思ふ人は音づれもせぬ

天暦御歌

齋宮女御につかはしける

あまの原そこともしらぬ大空におぼつかなさを歎きつるかな

女御徽子女王

御かへし

なげくらむ心をそらに見てしがな立つあさ霧に身をやなさまし

○見てしがな　一本「得てしがな」

○あらぬかと　我が身がないのかと。

○葛城や…岩橋の　「絶え」るの序　岩橋のことは前に出た。

○いまはともの歌　古今集巻十七に「古の野中の清水ぬるけれど元の心を知る人ぞ汲む」

○思ひな絶えそ　思ひ絶えるなよ

○一つ松　我が一筋に思ふことをよそへてゐるのであらう。

○出でていにし跡　自分が通ふ女の許から出て去つた跡。この歌伊勢物語に。

○梅の花　梅の花のやうに。

○大空に　これまではおぼつかなさを云ひ起す序。「の」は「のやうな」

○見てしがな　見たいな。

○ながめ　眺め─長雨。

○しら雲の　「知らず」を云ひ懸く

○知らせやはせぬ　知らせようかい。

○雲居より…行く　「聲ほのかなる」の序。

○くもゐなる鴈だに　雲の居る遙かにある鴈でさへ。

○かりには　鴈には─假には。

○あらず　一本「あらで」

○初鴈の　「はつかに」の序。

○小忌衣　五節の時の裝束。

○去年ばかりこそ馴れざらめ　「ご」を補ふ。

○日陰　同じく五節の時に用ゐるもの。日陰葛。

○住吉のこひわすれ草　昔住吉にあつた戀を忘れるといふ忘草が。

題しらず　　光孝天皇御歌

逢はずしてふる頃ほひの數多(あまた)あれば遙けき空にながめをぞする

女の外へまかるを聞きて　　兵部卿致平親王

おもひやる心もそらにしら雲の出でたつ方を知らせやはせぬ

題しらず　　躬恒

雲居よりとほ山鳥のなきて行く聲ほのかなる戀もするかな

更衣ひさしく參らざりけるに給はせける　　延喜御歌

くもゐなる鴈だになきて來る秋になどかは人の音づれもせぬ

齋宮女御春の頃まかり出でて久しく參り侍らざりければ　　天暦御歌

春行きて秋までとやは思ひけむかりにはあらず契りしものを

題しらず　　西宮前左大臣

初鴈のはつかに聞きし言づても雲路に絶えてわぶる頃かな

五節の頃内にて見侍りける人に又の年つかはしける　　藤原惟成

小忌衣(をみごろも)去年(こぞ)ばかりこそ馴れざらめけふの日陰のかけてだにとへ

題しらず　　藤原元眞

住吉のこひわすれ草たね絶えてなき世にあへるわれぞかなしき

齋宮女御まゐりけるにいかなる事かありけむ　　天暦御歌

水の上のはかなき數もおもほえず深きこゝろしそこにとまれば

久しくなりにける人の許へ　　謙德公

ながき世のつきぬ歎きの絶えざらば何にいのちをかへて忘れむ

題しらず　　權中納言敦忠

心にもまかせざりける命もてたのめも置かじ常ならぬ世を

藤原元眞

世の憂きも人のつらきも忍ぶるに戀しきにこそ思ひわびぬれ

忍びてかたらひける女の親聞きていさめ侍りければ　　參議篁

數ならばかからましやは世の中にいとかなしきは賤のをだまき

題しらず　　藤原惟成

人ならば思ふ心を言ひてましよしやさこそは賤のをだまき

讀人しらず

我がよはひおとろへ行けば白妙の袖のなれにし君をしぞおもふ

いまよりは逢はじとすれや白妙の我が衣手のかわくときなき

玉櫛笥あけまくをしきあたら夜をころも手かれてひとりかも寢む

○水の上の歌　古今集卷十一に「行く水に數かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」
○そこ　底―其處。
○ながき世のつきぬ歎きの絶えざらば　長い後の世の盡きせぬ歎きが絶えないならば。
○たのめも置かじ常ならぬ世を　無常の世を頼み置くまい。
○戀しきにこそ　戀しいことには
○數ならばかからましやは　我が身が相當の身分であつたならばかやうに女の親がいさめまいに。
○人ならば　情を知るべき人であるならば。
○よしやさこそは賤のをだまき　よしやさやうに賤しい身分の女であつても。
○すれや　すればや。
○玉櫛笥　「あけ」の枕詞。
○あけまく　開け―明け。あけむこと。
○あたら夜を　惜しい夜を。

○露の置きかはる　春秋のおし移ることを云ふ。
○ほむけの風の　穂を一方に向けて吹く風のやうに。
○野もりの鏡　野に溜つた水鏡。
○えてしがな　得て映したいな。
○大淀のまつ云々　大淀の松（伊勢國にある）はつれなくもないのに。
○うらみて　恨みて―浦見て。
○こりずまの浦　「懲りずに」の意味に須磨浦を云ひ懸く。

あふ事をおぼつかなくて過すかな草葉の露の置きかはるまで

秋の田のほむけの風のかたよりに我はもの思ふつれなきものを

はし鷹の野もりの鏡えてしがな思ひ思はずよそながら見む

大淀のまつはつらくもあらなくにうらみてのみも歸る浪かな

しら波は立ち騷ぐともこりずまの浦のみるめは刈らむとぞ思ふ

さして行くかたはみなとの浪高みうらみてかへる蜑の釣舟

新古今和歌集　巻第十六

雜歌上

入道前關白太政大臣の家の百首の歌よませ侍りけるに立春の心を　皇太后宮大夫俊成

とし暮れしなみだのつらゝ解けにけり苔の下にも春や立つらむ

土御門内大臣の家に山家殘雪といふ心をよみ侍りける　藤原有家朝臣

やまかげやさらでは庭に跡もなし春ぞ來にける雪のむらぎえ

圓融院位さり給ひて後船岡に子の日し給ひけるに參りて朝に奉りける　一條左大臣

あはれなりむかしの人をおもふには昨日の野邊にみゆきせましや

御かへし　圓融院御歌

ひきかへて野邊の景色(けしき)は見えしかど昔をこふる松はなかりき

月あかく侍りける夜袖のぬれたりけるを　大僧正行尊

春來ればそでの冰も解けにけりもりくる月の宿るばかりに

○なみだのつらゝ　袖にかゝつた涙が一面に冰つたもの。

○さらでは　雪の斑消えがないでは。

○月あかく　月が明るく。

鶯を　　菅贈太政大臣

谷ふかみ春のひかりのおそければ雪につゝめるうぐひすの聲

梅

ふる雪に色まどはせる梅の花うぐひすのみやわきてしのばむ

枇杷左大臣の大臣になりて侍りけるよろこび申すとて梅を折りて　　貞信公

遅くともつひに咲きぬる梅の花たが植ゑおきし種にかあるらむ

延長のころほひ五位藏人に侍りけるをはなれ侍りて朱雀院の承平八年又かへりなりて明くる年むつきに御あそび侍りける日梅の花を折りてよめる　　源公忠朝臣

百敷(もゝしき)にかはらぬものは梅のはな折りてかざせるにほひなりけり

梅の花を見給ひて　　花山院御歌

色香をば思ひもいれず梅の花つねならぬ世によそへてぞ見る

上東門院世をそむき給ひにける春庭の紅梅を見はべりて　　大貳三位

うめの花なに匂ふらむみる人の色をも香をも忘れぬる世に

東三條院女御におはしましけるとき圓融院つねに渡り給ひけるを聞き侍りてゆげひの命婦が許につかはしける　　東三條入道前攝政太政大臣

○谷ふかみ　谷が深いので。
○色まどはせる　色を見惑はせる
○わきて　辨別して。
○つひに咲きぬる　結局は咲いたこれに「遅れても大臣になつた」意味を云ひ懸く。
○延長　醍醐天皇の年號。
○百敷　大宮のこと。先代の宮中の有様を云ふ。
○みる人　上東門院を指すのであらう。

春霞たなびきわたるをりにこそかゝる山邊はかひもありけれ

御かへし　　圓融院御歌

むらさきの雲にもあらで春がすみたなびく山のかひはなにぞも

柳　　菅贈太政大臣

道の邊のくち木の柳はる來ればあはれむかしと忍ばれぞする

題しらず　　清原深養父

昔みし春はむかしの春ながら我が身ひとつのあらずもあるかな

堀河院におはしましける頃閑院左大將の家の櫻を折らせにつかはすとて　　圓融院御歌

かきごしに見るあだ人の家櫻はな散るばかり行きて折らばや

御かへし　　左大將朝光

折りに來と思ひやすらむ花櫻ありしみゆきの春を戀ひつゝ

高陽院にて花の散るを見てよみ侍りける　　肥後

よろづ代をふるにかひある宿なれやみ雪と見えて花ぞちり來る

かへし　　二條關白内大臣

枝ごとの末までにほふ花なれば散るもみ雪と見ゆるなるらむ

○かひもありけれ　住む效もあるの意味。

○むらさきの雲にもあらで　后の宮にもならないでの意味。
○かひ　峽—效。

○昔みし歌　伊勢物語に「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つは元の身にして」

○かきごしに　垣越しに。
○あだ人　左大將のことを云ふ。

○折りに來と　「折りに來いと」に「折節に來いと」を云ひ懸く。
○ありし　過去にあつた。

近衞づかさにて年久しくなりて後うへのをのこども大内の花見にまかれりけるによめる　藤原定家朝臣

春を經てみゆきになるゝ花のかげふりゆく身をもあはれとや思ふ

最勝寺の櫻は鞠のかゝりにて久しくなりにしをその木年ふりて風に倒れたる由聞き侍りしかばをのこどもにおほせてこと木をその跡に移し植ゑさせし時まかりて見侍ればあまたの年々暮れにし春まで立ちなれけることなど思ひ出でてよみ侍りける　藤原雅經朝臣

なれ／＼て見しはなごりの春ぞともなどしら河の花のした陰

建久六年東大寺供養に行幸の時興福寺の八重櫻盛りなりけるを見て枝に結びつけ侍りける　讀人しらず

ふるさとと思ひなはてそ花櫻かかるみゆきに逢ふ世ありけり

籠り居て侍りける頃後德大寺左大臣白河の花見に誘ひければまかりてよみ侍りける　源師光

いさやまだ月日の行くも知らぬ身は花の春ともけふこそは見れ

敦道のみこの許に前大納言公任の白河の家にまかりて又の日みこの遣はしける使につけて申し侍りける　和泉式部

○みゆきになるゝ　左近衞の中少將は行幸の時に鳳輦に乘御の間階下の櫻樹の下に立つので云ふ。

○などしら河の　なぜ知らなかつたかの意味を白河に云ひ懸く。

○建久　後鳥羽天皇の年號。

○ふるさと　奈良は舊い都なので云ふ。

○花の春とも　花の春であるといふことも。

○けふこそは見れ　今日はじめて見る。

題しらず　藤原高光

折る人のそれなるからにあぢきなく見し我が宿の花のかぞする

京極前太政大臣の家に白河院みゆきし給ひて又の日花の歌奉られけるによみ侍りける　堀河左大臣

見ても又またも見まくのほしかりし花のさかりは過ぎやしぬらむ

後冷泉院の御時御前にて翫新成櫻花といへる心ををのこどもつかうまつりけるに　大納言忠家

老いにける白髪(しらが)も花ももろともに今日のみゆきに雪とみえけり

無風散花といふことをよめる　大納言經信

櫻花折りて見しにも變らぬに散らぬばかりのしるしなりけり

鳥羽殿にて花の散りがたなるを御覽じて後三條内大臣に給はせける　大納言忠教

さもあらばあれ暮れ行く春も雲の上に散ることしらぬ花し匂はば

鳥羽院御歌

さくら花すぎゆく春の友とてや風のおとせぬ世にも散るらむ

をしめどもつねならぬ世の花なれば今はこのみを西にもとめむ

○折る人　公任を指す。○それなるからに　さすがに高貴な人なので。○あぢきなく見し　これまでつまらなく見た。○見まくのほしかりし　見むことの欲しかつた。見たかつた。

○翫新成櫻花　作り花のこと。

○さもあらばあれ暮れ行く春も　この二句は前後して譯す。

○春の友　花の散ることは春の友といふ意味であらう。

○つねならぬ世　無常の世。○このみ　木の實ー此の身。

世をのがれてのち百首の歌よみ侍りけるに花の歌とて　皇太后宮大夫俊成

いまはわれ吉野のやまの花をこそ宿のものとも見るべかりけれ

入道前關白太政大臣の家の歌合に

春來ればなほこの世こそ忍ばるれいつかはかかる花を見るべき

同じ家の百首の歌に

照る月も雲のよそにぞ行きめぐる花ぞこの世の光なりける

春のころ大乘院より人に遣はしける　前大僧正慈圓

見せばやな志賀の辛崎ふもとなるながらの山の春のけしきを

題しらず　西行法師

柴の戸に匂はむ花はさもあらばあれ眺めてけりな恨めしの身や

世の中を思へばなべて散る花の我が身をさてもいづちかもせむ

東山に花見にまかりて侍るとてこれかれ誘ひけるをさしあふ事ありてとどまりて申し遣はしける　安法法師

身はとめつ心はおくるやまざくら風のたよりに思ひおこせよ

題しらず　俊頼朝臣

○宿のものとも　宿のものとしても。

○かかる　斯やうな。

○ながらの山　近江國滋賀郡の長良山。

○さもあらばあれ　まゝよ。

○恨めしの身や　俗念を以て眺めたさは恨めしい身よ。

○いづちかもせむ　どうしようぞ

○心はおくる　心だけは送る。

さくらあさのをふの浦波立ちかへり見れどもあかず山梨のはな

橘爲仲朝臣みちのおくに侍りけるとき歌あまたつかはしける中に　加賀左衞門

しら波の越ゆらむすゑのまつ山は花とや見ゆるはるの夜の月

おぼつかな霞立つらむたけくまのまつのくまもる春の夜の月

題しらず　法印幸淸

世をいとふ吉野のおくの呼子鳥ふかき心のほどやしるらむ

百首の歌奉りし時　前大納言忠良

をりに逢へばこれもさすがにあはれなり小田の蛙の夕暮の聲

千五百番歌合に　有家朝臣

春の雨のあまねき御代を賴むかな霜に枯れ行く草葉もらすな

崇德院にて林下春雨といふ事をつかうまつりけるに　八條前太政大臣

すべらぎの木高き陰にかくれてもなほ春雨にぬれむとぞおもふ

圓融院位去り給ひし後實方朝臣馬命婦と物語し侍りけるとき山吹の花を屏風の上よりなげこし給ひて侍りければ　實方朝臣

八重ながらいろもかはらぬ山吹のなど九重に咲かずなりにし

御かへし　圓融院御歌

○さくらあさ　櫻麻。麻の一種。
○をふ　麻生。伊勢國。
○すゑのまつ山　奥州。
○たけくま　武隈。陸前國。
○呼子鳥　郭公鳥のことか。
○枯れ行く　一本「枯れにし」
○すべらぎ　天皇。「き」に「木」を云ひ懸く。
○九重　宮中。上の八重に對する

こゝのへにあらで八重咲く山吹のいはぬ色をばしる人もなし

五十首の歌奉りし時　　前大僧正慈圓

おのが波におなじ末葉ぞ萎れぬる藤咲く田子のうらめしの身や

世をのがれて後四月一日上東門院太皇太后宮と申しけるとき衣がへの御
裝束奉るとて　　法成寺入道前關白太政大臣

唐衣はなのたもとに脫ぎかへよわれこそ春の色はたちつれ

御かへし　　上東門院

から衣たちかはりぬる春の夜にいかでか花のいろを見るべき

四月祭の日まで花ちり殘りて侍りける年その花を使の少將のかざしに給
ふ葉にかきつけ侍りける　　紫式部

神代にはありもやしけむさくら花けふのかざしに折れるためしは

いつきの昔を思ひ出でて　　式子内親王

ほとゝぎすそのかみ山の旅枕ほのかたらひし空ぞわすれぬ

左衞門督家通中將に侍りけるとき祭の使にてかんだちにとまりて侍りけ
る曉齋院の女房の中よりつかはしける　　讀人しらず

立ち出づるなごりありあけの月かげにいとゞかたらふ郭公かな

○いはぬ色　山吹は「口なし色」(黃色)なので云ふ。
○おのが波　藤浪。
○田子　農夫。沈淪する自身を云ふ。田子の浦は越中國。

○祭の日　賀茂神社の祭。

○いつき　齋院。

○そのかみ山　「その當時」を「其の神山」に云ひ懸く。神山は賀茂。
○ほの　ほのかに。
○かんだち　神館。前に出た。

かへし　　左衞門督家通

いく千世と限らぬ君の御代なれどなほ惜しまるゝ今朝のあけぼの

三條院の御時五月五日菖蒲の根をほとゝぎすのかたに作りて梅の枝にすゑて人の奉りて侍りけるをこれを題にて歌つかうまつれと仰せられければ　　三條院女藏人左近

梅が枝にをりたがへたる時鳥こゑのあやめも誰かわくべき

五日ばかり物へまかりける道にいと白くくちなしの花咲けりけるをこれは何の花ぞと人にとひ侍りけれど申さざりければ　　小辨

うちわたすをち方びとにこと問へば答へぬからにしるき花かな

さみだれ空はれて月あかく侍りけるに　　赤染衞門

五月雨のそらだにすめる月かげに涙のあめは晴るゝ間もなし

述懷百首の歌の中に五月雨　　皇太后宮大夫俊成

五月雨はまやの軒端の雨そゝぎあまりなるまで濡るゝ袖かな

題しらず　　花山院御歌

ひとりぬる宿のとこなつ朝な〳〵なみだの露にぬれぬ日ぞなき

贈皇后宮に添ひて春宮にさぶらひけるとき少將義孝久しく參らざりける

○をりたがへたる　折(時節)を違へた。
○あやめ　菖蒲―文目。
○うちわたすの歌　古今集卷十九に「打渡す遠方人にもの申すわれそのそこに白く咲けるは何の花ぞも」
○まや　雨下屋。前に出た。
○雨そゝぎ　「あまり」の序。
○とこなつ　「常夏の花」に「牀」を云ひ懸く。

に撫子の花につけてつかはしける　　惠子女王

よそへつゝ見れど露だになぐさまずいかにかすべき撫子の花

月あかく侍りける夜人の螢をつゝみて遣はしたりければ雨降りけるに申
し遣はしける　　和泉式部

おもひあらば今夜の空はとひてまし見えしや月のひかりなりけむ

題しらず　　七條院大納言

思ひあれば露はたもとにまがふかと秋のはじめを誰に問はまし

后宮より内にあふぎ奉り給ひけるに　　中務

袖のうらなみ吹きかへす秋風に雲のうへまで涼しかるらむ

業平朝臣の裝束つかはして侍りけるに　　紀有常朝臣

秋やくる露やまがふと思ふまであるは涙のふるにぞありける

早くよりわらは友だちに侍りける人の年頃へて行き逢ひたるほのかにて
七月十日頃月にきほひて歸り侍りければ　　紫式部

廻り逢ひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半の月かな

みこの宮と申しけるとき少納言藤原統理年頃なれつかうまつりけるを世
を背きぬべきさまに思ひ立ちけるけしきを御覽じて　　三條院御歌

○露だに　少しばかりでも。

○おもひあらば　螢のやうに思ひ(火)があるならば。

○露はたもとにまがふかと　伊勢物語に「我や來る露や紛ふとおもふまであるは涙の降るにぞ有りける」

○袖のうら　出羽國。

○涙のふる　喜涙の降る。

○見しやそれともわかぬまに　過去に見た人はそれかとも見分けない間に。久しぶりに廻り逢つてすぐ分れた人を月に喩へてゐる。

月影の山の端わけて隱れなばそむくうきよをわれやながめむ

題しらず　藤原爲時

山の端を出でがてにする月待つとねぬ夜のいたく更けにけるかな

參議正光朧月夜に忍びて人の許にまかりけるを見あらはして遣はしける　伊勢大輔

浮雲は立ちかくせども隙もりて空ゆく月の見えもするかな

かへし　參議正光

うきぐもに隱れてとこそ思ひしかねたくも月の隙もりにける

三井寺にまかりて日頃過ぎて歸らむとしけるに人々なごり惜しみてよみ侍りける　刑部卿範兼

月をなど待たれのみすと思ひけむげに山の端は出でうかりけり

山里に籠り居て侍りけるを人のとひて侍りければ　法印靜賢

おもひ出づる人もあらしの山の端にひとりぞ入りし有明の月

八月十五夜和歌所にてをのこども歌つかうまつり侍りしに　民部卿範光

和歌の浦に家の風こそなけれども波ふくいろは月に見えけり

和歌所の歌合に湖上月明といふことを　宜秋門院丹後

○月影の　月光のやうに。○山の端わけてかくれなば　出家したならばの意味。

○思ひしか　「ど」を補ふ。

○待たれのみすと思ひけむ　待たればかりすると思つたのだらう。○出でうかりけり　出憂きものなのを。

○あらし　あらじ—嵐。

○家の風こそなけれども　歌道の家を繼いだものではないけれども　○波ふくいろ　風が波をふいて立つ波色。

よもすがらうら漕ぐ舟はあともなし月ぞのこれるしがの辛崎

題しらず　藤原盛方朝臣

山のはにおもひも入らじ世の中はとてもかくてもありあけの月

永治元年讓位近くなりて夜もすがら月を見てよみ侍りける　皇太后宮大夫俊成

忘れじよわするなとだにいひてまし雲居の月の心ありせば

崇德院に百首の歌奉りけるに

いかにして袖にひかりの宿るらむ雲居の月はへだて來し身を

文治のころほひ百首の歌よみ侍りけるに述懷歌とてよめる　左近中將公衡

心にはわするゝときもなかりけり三代のむかしの雲の上の月

百首の歌奉りけるとき秋の歌　二條院讃岐

むかし見し雲居をめぐる秋の月いま幾とせか袖にやどらむ

月前述懷といへる心をよめる　藤原經通朝臣

うき身世にながらへばなほ思ひ出でよ袂に契るありあけの月

石山に詣で侍りて月を見てよめる　藤原長能

みやこにも人や待つらむ石山の峯にのこれる秋の夜の月

題しらず　躬恆

○おもひも入らじ　佛道に思ひ入るまい。
○とてもかくてもありあけの月　どうしてもかうしても世には有るのだから。これに在明の月を云ひ懸く。
○永治　崇德天皇の年號。
○雲居の月　宮中で見た月。
○雲居の月はへだて來し身を　殿上が出來ずに來た身を。「月は」一本「月の」とある。
○文治　後鳥羽天皇の年號。
○三代のむかし　後鳥羽天皇より三代前。高倉天皇の時。
○雲の上の月　雲居の月と同じ。
○むかし見し　二條天皇の代に宮中で見た。
○なほ　一本「また」
○袂に契る　袂の涙に宿る月に約束する。
○のこれる　一本「こもれる」

淡路にてあはとはるかに見し月のちかき今宵はところがらかも

月のあかかりける夜あひ語らひける人の此の頃月は見るやといへりければよめる　　源　道　濟

いたづらに寢てはあかせど諸共に君がこぬ夜の月は見ざりき

夜更くるまでねられず侍りければ月の出づるをながめて　　增　基　法　師

天の原はるかにひとり眺むればたもとに月の出でにけるかな

能宣朝臣大和國まつちの山近く住みける女の許に夜更けてまかりて逢はざりけるを恨み侍りければ　　讀　人　し　ら　ず

たのめこし人をまつちの山の端に小夜ふけしかば月も入りにき

百首の歌奉りし時　　攝政太政大臣

月見ばといひしばかりの人は來で槇の戸たゝく庭の松風

五十首の歌奉りしに山家月の心を　　前大僧正慈圓

やまざとに月はみるやと人もこず空行く風ぞ木の葉をもとふ

攝政太政大臣大將に侍りしとき月の歌五十首よませ侍りけるに

ありあけの月のゆくへをながめてぞ野寺の鐘は聞くべかりける

同じ家の歌合に山月の心をよめる　　藤　原　業　清

○あは　彼(ア)れはの意味に淡くの意味を云ひ懸く。「あはと」に「阿波の門(ト)」を云ひ懸く。

○まつち　待つ―待乳山。

○月見ばと　月が出たらば來ようと。

○月のゆくへ　月の入る西方。西の方は極樂淨土があるので。

山の端を出でてもまつの木の間より心づくしのありあけの月

和歌所の歌合に深山曉月といふことを　　鴨長明

よもすがらひとりみ山のまきの葉にくもるも澄める有明の月

熊野に詣で侍りしとき奉りし歌の中に　　藤原秀能

おく山の木の葉のおつる秋風にたえだえ峯の月ぞのこれる

月すめばよものうき雲そらに消えてみ山がくれをゆく嵐かな

山家の心をよみ侍りける　　猷圓法師

ながめ侘びぬ柴のあみ戸の明けがたに山のは近くのこる月かげ

題しらず　　花山院御歌

あかつきの月みむとしも思はねど見し人ゆゑにながめられつゝ

伊勢大輔

ありあけの月ばかりこそ通ひけれ來る人なしの宿の庭にも

和泉式部

すみなれし人かげもせぬわが宿に有明の月はいく夜ともなく

家にて月照水といへる心を人々よみ侍りけるに　　大納言經信

住む人もあるかなきかの宿ならし葦間の月のもるにまかせて

○山の端を出でても　山の端を出ない内も出ても同じく心盡したの意味。
○まつ　待つ―松。
○くもるも　一たんは曇つたが。
○峯の月　一本「嶺の雲」
○うき雲　浮き―憂き。
○見し人ゆゑに　逢ひ見た人の戀しさ故に。
○ならし　なるらし。
○もる　漏る―守る。

秋の暮に病にしづみて世をのがれ侍りける又の年の秋九月十餘日(とをかあまり)月くまなく侍りけるによみ侍りける　皇太后宮大夫俊成

思ひきやわかれし秋にめぐりあひて又もこの世の月を見むとは

題しらず　西行法師

月をみてこゝろうかれしいにしへの秋にも更にめぐり逢ひぬる

夜もすがら月こそ袖に宿りけれむかしの秋を思ひ出づれば

月のいろに心をきよく染めましや都をいでぬ我が身なりせば

すつとならばうき世を厭ふしるしあらむ我には曇れ秋の夜の月

更けにける我が身の影を思ふまに遙かに月のかたぶきにけり

入道親王覺性

ながめして過ぎにしかたを思ふ閒に峯よりみねに月はうつりぬ

藤原道經

秋の夜の月に心をなぐさめてうき世に年のつもりぬるかな

五十首の歌めしし時　前大僧正慈圓

秋をへて月をながむる身となれりいそぢの闇をなになげくらむ

百首の歌奉りしに　藤原隆信朝臣

○思ひきや　思つたかい。

○こゝろうかれし　在俗のとき心の浮れた。
○めぐり逢ひぬる　今は出家してゐてもやはり心の浮れる秋に廻り逢つた。
○袖に　涙の袖に。
○都をいでぬ我が身なりせば　都を出て修行しない我が身であつたならば。
○厭ふ　一本「出づる」
○我には曇れ　思ひ出の種になる月を我には見せるなの意味。

○月　眞如の月。
○いそぢの闇　これまで五十年の煩惱。

ながめてもむそぢの秋は過ぎにけり思へばかなし山の端の月

題しらず　源光行

こゝろある人のみ秋の月を見ばなにをうき身のおもひ出にせむ

千五百番歌合に　二條院讃岐

身の憂さに月やあらぬと眺むれば昔ながらの影ぞもり來る

世を背きなむと思ひ立ちける頃月を見てよめる　寂超法師

ありあけの月よりほかに誰をかはやま路の友とちぎり置くべき

山里にて月の夜都を思ふといへる心をよみ侍りける　大江嘉言

都なる荒れたるやどにむなしくや月にたづぬる人かへるらむ

長月の有明の頃山里より式子內親王に贈れりける　惟明親王

思ひやれなにを忍ぶとなけれども都おぼゆるありあけの月

かへし　式子內親王

ありあけのおなじながめは君も問へみやこのほかも秋のやま里

春日社の歌合に曉月の心を　攝政太政大臣

天の戸をおしあけがたの雲間より神代の月のかげぞのこれる

右大將忠經

○かなし　一本「近し」

○こゝろある人　俗念のある人。

○月やあらぬと　月は昔のまゝではないかと。

○やま路の友と　月は山の端さして入るので、我が山へ入る道の友として。

○都おぼゆる　都の思ひ出される

○君も問へ　君も訪ひ來れ。

○天の戸　春日神社は天兒屋根命で、天照大神が天岩戸に籠られた時、それを開けるのに苦心したといふ神話によつてである。

雲をのみつらきものとてあかす夜の月や梢にをちかたの山

藤原保秀朝臣

入りやらで夜を惜しむ月のやすらひにほの〴〵明くる山の端ぞうき

月あかき夜定家朝臣に逢ひて侍りけるに歌の道には心ざし深き事はいつばかりよりのことにかと尋ね侍りければわかく侍りしとき西行に久しくあひともなひて聞き習ひ侍るよし申してそのかみ申しし事など語り侍りて歸りて朝に遣はしける　　法橋行遍

あやしくぞかへさは月の曇りにし昔がたりに夜や更けにけむ

寂超法師

ふる郷の宿もる月にこと問はむわれをば知るやむかし住みきと

遍昭寺にて月を見て　　平忠盛朝臣

住み來けむむかしの人は影たえて宿もるものはありあけの月

あひ知りて侍りける人の許にまかりたりけるにその人外に住みていたう荒れたる宿に月のさし入りて侍りければ　　前中納言匡房

八重葎しげれるやどは人もなしまばらに月のかげぞすみける

題しらず　　神祇伯顯仲

○をちかたの山　月が落ちに遠方を云ひ懸く。
○入りやらで　閨へも入らずに。
○月のやすらひ　月ゆゑの休らひ
○かへさは　歸る時は。
○更けにけむ　一本「更けぬらむ」
○ふる郷　出家の後、在俗の頃住んだ所を云ふ。
○宿もる　守る—洩る。

鷗(かもめ)ゐるふぢ江のうらのおきつ洲に夜舟いさよふ月のさやけさ

俊恵法師

なにはがた汐干にあさる葦たづも月かたぶけば聲の恨むる

大僧正慈圓

和歌所の歌合に海邊月といふことを

和歌の浦に月の出しほのさすまゝによる鳴く鶴の聲ぞかなしき

定家朝臣

藻しほくむ袖の月影おのづからよそにあかさぬ須磨のうら人

藤原秀能

明石がたいろなき人のそでを見よすゞろに月もやどるものかは

熊野に詣で侍りしついでに切目宿にて海邊眺望といふ心ををのこどもつかうまつりしに

具親

ながめよと思はでしもやかへるらむ月まつ浪のあまの釣舟

八十に多くあまりて後百首の歌めししによみて奉りし

皇太后宮大夫俊成

しめ置きていまやとおもふ秋山の蓬がもとにまつむしの鳴く

千五百番歌合に

あれわたる秋の庭こそあはれなれまして消えなむ露のゆふぐれ

○ふぢ江のうら　播磨國。
○いさよふ　行かうとして行きやらぬ。
○出しほ　「月の出る」を「出潮」に云ひ懸く。
○おのづから　自然と。
○よそに　餘所目に。
○いろなき人のそで　潮にぬれた袖に宿る月は色がないのでかう云ふ。つまり自分の月は紅涙に宿るので色があるの意味。
○ながめよと　人に眺めよと。
○しめ置きていまやと　墓地を占め置いていまやと。
○まつむし　「我が身を待つ」意味を云ひ懸く。

題しらず　西行法師

雲かゝる遠山ばたの秋されば思ひやるだにかなしきものを

五十首の歌人々によませ侍りけるに述懐の心をよみ侍りける　守覺法親王

風そよぐ篠のをざゝのかりのよを思ふねざめに露ぞこぼるゝ

寄風懷舊といふことを　左衛門督通光

淺茅生やそでに朽ちにし秋の霜わすれぬ夢を吹くあらしかな

皇太后宮大夫俊成女

葛の葉のうらみにかへる夢の世をわすれがたみの野べの秋かぜ

題しらず　祝部允仲

白露は置きにけらしな宮城野のもとあらのこ萩末たわむまで

法成寺入道前太政大臣女郎花を折りて歌よむべきよし侍りければ　紫式部

女郎花さかりのいろを見るからに露のわきける身こそしらるれ

かへし　法成寺入道前攝政太政大臣

白露はわきてもおかじ女郎花こゝろからにやいろの染むらむ

題しらず　曾根好忠

やま里に葛はひかゝる松がきのひまなくものは秋ぞかなしき

○秋されば　秋になると。

○かり　刈り―假。
○ねざめ　「根」を云ひ懸く。
○うらみ　裏見―恨み。

○もとあらのこ萩　本の粗い小萩　古今集巻十四「宮城野の本あらの小萩露を重み風を待つごと君をこそ待て」
○見るからに　見るにつれて。
○露のわきける身　露の恵みが差別をつけた不運た我が身。
○もおかじ　一本「おかまし」
○こゝろからにや　我が心の故に
○やま里に…松がきの　「隙なく」の序。

秋の暮に身の老いぬることを歎きてよみはべりける　安法法師

もゝ年の秋のあらしはすごし來ぬいづれの暮のつゆと消えなむ

頼綱朝臣津の國の羽束(はつか)といふ所に侍りける時つかはしける　前中納言匡房

秋果つるはつかの山のさびしきにあり明の月をたれと見るらむ

九月ばかりに薄を崇徳院に奉るとてよめる　大藏卿行宗

花すゝき秋の末葉になりぬればことぞともなく露ぞこぼるゝ

山里に住み侍りける頃嵐はげしきあした前中納言顯長が許に遣はしける　後徳大寺左大臣

夜半に吹くあらしにつけて思ふかな都もかくやあきはさびしき

かへし　前中納言顯長

世のなかにあきはてぬれば都にもいまはあらしの音のみぞする

清涼殿の庭に植ゑ給へりける菊を位去り給ひて後おぼしいでて　冷泉院御歌

うつろふは心のほかの秋なればいまはよそにぞきくの上の露

なが月の頃野の宮に前栽植ゑけるに　源　順

たのもしな野の宮びとの植うる花しぐるゝ月にあへずなるとも

題しらず　讀人しらず

○もゝ年の　百年の。多數の年の。

○ことぞともなく　何といふこともなく。

○あき　秋―厭き。

○あらし　嵐―(世に)在らじ。

○うつろふ　帝位を去って院御所に移ることを云ひ懸く。

○きく　聞く―菊。

○野の宮　齋宮や齋院たるとき、齋戒の爲に籠られる宮で、齋宮のは山城國の嵯峨の有栖川にあり、齋院のは同じく紫野にあつた。

○しぐるゝ月　神無月(十月)。

百首の歌奉りし時　　土御門内大臣

山河のいはゆく水もこほりしてひとりくだくる峯のまつかぜ

最勝四天王院の障子にあふくま川かきたる所　　藤原家隆朝臣

朝ごとにみぎはの氷ふみわけて君につかふるみちぞかしこき

君が代にあふくま川のうもれ木もこほりの下に春をまちけり

元輔が昔すみはべりける家の傍に清少納言すみける頃雪いみじう降りてへだての垣もたふれ侍りければ申しつかはしける　　赤染衛門

あともなく雪ふるさとは荒れにけりいづれむかしの垣根なるらむ

御なやみも重くならせたまひて後雪のあしたに　　後白河院御歌

露のいのち消えなましかばかくばかりふる白雪をながめましやは

雪によせて述懐の心をよめる　　皇太后宮大夫俊成

杣山やこずゑにおもる雪折にたへぬなげきの身をくだくらむ

佛名(ぶつみやう)のあしたけづり花を御覧じて　　朱雀院御歌

時過ぎて霜にかれにし花なれど今日はむかしのこゝちこそすれ

花山院おりゐ給ひて又の年御佛名にけづり花につけて申し侍りける　　前大納言公任

○朝ごとにの歌　詩經小雅小旻に「戰々兢々如レ臨ニ深淵ー如レ履ニ薄氷ー」

○あふくま川　陸奧國の阿武隈川に逢ふを云ひ懸く。

○うもれ木　官爵が低くて不遇な自分の身に喩ふ。

○春をまちけり　陞進を待つこと

○ふるさと　降る―古里。

○消えなましかば　消えたとしたならば。

○ながめましやは　「やは」は反語

○なげき　「き」に「木」を云ひ懸く

○佛名　昔十二月十九日から三日間、罪障消滅の爲に行はれた三世諸佛の名號を唱へる法會。

○時過ぎて　三ケ夜過ぎて。

ほどもなく覺めぬる夢の中なれどその世に似たる花の色かな　　御形宣旨

かへし

見し夢をいづれのよぞと思ふ間にをりをわすれぬ花のかなしさ　　皇太后宮大夫俊成

題しらず

老いぬともまたも逢はむとゆく年に涙の玉をたむけつるかな　　慈覺大師

おほかたに過ぐる月日をながめしは我が身に年のつもるなりけり

○ほどもなく覺めぬる夢　花山院の在位程なく讓位されたことを指す。

○いづれのよぞと　急だつたので心惑ひして…。

○おほかたに　世の習ひとて通り一ぺんに。

新古今和歌集　卷第十七

雜歌中

朱鳥五年九月紀伊國行幸の時　　河島皇子

しら浪のはま松が枝の手向草いく世までにか年の經ぬらむ

題しらず　　式部卿宇合

やましろのいは田の小野の柞原(はゝそ)見つゝや君が山路こゆらむ

在原業平朝臣

蘆の屋の灘の鹽やきいとまなみつげのを櫛もささず來にけり

讀人しらず

晴るゝ夜の星か河邊の螢かもわが住むかたの蜑のたく火か

貫之

しがの蜑の鹽やくけむり風をいたみ立ちはのぼらで山にたなびく

忠岑

難波女(なにはめ)の衣ほすとて刈りてたく葦火のけぶり立たぬ日ぞなき

ながらの橋をよめる

○朱鳥　持統天皇の年號。
○しら浪のの歌　萬葉集卷一に。
○いとまなみ　暇がないので。
○晴るゝ夜のの歌　伊勢物語に。
○しがの蜑　筑前國の志賀の浦の海人。
○風をいたみ　風が烈しいので。

年ふれば朽ちこそまされ橋柱むかしながらの名だにかはらで　惠慶法師

はるの日のながらの濱に船とめていづれか橋と問へどこたへず　後德大寺左大臣

朽ちにけるながらの橋を來て見ればあしの枯葉に秋風ぞ吹く　權中納言定頼

題しらず

おきつかぜ夜半に吹くらし難波潟あかつきかけて波ぞよすなる　藤原孝善

春須磨の方へまかりてよめる

須磨の浦のなぎたるあさは目もはるに霞にまがふあまの釣舟　壬生忠見

天暦の御時屛風の歌

秋かぜの關吹き越ゆるたびごとに聲うち添ふる須磨の浦浪　前大僧正慈圓

五十首の歌よみて奉りしに

須磨の關夢をとほさぬ浪のおとをおもひもよらで宿をかりけり　攝政太政大臣

和歌所の歌合に關路秋風といふことを

人住まぬ不破のせき屋の板びさし荒れにしのちはたゞ秋の風　源俊頼朝臣

明石の浦をよめる

○むかしながら　「昔ながら」に「長柄橋」を云ひ懸く。昔ながらといふ橋の名だけは變らないで。

○はるの日の　「長」いを云ひ起す序。

○目もはるに　目も遙に—芽も張る(春)に。

○夢をとほさぬ　夢を見果てさせない。

○不破のせき屋　美濃國。

あまをぶね苦ふきかへす浦風にひとりあかしの月をこそ見れ

眺望の心を　　寂蓮法師

和歌のうらを松の葉ごしにながむれば木末によする蜑の釣ぶね

千五百番歌合に　　正三位季能

みづの江のよしのの宮は神さびてよはひたけたる浦の松風

海邊の心を　　藤原秀能

いまさらに住みうしとてもいかゞせむなだの鹽屋のゆふ暮の空

むすめの齋宮に具して下り侍りて大淀の浦にみそぎし侍るとて　　女御徽子女王

おほよどの浦に立つなみかへらずば松のかはらぬ色を見ましや

大貳三位里にいで侍りけるをきこしめして　　後冷泉院御歌

まつ人は心ゆくともすみよしの里にとのみは思はざらなむ

御かへし　　大貳三位

住吉の松はまつともおもほえで君が千とせのかげぞこひしき

教長卿名所の歌よませ侍りけるに　　祝部成仲

うちよする浪のこゑにてしるきかな吹上の濱の秋のはつ風

百首の歌奉りしとき海邊の歌　　越前

○ひとりあかし　「ひとり明し」に「明石浦」を云ひ懸く。
○みづの江　丹後國與謝郡か。
○なだの鹽屋　攝津國。
○おほよどの浦　伊勢國。
○かへらずば　はじめに齋宮で下つたが再び娘について歸らないならばの意味。
○まつ人　待つ−松。
○里にとのみは思はざらなむ　里にとばかりは思ひ給ふな。
○まつともおもほえで　里に待つ人は待つとも思はれずして。
○しるきかな　顯著なことだ。
○吹上の濱　紀伊國。

おきつ風よさむになれや田子の浦の蜑の藻鹽火たきまさるらむ

海邊霞といへる心をよみ侍りし　家隆朝臣

見わたせば霞のうちもかすみけりけぶりたなびくしほ竈の浦

大神宮に奉りける百首の歌の中に若菜をよめる　皇太后宮大夫俊成

けふとてや磯菜つむらむ伊勢島や一志(いちし)の浦の蜑のをとめご

伊勢にまかりける時よめる　西行法師

鈴鹿山浮世をよそにふり捨てていかになりゆく我が身なるらむ

題しらず　前大僧正慈圓

世のなかを心たかくもいとふかな富士のけぶりを身のおもひにて

あづまの方へ修業しはべりけるにふじの山をよめる　西行法師

風になびくふじの煙の空に消えて行くへもしらぬ我が思ひかな

五月のつごもりにふじの山の雪白くふれるを見てよみ侍りける　業平朝臣

ときしらぬ山は富士のねいつとてか鹿(か)の子(こ)斑(まだら)に雪のふるらむ

題しらず　在原元方

春秋もしらぬときはのやま里は住む人さへや面がはりせぬ

五十首の歌奉りし時　前大僧正慈圓

○よさむになれや　夜寒になればか。

○けふとては　今日は子の日と云ってか。

○鈴鹿山　伊勢國。
○ふり　振り(鈴の縁語)。
○なりゆく　「鳴り」を云ひかく。

○おもひ　「ひ」に「火」を云ひ懸く

○風になびく…消えて　下句の序

○ときしらぬ　いつといふ時もなく常に。この歌伊勢物語に。

○ときはのやま　山城國葛野郡。

花ならでたゞ柴の戸をさしておもふ心のおくもみ吉野の山

題しらず　西行法師

吉野山やがて出でじとおもふ身を花散りなばと人やまつらむ

藤原家衡朝臣

いとひてもなほいとはしき世なりけり吉野のおくの秋の夕ぐれ

千五百番歌合に　右衛門督通具

ひと筋になれなばさてもすぎの庵に夜な／＼かはる風の音かな

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに閑居の心をよめる　有家朝臣

誰かはと思ひ絶えてもまつにのみ音づれてゆく風は恨めし

鳥羽にて歌合し侍りしに山家嵐といふことを　宜秋門院丹後

山ざとは世の憂きよりも住みわびぬことの外なるみねの嵐に

百首の歌奉りし時　家隆朝臣

瀧のおと松のあらしも馴れぬればうち寝るほどの夢は見せけり

題しらず　寂然法師

ことしげき世をのがれにしみ山邊にあらしの風も心して吹け

少將隆光横川にまかりて頭おろし侍りけるに法服つかはすとて　權大納言師氏

○花ならで　花の爲ではなくて、世を厭ふ爲に。
○花散りなばと　花が散つたなら出るだらうと。
○ひと筋になれなば　一樣に聞き馴れたならば。
○すぎ　過ぎ—杉。
○まつ　待つ—松。
○ことの外なる　意外なる。

おくやまの苔の衣にくらべ見よいづれか露の置きまさるとも

かへし　　如覺

しら露のあしたゆふべにおく山のこけのころもは風もさはらず

能宣朝臣大原野に詣で侍りけるに山里のいとあやしきに住むべくもあらぬさまなる人の侍りければいづこわたりより住むぞなど問ひ侍りければ　　讀人しらず

世の中をそむきにとては來しかども猶うきことはおほ原の里

かへし　　能宣朝臣

身をばかつをしほの山と思ひつゝいかに定めて人の入りけむ

深き山に住み侍りけるひじりの許に尋ねまかりけるに庵の戸を閉ぢて人も侍らざりければ歸るとてかきつけける　　惠慶法師

苔の庵さして來つれど君まさでかへるみ山のみちぞ露けき

ひじり後に見てかへし

荒れはてて風もさはらぬ苔の庵に我はなくとも露はもりけむ

題しらず　　西行法師

山ふかくさこそ心はかよふとも住までもあはれは知らむものかは

○苔の衣　僧の修行服。
○おく　置く―奥。
○おほ原の里　憂きことは多いを云ひ懸く。
○をしほの山　小鹽山に惜しいを云ひ懸く。
○定めて　心をさだめて。
○苔の庵　一本「草の庵」次の歌も同樣。
○さして　戸閉して―心ざして。
○みちぞ露けき　一本「道の露けさ」
○もり　漏り―守り。
○住まで　住まないで。

○すまぬ　人の住まぬ。
○月も　月でさへも。

○爪木　薪。

○おどろがした　荊棘の下。「世の亂れた中にも」の意味を云ひ懸く。この歌增鏡に。

○いまはとて　今は隱者にならうとて。
○千世をば君と　千世をば君に讓れとて。
○思ふか物を　ものを思ふか。

やまかげにすまぬ心はいかなれや惜しまれて入る月もあるよに
寂蓮法師

山家送年といへる心をよみ侍りける

立ち出でて爪木をり來し片岡のふかき山路となりにけるかな
太上天皇

住吉の歌合に山を

おく山のおどろがしたもふみわけて道ある世ぞと人に知らせむ
二條院讃岐

百首の歌奉りし時

ながらへてなほ君が代を松山のまつとせし間に年ぞ經にける
皇太后宮大夫俊成

山家松といふことを

いまはとてつま木こるべき宿の松千世をば君となほ祈るかな
有家朝臣

春日社の歌合に松風といへることを

われながら思ふか物をとばかりに袖にしぐるゝ庭の松かぜ
道命法師

山寺に侍りける頃

世をそむくところとか聞くおく山はもの思ひにぞ入るべかりける
和泉式部

少將井の尼大原より出でたりと聞きてつかはしける

世をそむく方はいづくもありぬべし大原山は住みよかりきや
少將井尼

かへし

○しをりせで　再び出る爲の道しるべをせずに。
○かざしをる　三輪の枕詞。
○しげ山　木の繁き山。
○杉立てるかど　古今集卷十八に「我が庵は三輪の山もと戀しくはとぶらひ來ませ杉立てる門」
○をぐらの山　「小暗き」を云ひ懸く。
○駒引のひきわけの使　駒牽の日に天皇が南殿で馬を見られてから王卿以下次第に賜はつて、殘つたのを引分使として次將を以て院、東院など然るべき所々へ進らすこといふ。
○嵯峨のやま　上皇の嵯峨に居られたのは嵯峨、宇多二天皇なので、天長延喜の先例を以て引分の使を進らすとの趣。
○もち月の駒　信濃國望月牧から出た駒。
○さほ川のながれ　藤原氏の一流を云ふ。

おもふことおほ原山のすみ竈はいとゞなげきの數をこそ積め

題しらず　　西行法師

たれ住みてあはれ知るらむ山里の雨ふりすさぶ夕ぐれの空

しをりせでなほ山深くわけ入らむうきこと聞かぬところありやと

殷富門院大輔

かざしをる三輪のしげ山かきわけてあはれとぞ思ふ杉立てるかど

法輪寺に住み侍りけるに人の詣できて暮れぬとていそぎ侍りければ　　道命法師

いつとなきをぐらの山の陰をみて暮れぬと人の急ぐなるかな

後白河院栖霞寺におはしましけるに駒引のひきわけの使にて參りけるに　　定家朝臣

嵯峨のやま千世のふるみち跡とめてまた露わくるもち月の駒

歎くこと侍りける頃　　智恩院入道前關白太政大臣

さほ川のながれひさしき身なれども浮世に逢ひて沈みぬるかな

冬の頃大將はなれて歎くこと侍りける明くる年右大臣になりて奏し侍りける　　東三條入道關白太政大臣

御かへし　圓融院御歌

かかるせもありけるものを宇治川のたえぬばかりも歎きけるかな

題しらず　人麿

昔よりたえせぬ川のするゑなれば淀むばかりをなに歎くらむ

もののふの八十うぢ川の網代木にいさよふ波のゆくへ知らずも

布引の瀧見にまかりて　中納言行平

我が世をばけふかあすかと待つかひの淚の瀧といづれ高けむ

京極前太政大臣布引の瀧見にまかりたりけるに　二條關白内大臣

水上のそらに見ゆるはしら雲のたつにまがへる布引のたき

最勝四天王院の障子に布引の瀧かきたる所　藤原有家朝臣

ひさかたの天のをとめがなつごろも雲ゐにさらす布引のたき

天の河原を過ぐとて　攝政太政大臣

むかし聞くあまの河原をたづね來てあとなき水をながむばかりぞ

題しらず　藤原實方朝臣

天の川かよふうき木にこと問はむ紅葉の橋は散るや散らずや

堀河院の御時百首の歌奉りけるに　前中納言匡房

○かかるせ　斯やうた瀨（右大臣になる折）。
○たえぬばかりも　川の絕える程も—身の絕える程も。
○もののふの　八十氏河の枕詞。この歌萬葉集卷三に。
○八十うぢ川　山城國の宇治川。
○布引の瀧　攝津國。
○ひさかたの　「天」の枕詞。
○むかし聞くあまの河原をたづね來て　伊勢物語に惟喬親王が交野に狩して天の川の所に至つて、酒宴されたといふことが見える。
○天の川かよふうき木　張騫が漢の武帝の使で、槎に乘つて天漢の源を究め孟津に至つて織女に逢つて歸つたといふ。
○紅葉の橋　古今集卷四に「天の川紅葉を橋に渡せばやたなばたつめの秋をしも待つ」

眞木の板も苔むすばかりなりにけり幾世へぬらむ瀬田の長橋

天暦の御時屏風に國々の所の名を書かせさせ侍りけるに飛鳥川　　中務

さだめなき名には立てれど飛鳥川早くわたりし瀬にこそありけれ

題しらず　　前大僧正慈圓

山ざとにひとりながめて思ふかな世にすむ人の心ながさを

西行法師

やま里にうき世いとはむ友もがなくやしく過ぎしむかし語らむ

山里は人來させじと思はねど問はるゝことぞ疎くなりゆく

前大僧正慈圓

草の庵をいとひてもまたいかゞせむ露のいのちのかかるかぎりは

都を出でて久しく修業し侍りけるにとふべき人のとはず侍りければ熊野より遣はしける　　大僧正行尊

わくらばになどかは人のとはざらむ音無川にすむ身なりとも

あひ知れりける人の熊野に籠り侍りけるにつかはしける　　安法法師

世をそむく山のみなみの松風に苔のころもや夜さむなるらむ

西行法師百首の歌すゝめてよませ侍りけるに　　藤原家隆朝臣

○へぬらむ　一本「かへぬる」

○さだめなき名の歌　古今集卷十八に「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる」

○心ながさ　一本「心づよさ」

○友もがな　友もあればいいな。

○人こさせじと　人に訪ひ來らしめまいと。

○わくらばに　たまには。

○音無川　音づれない意味を云ひ懸く。

○まつ　待つ—松。

○しきみつむ　樒を摘む。

○忘れじの人だに　忘れまい必ず訪はうと云つた人さへ。
○ゆきに　雪の降る時節に。

○けぶりたえて　俊惠の死んだことを云ふ。
○なげき　「き」に「木」を云ひ懸く
○山寺　一本「山里」

○西のむかへ　西方淨土からの彌陀の來迎。

いつかわれこけの袂につゆ置きてしらぬ山路の月を見るべき

百首の歌奉りしに山家の心を　　式子內親王

いまはわれまつのはしらの杉の庵に閉づべきものを苔ふかき袖

小侍從

しきみつむ山路の露に濡れにけりあかつきおきの墨染のそで

攝政太政大臣

忘れじの人だにとはぬ山路かな櫻はゆきに降りかはれども

五十首の歌奉りしに　　藤原雅經

影やどす露のみしげくなり果てて草にやつるゝふるさとの月

俊惠法師身まかりて後年頃つかはしけるたき木など弟子どもの許につかはすとて　　加茂重保

けぶりたえてやく人もなき炭竈の跡のなげきをたれかこるらむ

老いて後津の國なる山寺にまかり籠れりけるに寂蓮尋ねまかりて侍りけるに庵の樣すみあらしてあはれに見え侍りけるを歸りて後とぶらひ侍りければ　　西日法師

八十(やそぢ)あまり西のむかへを待ちかねて住みあらしたる柴の庵ぞ

山家の歌あまたよみ侍りけるに　前大僧正慈圓

山里にとひくる人のことぐさはこの住居こそうらやましけれ

後白河院かくれさせ給ひて後百首の歌に　式子内親王

斧の柄の朽ちし昔は遠けれどありしにもあらぬ世をもふるかな

述懐百首の歌よみ侍りけるに　皇太后宮大夫俊成

いかにせむ賤が園生のおくの竹かき籠るともよの中ぞかし

老の後昔を思ひ出で侍りて　祝部成仲

秋來ればむかしをのみぞしのぶ草葉ずゑのつゆに袖ぬらしつゝ

題しらず　前大僧正慈圓

をかのべの里のあるじを尋ぬれば人はこたへず山おろしの風

西行法師

ふるはたの岨（そば）の立木（たつき）にゐる鳩の友よぶこゑのすごき夕ぐれ

山がつのかた岡かけてしむる野のさかひに立てるたまのを柳

しげき野をいく一村にわけなして更にむかしをしのびかへさむ

むかしみし庭の小松に年ふりてあらしの音をこずゑにぞ聞く

三井寺やけて後すみ侍りける坊を思ひやりてよめる　大僧正行尊

○ことぐさ　云ひぐさ。
○斧の柄の朽ちし昔　支那の王質が仙人の碁うつのを見てゐて斧の柄の朽ちたのに驚いて宿に歸つたら、世がすつかり變つてゐたといふ傳説。
○ありしにもあらぬ世　後白河院の御在世中とはすつかりかはつた世。
○世をも　一本「世にも」
○おくの竹　竹の奥に。
○ふるはた　「古畑」か。
○山がつの　一本「山かげの」
○かた岡かけて　片岡にかけて。
○しのびかへさむ　「田を返す」意味を云ひ懸く。
○小松に年ふりて　小松に年が積つて。

住みなれしわが故郷はこのごろや淺茅が原にうづら鳴くらむ

百首の歌よみ侍りけるに　攝政太政大臣

ふるさとはあさぢが末になり果てて月にのこれる人のおもかげ

西行法師

これや見しむかし住みけむ跡ならむよもぎが露に月のかゝれる

人の許にまかりてこれかれ松の陰におりゐて遊びけるに　貫之

陰にとてたちかくるれば唐ごろも濡れぬ雨ふる松のこゑかな

西院(さいゐん)の邊に早うあひ知れりける人を尋ね侍りけるに菫つみ侍りける女しらぬよし申しければよみ侍りける　能因法師

石(いそ)の上(かみ)ふりにし人をたづぬれば荒れたるやどにすみれ摘むなり

ぬしなき宿を　惠慶法師

いにしへを思ひやりてぞ戀ひわたる荒れたるやどの苔の岩橋

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに閑居の心　藤原定家朝臣

わくらばに問はれし人もむかしにてそれより庭のあとは絶えにき

物へまゐりける道に山人あまた逢へりけるを見て　赤染衛門

なげきこる身は山ながら過ぐせかしうき世の中になに歸るらむ

○あさぢがすゑ　一本「淺茅が原」

○見しむかし　見た昔に。

○濡れぬ雨　松風の聲を雨の音に見立ててゐる。

○石の上　「ふり」の枕詞。

○わくらばに　たまさかに。

○問はれし人も　人に訪はれたことも。

○それより　それ以來。

○あと　人の跡。

○なげきこる　「木を伐(コ)る」意味を云ひ懸く。

○山ながら　山にゐながら。

○なに　何しに。

○秋されば…立田山　「立ちても」の序。

○朝倉　筑前國朝倉郡とも土佐國土佐郡朝倉村とも云ふ。この歌は神樂歌の朝倉の歌詞。十訓抄にこの話が見える。

○木の丸殿　丸木の黒木で作つた御殿。

題しらず　　人麿

秋されば狩人こゆる立田山たちても居てもものをしぞ思ふ

天智天皇御歌

朝倉や木の丸殿に我が居れば名のりをしつゝゆくは誰が子ぞ

新古今和歌集　巻第十八

雜歌下

山　　　　菅贈太政大臣

あしびきのかなたこなたに道はあれど都へいざと言ふ人のなき

日

天の原あかねさし出づる光にはいづれの沼かさしのこるべき

月

月毎にながると思ひします鏡にしの浦にもとまらざりけり

雲

やまわかれ飛びゆく雲のかへり來るかげ見るときはなほ賴まれぬ

霧

霧立ちて照る日の本は見えずとも身は惑はれじよるべありやと

雪

花とちり玉と見えつゝあざむけば雪ふるさとぞ夢にみえける

○あしびき　山の枕詞から山のこと。以下十二首は菅原道眞が筑紫に遷された時に詠んだ歌と云ふ。
○ひこの　一本「ひこぞ」
○あかねさし　日の枕詞から日の出ることを云ふ。
○惑はれじ　惑はされまい。
○よるべ　何れ無實が明らかになつて歸られるよるべ。

○紫おふる野邊　ゆかりある者を云ふ。
○刈萱の關　筑前國。
○行きあひ　織女星との行き逢ひ
○かさなむ　貸して貰ひたい。
○ながれ木　我が流人の身の上を思ひよせてゐる。
○世をつくす　一生を費す。

松

おいぬとて松はみどりぞまさりける我が黑かみの雪のさむさに

野

つくしにも紫おふる野邊はあれどなき名かなしぶ人ぞきこえぬ

道

刈萱の關もりにのみ見ぇつるは人もゆるさぬ道べなりけり

海

うみならずたゝへる水の底までも清きこゝろは月ぞてらさむ

鵲

ひこ星の行きあひを待つかさゝぎの渡せる橋をわれにかさなむ

浪

ながれ木と立つしら波とやく鹽といづれか辛きわたつみの底

題しらず　讀人しらず

さゞなみや比良山風のうみ吹けば釣するあまの袖かへる見ゆ

千五百番歌合に　攝政太政大臣

白波のよする渚に世をつくす海士の子なればやども定めず

舟のうち波の下にぞ老いにける蜑のしわざもいとまなの世や

題しらず　前中納言匡房

さすらふる身は定めたるかたもなし浮きたる舟の浪にまかせて

増賀上人

いかにせむ身をうき舟の荷を重みつひの泊(とまり)やいづくなるらむ

人麿

蘆鴨の騷ぐ入江の水の江の世にすみがたき我が身なりけり

大中臣能宣朝臣

あしがもの羽風になびく浮草のさだめなき世をたれかたのまむ

なぎさの松といふことをよみ侍りける　源順

老いにけるなぎさの松の深みどりしづめる影をよそにやは見る

山水をむすびてよみ侍りける　能因法師

あしびきの山下水にかげ見れば眉しろたへにわれ老いにけり

尼になりぬと聞きける人に裝束つかはすとて　法成寺入道前攝政太政大臣

なれ見てし花の袂をうちかへし法のころもをたちぞかへつる

后に立ち給ひけるとき冷泉院の后宮の御ひたひを奉り給ひけるを出家の

○いとまなの　暇のない。

○うき舟　憂き—浮き。

○水の江　丹後國與謝郡。
○すみ　澄み—住み。

○しづめる影　老松の底深く映った影に、我が老の身の沈淪してゐる樣を思ひよそへてゐる。
○よそにやは見る　よそ事に見ようかい。

○たちぞかへつる　裁ち替へた。

とき返し奉り給ふとて　　東三條院

そのかみの玉のかざしをうちかへし今は衣のうらをたのまむ

かへし　　冷泉院太皇太后宮

つきもせぬ光の間にもまぎれなで老いて歸れるかみのづれなさ

上東門院出家の後こがねの裝束したるぢんの數珠銀の筥に入れて梅の枝
につけて奉られける　　枇杷皇太后宮

かはるらむ衣のいろをおもひやる涙やうらの玉にまがはむ

かへし　　上東門院

まがふらむ衣の玉にみだれつゝなほまだ覺めぬこゝちこそすれ

題しらず　　和泉式部

潮のまによもの浦々たづぬれどいまはわが身のいふかひもなし

屏風の繪に鹽竈の浦をかきて侍りけるを　　一條院皇后宮

いにしへの蜑やけぶりとなりぬらむ人目もみえぬしほ竈の浦

少將高光横川に上りて頭おろし侍りにけるを聞かせ給ひてつかはしける　　天暦御歌

都より雲の八重たつおくやまの横川（よかは）の水はすみよかるらむ

○玉のかざし　裝束の時に髮に飾るもの。ひたひとも云ふ。
○衣のうら　法華經に「衣裏寶珠」と見え、佛道のこと。
○つきもせぬ光の間にも　威光の盡きもしない間でも。
○こがねの裝束したるぢんの數珠　黃金で飾つた沈香の數珠。

○玉に　一本「たまと」

○潮のまに　潮の干潟になつた間に。
○かひ　貝—效。

○すみ　澄み—住み。

御かへし　如覺

もゝしきのうちのみ常にこひしくて雲の八重たつ山はすみうし

世をそむきて小野といふ所に住み侍りける頃業平朝臣雪のいと高う降りつみたるをかきわけてまうで來て夢かとぞ思ふおもひきやとよみ侍りけるに　惟喬親王

ゆめかともなにか思はむ浮世をばそむかざりけむ程ぞくやしき

都の外に住み侍りける頃久しう音づれざりける人に遣はしける　女御徽子女王

雲ゐとぶ鴈の音近きすまひにもなほ玉章（たまづさ）はかけずやありけむ

亭子院おりゐ給はむとしける秋よみける　伊勢

しらつゆは置きてかはれど百敷のうつろふ秋はものぞかなしき

殿上はなれ侍りてよみ侍りける　藤原清正

天津風ふけひの浦にゐるたづのなどか雲居にかへらざるべき

二條院菩提樹院におはしまして後の春昔を思ひ出でて大納言經信參りて侍りける又の日女房の申しつかはしける　讀人しらず

いにしへのなれし雲ゐをしのぶとや霞をわけて君たづねけむ

最勝四天王院の障子に大淀かきたる所　藤原定家朝臣

○夢かとぞ思ふおもひきや　古今集卷十八に「忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪踏みわけて君を見むとは」

○亭子院　宇多天皇。

○百敷のうつろふ秋　天子の代られる秋。

○ふけひの浦　和泉國。

○雲居　皇居の殿上のこと。

大淀のうらに刈りほすみるめだに霞にたえてかへる鴈がね

最慶法師千載集書きて奉りける包紙に墨をすり筆を染めつゝ年ふれどかき顯はせることのはぞなきと書きつけて侍りける御かへし　　後白河院御歌

濱千鳥ふみおくあとのつもりなばかひある浦に逢はざらめやは

上東門院高陽院におはしましけるに行幸侍りてせきいれたる瀧を御らんじて　　後朱雀院御歌

瀧つ瀬に人の心をみることはむかしに今もかはらざりけり

權中納言通俊後拾遺えらび侍りける頃まづ片はしもゆかしくなど申して侍りければ申し合はせてこそとてまだ清書もせぬ本をつかはし侍りけるを見てかへしつかはすとて　　周防内侍

あさからぬ心ぞみゆる音羽川せき入れし水のながれならねど

歌奉れと仰せられければ忠岑がなど書き集めて奉りける奥にかきつけける　　壬生忠見

言の葉のなかをなく〳〵たづぬれば昔の人に逢ひ見つるかな

遊女の心をよみ侍りける　　藤原爲忠朝臣

ひとり寢のこよひもあけぬ誰としも頼まばこそは待つも憂からめ

○大淀のうら　伊勢國。
○ふみおく　踏み置く—文置く。
○かひ　貝—效。
○瀧つ瀬にの歌　榮華物語待星の卷では出羽辨の作。拾遺集卷八に「音羽川堰き入れて落す瀧つ瀬に人の心の見えもするかな」
○むかしに　一本「むかしも」
○忠岑　忠見の父。
○誰としも頼まは云々　誰とも來るのを頼みにしてゐるならば待つのも憂くあらうが。

大江擧周はじめて殿上許されて草深き庭におりて拜しけるを見侍りて　赤染衞門

草わけて立ちゐる袖の嬉しさに堪へずなみだの露ぞこぼるゝ

秋の頃わづらひけるおこたりて度々とぶらひける人につかはしける　伊勢大輔

うれしさは忘れやはするしのぶ草しのぶるものを秋のゆふぐれ

かへし　大納言經信

秋風の音せざりせばしらつゆの軒のしのぶにかゝらましやは

ある所に通ひ侍りけるを朝光大將見かはして夜一夜物語してかへりて又の日　右大將濟時

しのぶ草いかなる露かおきつらむ今朝は根もみなあらはれにけり

かへし　左大將朝光

淺茅生をたづねざりせば忍草おもひ置きけむつゆを見ましや

わづらひける人のかく申し侍りける　讀人しらず

ながらへむとしも思はぬ露の身のさすがに消えむことをこそ思へ

かへし　小馬命婦

○なみだの露　嬉し涙の露。

○忘れやはする　忘れようかい。
○しのぶ草　「忍ぶる」の序。

○音せざりせば　音づれなかつたならば。
○しのぶにかゝらましやは　君に忍ばれようかいの意味が云ひ懸けられてゐる。
○右大將　一本「左大將」

つゆの身の消えばわれこそ先立ためおくれむものか森の下草

題しらず　和泉式部

いのちだにあらば見つべき身のはてを偲ばむ人のなきぞ悲しき

例ならぬこと侍りけるに知れりける聖のとぶらひにまうで來て侍りければ　大僧正行尊

さだめなき昔がたりを數ふればわが身も數に入りぬべきかな

五十首の歌奉りし時　前大僧正慈圓

世の中のはれゆく空にふる霜のうき身ばかりぞ置きどころなき

例ならぬこと侍りけるに無動寺にてよみはべりける

賴みこし我が古寺の苔の下にいつしか朽ちむ名こそをしけれ

題しらず　大僧正行尊

くり返し我が身のとがを求むれば君もなき世にめぐるなりけり

清原元輔

憂しといひて世を一向(ひたすら)に背(そむ)かねばもの思ひ知らぬ身とやなりなむ

讀人しらず

そむけどもあめの下をし離れねばいづくにもふる涙なりけり

○われこそ先立ため　私こそ君よりは先立つたらう。

○いのちだに　一本「命さへ」命さへあるならば見て貰へる。我が命も死後には思つてくれる人のないのは悲しい。

○數に　昔語りの數の中に。

○世を一向に背かねば　遁世しないので。

○もの思ひ知らぬ身　世の憂きことを思ひ知らぬ身。

○あめ　天―雨。

○ふる涙　降る憂き涙。

○延喜　醍醐天皇の年號。
○紅の衣　女藏人は下﨟なので、紅の衣を著ることが出來ないので撿非違使が質さうとしたのだ。
○ひの色　日の色—緋の色。

○かけて　心にかけて。

○思はねど　心には遁世したいと思はないのに。
○おなじ數に　それと同列の人の中に自分も數へられるだらう。
○もりがほに　守り顔に。
○さてさはいかにつひの思ひを　さうしてゐては結局の道心は一體どうしよう。
○うけがたき人　人間の生を享け難いこと。
○また沈むべき　又惡業をして再び惡道に沈むべき。

延喜の御時女藏人内匠白馬節會見侍りけるに車より紅の衣を出しけるを
撿非違使のたゞさむとしければいひつかはしける　　女藏人内匠

大空に照るひの色をいさめても天のしたにはたれか住むべき

かくいへりければたゞさずになりにけり

例ならで太秦に籠り侍りけるに心ぼそく覺えければ　　周防内侍

かくしつゝゆふべの雲となりもせばあはれかけても誰かしのばむ

題しらず　　前大僧正慈圓

思はねど世をそむかむといふ人のおなじ數にやわれもなりなむ

西行法師

數ならぬ身をも心のもりがほにうかれてはまた歸り來にけり

おろかなる心のひくにまかせてもさてさはいかにつひの思ひを

とし月をいかで我が身におくりけむ昨日の人も今日はなきよに

うけがたき人の姿にうかび出でてこりずや誰もまた沈むべき

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに　　寂蓮法師

背きてもなほ憂きものは世なりけり身を離れたるこゝろならねば

述懷の心をよめる

身のうさを思ひしらずばいかゞせむ厭ひながらもなほ過すかな　前大僧正慈圓

なにごとを思ふ人ぞと人問はば答へぬさきに袖ぞぬるべき

いたづらに過ぎにしことや歎かれむうけがたき身の夕ぐれの空

うち絶えて世にふる身にはあらねどもあらぬ筋にも罪ぞかなしき

和歌所にて述懐の心を

山里にちぎりし庵やあれぬらむ待たれむとだに思はざりしを　右衛門督通具

そでにおく露をばつゆと忍べどもなれ行く月やいろを知るらむ　定家朝臣

君が代に逢はずばなにを玉の緒の長くとまでは惜しまれじ身を　家隆朝臣

おほかたの秋の寐覺のながき夜も君をぞいのる身を思ふとて

和歌の浦や沖つ潮合に浮び出づるあはれ我が身のよるべ知らせよ

その山のちぎらぬ月も秋かぜもすゝむるそでに露こぼれつゝ　雅經

○身のうさを思ひしらずはいかゞせむ「なれども」を補ふ。

○うち絶えて　一本「打堪へて」

○あらぬ筋にも　自然と犯しあることによつて惡道の罪報を得るかと。

○なれ行く月やいろを知るらむ　馴れて行く月は露と涙との色を知つてか、それに映る色が違つてゐるの意味。

○玉の緒の　命の。

○君　天皇。

○身を　我が身の長く御惠み受けること。

○和歌の浦　歌道のこと。

○よるべ　世に浮び出る便り。

○すゝむる　山へ籠れと勸める。

○身をば賴まず　自身の出世などは望みもされないので賴まず。
○こゝろからなれぬる　月が心から淚の袖に馴れた。
○浮き沈み　來世での浮き沈みは
○來む世　來世。
○おしかへし　繰り返し。
○憂きにかへたるいのち　憂い代りに長い命。
○猶ぞ　一本「猶も」
○さりともと　それにしても憂からぬ時もあらうかと。
○故鄉の夢　過去の榮華の夢。
○かねつゝ　一本「かねつも」

君が代に逢へるばかりの道はあれど身をば賴まずゆくすゑの空

皇太后宮大夫俊成女

をしむとも淚に月もこゝろからなれぬる袖に秋をうらみて

千五百番歌合に　　攝政太政大臣

浮き沈み來む世はさてもいかにぞと心に問ひてこたへかねぬる

題しらず

我ながら心のはてを知らぬかな捨てられぬ世のまた厭はしき

おしかへしものを思ふは苦しきに知らず顏にて世をや過ぎまし

五十首の歌よみ侍りけるに述懷の心を　　守覺法親王

長らへて世に住むかひはなけれども憂きにかへたる命なりけり

權中納言兼宗

世を捨つる心は猶ぞなかりける憂きをうしとは思ひしれども

述懷の心をよみ侍りける　　左近中將公衡

すてやらぬ我が身ぞつらきさりともと思ふこゝろに道をまかせて

題しらず　　讀人しらず

憂きながらあればある世に故鄉の夢をうつゝにさましかねつゝ

○やすき世　心安く暮せる世。
○心に　我が心がらで。

○綱手繩　舟を引く手綱の繩。

○老いらく　老いること。
○はやせ川　「月日が速い」に早瀬川を云ひ懸く。

○やま川の水　「身は斯く沈んだまゝでも止まうが」の意味を云ひ懸く。
○涙ぞ　一本「涙も」
○もろ葛　「諸鬘」に「脆い」を云ひ懸く。
○はなれけむ　一本「はなるらむ」

源　師光

憂きながらなほ惜しまるゝ命かな後の世とてもたのみなければ

賀茂季保

さりともとたのむ心も行末も思へば知らぬ世にまかすらむ

荒木田長延

つく〴〵と思へばやすき世の中を心となげく我が身なりけり

入道前關白太政大臣の家の百首の歌よませ侍りけるに　刑部卿頼輔

河舟ののぼりわづらふ綱手繩くるしくてのみ世をわたるかな

題しらず　大僧都覺辨

老いらくの月日はいとゞはやせ川かへらぬ浪にぬるゝそでかな

よみて侍りける百首の歌を源家長が許に見せにつかはしける奥に書きつけて侍りける　藤原行能

かきながす言の葉をだに沈むなよ身こそかくてもやま川の水

身の望みかなひ侍らで社のまじらひもせで籠りゐて侍りけるに葵を見てよめる　鴨長明

見ればまづいとゞ涙ぞもろ葛(かつら)いかにちぎりてかけはなれけむ

題しらず　　源季景

おなじくはあれないにしへ思出のなければとても忍ばずもなし

西行法師

何處(いづく)にも住まれずば唯すまであらむ柴の庵のしばしなる世に

月のゆく山に心をおくり入れてやみなるあとの身をいかにせむ

五十首の歌の中に　　前大僧正慈圓

思ふことなど問ふ人もなかるらむ仰げば空に月ぞさやけき

いかにして今まで世にはあり明のつきせぬものをいとふ心は

西行法師山里より罷り出でて昔出家し侍りしその月日にあたりて侍るなど申したりける返事に　　八條院高倉

うき世出でし月日の影のめぐり來てかはらぬ道をまた照らすらむ

大神宮の歌合に　　太上天皇

おほぞらに契るおもひの年もへぬ月日もうけよゆくすゑの空

前大僧都全眞西國の方に侍りけるに遣はしける　　承仁親王

ひと知れずそなたをしのぶ心をばかたぶく月にたぐへてぞやる

前大僧正慈圓ふみには思ふ程の事も申し盡しがたきよし申し遣はして

○あれな　思出があれよ。
○なければとて　思出がないからとて。
○すまであらむ　住まないで居らう。
○柴の庵の　柴の庵のやうに。
○山に　西方の山に。
○月ぞさやけき　月が問ひ顔にさやけく照つてゐる。
○あり明の　「世に有つたらう」の意味を云ひ懸く。
○つきせぬ　「月」に「盡きせぬ」を云ひ懸く。
○うけよ　我が思ひを納受せよ。
○しのぶ　一本「おもふ」
○たぐへて　副へて。

侍りける返事に　前右大將賴朝

みちのくのいはでしのぶはえぞ知らぬかき盡してよつぼの碑(いしぶみ)

世の中常なき頃　大江嘉言

今日までは人を歎きて暮れにけりいつ身のうへにならむとすらむ

題しらず　清愼公

道芝の露にあらそふ我が身かな何れかまづは消えむとすらむ

皇嘉門院

何とかや壁に生ふなる草の名よそれにもたぐふ我が身なりけり

權中納言資實

こしかたをさながら夢になしつれば覺むる現(うつゝ)のなきぞかなしき

松の木の燒けたるを見て　性空上人

千年ふる松だにくゆる世の中に今日とも知らで送るわれかな

題しらず　源俊賴朝臣

數ならで世にすみの江の澪標(みをつくし)いつをまつともなき身なりけり

皇太后宮大夫俊成

うきながら久しくぞ世を過ぎにけるあはれやかけしすみよしの松

○みちのく　いはで、しのぶ、えぞ、つぼ皆奥州の地名。
○いはで　云はで—岩手。
○しのぶ　忍ぶ—信夫。
○えぞ知らぬ　知り得ないから。
○かき盡してよ　碑のやうに十分に書いて寄こし給へ。
○つぼの碑　昔田村麿が坪といふ所に建てたといふ碑。
○身のうへに　我が身が人に歎かれるやうに。
○あらそふ　壽命を爭ふ。

○壁に生ふなる草　いつまで草。（いつまで生きようかの意味。）

○こしかた　過去のこと。

○くゆる　燃ゆる。

○世にすみの江　世に住むを云ひ懸く。
○澪標　水脈を示す串（杙）に「身を盡し」を云ひ懸く。
○いつをまつともなき　いつ立身すると待つでもない。
○あはれやかけし　住吉の神があはれをかけて下さつたのか。

春日の社の歌合に松風といふことを　藤原家隆朝臣

春日山たにの埋木朽ちぬともきみに告げこせ峯のまつかぜ

宜秋門院丹後

なにとなく聞けばなみだぞこぼれぬる苔の袂にかよふまつかぜ

さうしに葦手長歌などかきておくに　女御徽子女王

みな人のそむき果てぬる世の中にふるの社の身をいかにせむ

臨時の祭の舞人にて諸共にはべりけるをともに四位して後祭の日遣はしける　實方朝臣

衣手のやまゐの水にかげ見えしなほそのかみの春ぞ戀しき

かへし　藤原通信朝臣

いにしへの山ゐの衣なかりせば忘らるゝ路となりやしなまし

後冷泉院の御時大嘗會に日陰のくみ緒して實基朝臣の許につかはすとて先帝の御時思ひ出でてそへていひつかはしける　加賀左衞門

たちながらきてだに見せよ小忌衣(をみごろも)あかぬ昔のわすれがたみに

秋夜聞蛩といふ題をよめと人々に仰せられておほとのごもりける朝にその歌を御覽じて　天暦御歌

○春日山　藤原氏の祖神を祭つてゐる。

○葦手長歌　長歌で繪のやうに書いたもの。

○ふるの社　「身の古る」に「布留の社」(大和國)を云ひ懸く。

○臨時の祭　十一月下の酉の日に行はれる賀茂神社の祭典。

○四位して　四位に敍して。

○やまゐ　山井—山藍(小忌衣は白布に山藍で摺つたもの)。

○日陰のくみ緒　小忌衣著る人が冠に下げたもの。

○きて　來て—著る。

あきの夜の暁がたのきりぐ〲す人づてならで聞かましものを　中務卿具平親王

秋雨を

ながめつゝ我が思ふことはひぐらしに軒の雫の絶ゆるよもなし　大中臣能宣朝臣

題しらず

水ぐきの中にのこれる瀧のこゑいとしも寒き秋のこゑかな　小野小町

題しらず

木がらしの風にもみちて人知れず憂き言の葉のつもる頃かな　皇太后宮大夫俊成

述懐百首の歌よみ侍りけるとき紅葉を

あらし吹く峯の紅葉の日にそへてもろくなりゆく我が涙かな　崇徳院御歌

題しらず

うたゝねは荻吹く風におどろけどながき夢路ぞ覺むるときなき　宮内卿

竹の葉に風ふきよわる夕ぐれの物のあはれは秋としもなし　和泉式部

夕ぐれは雲のけしきを見るからにながめじと思ふこゝろこそつけ

暮れぬめり幾日(いくか)をかくて過ぎぬらむ入相の鐘のつくぐ〲として

○人づてならで　人の歌によってでなく直接に。
○ひぐらしに　終日。
○こゑ　一本「おと」
○いとしも　いとも。「し」は助詞
○みちて　一本「ちらで」
○おどろけど　覺めるけれど。
○ながき夢路　迷ひの道。
○夕ぐれの　一本「夕ぐれに」「夕ぐれよ」
○見るからに　見るにつれて。
○ながめじと思ふこゝろ　あまり物悲しいので…。
○暮れぬめり　暮れたやうだ。
○つくぐ〲として　「鐘を撞く」を云ひ懸く。

待たれつる入相のかねの音すなりあすもやあらば聞かむとすらむ　西行法師

あかつきの心を　皇太后宮大夫俊成

曉とつげのまくらをそばだてて聞くもかなしきかねの音かな

百首の歌に　式子内親王

あかつきのゆふつけ鳥ぞあはれなる長きねむりを思ふまくらに

尼にならむと思ひ立ちけるを人のとめはべりければ　和泉式部

かくばかり憂きを忍びてながらへばこれよりまさる物をこそ思へ

題しらず

垂乳根(たらちね)の諫めしものをつれ〴〵と詠むるをだに問ふ人もなし

熊野へまゐりて大峯へ入らむとて年頃やしなひ立てて侍りけるめのとの許に遣はしける　大僧正行尊

あはれとてはぐゝみたてしいにしへは世を背けとも思はざりけむ

百首の歌奉りし時　土御門内大臣

位山あとをたづねて登れども子をおもふ道になほ迷ひぬる

百首の歌よみ侍りけるに懷舊の歌　皇太后宮大夫俊成

○あすもやあらば　明日も長らへてあるならば。

○つげ　告げ―黄楊。

○ゆふつけ鳥　鷄。
○長きねむり　生死長夜の眠り。

○垂乳根　親。
○つれ〴〵と　一本「つく〴〵と」
○詠むるをだに　年とると詠めがちになつても。
○熊野　紀伊國。
○大峯　大和國。
○はぐゝみたてし　育てあげた。
○位山　飛驒國。位の昇進のことを云ひ懸く。
○あとをたづねて　先祖の昇進の先例をたづねて。
○子をおもふ　子の昇進しないことを思ふ。

むかしだに昔と思ひし垂乳根のなほ戀しきぞはかなかりける

述懐百首の歌よみ侍りけるに　　俊頼朝臣

蜘蛛のいとかゝりける身のほどをおもへば夢のこゝちこそすれ

夕暮にくものいとはかなげに巣がくを常よりもあはれと見て　　僧正遍昭

さゝがにの空にすがくもおなじこと全き宿にも幾世かは經む

題しらず　　西宮前左大臣

ひかり待つ枝にかゝれる露のいのち消えはてねとや春のつれなき

野分したるあしたにをさなき人をだにとはざりける人に　　赤染衞門

あらく吹く風はいかにと宮城野のこ萩がうへを人のとへかし

和泉式部道貞にわすられて後ほどなく敦道親王に通ふと聞きてつかはしける

うつろはでしばし信太の森を見よかへりもぞする葛のうら風

かへし　　和泉式部

秋風はすごく吹けども葛の葉のうらみ顏には見えじとぞおもふ

病かぎりに覺えけるとき定家朝臣中將轉任の事申すとて民部卿範光が許につかはしける　　皇太后宮大夫俊成

○むかしだに　私の若かつた時にでも。
○いとかゝりける　絲懸りける—甚(イト)斯かりける。
○巣がく　巣をかける。
○消えはてね　消え果てよ。
○野分　秋から冬にかけて吹く烈しい風。
○信太の森　「忍ぶ」を云ひ懸く。信太は和泉國にあつて道貞は和泉守なので云ふ。
○秋風　道貞のことを云ふ。
○うらみ　裏見—恨み。恨み顏は君に見せまいと思ふの意味。

○このひとふし　此の一節—子の一節(一事)。
○いまはのこゝろつくからに　今は世を遁れようとの心がつくと同時に。
○過ぐる月日　出家しよう〳〵と月日を數へたことを云ふ。
○なほそむかるゝ　出家した上に更に世の厭はれる。
○名をだにもさは　名をでもそのまゝに。
○背くならひの　世を背いて出家する習慣が。
○世にあらばこそ　俗人で在るならば。「こそ」一本では「やは」
○あなうの世や　あゝ憂い世の中だなア。
○思はめ　一本「思はむ」
○とまる心　心のとまること。
○かたみに　男女の仲のやうに互に。

小笹原かぜまつ露の消えやらでこのひとふしを思ひ置くかな

題しらず　前大僧正慈圓

世の中をいまはのこゝろつくからに過ぎにし方ぞいとゞ戀しき

世をいとふ心のふかくなるまゝに過ぐる月日をうち數へつゝ

ひと方に思ひとりにし心にはなほそむかるゝ身をいかにせむ

なにゆゑにこの世を深くいとふぞと人の問へかしやすく答へむ

思ふべき我が後の世は有るか無きか無ければこそは此の世には住め

西行法師

世を厭ふ名をだにもさは留め置きて數ならぬ身の思出にせむ

身のうさを思ひ知らでや止みなまし背くならひのなき世なりせば

如何すべき世にあらばこそ世をも捨ててあなうの世やと更に思はめ

なに事にとまる心のありければ更にしもまた世のいとはしき

入道前關白太政大臣

昔よりはなれがたきは憂世かなかたみにしのぶ中ならねども

歎くこと侍りける頃大峯に籠るとて同行どもかたへは京へ歸りねなど申してよみ侍りける

大僧正行尊

思ひ出でて若しも尋ぬる人もあらばありとないひぞ定めなき世に

題しらず　前大僧正慈圓

數ならぬ身をなに故に恨みけむとてもかくてもすごしける世を

百首の歌奉りしに　俊頼朝臣

いつか我み山の里の寂しきにあるじとなりて人に問はれむ

題しらず

うき身には山田の晩稻おしこめて世をひたすらに恨みわびぬる

年頃修行の心ありけるを捨て難きこと侍りて過ぎけるに親などなくなりて心やすく思ひ立ちけるころ障子にかきつけ侍りける　山田法師

賤の男の朝な〳〵にこりつむるしばしの程もありがたの世や

題しらず　寂蓮法師

數ならぬ身は無きものになし果てつ誰が爲にかは世をも恨みむ

法橋行遍

たのみありていま行末をまつ人やすぐる月日を歎かざるらむ

守覺法親王五十首の歌よませ侍りけるに　源師光

長らへて生けるをいかにもどかまし憂き身の程をよそに思はば

○ありとないひぞ　私が生きて居ると云ふなよ。

○寂しきにあるじとなりて　寂しい所に出家してその主人となつて

○山田の晩稻「おしこめて」の序

○賤の男の…こりつむる　「しばし」を云ひ起す序。

○しばし　柴—暫し。

○たのみありて　來世の極樂往生の頼みがあつて。

○もどかまし　もどかしく思ふであらう。

○憂き身の程を　私の憂き身の程を。

○よそに思はば　人がよそから思ふならば。

題しらず　　八條院高倉

うき世をば出づる日ごとに厭へどもいつかは月の入る方をみむ

　　西行法師

なさけありし昔のみなほ忍ばれてながらへま憂き世にもふるかな

　　清輔朝臣

長らへばまた此の頃やしのばれむうしと見し世ぞいまは戀しき

寂蓮法師人々すゝめて百首の歌よませ侍りけるにいなびて熊野へ詣でける道にて夢に何事も衰へゆけどこの道こそ世の末にかはらぬものはあれなほこの歌よむべきよし別當湛快三位俊成に申すと見侍りて驚きながらこの歌を急ぎよみいだしてつかはしけるおくにかきつけ侍りける　　西行法師

末の世もこの情のみかはらずと見し夢なくばよそに聞かまし

千載集撰び侍りける時ふるき人々の歌をみて　　皇太后宮大夫俊成

行くすゑは我をもしのぶ人やあらむ昔をおもふ心ならひに

崇德院に百首の歌奉りける無常歌

世の中を思ひつらねてながむればむなしきそらに消ゆるしら雲

百首の歌に　　式子内親王

○月の入る方　西方淨土の方角。

○長らへま憂き　生き長へることも憂い。

○ふる　經る。

○長らへば　生き長らへるならば

○しのばれむ　懐かしまれるだらう。

○うしと見し世ぞ　過去に憂いと見た世が却つて。

○この情　和歌の風流。

○見し夢なくば　夢に見ないならば。

○よそに聞かまし　よそごとに聞いてすましたらうに。

○おもふ　一本「こふる」

○心ならひに　心の習慣で。

○暮るゝ間も待つべき世かは　暮れる間でも待つことの出來る世であるかい。
○嵐たつ　一本「嵐ふく」
○ながらふ　長柄—長らふ。
○葦のよ　「よ」に「世」を云ひ懸く
○風はやみ　風がはやいので。
○ほどの　一本「ほどぞ」
○はかなさ　一本「はかなき」
○白露の　白露のやうな。
○果てしなければ　果てがないのだから。「し」は助詞。

暮るゝ間も待つべき世かはあだし野の末葉の露に嵐たつなり

花山院御歌

津の國におはして汀の葦を見給ひて

津の國のながらふべくもあらぬかな短き葦のよにこそありけれ

中務卿具平親王

題しらず

風はやみ荻の葉ごとにおく露のおくれ先だつほどのはかなさ

蟬丸

秋風になびくあさぢの末ごとにおく白露のあはれ世のなか

世の中はとてもかくてもおなじこと宮も藁屋も果てしなければ

新古今和歌集　巻第十九

神祇歌

知るらめやけふの子の日のひめ小松おいむ末まで榮ゆべしとは

この歌は日吉の社司社頭のうしろの山にまかりて子の日して侍りける夜人の夢に見えけるとなむ

なさけなく折る人つらしわが宿のあるじわすれぬ梅の立枝を

この歌は建久二年の春の頃筑紫へまかりけるものの安樂寺の梅を折りて侍りける夜の夢にみえけるとなむ

補陀落(ふだらく)のみなみの岸に堂立てていまぞ榮えむ北のふぢなみ

この歌は興福寺の南圓堂造りはじめ侍りけるとき春日の奥のもとの明神よみたまひけるとなむ

夜や寒き衣やうすき片そぎの行きあひの閒より霜や置くらむ

住吉の御歌となむ

いかばかり年は經ぬとも住の江の松ぞふたゝび生ひかはりける

○おいむ　老いむ。一本「生ひむ」

○建久　後鳥羽天皇の年號。

○補陀落　觀音の出現した地と云はれる。

○北のふぢなみ　南圓堂を建てた藤原冬嗣は北家の人なので云ふ。

○寒き　一本「寒み」

○片そぎ　社の棟の上のぶちかへの木。先を片そぎにしてあるので云ふ。

○霜や置くらむ　この歌は社殿の壞れたのを歎いた歌かといふ。

○かはりける　一本「替りぬる」

この歌はある人の住吉に詣でて人ならばとはましものをすみの江の松はいくたび生ひかはるらむとよみて奉りける御かへしとなむいへる

むつまじと君はしら浪みづ籬のひさしき世よりいはひ初めてき

伊勢物語に住吉に行幸の時おほん神現形(げぎやう)したまひてとしるせり

ひと知れず今や〳〵とちはやぶる神さぶるまで君をこそ待て

この歌は待賢門院堀河大和の方より熊野へ詣で侍りけるに春日へ參るべきよしの夢を見たりけれど後に參らむと思ひてまかり過ぎにけるをかへり侍りけるに託宣したまひけるとなむ

道とほし程もはるかにへだたれり思ひおこせよ我もわすれじ

この歌はみちのくに住みける人の熊野へ三年詣でむと願を立てて參りて侍りけるがいみじう苦しかりければ今ふたゝびをいかにせむと歎きて御前にふしたりける夜の夢にみえけるとなむ

思ふこと身にあまるまでなる瀧のしばしよどむをなに恨むらむ

この歌は身のしづめることを歎きてあづまの方へまからむと思ひたちける人熊野の御前に通夜してはべりける夢にみえけるとぞ

われ頼む人いたづらになしはてばまた雲わけてのぼるばかりぞ

○君はしら浪　白浪に「君は知ってくれ」の意味を云ひ懸く。
○みづ籬のひさしき世よりいはひ初めてき　拾遺集卷十九に「少女子が袖ふる山の瑞籬の久しき世より思ひそめてき」
○ちはやぶる　「神」の枕詞。
○かへり侍りけるに　都へ…。
○思ひおこせよ　われを…。
○われ頼む人　我を頼む人を。
○また雲わけてのぼるばかりぞ　再び神の國へ戻るばかりだ。

賀茂の御歌となむ

鏡にもかげみたらしの水のおもにうつるばかりの心とを知れ

これまた賀茂に詣でたる人の夢に見えけるといへり

ありきつゝ來つゝ見れどもいさぎよき人のこゝろをわれ忘れめや

石清水の御歌といへり

西の海立つしら波のうへにしてなにすぐすらむかりの此の世を

この歌は稱德天皇の御時和氣淸麿を宇佐宮に奉りたまひけるとき託宣したまひけるとなむ

延喜六年日本紀竟宴に神日本磐余彦天皇　　大江千古

白波にたまより姫のこしことはなぎさやつひのとまりなりけむ

猿田彦　　紀淑望

ひさかたの天の八重雲ふりわけてくだりし君をわれぞむかへし

玉依姫　　三統理平

とびかけるあまのいは舟たづねてぞ秋津島には宮はじめける

賀茂の社午日うたひ侍りける歌

やまとかもうみに嵐の西吹けばいづれの浦に御舟つながむ

○かげみたらしの水　「影を見る」を「手洗川」に云ひ懸く。
○うつるばかりの心とを知れ　感應納受あることを知れ。
○忘れめや　忘れようかい。
○神日本磐余彦天皇　神武天皇のこと。但し此の歌は次の玉依姫の歌と入れ替つたものであらう。
○たまより姫　神武天皇の御母と傳へられる。
○こしこと　來たこと。
○つひの　一本「つひに」
○猿田彦　天孫降臨の時、天の八衢に迎へて導きした神だと云ふ。
○玉依姫　この歌は多分神武天皇の歌と入れ換つたのであらう。
○とびかけるあまのいは舟　天の磐舟にのつて饒速日命が大和國に天降つたことを、神武天皇が日向國から東征して大和國に入り宮を建てられたことに混じたものであらう。
○やまとかも　「かも」は助詞であらう。
○吹けば　一本「吹かば」

神樂をよみ侍りける　紀貫之

おく霜にいろもかはらぬ榊葉の香をやは人のとめて來つらむ

臨時祭をよめる

宮人のすれる衣にゆふだすきかけてこゝろを誰によすらむ

大將に侍りけるとき勅使にて大神宮に詣でてよみ侍りける　攝政太政大臣

神風やみもすそ川のそのかみにちぎりしことの末をたがふな

同じ時外宮にてよみ侍りける　藤原定家朝臣

契りありて今日みや川の木綿(ゆふ)かづら長き世までもかけて頼まむ

公繼卿公卿勅使にて大神宮に詣でて歸り上り侍りけるに齋宮の女房の中より申し送りける　讀人しらず

うれしさも哀れもいかに答へましふる里人に問はれましかば

かへし　春宮權大夫公繼

神風や五十鈴川なみかず知らずすむべき御代にまたかへり來む

大神宮の歌の中に　太上天皇

ながめばや神路の山に雲消えてゆふべの空を出でむ月かげ

神風やとよみてぐらになびくしで懸けてあふぐといふも畏(かしこ)し

○おく霜にの歌　古今集卷二十に「霜八度おけど枯れせぬ榊葉の立ち榮ゆべき神のきねかも」拾遺集卷十に「榊葉の香をかぐはしみとめ來れば八十氏人ぞまとゐせりける」
○とめて　求めて。
○みもすそ川　伊勢神宮の傍の川
○ちぎりし　皇祖神の天照大神と藤原氏の祖先神の天兒屋根命と…
○みや川「今日見る」を云ひ懸く
○いかにこたへまし　答へやうもなかつたらうに。
○かず知らずすむべき御代に　齋宮は限りもなく住みなさるべき御代だから。
○神路の山　伊勢神宮の山。
○とよみてぐら　豐御幣。
○しで　垂れかけるもの。

○御影かな　德の意味を云ひ懸く

○わしの高嶺　天竺の靈鷲山。
○かげ、はらぐる　佛が光を和げて神として現はれる。つまり本地垂跡說の信仰による
○やはらぐる光　光に「和光同塵」
○壹志　伊勢國壹志郡。
○みまくのほしき　見むことの欲しき。見たい。

○すめ　澄め—住め。

○玉串の葉　榊の葉。
○内外の宮　内宮と外宮。

題しらず　　西行法

宮ばしら下つ岩根にしきたててつゆも曇らぬ日の御影かな

かみぢ山月さやかなるちかひありて天の下をば照らすなりけり

伊勢の月讀の社に參りて月を見てよめる　　前大僧正慈圓

さやかなるわしの高嶺の雲居よりかげやはらぐる月よみの森

神祇の歌とてよめる　　中院入道右大臣

やはらぐる光にあまるかげなれや五十鈴河原のあきの夜の月

公卿勅使にてかへり侍りける壹志のむまやにてよみ侍りける　　皇太后宮大夫俊成

立ちかへりまたもみまくのほしきかな御裳濯川の瀬々のしら波

入道前關白の家の百首の歌よみ侍りけるに　　俊惠法師

神風や五十鈴の川の宮ばしら幾千世すめと立てはじめけむ

五十首の歌奉りし時　　越前

かみかぜや玉串の葉を取りかざし内外の宮に君をこそいのれ

社頭納凉といふことを　　大中臣明親

かみかぜや山田のはらの榊葉にこゝろのしめを懸けぬ日ぞなき

五十鈴川そらやまだきに秋の聲したついはねの松のゆふかぜ

香椎の宮の杉をよみ侍る　　讀人しらず

ちはやぶる香椎の宮のあや杉は神の御そぎに立てるなりけり

八幡宮の權官にて年久しかりけることを恨みて御神樂の夜參りて榊に結びつけ侍りける　　法印成清

榊葉にそのいふかひはなけれどもかみに心をかけぬ間ぞなき

賀茂に參りて　　周防内侍

年をへて憂き影をのみみたらしのかはる世もなき身をいかにせむ

文治六年女御入内の屛風に臨時祭かける所をよみ侍りける　　皇太后宮大夫俊成

月さゆるみたらし川にかげ見えて冰にすれるやまゐの袖

社頭雪といふ心をよみ侍りける　　按察使公通

ゆふしでの風にみだるゝ音さえて庭しろたへに雪ぞつもれる

十首の歌合の中に神祇をよめる　　前大僧正慈圓

君をいのる心のいろを人とはばたゞすの宮のあけの玉がき

みあれに參りて社の司おの〳〵葵をかけけるによめる　　賀茂重保

跡たれし神にあふひのなかりせばなにに賴みをかけてすぎまし

○まだきに　まだ早いのに。
○したついはね　「秋の聲がする」意味を「下つ岩根」に云ひ懸く。
○香椎の宮　筑前國粕屋郡。
○御そぎ　「そぎ」とは家屋を葺くために薄くそいだ板のことであらう。神體を作る木とする人もある
○權官　副官のやうなもの。
○いふかひはなけれども　正官になれる見込みがないので。
○みたらし　「見る」を云ひ懸く。手洗川は、賀茂神社の傍を流れる川。
○文治　後鳥羽天皇の年號。
○入内　宮中に御輿入れのこと。
○冰にすれるやまゐの袖　冰に摺つたやうに見える山藍（小忌衣）の袖。
○たゞすの宮　山城國葛野郡。
○あけの玉がき　朱の玉垣のやうに赤い心だの意味。
○みあれ　賀茂神社の四月中の申の日に行はれた祭事。
○跡たれし　本地の佛が神と垂跡した。
○あふひ　逢ふ日ー葵。

社司ども貴布禰に參りて雨乞し侍りけるついでによめる　賀茂幸平

おほみ田のうるほふばかりせきかけてゐせきにおとせ河上の神

鴨社の歌合とて人々よみ侍りけるに月を　鴨長明

石川やせみの小河のきよければ月も流れをたづねてぞすむ

辨に侍りけるとき春日祭に下りて周防内侍につかはしける　中納言資仲

萬代をいのりぞかくるゆふだすき春日のやまの嶺のあらしに

文治六年女御入内の屛風に春日祭　入道前關白太政大臣

けふまつる神のこゝろやなびくらむしでに波立つさほの河風

家に百首の歌よみ侍りけるとき神祇の心を　皇太后宮大夫俊成

あめの下みかさの山の陰ならでたのむかたなき身とは知らずや

春日野のおどろの道のうもれ水すゑだに神のしるしあらはせ

大原野の祭に參りて周防内侍につかはしける　藤原伊家

千世までもこゝろして吹けもみぢ葉を神もをしほの山おろしの風

最勝四天王院の障子に小鹽の山かきたる所　前大僧正慈圓

をしほ山神のしるしをまつの葉に契りし色はかへるものかは

○河上の神　貴布禰社は賀茂川の川上なので斯う云ふ。

○せみの小河　賀茂川の上流。

○辨　太政官の職員。

○春日祭　二月上の申の日に行はれた。

○しでに波立つ　川風にしでの靡くのが波の立つやうに見えること

○あめの下みかさ　笠の縁で「雨の下」を云ひ懸く。

○おどろの道　荊棘の道。大臣を棘路といふので大臣の末の意味。

○うもれ水　沈淪する自身をたとふ。

○すゑだに　せめて我が末孫にでも。

○神もをしほ　「神も惜しむ」に「小鹽山」を云ひ懸く。

○まつ　待つ―松。

○かへる　色の薄くなることを云ふ。

日吉社に奉りける歌の中に二宮を

やはらぐる影ぞふもとにくもりなきもとの光は峯にすめども

述懐の心を

わが頼む七のやしろのゆふだすきかけても六の道にかへすな

おしなべて日吉のかげは曇らぬに涙あやしき昨日けふかな

もろ人のねがひをみつの濱風にこゝろすゞしきしでの音かな

北野によみて奉りける

さめぬれば思ひあはせて音をぞなく心づくしのいにしへの夢

熊野へ詣で給ひける道に花のさかりなりけるを御覧じて　白河院御歌

咲きにほふ花のけしきを見るからに神のこゝろぞそらに知らるゝ

熊野に参りて奉り侍りし　太上天皇

岩にむす苔ふみならすみ熊野の山のかひあるゆく末もがな

新宮に詣づとて熊野川にて

熊野川くだす早瀬のみなれざをさすがみなれぬ浪のかよひ路

白河院熊野にまうで給へりけるに御供の人々鹽屋の王子にて歌よみ侍りけるに　徳大寺左大臣

○やはらぐる影　垂跡した神。
○もとの光　本地である佛。
○七のやしろ　日吉山王七社。大宮、二宮、聖眞子、客人、大禪師、三宮、八王子を云ふ。
○六の道　地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道。
○みつの濱　「願ひを滿つ」に「御津の濱」を云ひ懸く。
○北野　菅原道眞を祭る。
○心づくし　「心盡し」に「筑紫」(道眞の配流地)を云ひ懸く。
○見るからに　見るにつれて。
○かひ　峽—效。
○みなれざを　「水馴棹をさす」に「さすが」を云ひ懸く。
○鹽屋の王子　熊野九十九王の一

立ちのぼるしほやのけむり浦風になびくを神のこゝろともがな

熊野へ詣で侍りしに岩代の王子に人々の名など書きつけさせてしばし侍りしに拝殿のなげしに書きつけ侍りし歌　　讀人しらず

いはしろの神は知るらむしるべせよ頼むうき世の夢のゆく末

熊野の本宮燒けて年の内に遷宮侍りしに參りて　　太上天皇

契りあればうれしきかかる折にあひぬ忘るな神もゆく末のそら

加賀守にて侍りけるとき白山に詣でたりけるを思ひ出でて日吉の客人の宮にてよみ侍りける　　左京大輔顯輔

年經ともこしの白山わすれずばかしらの雪をあはれとも見よ

一品聰子内親王住吉にまうでゝ人々歌よみ侍りけるによめる　　藤原通經

すみよしの濱松が枝に風吹けば波のしらゆふかけぬ間ぞなき

奉幣使に住吉に參りて昔住みけるとまりの荒れたりけるをよみ侍りける　　津守有基

住みよしと思ひし宿はあれにけり神のしるしをまつとせしまに

ある所の屏風の繪に十一月神祭る家の前に馬にのりて人のゆく所を　　大中臣能宣朝臣

○こゝろともがな　心であつて欲しい。
○岩代の王子　これも九十九王の一。
○うれしきかかる折　斯かる嬉しき折。
○白山　加賀國。
○間ぞ　一本「日ぞ」
○住みよしと　「住吉」に「住みよいと」の意味を云ひ懸く。
○まつ　松―待つ。

○かれず　葉の枯れず—人の離れず。

○延喜　醍醐天皇の年號。

榊葉の霜うち拂ひかれずのみすめとぞいのる神のみまへに

延喜の御時屏風に夏神樂の心をよみ侍りける　　貫之

河やしろしのに折りはへほす衣いかにほせばか七日ひざらむ

新古今和歌集　巻第二十

釋教歌

なほ頼めしめぢが原のさしも草われ世の中にあらむかぎりは

なにか思ふなにかはなげく世の中はたゞ朝顔の花のうへのつゆ

此の歌は清水觀音の御歌となむいひつたへたる

智縁上人伯耆の大山に參りて出でなむとしける曉夢にみえける歌

やま深く年ふる我もあるものをいづちか月のいでて行くらむ

難波のみつの寺にて葦の葉のそよぐを聞きて　　行基菩薩

葦そよぐ鹽瀬の浪のいつまでかうき世のなかにうかびわたらむ

比叡山中堂建立の時　　傳教大師

阿耨多羅三藐三菩提の佛たちわが立つ杣に冥加あらせ給へ

入唐の時の歌　　智證大師

法の舟さして行く身ぞもろ〳〵のかみも佛もわれをみそなへ

菩提寺の講堂の柱に蟲のくひたる歌

○しめぢが原　下野國都賀郡。さしも草の多いので名高い。
○なにかは　一本「何とか」
○中堂　根本中堂。
○阿耨多羅三藐三菩提　無上正遍智。佛の位を云ふ。
○杣　材木を伐り出す山。
○冥加　冥々の加護。
○みそなへ　照覽あれ。

しるへあるときにだに行け極樂の道にまどへる世のなかの人　　日藏上人

みたけの笙の岩屋に籠りてよめる

寂寞（じやくまく）のこけの岩戸のしづけきになみだの雨のふらぬ日ぞなき　　法圓上人

臨終正念ならむことを思ひてよめる

南無阿彌陀佛の御手にかくる絲のをはり亂れぬ心ともがな　　僧都源信

題しらず

われだにもまづ極樂にうまれなば知るも知らぬも皆むかへてむ　　上東門院

天王寺の龜井の水を御覽じて

にごりなき龜井の水をむすびあげて心の塵をすゝぎつるかな　　法性寺入道前關白太政大臣

法華經二十八品の歌人々によませ侍りけるに提婆品の心を

わたつ海の底よりきつる程もなく此の身ながらに身をぞ極むる　　大納言齊信

勸持品の心を

かずならぬ命はなにか惜しからむ法とく程をしのぶばかりぞ　　肥後

五月ばかりに雲林院の菩提講に詣でてよみ侍りける

むらさきの雲のはやしを見わたせば法にあふちのはな咲きにけり

○しるべあるとき　見佛聞法の時

○なみだの雨　感涙。

○御手にかくる絲　五色の絲を本尊の手にかけて、臨終の時にその絲を持つて來迎引攝に預る事をするその絲。

○知るも知らぬも　知る人をでも知らない人をでも。

○わたつ海のの歌　經に「皆見龍女忽然之間變成男子。」の趣。

○かずならぬの歌　經に「我等敬信當者忍辱鎧爲說是經故忍此諸難事我不愛身命但惜無上道我等於來世護持佛所囑。」の趣か。

○むらさきの雲　樗の花が紫の雲に見えるのを云ふ。

○あふち　「逢ふ」を「樗」に云ひ懸く。

涅槃經讀み侍りけるとき夢にちる花に池の氷も解けぬなり花吹きちらす
春の夜の空とかきて人の見せ侍りければ夢の中にかへしすと覺えける歌

谷川のながれし淸く澄みぬればくまなき月の影もうかびぬ

述懷の歌の中に　前大僧正慈圓

ねがはくはしばし闇路にやすらひてかゝげやせまし法の燈火

とく御法（みのり）きくの白露夜はおきてつとめて消えむことをしぞ思ふ

極樂へまだ我が心ゆきつかずひつじの歩みしばしとゞまれ

觀心如月輪若在輕霧中の心を　權僧正公胤

我がこゝろなほはれやらぬ秋霧にほのかに見ゆるあり明の月

家に百首の歌よみ侍りけるとき十界の心をよみ侍りけるに緣覺の心を　攝政太政大臣

おく山にひとりうき世はさとりにき常なきいろを風にながめて

心經の心をよめる　小侍從

色にのみそみし心のくやしきを空しと說ける法のうれしさ

攝政太政大臣の家の百首の歌に十樂の心をよみ侍りけるに聖衆來迎樂　寂蓮法師

○ちる花　佛の入滅に喩ふ。
○ながれし　「し」は助詞。
○闇路　娑婆世界。
○かゝげやせまし　衆生を照らし導く爲にと。
○きく　聞く―菊。
○夜はおきて　夜勤行して。
○つとめて　勤めて―明朝（ツトメテ）
○ひつじの歩み　摩耶經の偈に「譬如下旃陀羅驅レ羊就二居所一步々近中死地上人命亦如レ是。」
○觀心如月輪云々　金剛界儀軌の文。
○十界　佛、菩薩、緣覺、聲聞、天、人、阿修羅、餓鬼、畜生、地獄。
○緣覺　自利ばかりで利他の功德がないので獨覺とも云ふ。
○常なきいろ　無常の色。
○色にのみの歌　經に「色卽是空」
○聖衆來迎樂　十樂の一。

むらさきの雲路にさそふ琴の音にうき世をはらふ峯のまつかぜ

蓮花初開樂

これやこのうき世のほかの春ならむ花の戸ぼそのあけぼのの空

快樂不退樂

春秋もかぎらぬ花に置く露はおくれさきだつ恨みやはある

引接結緣樂

立ちかへり苦しき海におくあみもふかきえにこそ心ひくらめ

法華經二十八品の歌よみ侍りけるに方便品唯有一乘法の心を　　前大僧正慈圓

いづくにも我が法ならぬ法やあると空吹く風にとへど答へぬ

化城喩品化作大城

思ふなようき世のなかを出で果てて宿る奥にもやどはありけり

分別功德品或住不退地

鷲の山けふきく法のみちならでかへらぬ宿に行く人ぞなき

普門品心念不空過

おしなべてむなしき空と思ひしに藤咲きぬればむらさきの雲

水渚常不滿といふ心を　　崇德院御歌

○琴の音　來迎の菩薩の音樂。
○おくれさきだつ恨みやはある　極樂には死に後れ先立つといふ恨みはないの意味。
○ふかきえに　深き江に―深き緣
○ひくらめ　經に「世々生々所思智識隨心引接。」と見える。
○いづくにもの歌　方便品に「十方佛土中唯有一乘法無二無三。」又「如風於空中一切無障礙。」
○思ふなよ　憂世を出て宿った所をこゝばかりだと思ふなよ。
○鷲の山　靈鷲山。
○法の道ならで　法の道以外に。
○かへらぬ宿　壽量品の功德で衆生卽佛の位に住してそれを去ることのないこと。不退地。
○おしなべての歌　經に「聞名及見身心念不空過能滅諸有苦。」とある。心を空に、念を藤に、紫雲を菩薩の感應に喩ふ。

おしなべて憂身はさこそなるみ潟みちひる汐のかはるのみかは

先照高山

朝日さすみねのつゞきはめぐめどもまだ霜ふかし谷のかげ草　入道前關白太政大臣

家に百首歌よみ侍りけるとき五智の心を妙觀察智

底清く心のみづを澄まさずばいかゞさとりのはちすをも見む

勸持品　正三位經家

さらずとて幾世もあらじいざやさは法にかへたるいのちと思はむ

法師品加刀杖瓦石念佛故應忍の心を　寂蓮法師

深き夜のまどうつ雨に音せぬはうき世を軒のしのぶなりけり

五百弟子品内祕菩薩行の心を　前大僧正慈圓

いにしへの鹿なく野邊のいほりにも心の月は曇らざりけり

人々勸めて法文百首の歌よみ侍りけるに二乘但空智如螢火　寂然法師

道のべの螢ばかりをしるべにてひとりぞ出づる夕やみの空

菩薩清涼月遊於畢竟空

雲はれてむなしき空にすみながらうき世のなかをめぐる月かげ

栴檀香風悦可衆心

○朝日さすの歌　華嚴經に「先照高山次照平地次照幽谷。」日の出るのを如來の出現に喩ふ。

○さとりのはちす　妙觀察智を蓮花智とも云ふので。

○さらずとて　一本「さらずとも」

○法師品　經に「若說此經時有人惡口罵加刀杖瓦石念佛故應忍。」刀杖瓦石を窓うつ雨、應忍を忍草に喩ふ。

○鹿なく野邊　釋迦が鹿野園で阿含經を說いて、富樓那尊者が小乘空を悟つて聲聞となり、後法華經に至つて、其の悟りは外は聲聞だが内には菩薩の行を祕したのだと說いた趣。

○道のべの歌　小乘である二乘(聲聞、緣覺)は暗夜の螢光のやうだが先づ初めに小乘を悟る趣。

○雲はれての歌　菩薩を月影に譬へ、空に遊ぶが衆生に交はる意味に。

○すみ　澄み—住み。

ふく風に花たちばなや匂ふらむ昔おぼゆる今日のそらかな

作是教已復至他國

やみふかき木の下ごとに契りおきて朝たつきりのあとの露けさ

此日已過命即衰滅

けふ過ぎぬ命もしかとおどろかす入相のかねの聲ぞかなしき

悲鳴呦咽痛戀本羣　　素覺法師

草深きかりばの小野を立ち出でて友まどはせる鹿ぞ鳴くなる

棄恩入無爲　　寂然法師

背かずばいづれの世にかめぐり逢ひて思ひけりとも人に知られむ

合會有別離　　源季廣

あひみても嶺にわかるゝ白雲のかゝるこの世の厭はしきかな

聞名欲往生　　寂然法師

おとに聞く君がりいつかいきの松まつらむものを心づくしに

心懐戀慕渇仰於佛

別れにしその面かげのこひしきに夢にし見えよ山の端の月

十戒の歌よみ侍りけるに不殺生戒

○吹く風にの歌　釋迦が法華經を説かうした時に衆生の心がなんとなく悦ばしく覺えた瑞相の趣。
○作是教云々　壽量品の文。
○やみ　一本「やま」
○此日已過云々　出曜經の文。

○かりば　狩場。

○背かずば　世を背いて遁世しないならば。
○合會有別離　涅槃經に、「夫盛者有衰合會有別離。」
○かゝる　懸る―斯かる。
○聞名云々　無量壽經に、「其佛本願力聞名欲往生皆悉到彼。」
○君がり　君の許に。
○いつか　一本「いづる」
○いきの松　行き―生(イキ)の松(筑前國)。
○心づくしに　心盡し―筑紫。
○心懐戀慕云々　壽量品の文。
○別れにしそのおもかげ　入滅後の佛の面影。
○十戒　十惡を犯さない誡め。

わたつ海の深きに沈むいさりせでたもつかひある法を求めよ

不偸盗戒

うき草のひと葉なりとも磯がくれおもひなかけそ沖つしらなみ

不邪婬戒

さらぬだに重きが上のさよ衣わがつまならぬつまなかさねそ

不酤酒戒

花のもと露のなさけはほどもあらじゑひなすゝめそ春の山かぜ

入道前關白の家に十如是の歌よませ侍りけるに如是報　二條院讃岐

うきもなほ昔のゆゑと思はずばいかにこの世を恨み果てまし

待賢門院中納言人々に勸めて二十八品の歌よませ侍りけるに序品廣度諸衆生其數無有量の心を　皇太后宮大夫俊成

渡すべきかずもかぎらぬ橋ばしら如何に立てけるちかひなるらむ

美福門院の極樂六時讃の繪に書かるべき歌奉るべきよし侍りけるによみ侍りける時に大衆法を聞きて彌歡喜瞻仰せむ

いまぞこれ入日をみても思ひこし彌陀のみくにの夕暮のそら

曉至りて浪の聲金の岸によするほど

○深きに沈むいさりせで　深い罪に沈む殺生をしないで。

○磯がくれ　人に忍びかくれて。

○しらなみ　漢の時白波といふ所から賊がおこつた事から、盗人のことを白波の賊と呼んだ。

○重き　罪の重い(女犯のこと)。

○つま　妻—褄。

○なさけ　「酒」を云ひ懸く。

○十如是　如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟。

○渡すべき　苦海を渡し濟ふこと

○ちかひ　菩薩の誓願。

○思ひこし　娑婆にゐて思ひ來つた。(今は極樂に往生したので)。

○いにしへの　娑婆にゐた昔の。
○毎日晨朝云々　地藏延命經に「毎日晨朝入於諸定遊化六道拔苦與樂。」
○行かむ方を知らねば　惡趣の中のどこに行くかを知らないので。
○たまかけし衣のうら　衣裏繫珠の意味。
○此身如夢　方便品「此身如夢爲虛妄見。」
○今日の煙　佛の入滅したのを栴檀の薪で煙にしたこと。
○おもひいる日「思ひ入る」に「入る日」を云ひ懸く。
○西へ行くしるべ　西方淨土へ行く道しるべ。
○月影　上人に喩ふ。
○空だのめ　待ちぼうけ。

百首の歌の中に毎日晨朝入諸定の心を　　式子内親王

いにしへの尾上のかねに似たるかな岸うつ浪のあかつきの聲

發心和歌集の歌普門品種々諸惡趣　　選子内親王

しづかなる曉ごとに見わたせばまだふかき夜の夢ぞかなしき

五百弟子品の心を　　僧都源信

逢ふことを何處にてとか契るべき憂き身の行かむ方を知らねば

たまかけし衣のうらをかへしてぞおろかなりける心をば知る

維摩經十喩の中に此身如夢といへる心を　　赤染衞門

夢や夢現や夢とわかぬかないかなる世にか覺めむとすらむ

二月十五日の暮方に伊勢大輔がもとへ遣はしける　　相模

つねよりも今日の煙のたよりにや西をはるかにおもひやるらむ

かへし　　伊勢大輔

けふはいとゞ涙にくれぬ西の山おもひいる日の影をながめて

西行法師をよび侍りけるにまかるべきよしは申しながらまうで來で月のあかかりけるに門の前を通ると聞きてよみて遣はしける　　待賢門院堀河

西へ行くしるべとおもふ月影の空だのめこそかひなかりけれ

かへし　　西行法師

たちいらで雲間をわけし月影は待たぬけしきや空にみえけむ

人の身まかりける後結緣經供養しけるに即往生安樂世界の心をよめる　　瞻西上人

むかし見し月のひかりをしるべにてこよひや君が西へ行くらむ

勸心をよみ侍りける　　西行法師

闇はれてこゝろの空に澄む月は西の山邊やちかくなるらむ

○待たぬけしき　自分を待たない様子。
○即往生云々　法華經藥王品に「若有女人聞是經典如說修行於此命終即往安樂世界。」とある。

○闇はれて　煩惱の闇が晴れて。
○こゝろの空に澄む月　心月輪。
○西の山邊やちかくなるらむ　極樂往生の期が近くなるのだらう。

○さかず　一本「さかり」

異本

巻第二

春歌下

題しらず　中納言家持

古里にはなは散りつゝみ吉野の山のさくらはまださかずなり

在春雨下花の香に上

題しらず　赤人

こひしくばかたみにせむと我が宿にうゑし藤浪いまさかりなり

在足曳下かくてこそ上

巻第三

夏歌

時鳥の心をよみ侍りける　顯昭法師

ほとゝぎす昔をかけて思へとや老のねざめにひと聲ぞする

在有明下過ぎにけり上

卷第五
秋歌下

題しらず　惠慶法師

高砂の尾のへに立てる鹿の音にことのほかにも濡るゝ袖かな

在妻こふる下深山邊上

卷第二（又一本）
春歌下

大神宮に百首の歌奉りし中に　太上天皇

○昔をかけて思へとや　昔のことをも兼ねて思へとてか。

○高砂　播磨國。

いかにせむ世にふるながめしばの戸にうつろふ花の春の暮れがた

在赤人春雨はいたくな降りそ下

○ふる　經る―降る。
○ながめ　詠め―長雨。
○しはの戸　「ながめし」の意味を柴の戸に云ひ懸く。

新古今和歌集終

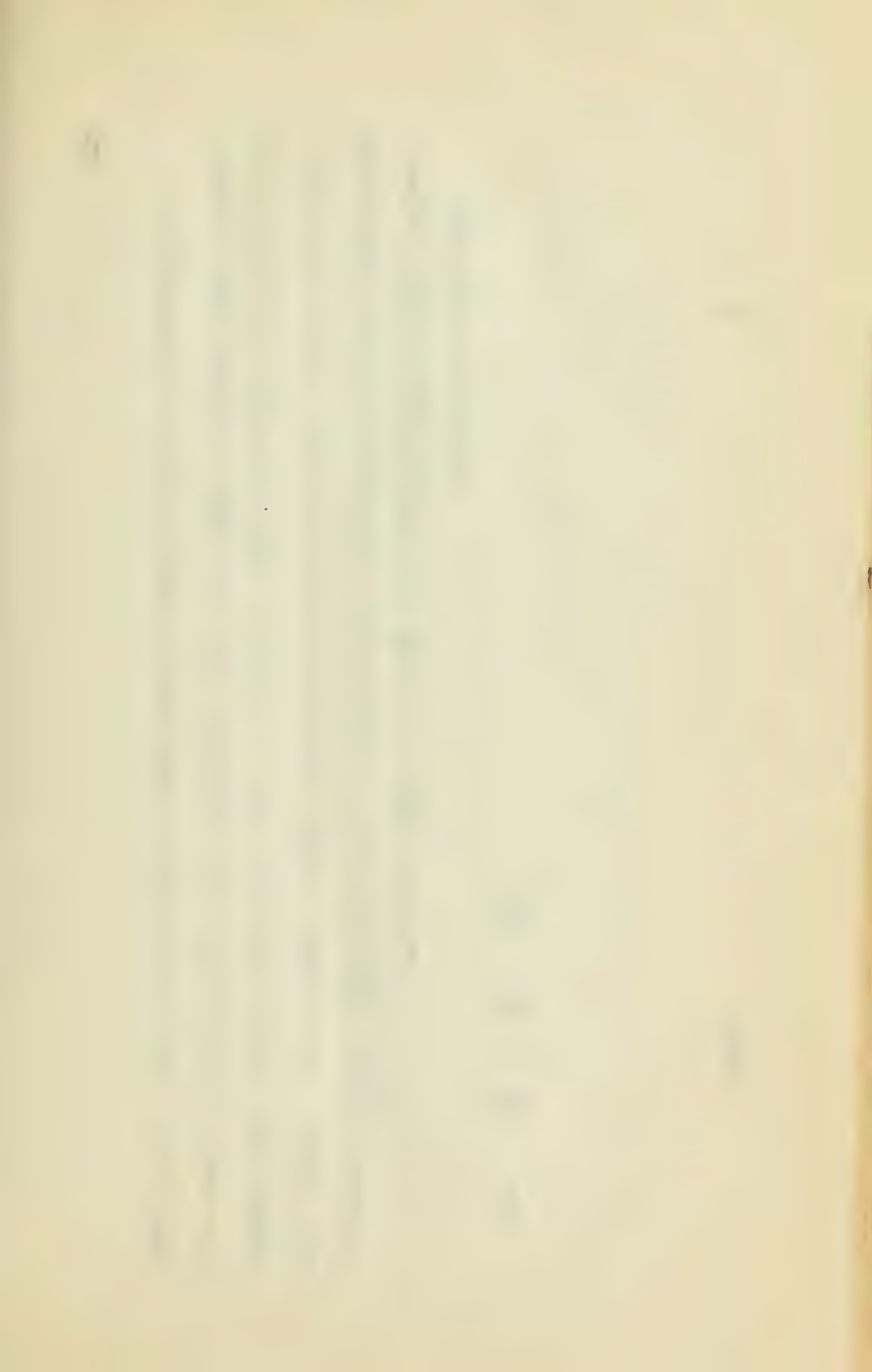
歴代和歌勅撰考

吉田令世

序

これの歴代勅撰考は、今より十とせあまり三とせ四とせばかりの昔、江戸よりくだりて、つれ〴〵とのみ籠り居ての頃、なすわざもこそ無かりしに、何くれと物のはしに書きつめおけるものども、まさぐり出でて、そこはかとなく物しつれば、猶かうがへ洩らせることも、あまたおほかんなれど、かきやり捨てなむもさすがにあたらしく、折もあらばまたあらためてむとて、箱のそこに納めおきしを、弘道館の、大和歌よみも教へもするわざうけたまはりて、ものかく人たちも、かれこれあなれば、今あらたにきよめうつしものして、御あたり近くさふらふ人々の、歌よむことの心得にもとてなむ。

天保十五年といふ年の卯月

吉田令世

歴代和歌勅撰考　巻之一

常陸水戸　吉　田　令　世　撰

萬葉集二十巻

長歌二百六十六首　　短歌四千八十六首
旋頭歌六十三首
凡四千五百十五首　注全歌二十首
詩四首　文一首　序十三首　狀十二首
清輔袋草子云。萬葉集和歌四千三百十三首、此長歌二百五十九首、但本々不ㇾ同、難ㇾ用二定數一。八雲御抄二云。萬葉集二十卷、四千三百十五首、長歌二百五十、此内也。但萬葉有二兩說一。奥五十首、或無。かくの如く歌數も少しづゝのたがひあれども、今は契沖法師の代匠記に依りて、今世にある此の集の歌数をあぐ。

萬葉集は勅撰にあらざる事はうつもなかれども、古今集に貞觀御時、萬葉集はいつばかり作れるぞと問はせ給ひければとありて、貞觀の比、はやく此の集撰びたる事詳かならず。或は勅撰といひ、或は私撰といひて、昔よりくさ〴〵の說あれば、まづ昔の人のいひ置ける事どもを擧げて、後に其のしか

らざる事をわきまへつ。

八雲御抄巻二云。萬葉集奈良天皇御宇、橘諸兄左大臣撰レ之。子細雖レ多、勅撰目錄不レ決レ之。

東常縁聞書云。萬葉集奈良御門御宇、井手左大臣撰レ之。或家持卿。

勅撰次第云。萬葉集奈良御門御時（文武、聖武、孝謙、桓武、平城等義有レ之。）撰者左大臣橘諸兄公。或中納言家持撰云々。

古今集雜下云。貞觀の御時、萬葉集はいつばかり作れるぞと問はせ給ひければ、よみて奉れる。文屋有季。

神名月しぐれ降りおける奈良の葉のなにおふ宮のふるごとぞこれ

貫之古今集序云。いにしへよりかく傳はるうちにも、奈良の御時よりぞ弘まりにける云々。これよいさきの歌を集めてなん、萬葉集と名づけられたりける。

淑望古今序云。昔平城天子、詔ニ侍臣一、令ミ撰ニ萬葉集一。

後拾遺集序云。奈良のみかどは、萬葉集二十巻を撰びて、常のもてあそびものとし給へり。

榮華物語月宴に、昔高野の女帝の御代、天平勝寶五年には、左大臣橘卿諸兄、諸卿大夫等あつまりて萬葉集をえらばせ給ふ。

袋草子云。萬葉集、此集世以謂ニ大同之撰一。是付ニ奈良之號一存歟、極僻事歟。凡以ニ聖武并桓武大同之朝一號ニ平城帝一（見國史）但至ニ大同一付ニ山陵一號レ之、如ニ古今序一は時歷ニ十代一數過ニ百年一云々。然者相ニ當桓武御時一。但多レ疑。一、彼集は寶字三年以後年號不レ載。一、家持天平勝寶以後官不レ見、所レ載之官、唯内舍人越中

守兵部少輔少納言左中辨等、就レ中公卿之時歌不レ載レ之。一、古今集云。貞観御時萬葉集は何比に被レ撰たるぞと被レ問レ之時、文屋有季詠云、奈良の都のふることぞこれと云々。又野宮歌合時、源順稱云。むかしならのみやこのふる歌讀みし時云々。而桓武は此の京に遷都之帝也。於二平安宮一撰レ集には、專不レ可レ稱二奈良の都の古事一と。又桓武は延暦三年甲子十一月十一日戊申移二幸長岡宮一之由、見二國史一。其以前始纔一兩年の間撰二和歌一事を不レ爲レ先歟。就レ中彼帝作レ歌之由無二所見一、方々有二疑貽一。予按レ之此集聖武撰歟。其故彼帝御時、和歌始興レ之由、在二古今序一。隨能令レ作二和歌一 云々此一 同序人丸同時の奈良之帝時撰二萬葉集一之由云々。而桓武時は人丸不レ可レ逢。計二其年齡一殆及二百六十歳一。隨人丸死去之間歌載二彼集一。是二又皇代記云。天平元年正月十四日奏二諸歌一。云々 是三。諸歌は蹈歌の誤なり 但如二彼集一天平勝寶一三八年歌等載レ之。若孝謙之時に太上皇後撰レ之歟。如金葉并詞華集。 又寶字三年歌在レ之、展轉之誤歟。如レ此者雖レ當二聖武之撰一、古今の序十代文難レ避者也。但文書之習、若過若減、皆在二大數之儀一。餘數を棄て取二十代一歟 中畧 撰者或稱二橘大臣一、或稱二家持一。件大臣、寶字元年薨卒云々。彼集桓武之撰ならば相違、家持延暦四年謀反薨去云々。其以前遷都造營之間、撰歌之條有レ疑、彌可レ謂二聖武之撰一。抑或人云、如二世繼物語一は、萬葉集は高野御時諸兄大臣奉レ之撰云云。高野は孝謙也。然者叶二愚義一。孝謙時太上天皇所二撰註一歟。但引二見彼書一之後可二左右一。

顯昭人丸勘文云。皇代記奏諸歌者僻書也。諸本書奏蹈歌也。又勝寶五年橘大臣撰二萬葉一者。世繼僞二本書一載二和歌之說一也。證レ本者不レ然也。

拾芥抄云。萬葉集二十卷 四千三百十五首。長歌二百五十。此内也。或說。與五十首。或二人部立錯亂不レ定。 奈良天皇御宇、左大臣橘諸兄公撰レ之。私

勘右大辨家持、同撰レ之。聖武天皇勅云々。京極中納言入道抄云 押紙 時代事近代歌仙等 以下に見ゆればこゝに畧す

按ずるに、貫之古今序と文屋有季の歌に、萬葉を撰ばれたるは奈良の御時とす。また淑望が古今眞字序には、平城帝の御時と書かる。此の說に依りて八雲御抄、勅撰次第、榮華物語 即世繼 、後拾遺集序、拾芥抄などに、或は只弘く奈良の帝の撰び給ふといひ、或は孝謙の御時に、橘諸兄卿勅を奉りて撰ばるといひ、或は聖武天皇の勅にて家持の撰といひ、淸輔袋草子には、右に引き出せるが如くくさ〲に考へて、聖武の御時とも思はるれども、猶孝謙の御時、諸兄の撰ならんといふに定めたるが如し。然るに顯昭法師が說には、世繼に、孝謙の御時といへるは誤れる本にて、よろしき本にはさる事なしといひ、定家の說には家持の撰ならんと疑へり。惑ひの上に惑ひをかさね、疑ひの上に疑ひをかさねたり。其の甚しきに至りては、腹をかゝげて笑ふにたへざるものあり。其の說次にあぐ。

古今聽傳記云。萬葉集をば聖武天皇の御時に、左大臣橘諸兄卿と中納言大伴家持、此の二人に仰せて、神龜元年二月八日に撰し初められけるなり。其の時分歌まれにして僅に三千首あり、一萬首撰ばんとて萬葉集と名づけらる。聖武崩御の後、孝謙天皇御時、家持一人して五千首に撰しなしたり。諸兄卿は科にあたりて、隱岐國に流されてけり。桓武天皇御宇に、左京大夫藤原濱成といふ内舍人と、橘淸友に仰せて七千首にせんじ、平城天皇御宇に、良峯安世と紀有常に仰せ撰し終りぬ。しかれども一萬首には足らず九千首ばかりなり。

神明鏡云。聖武天皇天平六年云々。此時橘諸兄卿幷中納言家持卿に仰せ、萬葉と號謌一萬首可レ進撰レ之

由承レ勅云々。又云。桓武天皇十五年云々。此時又萬葉集之歌を撰ぜらる。内舍人濱成承りて三千餘首を奉ニ撰加一給ふなり。

兼載雜談云。萬葉集は十六の卷大事也といへり。文武、聖武、平城三代に書き終りたる集なり。

按ずるに、此の三書の說はあとかたもなきみだりごとにて、さらに取るに足らねども、かかるわらはしき說も廣く考へむ人のためにあげおくなり。かくて萬葉集は勅撰にはあらず、家持卿のわたくしの集なりといふに定まれり。其の由は、契沖法師の萬葉代匠記雜說の中に委しく見えたり。いと長ければ今は其の旨とあるすぢ〳〵をつまみて出せり。こまやかなる事は本書につきて見るべし。

萬葉代匠記雜說節略云。此の集は古來勅撰とは定めて、何れの帝の勅、誰人の勅撰と云ふに付きて異義まちまちなり。爰に拾芥抄云。京極中納言入道抄云押紙萬葉集時代事、近代歌仙等多雖レ有、喧嘩相論事等、粗レ伺レ集之所レ載、自ニ第十七卷一似ニ注ニ付當時出來歌一事體見レ集、第十七自ニ天平二年一至ニ于二十年一。第十八自ニ天平二十年三月二十三日一至ニ于同勝寶二年正月二日一。今云。考集二日後、自ニ同五日一至ニ二月十八日一載レ之。第十九自ニ同年三月一日一至ニ同五年正月二十五日一。今云。考集二月二十五日也。疑傳寫誤。凡和漢書籍、多以レ所ニ注載一爲ニ其時代書一、何拋ニ本集一所レ見徒勵ニ他集之序詞一哉 私云。古今集兩序也。頗似レ無ニ其謂一。撰者又無ニ慥說一。世繼物語云。萬葉集高野御時、諸兄大臣奉レ之云々。但件集、橘大臣薨之後、歌夜多書レ之、似ニ家持卿之所ヒ注。尤以不レ審 以上定家卿の義なり。大臣は勝寶九歲正月六日に薨じ給ひければ、第二十卷同三月四日に、大原眞人今城の宅にて、家持のよまれたる足引の八尾の椿と云ふ歌より、卷の終に至るまでの歌の事なり。今此の定家卿の抄を見て、是に心著きて眥く

集中を考へ見るに、勅撰にもあらず、撰者は諸兄公にもあらずして、家持卿私の家に、若年より見聞に隨ひて記しおかれたるを、十六巻までは天平十六年十七年の比までに、二十七八歳の内にて撰び定め、十七巻の天平十六年四月五日の歌までは、遺ちたるを拾ひ、十八年正月の歌より第二十の終までは、日記の如く部を立てず次第に集めて、寶字三年に一部と成されたるなり。今見及ぶ所を出して其の由を證すべし。凡そ集中の例、大納言以上には名を書かざれば、第四に同じ人を大納言兼大將軍大伴卿と書きて名をかかぬは理なり。今は微官の時の歌なるを、名をかかぬは私の家に祖父を貴びてなり。勅撰ならば假令家持これを奉はるとも名を記さざる事を得じ。第三云。暮春之月幸二芳野離宮一之時、中納言大伴卿奉レ勅作二歌一首幷短歌一。之は大納言旅人卿未だ中納言の時も名をかかざるは父を尊びてなり。同巻に中納言安倍廣庭卿歌、或は安倍廣庭卿歌とかけるに合はせて意ひ得べし。同巻云。悲二傷死一レ妻高橋朝臣作レ歌、歌後註云。右三首七月二十日高橋朝臣作也。名字未レ審。但云奉二膳之男子一焉。之は上を承けて天平十六年七月二十日なり。若し聖武天皇の勅撰ならば、當時の臣下名字未レ審と云ふ事あらむや。巻第四云。右郎女者佐保大納言卿之女也、云云。是れは當時現存の人なれども、家持の姑なる故に、坂上郎女と云ふ事をかく委しく註するなり。假令家持の奉はられたりとも、私ならずばかくは註する事を得られじ。同巻云。天皇賜海上女王御歌一首、これ當帝を指して天皇と云へば、孝謙天皇の勅撰ならぬ證なり。凡そ第六、第八、第十八までに、聖武天皇御在位の程は、元正天皇の御事を太上天皇と申し奉り、孝謙天皇の御世となりては、聖武天皇を太上天皇

と申し奉るに依つて、元正天皇をば先づ太上天皇と簡てかかれたるにて意ひ得べし。同巻云。天皇思ニ酒人女王ー御製歌一首。又云。八代女王獻ニ天皇ー歌一首、獻ニ天皇ー歌一首、獻ニ天皇ー歌二首、此等孝謙天皇の勅撰ならず、當帝を私に記する證なり。大作坂上郎女、從ニ跡見庄ー贈ニ賜留宅女子大孃ー歌一首并短歌、歌後註云。右歌報ニ賜大孃ー歌也。賜の字は説文徐曰、上予レ下曰レ賜。されば此の字は私の家には尊ぶ人に用ゐれども、勅撰ならば君の臣下に物を賜はるにあらずば用ゐるまじき字なるを、今かく書きたるにて私撰なる事を知るべし。下にも此の字を用ゐたるをば此に准らへて知るべし。第五も歌の意を顯はす序詞書などの外、詩文を交へ載せたるは勅撰の體にあらず。第六云。天皇賜ニ酒節度使卿等ー御歌一首并短歌、是聖武帝御代に撰びて孝謙帝の敕にあらぬ證なり。歌後註云。右御歌者或云、太上天皇御製也。此の太上天皇は元正天皇なり。此の註私撰の證なり。天平六年甲戌春三月、幸ニ于難波宮ー之時歌六首、第一後註云。右一首作者未レ詳、聖武天皇の敕撰にあらぬ證なり。若し後に至りて作者を失ひたらば其の由を註すとも、未レ詳とは云ふべからず。天平八年冬十一月、左大辨葛城王等賜ニ姓橘氏ー之時御製歌一首、歌後註中云。或云、此歌一首、太上天皇御歌。但天皇皇后御歌各有一首者、其歌遺落未レ得ニ探求ー焉。此の註兩帝の勅撰にあらず、諸兄公奉りて撰び給はぬ堅き證なり。天平十年秋八月二十日、宴ニ右大臣橘家ー歌四首。此端作右大臣を敬まへる詞なれば敕撰にあらず、諸兄公撰者ならぬ證なり。第三首の註を右一首右大臣傳云。故豐島采女歌、此の註諸兄公撰者にあらずして、家持の撰ぜられたる證なり。又諸兄は天平十年正月に右大臣となり、十五年五月に左大臣と成りたまひたるに、今右大臣といひ、故豐島采女と云ふは、此の

宴に在し、采女死して後、天平十五年までに諸兄公の家持に語り給へるを記されたるなり。第十六云。安積香山影副所見山井之云々。註云。右歌傳云、葛城王遣于陸奥國之時國司祗承緩怠甚云々。葛城王は橘諸兄公の初めの名なり。彼の大臣此の集の撰者にあらざる證據なり。つら〳〵事の意を案ずるに、寶字より景雲の頃までは、朝廷に多く事ありて人の心穏ならねば歌の聲も息めるか、光仁天皇は明主にてましましけれども、和歌をば好ませ給はざりけるにや、田原天皇の御子等の歌、何れも此の集にあるを、此の天皇當時初めの御諱白壁王にてましましける時の御歌あらば、尤も載すべき事なるに、一首も見えず。其の後の歌にも聞えねばかくは疑ふなり。諸臣も是れに依りて詠ずる事を物うくしける歟。桓武天皇より後數朝、此の道廢れたるが如し。中にも嵯峨天皇は詩文を好ませ給ひける故に、姫宮に至るまで詩を作らせたまひき。かくの如く久しく用ゐられざりける間に、此の道の傳へ絶えけるに依りて、さしも誤るまじき先賢も、云ひ傳ふる妄傳を然にこそと受けて、能く此の集を考へ見るまでの事もなく、勅撰と定めて撰者も夕月夜曉やみのおぼつかなさに、誰彼とは云ひけるなるべし。後の先達の說は、皆古今集序に付きてとかく沙汰せられたり。彼の序に、此の集の事を云へるには不審殘る事多ければ、姑らく指し置いて、唯定家卿の說を仰いで本集に付けて定むるにしく事なし。

按ずるに、代匠記の說誠によく考へたり。聖武、孝謙兩帝の勅撰にあらず、又諸兄公の撰にあらず、家持の書き集められたるならんといふ證ども猶あまた出して、うるさきまでいと〳〵長ければ、今は其のおほよそをあげたり。委しく知らんと思ふ人は、本書を見るべきなり。さて又賀茂眞淵が說は、

これとことなり、次に記すが如し。

賀茂眞淵萬葉考別記云。此の集今は二十卷あれど、實には一、二の卷と、今の十三、十一、十二、十四の卷ぞ本の三、四、五、六の卷にて、此の六つ卷を萬葉集とは名づけられし物とす。卷々の體古き新しきあり、それのみならず年月の次もいと亂れて見ゆ。故に深く考へて、今あらため正すこと左の如し。一、二今に同じ。三今の十三 四、五今の十二 十一、六今の十四 是れまでを萬葉とす。七今の十 八今の七 九今の五 十今の九 十一今の十五 十二今の八 十三今の四 十五今の六 十六今に同じ。十七、十八、十九、二十 同右の七より下は、家々の歌集にて萬葉にあらず。

又云。萬葉集は高野の御時孝謙天皇の天平勝寶の時を云ふべし。橘諸兄の大臣撰み給へりと、世繼が物語に見ゆ。されど高野の御時よりも、前聖武天皇の御代ならんと思ふ事あり、たゞ諸兄のおとゞの撰ぞちふは、古よりいひ傳へしにて、實にさりけらし。萬葉といふ卷一より六まで今の三、四、五、六にあらず。是れぞ此のおとゞ、上つ代より奈良の宮の始めまでの歌を撰みてのせられしものなり。然るを後世人は、今ある二十卷を一度に集めしものと思ひをり、諸兄のおとゞは、天平寶字元年正月薨じ給へるに、卷二十の末に同三年正月までの歌載せしかば然らずと云ふといへど、二十の卷などは萬葉の外なればきらひなし。

又云。考にいへる如く、此の集の中に古き撰みと見ゆるは、一の卷二の卷なり。それにつきては今の十三、十一、十二、十四とする卷どもも、おなじ時撰ばれしうちならんと思ゆ。何ぞといはば、其の一二には古き大宮風（おほみやぶり）にして、時代も歌もしるきをあげ、三には今の十三 おなじ宮風ながら、とき代も歌ぬしもしら

ぬ長歌を擧げ、四、五には今の十一、十二おなじ宮ぶりにして、代もぬしも知られぬ短歌を擧げ、六には今の十四古き東(アヅマ)歌を擧げて卷を結びたるなるべし。から國の古歌は、國風を始めとしたり。こゝには宮ぶりを先にて、國ぶりを末とせしものと見ゆ。かくて今の五の卷は山上憶良大夫の歌集ならん。今の七と十の卷は、歌もいさゝか古く、集めぶりも他と異にて、此の二つの卷はすがたひとしければ、誰ぞ一人の集めなり。今の十五の卷は新羅へ遣はされし御使人の歌どもと、中臣朝臣宅守の茅生娘子(チガミ)と贈り和(コタ)へしとをもて一卷とせしにて、また誰か集めしともしられず。今の十六の卷は、前しりへには古くよし有る歌もあるを、中らには歌とも聞えず戲れくつがへれるを載せて様ことなり。中に河村王、大伴家持の歌も入れしかば、古き集にはあらず。こは家持卿の集のうちにやあらん。今の三の卷てふより、四、六、八、九、十七、十八、十九、二十の卷々は、家持卿の家の歌集なること定かなり。かかれば古萬葉集といへるは、右にいふ六つ卷にて、其の外は家々の集どもなりしを、いと後の代に一つにまじりて、二十卷とはなりしなりけり。猶下にいふ。しか集(つど)へる上にては、一二の卷の外は何れをそれとも知られず、亂れにたるを、古のことをよくも思ひ得ぬ人、私に次(ツイデ)をしるせしものなり。仍りて三といふ卷より十六の卷までは、事の様も時代年月も前後(まへしりへ)になりてけり。故に今委しく考へて次を改め立てこゝろみるに、先づ一二は今の如し。次は今の十三を三とし、今の十一、十二、十四を四、五、六とするも上にいへるが如し。今の十を七とす。凡そ古歌なるが中に、藤原の古りにし里とよめる歌あれば、奈良の始めの人の集ならん。今の七を八とす。是れも古歌にて集の體右とひとし。今の五を九とす。末に天平五年六月の歌あり。今の九を十とす。天平五年の秋に、遣唐使の發船する時の歌あればなり。今の十五を十一とす。中臣宅守は石上乙萬呂と同じ年比に流されしと見ゆれば、天平十一年の比の歌どもなり。今の

八を十二とす。天平十三年と注せる歌あり。又久邇京より奈良の古郷へおくれる歌もあり。今の四を十三とす。久邇京の荒れたるを悲しむ歌あり、こは天平十八年九月より後の事なり。十六は今の如し。時代は上にいへるがごとし。十七今のごとし、末に天平二十年正月とあり。十八今の如し。末に天平勝寶二年二月とあり。十九今の如し。末に天平勝寶五年二月とあり。二十今の如し。天平寶字三年正月歌までにて卷を終りたり。かく年月の次でども定かにしるしてあるなれば、後に前しりへに亂れなりしこと明らけし。其の外にも代々の體わかれて卷の次でのしるきぞ多き。されば其の餘りかつ〲おぼつかなき事あるは、いふべくあらねば改むべし。○或人問。仙覺が挍合の時、多くの本をもてすと雖も、卷の次での事をいはぬは、本より今のごとくありけんやと。答。其の本に正しからねばこそ彼此せれどや、今の如くはあるめれ。かかれば總べて亂れたるにて、次でもいふにたらず。又問。さらばいつの頃よりか亂れつらんと。答。古今歌集序に、萬葉にいらぬ古き歌云々と書けるを、今その集に、萬葉の歌七首ぞある。かの序に書きしからば、萬葉を正し見ざらんや。是れ右にいふごとく、古萬葉といふは、一二と其の外云々の卷の事にて、他は家々の歌集なる故に、其の中より取りしを、今二十卷總べて萬葉と思ふ故に違ふならん。是れはた萬葉と家々の集と別あるを知るべき一つなり。かかれば二十卷混ぜしは延喜より後の事ならん。○又問。家持卿今年の歌を集めて、後に去年のを傳へ得て書かんには、前後もありなんやと。答。其の年月の前後あらば、いかで次の卷とせん。そのよしならば家持卿は卷の次では記さざりしならん。もし後に改めんものとして、得るまゝに記し置きしならば、心にあらぬ事しるべし。さらば今改むるは古人の意を助くるなり。されど此等は空しき論なり。抑も他の歌を集むるには、もし前後のありもせん、みづからの歌におきて、前後あるべくもなし。然るに此の卿天平十六年二月の歌は、今

の卷三に在りて、同人の天平五年八月の歌の、今の卷八に載りしをばいかゞいはん。是れ必ず今の三は八より下の卷とせではかなはぬなり。是れのみならず、此の類いと多し。もし考へば明らかならん。かかればやみがたくして改めたり。猶そしる人ありとてもありなん。我は世の中にかゝはらず親しき友とかたらひ、且百とせ後の友を待つのみ。以上萬葉考別記

按ずるに、眞淵が說は上に出せる聽傳記、神明鏡などに、始めは橘諸兄のおとゞ撰び奉られて、其の後つぎ〳〵撰び加へられたりといふ說にもとづき、考へたるが如くにて、卷の次第などまで改めたるは、いたく心を用ゐたりといふべく、また其の理も無きにしもあらず。さてむねとは、世繼は高野の女帝の御代、天帝勝寶五年には左大臣橘卿諸兄、諸卿大夫等あつまりて萬葉集をえらばせ給ふとあるによつて、ふるくよりしか云ひ傳へしならんと、眞淵はおもへりしなりき。然れども、僧顯昭が人丸勘文に、世繼に橘大臣の萬葉を撰ばれたるよし記せる本は僞りにて、證本にはなしといへる、顯昭その頃の物知りにて、空言いふ人にあらず。かならず據あることならんにつきて、今の世にある世繼物語は、かの僞本の所なるべければ、これは依るにたらず。淸輔朝臣袋草子の說も、世繼より後の說なり。確證は見えず。契沖法師がいへる如く、後の先達の說は、皆古今集序を本とせられたるものにて、萬葉を奈良の御時撰ばれたりといふは、古今をその鼻祖とすれど、只奈良の御時とては取りとめたる事にあらず、すべて後の世に生まれて千年にあまるむかしの事は、いよ〳〵知りがたき事なり。依りて人々の心のひくかたに付けて定むべきわざなるを、令世はしばらく契沖法師の代匠記をよ

しと思ふなり。

〔古萬葉集〕

○源順家集云。天曆五年宣旨ありて、はじめてやまと歌撰ぶ所を梨壺におかせ給ひて、古萬葉集よみときえらばしめ給ふなり。

源氏物語梅がえに云。さまぐ\のつき紙の本ども撰りいださせ給へるついでに、御子の侍從して宮にさぶらふ本共とりにつかはす。嵯峨のみかどの古萬葉をえらびかかせ給へる四卷云々。

袋草子云。此集末代之人、稱二古萬葉集一。源順が集にも古萬葉集にと云ふ事あり。是有二新撰萬葉集一。若しは菅家萬葉集之故歟。新撰萬葉集は延喜御時抄二出之一云々。五卷なり。

新猿樂記曰。古萬葉集、新撰萬葉集、古今後撰拾遺抄、諸家集等以見了云々。

羣書一覽、新撰萬葉集二卷、一名菅家萬葉集といふ。道眞公の撰なる故なり。一說に、是れ善卿の撰といへり。按ずるに扶桑畧記に曰。宇多院寬平四年九月二十五日、菅原道實公撰二新撰萬葉集一上下二卷。

按ずるに、類聚名物考云。俊明思ふに、萬葉集に古を冠らしめしは、これらや初めなるべき。菅贈大臣の撰び給ひしを新萬葉集といふにむかへて、これをば古といへるなりとあり。令世云。今の世の萬葉集を、延喜の比よりして、新撰に對へて古萬葉集といひし事、淸輔朝臣の說の如くなるべし。古き書に見えたるは順家集に出でたるを始めとす。又源氏物語に、嵯峨の帝の古萬葉集をえらびかかせ給へる四卷とは、嵯峨の帝は世に聞えさせ給へる御手かきなれば、かの古萬葉集の中より、よき歌ども

をえり出させ給ひて、かかせ給へるが四巻ある由なり。細流抄に、嵯峨天皇の手本などのため、歌を撰して書き給へるなるべし。萬葉全部にはあるべからずといへるぞよき。是れは寛弘の比さるものありて、希代の重寶にて、式部もそれを見たる事のありてぞ、かくはかけるものなるべき。袋草子の、新撰萬葉集は延喜御時抄二出之一とあるも同じ類にて、萬葉集の中より撰び出でて五巻となりたる新撰なるべし。されど其の本は今は傳はらず。菅家萬葉集の事を、或は新撰萬葉集と今はいふなり。かくてかの源氏の梅がえに、嵯峨の帝の云々といふをもて、かの帝の古萬葉集は序といふものを、後の人作り出でたり。うへもなき贋物(いつはりもの)なれども、初めは我が西山公なども誤りて、まことのものと思しけるを、後にぞひがごとなりとは知り給ひし。年山紀聞に、嵯峨天皇の古萬葉集の序といふもの、中御門宣胤卿より西山公かかせ給ひて、中院通茂公などにも問ひ合はせ給ひて、拾葉集開巻第一に載せたれども、後に西山公萬葉に熟し給ひて、これは僞作なる事をさとりて削り捨つべくおぼしけれども、既に奏覽をとげられたれば、其のまゝ止め給ふ由見えたり。篠崎金吾が和學辨云、嵯峨天皇の古萬葉集の序は僞撰なり。此の帝の時ひらかな字は出來たりといひ傳ふ。然れば今こそ人々自由にかけ、かなの出來たる當座は自由にかかれまじ云々。おもふに源氏物語に、嵯峨天皇の故萬葉集と書きし所あり。季吟の湖月抄に論あり、此の源氏の言葉を能きかこつけ所として、好事のもの僞はり作りしものを、是れにてやんごとなき人をもあざむきしと、羽倉齋物語せし以上といへり。かなの出來たる當座は自由にかかれまじといふは非なれども、なべての論はよしやんごとなき人とは西山公の御事なり。

又類聚名物考に、ちかごろ出來し扶桑拾葉集に、古萬葉集の序といふものの載せられしいかにぞや。あられもなきものを、いかなるをこ人のかくいひ出でけん、よむさへ人わろきものをやといへり。令世おもふに、其の序のつたなきこと笑ふにたへず。

嵯峨天皇古萬葉集序、これは世の中にちはやふることとなれば、神世ちかかりける時のみかどがと、人々の歌をかきあつめて萬葉集と名づけておほくの世つみてけれど、なほ和歌といふ名のあたらしきそひて、よみ人さへくちず世に聞え、富の緒川のたえずゆく末の人もまねべとて、はつ瀬あさくらの宮の天皇の御宇よりはじめて、和銅五年壬子の夏四月に、をさたのおほぎみを伊勢の齋宮につかはしけるときに、やすらの皇子と聞えけるみことのよ、うたまうけるまでこの集にいはれたる。

按ずるに此の詞いたく誤りなり。萬葉集第一卷々末曰。和銅五年壬子夏四月、遣ニシ長田王ヲ于伊勢ノ齋宮ニ時、山邊御井ニテ作ル歌、山邊乃御井乎見我氐利云々とありて、卽ち長田王のよめる歌なり。さて其の次に、寧樂宮長皇子與志貴皇子於佐紀宮倶宴歌といふ題にて、秋去者今毛見如云々と云ふ歌あり。題の寧樂宮は元明天皇の御宇にと申す事なり。それを古萬葉の序には、長田王の伊勢にゆきたる時の事と見誤りて、かつは寧樂の二字を野須良と讀みて、長皇子の長字をば取り捨てて、寧樂皇子としてやすらのみこと訓みしものなり。その上、源氏物語には四卷とあるを、是れはわづかに唯一卷のみの事なり。かたがた取るに足らぬ事どもなり。此の事は、いぬる文政十年の頃、やごとなき御あたりより、わが水戸の殿にあつらひ給ひて、扶桑拾葉の註釋をものせさせ給へるをり、令世其の仰せを蒙り

て、久米博高と諸共に考へける時に記しつけたりしを、彼の註釋は未だ全からず、また大部のものなれば、早すぐうつし取りて世にひろまるべきにもあらねば、今又こゝにも記して、したしき友がきに見せんとなり。

〔萬葉集流布〕

袋草子云。萬葉昔は所在稀云々。而俊綱朝臣法成寺寶藏本ヲ申出書二寫之一。其後顯綱朝臣又書寫ス。自レ此以來多流布シテ至二于今一在二諸家一。

東鑑二十一巻建暦三年條曰。十一月大二十三日巳丑天晴。京極侍従三位定家卿獻二相傳私本萬葉集一部於二將軍家一。是以二條中將雅經依被レ尋也。就レ之去七日羽林請取送進、今日到著之間、廣元朝臣持二參御所一、御賞翫無レ他。重寶何物過レ之乎由有レ仰云々。

按ずるに、此の說の如くは昔は今の如くに世にひろく萬葉集をもてあそばざりし事おして知るべし。

〔訓點註釋幷書體〕

源順家集云。天暦五年宣旨ありて初めてやまと歌えらぶ所を梨壺におかせ給ひて、古萬葉讀みときえらばしめ給ふなり。召をかうぶるは河內掾きよはらの元輔、近江掾紀時文、讃岐掾大中臣能宣、學生源順、御書所のあづかり坂上望城なり。

又云。抑も順梨つぼには、奈良の都のふる歌よみときえらびたてまつりし時には、云々。

左大將家六百番歌合判云。萬葉集に二樣に點ちたる由左方人申、云々。彼の集は源順が和せる後、假名

付來也。然るに順が點本于㆑今難㆑得、たかた(竹)け(竹)以㆓誰人之點㆒可㆑爲㆓指南㆒哉。師時卿說以同前也。

按ずるに、代匠記云。此の集の根本の點は、天曆の帝の勅に依つて梨壺の五人是れを奉れり。順家集曰云々。かかれば此の時點はよかるべきを、其の後少々失せけるにや、仙覺抄に古點とて出して、字點相叶はざるを改められたる處多し。誠に古點に不審なる事多し。今流布する本の點は仙覺諸家の名本を集めて、度々挍合し、新點をも加へられて、其の功すくなからず云々。今云。六百番判詞によるに、順が點の本は早くより正しきは傳はらずと見えたり。

八雲御抄卷一云。萬葉集抄（五卷抄貫之撰云々。二十卷抄不㆑知㆓撰者㆒。）

按ずるに、代匠記云。此の後仙覺律師一部に亙つて抄せらる。八雲御抄に、五卷抄と註せさせ給へるをば、袋草子には、彼の序を引くに不㆑知㆓作者㆒といへり。奥義抄などにも序をのみ引きて、其の外引きたる事なければ、本は早く失せて序のみ殘りたる歟。二十卷抄と註せさせ給へるは、顯昭の袖中抄等にまれ〳〵引かれたる萬葉抄と有る本歟。其の義を見るにはか〲〳〵しきものとは覺えず。今世按ずるに、天曆の帝の順等に仰せて、萬葉をよみとかしめ給ひしは、此の集註釋のもとゐなるべし。其の後つぎ〳〵に點を加へられて、古點、次點、新點等の名あり。

詞林採葉抄曰。天曆御宇、詔㆓大中臣能宣、淸原元輔、坂上望城、源順、紀時文㆒、於㆓昭陽舍㆒（梨壺）、加㆓和點㆒此號㆓新點㆒。又追加點人々、法成寺入道關白太政大臣、大江佐國、藤原孝言、權中納言匡房、源國信、源師賴、藤原基俊等、各加點此名。次點又權律師仙覺、加點是呼㆓新點㆒。抑新點事、後嵯峨院御宇、獻㆓上

仙洞ニ仙覺奏狀葉云。寛元四年夏比、抄ニ出諸本ヿ無點歌長短旋頭合百五十二首云々。任ニ浮沈於龍池之水ニ叡賞不レ棄、待ニ許否於鳳闕之雲ニ而已。此狀依達ニ天聽ニ有ニ叡感ヿ萬得果之由、賜ニ後嵯峨院宣ニ被レ召ニ入續古今集ニ訖。

按ずるに、採葉抄にいへるおもぶき、此の集の訓點のこといと詳かなりといふべし。かくて昔は萬葉の書體(かきざま)、まんなのうたにまたかなを並べて二行(ふたくだり)に大きにかきたるを、仙覺あらためて眞名にのみかきて、其のかたはらに假字を小さく付けたりとなり。

仙覺萬葉集奧書曰。抑先度愚本假名者、古次兩點有ニ異說ヿ歌者於ニ漢字ニ左右付ニ假字ニ畢。其上猶於ニ有心詞龜曲歌ニ者加ニ新點ニ畢云々。文永三年八月十八日權律師仙覺。

一本奧書曰。寛元四年十二月二十二日於ニ相州鎌倉比企谷新釋迦堂僧坊ニ治ニ定本書ニ寫了。同五年二月十日按點了。又重挍了。抑萬葉集和字出來之後者、漢字歌一首書了、又更書ニ假名歌ニ事常習也。是者不レ知ニ漢字ニ男女等爲レ令ニ見安ニ歟。然而令レ暴ニ往昔之本ニ故一向以ニ漢字ニ書寫了、而後漢字之傍點付其和耳也云云。權律師仙覺生年四十五。

萬葉仙覺抄云。古點の習ひ漢字歌書之畢又交ニ假名ニ歌書レ之、仍て如レ此落字訛謬等を人露顯せさるか。

按ずるに、彼の五卷抄二十卷抄亡せて後は、此の仙覺律師が註ぞはじめて萬葉をくはしくときたる書にて、これに由阿法師が詞林採葉抄をそへて、うへなき物にもてはやしけるなり。

正徹物語曰。萬葉には仙覺がしたる註釋といふものを、阿彌陀が作りたる詞林採葉集と、又仙覺がした

る新註釋と云ふものと、此の三部をだに持ちたらば、人の前にても萬葉はよむべきなり。この新註釋といふものが萬葉には重寶なり。

按ずるに、今の仙覺抄は新註釋にやあらん、一部のみ傳はりて、仙覺が註二部は傳はらねば、いづれとも知られず。

兼良公さよのねざめ（此のさよのねざめを、扶桑拾葉集、年山紀聞などに、兼良公とあるは誤りなり。）曰。仙覺といひし者萬葉のむねを得て、三百餘首、順などだにも讀みとかざる點を加へはへり。

落書露顯（今川了俊）曰。昔の仙覺律師が說とて、由阿法師といひし者あまたの人々に教へしより、此の秘說も今は世に下りたる上は、我等ばかり非レ可レ祕也。

筑波問答云。この比は萬葉はやりてはへり。誠に歌の根源にてあれば、よく〱御覽ずべきにや。

按ずるに、かくの如く昔は萬葉を解く人いと稀にして、仙覺が抄と、由阿が採葉を金村玉條（こがねのこずゑたまのえだ）といつきもたりしを、今の世となりてわが西山公、萬葉をこのみとかしめ給ひて、契沖阿闍梨にもたづねとはしめ給ひ、彼の法師代匠記などいふ物を書いててよりは、此のまねび世に廣まりて、今は萬葉をとく人秋野の千種かずをあまたに、おのがじゝ作り出せる書らも、何くれとかぞふるに遑あらぬばかりなりぬ。これみなそのねざしは、西山の公の恩賴（みたまのふえ）なり。此の事は余（わ）が聲文私言にもいひたりき。

〔假名萬葉集〕

類聚名物考云。御堂關白殿（道長公）より上東門院へまゐらせられし本なりと云ふ。

〔類聚萬葉集〕

同書云。敦隆の作なりといふ。今印行の北村季吟が作れる萬葉拾穗抄の本文を假名に書きて、傍に漢字を塡めしは、類聚萬葉集の本文を用ゐて書けるなり。あしきことも多かれども、今萬葉集とは異本なり。書き誤りも多かるべし。

古今和歌集二十卷　一冊

歌千九十九。此中長歌五　袋草子

八雲云。古今千百首、序十一。

古今顯昭抄云。古今和歌集今註云。或人云。撰二定千首一不レ入二貫之自歌一、奏覽之後、被レ入レ加貫之歌百首云々。

拾芥抄云。古今集二十卷　千百首或千九十九首。

部立　春上下、夏、秋上下、冬、賀、戀自レ一至レ五、哀傷、雜上下、短歌、旋頭、俳諧、大歌。

延喜五年乙丑四月十五日。奉レ詔御書所預紀貫之爲二棟梁一奉レ之。大内記紀友則、前甲斐目凡河内躬恒、右衞門府生壬生忠岑等撰レ之。有レ序假名貫之、眞名依二紀貫之命一紀淑望書レ之不レ入二萬葉歌一云々。但誤有七首上古人不レ註レ名或註レ左不レ入二當帝御製一。延喜五年奉仰延喜末奏聞之題不レ知二讀人一不レ知書レ之。

京極中納言入道抄云。序云。延喜五年四月十八日、紀友則、同貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑等撰レ之云

云。件集中、延喜五年以後歌多入レ之。若後日被ニ加入一歟。

勅撰次第曰。古今集醍醐天皇御在位。

春歌上　巻頭歌

ふる年に春たちける日よめる　　在原元方

年の内に春はきにけり一とせを去年とやいはん今年とやいはむ

巻軸歌　　藤原敏行朝臣

千はやふる賀茂の社の姫小松よろづ世ふとも色はかはらじ

八雲御抄巻一云。古今、延喜五年四月十五日、奏詔紀貫之爲ニ棟梁一撰レ之。友則、躬恒、忠岑、同助成。部次第春上、春下、夏、秋上、秋下、冬、賀、離別、羇旅、物名、戀一二三四五、哀傷、雑上下、雑體、短歌、誹諧、大歌所歌、

勅撰次第云。假名序貫之、眞名序紀淑望。延喜五年乙丑四月十八日奏レ之。

貫之假名序曰。萬のまつりごとを聞召すいとま、もろ〳〵の事をすて給はぬあまりに、古の事をも忘れじ、ふりにし事をもおこし給ふとて、今も見そなはし、後の世にも傳はれとて、延喜五年四月十八日に、大内記紀の友則、御書の所のあづかり紀の貫之、さきの甲斐のさう官凡河内の躬恒、右衛門の府生壬生の忠岑等に仰せられて、萬葉集にいらぬ古き歌みづからのをも奉らしめ給ひてなむ。それが中にも、梅をか（春）ざすよりはじめて、（夏）ほとゝぎすをきき、（秋）もみぢを折り、（冬）雪をみるに至るまで、又つる龜につけて君を思ひ（賀）人をもいはひ、秋はぎ夏草を見て（戀）つまをこひ、（羇旅）あふ坂山にいたりて（離別）たむけをいのり、（雑體以下）あるは春秋夏冬にも

いらぬくさ〲の歌をなん選ばせ給ひける、すべて千うたはた巻、名づけて古今和歌集といふ。

按ずるに、正しく詔を下し給ひて、和歌を集むる事は、古今を始めとす。又歌集に假名の序つくる事も、四季、戀、雜と部を立つる事も、古今を始めとす。さるはまづ此の集も、はじめには部をたてずして、萬葉集などの體(さま)にあつめられたるにや、續萬葉集とぞいひけるを、ふたゝび詔ありて部類をわかちさだめて、今の如くえりとゝのへて、古今和歌集と名づけられたりしなり。

紀淑望漢序曰。爰詔二大内記紀友則、御文所預紀貫之、前甲斐少目凡河内躬恒、右衛門府生壬生忠岑等一獻二家集竝古來舊歌一曰二續萬葉集一。於レ是重有レ詔。部類所レ奉之謌勒爲二二十巻一名曰古今和歌集云々。于レ時延喜五年歳次乙丑四月十八日、臣貫之等謹序。

かくの如くある其の證なり。さて漢序と假字と序二つある事、昔より今に至るまでくさ〲の論あれどもさらに定らず。今令世が思へるは凡そ詩集はもとより論(あげつら)ふに及ばず、歌の集、或は宴會の時、あるは行幸の時歌などにも、昔は皆漢字に序はかきたる事、本朝文粹にある和歌の序、又は紀氏が新撰の序などを以て知るべし。さるは昔は、このひらかなの文章といふものはなかりし故に、事を記さんには皆漢字にかきしものなれば、古今の序は、始めは淑望して貫之に代りて漢文にかきたるを、後にかなの文にあらためたるものなるべしとぞ思ゆる。然らざれば漢序のあるべき理はなければなり。しかるに此の假字の序をはじめて歌集につけたるは、たぐひもなきわざにて、かなふみの序といふものこれよりさきにも見えず。又後にも此にならぶべき序の見えぬは、まことにあやしくたへなるわざ

ならずや。八雲御抄巻一にも、古今序は歌の眼なれば不レ及二子細一と見えたり。さて又かな序漢序の論、いさゝか古人(ふるきひと)のいへる事もあぐべし。

袋草子曰。古今集和歌千九十九首。此中長歌五首。延喜五年四月十八日、令二友則、貫之、躬恒、忠岑等一撰レ之云々。眞名序或說には、假名序を感歎して淑望竊摸レ之眞名云々。或說には爲レ書二假名序一。先令二淑望一書二土代之草一云々。予案レ之件序實は紀家筆云々。淑望竊摸レ之儀相違也。非二大事一何可レ假二嚴閣之筆一哉。土代之儀ならば、件序摸二假名一筆之計也。就レ中歌仙之得失を註レ之條、似二貫之所一レ爲。重案レ之貫之が先以二假名一書二土代一令レ書二眞名序一歟。而假名序流布之條有レ疑。基俊本にぞ初めに書二眞名序一、奥に假名序を書いて侍し、若し有二所存一歟。又陽明門院御本延喜御本云々。無レ序若可レ有レ序否之議にて、兩樣雖レ書レ序、遂に上奏本に不レ載レ序歟。而後日各加レ之歟。但仲實之撰如二目錄一、後日令二上奏一也。而延喜七年大井行幸歌合歌二首在二此集一。件歌等諸本無二相違一猶以不審。予談會顯廣或人之次以問二此事一。答先年相二尋基俊君之處一答云。延喜五年四月十八日上奏日也。序貫之以二假名一書二土代一令二淑望草一者也。而依有レ興不レ棄二假名序一追案二此事一猶基俊義宜歟。能因家集序云。如彼天曆以後三代之明主降レ勅恢二玆道一四人歌仙奉レ詔獻二家集一。是以王道股肱之臣訪二於衆棟詞儒林一。河漢之才以刊首卷而題序云々。如レ此用二眞名序一歟。

八雲御抄二云。古今眞名序。非二賁下儀一、貫之以二淑望一令レ書二假名一貫之。

古今顯昭抄云。假名眞名兩序之事、或說貫之草二假名序一、誂二紀淑望一、令レ書二眞名序一云々。敦光朝臣申二讚岐院一曰。實者父紀中納言長谷雄之筆也。借二淑望之名一草レ之歟。淵變爲レ瀬等之句、淑望難レ書歟云々。

是和歌之序之秀逸也。能因家集序云。如ニ彼天暦以往三代之明主一降レ勅恢ニ玆道一、四人之歌仙奉レ詔獻ニ家集一、是以王道股肱之臣訪ニ於衆心一而探ニ詞儒林一河漢之才冠ニ於卷首一而題序云々。

抑古今序者、和歌之肝心也。是故四條亞相粗以註レ之。其後相公禪門幷淸輔朝臣等續又註レ之。然而皆省畧猶殘ニ疑殆一、賢才尙爾淺慮宜レ及乎。纔載ニ管見之所一レ勘愁備ニ竹園之高覽一、雖レ非ニ祕藏一莫レ出ニ禪窻一矣。

壽永二年極月中旬　顯昭註之

〔かな眞字兩序の事〕

親房古今集註。此の集に眞名假名の二序あり、眞名序は紀淑望と云ふ人是れを書す。或說には、淑望は増なりければ、先づ土代を漢字の文章にて草せしめて、是れをかなに和げて書けり。仍りて眞字序は奏覽の本には非ずと云へり。或說には、貫之が書きたる假名序をば、増淑望以ニ漢字一換作すとも云ふ。何樣にも彼の眞名序は奏覽のものとは見えず。隨つて家々證本にも不レ載レ之。或又奧に書き載せたる本もあり。是れは非ニ本儀一、假名序におぼつかなき事の眞名序にて料簡せらるゝこと等あるべし。仍りて才學の爲に書き加ふかとみえたり。而るを新古今の時は、いかやうに治定せられけるにか、毎年本古今を撰せられしに、眞名假名の二の序を、集の初めにつらねて被レ載たり。頗不審事なり。

〔撰　定〕

假名序曰。萬葉集にいらぬふるき歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなん。

八雲御抄卷二云。古今不レ入ニ萬葉集一歌云々。但誤有七首上古人は不レ註レ名、或註レ左不レ入ニ當帝御製一。

延喜五年奉レ仰、延喜未ニ奏聞一之、題不レ知讀人不レ知と書く。

按ずるに、萬葉考別記云。古今歌集序に、萬葉集にいらぬ古き歌云々と書けるを、今その集に、萬葉の歌七首ぞある。かの序に書きしからは、萬葉を正と見ざらんや。是れ右にいふごとく、古萬葉といふは、一二と其の外云々の巻のことにて、他は家々の家集なる故に、其の中よりとりしを、今二十巻總て、萬葉と思ふ故に違ふならん。古今集打聽に、眞淵又云。萬葉集に入りたるも、此の集に七首まで見えたり。又詞は異なるやうにて實は萬葉の歌なるも見ゆ。こゝは彼の集に入らぬをといへば、必ず入れまじき事なるを、いといぶかしき事なり。類聚名物考の說も、全く是れに同じ。

今云。萬葉の歌の此の集に入りたるは、自からまぎれたるものと見るべきなり。深く疑ふに足らず。

袋草子云。延喜七年大井行幸歌合歌二首在ニ此集一。作歌等諸本無ニ相違一、猶以不審。○又云。上奏以後歌人之條、貫之不レ堪ニ優美一追入レ之也。仍奏覽本には無ニ作歌等一云々。

按ずるに、袋草子此の外にも貫之が櫻ちるの歌を追うて入れざる事など、くさぐの論あれども、撰定の後にも又加へたるものとするに何のさはりもなし。

親房古今集註（續後拾遺集までを擧げて。）已上代々撰集次第如レ此、分レ部調レ巻次第大概は、以ニ古今一爲レ本。雖レ然少少相違事等有レ之。歌の數は古今序に所レ載千首也。金葉詞花は巻の數も十巻、歌も千首に不レ足。新古今の時初めて二千首を集めらる。玉葉の時四千首に增す。續後拾遺の時千首に減ぜられ、畢凡集を承る人は、皆時に取つては宗匠なり。雖レ然上代には強宗匠の家とて相續之儀無之、只時の堪能なれば如レ此の撰者等

をも承るなり。中古以來道の宗匠と云ふ事出來、所謂俊頼朝臣は大納言經信卿の子なり。父卿此の道の宗匠なり。俊頼是れを相續して金葉集の時の撰者たり。六條修理大夫顯季此の道の好士なり。其の子息顯輔卿相續して、依レ有二名譽一詞花集の時撰者たり。仍りて集し已後一流宗匠たり。六條一流と云ふは是れなり。又俊頼朝臣同時に前左衞門佐藤原基俊と云ふ人堪能にて、此の道を諸人は此の基俊をもて師範とす。俊成卿專ら此の人の說を承けて、而も堪能たりしに依つて、千載集の時撰者たり。是れより是の流繁昌して、今に至るまで代々撰者たり。餘流頗る有名無實になり、又俊成卿の千載集を撰ぜしより、撰者相續已七代、撰集九ヶ度に及べり。如レ此諸流も多く、撰歌の體も一樣ならねども、以二古今一本とし、以二貫之一道の祖宗とす。然れば此の道を好まん輩は、いかにも此の集を能く稽古し、序の赴をも沙汰し明らめば、おのづから此の道に深き人たるべし。

〔撰和歌所〕

貫之家集曰。延喜御時やまとうた知れる人を召して、昔の人の歌奉らせ給ひしに、承香殿(しやうきやうでん)のひんがしなるところにて、歌えらせ給ふ。夜のふくるまでとかういふほどに、仁壽殿のもとの櫻の木に、郭公の鳴くを聞召して、四月六日の夜なりければ、めづらしがりをかしがらせ給ひて、召し出でてよませ給ふに奉る。

　こと夏はいかゞ鳴きけむ郭公こよひばかりはあらじとぞおもふ

按ずるに、此の承香殿の東にて歌をえらばせ給ふ事、和歌所といふ事のねざし、此の時に始まれり。

此の事は袋草子拾芥抄にも見え、又天暦の梨壺などの事は、別に委しく考へて終りに出せれば、こゝにはみなもらしつ。

大鏡云。延喜御時、古今撰ぜられしをり、貫之はさらなり忠岑や躬恒などは、御書所にめされて候ひけるほどに、四月二日なりしかば、又しのび音のころにて云々、歌、このよひばかりあやしきぞなき、これは少したがへり。

【奏覧】

假名序云。延喜五年四月十八日に、大内記紀の友則云々に仰せられて云々。

按ずるに、此の序にては、四月十八日にまづ初めて詔をくだして、歌えらぶべきよし仰せられて、奏覧の日はそれより後のごと聞ゆれども、猶此の日を古今集奉れる日と定むべし。

漢序曰。于レ時延喜五年歳次乙丑四月十八日、臣貫之等謹序。

これ上奏の日のよしなり。袋草子に、此集宣下幷奏覧之年月不レ審。如假名序延喜五年四月十八日、仰二其々等一、不レ入二萬葉集一歌令レ奉二古新一云々。此日之宣下歟。如二眞名序一、延喜五年四月十五日（本十八日僻事歟）臣貫之等謹序云々。又上に出せる貫之家集を引きて、六日は十八日の誤りにて、これ上奏の日ならん歟といひ、俊成卿に問ひたるにも、十八日上奏日なりと答へし由を載せたり。

扶桑略記曰。延喜五年四月十五日云々。御書所預紀貫之撰二進古今和歌集一部二十卷一（日本紀略同。）

八雲御抄二云。古今延喜五年四月十五日、奉レ詔紀貫之爲二棟梁一撰レ之。

按ずるに、八雲なるは十五日に宣下ありたるが如し。されども五年四月十五日に宣下ありて、十八日奏覧をとげん事あるべくも覺えねば、なほ奏覧の日を八雲畧記などには十五日と記したるなり。是れはいさゝか眞名序などとは異なり、あやしき事なり。扶桑畧記、日本紀畧等に、十八日を誤りて十五日とあるを、八雲には其の誤りを傳へて記し給へるにもやあらん。

假名序長明無名抄云。古人云。かなにものかく事は、歌の序は古今のかな序のを本とす。

羣書一覽云。假字にて文章をかく事、此の貫之の序幷大井河行幸の序をはじめとす。これより前はみな漢文にて書きたり。此の說鴨長明無名抄にも載せたり。定家卿自筆の古今集二本ありて、貞應二年の奧書に、嫡孫に傳へて將來の證本とすと書かれたるを貞應本といふ。これにはかなまなの序二つながら入れり。又嘉祿二年四月九日の奧書あるを嘉祿本といふ。之れにはかな序のみありて、眞名序を載せず。二條家には貞應本を用ゐられ、冷泉家には嘉祿本を用ゐらるゝといへり。扨かな序の事は、榮華物語に、後撰集撰せらるゝ時、かな序を載せられむと思召しけれど、當時に貫之ほどの人なしとて、その事やみたるよし書きたり。眞名序は本朝文粹にも載せられ、公任卿の和漢朗詠にも、此の序の内六句を入れられたれば、いづれも高名の作文なるべし。

〔古今集證本〕

榮華物語御もぎ云。（第十九巻）禎子内親王御裳著のをり、（彰子宅）土御門殿より歸らせ給ふ所に云く、二日の夜さり歸らせ給へば、（禎子）一品宮の御おくり物に、貫之が手づから書きたる古今二十卷（此の自筆の本、小野皇太后宮の御もとにて、人丸影と共にやけたる由、）

著聞集に見えたり。(兼明親王)みこひだりの書き給へる後撰二十卷、道風がかきたる萬葉集などをぞ奉らせ給ひける。世にならめでたきものどもなり。圓融院より一條院にわたりたりけるものどもなるべし。世に類あるべきものにもあらずなん。

袋草子云。古今證本陽明門院御本(貫之自筆)、是延喜御本相傳也。後顯綱朝臣申し賜はり、其の後轉々して於二故公信朝臣許一燒二失之一、此本無序也。小野皇太后宮御本(貫之自筆、假名序也。)於レ宮燒二之失一、以件本之流通家朝臣自筆本是也。其由被レ書二表紙一。花園左府御本(貫之妹自筆假名序)是閑院贈太政大臣本轉來云々。所レ令レ進二新院一也。其後不レ書。是等本皆無二相違一異二普通本一歟。

古今著聞集に、人丸の影の傳はりたる事をいふ所に云。兼房朝臣の正本は、小野皇太后宮申しうけて御らんじけるほどに燒けにけり。貫之が自筆の古今も、其の時同じく燒けにけり、口惜しき事なり。

按ずるに、こゝに見えたる本どもは、いづれも皆正しく宜しきものにて、まことに類なき寶なんめりしを、やうやく燒けうせなどして、正しき本世にうせたりしは惜(あた)らしむべき事なり。其の後は定家卿の定められたる本をもて、善本とはするなり。

井蛙抄云。信實朝臣女三人あり。みなよき歌よみなり。藻壁門院少將は殊に秀逸あり、(新勅)おのがねにつらき別れのありとだに思ひもしらで鳥やなくらむといふ歌を感て、京極黃門老後に、古今を書きてあたへらる。奥書に、國母仙院少將殿、依レ爲二此道之堪能一、不レ顧二老眼之不一レ堪レ書二寫之一。云々。

又曰。六條內府被レ仰云。龜山院御時三代集作者、賦物にて御連歌あるべしとて、宗匠に仰せられて、

後進ぜられけるを、御前資平卿とわが身と、祗候して書寫し侍りしに、源尙純を爲兼見て、あれは常純にてこそ候へと申す。宗匠爲世卿尙純の條、勿論定家自筆本如然候よし、申され候ひしを、猶常純之由論じ申しける時、勅定に急ぎ古今本を可レ披見一由、被レ仰レ下ける時、召しよせられて、備二叡覽一、尙純條無二子細一、定家卿貞應本傳之本、嫡孫可爲將來證本之由、加奥書本也。爲兼閉口事體ゆゝしかりし由被レ語申しき。

按ずるに、羣書一覽云。此の集證本の事、定家卿自筆の本、先づ世に流布する處兩種あり。後嵯峨院の嘉祿二年四月九日にかかせ給へるを嘉祿本と云ふ、俊成卿用ゐたまへる本の通りなり。亦同じ御時代貞應二年七月にかかせたまひて、傳二于嫡孫一爲二將來之證本一といふ奥書の本を貞應本といふ。かなまなの兩序あり、實に證本なるべし。

今川了俊和歌不審曰。爲明卿爲定卿不快の後、古今集を御懷中候て、諸亭にて文字讀みなど候て、此の說は我こそたしかに傳へて候などと仰せ候ひしをば、あまりなるやうに人も申し云々。

按ずるに、定家卿の自筆貞應の奥書の本、藻壁門院少將に贈られし本、又は爲明卿の懷中の本など、皆しかるべき證本なるべし。されども定家をいたく尊みあがむるの餘り、貫之が自筆の本をすてて、定家卿の證本を用ゐるに至るは、わらはしき事ならずや。

伊勢貞丈の武藏鐙に云く。細川玄旨詠歌大概抄云。故禪閤仰せられし貫之が奏覽の古今とて正本と思へり。至寶ながら望みなき由のたまへり。其の故は、定家卿本を定むる時、諸本を取捨して料簡を加へて、

將來の家の證本と奥書分明に見えたり。二條家を習はん輩は、京極黄門以前の本は用ゐるべきにあらざるにや云々。貞丈云。集の撰者貫之を輕んじて、後の定家を重くす。家を立つる者の偏執我慢如レ此、諸道皆同じ。如レ此事にては正理に違ひ、其の本道に至りがたし。

按ずるに、兼良公玄旨法印の說わらふべく、貞丈の論はうべなりといふべし。上田秋成曰。今の本は貞應嘉祿の昔、京極中納言の卿のあまたの本どもを集へて考へ合はせ、御みづからの心とし給へるを採りて、家に遺させ給ひしを、後々の世におし廣めて、皆是れによる事となれりき。或御說に、此の集既に京極黄門の定本あり、紀氏の古本とて强ひて求むべからずと聞え給へるを、我が友まさのりがいへるは、世に紀氏の古本なりと云ふも、猶いにしへならぬ事どもの多く、且彼是ゆきあはぬ書きざまをも思しわづらひてぞ、彼の卿の定本をのみ採り用ふべく、定じおかれ給へるならむと、うべさることわりにも有りぬべし。しかはあれど、今有る本をのみ推戴きて、古本は必ずしも採るまじきものに定ぜむは、いよゝ古の事の心に遠ざかりもてゆくらんぞ、ほとほとなげかはしからずや。よし貫之の筆にありとあらずば、しばしおきて、いにしへの假名書きしたらむは、必ず捨てずして、こがねいさごのけぢめ見するつとめ、今はなすべき時世にこそ。そは此のかたの學びのみにもあらずと承る。

古今打聞附言 此の說をよしといふべし。

〔貫之自筆古今集〕

これは上に引ける榮華物語、袋草子などに見えたるは、まことの貫之の自ら書かれたる本なるを、そ

れはみな燒けうせたる由、上に出せるが如し。さてこゝにあぐるは、今の世にある貫之筆といふもののわきまへなり。

眞淵古今打聽秋下云。我が門のわさ田もいまだ刈りあげぬにまだきもみづる神なびの森。是れ貫之筆と云ふに、かく有る今の本には、かみな月時雨もいまだふらなくにかねてうつらふ神なびの森、といふ歌ありて右の歌なし。貫之筆といふ方には神無月の歌なく、かたみにたがへり。六帖の森の題にも、我が門の歌ありて三の句かりあげねば、四の句かねてうつろふ。神無月のうたなし。げにも秋の部と云ふに、神無月時雨もいまだといふはいぶかし。是れをしひて神無月のと、のの一言を入れて見る事と說きなせれど、彼の五月まつ花橘のとよめる如くにことわらでは、心ゆかず。よて貫之筆と云ふ方をよしとす。

同書附言に云。秋成云。秋の下の卷は貫之の筆なりといへるを得られしか。猶いにしへならぬ疑ひもあれど、今ある本にはいと勝りたりとて、とられたる其のことわりの宜しきは、彼の卷にとかれしを見よ。○又云。我が鄕に或人の藏めたる第十八雜の卷紀氏の筆なり。それを正しく寫せしといふを見しが、是れも彼の筆にはあらじと思ふものから、いにしへなりと見ゆる事のあれば、所々に牽き合はせておのれいひつ。○又云。假名序、紀氏の筆なりとて、或人の家に在るを見しが、世に古註とて、今の本には細書したるをも、是れには本文の連に書きつゞけたり云々。

同書秋成が跋に云。或人の家に藏めて紀氏の筆なりと云ふが、いまの本にはたがへる處凡そ八十餘箇見えたり。其の中に就て、こは古ざまなりといふ事もあれど、大かたは疑はしく、假字もすべては古法なる

中に、こやいかでかくと見ゆるもあり、是れを或人の前に見てかたられしは、是れ實に紀氏の筆のまがふべくもあらぬものなり。是れには古註と云ふも、本文の連に書き續けられしに附いても、彼の同類和歌集に、崇徳院の御本と云ふにも、此の註あり、異議あるべからずといはれたれど、此の古註の事は顯昭法橋も多くうたがひおかれたれば、いづれ議論ある事なり。是れにつきても、貫之と俊頼と筆つきのよく相似たるを、鑒定の人も見煩へるよしあり。寛永の比奈良人松屋元重と云ふが日記の中に、洛誓願寺の安樂庵策傳がもとへ招かれて參りたる其の日の牀飾に、貫之古今の卷物、但し俊頼筆なりともと記されたるを見るにも、そのかみより見あかちがたかりしは知らるゝなり。是れによりて思ふに、此の紀氏の筆なりといふは、俊頼朝臣の唯手習の爲などに書かせ給ひしにて、事の義、假名の法なども、しひて正し給はで、筆のあゆみのすゝめるまゝ、墨のつらくかわかぬまゝに、文と註との差別なくものせられしにやあらん。作者の筆ならじと思ふ事は、古言の心わきまへたらん人は、大かたにしらるべきなり。是れをも強ひて紀氏の筆なりといはむは、彼の小野の道風が書ける朗詠集の語草にやたぐひすべき。○又曰、村上天皇の御時天徳四年の火ありてより、圓融三條の御代々、後朱雀の長元元年まで、凡そ七八度の災ひして、いにしへの寶や書籍や何やのものも、大かたに燒け亡びたらんには、又いづれの書も正しきは傳はらで、彼此に寫しとらせ給ふが多からむ、云々。

按ずるに、貫之自筆といふは俊頼朝臣のなるべしといへるは、さる事にや。我が彰考館に、此の朝臣の十五番歌合といふものを、其のまゝに書を寫せるあり、古のさまにて、もしも俗のつねならずいと

めでたきものなり。是れを或は貫之ともいふにて、秋成が説もうべなはるゝなり。かくて此の古今集に傳授といふ事後にいできて、いみじき大事とすることとなり。此の事は末に附錄といふものに委しくいふなり。

榻鴫曉筆抄巻十七云。或人古今二十巻の異名、隨分の祕事とてをしへ侍る。

第一　ふるとしの巻	第二　はつ花の巻	第三　藤なみの巻	第四　はつ秋風の巻
第五　山かぜの巻	第六　はつ時雨の巻	第七　さゞれ石の巻	第八　うき雲の巻
第九　もろこしの巻	第十　うぐひすの巻	第十一　あやめの巻	第十二　あだ夢の巻
第十三　おもひねの巻	第十四　花がつみの巻	第十五　おぼろ月夜の巻	第十六　わたり川の巻
第十七　うきふねの巻	第十八　あすか川の巻	第十九　ゆふがほの巻	第二十　はつ春の巻

異名分類抄云。堯憲深祕抄にも載せらる。尤も相傳祕事の由なり。但し深祕抄には、第三花なみの巻、第七さしぐしの巻　第十三おもひの巻、十八九なし。其の餘は同じ。又深祕抄には、別に今一通りの巻々の異名見えたれども、さのみはと今はいはず。

今按ずるに、古今相傳次第といふ物に見えたるも、亦これに同じ。其の中十一、十二、十六、十八の名なし。

常縁聞書云。續後撰二十巻に、亭子院位にましましける時、いまだ御子にて、正月はつ子の日、わりごてうして后宮の御かたに奉らせ給ふとて、書き付けさせ給ひける十一二のころの御歌が、御卽位延喜御製

十三歳なり。

二葉よりけふをまつとはひかるとも久しきほどをくらべても見よ

以ㇾ之思ふに、御門をさなくおはしまして、古今に御歌入らずと申す說、不謂侍歟と、法印へ尋ね申せば、此の集の口傳候よし、申され侍りしなり。

藏恩記曰。やまと歌の道は人の心をたねとしてとあれば、歌にて心は見ゆるものなり。力なき女の歌をよむ男は臆病のをのこなり云々。上古の萬葉集實體おほくして花風少し加はれり。其の後此の道すたれて花風に成りけるをかなしみて、今の世の中色につき、人の心花になりにけるより、あだなる歌はかなき事のみ出でくれば、色好みの家にはうもれ木の人知れぬ事となりて、まめなる所には花すゝきほに出すべき事にもあらずなりにたりと書きて、古今集は花實相對にあめり、後撰は又相對にあまば、花風さかりに成るべしとふかくいましめて、實體多くいれたり。拾遺は又花實相對なり。

歴代和歌勅撰考　巻之二

常陸水戸　吉田令世撰

後撰和歌集二十巻

歌凡千三百九十六首 袋草子 〇千四百二十首 八雲抄二

勅撰次第云。後撰集村上天皇御在位天暦五年十月晦日。

春歌　巻頭歌

正月一日二條のきさいの宮にて白きおほうちきを賜はりて　藤原敏行朝臣

降る雪のみのしろ衣うちきつゝはる來にけりとおどろかれぬる

巻軸歌贈兼輔朝臣

返し　貫之

こふるまに年の暮れなばなき人の別れやいとゞとほくなりなむ

撰者　御書所預 坂上望城　学生 源順　近江少掾 紀時文　讃岐大掾 大中臣能宣　河内掾 清原元輔

古今之後四十一年（七歟）被レ仰レ之。

一本曰。天暦五年十月晦日被レ下二宣旨一。和歌所別當謙德公 于レ時藏人少將

拾芥妙拾遺集二十卷 千四百二十首或千三百五十六首

部立 春上中下 夏 秋上中下 冬 戀自レ一至レ六 雜自レ一至レ四 別 旅 賀 哀傷

天暦五年辛亥十月、於二梨壺一以二藏人少將伊尹一、爲二和歌所別當一 和歌所根元是也

能宣 元輔 順 時文 望城等撰レ之。

梨壺五人大中臣能宣、淸原元輔、源順、紀時文、坂上望城等也。

中納言入道同抄云。

於二照陽舍一被レ撰レ之時、被レ下二宣旨一云謙德公、藏人少將奉行云々。坂上望城、源順、紀時文、大中臣能宣、淸原元輔等撰レ之、奏覽日無レ所レ見。

八雲御抄二曰。後撰天暦五年十月、於二梨壺一和二萬葉集一以二藏人少將伊尹一爲二和歌所別當一。和歌所根源是也。能宣、元輔、順、時文、望城撰レ之。

部次第 春上中下 夏 秋上中下 冬 戀一、二、三、四、五、六。 雜一、二、三、四。 別 旅 賀 哀

按ずるに、後撰集は梨壺にて萬葉集をよみとかしめらるゝついでに撰ばれし事、八雲御抄の如く、順がみづから書けるものにもしか見えたり。又和歌所といふ事を正しくおかれたるも、此の御時を始めとす。其の事は下にいへり。かくて後撰集は、下がきのまゝ傳へられたるならんといへり。

袋草子云。後撰和歌集、天暦五年十月日、詔二坂上望城、源順、紀時文、大中臣能宣、清原元輔一、於二昭陽舍一令レ讀二解萬葉集一之次、令レ撰レ之（號梨壺。五人也。）一條攝政爲二藏人少將一之時、爲二此所之別當一云々。此の集未定にて止レ之云々。仍本無四度計、但證本は朱雀院塗籠本又青表紙云々。是れは範永本也。佐國取二目錄一不審有二少々一就中以二兼盛歌一稱二兼覽王歌一。卽ち、

けふよりは荻のやけ原かきわけてわかなつみにと誰をさそはむ

又云。

雨やまぬ軒のした水數しらず戀しきことのまさるころかな

前歌は大和物語に兼盛の歌とてあり、後の歌は在二彼家集一、而此集に、或本には兼盛、或本には兼覧大君と書レ之、和讒之人直（なほせし）歟。

按ずるに、此の外未定の證あまた擧げたり。今は其の一つを載するのみなり。草稿のまゝならんとは、本居宣長が後撰詞のつかね緒にも見えたり。

後撰聞書註表紙裏書云。凡そ古今拾遺者歌どもはかいそろひたる集なり。後撰集はよき歌のよさ、わろき歌のわろさ、たのみがたき集なりとて、先人（定家）は申されし。此の書者中院入道大納言（爲家）所レ令二撰作一也。三代集口傳不レ可レ有二他見一而已。

眞淵うひまなび頭書曰。後撰は古今につゞくといへど、此の外も萬葉の歌を誤りよみて、入作者につきても誤り多く、まぢかき古今の歌さへまぎれ入りたれば、定家卿爲家卿なども、草稿のまゝに傳へたるも

のならむと書かれたり。今後撰をやぶるに似たれど、古人已にしかいへり。

かくて此の時和歌所の別當をおかれたるに、侍中亞相爲レ撰、和歌所別當の御筆宣旨奉行文は本朝文粋第十二に載せたり。又禁制闌入の文も同卷に見えたり。いとさかりなる事なりし。其の文はいづれも皆順の筆なり。これらの事は附錄の和歌所の考に委しければ、こゝにもらしつ。

榮華物語月の宴に云。醍醐の先帝の御時は古今二十卷えりとゝのへさせ給ひて、世にめでたくせさせ給ふ。たゞ今まで二十餘年なり。（二十は四十の誤りなるべし。延喜五年より天暦五年まで四十七年なり。）いにしへの今のふるきあたらしき歌えりとゝのへさせ給ひて、世にめでたうせさせ給ふ。此の御時には其の古今に入らぬ歌をむかしのも今のもせんぜさせ給ひて、後にせんすとて後撰集といふ名をつけさせ給ひて、又二十卷せんぜさせ給へるぞかし。それにもこの小野宮のおとゞの御歌多く入りためり。たゞし古今には貫之序いとをかしう作りて仕うまつれり。後撰集にもさやうにやと思召しけれど、かれはその時の貫之このかたの上手にて、いにしへをひき今を思ひ、行末をかねて面白くつゞりたるに、今はさやうの事にたへたる人なくて、口惜しく思召しけり。云々。

八雲御抄六云。梨壺の五人めでたしといへども、彼の古今の四人の撰者に及ぶべからず。能宣、元輔は重代のうへ、尤も然るべきの歌人なり。順又重代にあらずといへども、此の道稽古のものなり。望城、時文は父が子といふばかりなり云々。

按ずるに、後撰集に序のあらざる事、今はさやうの事に堪へたる人なしといへれど、源順はもの知り

にて、梨壺五人が中にても殊にすぐれたる才人なり。本朝文粋第十二に、和歌所別當御筆宣旨を、順がつかうまつりたるに、伊尹の事を、集劒在レ腰拔則秋霜三尺、雌雄自口吟赤寒玉一聲とかけるは、いとめでたしと昔よりほめものし、公任卿の朗詠に將軍の題に入れられたり。又和名鈔などつくりたるも、おぼろけのしわざにあらず。家集を見むにも詞書などのさまいと拙しとも見えず、歌もさのみ貫之に劣るべきにあらぬを、序もなく又歌のたがひ、集中の詞書などとゝのはぬは、いまだ撰びの中ばにて事やみしにもやあらん。撰和歌所の別當までおかれたるに、いとかひなくこそ。

清少納言云。集は萬葉集、古今、後撰。

〔歌　體〕

長明無名抄（近代歌體の條）云。古今の時、花實ともにそなはりて、其のさままちまちにわかれたり。後撰にはよろしき歌古今にとりつくされて後、いくほども經ざりければ、歌得がたくしてすがたを選ばずして、心をさきとせり。

阿佛よるの鶴云。（一名阿佛房口傳。）後撰にはやさしき歌多く、又みだりがはしき歌も多くまじりたり。梨壺の五人心々やかはりけん。

長明無名抄（とこねの事の條。）後撰に、

たけちかくよとこねはせし鶯のなく聲きけばあさいせられず

古集の歌とてみなめでたしとあふぐべからず云々。かの後撰の歌、このごろならば撰集に入るべくもあら

ず、先づ題を賞せざる大いなる失なり。おほろげの秀逸にあらざれば是れをゆるさず。次によとこねはせしと云ひ、あさいせられずといへるすがた詞宜しからず。

〔奥　書〕

東常縁聞書曰。後撰集の奥書、或本より書拔此集故者、公卿皆書、名朝臣字枇杷左大臣歌二首伊勢、贈答書二業平朝臣名一。如レ此事後代之人或推而直二之是非一、書二寫之一誤、此集之本説也。不レ可二直改一。貞應元年七月十三日、爲備後覺之證本、凌二老眼一終書二寫之一功。

戸部尙書藤在判

按ずるに、此の奥書めづらしければ、此にあぐ。

〔證　本〕

寫書奥書。天暦五年十月晦日、於二昭陽舍一撰レ之、爲藏人左近少將、藤伊尹別當寄人、讚岐大掾大中臣能宣、河内掾淸原元輔、學生源順、近江少掾紀時文、御書所預坂上望城等也。謂二之梨壺五人一云々。貞應二年九月二日辛巳、爲二後代之證一重書二寫所レ傳之家本一、悉用所二父庭訓一爲レ傳二嫡孫一也。同三日令二讀合一候。畢書入落字畢戸部尙書藤判定家卿也。

右摹書一覽にあり。又一本天福二年定家卿奥書の本あり。

摹書一覽云。此の集證本の事、袋草子云。證本は朱雀院塗籠の本、又青表紙これは範永の本なり云々。これらの本は今の世に傳はらずや侍りけん、季吟八代集抄に用ゐるところは、彼の定家卿の貞應本に、天福の本をとぢて勘へあはせ、行成卿の本の趣をも奥に書きそへ給ひし本なり。其のさま本の奥書に見ゆ。

〔梨壺五人〕

袋草子云。後撰集天暦五年十月日詔二坂上望城、源順、紀時文、大中臣能宣、清原元輔等一、於二昭陽舍一讀二解萬葉一之次、撰レ之〈號梨壺五人也〉又曰。撰集秀歌漏ルヽハ常事也。惡歌入ルコト又不レ可二勝計一歟。貫之櫻散歌不レ入二古今并後撰一、而四條大納言爲二貫之第一秀歌一。但梨壺五人誤哉如何。後拾遺集序云。むかしなしつぼの五の一人といひて、歌にたくみなるものあり。いはゆる大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城等これなり。

拾芥抄云。梨壺五人〈大中臣能宣、清原元輔、紀時文、源順、坂上望城等也。〉

河海抄序云。彼の梨壺の歌仙に仰せて、萬葉をよみとかしめし例をうつされけるにや、云々。

按ずるに此の外、長明無名抄、和歌緣起、倭漢名數、合類節用、其の外かれこれと梨壺五人といふ事見えたり。歌によめるは、

千五百番歌合家長朝臣

なしつぼのむかしの跡に立ち歸り和歌の浦にぞ浪のよりう人

〔梨壺五歌仙〕

貝原篤信倭漢名數云。梨壺五歌仙〈上東門院侍女也。〉赤染衛門、和泉式部、紫式部、馬内侍、伊勢大輔。

按ずるに、これは後撰集には用なけれども、梨壺五人の因にいたせるなり。

〔御製歌〕

新古今集眞名序云。抑於二古今一者、不レ載二當代之御製一、自二後撰一而初加二其時之天章一。

拾遺和歌集二十卷

歌凡千三百五十一首、又短歌連歌抄五百八十六首二八雲、或千三百七首勅撰次第

勅撰次第云。拾遺集一條院御在位。

春　卷頭歌

平のさだむが家歌合によみ侍りける　壬生忠岑

春たつといふばかりにやみよし野の山もかすみてけさは見ゆらむ

卷軸歌

うゐ人かしらをもたげて御返事をたてまつる

いかるがやとみの小川のたえばこそわが大君のみなを忘れめ

後撰之後三十四五年歟、花山院御自撰歟年月不分明。或説長徳比云々。或長能道濟撰云々。一説公任卿撰レ之云云。是拾遺抄也。

八雲御抄云。拾遺長徳比、公任卿撰レ之歟。抄者花山法皇撰、此事有二説々一未レ決。一説集花山抄公任云々。

部次第　春　夏　秋　冬　賀　別　物名　雜上下　神祇　戀一、二、三、四。　雜春　雜秋　雜賀　雜戀　哀傷

子細古今後撰歌誤多入。於二萬葉集歌一多入。非二誤體一歟。不レ入二一條院御製一。作者揔散々大臣或書二姓名一。

按ずるに、拾遺集を或は花山天皇御製といひ、或は公任といひ、抄を花山院といひ、或は公任といへり。其の說さらに定まらず。

袋草子云。拾遺集和歌千三百五十一首。同抄和歌五百八十六首。或四花山院勅撰云々。此の集中源順和二萬葉集一歌と云ふものあり。或は萬葉の古說を翻和になせるなり云々。或は萬葉歌を爲二本歌一詠二返歌一也。予案レ之、返歌之儀歟。一は藤經衡和二後撰一歌と云ふものあり、後撰中に優なる歌を百首ばかり書出し、其の返歌を詠ずるなり。以レ之思レ之彼の順が所爲を摸歟云々。

按ずるに、清輔朝臣は、集も抄も花山天皇とおもへるにや。

蓮步色葉集云。拾遺集一條院長德元年乙未被レ撰レ之。至二天文十七戊申一五百六十四年也。

今按ずるに、此の長德元といふは何によりてかけるか詳かならず。

後拾遺集序云。花山の法皇はさきの二つの集に入らざる歌をとりひろひて拾遺集と名づけ給へり。

井蛙抄云。冷泉相公云。公任卿、朝まだき嵐の山のさぶければ散るもみぢ葉をきぬ人ぞなき、といふ歌を花山院拾遺集に、もみぢの錦きぬ人ぞなきと直して入られたるを、公任卿の所存に違ひて、此の歌拾遺抄に、散るもみぢ葉をきぬ人ぞなきと被レ入たり。時の人、集を指おきて抄をもてなしけり。仍りて通俊卿後拾遺も集にはつかずして、抄につきて後拾遺抄と題せり。其の後年久しく抄を賞翫する事にて侍りけ

るを、京極黄門集もまことに殊勝なりとて、抄をさしおきて集を翫びて、此のよしを後鳥羽院へも被レ申ければ、御所も御同心ありけり。其の後集をもてなす事になりて侍るよし、京極委細被ニ書置一云々。公任卿拾遺抄をえらぶことも、我が歌一首の故に被ニ思立一云々。

增鏡おどろの下云。拾遺集は花山の法皇のみづから撰ばせ給へるとぞ。

勅撰次第に、中院通勝卿（法名素然）記されて云。拾遺集抄之差別並難儀共少々、京極黄門被ニ註置一處之一冊、彼自筆不レ違ニ一字一之本也。同玄旨被レ所ニ持之一。是又先年寫留了。井蛙抄に書きのする處、大畧無ニ相違一歟。同日記之素然。（同日とは、此の前に慶長四年三月七日以ニ筆次一記レ之也とある次なればなり。）

按ずるに、後拾遺集序より以下の諸書に記されたる赴、集は花山院天皇の勅撰にて、抄を公任卿の撰といふ事、辨をまたずして明らけし。然るに八雲御抄などに、兩説を擧げ給へる、唯俗のいひ傳へによりて、一方に定め給はざりしもの歟。

勅撰次第一本云。拾遺私云。此集花山御撰、抄公任卿、以レ是爲ニ正説一。定家卿抄書決之在ニ別紙一。

〔疏　漏〕

八雲御抄ニ云。拾遺子細古今後撰歌誤多入、於ニ萬葉集歌一多入、非ニ誤體一歟。不レ入ニ一條院御製一、作者總散々大臣も或書ニ姓名一。

袋草子云。拾遺集此集不レ避ニ新撰集歌一。又有ニ目錄佐國撰一、失錯江輔尹註ニ佐忠（われひとりこしのやまぢにこしかども）御堂御屛風歌也。作者稱ニ輔尹一、隨ニ在家集一。又佐忠は天曆御時人也。佐國雖ニ廣才者一、暗ニ和歌道一故歟。

按ずるに、拾遺集には眞に古今後撰等の歌多くあるは、いかなるにか委しからずとや申し奉らん。御手ずさみがてらならば、さてもありなむ事にこそ。但し大臣の名をかき給はんこと、御撰にはあやしむにたらざる歟。

〔羣書一覽拾遺集〕　寫本奥書

天福元年仲秋中旬、以二七旬有餘之盲目一、重以二愚本一書レ之。八箇日終レ功。此集世之所レ傳無二指證本一。仍以二數多舊本一挍二合彼是一、取二其要一、猶非レ無二不審一。抄歌五百九十四首。其中戀上、中納言師氏。

おもひつゝ經にける年をしるべにてなれぬるものは心なりけり

或本無入後撰（拾遺カ）云々。

題しらず　　赤染衞門

わがやどの松はしるしもなかりけりすぎむらならば尋ねきなまし

此二首集小レ見レ歌也。五百九十二首。集抄無二相違一桑門融覺判。徳治二年參議藤原朝臣判。

長明無名抄拾遺のころより、其の體ことの外にもの近くなりて、ことわりくまなくあらはれ、すがたすなほなるを宜しとす。

眞淵邇比まなび云。古今歌集は專らは女ぶりなれど、さすがに古歌も多かれば、上にいへる如き心高く雄々しきも交り、すべての撰みもさる方に心高きなり。後撰集は古今集に劣れる事、同じ口に論ふべくもあらず。古歌を取りしにも誤れる多し。拾遺集は何處のかたへの人か書き集めつらん。ことに萬葉をよみ

誤り、古きよみ人をたがへなどせしこと數へがたし。されど此の二首に、今の京此のかた延喜のころまでの後につけてよき歌もあればたま〳〵は見るべし。○頭書云。花山の御撰などいふは甚しきひが事ぞ。よく見ばかならずしからぬこと見ゆべし。此の二首後撰拾遺なりに人まろの歌はたゞ萬葉にて見よ。

いま按ずるに、歌體を論ひたるはいとよし。此の集を花山院の御撰にあらずとは、何を以て知るべきぞ。梨壺の五人の撰だに、後撰にみだりがはしき歌もあるにはあらずや。まして花山の院御ひとりのえらみなれば、御あやまちなしとはなどかさだむべき。必ず見あやまり給ふ事もあるべきことわりなるをや。それを御あやまりあればとて、此の集を彼の院の御撰にあらずとはいはきぬ事なり。

〔三代集〕

袋草子云。島守遠高云、古今後撰拾遺等、號二三代集一。拾遺花山院御撰也。而花山院以往之大嘗會、御禊度、有二三代集御手筥一如何。予云。不レ知此事尤有レ興。件事如何。島守答云。祕事也。以往相二加萬葉集一號二三代集一。而拾遺出來之後棄二萬葉一用二拾遺一云々。

按ずるに此の說を三代集といふことのはじめとすべし。さて花山天皇の拾遺集を撰び給へる時に、古今後撰拾遺をば三代集とよびそめて、其の後は長く萬葉集をばよそにしたる事、今に至りてかくのごとし。三代集といふことの物に見えたるは、阿佛の夜のつるに萬葉集三代集などにふるき人々云々といひ、古今集の條下に引きたる井蛙抄などにも、龜山院御時、三代集作者賦物にて御連歌あるべしとてとありて、この外拾芥抄などかれこれと見えたり。

群書一覧云。契沖云。古今集の歌を後撰拾遺にかさねて載せられたるは、かの集に註しつけたれば、ここに畧レ之。代々の人古今をばもてあそびて、よくおぼえられけるにや。これより後あやまりて、再び入ることとなし。後撰の歌を拾遺に多く載せられたるはわざとにや。後撰より後の集は、たれもくよく見しらざりけるにや。誤りて重ねて入りたる歌多し。

〔拾遺抄〕

類聚名物考曰。拾遺抄十巻、拾遺集の二十巻の中より、藤原公任卿えらび出して十巻とせられしを、拾遺抄とて世に殊の外にもてはやせし故に、其の比は古集はいつしか隠れはてて、此の抄のみ有りしなり。されば二十一代の撰集は、みな古今集を初めとして二十巻宛有りしが、この十巻の抄に習ひて、詞花金葉集をば十巻づゝに撰ばれたり。さてその後に、又公任卿の撰をかたぶけといふ事いできて、拾遺集をとり出せし故、あらぬ悪しき本出來しかば、今のは重複いや（本）かきものみだれしものにて、はては疑ふべきことさへ多きをいかゞせん。世は皆かかる事ぞかし。

散木集四隠題歌

しとねにはしふるせうとぞ思ひつるしたりがほにもつもる花かな

拾芥抄拾遺集二十巻　千三百五十一首　又短歌連歌

部立　春　夏　秋　冬　賀　別　物名　雑上下　神祇　戀自一至五　雑春　雑秋　雑賀　雑戀　哀傷

長徳比大納言公任卿撰レ之。或華山院法皇御自撰云々。

古今後撰歌誤歌多入レ之。於二萬葉集歌一多入レ之。非二誤體一歟。不レ入三一條院御製一。作者總樣之大臣或書二姓名一。拾遺抄在レ之。華山院御撰云々。歌數五百八十六首、或說集華山院抄、公任卿云々。

已上古今以後謂二之三代集一

同抄云。所二書傳一華山院御自撰云々。若又長保寛和五年以前之比事歌、其年月不レ知云々。公任卿抄出爲二十卷一。破二勅撰一而自由抄出有レ恐歟、多用レ抄云々。

後拾遺集二十卷 勅撰次第一 本集作レ抄。

白川院御在位 勅撰次第

春上　卷頭歌

正月一日よみ侍りける　小大君

いかにねて送るあしたにいふことぞ昨日をこぞと今日をことしと

卷軸歌　誹諧

めのとせむとて詣できたりける女の乳のほそく侍りければよみ侍りける　大江匡衡朝臣

はかなくも思ひけるかなちもなくてはかせの家のめのとせむとは

返し　赤染衛門

さもあらばあれ大和心しかしこくばほそちにつけて暴すばかりぞ

部次第　春上下　夏　秋上下　冬　賀　別離　羇旅　哀傷　戀一、二、三、四、五　雜一、二、三、四、五　神祇　釋教　俳諧八雲

歌凡千二百十八八雲二

或千百七十二首勅撰次第

拾芥抄後撰集二十卷　千二百十八首

部立　春上下　夏　秋上下　冬　賀　別離　羇旅　哀傷　戀自一至四　雜自一至五　神祇　釋教　俳諧

應徳三年丙寅九月十六日、中納言通俊卿撰進之。事次通俊卿所望撰云々。承保比始之、寛治元年申出、又註之、有序假名通俊書之　後撰作者不入之、但誤入之、又入御製。

私勘云。承保二年九月書出勅書。雖奉詔命被妨公務、不及撰集。應徳元年六月以後撰之。同三年九月十六日撰畢。同十月中旬比奏覽了。同十一月堀河院受禪披露。翌年寛治元年二月勅召見。同八月奏目錄序。天暦以後歌撰之白河院仰也。

八雲御抄云。後拾遺應徳三年九月十六日、通俊卿撰進之事次通俊所望之撰之、承保比始之寛治元年又申出註之。

又云。假名序通俊。

勅撰次第云。後拾遺白河院在位承保二年九月蒙勅定、應徳三年九月十六日奏之。參議通俊撰目錄序

同。

勅撰次第一本云。後拾遺撰者權中納言藤原通俊〔于レ時參議右大辨〕後撰及二百二十餘年一歟。承保二年乙卯九月、内々直蒙二勅定一、同三、承曆四、永保三、應德三十二年、終二其功一。同年丙寅九月十六日奏レ之。

本朝世紀云。康和元年八月十六日丙戌、從二位行權中納言兼治部卿藤原朝臣通俊薨〔中略〕。應德二〔三ノ誤カ〕年奉二勅撰一、進二後拾遺和歌集二十卷一。行二于世一矣。

袋草子云。後拾遺抄通俊卿御一人撰レ之、如レ序承保之比奉レ之。應德三年九月十六日奏レ之。其間及二十有餘年一奏二覽之一。

勅撰目錄云。後拾遺抄白川承保二九被二仰下一、應德三九十六奏レ之。參議左大辨通俊撰序同。

按ずるに、勅撰次第同一本、勅撰目錄ならびに後拾遺集承保二年に仰せ下さるといへり。八雲袋草子には、承保のころこれを承りて、應德三年に奏すといふは皆同じ。其の中勅撰次第一本には、十二年にして其の功を終るといひ、袋草子にも十有餘年とあり、今其の年月を推すに、承保二年より應德三年までは、まことに十二年にぞなりける。さるをあやしき事あり。

通俊卿の本集の序に曰。敷島のやまと歌集めさせ給ふ事あり云々。この仰せ心にかゝりて、思ひながら年を送る事こゝのかへりの春秋になりにけり。いぬる應德のはじめの年の夏みな月の二十日あまりの頃、やぐらのつかさにそなはりて、いつかのいとまもさまたげなし。そのかみの仰せをおいそのもりに思うたまへて云々、すがた秋の月のほがらかに、言葉春の花匂ひあるを、千〔千二百十有八〕歌ふたもちとをあまりやつをえら

びて、はたまきとせり。名づけて後拾遺和歌集といふ。

按ずるに此のころから書かれたる序に、仰せを承られてより、九年を經て出來たる由なり。これによりて、應徳三年より九年を逆に推せば、承暦二年にぞ當りける。然らば諸書に、承保二年に仰せ下されたる由あるは、承暦と承保とを取りちがへて、物にしるしたるを、おのも〱其の誤りをおそひて承保二年の事と心得られたるから、十二年終二其功一などと書かれたるものと見えたり。されどそは誤りなる事序を引くが如し。

新勅撰集序曰。いはゆる古今後撰二ッの集のみにあらず、おほやけごとになずらへて集めしるされたるためし、昔といひ今といひ、其の名多く聞ゆれど、九重の雲の上に召されて、久方の月にまじはれるともがら、この事をうけたまはり行へるあとは猶まれなり。しら川のかしこき御代云々。後拾遺をえらべるひとたびなんありける。

按ずるに、殿上にて集をえらばれしは、古今を承香殿の東なる所にてえらばれ、後撰は梨壺にてえらばれしのみ、其の後は新古今の時内に和歌所をおかる。しかるに此の序雲のうへに召されて云々。後拾遺をえらばれし一度なんありけるとあるは、此の時も禁中にてえらべるが如く聞ゆれども、さにはあらず。これは納言巳上の人の勅撰を承りたるは、後拾遺が近比にては一たびありしといふ意なり。さて後撰に伊尹公和歌所の別當たる時、藏人少將なり。通俊卿も後拾遺の時は、參議左大辨なりき。しかれども後には皆公卿にのぼりたりしは珍らしさわざにて、新勅撰序にいへる如くにこそ。

〔採　擇〕

本集序曰。拾遺集にいらざる中比のをかしきことの葉、もしほ草かき集むべき由なんありける云々。ことの葉かきいづる中に、いそのかみ古りになることは、古今、後撰、拾遺集にのせてひとつも殘らず。その外の歌、秋の蟲のさせるふしなく、あし間の舟のさはり多かれど、中ごろよりこのかた、今に至るまでの歌の中に、とりもてあそぶべきもあり。天暦の末より今日に至るまで、代は十月あまり一月、年はもゝ年あまりみそぢになむ過ぎにける。住よしの松久しくあら玉の年もすぎて、濱のまさごの數しらぬまで、家々のことの葉多くつもりにけり。

按ずるに、古人のよき歌どもは、皆三代集にえらびとられて殘るものなければ、拾遺集などに入れたるをばとらぬにつけて、其の後の人の歌をえらぶ由なり。されども、

かくのごとくあるなり。誤りはいつも珍らしからぬにやあらん。

八雲御抄ニ云。後拾遺不レ入ニ後撰一作者云々。但誤入之入ニ御製一。

袋草子云。後拾遺抄、此集流布之後、被レ直レ之由、見ニ目錄序一。又如レ序古今後撰之作者歌、不レ入レ之。兼盛歌入レ之。是後撰作者也。但非ニヤ失錯一歟。彼人拾遺集以後猶存生者也。仍秀歌多之故竊入レ之歟。此集拾遺集幷玄々集歌等少々載レ之。失錯歟。有ニ目錄一卽禮部之撰也。

〔淸　書〕

袋草子云。後拾遺抄件本歌、令下ニ伊房卿一淸書上レ之處、件人歌唯入ニ一首一之故、腹立不レ書レ之。仍令ニ若狹

周案啓源書ニ寫之ニ云々。諸本號ニ黒本ト。燒ニ表紙ニ之故云々。

八雲ニ云。淸書時能書也。後拾遺伊房卿欲レ書之所、我歌只一首也。仍腹立不レ書。然而通俊以ニ降源法師ニ令レ書畢（通宗子）

〔難後拾遺〕

袋草子云。後拾遺抄扶持者、澄源幷佐國等也。于レ時有經、經信、匡房者、此道之美才先達也。不レ奉レ之如何。但或人云。私撰レ之後、取ニ御氣色ニ云々。于レ時有ニ難後拾遺云物ー世以稱ニ經信之所レ爲。通俊見レ之云々。先以ニ件集ニ內々令レ見ニ合彼卿（經信）ニ之處、神之由妙。侍而後日有ニ此難ー、更不レ誤云々。

玉海治承元年正月十二日（癸丑）天晴淸輔朝臣、來談ニ和歌事等ー。中有ニ無病等事ニ云々。又後拾遺問答（問經信答通俊經）信難ニ和泉式部歌ー　きざはしも思はん人はとひてましつまなきやどのうへはいかにぞ。曰。妻とは稱レ女也。以レ男不レ可レ爲妻云々。多引ニ其證ー、又說ニ由緒ー。通俊施ニ才學ニ陣々兩三度問答、遂通俊伏レ理出ニ作歌ニ了。先賢所レ爲又以雖レ可ニ柔信ー、淸輔捨ニ萬葉集ー男女共有ニ可レ稱妻之證ー。後人々臨レ期不ニ覺悟ー、尤遺恨事也云々。此外多吐ニ才學ー道之優長、誰人比レ肩乎。可レ貴可レ褒。

八雲ニ云。凡撰集無レ爲ニ披露ー。尤不レ安、種々異名放言多。後拾遺後は經信書難ニ後拾遺ー

袋草子云。又難後拾遺と云ふ物あり。（木工頭俊賴）世以稱ニ經信卿之所爲ー。而近年俊賴朝臣之息子僧俊惠相語云、吾妹女房逝去之後、彼遺物開見之處、故頭遺草少々、其中有ニ件難後拾遺之草案ー。故頭之手跡也。若彼所爲歟云々。予按レ之若以ニ帥口狀ー執筆之間草歟。又云。後拾遺嘉言歟云。

梅の香を夜半のあらしの吹きためてまきの板戸をあくるまちけり
經信卿難云。よめりし人のいひしは、軒に嵐の吹きためてとこそ聞きしか。夜はの嵐の吹きためて荒涼なり。又あくるは夜のあくるにそへんとにや、わるくなりにたりと云々。尤有ㇾ謂事歟。凡そ此の集には歌を多く直し云々。隆經朝臣立春歌も、本は春毎に空のけしきのかはらぬはとあるを野べと被ㇾ直たり。如ㇾ此事多く侍り、よくなりたる事もあり、是れはいかゞ可ㇾ侍からん。
按ずるに、後拾遺集の撰を通俊卿のうけたまはられたる當時、人々の心にみちたらはざりしと見えてかく難ぜられたる事もありしにや、此の外異名放言も有りしなり。
言塵集一云。後拾遺集は撰者いたる世の不川侍りけり。同時に隨分の歌仙經信卿などをさしおきて、沙汰せられける故に、この難後拾遺は經信卿の作とかや申すなり。
類聚名物考云。この難なにがしといふ書は、皇朝にては是れを始めとするにや。これより後にはかれこれ見えたれども、この前にあることをいまだ聞かず。唐には荀卿に始まりて、孟子などぞしりたる書いと多し。唐の柳子原が非國語などいふ類いと多し。この難後拾遺の序は、水戸義公のあつめられし扶桑拾葉集にも載せられたり。
八雲御抄卷一云。よそなれど杉のむらだちしるければ君がすみかのほどぞしらるゝ。是れは歌合ならねど、經信後拾遺問答難ㇾ之、しるければといふと、しらるゝとは文字は異なり、或爲ㇾ難或不ㇾ難。
此の後拾遺問答は、難後拾遺と同書か又は別なるかしらず。

一袋草子云。後拾遺は末代規模集也。雖レ然彼時は有二種々誹謗一云々。先序列樣々次賴綱歌無二指事一多入レ之云々。予按レ之不當也。件人歌四首也。皆以染二肝膽一是尊レ耳卑レ目之誤歟。又號二小鰺集一。又云。兼方參二彼卿亭一、花こその歌を入二撰集一申請禮部云こそと、云字不レ快也云々。兼方起レ座於二侍中一云。此の殿はやんごとなき人と思ひ奉るに、物不レ覺給一人にこそ。四條大納言の第一の秀歌に、はなこそ宿のあるじなりけれといふ歌は、不レ知給一やとて、退出云々。仍付二此名一住吉神主國基歌、多入之由故云々。

【異名放言】

井蛙抄云。勅撰には異名あり、後拾遺をば小鰺集となづく。津守國基歌小鰺をはごひて撰者の心にかなひて、おほく入りたるよしの異名歟。

按ずるに、勅撰をもはゞからず、かく異名をつけてそしる事いとかろ〲しく、口さがなきわざなれども、これはこのころのくせにて、人の上にも、ほむるにもそしるにも異名をけつて、初音僧正（平家物語に見えたり。）ふし柴の加賀（十訓抄、古今著聞集、今鏡等に見えたり。）待宵侍從（源平盛衰記に見えたり）などはほめたる異名。また榎木の僧正（つれ〲草に見えたり）名無大將（無名抄に見えたり）天變少將（袋草子に見えたり）などは、そしりたる異名にして、此の外にもかかる事あまた見えたれば、撰集にも異名をして惡しくいひなしたるものなり。されどもこれはかの毛を吹いて疵を求むるの類にや。清輔朝臣のいはれたる如く、尊レ耳卑レ目といふものにて、ことさらに此の撰をあたなみものせられしなるべし。されどそれはた歌にふかきが故なるべし。

八雲卷一云。俳諧歌是れはいかなるをいふにかあらん、まさしき樣しる人なし。公任卿なども不レ知レ之

而、通俊なにと心えたるにかありけん、入二於後拾遺一、經信卿云。入二俳諧歌一にてこと事のわろさも被レ知云々。誠如二公任、經信一不レ知ほどのことなれば、末代人非レ可レ定。又千載集にもあり、大かたはさよめるべきやらんなどは、推せらるれども、其の樣知る事なし。後拾遺千載集に入りたる歌は、物狂の事なれば、さやうの歌をいふにやあらん云々。

按ずるに、これはいかなることぞや。古今集に早く俳諧體ありて、多く撰ばれたるからは、後拾遺にも俳諧のある事、なにの怪しき事かあらん。こと事のわろさも被レ知などいふは、ことさらに此の集をそしる人の言なり。但し卷軸の赤染が歌の、大和ごゝろしかしこくばの歌は、いとよろしとも見えず、これらをもてそしるならん。○かくて勅撰をとかくもときしらふ事は、拾遺集の時に、公任の抄をかかれ、此の後拾遺に經信難をかかれてより、これをはじめにて後々もさま〴〵の難をいひて、勅撰をそしる事にはなれりき。さるは經信卿、その比したゝかものと見えて、八雲抄卷六に、經信卿ばかりこそ、楚國に屈原がありけんやうに、ひとり古體を存してならびなかりしかど、天下にこれをよしとさだむる人もなし。白河院後拾遺撰ぜられしをり、經信卿をおきながら、通俊是れをうけたまはる。是れ末代の不審なり。しかれども此の事ゆゑある事なり。かの集は天氣よりおこらず、通俊是れを申しおこなへり、云々。

〔評　論〕

八雲御抄卷六云。後拾遺、金葉集のころよりのちざまの歌おほく平懐なるていなれど、ぬけてよき歌は

又おほし。

長明無名抄云。拾遺のころより其の體ことの外にものちかくなりて、ことわりくまなくあらはれ、すがたすなほなるを宜しとす。其の後後拾遺の時、今少しやはらぎて昔の風をわすれたり。やゝ其の時の古き人などは、是れをうけざりけるにや。後拾遺すがたと名づけて、口惜しき事にしけるとぞ。ある先達語を侍りし。

阿佛夜のつる云。後拾遺また歌よみ多くつどひたる比なれば、おもしろき歌も多げに候を、難後拾遺といふものにぞ、みきはもえ出るなどいふ歌をはじめて、さまぐ\そしりたる事も候やらん。

〔集　抄〕

袋草子云。後拾遺抄。○勅撰次第一本云。後拾遺抄。

按ずるに、上の拾遺集の下に引ける井蛙抄のごときは、通俊卿の後拾遺も、公任の抄につきて、後拾遺抄と題せりといへれど、信じがたし。まづ抄とは字書に、鈔楚交切音抄取也、畧也、又謄寫也、別作レ抄非。とありて、書き拔きし、あるは寫しとる事なり。されば本居宣長が玉勝閒に、抄の字は註釋にはあたらざれども、もろこしよりして佛ぶみには、其のさまにかゝはらで、記とも集とも抄とも名づけたる、常の事なれば、歌ふみの註を抄といふも、もと佛書の名どもにならへるものなるべしといひて、註釋するにはもろ〱の書より證となるべき文ども書きぬきあつむれば、註釋を抄といはんもうべなり。されども公任卿の拾遺抄などは、集より拔き出でられたる故に、抄と名づけられたるも

のにて、能く〳〵抄の字の義に叶ひたるを、後拾遺は新に撰ばせらるゝ撰集を、抄といはん由はかつてなし。この說は誤りて誤りを傳へしもの歟。

本集序曰。名づけて後拾遺和歌集といふ。

かくの如く正しく集とあれば、抄といふは取るべからず。東常緣聞書に、後拾遺は集といふ事あるべからず、抄を可レ用。集と云ふ事例の事なり。比興々々といへるは取るべからず。

〔脫　漏〕

袋草子云。後拾遺究竟歌三首。漏所堀川右府歌、はるさめにぬれてたづねむ山櫻雲のかへしの嵐もぞふく。隆經朝臣歌、引く駒のかずよりほかに見えつるは關の淸水のかげにぞありける。兼方朝臣、去年見しに色もかはらず咲きにけり花こそ物はおもはざりけれ。

〔續　新　撰〕

八雲一云。續新撰通俊撰。後拾遺內三百六十首。

按ずるに、これは難ぜられたる事を心うく思はれて、寬治元年にも申し出して、直し註され、あるは又本集の中よりことに選りとゝのへて、この續新撰をばかかれたるものなるべし。

〔難　談〕

袋草子云。素意は紀伊守重經也。號二紀伊入道一、中。騎馬にて楠葉御牧の政所前へ過ぐるに、下人出で來咎レ之云。無レ止事一御牧を不レ下馬一て過ぐるは何者ぞ。入道云。紀伊入道素意、後拾遺の作者にはあらず

やと云々。下人無レ答して令レ過レ之云々。

撰集抄二。昔御室戸の法印隆明と云ふやんごとなき智者、もろこしに渡り給はんとて、西の國に赴きて播磨の明石といふ所になん住みていまそかりけるに、あさましくやつれたる僧の來て、物を乞ひ侍り、さながら赤はだかにて、ゐのこを脇にいだき侍り。人、尻さきに立ちわらひなぶりけり。あやしのものやと哀れにおぼえて見給へば、清水寺の寶日聖人にていまそかりける。ひが目にやと能く見給へど、さうなりまがふべくもあらざりければ、かきくらさるゝ心地して、伏しまろびて、あはれめづらかなるわざかなと宣はせければ、聖人ほゝゑみて、實に物にくるひ侍るなりとて、走り出で給ふめるを云々。此の聖人ぞかし、中關白の御忌に、法興院に籠りて曉方に千鳥のなくをきき給ひて、

明けぬなりかもの川原に千鳥なくけふもはかなく暮れんとぞする

と讀みて、拾遺集に入り給へり。明けぬるよりはかなく、暮れぬべきことのかねて思はれ給へりけるにこそ、彼の拾遺集には圓松法印とのりて侍るは此の聖人の事にこそ。

此の歌拾遺集になし。後拾遺集十七雜三中、關白のいみに法興院にこもりて、曉方に千鳥の啼き侍りければ、圓松法師、明けぬなり加茂の川せに千鳥なくけふも空しく暮れんとすらむ

通俊卿は小野宮實頼公の孫なり。尊卑分脈に、

（小野宮）實頼──頼忠──公任
　　　　　└齊敏

─經通
　經平──通宗
　　　　　├藏　後拾遺撰者
　　　　　├辨　治部卿從二位
　　　　　├頭　權中納言
　　　　　└通俊（承德三八十六薨、五十七）

八雲云。講師嘉保通俊卿、寛治月宴通俊。○又歌合講師承曆 左 左中將師賢 右 右中辨通俊 などありて、其のころさるべき人とは見えたり。

金葉和歌集十卷　　撰者俊頼

白川院御代　崇德院御在位勅撰次第

春　卷頭歌

堀河院御時百首歌めしけるに春たつ心をよめる　　修理大夫顯季

うちなびき春はきにけり山川の岩間の氷けふやとくらむ

卷軸歌

七十になるまでつかさもなくてよろづにあやしきことを思ひつゞけてよめる

源俊頼朝臣

七十にみちぬるしほの濱びさし久しくも世にうもれぬるかな

歌凡六百五十四首。此外連歌十六（イ九）首袋草子

六百四十九首八雲抄二〇拾芥抄

六百三十三首勅撰次第

部次第　春　夏　秋　冬　賀　別　戀上下　雜上下　連歌八雲

尊卑分脈宇多源氏敦實親王、重信、道方、俊頼、木工頭右少將左京大夫従四位上篳篥歌仙、金葉以下代代千作者、金葉和歌集撰者とあり。千作者とは千載集の作者といふ事なり。

勅撰次第一本云。金葉集撰者前杢頭源俊頼朝臣、後拾遺後三十九年歟。天治元年甲辰被レ仰レ之、四年終レ功、大治二奏レ之。

八雲御抄二云。金葉集天治元年依ニ白川法皇綸言一、俊頼朝臣撰レ之。再三改直、大治二奏レ之。披露中度本也。〇又云。初入ニ三代集作者一中度流布定後（後拾遺）始入ニ源ノ重之一。有ニ連歌一、三箇度撰改、以ニ二度本一流布多近世人。但六帖歌并道濟相摸等入レ之。〇又云。金葉第三度本乍レ草先奏、而自ニ待賢門院一實行下給ひて披ニ見之一間、其外本不レ留。其本は燒歟。

袋草子云。金葉集白川院御讓位之末、俊頼朝臣一人、奉ニ院宣一撰レ之。天治元年月日奏レ之、大治元二ケ年之間上ニ奏之一。此集本不本也。奏覽之處兩度返却、第三度之度、以ニ中書草案一先覽レ之、而件本無ニ左右一

納畢、仍撰者許無二此本一云々。件本在二故待賢門院一、而今前大相國（資行）中出書二寫之、無二餘所一云々。件本兼盛、能宣歌并玄々集、拾遺集歌等入レ之。拾遺は柄に成りて稱下棄二置之一由上入レ之也最前歌貫之が、吉野山峯の白雪いつ消えての歌也。世間に流布本は二度本也。近代人歌等也。最前故將作打麿歌也。奏覽本造紙云云。自筆書レ之云々。時有二碁俊者一、兼二和漢一尤便二撰者一、雖レ然不レ奉レ之、若爲二御不請之者一故歟。

増鏡おどろの下云。白河院のおりゐさせ給ひてのち、金葉集かさねて俊頼の朝臣に仰せてえらばせ給ひしとぞ。はじめ奏したりけるに、輔仁の親王の御名のりを書きたるわろしとてかへされ、又奉れるにも何事とかやありて、三たび奏して後こそ納まりにけれ。かやうの事だめしも、おのづからの事なり。

拾芥抄金葉集十卷（六百四十九首。又連歌。或六百五十四首。）

部立　春　夏　秋　冬　賀　別　戀上下　雜上下　連歌

天治元年甲辰、依二白川院綸言一、俊頼朝臣撰レ之、再三註直、大治二年奏レ之、披露中度本也。初者入二三代集作者一、中度流布、定俊入二源重之一有二連歌一三箇度撰改、以二第二度本一流二布多近代一。但六帖歌并道濟相撲等入レ之。

同抄云。大治二年之比撰集云々。白河院（于時太上法皇）勅二前木工頭俊頼一撰。

〔採擇〕

源平盛衰記二十六云。忠盛備前守にて、國より都へ上りたりけるに、院より御つかひありて、津の國やなにはがた、明石の浦の月はいかにあると御たづねありければ、御返事に、

あり明の月もあかしの浦風になみばかりこそよると見えしが

と申したり。御感ありて金葉集に入れられけり。

　續世繼物語一名今鏡云。いづれのころにかありけん、南殿か仁壽殿かにて、御覽じつかはしけるに、誰にかありけん、殿上人のまゐりて、殿上にのぼり居たりければ、

　　雲のうへに雲の上人のぼり居ぬ

と仰せられけるに、俊頼のきみ、

　　しもさぶらひに侍らひもせじ

と付けられたりけるを、詞はとゞこほりたりと聞ゆれど、心ばせある事ときこえたり。歌の風情いたづらにぞする事なりとて、連歌をばおほかた爲られざりけれと聞え侍りしに、金葉集にぞいとしもなき多く集められたる、いたづらに出來たるを憐れまれはべるなるべし云々。連歌をも信けぬ事に、ひとへにし給ふとも聞えず。

　筑波問答云。萬葉集に入りたる家持卿の、さほ川の水をせき入れてうゑし田をといふに、尼、かかるわさいねはひとりなるべし、と付けはべる。かやうの事どもしだいに多くなりて、拾遺、金葉などよりは勅撰に入り侍るなり。

　按ずるに、拾遺集に連歌入れども、いまだ其の名目なきを、金葉集にぞはじめて連歌と題して載せられける。

袋草子云。經信卿云。
大井川いはなみ高しいかだしよ岸のもみぢにあから目なせそ
後拾遺に入レ之、而經信故禮部に乞ひ請けて出レ之、無下の棄歌なり。爲ニ後見一有レ恥、枉げて可レ止云々。
仍除レ之、而後年俊賴朝臣入ニ金葉集一如何。

〔難　破〕

袋草子云、金葉集之後、良玉集出來、顯仲入道撰レ之、同除ニ彼集一。
八雲御抄一云。良玉集十卷、顯仲兵衞佐撰、大治元年嘲ニ金葉集一。又云。金葉後顯仲嘲レ之撰ニ良玉集一。
袋草子云。金葉集八幡別當光淸歌云。
なにごとに秋はてながらさをしかの思ひかへしてつまを戀ふらむ
此の歌は藏人君意尊、此集撰之比十月許、參ニ詣八幡一て聞ニ鹿鳴一て詠也。而後日向ニ俊賴亭一有ニ忌之事一、不ニ對面一、仍紙端書ニ此歌一て、以ニ小兒一一日比於ニ八幡一所レ詠也。而光淸歌存して入レ之云々。
あはすともなからむ世には思ひいでよ我ゆゑ命たえし人ぞと
是れは於ニ左京御許一て詠歌也。これ讀人しらずとて入レ之。一首は稱レ人歌、一首は讀人不レ知云々。殊阿黨難レ堪之由、所々祈行之者也、尤有レ謂。
袋草子云。金葉集に顯仲卿の、鳥と共にぞねはなかれけるといふ句も、一條攝政集歌也。又今右府入道の、心をさへも盡しつるかなと云ふ歌も、中ごろの人の歌なり。入ニ或打聞一。又同集云。永緣僧正の、き

く度にめづらしければ郭公といふ歌は、隆資入道が四要講に、高判官代政業が所ㇾ詠也、而永緣同詠也、政業數月之前に獻ㇾ之、故爲二彼人歌一。而永緣訴云。彼人歌は有二其數一、予が歌は是許也。加之列二講師之中一、何無二會釋一哉云々。結衆僉議して、隨ㇾ宜二永緣歌一、永公拭二感淚一、就ㇾ中秀歌也。政業が不祥歟。詞花集に安藝がよめる、このたび許り悲しきはなしといふ歌、又予歌也。一字不ㇾ違也。被ㇾ用二安藝歌一、繼二政業之跡一、甚以難ㇾ堪歟。

〔異名〕

袋草子云。金葉集之時、有二種々異名一、其中臂突あるじ第一名云々。是李部五品盛經之所ㇾ付也。
井蛙抄云。金葉をば臂突（集）主といへり。えせしふといふ心にや。
落書露顯云。さしもの俊頼も、金葉をば心一ばかりにて撰び給ひしゆゑに、後難も侍るとかや。
按ずるに、後拾遺集を應德三年に撰び奉られてより、金葉を奏覽せられたる大治二年まで、凡そ四十二年になれり。これより先の歌は、みな前集どもに撰りとられたりとも、四十年の中、などかよき歌もあまたいでこざらん哉。歌の數もあまりに少なく、すこしばかりのうす草子なるは、勅撰の歌集といふべくもあらず、いと拙きわざなりといふべし。

〔脫漏〕

袋草子云。金葉集三首漏所ㇾ謂江帥歌。
こほりるししがのから崎うちとけてさゞ浪よする春風ぞふく

故將作歌、

わが戀はよし野の山のおくなれや思ひ入れどもあふ人もなし

師俊卿歌、

はりまぢやすまの關屋の板びさし月もれとてやまばらなるらむ

此の歌は播磨路の悪し、はりまがたと改めて入れよと被ㇾ申けるを、作者、然者不ㇾ可ㇾ入云々。仍不ㇾ入ㇾ之。予按ㇾ之、かたは尤も神妙たゝしぢにても不ㇾ可ㇾ除ㇾ之、相互にこはき事なり。拾遺撰之時、公任卿、ちるもみぢ葉をきぬ人ぞなきといふ歌をば、花山院、もみぢのにしききぬ人ぞなきと直して可ㇾ入由有二御定一、不ㇾ可ㇾ然之由被ㇾ申ければ、如ㇾ本にてこそ被ㇾ入たるに、近代之人諸事如ㇾ此。

按ずるに、公任卿は、このちるもみぢ葉の歌によりて拾遺抄をえらばるといへり。今在る拾遺集を見るに、もみぢのにしき著ぬ人ぞなきとあり、猶あらためて集には入れ給へり。袋草子の說は誤れり。

羣書一覽云。金葉集寫本奥書なし。異本の歌五首を奥にのせたり。

〔評　論〕

八雲六云。後拾遺金葉の比より後ざまの歌、おほく平懐ある體なれど、ぬけてよき歌はまた多し。

長明無名抄云。金葉集はわざとをかしからんとして、輕々なる歌おほかり。

〔金葉名義〕

萬葉代匠記曰。萬は十千なり、和語にはよろづと云ふ心十千にかぎるにあらず、たゞ物の足る事なり。

史記魏世家曰。萬滿也。左傳曰。萬盈數也。葉歌義也。釋名曰。人聲曰レ歌、歌柯也。如三草木有二柯葉一也といへり。此の心にて名づくる後、後の撰集に、金葉集、玉葉集、南朝に新葉集などなづけられたるも此の集の名をよりどころとせられたるなるべし。

金葉の文字は、袋草子曰。佛欲レ入二涅槃一之時、先世間金葉花雨云々。以レ之思レ之、金葉世間流布不吉歟。而此集之後無レ程、白河院崩御撰者又逝去。

〔雜　談〕

撰集抄二。過ぎにしころ侍從大納言成道卿、東山に住み給ひけるころ、いづくの者ともしらぬ法師の來て、此の殿に宮仕へ侍らんといひければ、大納言聞き給ひて云々。但しさてもあれかしとて、其の殿に召仕はれ侍りけり、云々。此の僧うせて後、二十日ばかりへて、大納言歌讀の內に撰ばれ給ひて、冷泉中納言俊忠と申す人になんあひ給ひて、いかゞして名歌讀みて君の御感に預り侍らんとおほして、この事のみを歎き給ひける。或日の暮に、ありし僧の來て、君の煩ひ給へる歌、おもひよりてこそ侍れとて、

水の面にふる白雪のかたもなく消えやしなまし人のつらさに

恨むなよ影見えがたの夕月夜おぼろけならぬ雲間まつ身を

と讀みてにげさり給ひけるを、袖を引き留めて、誰人にてかおはすらん、此の日比のなさけに、慥に宣はせよと侍りければ、初瀨山の迎西とてなんふりほどき出で給ひにける云々。讀み給へる歌は、大納言の歌とて金葉和歌集にのれる程に侍れば、中々ともかくも申すに及び侍らず、云々。

歴代和歌勅撰考 巻之三

常陸水戸 吉田令世撰

詞花和歌集十卷

崇徳院御代近衛院御在位　勅撰次第

撰者 顯輔

歌凡四百九首　八雲二袋草子

或四百八首　勅撰次第一本

部立同金葉但連歌　八雲

春歌上 巻頭歌

堀河院の御時百首歌めしけるに春たつ心をよめる　大藏卿匡房

氷ゐし志賀のからさき打ちとけてさゞ浪よする春風ぞ吹く

巻軸歌

常在靈鷲山のこゝろをよめる　登蓮法師

世の中の人のこゝろのうき雲にそらがくれする有明の月

拾芥抄。詞花集十卷〈四百九十首。〉

部立　同二金葉一

天養元年甲子六月二日、依二崇德院勅一、顯輔撰レ之。仁平又奏レ之。後撰已後作者入レ之。古今作者不レ入。

仁平奏覽有二御製一崇德并藤範綱、同盛經歌等、淸書之時被レ止之。白色紙顯輔書レ之。

同抄云。天養元年、奏覽之三位左京大夫顯輔撰。

勅撰次第一本曰。詞花集撰者左京大夫顯輔。金葉後十七年歟。天養元年甲子六月被レ仰レ之〈奉行參議敎長卿〉久安被レ召二百首一、八九年終功レ仁平奏レ之。

八雲御抄ニ云。詞花仁平依二崇德院仰一、顯輔卿撰レ之。天養元六月二日奏レ之。仁平又奏レ之。後撰已來作者入レ之古今作者不レ入。仁平奏有二御覽一御製崇德并藤範綱、同盛經歌など被レ止レ淸二書白色紙一、顯輔書レ之。

按ずるに、仁平依二崇德院一依レ仰て天養に奏るといふ誤りなるべし。勅撰次第にも是れを疑ひて、天養は仁平以前の年號なりといへり。

運步色葉集云。詞花集近衞院仁平元年辛未被レ撰レ之とあり。

袋草子云。詞花集新院御讓位之後、故右京一人撰レ之、天養元年六月二日奏レ之、奏二覽之一。御覽之後返給。御製少々并藤範綱、賴保、同盛經等歌被レ除。予爲二御使一持二參彼亭一。奏覽本布目色紙、草紙自筆也。金葉集付流布本第三度本、歌不レ除レ之、件本無二知人一之故也。

按ずるに、金葉集付流布本とは、金葉集は第二度の本の世に流布したれば、それを取り用るまゝに

三度めの金葉にある歌を、此の度詞花に取りたるをば、除かれずといふ事なり。かくて顯輔卿は、

尊卑分脈云。藤氏顯季、男顯輔、歌人刑部卿、越後、加賀、美作、近江等守、院判官代、內藏頭、中務權大輔、左京大夫、正三位號六條、歌道一流祖。

細川幽齋百人一首抄云。左京大夫顯輔、修理大夫顯季三男、詞花集撰者、號六條和歌一流。六條家とは左京大夫顯輔卿、其の息清輔、顯昭となりと見え、定家卿の近代秀歌とて、鎌倉右大臣殿にかきおくられたるものにも、卽日、大納言經信卿、俊賴朝臣、左京大夫顯輔卿、清輔朝臣、近くは亡父卿則此の道を習ひ侍りける基俊と申しける人、此のともがら末の世の卑しきすがたをはなれて、常にふるき歌をこひねがへりとありて、此の六人の歌をかかれたる程にて、其の頃聞えたる歌人なり。俊成卿も初めは此の卿の弟子又は猶子にて、顯廣といはれたるよしも幽齋の抄に見え、また鴨長明無名抄、東常緣聞書、兼載雜談などにも見えたり。されば此の度勅撰の事をも奉はられたりと見えたり。清輔朝臣、僧顯昭なども、其の世の物知りにて、あらはせる書も皆今に傳へて要あるものどもなり。然るを俊成卿、千載集の仰せを奉はられてより、歌の家は御子左の流にとゞまれることとなりて、六條家などは埋れはてたるは、殘り多き事なりかし。新續古今序云。大凡一人に勅する事、いそのかみふるき跡を尋ぬるに、皆時にのぞみて其のうつはものを撰ぶといへども、代々に傳へて其の家を定むることなし。いはゆる後拾遺、金葉、詞花、千載これなり。しかるに前中納言定家卿、はじめてたらちねの跡をつぎて云々。藤川の一ツながれにあひうけて、家の風聲たえず云々。

【宣下狀】

袋草子云。宣下狀云。

被₂院宣₁云、自₂中古₁以來、不ㇾ入₂勅撰集之外₁和歌等、宜ㇾ被₂撰集₁者、仍執達如件。教長謹言

六月二日　參議教長奉

謹上　左京大夫殿

抑超祖父弁嚴閤、被ㇾ奉₂撰集₁希有事也。此集爲ㇾ體及₂末代₁無₂歌仙₁。隨金葉撰以後年序不幾、爲ㇾ之如何。予于ㇾ時不快、而令ㇾ奉₂此集之後₁有₂恩免₁是爲₂扶持₁歟。而詔問₂事所存₁、披陳其後有不請之氣一切不ㇾ令₂見合₁給ㇾ奏₂覽之₁。聊有₂仰下事₁、爲₂御使₁持₂參彼集₁之間伺見之處、古歌有其數乍ㇾ恐申₂其由₁。其時被ㇾ除ㇾ之不見合給之條、世以爲₂不敵₁耳。

按ずるに、いさゝか心よからざるよしも見ゆれど、父の撰を難じて、別に書をあらはさむ事は必ずあるべきわざかは、俊成の奏狀うけがたし。

〔雜　談〕

袋草子云。後拾遺時有俊頼、基俊不ㇾ入ㇾ之。金葉集之時、大判事明兼不ㇾ入して腹立、俊頼朝臣許に來云、不ㇾ入₂今度集₁不ㇾ可ㇾ歎₂遺恨₁。貴殿遇₂後拾遺之時₁、而不₂入ㇾ之給₁かども、今日は奉₂撰集₁給、明兼も後集に罷入事も候なんと云々。其後詞花集時、一首入と云々。遂宿執了、件人姓中原也。而撰集之度返₂本姓坂上是則₁。苗裔之故尊其姓也。有ㇾ與ㇾ之。予金葉詞花兩度之撰、逢₂千歲一遇₁、空過ㇾ之、遺恨第一也。初めは幼少、後は撰集者之子息之歌、無₂入之例₁云々。大愁也。曾祖父隆經朝臣、後拾遺作者將ㇾ作又入ㇾ之。故左京金葉集作者四代之箕裘、至₂予之時₁闕ㇾ之遺恨云々。

按ずるに、敷島の道をあゆみ、和歌の浦におりたつ人々、其の心のすけるさまも深しとはいふものから、かばかりにもなげき思ふにも、風雅とやいはん、また愚癡たるわざとやいはむ。長能は三月盡の歌を、二十日あまり九日といふに、春の暮れぬるとよみたるは、公任卿に、春は三十日に限るものかはと難ぜられて、心うき事に思ひつゝ病をして身まかり、兼方は花こそといふ歌の、後拾遺に入らで通俊をあざけり、伊房は後拾遺に、我が歌只一首のみなりと淸書をやめ（袋草子）頼實は五年が命をしゞめて、木の葉ふる宿はききわく事ぞなきといふ歌をよみ（長明無名）素意は後拾遺の作者なりとて、馬にのりうち（袋草子）道因は死後に、千載集に其の歌入れりとて、俊成の夢に入りてよろこびをいへり（長明無名）これらのこと立ち返りて、ひろく思ひわたせば、餘りしくわらはしき事なれども、此の道を好むからには、かくもありたる事にて、明兼の俊頼をのり、淸輔の金葉、詞花の二つに洩れたるを歎かれしも亦さる事ぞかし。

沙石集五下鎌倉に、或は僧房の兒師をうらむることありて、他の僧房へ行きてけり。物の具足取りおとしたる中に、詞華集を忘れたりけるを見出して、送り遣はすとて、本の師いかにして詞の花の殘りけむ、うつろひはてし人の心に、其の兒此の歌にめでて亦歸りにけり。互にわりなく侍り。

〔難　破〕袋草子云。詞花ノ詞ノ字ノ音渡死音有二禁忌一之由、或人申餘リノ難歟。

八雲御抄一云。後葉集破詞花集、長門前司爲經、また牧笛集難二後葉集一云々。淸輔、

後葉集序

上畧。ことの葉の花といへる集を、あらたにえらび出されにけり。山がつのしづの垣根に、風のつてに散れるを喜びて、をり／＼ひらきて、春のつれ／＼を慰め、秋の哀れをそふるに、いにしへの人をつらね入れられたるは、富士の根のけぶりよりも高くして、つくばねのこのもかのもにまじり、今の代の歌を撰び載せられたるは、夕づく夜朧氣(おぼろげ)ならぬは、とられぬにやと見えながら、秋山のしかすがに思ゆるも、ところ／＼まじはれる歌に書き改めえらぶべきことありとは、花すゝきほのかに聞えわたりしかども、かりがねのつらね集めたりし人も、ゆふべの虚の雲にまじり、鳴のはねがきなほされむことも、在明の月のさやにもききさだめねば、木のもとにのこれる言の葉もくちはてぬべく云々。ふるき歌のあとをねがひ、のこれることの葉をあつめて、後葉和歌集となづけて、わかちて二十卷とせり云々。

按ずるに、例のくせにて詞花を難じて、後葉集を編まれたるを、詞花の撰者の子の清輔朝臣、其の父のために、又牧笛集をかきいだされたりと見ゆ。またこの外に、

八雲一云。拾遺古今二十卷。教長撰、有レ序。永範嘲二詞花集一。又卷二云。詞花後教長撰二拾遺古今一、如レ此事。詞花則教長、爲二院司一傳三仰於二顯輔一、然而猶有二腹立氣一撰レ之。凡萬人皆己歌仙思叶一切人心難レ有事歟。

本朝書籍目錄云。拾遺古今二十卷、教長撰有レ序、永範嘲二詞花集一。

正治奏狀云(俊成卿)　のり長と申し候ひしもの、私のうちききに、拾遺古今と名づけて集め撰びたる事候ひ

き。其の時清輔かれにつきたるものにて、かたはらにそひ候て、諸共に仕へて候ひし。誠に見ぐるしき事にて候ひき。先づはてりもせずくもりもはてぬ春の夜のと申す歌を、夏の部に入れて候ひき。その歌は源氏の物語に、二月の花の宴の巻に、内侍のかみに、おぼろ月夜にといはせて候を、教長も清輔も源氏を見候はず、まして文集と申す文をも見候はで、白樂天詩に、不レ明不レ暗朧朧月。非レ暖非レ寒漫漫風と申す詩を、此の歌にも讀み候をえ知り候はで、夏の夜のとかきて夏の部に入れて候こそ、教長、清輔共にうたてき事に候なれ。

按ずるに、此の文にては、拾遺古今は、詞花を難じたるにては、清輔もろとも撰びたる由なり。もし拾遺古今は、詞花を難じたるものならむには、我が父の撰びたる集を、父を捨て、他人の教長に付いてものすべき理なければなり。然るに拾遺古今は、詞花を難じたるにまぎれなし。（其の由は下に見ゆ）されば密かにおもふに、俊成卿初めは顯輔の猶子なり、門弟子なりしを、後に基俊の弟子となりて、名も俊成と改められて、六條家をばよそにしたまへるから、俊成と清輔と中惡しくなりて、清輔の事をかくあしざまに取りなされたるかと思ゆるなり。清輔朝臣の拾遺古今に、方をもたざりし事も、又拾遺古今は詞花を難じたる集なる事も詳かなり。其の由は、

袋草子云。詞花集之後、拾遺古今出來、教長入道撰レ之同除レ彼集レ歌。予按レ之撰集無二私事一、難且譏者不二實事一也（中略）傍人之所レ爲別事也。

按ずるに、清輔朝臣のみづから其の事を記されたる趣、かくの如くにて、撰集は勅撰なれば、私事に

はあらざるを、かたはらより譏る人は、もとより不實の者にて、せん方なしといはれたり。是れを以て見るに、拾遺古今は、詞花を難じたる事うつもなく、または清輔朝臣の、拾遺古今の撰にかゝはらぬ事もあきらけし。さらば正治の奏狀は、いたづらに人を罵るの言葉といふべし。

正治奏狀云。又顯輔詞花集撰び候にも云々。故八條のおほきおとゞ、此の集あしく撰びて候。我せんじ思してまゐらせむと申されて、すでに崇德院よりも、人の歌などもつかはされなどせられしを、故內のおとゞ公敎の公、いかにかくやぶられなば、人の爲うき恥にて候ひなむ、まげて此の事あるまじと、しひて制せられ候ひければ、思ひとゞまられ候ひにけると聞え候ひき。それも故公ゆきの卿の歌のよろしきとも候ひけるを入れずとて、それをむねと意趣にて、大方集のすがたわろしとて、やぶられんとせられ候とて聞えし。

按ずるにそしる人もかく私のうらみあり、まさなきわざぞかし。

言塵集云。詞花集は撰者もことなる上手、才學もすぐれ給ふめれど、あまり一體ばかりはおもむけられたる故にや、後代の難も少しありしとか。

〔評　論〕

俊成千載集序云。後拾遺集の後、おなじく勅撰に擬へて撰べるところ、金葉、詞花の二ッの集あり。しかあれども部類ひろからず、歌の數すくなくして、殘れる歌多し。

詞花名義羣書一覽尾崎雅嘉云。詞花集の名は古今の序に、夫和歌者、託$_{二}$其根於$_{二}$心地$_{一}$發$_{二}$其花於$_{二}$詞林$_{一}$

者也。此の語意を用ゐて詞花の字をもとめて名付けられしにや。

〔續詞花集〕

八雲御抄ニ云。續詞花集二十卷有レ序、長光雖レ可レ爲ニ勅撰一、二條院崩御不レ遂レ之書籍目錄同。

八雲卷二云。清輔依ニ二條院仰一、撰ニ續詞花集二十卷一、而崩御間不レ准ニ勅撰一也。

正治奏狀云。又清輔が續詞花集と申す打ちききを仕りて二條院に勅撰に申しなさむと申しうけ候ひしかども、御承引候はざりし上に、故左大臣(實定公)入道わが歌わろきをいれ、よろしと思ふをば入れずと候ひて、我が歌ならびに先祖すべて閑院の人の歌は、皆いだしてよとて、又おい入道(俊成)がおやの歌などは、わが外祖にてあれば、すべて入道が歌までもいださむいかにと候ひしかば、さたに及ばず、まことにうるさくも候。よく〱いだされ候べしと申し候。しかも先祖御子左大納言の歌まで、いくばくは候はざりしかど、閑院の人々のかずなり候ひしかば、うちききもすさまじくこそなり候ひけめ。

かくの如く歌の上に取りては、互にあたなみきしろふ事もありしなり。あさましきわざにこそ。

〔一本奥書〕

羣書一覽云。詞花集一本奥書云。

以ニ前藤大納言爲世卿本一ニ挍畢、以ニ大貳重家本一寫レ之、作者幷歌數相叶、目錄無ニ相違一挍本云、奏ニ覽之一時雖レ入レ依ニ勅定一被レ止歌等ありて歌七首あり。

千載和歌集二十巻

撰者　俊成

御白河院御代　後鳥羽院御在位勅撰次第

歌凡千二百八十四首。又短歌　八雲御抄 拾芥抄

或千二百七十七首　勅撰次第一本

部立　春上下　夏　秋上下　冬　別　旅　哀傷　賀　戀自一至五　雜上中下　短歌　旋頭　物名　俳諧　釋教　神祇八雲御抄

按ずるに、此の部立の中に短歌とあるは、古今集に長歌の部に短歌とあるは誤りなるを、今も其の誤りを傳へて記されたるものなり。

春歌上　巻頭歌

春たつこゝろをよめる　源俊頼朝臣

春のくるあしたの原を見わたせば霞もけふぞ立ちはじめける

巻袖歌

おなじ大嘗會の主基方の歌よみて奉りける神樂歌丹波國千年山をよめる　藤原光範朝臣

千年ふる神のよさせる榊葉のさかえまさるは君がためかも

【拾芥抄】

千載集二十卷千二百八十四首。又短歌在レ之

部立　春上下　夏　秋上下　冬　別　旅　哀傷　賀　戀自レ一至レ五　雜上中下　短歌　旋頭　名物

壽永二年二月日被レ下二院宣一。三位中將資盛卿奉三近古以來和歌可レ撰進一云々。一條院御宇永延以後歌撰レ之。

文治三年九月二十日、依二後白河院院宣一、入道俊成卿奏レ之、遁世者撰レ之准二喜撰一和歌式有レ序假名入道俊成卿書レ之。

正暦以後歌人撰レ之。

同抄云。壽永二年二月、藏人頭右中將資盛朝臣、奉レ書近古以來和歌可下令二撰進一給上者、依二院宣一上啓如件。

月　日　　右中將資盛

謹上　入道三位殿

文治四年四月二十日、奏自筆入二蒔繪莒一、持二參院御所一、翌日定長朝臣奉レ書、撰者詠一十餘首可レ加二入之一由被二仰出一入レ之進レ之。

尊卑分脈。長家孫俊忠、子俊成本名顯廣、文治三年、依二後白河院宣一、撰二進千載和歌集一、于レ時出家已後也。遁世者撰進准二喜撰和歌式一云々。

勅撰次第云。千載集文治三年九月二十日奏レ之、イ文治二年九月被仰之皇太后宮大夫俊成撰序同。

異本勅撰次第云。千載集、詞花後三十九年歟。壽永二年癸卯二月被レ仰レ之。元暦元文治三五年終レ功、

文治三年九月二十日奏レ之。

按ずるに、文治三五年云々とは文治三年に功を終りたれば、壽永二年に仰せを奉はりてより、其の間五年なりといふことなり。

八雲御抄ニ云。千載集文治。依ニ後白河院仰一、入道俊成卿撰レ之、遁世者撰レ之、准ニ喜撰和歌式一。

文治三奏ニ覽之一、假名序俊成。

按ずるに、千載文治依後云々とは、文治にて句をきり讀むべし。文治年中に奏覽の集なり。さてそれは依ニ後白河院仰一なりといふ意なり。

本集序云。後拾遺集にえらびのこされたる歌、かみ正暦のころほひよりしも文治の今に至るまでの、やまと歌をえらび奉るべき仰せ事なむありける。八雲抄ニ。千載正暦已後歌人撰レ之中畧。すぎにしかたも年久しく、今ゆくさきもはるかにとどまらむため、此の集を名づけて千載和歌集といふ中畧。宇治山の喜撰といひけるなむ、すべらぎの詔をうけたまはりて、大和うたの式をつゞれりける式をつくり、集をえらぶ。かの昔のあとにより、今このなずらへあるがうへに、和歌の浦のみちにたづさひては、なゝそぢのしほにすき中畧文治みつの年の秋長月の、中の十日にえらびたてまつりぬるになむありける。

按ずるに、千載集の名、序にいへるが如し。羣書一覽には袋草子の佛涅槃、金葉花雨云々。詞花の詞字、死の音にわたると云ふ說を引きて、或云。此の名い不吉故、崇德院外遷の御歎きありといへり。かく先二代の集、其の名に俗難あれば、此の集は千載と祝儀をこめて名づけ給ふ云々とみえたり。

帝王編年記第二十二。後鳥羽院文治二年、令年俊成卿（號二五條三位一）令レ撰二千載和歌集二十卷一。

八雲卷一云。後拾遺千載など序はさる程なり。

明月記（定家日記）云。文治四年四月二十二日戊子晴。巳刻計入道殿令參院給爲勅撰集奏覽也。日來自筆御清書白色紙紫檀軸（具鶴丸）羅表紙紐、外題中務少輔伊經書レ之、納レ筥。筥蒔繪自御葦手有新歌未レ斜、令レ出ニ給於二御前一。殊有二叡感一云々。自令三讀二申之一給。又蒔繪歌以二神筆之本一留御云々。

按するに、四年四月二十二日と正しくある事、まへの諸書にいへるとはたがへれども、序は俊成卿の自らかかれたるなれば、まがふべくもあらず。又明月記も俊成卿子の定家卿の自らの日記なれば、たがふべきにもあらず。これは去年九月に奏覽の後、又改むる事ありて四年四月二十二日ふたたび清書いできて奏られけるなるべし。筥の葦手紫檀軸、羅表紙、伊經の外題、いかにめでたかりけんと思ひやらる。後白河院の感じおほしけるも理にて、何くれに付けて撰者の歌を追ひつきて加へさせ給ふと見えたり。

明月記同年同月云。二十四日庚寅入レ夜、權尚書奉レ書云、撰者之詠乏少、猶三四十首可レ副二進之一云々。可二撰進一之由有二御返事一。

按するに、勅撰も昔は、時の名ある人に仰せられて、古今に躬恆、貫之、友則、忠岑の四人。後撰は能宣、順、望城、時文、元輔の五人。拾遺は花山院天皇。後拾遺は通俊一人。金葉は俊頼、詞花は顯輔、各一人にてうけたまはられき。これ道はおほやけにして、わたくしをなし難ければなり。然るに

此の千載集を釋阿の奉はられてより後は、定家、爲家の卿だち、代々勅撰をうけたまはる事にて、をさをさあだし家の人はあづかり得ぬことの如くになれり。これより道せばく、私言もいできて、歌にひめごとなどいふすぢ〳〵を設けつゝ、歌のあしくなれる本となれり。歌よむ人の心してわきまふべき事にぞある。

〔清　談〕

井蛙抄云。或人云、千載集の比、西行在二東國一けるが、勅撰有りとききて上洛しける道にて、登蓮にあひにけり。勅撰の事尋ねけるに、はや披露して御歌も多く入りたると云ひけり。鴫たつ澤の秋の夕暮といふ歌入りたりやと問ひければ、見えざりしと答へければ、さては見て要なしとて、夫れより又東國へ下りける云々。

平家物語云（忠度都落ノ段）薩摩守忠度は（盛衰記には、よどの河尻より歸るよしなり。）何くよりか被レ歸たりけん、侍五騎童一人、我が身共混甲七騎取つて返し、五條の三位俊成卿の許に坐して見給へば、門戸をとぢて不レ開。忠度と名乘り給へば、落人還り來れりとて、其の内騷ぎあへり。薩摩守いそぎ馬より飛んでおり、自ら高らかに被レ申けるは、是れは三位殿に可レ申事有りて、忠度が參つて候。たとひ門をば不レ被レ開とも、此のきはまで立ち寄り給へ、可レ申事の候と被レ申たりければ、俊成卿、其の人ならば苦しからまし、開いて入り申せとて門を開いて對面ありけり。事の體何となうあはれなり。薩摩守被レ申けるは、先年申し承りてより後は、ゆめゆめ疎略を不レ存と申しながら、此の二三年は京都のさわぎ國々の亂れ出來、あまつさへ當家の身の上

にまかり成りて候へば、常にまゐりよる事も候はず、君すでに帝都を出でさせ給ひぬ。一門の運命今日はやつきはて候。それにつき候ては、撰集の御さた有るべきよし承りて候ひし程に、生涯の面目に、一首なりとも御恩をかうぶらうと存じ候ひつるに、かかる世の亂れ出で來て、其のさたなく候條、たゞ一身のなげきと存ずるに候。此の後世しづまりて、撰集の御さた候はば、是れに候まき物の中に、さりぬべき歌候はば、一首なりとも御恩をかうぶりて、草の陰にてもうれしと存じ候はば、遠き御まぼりとこそ成りまゐらせ候はんずれとて、日ごろよみおかれたる歌どもの中に、秀歌とおぼしきを百餘書きあつめられたりける巻物を、今はとて打ち立たれける時、是れを取りて持たれたりけるを、よろひの引きあはせより取り出して、俊成の卿に奉る。三位これを開いて見給ひて、かかる忘れがたみどもを給はり候うへは、ゆめゆめ疎略を存じまじう候。さても只今の御わたりこそ、なさけも深うあはれも殊にすぐれて、感涙おさへがたうこそ候へと宣へば、薩摩守、かばねを野山にさらさばさらせ、うき名を西海の波にながさばながせ、今はうき世に思ひおく事なし、さらばいとま申しとて、馬に打ち乘り、かぶとの緒をしめて、西をさしてぞあゆませ給ふ。三位うしろをはるかに見送りて立たれたれば、忠度の聲とおぼしくて、前途程遠く思を鴈山の夕の雲に馳すと、高らかに口ずさみ給へば、俊成の卿もいとゞあはれに覺えて、涙をおさへて入り給ひぬ。其の後世しづまりて、千載集を撰ぜられけるに、忠度のありしありさまいひおきし言の葉、今更思ひ出でてあはれなりけり。件の巻物の中に、さりぬべき歌いくらもありけれども、其の身勅勘の人なれば名字をばあらはされず、故郷花といふ題にてよまれたりける歌一首ぞ、よみ人しらずと入れられたる。

さゞ浪や志賀の都はあれにしを昔ながらの山ざくらかな

其の身朝敵となりぬる上は、子細におよばずといひながら、うらめしかりし事どもなり。

長明無名抄云。千載集に予が歌一首いれり。させる重代にもあらず、讀みくちにもあらず、又時にとりて人にゆるされたる好士にもあらず、然るを一首にても入れるは、いみじく面目なりと喜び侍りしを、故筑州ききて此の事唯等閑にいはるゝ歟と思ふ程に度々になりぬ。誠に思ひて宣ふにこそ。さるにては此の道にかならず冥加おはすべきなり。其の故は、道理はしかあれど、人のしか思ふ事はあり難きわざなり。この集を見ればさせる事なき人々、皆十首七八首四五首いれるたぐひ多かり。かれらを見る時は、心やましく思はるらんとおしはかるに、剰へかく悦ばるゝいみじき事、道をたふとぶには、まづ心をうるはしくつかふるに在るなり。今の世の人は皆しからず、身の程もしらず心高くおごり、かまびすしきいきどほりを胸に結びて、事にふれてあやまち多かり。今思ひあはせられよとなん申し侍りし。誠に此の道の冥加、身の程にも過ぎたり。古き人のいへる事かならず故あり。

又云。此の道に心ざし深かりしことは、道因入道ならびなきものなり。七八十になるまで秀歌よませ給へと祈らん爲に、かちより住吉へ月詣でしたる、いと有りがたき事なり〔中略〕千載集えらばれし事は、彼の入道うせて後の事なりき。されどなき跡にも、さしも道に心ざし深かりしものなりとて、優して十八首入れられたりけるに、夢の中に來りて涙を流しつゝ、悦びをいふと見給ひければ、ことにあはれがりて、今二首を加へて二十首になされたりけるとぞしるし侍る事にこそ。

定家卿相談云。寂蓮入道が歌に、尾上より門田に通ふ秋風に稲葉を渡るさをしかの聲。ことの外に自嘆の氣ありて、千載集撰ばれし時、まげて入るべしと申ししを撰者、おもしろき歌なり、是れは道理かなはぬにはあらねど、末代の歌損せんずるものなり、入るべからずと申されしを、作者則ち一首書き入れられたらむ、何事かあらむのよし申ししかば、予が得分に申し入了出勅撰次第。

兼載雜談云。基俊と俊頼は中あしかりしなり。千載集俊成卿撰ぜられしに俊頼の歌多くいる。人難云。師匠に敵の人歌をばいかで多く入るぞと云ひしに、俊成云、俊頼はにくけれど歌はにくからずと宣ひしとなり。君子は怒りをうつさずと云ふ心なり。

又云。俊成云。我が集を撰ぜし時、人を見ず歌を見しとなり。されば定家も新勅撰に、家隆の歌をば多く入れられたり。

〔七代集〕

新古今集假名序云。古今集より此のかた七代の集にいれる歌、これを載する事なし。

〔難　破〕

八雲御抄云。難千載集、勝命美作前司入道。

明月記。天福元年五月二十七、千載集正本二十卷考、行於關東自武士手關殿、年來持之云々。於蓮華王院殿歟。無所納之手筥云々。雅舊損不及申用之程可進御前云々。

同年七月三十日、本マヽ紝千載集爲仲章イ重朝臣、被燒其上帖。被召禁裏之後、總不持不散不審、適□

逢二證本一密染二老筆一。自二十六日一至二于今日一、書二終上帖一、書二始下帖一。此集作者之位署題之年月等、甚無レ謂事多。昔雖二諫申一、總不レ被二信用一。只任意被二註付一。今見レ之慙思事多。總付二萬事一任二當時之存知一、不レ被レ勘。見二先例一准據事之故也。辨物由之人定成二誹謗一歟。於二顯昭、季經等者一、又不レ可レ分二別之一。

○八月五日未時、書二終千載集一、下帖不レ顧二老骨一、遂終レ功。此集之體猶以遺恨多。

〔歌　體〕

長明無名抄云。詞花、千載、大畧後拾遺の風なるべし。

十訓鈔曰。待賢門院女房に加賀と云ふ歌よみありけり。

　かねてより思ひしことをふし柴のこるばかりなる歎きせむとは

と云ふ歌を年比よみて持ちたりけるを、おなじくはさるべき人にいひむつれて、忘られたらむに、讀みたらば集などに入らむ、おもても優なるべしと思ひて、いかゞしたりけむ、花園のおとゞに申しそめけり。思ひの如くにやありけむ、此の歌をまゐらせたりければ、おとゞもいみじく哀れにおぼしけり。さてかひがひしく千載集に入りにけり。世人ふししばの加賀とぞ申しける。著聞集に文、全く同じ。但し歌の三ノ句思ひしこととあり。

今鏡ふししばに云。又兵衛のかみや（公教）少將たちなどまゐり給へば云々。あるをりは歌よむごたち、まうでかよひける中に、ほいなかりけるにや、女、

　かねてより思ひしものをふし柴のこるばかりなる歎きせむとは

盛衰記三十七にも見えたり。とて奉りたりければ、やがてふし柴とつけ給ひて、をりふしには、おとづれ奉りければ、こ

よひはふししばはおとづらむものをなどあるに、すぐさず歌よみて奉りなどして、いたきものとて常に申しかはすもありけり。

新古今和歌集二十卷　　撰者定家通具等

後鳥羽院御代土御門院御在位 勅撰次第

歌凡千九百七十八首 八雲御抄二。拾芥抄

或千八百七十四首 勅撰次第一本。

自二萬葉一至二新古今一歌凡九千三百八十首也 或重複八雲。

部立　春上下　夏　秋上下　冬　賀　哀　別　旅　戀自レ一至レ五　雜上中下　神祇　釋教

春歌上　卷頭歌

春たつこゝろをよみはべりける　　攝政太政大臣

みよし野は山もかすみて白雪のふりにし鄕は春はきにけり

卷軸歌

觀心をよみはべりける　　西行法師

やみはれてこゝろの空にすむ月は西の山へやちかくなるらむ

八雲ニ云。新古今元久、通具、有家、定家、家隆、雅經等、撰進申、上皇有二御點一、被レ定レ之。萬葉歌

入レ之。古今歌皆不レ入レ之。披露後又被レ直二官位一有二相違一事、所詮通光權大納言或左衛門督など也。

異本勅撰次第云。新古今假名序攝政、眞名序權中納言親經（雅嘉云。日野家嫡流ノ儒者也。）撰者右衛門督源通具、大藏卿藤原有家、左近中將藤原定家、前上總介藤原家隆、左近少將藤原雅經。

和歌所開闔源家長朝臣、沙彌寂蓮、同雖レ承翌年死去、委細家長朝臣記レ之。千載之後十四年歟。建仁元年辛酉十二月被レ仰レ之（奉行長房卿）同三年四月撰二進之一。元久元年二月二十六日被レ行竟宴二ケ年終レ功（勅撰以前）正治二年百首被レ召、建仁元年又被レ召百首幷千五百番歌合。

尊卑分脈定家。

元久二年三月二十六日、後鳥羽院勅定、撰二進新古今集一、撰者五人、又隨一也。所謂參議右衛門督通具、大藏卿有家、左近中將定家、前上總介家隆、左少將雅經等也。

上皇御合點、有レ序眞名假名。

貞永元年六月十三日、奉二後堀河院綸言一、又撰二新勅撰集一。頭中將資雅於二殿上一仰レ之、同年十月二日、先奏序幷卷卷月六等。天福二年五月、依レ仰内々奏二覽之一。

按ずるに、新古の時、これより以前和歌所を置かれて、其の寄人はすなはち定家、家隆、雅經、寂蓮通具、または後京極良經公、内大臣通親公、慈圓、俊成卿などなり。これを和歌所の中興といふべし。いとさかりなる事共なり。其の事は別に委しく記せばこゝにいはず。

拾介抄。

新古今集二十卷千九百七十八首。

部立　春上下　夏　秋上下　冬　賀　哀傷　別離　羇旅　戀自レ一至レ五　雜上中下　神祇　釋教

元久二年乙丑三月二十六日、依二後鳥羽院院宣一、參議右衛門督通具、大藏卿有家、右近中將定家、前上總介家隆、右少將雅經等撰進中、上皇有御合點被レ定有レ序眞名親經卿、奉二良經公仰一書レ之。假名攝政書レ之　寂蓮雖レ入二撰者一、奏覽以前早世。萬葉集歌入レ之、古今歌皆不レ入レ之。披露之後又被レ直二官位一、有二相違一事所謂通光大納言、或左衛門督等也。

已上謂二之八代集一。

已上以二八雲御抄一所レ見レ註。

同抄云。

建仁元年十一月、右中辨長房朝臣奉レ書、藏人頭通光朝臣、定家朝臣、家隆、雅經、上古以來歌可レ撰進一之由奉レ之、同三年四月、依レ被二急仰下一、各撰二進之一。同六月以後切五人所進歌、被レ續二加之一、其沙汰經レ年序レ之。元久二年四月、被レ行二竟宴一、承元三年六月可レ施二行之一由被二仰下一、施行以後猶或被レ止或始入レ之。

私勘。

建仁元年被レ置二和歌所一開闔源家長、寄人藤原清範、鴨長明、藤原秀能。

同抄云九人。道抄

凡撰集先爲ニ披露一尤不安、種々異名放言多。後拾遺後拾遺後經信書レ難。後拾遺、金葉後日顯仲嘲レ之撰ニ良玉集詞華一、後教長撰ニ拾遺古今一、如レ此事多、詞華則教長爲ニ院司一傳レ仰レ於ニ顯輔一、然而猶有ニ腹立之氣一撰レ之云。

此外清輔依ニ二條院仰一撰ニ續詞花集二十卷一、而崩御之間不レ准ニ勅撰一也。

明月記云。建仁元年十一月三日、左中辨奉レ書、上古以後和歌可ニ撰進一者、此事被レ仰所寄人云々。所は和歌所をいふ。

元久元年七月二十二日、今日撰歌可レ被ニ部類一、始可レ參和歌所由、一昨日有レ催、仍參入。同二十七日、家長夜部歸京、依ニ其告一參ニ和歌所一、通具有家大理大府卿雅羽林雅經家長、會合、開ニ歌箱一部類羽林執筆相構。春上下如レ形終レ功夕退下。

按ずるに、かくの如く元久元年七月に、やゝ部類を分てり。然るに勅撰次第に、建仁三年四月撰ニ進之一とあるは、あやしむべし。依つて明月記を按ずるに、建仁三年三月七日巳時參ニ御精進屋一家長云。撰歌此御熊野詣之間清書、還御最前可進當時、雖ニ散々申奉之由一云々。同四月十一日家長撰歌、來二十日可レ進之由、以レ書示送。此二十日計、只見舊歌送ニ日夜一といふ文あり。これは新古今いまだ成らざる以前に、まづ撰び出でたる歌を、うち〳〵清書をして御覽に入れ奉る事と聞えたり。それを次第には見あやまりて、既に撰集終りて、奏覽したる事と思へるなるべし。

元文二年二月十九日云々。此日來撰歌書詞切繼、殊被レ急、同月二十一日左大辨持ニ參撰集一序、今日奏

覽了。二十二日今日終二戀部一又終二釋敎部一、部多之間相待人數多、時神祇部取出之。予依レ憚レ身此部有レ恐之由、示二家長一了。神歌甚多、神歌之次第尤難レ測。二十六日巳時計參所、家隆朝臣參織、出二雜下部戀一二部一。今日又少々繼直。三月二日巳時參院。人々云。當世人歌不レ知食一、多少先註出之可レ經二御覽一、爲レ令二增減一也。以二能書之人一令レ書レ之。又仰云。卷始大畧以二故人一置レ之不可レ然。以二定家、家隆、押小路女房等三人名一可レ立。一卷始者又繼直レ之、以二家隆一爲二秋下部始一、以二女歌一爲二戀二始一。以二予歌一爲二戀第五始一。依爲身事態所入未也。此仰尤爲二面目一。同六日申時計、家長持二撰歌幷荒目六等一、參二彼御所一。二十日別當消息云。新古今竟宴凝二風情一、可二豫參一由承、催二此事一如何。延喜古今、天暦後撰、管見之所レ不レ見二竟宴一事、只所見日本紀竟宴計也。二十三日御淸書假名序云。難二出來一仍以此中書二遂竟宴之後一可レ有二淸書一可レ被二繼加一序云々。二十七日上畧豫文臺切燈臺儲レ之、新古今集在二文臺上一、讀レ序。通具卿參講師後詠レ之、春部始四五首詠了、講師退出次歌人次第置歌（これは竟宴の時のさまなり）二十五日上畧假名序、古今殊尋常難レ有事歟。此文章眞實不可思議、無比類者也。終日在二御前一夕、家長持二參新古今和歌集一先經二御覽一、紕謬等可レ被レ直之由、中之四月十五日午時參院、新古今又被二取破一、自二殿下一令レ申給之云々。散々切繼不レ終レ功、或入或出、又置二替其所一、予歌三首被レ出四首被レ入レ之下畧。

この外に、元久二年閏七月二十五日、建永元年六月十九日、同十一月八日などの條にも、和歌のぬきさし、切繼の事見えたり。今は事長ければむねと有るべき所々をのみぬき出でて、此には記しぬ。かくて新古今集撰ぜられし折の事は大方かくの如し。草稿の出來上りたるは、元久二年二月二十日に、

釋教部まで終られたる事見ゆれば、此の時ぞまづ一部の下がきは出來たりけん。されども右の日記の如く、後々までもぬきさしありて更に定まりたらず、撰者の意に叶はぬ事もありぞしつらん。建永元年十一月八日の記に、依レ仰又切新古今（出入如反掌）以二切繼一爲事於レ身無二一分面目一と見えたり。按此の後はこの沙汰きこえねば、此の十一月八日の切繼にて事定まりしにやあらん。

本集序云。是れによりて右衛門督源朝臣通具、大藏卿藤原朝臣有家、左近中將藤原朝臣定家、前上總介藤原朝臣家隆、左近少將藤原朝臣雅經等に仰せて、むかし今遠きをわかたず、高き卑しき人をきらはず、目に見えぬ神佛の言の葉も、うば玉の夢につたへたる事まで、廣くもとめ、あまねく集めしむ云々。萬葉集にいれる歌は、これをのぞかず。古今集より此のかた、七代の集にいれる歌をばこれを載することなし云々。すべて集めたる歌、ふたちちはたまき、名づけて新古今和歌集といふ云々。かの萬葉集は歌の源なり。時うつり事へだたりて、今の人知る事かたく、延喜のひじりの御代には、四人に勅して古今集をえらばしめ、天暦の賢きみかどは、五人に仰せて後撰集を集めしめ給へり。その後、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載の集は、皆一人これを承れる故に聞きもらし、見及ばざる所もあるべし。よりて古今、後撰のあとをあらためず、五人のともがらを定めてしるし奉らしむるなり云々。此のうちみづからの歌を載せたる事、ふるきたぐひはあれど、十首にはすぎざるべし。然るを今かれこれえらべるところ、三十首にあまれり云々。ときに元久二年三月二十六日になむしるし終りぬる。

按ずるに、此の序にて、五人に仰せられたる趣も、萬葉の歌をえらび入れられたる事も、撰者のみづ

からの歌をあまた入れたる事も、いとつばらかに知られたり。さて元久二年三月二十六日になむしるし終りぬとは、明月記に依れば、二十七日竟宴に、かな序の清書いできがたければ、中くきにて竟宴ありし由なれど、其の中書を二十七日奏覽するにつけて、二十六日に記し終らせたる由に書かれたるものなるべし。○眞名序を卷の尾に付けられたるは、古今集の眞名序にならひての事なり。

八雲卷一。新古今の序は首尾かきあひて、詞つゞき尤も神妙に、有りがたき程なり。

東鑑元久二年乙丑九月二日乙酉。藤兵衛尉朝親、自二京都一下著、持二參新古今和歌集一。是通具、有家、定家、家隆、雅經等朝臣、奉二勅定於二和歌所一、去三月十六日撰二進之一。同四月奏覽未レ被レ行、竟宴又無二披露之儀一。而將軍家令レ好二和歌一給之上、故右大將軍御詠被二撰入一之由、就聞食、頻雖レ有二御覽之志一、態不レ及レ被二尋申一。而朝親適屬二定家朝臣一嗜二當道一即列二此集作者一讀人不知之間、廻二計略一可二書進一之由、被二仰含一之處、依二朝雅、重忠等事一都鄙不レ靜之故、于レ今遲引。云々。

北條九代記四。朝親進二新古今集一條、元久二年九月二日、藤兵衛尉朝親、京都より下著して、新古今和歌集をもて實朝卿に奉る云々。その中に新古今集は、去んぬる三月十六日撰集し、同四月に奏覽す、いまだ竟宴を行はれず、披露の儀はこれなしといへども、將軍實朝卿此の道を好み給ふそのうへ、故右大將の御歌も撰み入れられしと聞き給ふにつきて、頻りに御覽ぜらるべき志はおはしけるを、朝親すなはち定家卿に屬きて、和歌の道稽古淺からず。既に此の集の作者に入れられ、讀人しらずとはせられたれども、歌の本意ありけるを思ひ悅ぶ所なり。實朝卿いかにもして進ずべきのむね望み給ふに依りて、朝親ひそか

にいたして鎌倉に下向し、將軍家に奉りければ、大に御感のあまり、朝親にさま〴〵の御引出物給はり、歌道の御物語まし〳〵、御詠なんども出されて見せ給ひけり。

増鏡おどろの下巻云。文治の比千載集ありしかど、院（後鳥羽）末だきびはにおはしまししかばにや、御製も見えざめるを、たうたい（土御門）位の御ほどに、又あつめさせ給ふ。土御門の内のおとゞ、二郎君右衞門督源朝といふ人をはじめにて、有家の二位、定家の中將、家隆、雅經などに宣はせて、むかしより今までの歌を廣く集めらる。おの〳〵奉れるうへを、院の御まへにて自らみかきとゝのへさせ給ふさま、いと珍らしくおもしろし。此の時もさきに聞えつる、攝政殿とりもちて行はせ給ふ。（中略）おしなべては撰者のまゝにて侍るなれど、こたみは院のうへ身づから和歌の浦におりたたせ給へば、まことに心ことなるべし。（中略）かくて此のたび撰ばれたるをば新古今といふなり。元久二年三月二十六日（六は七のあやまり。）竟宴といふ事、春日殿にて行はせ給ふ、いみじき世のひゞきなり。かの延喜のむかし思しよそへて、院の御製、

いそのかみふるきを今にならへこし昔のあとを又たづねつゝ

攝政殿（よしつね）おとゞ、

しき島ややまと言のは海にしてひろひし玉はみがかれにけり

つき〴〵すむなかるめりしかど、さのみはうるさくてなむ。

定家卿相談（勅撰次第に出づ。）云。新古今被レ撰之時、もとの雫や世の中のといふ歌、古今にあると思ひし程に、遍昭の歌撰び出しになりしかば、（新古今の時、古今の作者を書きて入れたるを、皆ぬき書きて書きあつめ〳〵せらるゝなり。）かかる不思議こそ候へと、故殿

に申せしかば、有家が一昨日來りしも、さいひしかと仰せられき。又自詠は可レ入ル歌も不レ入レ、思ひがけざる歌もいれり、自撰せざる故なり。自撰恐れある間、一首もかかざりき。撰者達の歌。思ふ様にも見えず。家隆卿歌こそ入れたるかぎり神妙に候へ、定家手をくだして彼の人の歌えりて奉りき。

兼載雜談云。新古今撰ぜられし時、公卿諸大夫以下、家集を五百首千首づゝ出されしに、鴨長明はたゞ十二首出したりしに、そのまゝ十二首ながら入れしとなり。

井蛙抄云。新古今に、父秀宗身まかりて後、寄風懷舊 露をだに今はかたみの藤衣 わすれぬ夢を吹く嵐かな をよめるとて、秀能の歌被レ入たり。兄秀康これほどの面目なるべくば、首をもはねらるべしとて羨ましがりけり。

正徹物語云。雅經は新古今の五人の撰者の内に入り侍りしかども、其の比堅固の若輩にて有りしかば、撰者の人數に入れたる許りにて、家には記錄なども有るまじきなり。

〔八代集〕

拾芥抄倭漢名數云。古今、後撰、拾遺、(後拾遺脱か)金葉、詞花、千載、新古今、以上稱二八代集一。

明月記。文暦元年九月八日甲辰、一昨日被レ仰二八代集歌一(各十)巻書出進二上仁和寺宮一。

按ずるに、此の八代集といふ名、はやくよりいひしなり。

八雲御抄二云。八代集數十卷、同じく只三人の例也。

かくのごとくなれば、當時既に新古今までを八代集といひしなり。

了俊和歌不審云。昔藤谷殿にて、八代集を人々に、四季、戀、雜、六首おの〳〵の好みの歌を撰ぜられ

候て、御さた候ひける。

〔誤　傳〕

幽齋百人一首抄云。新古今定家卿の撰、其後母離別に付、籠居の間に歌被ﾚ寄、就いては其の本意にあらずとなり。其の故は、古今は花實相對し、新古今は花過ぎたるとなり。此の百首は實六七分也。

宗祇百人一首抄序云。右百首は京極黄門小倉山莊障子色紙の和歌なり。それを世に百人一首と號するなり。これを撰び書きおかるゝ事は、新古今の撰、定家卿の心に叶はず。其の故は、歌道は古より世を治め民をみちびく敎戒の端たり。しかれば實を根本にして、花を枝葉にすべき事あるを、此の集は偏に花を本として、實を忘れたるにより、本意とおぼさぬ成るべし。

幽齋百人一首抄序云、新古今を五人に仰せて撰ばれしなり。然るに定家卿は、奏覽以前父の喪に籠り居たまへり。さるによりて、各の歌の體、彼の卿の心に叶はず、其の趣は明色記に粗(ほゞ)みえたり。

按ずるに、かくの如く新古今は、定家卿の心に叶はぬ故に、百人一首を撰ばるゝ由諸書に見えたり。明色記は明月記の誤りなるべし。建永元年十一月八日の記に、以ﾆ切繼ﾆ爲事、於ﾚ身無ﾆ一分面目ﾆと あるは、いかにも彼の卿の心にかなはぬ事とはしられたり。されども俊成卿の喪にこもりたり、又は小倉山莊に押されたりなどといふ事は、皆誤り傳へたる事は、細川知愼が、觀鵞百譚、安藤年山が年山紀聞、賀茂眞淵が百人一首うひ學びなどに、明月記を引きて委しく論じたるが如し。其の事は今世別に百人一首の考に記せれば、此にはいはず。但し眞淵が說を少しあぐべし。

うひまなびに云。定家卿は父俊成卿の喪にこもりて、こと加へられねば、此の集花のみ多し。これを思ひて後に、實ある此の百首を撰み、小倉の山莊の障子の色紙に書きつといへりとか。考ふるに、新古今は建仁元年十二月に、右のぬしたち、院の勅を承り、同三年四月に撰みなして奉りたり。さて後に、院の御撰みを加へ給ふ事、年月を經て元久二年四月竟宴ありて、承元三年六月ぞ世に行はせ給ひける。俊成卿は右の元久元年十一月十三日に薨ぜられたり。かかれば五人の撰み果て奉りし後の事なり。今世云。此の說は建仁三年の記を引きて論ふが如し。右は唯、元久二年三月、世に廣めたまふてふ事を聞きて、そらにいへるひがごとなり。委しからず、前に花實の事も、定家卿しか思はれなば、それより多くの年過ぎて、貞永元年に一人して撰ばれし新勅撰こそ、心たらひにせられなめ。其の後文曆の比書かれし此の百首を待ちていふべきに非ず云々。

〔勅點新古今〕

桐隱隨筆三云。冷泉殿御文庫に、爲家卿勅點新古今集有、雜下闕卷。これは後鳥羽院於ニ隱岐御所一再ヒ撰み給ひし御本の寫なり。

俊明云。今按ずるに明月記を見れば、新古今集を撰まるゝ時に、日每に勅慮にて增減有りしと見えて、書き改めらるゝ事をしるされたり。後には京極黃門卿もことの外に心にも叶はぬ事と見えて、今の世のさま掌を返すが如しなど書かれし事の有るは、遠島遷幸の後にも猶叡慮に改められしなるべし。

羣書一覽云。奧書に、異本の歌五首入れたる本あり。これは隱岐の國に於て改め直させ給へる本にて、本目に隱岐本と稱するものなり。その御跋は扶桑拾葉集にのせさせ給へり。

〔歌體論〕

長明無名抄云。中ごろの人の、歌のていを執する人は、今の世の歌をばすゞろ事の樣に思ひて、やゝ達磨宗など異名をつけてそしりあざける。又此の比樣を好む人は、中ごろの體をば、俗に近し見所なしときらふ云々。○阿佛夜の鶴云。新古今、むかしの歌のやさしきすがたに立ちかへりて、をらばおちぬべき萩の露、ひろはば消えなむとする玉ざゝの、あられなど申すべきを、餘りにたはれすぐして、歌のあしざまに成りぬべしとて、新勅撰は思ふところ有りて、まことある歌を撰ばれけりなどぞ承り候ひし。

後普光園院の近來風體に云。新古今ほどおもしろき集はなし。初心の人にはわろし、心得たる人は此の集を見ん事いかであしかるべき。又云。本歌には堀河院の百首の作者までをとるなり。同じくは名人の歌をとるべし、勅撰には後拾遺までをとるべしと申しき。但し今は金葉、詞花、千載、新古今などをとりたらん、何か苦しかるべき。此の分左相府へも申し侍るなり。連歌には新古今までをもとるなり。譜歌には近代の歌よみの歌をも用ゐるなり。○資慶卿□梗云。新古今よく〳〵見るべし。されども新古今は至極無上にして、心も詞もかけたる所なし。あまり事理つまり〳〵て廣からず、されば、わざと爲家が續後撰を、溫和にやすらかに引きさげてあまれしなり。

耕雲口傳。

三代集の歌は唯ありに私なく、うちきくにことわり聞えておもしろく、三百篇の詩の性情を吟詠して、高くすなほなるが如し。それより後に歌道おとろへて、中古以來の歌は心もひずみ、言葉もいやし。また

三代集の中にも、後撰、拾遺の歌は、いかにぞやうるさきことのまじりて聞ゆるなり。千載集のさき程に經信卿、俊頼、基俊出で來りて、此の道中興せり。いはんや西行上人、俊成卿、定家卿など、和歌の大聖人なり。是れによりて新古今の一集、文質合はせ兼ねて、古今の風一變するに似たりとも、只古許りを學びて、めづらしき心をよみいでざるは、むかしの人の口まねにこそあらめ云々。

詞は歌の文なりかざりなり。後撰、拾遺より金葉、詞花のころほひまでは、歌をよむに心を本とすといへども、言葉をえらぶ事なきによりて、歌のすがたいやしきに似たり。君臣合體時節到來するによりて、新古今の一集、心の泉みなもと深きのみにあらず、詞の花には匂ひたへにして人の目をおどろかし、人の耳をよろこばしめ、錦繡を織りみだし、金石を合奏するに似たり。この比又あまりにやさしき詞、たへなる質を本とするによりて、極上の達者どもこそ心をうしなはずして、しかも言葉すぐれいみじけれ。つぎつぎの歌人共は、其の身だに心えぬ事を、ことばに任せてくさりつゞけたり。かやうならば更に歌の本意にあらず、いかでか天地をうごかし、鬼神をもやはらぐべきや。

撰集抄五。西住上人わづらひの事侍るをと聞えしかば、今は限りの對面もあらまほしくて云々。なくなく煙となし骨をば拾ひ取りて、高野にと心ざし侍りき。其のいとなみし侍りし折ふし、花山院中將必ずまるるべき由仰せられ侍りしかば、西住上人の事も申さまほしくて、參りてかくと申すに、涙にくれ給ひて、此の春東山の花見に作ひ給へりしことの、最後の對面にありけるぞやとて、なれなれて見しは名殘りの春ぞともなど白河の花の下かげ

と、うちずさみ給へるに、殊にあはれに覺え侍りきと云々。此の歌、新古今集雜上には、最勝寺の櫻は鞠のかゝりにて云々とて、雅經卿の歌なり。事も作者もたがへり。是れは飛鳥井家なり。

明月記二十六。建保元年正月十五日器上馬允盛時、子知親、自二關東一上洛、遂二熊野詣一、在京之由來示、喚出言談詠二和歌一男也。其歌依二予撰進一讀人不レ知入二新古今一。

明月記二十。承元元年三月十九日、新古今序、以二集中歌心一被レ載二其部一。心件歌皆以上古作者歌用レ之。其の中、夏は妻戀する神なび山の郭公とあり。件の歌、赤人の歌は入二後撰一之由、去秋宮内卿見出、依二作者袴二不二覺悟一也。此事告二下官一、下官奏レ關。其時議下定可レ改レ序歟。又雖レ載レ序可レ出二此歌一歟上。去年事不レ切。此歌予申レ於レ序、更不レ可レ被レ改二一字一、又被レ載レ序歌夏部許無レ之者、尤可レ遺二不審一。撰集之時撰者許引二直古歌一少々。又自詠稱二讀人不知一入レ之定例也。案二此事一、神なびのつまごひの郭公の歌を、新有二御詠一、被レ入二御製一第一之儀也。此事有二勅許一。

明月記二十九、寬喜元年八月二十九日甲子晦、清定伊勢來談身上訴詔之歎也。信實朝臣又來會、不レ諳二御屏風之歌一遺恨歟。依二長保例公卿一許レ可レ詠由有二沙汰一者非二此限一歟由答レ之和歌之不運、遇新古今不レ入、此事又如レ此。於二歌道一者、交衆無二益事一歟、者一旦雖レ可レ然先例之上何爲乎。

歴代和歌勅撰考　巻之四

常陸水戸　吉田令世撰

新勅撰和歌集二十巻

勅撰者定家

後堀河院御在位 勅撰次第

歌凡千三百五十三首 同上

或千三百七十一首此外短歌四首 拾芥抄

部立　春上下　夏　秋上下　冬　賀　羇旅　神祇　釋教　戀自一至五　雜五

春歌　巻頭歌

うへの男子共年の内に立春といへる心をつかふまつりけるついでに　御製

あらたまの年もかはらで立つ春は霞ばかりぞ空にしりける

春のはじめに定家にあひて侍りけるついでに僧正聖寶はをはじめるをはてにてながめをかけて春の歌よみて侍るよしをかたりはべりければ其の心よまむと申してよみはべりける　大僧正親厳

はつねの日つめる若葉かめづらしと野べの小松にならべてぞ見る

拾芥抄。新勅撰集二十巻千三百七十一首此外短歌四首

部立　春上下　夏　秋上下　冬　賀　羇旅　神祇　釋教　戀自レ一至レ五　雜自レ一至レ五

貞永元年寛喜二年被レ仰歟壬辰十二月二日、依二當代後堀河綸言一、前中納言定家卿奏レ之、有レ序、假名定家卿書レ之、云々。

同抄云。貞永元年六月十三日、依レ召參內。候二殿上外座一、藏人頭右中將源資雅朝臣、入二上戸一相逢參上奏候二之由一歸出。上古以後、和歌可二撰進一之由抑レ之稱唯退出。同年十月一日、先序奏二之目錄一。天福二年五月、依二內々仰一、奏二覽狼藉草本一、不レ被二返下一。同十一月日、殿下被二返下一、止二少々歌一進二上之一。行能朝臣給レ之清書進レ之。

勅撰次第一本曰。假名序權中納言藤原定家、撰者同人。直蒙二勅定一新古今之後、二十九年歟。貞永元年壬辰六月十三日、被レ仰レ之三箇年終レ功。天福二年五月奏二覽之一。○又一本曰、新勅撰貞應元年十二月二日被レ仰レ之、天福二年奏レ之。

かくのごとく勅撰を仰せられたる月日各たがひ、又二書とも天福二年奏レ之といへるは同じ。これ皆誤り傳へたる歟。

勅撰目錄云。新勅撰集、後堀河貞永元年十二、權中納言定家撰、序同。この十二は十月二日の事なり。

本集序曰、又寛喜貞永のいま、世をさまり、人やすくたのしき言の葉をしらしめむために、ことさらに

あつめえらばる丶ならし。定家はま松のとしつもり、河竹のよ丶につかうまつりてな丶そぢのよはひにすぎ、ふたしなの位をきはめて、下の事をききて上にいれ、上の事をうけてしもにのぶるつかさをたまはれるときにあひて、たらちねの跡を傳へ、ふるき歌の殘りを拾ふべきおほせごとを給はるによりて、云々。部をわかち、まきをさだめて、濱のまさごのかず〱に、浦の玉藻かきあつむるよし、貞永元年十月二日これを奏す。名づけて、新勅撰和歌集とす、といふ事しかり。

按ずるに、勅撰目錄とまた撰者の序にも、貞水元年十月二日に奏すとあるは、序と目錄ばかりを奏せられたる事、拾芥抄の如くにて、全部奏覽は、勅撰次第の如く、天福二年なり。

增鏡藤ごろもの巻に云。貞永元年になりぬ、定家中納言うけたまはりて撰集のさたありつるを、このほど御門おりさせ給ふべきよしきこゆればにや、いととく十月二日(拾芥一日)そうせられける。一とせのうちに奏せられたる、いとありがたくこそ新勅撰と聞ゆ。元久に新古今いできて、後程なく世の中もひゞきかへるに、又新の字打ちつゞきたる、心よからぬ事なぞさゝめく人もはべりけるとかや。さておなじ四日おりゐさせ給ふ云々。

明月記文暦元年八月七日癸酉云々。辰時許、勅撰愚草二十卷纔置二南庭一燒レ之已爲二灰燼一。奉レ勅未レ調二卷軸一、以前遭レ如レ此事一、更无二前蹤一无二冥助一无二機緣一之條、已以露顯。徒可レ蒙二誹謗罵辱一。置而无レ詮者也。

百錬抄文暦元年十一月九日、中納言入道(定家卿)於二前關白家一搜二覽新勅撰一。先院御時被二奏覽一兩殿下監頗有二川捨事一、被レ切二弃百首云々。又有二被レ入之人一云々。

按ずるに、これによれば、貞永元年に仰せごとありて、其の年の十月に功ををへられたるなり。勅撰次第には貞永元年六月十三日に仰せられ、三年めにて天福二年に奏すといふは、いよ〻あやまれる事を知るべし。又貞應元年に仰せ下されたりといふは、いよ〳〵ます〳〵誤りなり。貞應は後堀河天皇の元年にて、貞永まで十一年になるなり。

〔眞　本〕

異本勅撰次第に通勝公しるされて曰。新勅撰之事、京極黄門自筆之本之奥に、委細有レ被レ記事一。以二彼本一不レ違二一字一寫レ之。在紙紙　仲本幽齋玄旨被レ感得二所持之物一也。慶長四年三月七日以二事次一記レ之也。足子在判。

〔雜　談〕

耳底記云。新勅撰定家自筆本所持いたす也。やがて見せ申すべし。

老人雜話ニ云。上立賣の町人所持する定家卿筆の新勅撰、細川幽齋求められし時、直白銀拾錠也。その時第一の買主也。今は烏丸家にあり。

衆妙集ニ云。四月二十日定家卿の自筆新勅撰集もとめ得たる竟宴に、秋歌會興行しはべりけるに、披レ書知レ昔。

雲の上の月にまじりてえらび置きし言の葉見する筆の跡かな

新勅撰竟宴三首の中に社頭祝

あふひ草かけておもへばそのかみにこれも二葉の松のをの山

源平盛衰記三十二云。左馬頭行盛と申すは、太政入道の次男に左衛門のすけ安藝の判官基盛と云ひし人の子なり。父は保元のらんの後、宇治川にて水神にとられてうせにけり。みなし子にておはしけるが、京極中納言定家卿に付け奉り、歌をまなび給ひけり。みやこを落ち給ふとて、定家の名殘ををしみつゝ、巻物一つにせうそく具して贈られたり。巻物とは日々よみあつめ給ひたりける歌どもなり。定家卿ひらき見給ふに、こしかた行末の事どもこまやかにかかれて、はしがきに、

　ながれなば（ての）名をみ（たにも南都本）のこせ行く水のあはれはかなき身はきゆるとも（きえぬとも長門本）

定家これを見給ひて感涙をながし給ひつゝ、勅撰あらば必ず入れんと思はれけり。さつまの守忠度の歌を、父俊成の卿のよみ人しらずと千載集に入れられたる事を本意なき事に思はれけり。たゞのりは朝家の重臣として、雲客の座につらなれり。名をうづむこと口をしく思はれければ、いかにもゆきもりをば名をあらはさんとて、朝敵なれば世におそれて三代をこそ過ぎ去りけれ。後鳥羽上みかど佐渡のゐんの御宇を經て、後ほり河の院の御とき、新勅撰のありしに、今は苦しかるまじとて、さまの頭平の行盛と名をあらはし、此の歌を入れられたり。亡魂いかにうれしと思ふらむとあはれなり。忠度淀よりかへり俊成にえつする事と云條の末にあり。

新勅撰集。壽永二年大かたの世しづかならず侍りし頃、讀み置き侍りける歌を、定家がもとへ遣はすとて、包紙に書き付けて侍りし平行盛、

　ながれての名だにもとまれ行く水のあはれはかなき身はきえぬとも

井蛙抄云。戸部云、新勅撰時光明峯寺殿より鶴どの歌事を執り申さるゝ時、撰者御返事に、後京極殿鍾

愛の御子として三十七にならせ給ひ候。尤も其の仁と申すべく候へども、御風體猶存旨候由被ㇾ申二子細一て、但し、なきぬべき夕の空をほとゝぎすまたれむとてやつれなかるらむ、是等は宜の由被ㇾ申云々。又云。或人云、新勅撰えらばれける時、梅の歌に花やかなる歌なしとて、撰者周章せられけり。猶も壬生二品の歌の中にぞあるらんとて撰ばれけるに、いく鄕か月のひかりも匂ふらむ梅さく山の峯の春風といふ歌を見いだして被ㇾ入云々。

又云。新勅撰の時、所望の仁歌を出したる心に、あふ事かたりけり。撰者常にえりくづを給はりて見侍らばやと被ㇾ申ける。

耳底記ニ云。定家家隆のちは、あひだ柄よくもなく聞えたり。されども新勅撰に家隆の歌をあまた入られちたり。是れが定家のきとくなり。あひだのわろきは私事、歌のよきは公界なり。

〔異　名〕

異本井蛙抄ニ云、新敕撰をば宇治川集といひけり。武士の多く入れたる故也。（契沖難勅撰云。ものゝふの八十氏川といふ歌によれり。）

〔定家擇撰不ㇾ正〕

類聚名物考ニ云。承久三年に北條義時がはからひにて、新帝懐成親王を廢し奉り、後鳥羽院を隱岐國へ、順德院を佐渡へ、土御門院をば土佐の國へ移し奉りぬ。また土御門院をば阿波國へ移しまゐらせて、十一年のほどあらぬ所にくるしませ給ひ、寛喜三年にその國にて崩御なる。あくる年貞永元年には、後鳥羽院、順德院はなほその島におはしましける時に、定家卿この新勅撰集をえらばれしに、北條家にへつらひ時世を

おそれられしが、この三院の御製歌は一首も入れられず、その家の流くむ人はへつらひにや、この集に御製歌入れられざりしかはりに、百人一首に御歌を入れられしはそのかはりとかやいへども、かの卿のかかれし明月記文安の日記には、その故とも見えず、たゞ時にとりてかかれしさまなり。

契沖難勅撰ニ云。俊成卿女消息ニ云、新勅撰はかくれごとさぶらはず、中納言入道殿ならぬ人のして候はば、とりて見たくだにさぶらはざりしものにて候。さばかりめでたく候御所たちの一人もいらせおはしまさず。そのごとくなき院許り、御製とて候事もめくれたるこゝちこそし候ひしか。歌よくえらべど御つま點あはれたるはいださんとおぼしめしけるとて、入道殿のえり出させたまふ歌七十首とかや聞え候ひし、かたはらいたくぞ打ちきこえ候ひき云々。

奥書ニ云。此の文は續後撰の時、越部禪尼俊成卿女消息先年書き置くの處、爲家被ニ借失ー之間誂ニ或仁ー令ニ書寫ー訖。觀應二年九月九日頓阿。右の消息の中に御所達とあるは、後鳥羽院、土御門院、順徳院此の三院の御製を入れられざるをいへり。然れども若し天氣御許容なかりけるか、關東の計らひか、此の事定家卿本意ならざりけるにや、百人一首の終りに後鳥羽院、順徳院ふたりの帝のありがたき述懐の御歌を載せられたり。爲家卿續後撰集に二首ながら入れられたるは、父の卿の心ざしを補はれけるか、もしはいひ殘されけるか。

耳底記ニ云。新古今花過ぎたりとて、新勅撰を定家卿のくすみてあまれたり。

令世云。羣書一覽に、此の說を光廣卿とて出せるは誤りなり。幽齋の說を光廣卿の記されたるなり。

また今川了俊云ふとて、新勅撰集は定家卿一人うけたまはりてえらばれて、花實をかねたる集と云々といふ事あり。此の了俊の説いづれの書に出でたるか今ふと思ひ得ず。

續後撰和歌集二十巻

後嵯峨院御代　後深草院御在位勅撰次第　撰者爲家

歌凡千三百六十八首　同上拾芥抄

部立　春上中下　夏　秋上中下　冬　神祇　釋教　戀自レ一至レ五　雜上中下　羇旅　賀

春歌上　巻頭歌

年のうちに春たつ心をよみ侍りける　皇太后宮大夫俊成

年のうちに春たちぬとや吉野山かすみかゝれる峯の白雪

巻軸歌

おなじ御屛風に藤坂山　正三位成實

むらさきの藤さか山に咲く藤の千代のかざしは君がためかも

拾芥抄。續後撰集二十巻　千八首千三百六

部立　春上中下　夏　秋上中下　冬　神祇　釋教　戀自レ一至レ五　雜上中下　羇旅

寶治二年七月日奉レ勅歟。建長三年十月二十七日依二後嵯峨院院宣一民部卿爲家卿奏レ之。

勅撰次第云。續後撰撰者前大納言藤原爲家、新勅撰後十五年寶治二年戊申七月二十五日直ニ蒙ル勅定ヲ奉行
爲經卿 建長三年十二月二十五日奏レ之、四ヶ年終ニ其功ヲ。寶治二年被レ召ニ御百首ヲ。
尊卑分脈。爲家孫兼寶律師下、後嵯峨院幸ニ入道太相國眞木島別業ニ之時、直奉ニ綸言ヲ、撰ニ進續後撰和歌集ヲ、建長三年十二月二十七日奏ニ覽之ヲとあるは、爲家傳にかきたる詞の錯られたるものなり。
勅撰次第に、通勝公しるされて云。續後撰目錄序云、追奉云々。なしつほの跡を尋ぬるに、はじめて宣旨を給はれる事、天暦五年辛亥なり。あしはらの今のことの葉を集めて奏せんとするに、建長三年辛亥なり。かれは意律もはじめていたる月、これも應鐘すぎなんとする時なり。今を見ていにしへを思ふに、世のため君のためこれをなずらふにまことに相似たり。跡をたづねためしを尋ねてこれを比ぶるに、又同じかるべし。○又云。俊成卿女稱ニ美此集ヲ之詞云、天暦五年とかやの後にて、序の候はぬしもよく候云々。
私云。通勝 此兩段以ニ稱名禪府自筆ヲ寫レ之了。
五代帝王物語。當御代あるべき事殘りなく行はれにき。和歌の勅撰は、續後撰は民部卿承りて撰びたりしに、新古今の例に任せて五人の撰者とて定められたりし程に、衣笠の前内大臣家良公薨ぜられしかば四人にて撰ばれたりしに、竟宴など行はれし時、和歌披講の後御遊に中將忠資めされて、所作人は皆公卿なれば、徳大寺大相國公孝其の時中將にて拍子とられたりしと。唯二人殿上人にて末にめし加へられて篳篥仕うまつりたりしは、優にこそ見えしに、幾程なくて出家したれば、人もいたく心えぬ事にてありしに、ある人申し侍るは、和歌には諸人の懐紙をかさぬれども、忠資は御遊ばかりに徴されたる事いかにてもあり

なん。人の能をもつは面目あらむ身にてこそあれ。是れは恥をかきて詮なしとて、道心を發したりけるとかや。この事若し誠ならばやさしきとも申すべく侍るらむ。

井蛙抄ニ云。故宗匠云、民部卿入道は、信實卿をば無雙の歌よみに思はれたりき。續後撰卷頭にいれむとて、立春歌十首許り書きて給はらむと云ひつかはされたれば、これは何の御要にか候はんとて、書きても出さず、卑下の心も幽玄なりき。

〔家の三代集〕

歌體耳底記ニ云。三代集ちと歌くすみ過ぎたりとて、千載をあまれたり。さて新古今花すぎたりとて、新勅撰を定家のくすみてあまれたり。千載、新勅撰、續後撰これを家の三代集といふ習ひなり。又菅氏三代集は菅原氏の詩文の集なり。

〔十代集〕

續古今集ニ序曰。萬葉集のうち十代集の外をひろくしるし。

これは古今より、此の續後撰までを十代集といへり。人のしらぬ事なれば擧げおくなり。

〔難　破〕

非蛙抄云。辨入道の書きたる續後撰の難といふものを先年見侍りしに、成茂あづまへ下りて、すてはてずちりに交はる影そはば神も旅ねの牀や露けきと云ふ歌の詞に、涙のこぼれければと書かれたるを、よくぞ其の時涙のこぼれける。一の幡さしの寂西俗名信實が蚊虻にて詞書などにかやうの事あるぞとかけり。誠に他に

異なる門弟なり、隆信と定家と一腹の兄弟也。皇后宮少進爲經男隆信母若狹守親忠女後嫁俊成生二定家一歟それよりことにあさからぬ爲二門弟一歟。

［十代集歌體論］

夜の鶴阿佛尼云、只歌の本體には古今の歌を見おぼえて本歌にもすべし。三代集いづれも同じことなれど後撰にはやさしき歌も多く、又みだりがはしき歌おほくまじりたり。なしつぼの五人心々やかはりけむ。拾遺の歌は、又拾遺抄によき歌は皆えり出でられためり。後拾遺また歌よみも多く集ひたる比なれば、おもしき歌もおほげに候を、難後拾遺といふものにぞ、みきはもえいづるなどいふ歌をはじめてさまぐそしりたる事も候やらむ。金葉詞花などは歌すがたもかはりて一ふし面白き處ある歌のみ、多く誹諧めきたる事がちに候やらむ。かれより後の集どもも、撰者の心得々々にてさまぐ捨てがたく見え候めり。新古今むかしの歌のやさしきすがたに立ちかへりて、をらばおちぬべき萩の露、ひろはば消えなんとする玉ざさの霰など申すべきを、餘りにたはぶれ過して歌の樣又あしざまになりぬべしとて、新勅は撰者思ふところありて、まことある歌をえらばれけりなどうけたまはりし。その後續後撰たちかへり、道をしろしめす御代にあひて、常磐井のおほきおとゞをはじめ奉り、衣笠の內大臣信實ともいへなど、道にたえたる人家の風吹きたえぬ人々おほく、君も臣も身をあはせ時を得たりける撰者なれば、さすが見どころ候らむ。それにも時による作者おほくなど打ちかたぶく人もあるを、まして其の後の事はいかゞ候らむ。心も及ぶまじければおしこめぬ。

羣書一覽云。今川了俊云、續後撰集は爲家卿の撰なり、これまた新勅撰の餘風殘ると云々。其の以後の集はみな撰者達の私曲まじりて、ひたすら一體におもむきけるとかや。○光雄口授云。續後撰は初中後衣冠正しき人を見るやうなり、常に手をはなつべからず。

正徹物語。人とはば見ずとやいはむ玉つしまかすむ入江の春の明ぼのの歌を、爲家勅撰にいれんとて、みつとやいはんといひて入るべきかと申されしかば、爲氏は父子の事なればともかくもと存ぜられしかども、是れも一興の體や、見ずとやといひてもくるしからずて、續後撰に入れられけるとやらん。是れにて勅撰の歌の風體を存知すべきや。

續古今和歌集二十卷　　撰者爲家等

後嵯峨院御代　龜山院御在位勅撰次第

歌凡千九百十八首　同上

或千九百七十二首　拾芥抄

部立　春上下　夏　秋上下　冬　神祇　釋敎　離別　羇旅　戀自一至五　哀傷　雜上中下　賀

春歌上　巻頭歌

立春のこゝろをよみ侍りける　　前中納言定家

名に高き天のかぐ山けふしこそ雲居にかすめ春やきぬらむ

卷軸歌

千五百番歌合に　　　　從二位家隆

久かたのあまのかご山そらはれていづる月日もわが君のため

勅撰目錄云。續古今正元元年三月被レ仰下一、文永二十二二十六前内大臣基家公、前大納言爲家、侍從行家、光俊朝臣等撰、開闔雅氏朝臣、序内大臣、漢序長成卿、衣笠内大臣雖レ加二撰者一奏覽以前薨。

拾芥抄續古今集二十卷 千九百七十二首

部立　春上下　夏　秋上下　冬　神祇　釋教　離別　羇旅　戀自レ一至レ五　哀傷　雜上下　賀

文永二年乙丑十二月二十六日、依二後嵯峨院院宣一、前内大臣基入道民部卿藤原朝臣爲家、侍從藤原行家、入道右大辨藤原光俊朝臣奏二覽之一、有レ序眞名假名　萬葉集内千代集外撰レ之。或云。正嘉三年二月於二西園寺亭一、庚申御會之次爲家卿奉レ勅雖レ擧二申爲氏卿一、勅定云、融覺候之上者桑門撰者祖父俊成卿撰二千載集一之例不レ可レ求レ外、重（令イ）可二奉行一之由、弘長二年被レ加二撰者五人一。此内前内大臣家良公奏覽以前早世。

融覺は爲家卿の法名なり。この所の分注に前内大臣家良公とあるは衣笠前内大臣の事にて、此撰者前内大臣基家公と内府二人ありしを、衣笠内府は撰歌中に薨ぜられたるよしなり。尊卑分脈に、衣笠内大臣家良公は文永元年九月十日薨七十三と見えたり。

勅撰次第云。撰者序者同二目錄一　續古今和歌開闔、源雅氏朝臣中書勤仕　文永三三十二竟宴被レ行件歌勅撰入二賀部一續後撰後八年歟。正元元年己未三月十六日先爲家卿直蒙二勅定一、弘長二年九月追加二撰者一之時、面々被レ下二院宣一文永二年十二

月二十六日奏レ之、弘長元年被レ召ニ御百首ニ四ヶ年終レ功、首尾十ヶ年也。奉行人按察使顯朝卿。

尊卑分脈。定家二男爲家弟光家侍従正嘉三年三月十六日直奉ニ敕言ニ撰集進ニ續古今和歌集ニ。但弘長二年月日被レ加ニ撰者ニ、所謂内大臣基前内大臣家侍従藤原行家、入道右大辨光俊等也。文永二年十二月二十六日奏ニ覽之ニとあり。さて勅撰目錄拾芥抄などによれば、續古今の撰者に加へ入れられたるは侍従行家にして、光家とはなし。されば是れも爲家の下へ書くべき詞の錯られて、光家の名の下に入りたるものなり。

本集假名序云、古今の跡をあらためず四人のともがらをさだめらる。いはゆる前内大臣藤原朝臣、民部卿藤原朝臣、爲家侍従、藤原朝臣行家、右大辨藤原朝臣光俊等也。ことに仰せて萬葉集の内、十代集の外をひろくしるしあまねく求めて、おの／＼たてまつらしむる云々。をしくとりえらべる歌ふたちゝはたまき、名づけて續古今和歌集といへり云々。次に此の集を續古今といへる事は、延喜に古今集をえらばれて後、他の勅撰おほくへだたれども、かさねて元久に新古今と名づけらる。その上古今の字を猶もちゐるは則ち此の三だいの集をもちて長き代にもつたへ、時の人にもしらしめんがためなり。かつははからざるにかの二代のあとかはらず。今も又乙丑の年にめぐりあひて、時いたりことわりかなへるなるべし。

按ずるに、古今集の延喜五年乙丑、新古今の元久二年乙丑にて、又この續古今の文永二年も乙丑なるをいふなり。

又云。時に文永二年十二月二十六日なん此の集をしるしをはりぬ云々。此の集をえらばれたる故よし、此の序にてよくしられたり。

增鏡北野の雪の卷云。まことやこの年ごろ前内大臣基家爲家の大納言入道侍從二位行家、光俊の辨の入道などうけたまはりて、撰歌のさたありつる。たゞけふあすひろまるべしとおもしろうめでたく、かの元久のためしとて一院身づから見かかせ給へば、心ことに光そひたる玉どもにぞ侍るべき年月にそへては、いよいよ外ざまにわたるかたなく榮えのみまさらせ給ふ。御ありさまのいみじきに、この集の序にもやまとしまねはこれ我が世なり。春風に德をあふがんとねがひ、和歌の浦もまたわが國なり。秋の月にみちをあきらめむとかやかかせ給へる、げにぞめでたきや。金葉集ならでは御子の御名のあらはれぬも侍らねど、此のたびはかのあづまの中務の宮の御名のりぞかかれ給はざりける、いとやんごとなし。新古今の時ありしかばにや、竟宴といふ事おこなはせ給ふ、おもしろかりき。續古今と申すなり。

按ずるに本集序に、新古今の時はじめをかれたる跡をとりおこなひつゝ、きのふは心の水のきよきをきくにまかせといへるつゞきは、卽ち增鏡の一院みづから見かかせ給へばといへることなるべし。あづまの中務の宮とは、後嵯峨皇子鎌倉將軍宗尊親王の御事なり。金葉集に輔仁親王の御名をかかざりしと、此の親王と名をかかぬとなり。竟宴も新古今の例なり。眞名序も亦その例なるべし。

〔事　情〕爲世

井蛙抄云。故宗匠爲世被ニ語申一云、續古今は、正元元年西園寺の一切經供養の時、民部卿入道一人可ニ撰進一之由直被ニ仰下一侍りしを、其の後被レ加ニ撰者一、結句眞觀光俊下ニ向關東一、將軍家中務卿宗尊親王此の道御師範となりて、毎年關東より被レ申とて我が思ふさまに申し行へり。民部卿入道我が撰の歌の外は一事以上不レ有ニ申子細一

とて口を閉ぢ侍りき。和歌評定時治定の事も後又申し改め、斯様にこそ評定には治定侍りしに、いか様の事なるやの由被レ申ければ、いざふにと候ひけるやらむ。鶴内府其家被レ参被ニ申行一侍りしと眞觀返答しけり。仙人のわたましの樣に鶴に物を負はするはと、民部卿入道利口し申されけると云々。集治定之後所存相違の事共一卷に書きて、常磐井入道相國の許に遣はす。爲兼延慶訴陳時勅撰撰者故實二百ヶ條祕事を、祖父入道より相傳の由いひたるは此の事なり。爲教卿爲兼父常磐井相國に隨逐の間見及びし歟、詞書に百首にと侍るを、百首歌にとあるべきなど、體のちゝとしたる事どもなり。大旨何か祕事にてとあるべきと云々。

尾崎雅嘉云。此の集はじめは爲家入道一人に詔ありしが、後に撰者をくはへられたり、よつて爲家述懐の歌ありて玉葉集にのれり。

井蛙抄又云。一條法印云常磐井入道相國薨じ給ひて後、入道民部卿人の許へ遣はせし狀に、此の道の眼年久之悲難レ休就レ中寛元六帖俗に近く、續古今新歌者無ニ秀逸一と被レ申事殊難レ忘事也云々。

又云。故宗匠爲世被ニ語仰一云、續古今に被レ加ニ撰者一て後は、入道戸部ものうく思はれて、撰歌のこと冷泉亞相于時侍從中納言讓ニ與其狀一云、勅撰事一向可レ被ニ沙汰一不レ可レ誇ニ堪能一事也云々。其時向後勅撰可レ被レ入者兼氏朝臣子孫光行餘流祝部者共云々、殊讓ニ與門弟一也。

又云。民部卿入道出行之時、辨入道井前を被レ通雀文車立てたり、以ニ下部一誰人御車哉被レ尋之處、日向守殿御車云々兼氏朝臣也以外腹立被レ歸後直入ニ和歌所一、兼氏朝臣歌三首被ニ書入一たるを悉切出云々。

按ずるに此二ヶ條流布の井蛙抄になし。勅撰次第に出しをりこれらの說によれば、續古今の撰は爲家

卿の心に叶はざりし事知られたり。されども兼氏の歌を出されたるはあまりしき事といふべし。

五代帝王物語云。眞に當代あるべき事の限り行はれにき。和歌の勅撰も續後撰は民部卿爲家卿うけたまはりて撰びたりしに、續古今は新古今の例に任せ、五人の撰者とて定められたりし程に、衣笠の前内大臣家良公薨ぜられしかば、四人（前内府基家爲家行家光俊卿等也）にて撰ばれたりしに、竟宴などおこなはれし時、和歌披講の後、御遊に中將忠資めされて、所作人はみな公卿なれば、德大寺大相國公孝其の時中將にて拍子とられたりしと。唯二人殿上人にてするにめし加へられて、篳篥つかうまつりたりしは、優にこそ見えしに、いく程なくて出家したれば、人もいたく心得ぬ事にてありしに、ある人申し侍りしは、和歌には諸人の懐紙をかさぬれども、忠資は御遊ばかりに召されたる事いかにてもありなん、人の能をもつは面目あらむ身にてこそあれ、これは恥をかきて詮なしとて、道心を發したりけるとかや。此の事もしまことならば、やさしきとも申すべくはべらむ。

按ずるに、むかし人の和歌を大事とかまへたるかくのごとし。

詞林採葉抄云。（萬葉集に仙覺新點をかへて後嵯峨院へ奉る事をいふ所上略）此狀依レ達ニ天聽一有ニ叡感一、萬葉得果之由賜ニ後嵯峨院宣一被レ召ニ入續古今集一訖。

玉葉集十八雜五。續古今集えらばれ侍りける時、撰者あまた加へられ侍りて後、述懐の歌の中によみ侍りける。前大納言爲家、

玉つ島あはれと見ずや我が方は吹きたえぬべき和歌の浦がせ

續拾遺和歌集二十卷

龜山院御代　後宇多院御在位勅撰次第同上

歌凡千四百四十一首

或千六百首　拾芥抄

部立　春上下　夏　秋上下　冬　雜春　雜秋　羇旅　賀　戀自レ一至レ五　雜上中下　釋教　神祇

春歌上　巻頭歌

春たつこゝろをよみ侍りける　前大納言爲家

あらたまの年は一夜のへだてにてけふより春とたつかすみかな

卷軸歌

熊野にまゐらせ給ひける時いはた川にてよませ給ひける　花山院御製

いはた川わたる心のふかければ神もあはれとおもはざらめや

拾芥抄。續拾遺集二十卷千六百首

部立　春上下　夏　秋上下　冬　雜春　雜秋　羇旅　賀　戀自レ一至レ五　雜上中下　釋教　神祇

文永十一年月日、依ニ龜山院々宣一、前權大納言爲氏卿撰レ之、弘安二年十二月二十七日奏ニ覽之一。

尊卑分脈。御子左權大納言正二位爲氏、

建治二年七月二十二日、龜山院宣撰₌進續拾遺集₋弘安元年十二月二十七日奏覽。

按ずるに、次第目錄增鏡等にも、皆建治二年に仰せられたる由なるを、拾芥に文永十一年とある、いとあやし、誤りなるべし。文永十一年建治元二と三とせのたがひなり。

勅撰次第云。續拾遺集撰者前大納言藤原爲氏、和歌所開闔源兼氏朝臣中書勤仕續古今後十一年歟。建治二年丙子七月二十六日被レ仰レ之奉行經任卿三ヶ年終レ功、弘安元年十二月二十七日奏レ之、同年被レ召₌御百首₋近古正曆以來作者入レ之。

勅撰次第異本云。開闔兼氏朝臣奏覽以前卒去、後者慶融法師。勅撰目錄慶融法師作法眼

按ずるに開闔に僧を用ゐらるゝ、此の時を始めとして、後々みな法印法師どもなり。

增鏡老のなみ巻云。此の御代にも又勅撰のさたをとゝしばかりより侍りし、爲氏大納言えらばれつる。この建治四年しはすにぞ奏せられける。續拾遺集と聞ゆ。たましひあるさまには、いたく侍らざンめれば艷には見ゆると時の人々申し侍りけり。續古今の引きうつし朧げの事は立ち竝びがたくぞ侍るべき。雅嘉云此撰者爲氏卿は爲家卿の嫡子也爲氏の母は宇津宮彌三郎賴綱の女也賴綱法名蓮生歌人なりその歌撰集の入りたり。

〔雜　談〕

井蛙抄云、兼氏朝臣は稽古もよみ、口もあひかねたるよし戸部被レ申き。勅撰方の事は、官外記にもおとり侍るまじき由人の許へ狀にかきて侍りけり。續拾遺の時、和歌所の寄人にて侍りけるが、勅撰事をはらざるさきに卒して侍りき。彼の朝臣寄橋戀に、をはたゞのいたゞの橋とこぼるゝはわたらぬ中のなみだな

りけりと云ふ歌を、可レ被レ入と沙汰ありけるを、慶融法眼義を被レ申ける。其の夜の夢に冷泉亭の中門の角の緣の程にて、彼の朝臣に慶融行きあひて侍るに、腰に抱きつきて、歌よみは沒後をこそ執する事にて侍るに、此の歌に義仰せらるゝ事恨めしくといひけりと見えけり。さめて後より法眼腰のいたはり出できて、つひに平愈の期なし。おそろしく詮なき執心なり。子息の長舜法印も道を執したる事はおとらず、和歌所に小蛇が小鼠かになりて候ひぬと覺え候、さやうの物の見え候はむ時、かまへて手かけさせ給ふなと申しける。續後拾遺のころ法印去りて後、和歌所の文書の中に小くちなはの見えけるを、すはや故法印の御房など人のいひければ、實性法印殊におちてむつかしかりけり。

〔異　名〕

井蛙抄云。續拾遺をば鵜舟集といふ篝の（四十八ケ所の篝などとて警固の武士なり）おほく入りたる故なり。

〔論　評〕

水蛙眼目云。又大夫入道殿（俊成）以來、自撰の我が歌家督の始めて入歌などは、至極の本意の歌にてこそ侍らめ。それにつきて千載集は未だ中古風相殘りて尙とゝのほらぬ所も侍らん、新古今は自餘の撰者又御所の御計らひにて、京極殿（定家）の心ならぬ事に侍らん。新勅撰の撰者の歌十一首、家督の（爲家）撰六首、續後撰の撰者の（爲家）十一首、家督の（爲氏）歌六首、續拾遺の撰者の（爲氏）歌十一首、家督の（爲世）歌六首、これは尤も風體の本と見ならふべきにや云々。

〔歷代撰者畫像〕

東常緣聞書云。或人の御かたより、代々の勅撰續拾遺までの撰者の影繪にかきて、同面々の歌あり。これを見侍るとて氏泰申し候は、萬葉よりこのかたの撰者の歌おもひ〳〵にかはりて、わが身のにせはこれとて、氏泰、

いかにせむさらでうき世はなぐさまずたのみし月も涙おちける

この歌を申すや、常緣はさらに思ひ定むる歌もなかりしを、頻りに心のゆく所申すべき由申し候に、

年を經てなれたる人も別れにし頃はことしのけふにもあるかな

これなと申候也、則ち氏泰心えず見侍りし、如何。

按ずるに、いかにせむの歌も年をへての歌もさる事ながら、いづれもさのみめでたしとはおぼえず、そはともあれ代々の撰者畫像いかにをかしき物なりけんとこそ、ゆかしくおぼゆれ。

新後撰和歌集二十卷

撰者　爲世

御宇多院御代　後二條院御在位勅撰次第

歌凡千六百二首

或千九百七十首　拾芥抄上

部立　春上下　夏　秋上下　冬　離別　羇旅　釋敎　神祇　戀自一至六　雜上中下　賀

春歌上　卷頭歌

ふるとしに春たちける日よみ侍りける　　前大納言爲氏

さほひめのかすみの衣ふゆかけて雪げの空に春は來にけり

卷軸歌

正安三年悠紀方風俗神樂歌三上山　　前中納言兼仲

さかきとる三上の山にゆふかけていのる日つきの道やさかえむ

拾芥抄。新後撰集二十卷千九百七十首

部立　春上下　夏　秋上下　冬　離別　羇旅　釋教　神祇　戀自レ一至レ六　雜上中下　賀

正安三年辛丑十一月二十三日、依二後宇多院院宣一、前大納言爲世卿撰レ之、嘉元二年十二月十九日奏レ之。

勅撰次第云、新後撰撰者前大納言藤原爲世、和歌所開闔法印長舜中書勤仕 連署爲藤、定爲、長舜、國冬、國道。

續拾遺後二十三年歟、正安三年辛丑十一月二十三日被レ仰レ之奉行俊定卿于時前中納言 同二十六日事始二ケ年終レ功、嘉元元年十二月十九日奏レ之、同年被レ召二御百首一、近古限二年紀一事自二天仁元年一至二正安三年一。

增鏡さしくしの卷云。正安二年正月二十一日、後二條春宮くらゐにつかせ給ひぬ云々。此の御代にも又爲世の大納言うけたまはりて撰集あり、新後撰集ときこゆ。嘉元元年披露せらる云々。

〔雜談　異名〕

井蛙抄云。國助神主をば神護寺刊本或は神羅寺と作るは誤なりのそばに社をつくりて神とあがむ、今主神と號す。近來此

の道の堪能なり。敷島の道まもりける神をしも、わが神垣と思ふうれしさとよめる、げにさぞおもひけんとおぼゆ。公宴をゆるされ新後撰の時、新古今の秀能が例とて、十七首入れられ稽古も名譽も無雙なりき云々。

又云。新後撰をば謗家は津守集といひけり。住吉神官の多く入りたるゆゑか、今世勅撰そしるものはあれども、名つゞるほどの力ある人もなきにや。

〔十三代集〕

拾芥抄云。玉葉集上古以來十三代外撰レ之。これによれば古今より新後撰までを十三代集ともいふべきなり。又新勅撰集より已下新續古今集をも十三代集といふなり。（倭漢名數に見えたり。）

玉葉和歌集二十卷

伏見院御代（園院御在位勅撰次第目錄に後伏見院とあるは誤りなり）　撰者爲兼

歌凡二千七百十五首

或二千八百三首（拾芥抄）

部立　春上下　夏　秋上下　冬　賀　旅　戀自レ一至レ五　雜自レ一至レ五　釋教　神祇

春歌上　卷頭歌

春たつ日よめる　紀貫之

けふにあけてきのふに似ぬは皆人の心にはるの立ちにけらしも

卷軸歌

題しらず　　前大僧正慈鎭

立ちかへる世と思はばや神風やみもすそ川のするのしら浪

拾芥抄玉葉集二十卷二千八百三首

部立　春上下　夏　秋上下　冬　賀　旅　戀自レ一至レ五　釋敎　神祇

正和二年癸丑八月日、依二伏見院勅一、前大納言爲兼卿奏レ之、上古以來十三代外撰レ之。

もの思ひこしぢの末の白浪も立ちかへる日のありとこそきけ

玉葉に此の歌を入れられしこと東遊記にあり。

勅撰目錄云。玉葉集後伏見院應長元十三、正和元三二十九、前大納言爲兼撰古歌等大畧上皇所下令二撰書一給上。

勅撰次第云。玉葉集伏見院御代花苑院御存位　撰者前大納言爲兼、新後撰後八年歟。應長元年七月二日被レ仰レ之四ヶ年終レ功、正和元年三月十九日奏レ之、〇一本曰、應長元年十月三日被レ仰レ之、正和元年三月二十九日奏レ之。

按するに、後伏見院と目錄にあるは誤りなり、次第に伏見院一本にもしかあり。應長元年十月三日は目錄次第ともに同じ。次第一本に七月二日とあるは誤り寫しなるべし。又目錄には正和元年三月二十

九とあるを、次第には三年三月十九、一本には元年三月二十九日とあり、これは目錄と次第一本によりて元年三月二十九日と定むべきか。增鏡には（次に出づ）元年三月二十八日とあり、いづれか是ことをしらず。三年とあるは三の字と元の字と形の似たるによりて誤れるか、また四ヶ年終功といふも誤りなるべし。應長は唯一ヶ年にて、明る年は正和元年なれば、僅かに前後二年になるなり。

伏見院御記。正應六年八月二十七日晴、今日可レ被レ仰二撰集一之間、事爲二仰含一、前藤大納言（爲世）權中納言（爲兼）二條宰相（雅有）九條二位等所レ召也、雅有卿依二所勞一不レ參、自餘三人所レ參也。以二右大將一條々問答一々被レ仰、月事八九十月可レ爲レ何哉。藤大納言申云。前々必不レ依二先規一宜レ在二時儀一歟、然而十月後撰佳例在レ近、同者可レ被レ追二彼例一歟。權中納言申云。古今延嘉五年四月、後撰天曆五年十月、後拾遺承保二年九月歟。詞花天養元年六月、千載壽永二年二月、新古今建仁元年十二月、續後撰寶治二年七月、續古今正元元年三月、（九月追被加撰者）此等皆以不レ被レ守二先規一、今月被レ仰之事無（非ヲ脱スルカ本マヽ）二其例一、自然可レ似二先規一歟。依二先例一之由、曾以無二所見一云々。隆博卿申旨同レ前、一以二御教書一被レ仰歟、被二召仰一歟、各申云。撰者一人之時、有二被レ召之事一歟、後撰之時被レ下二宣旨一、謙德公爲二藏人少將一奉二行之一。新古今續古今等同レ前、今度以二綸旨一可レ被レ仰歟云々。一時代自二何比歌一可レ被二撰載一哉。藤大納言申云。續古今沙汰之時、民部卿入道有二申旨一、依レ之故大納言入道、續拾遺之時撰二中古以來之歌一了、於二所存一者同レ前、上古歌代々集被二撰殘一、爲二下品物一歟云々。爲兼卿申云。近日專被レ慕二古風一、尤可レ被レ撰二上古以來一歟。隆博卿申旨同レ之、一被レ召二百首歌之事一、近來定事也。此事撰集被レ仰之以前歟、以後歟。各申云。前後依レ時不レ同也云々。以二右大將一重仰云。度々佳例各別月也。

今月可レ宜、又上古歌被レ棄之條尤無レ念、今度可二撰載一。今日卽爲二吉日之間一、以二俊光一仰レ之。綸旨案右大將持參䝉二綸言一、得萬葉集之外不レ入二代々集一之上古以來和歌、宜下令二撰進一給上者可レ爲二此之由一、仰了。卽仰二撰者四人（爲世卿爲兼卿 雅有卿隆博卿）隆博喜悅之餘落淚云々。道之執心尤可レ感歟。

增鏡うら千鳥卷云。院（伏見）のうへさばかり和歌の道に御名高くいみじくおはしませば（此れより前に新院とあるは後伏見院御事にて此院は伏見院なり）いかばかりかとおぼされしかども、正應に撰者どもの事ゆゑわづらひどももありて、撰者もなかりしかばいとゞ口をしうおぼされて、

我が世にはあつめぬ和歌の浦千鳥むなしき名をや跡にのこさむ

などよませおはしましたりしを、いまだにいそぎたたせ給ひて、爲兼の大納言うけたまはりて、萬葉よりこのかたの歌どもあつめられき。正和元年三月二十日奏せらる。玉葉集とぞいふなる。此の爲兼の大納言は、爲氏の大納言のおとゞに、爲教右兵衞督といひしが子なり。かぎりなき院の御おぼえの人にてかく撰者にもさだまりにけり。そねむ人々おほかりしかどさはらむやは。この院のうへこのみよませ給ふ歌のすがたは、前藤大納言爲世の心地にはかはりてなんありける。

按ずるに此の時俊成卿の末三ッに分れて、冷泉二條と爲兼流といひて、歌のさまもことなり。（落書露顯に日本歌の家の事俊成卿より定家卿のたゞ一流に成りて後爲家又三ッに別れしにや爲世爲兼爲相等なり）正徹物語に云。此の道にて定家をなみせん輩は冥加も有るべからず、罰をかうぶるべきなり。其の末流二條冷泉兩流と別れ、爲兼一流とて三つのながれ有りて、魔醯首羅の三月（目歟）のごとくなり。たがひに抑揚褒貶あれば、いづれをさみしいづれをもてなすべき事に

もあらざるか云々とて、次に其のさまを論へり。然るに二條と冷泉はさのみかはりめも見えねど、爲兼卿の風はいたくかはりて、其の調ゆたかに打上りたらずめづらしからんと、かまへられたるからさかしだちて、にくいけしたるものの、しかも賤しき姿なれば其の頃もとかく譏ることにて、此の玉葉と又風雅とは歌のさまあしかりければ、增鏡にもこの院のうへ好みよませ給ふ。歌のすがたは前藤大納言爲世の心地にはかはりてなんありけるとはいへるものなり。本居宣長なども玉葉風雅の風あしといへる事何くれと見えたり。令世江戸にありし日、ふるき書どもひさく所にて、冷泉家口傳といふ書を見たりき。きはめていふに足らぬ愚書(シレブミ)なりしが、其の中に喜撰は氏もなき世捨人なり、歌はみな川へ流しければ世にとゞまらず、わがいほは都のたつみの歌ばかり都へ人の返歌に遣はしたればたまたま殘れり。然るを爲兼卿の玉葉に、

木の間より見ゆるは谷の螢かもこぎつる舟の沖へゆくかも

と云ふを、喜撰とて入れられたるを、古今の傳授なき故なりとて、御子左の家には是れを笑ふといへりといふことあり。令世云。古今傳授などはもとより取るに足らぬ事ながら、爲兼卿とにもかくにもかく譏りわらはるゝ事はまぬかれがたし。

茂睡法師が梨の本集云。僻案集に書きし事はおほかた僻言なり。邪推ながら是れは爲世卿の門弟ども爲兼卿の歌日出にて、此の風體に都帝王攝錄の臣かたむきて、玉葉風雅の兩撰集ありし故に嫉む心に、ひかれて、定家卿の名をかり僻案抄をも書き出したるにや。六條内大臣有房公は、千種頭中將忠明の

祖父なれば、大覺寺殿方の人たるべし、然れば爲世卿の門弟たるべし。隱遁の後野守鏡と云ふ書を作り、爲兼卿の歌をそしるその歌は

なけとなる有明方の月影にほとゝぎすなる夜半のけしきを

荻の葉をよく〳〵見れ今ぞしるたゞおほきなる薄なりけり

此の兩首をあげて爲兼の歌をそしれり云々。淸巖茶話云。爲兼は一期の間、つひにたゞ足をもふまぬ歌を好まれしとあり。是れにても其のさまおもひ見るべし。

追て考ふるに、東常緣聞書云。木の間よりみるはさはへの螢かもいさりに蜑の海へゆくかも。此の歌玉葉集基泉法師と入り、此の喜撰法師と同人かと候如何と尋ね申せば、さやうに候か不覺候由申されしなり。

〔難玉葉集〕

類聚名物考に只その書名をあげたり。

羣書一覽云。三光院云、集のうちに風體わろきは風雅集、歌のわろきは玉葉集云々。

續千載和歌集二十卷

撰者爲世

後宇多院御代　後醍醐院御在位次第

歌凡二千九十七首　同上

部立　春上下　夏　秋上下　冬　雜體長歌旋頭歌折句物名俳諧　羇旅　神祇　釋教　戀自一至五　雜上中下　哀傷　賀

春歌上　卷頭歌

春たつこゝろをよみ侍りける　　前中納言定家

出づる日のおなじひかりにわたつみの浪にもけふや春はたつらむ

卷軸歌

堀河院御時寛治元年大嘗會悠紀方風俗の歌千松原　　前中納言匡房

ときはなる千々の松原いろふかみ木高きかげのたのもしきかな

拾芥

續千載集二十卷　二千百二十首

部立　春上下　夏　秋上下　冬　雜體　羇旅　神祇　釋教　戀自一至五　雜上中下　哀傷　賀

文保三年己未四月十九日、依後宇多院院宣、前大納言爲世卿撰之。

尊卑分脈。爲世正安三年十一月二十三日、依後宇多院院宣、撰進新後撰集、嘉元元年十二月十九日奏覽之、于時前權大納言。

文保二年十月三十日、依後宇多院院宣、撰進續千載集、同三年四月十九日奏覽之、于時前權大納言。

勅撰目錄云。續千載集後宇多文保二四十九元應二七二十五。

勅撰次第云。續千載集文保二年四月十九日被仰之、元應元年七月二十五日返納。前大納言爲世撰開闔長

舜法印（兼氏朝臣子也）〇一本云。撰者爲世和歌所開闔法印長舜（中書勤仕）連署衆　爲藤爲定定爲長舜國冬國道玉葉後四年歟。文保二年戊午十月三十日被レ仰レ之（奉行定房卿于時前中納言）同十一月三日事始、同三年四月十九日、四季奏覽二ヶ年終レ功、元應二年七月二十五日返納。

按ずるに年月時日かくの如く少しづゝのたがひあれど、正したらんも詮なき事なるべし。その中に次第に長舜法印を兼氏朝臣の子と云ひ、一本に中書勤仕と云ひ、奉行を定房卿とありて、又四季の部ばかり奏覽などの事、かれこれをかよはして其の事全く知らるゝなり。

增鏡秋のみ山巻云。當代もまた敷島の道もてなさせ給へば、いつしか撰集の事おほせらる。前藤大納言爲世承る玉葉のねたかりしも、今ぞむねあきぬらん。かしこの大納言の女權大納言の君とて、坊の御時かぎりなくおぼされたりし御はらに、一の御子女三のみこ法親王などあまたものし給ふ。かの大納言の君は早うかくれにしかば、このたび三位おくらせ給ふ。贈從三位爲子とて、集にも優しき歌多く侍るべし。さて大納言は人々に歌すゝめて、玉津島の社にまうでられけり。大臣かんだちめよりはじめて歌よむと思へるかぎり、この大納言の風を傳へたるはもるゝもなし、子ども孫どもなどいきほひことにひゞきて、下るまづ住吉へまうづ。逍遙しつゝのゝしりて九月にぞ玉津島へまうでける。歌どもの中に大納言爲世、

いまぞしるむかしにかへる我が道のまことを神もまもりけるとは

かくて元應二年四月十九日、勅撰は奏せられけり、續千載集といふなり。新後撰集と同じ撰者の事なれば、多くは彼の集にかはらざるべし。爲藤の中納言父よりは、すこし思ふ處くはへたるふしにて、少しこ

のたびは心にくきさまなりなどぞ、時の人々さたしける。

〔清　談〕

井蛙抄云。故宗匠爲世續千載集を承りて撰ぜられし時、さして歌よみにもあらざる人の來るにも、勅撰こそ候へ御歌や候出させ給へと申されしを、故戸部其の外の門弟も、勅撰は道の重事、秀逸を撰ばるべき事にて侍る、分明に歌もよまぬ者に歌をこはるゝこと人の難もありぬべき事なり。不レ可レ然之由つぶやき申されしをかへりきかれて、予に對面の時仰せられしは、歌は此の國の風俗なり、うまれたらん者誰かよまざらん、稽古して世にしられたるもあり、獨吟して心を養ふ者もあり、よき歌のいでくる事、歌よみならぬ者もよみいだしてふるき集にも入れり、後撰の八子が類なり。勅撰をうけたまはりて廣くよき歌をもとめむ時、名譽なき人もいかなる秀逸をか詠じてもちたらむ、などかあひふれであるべきと申されし、返すく面白く覺え侍りき。

羣書一覽に、耳底記云。千載、新勅撰の中をとりて、續千載を爲世の撰ぜられたりとあるは、續後撰を爲家の撰ぜられたりとあるを誤れるものなり。

〔和歌庭訓抄〕

又、歌のよわきとは、いかに心うべきにか、心深くよろしくすがた見ぐるしき事なれば、すててよみ侍らぬをめづらしき事の殘りたるとて、もとめ出しよまれ侍れば、口傳なきが致す所にこそ侍らめ、此のほかのことどももよろしからぬ事のみ侍りし、心あらん人はたづね見て心得られ侍るべきか、又續千載集の

時めされ侍りし御百首の中に、草かり入るゝ野田のなはしろとやらんよまれ侍りし歌を、或人の仰せられしは、是れも無下に俗にちかく侍るものかなどぞ侍りし。げにも田舍にていかなる事ぞとたづね侍りしかば、田づくるとて肥(こえ)とかやもち入るとぞ。もしさもあらはきたなくや侍らん。いかにも家の庭訓をも、師の口傳をも聞きたらむ人は、いかにもかかる事はよも侍らじ、作者誰ともしり侍らねば、もし筋なき事もや侍らん。奥書此小冊者大納言爲世卿述作尤可レ秘者也。

續後拾遺和歌集二十卷

後醍醐院御在位　次第　　撰者爲藤爲定

歌凡千三百五十三首　次第

或千三百四十三首　拾芥抄

部立　春上下　夏　秋上下　冬　物名　離別　羈旅　賀　戀自レ一至レ四　雜上中下　哀傷　釋教　神祇

春歌上　卷頭歌

春たつ心をよみ侍りける　　前大納言爲世

けふよりや春はきぬらむあら玉のとし立ち歸りかすむ空かな

卷軸歌

題しらず　　鎌倉右大臣

雪つもる和歌の浦松ふりにけりいく代へぬらん玉津島もり

勅撰目錄云。續後拾遺集後、醍醐正中二十二十八、右兵衛督爲定撰中納言爲藤卿於二朝餉一直奉レ之、撰歌中卒、仍爲定相繼而終レ篇奏覽。

勅撰次第云。續後拾遺撰者、參議右兵衛督藤原爲定、和歌所開闔法印賀性 中書勤仕 連署衆爲親、爲明、長舜 但不加署 賀性、國道、國夏。續千載後四年歟。元亨四年甲子十一月一日、直蒙二勅定一 奉行師賢卿于時中宮大夫 同十日事始。正中二年十二月十八日旦四季奏二覽之一、三箇年終レ功。嘉曆元年六月九日返納歟。元亨三年癸亥七月二十二日爲藤卿 于レ時侍從大納言 直蒙二勅定一、同八月四日事始。同四年七月十一日薨去之間、爲定卿重承二勅定一、正中被レ召二百首一。

拾芥抄云。續後拾遺集二十卷 千三百四十三首 部立 春上下 夏 秋上下 冬 物名 離別 羇旅 賀 戀自レ一至レ五 雜上中下 釋教 神祇。元亨三年七月奉二綸旨一、民部卿爲藤卿撰レ之、而不レ終レ篇、正中元年七月十七日薨去之間、子息權中納言爲定卿相續、正中二年十二月八日奏二覽之一重無二奉勅之儀一。

按ずるに常樂記に、元亨四年 正中元 甲子七月十七日、侍從中納言爲藤逝去とあり、よく拾芥抄に叶へり。次第七月十一日薨去とあるは誤りなり。又拾芥抄に重無二奉勅之儀一とあれども、次第に十一月一日直蒙二勅定一、同十日事始と詳かにその月日まであれば、是れは勅撰次第を正しとすべきか、爲定卿の事は、増鏡春の別卷云。をと年ばかりより又かねて撰集の事仰せられしを、爲世の大納言二たびになりぬればにや、爲藤の中納言に譲りしを、幾程なく彼の中納言なやみてうせぬ。中略 故爲道の中將の二郎爲定といふ

を、故中納言（爲藤）とりわき子になして、何事も云ひ付けし歌の事もさだすべしとぞ聞ゆる。大納言（爲世）は末の子爲冬少將といふを痛くらうたがりて、此のまぎれに引きやこさましと思へる氣色ありとて、爲定も怨みなげきて、山伏すがたに出でたち、修行にうせぬなど云ひ沙汰すれば、人々いとほしう哀れになどもてあやかへと、さすが求め出して元の樣におだしく定まりぬとなん。中署兵衛督爲定故中納言のあとをかけて撰びつる撰集の事、正中二年十二月の比、まづ四季を奏する由聞えし殘り、此の程世にひろまるいと面白し。御門ことの外にめでさせ給ひて、續後拾遺とぞいふなる。中宮大夫師賢うけたまはりて、此の度の集のいみじき由さま〴〵仰せつかはしたるに、御返しに爲定、

いまぞしる（後醍醐）ひろひし（イあつむる）玉のかず〳〵に身をてらすべき光ありとも

御返し內の御製、

かず〳〵にあつむる玉のくもらねばこれも我が世の光とぞなる

此の大夫はもとより中よきどちにて、常に消息など遣はすに、かく世にほめらるゝいとよしと思ひて、兵衛督の許へいひやる

和歌浦の浪もむかしに歸りぬと人よりさきに聞くぞうれしき

返し、

和歌の浦やむかしにかへる浪ぞとも通ふ心にまづぞ聞くらむ

尊卑分脈に、爲世の子爲通、爲通の子爲定にして、爲藤は爲世の二郎子爲通の弟なり。然れば爲藤のた

めには爲定は姪にあたれり、それを爲藤やしなひて子としたる事、增鏡の如くなるべきなり。さるを分脈に、爲定父早世之間爲祖父子相續とあるは、實父爲通養父爲藤ともに早く失せられたれば嫡孫承祖にて、爲定卿は祖父の爲世卿の跡をつがれたるよしなり。新葉集第十七雜歌中、續後拾遺集撰ばれし時は、名字につきて聊か子細ありて作者にもれ侍りしを、世の中あらたまりて後、風雅集などて撰集の事あるよし聞えしを、今はまして作者に加はるべきにてもあらぬ事など思ひつゞけておなじくかきそへ侍りし、中務卿は良親王、

いかなれば身はしもならぬことの葉のうづもれてのみ聞えざるらむ

詞書に、同じく書きそへとは、此の前に前大納言爲定もとへ、千首歌讀みて遣はし侍りし時云々とあればなり。

歴代和歌勅撰考　卷之五

常陸水戸　吉田令世撰

風雅和歌集二十卷

花園院御代　光明院御在位次第

歌凡二千二百八首　同上

或二千二百十首　拾芥抄

部立　春上中下　夏　秋上中下　冬　旅　戀自一至五　雜上中下　釋教　神祇　賀

春歌上　卷頭歌

はるたつ心をよめる　前大納言爲兼

足引の山のしらゆきけぬる上に春てふけふは霞たなびく

卷軸歌

暦應元年大嘗會悠紀方神樂歌近江國鏡山　正二位隆博

いはとあけやたの鏡の山かつらかけて久しきあきらけき世は

勅撰目錄云。風雅集、花園院康永三、貞和二十九、御自撰、公蔭卿、爲秀朝臣、爲基入道等、如ㇾ按合事被ㇾ召仕ㇾ云々。

勅撰次第云。風雅集、花園院御自撰、寄人前大納言公蔭、藤原爲基朝臣、藤原爲秀朝臣。續後拾遺後二十年歟。貞和二年十一月九日被ㇾ行ㇾ竟宴ㇾ。

按ずるに、目錄に康永三とあるは、此の時思召したたれ給ふ事なり。帝王の、和歌を御みづからえりとゝのへ給ふ事、花山院の拾遺集と、此の風雅集となり。近き世には、後水尾院の千首和歌、または集外三十六歌仙などあり。

宣胤記。文明十二年四月十七日、風雅和歌集今日書始了。

〔御撰格調〕

本集御撰序云。又近き世となりて、四方のことわざすたれ、武家の權を專らとするをのたまふ。まことすくなく、僞り多くなりにければ、ひとへにかされる姿、巧なる心ばせをむねとして、いにしへの風は殘らず、或は古き言葉をぬすみ、僞れるさまをつくろひなして、更に其の本にまどふ。又心をさきとすとのみ知りて、ひなびたるすがた、だみたる言の葉にて、おもひえたるこゝろばかりを、いひあらはす。たゞしき心、すなほなる言葉は、古の道なり。誠にこれをとるべしといへども、ことわりにまよひて、しひてまなばば、卽ち卑しき姿と成らん。艷なる體、たくみなる心、優ならざるにあらず。もし本意をわすれて、みだりに好まば此の道偏にすたれぬべし。かれもこれも、互にまよひて、古の道にはあらず。或はすがた高からんとすれ

ばその心足らず。言葉こまやかなれば、其のさまいやし。艶なるはたはれすぎ、強きはなつかしからず。すべて是れをいふに、其のことわりなげき言の葉にて述べがたし。中略誠のこゝろを得て、歌の道をしれる人は、猶數すくなくなんありける。難波のあしのよしあしわけ難く、かた絲のひき〳〵にのみあらそひあひて、みだりがはしくなりにけり。誰かこれをいたまざらんや。唯ふるき姿をしたひ、正しき道を學ばば自ら其の境にいりぬべし。

按ずるに、此の時冷泉、二條、爲兼流と三ッに分れて、歌の態をかたみにきしろひそしりけんさま、此の御序にてもよく知られぬ。扨其の歌の體、さま〳〵あるが中に、いかに正しき道なればとて、萬葉、古今などの如くのみ、よみても時に合はず、又、心を先とすれば、無下に只言になりて、いやしく、艶なるは戯れに落つめれば、此れ彼れを取りも捨てもして、正しき道に入りぬべきなりとの聖慮なり。是れやがて、二條家などの風を離れて、爲兼卿の一派をおこされたるよしなり。

元久の昔の跡をたづねて、古き新しき言葉、目につき心にかなふを、撰び集めて、はたまきとせり。名づけて風雅和歌集といふ。これ色に染みなさけにひかれて、目の前の興をのみ思ふにあらず、正しき風、いにしへの道、末の世に絶えずして、人のまどひをすくはんがためなり。ときに貞和二年十一月九日になんしるしをはりぬる。下略

按ずるに、此の文の意、上にのたまふ如くなれば、聖慮に合ひて、よしとおもほさるゝ歌を、後の爲に撰びおき給ふとなり。依りて集の名も、もろこしの周の國風、大雅小雅に准らへ給ふよしにて、風

雅集とつけ給へるなるべし。御序のはじめに、やまと言の葉の道はかなるに似たれども、周雅のふかき道にひとしかるべしと、宣へるにても知るべし。○かくて聖慮はかみの如くなれども、この集はかへりて、後の世の歌を損なふべき風にて、當時人にもそしり物しける事、玉葉集におなじ。茂睡法師が梨の本集云。雨中吟の中に、今云。未來記雨中吟といふ物ありて、此の集の如くの歌よまんは、風體を損すべしと、末生の戒めに家定のよみおかるゝよしなり。「打ちしめり薄のたれ葉おもりつゝ西吹く風になびく村雨」といふ風雅の歌あり。此の歌を以て、風雅集をそしるべき爲におもひ立ちたる作りごとなるべし。風雅集は花園院の、御自身えらませ給ふに、御手傳は大納言公蔭、冷泉中納言爲秀、二條の爲基三人、ともに定家末孫、歌道一派の人々の、定家卿のわざわざ風體惡しくよまれて、雨中吟と名づけたる一札にある歌を、なにしに入れらるべき。是れを以て考へ、又、雨中吟の歌を以て思ふに、憲法に立つべき歌にあらざれば、風雅集撰ぜられて後の、作りごとに、定家卿の名をかりたるものなるべし。以上梨の本集 といへる如く、風雅集は其の時はそしかれしなり。

〔雜談〕

井蛙抄云。冷泉云。風雅集被レ撰レ之比、常（御祠也）荻原殿參候之時、法皇（花園）御物語云。爲兼卿、我が（爲相也）歌に、「鳥の音ものどけき山のあさあけに霞のいろも春めきにけり」所存之歌にて、本にもすべき樣に申しき云々。

東常縁聞書云。寶德元年十月同月二十一日、畠山河波守阿州へ參りし處御物語あり。「白妙のゆふつけ鳥も埋もれてあくる梢に雪になくなり」これは頓阿の歌なり。風雅集御自撰の時、此の歌を御直しありて「雪や鳴くらん」として此の

集に入るべき由、仰せ下さる。御返事に申す樣、さやうに直して、此の歌を入れらるべきにて候はば、ひらに御免あるべきよし、かたく申し上ぐ。さて別の歌入りて是れは入らず。道は如レ此と物語あり。げにも、雪や鳴くらんは實なき所なり。

按ずるに、雪の鳴かん事、いかにも珍らしくおぼしより給へり。されど姿のあまりにけしからず、えせ歌になるべければ、頓阿がうけがひ奉らざりしも、誠にうべなり。いと後の發句といふものに、「一聲に月が鳴いたかほとゝぎす」これは誹諧の發句なれば、かくもあるべけれども、和歌はさはよむまじき事にこそ。

了俊辨要抄云。故殿(貞世父)詠歌のよしあしをわかち給はず、朝な夕なに心にうかぶ事を、詞に出し給ひ候ひしかども、取りたてて是れを先達とも不レ被ニ申合一、用捨の歌もおはしまさで、過ぎ給ひしなり。(中略)また勅撰等の山もおはしまさざりき。風雅集あつめし時、冷泉爲秀卿、□誓僧(部歌)執り申し候ひし由申されしかども、それは此の道の名聞なるべし。某はたゞ心を養ふまでなり。人は思ふとおもふ事の、惡念ならざるは少なきなり。歌もよくよまむとたしなまば、惡念なりぬべし。西行歌もさぞ思ひ候ひて、數寄けると承り及び候ひし間、撰歌の山もなく候歟。あの貞世は名聞にひかれて、作者をとゞめば、これ數寄をつく事もあるべく候へば、雖ニ初心候一かれが歌を御執申即心は召し入れられたる同事たるべきなりとて、終に歌をも不レ被レ進候ひき。依ニ此志一愚詠も召し入れられけるにや、あはれなる事なり。

園太暦康永四年(貞和元)三月十九日、天晴、今日除目、上卿中院大納言云々。執事可レ尋、小除目之次有下立ニ

親王一宣下事上。是伏見院皇女、播州御經廻永福門院内侍奉養育奉相伴住所領賀茂莊自二去年比一、御上洛和歌御堪能也。仍今度如二勅撰一、爲レ被レ奉レ入可レ有二御上洛一之由、被レ申云々。已御落飾人也。先日就二御尋一准據例等存也、立親王有二何事一哉之由、予計申了、御名字進レ之云々。依二近例一不レ及二親族拜一、又家司職事以下、本所儀、無二沙汰一歟。

園太暦貞和二年十一月九日、癸丑天晴、是有二風雅集竟宴事一。其儀在別記

貞和二年歲次丙戌十一月九日、癸丑晴陰不レ定、及レ半更雨降、風雅和歌集撰歌等大畧被二沙汰一歟。仍温二元久文永之例一、被レ行レ撰、進二竟宴一之儀也。蓋希代之勝概千載之一遇、多昨今不レ可レ被下待二他人一參上、相構可二早參一之旨、或被レ下二勅書一、或又有二女房奉一レ書、又自二法皇御方一、有二見聞之御者一云々。長文以下畧。

冬日侍風雅和歌集竟宴應

太上皇製　和歌　　從一位臣藤原朝臣公賢上

可美代よりつたふる嘉世農たゞ之起を我が日の本にしき之ま能見馳

端書等文永前左相府御所爲併以摸レ之、末孫步二其跡一攝二此宴一可レ喜可二惶々一。

同書云。貞和五年、二月十四日天晴、正親町前大納言公蔭卿來中畧又風雅集僻事等、人々位署以下可レ直間、事條々談レ之。

拾芥。

風雅集二十卷二千二百十首

部立　春上中下　夏　秋上中下　冬　旅　戀自レ一至レ五　雜上中下　釋教　神祇　賀

萩原法皇御自撰レ之、于時、貞和二年丙戌十一月九日。被レ行二竟宴一、之我朝被レ行二竟宴一例、新古今元久二年四月被レ行、文永二年續古今竟宴有、第三箇度云々。有レ序眞名假名　法皇。清書青蓮院入道二品親王尊圓。

櫻雲記云。正平元北京貞和三年今年北京に風雅集を撰す。宗良親王これを聞きて、是れより先に續後拾遺集を撰ぜし時、いさゝかのさはりありて、作者に洩れぬ。今また田舍にあり、撰者も爲定はもらす。此の道もすたり行くと歎きて、

いかなれば身はしもならぬことのはのうづもれてのみ聞えざるらむ

このたびはかきもらすとももしほ草なか〳〵わかのうらみとはせし

幽齋聞書下云。代々集所見之心持之事と云條、京極黄門庭訓云、萬葉集はげに世もあがり、歌の心もまして、此の世にはまなぶとも、及ぶべからず。ことに初心の時おのづからも、古體を好むことあるべからず。但し稽古としかさなり。風骨よみ定まりてのちは、又萬葉のやうをも存せざらん。好士は無下の事とぞおぼえ侍る。稽古のとき、よむまじきすがた詞侍るなり。讀むまじき姿言葉とは、あまりに俗にちかく又おそろしげなるるゐを申すべしと云々。つねに見ならふべきものは、古今、後撰、拾遺家三代集なり。近代風體云。新古今は初心の人は見てわろし、心得たらん人はくるしかるまじきとなり。定家卿の歌は、集に入りたるを心にかくべし。拾遺愚草などは、きき得難きところありて、心まどひぬるなり。家隆の歌をもよく〳〵見るべし。下句よくて、當時よむべき風なり。よき作者の歌は、後柏原院、逍遙院殿などの

歌をみて、上古、中古、當世の風をよく〳〵さとり知るべきよしなり。古今は花實相對の集なり。後撰は實過分すとかや。拾遺は花實相かねたり。是れまでは、歌餘風ありといへども、次第に陵夷するなり。後拾遺は八雲御抄に、經信公俳諧の歌を入るにて、こと事のわろさもこれをしらると侍り。是れより此のみちたじろぐやうにて、金葉、詞花にて、また其の風のそんじけるを、西行がよみなほせるよし、世稱之。しかるに、なほ俊成卿、千載集を撰じ給ひしより、金葉、詞花の風をすてて、歌道中興せり。新古今はまさしく定家卿撰者の人たりといへども、五人の撰者まち〳〵にて、定家卿の本意あらはれず。しかる間、勅をうけて、新勅撰をえらまる。新古今は、花が過ぎたりとて、新勅撰には、實を以て根本とせり。其の後爲家卿又續後撰をえらび進らせらる。此の集、正風體、花實相應、初心の學、最も肝要たるよし、先達稱之。此の後又歌のみち陵夷するを、後普光園攝政、頓阿と心ざしをおなじくして、風體をさま〴〵申しあらためられて、ふたゝび和歌の道おこれりとぞ。是れ頓阿が力なり。よく一集々々の建立を心にもちて見ならふべし。撰集のなかにも、詞書に、「歌奉れと仰せられければ、よんで奉りける。」とある歌、又おなじく、いづれの百首、五十首、三十首の中にとある歌、又何の歌合の中にと有る歌などに、心をかくべし。是れ精撰の儀なり。省問云。理のやすくきこゆる歌をば、猶心をふかく思ひいれて見るべしと、師說に申されしと云々。行住座臥くちに有るべき歌は、詠歌の大概百人一首なり。是れ我が歌よめらん時、吟じくらべて、歌のことがらをみんがためなり。八口（八口とあるは、八雲口傳のことなり。詠歌一體の別名なり。幽齋聞書卷末に此の名見えたり。）にも、歌を吟じいだして、ことがらをみんとおもはば、古今に吟じくらべてみるべしとあり。又何の集にも、いづれの

作者とありて、其の次に歌五首三首十首も作者なしの歌これあり。大かたは、右の作者に准ずべし。題の歌もだいしらずも、かくの如く、少々のかはりめはこれ有るべし。よく〱分別してみるべしとぞ、幽齋にたづね申す所如レ此。

新千載和歌集二十巻

北朝後光嚴院御在位　　撰者　為定

歌凡二千三百五十九首　第次

部立　春上下　夏　秋上下　冬　離別　羇旅　釋教　神祇　戀自レ一至レ五　雜上中下　哀傷　慶賀

春歌上　巻頭歌

春たつ心をよみ侍りける　　皇太后宮大夫俊成

春やたつ雪げの空はまきもくの檜原に霞たなびきにけり

巻軸歌

文保二年大嘗會悠紀方巳日參入音聲近江國新居郷　　前大納言俊光

古にやゝ立ちまさるみたからのにひるの里はにぎはひにけり

勅撰次第云。新千載集撰者前大納言藤原為定、撰和歌所開闔満吾丸、中書勤仕　清書為遠朝臣、連署衆、為明、為遠、光之、國鈴。但不レ加レ署予、風雅集十年、延文元年丙申六月十一日、被レ仰レ之。奉行内大臣實繼公于レ時按察使、同七

月二十八日事始、同年被ㇾ召ニ御百首ㇾ同四年四月二十八日、且四季奏ニ覽之ㇸ四箇年終ㇾ功。同十一月二十五日返ニ納之ㇾ。

按ずるに、此の連署衆の内に、予といふ人は、誰人の詞にか、是れは其の時の日記を、其のまゝ次第に書かれたるものとみえたり。顧ふに、開闔滿吾丸などの日記の文にて、自分の事をば、予と記したるにや。是れまでの例、開闔たる人、或は加署、或は署を加へざれども、其の名は連署衆の中に見ゆれば、是れはかならず、滿吾丸が日記の文なるべし。

尊卑分脈。爲定卿撰集事。元亨三年七月二日、奉ニ後醍醐天皇綸命ㇸ民部卿爲藤卿、撰ニ續後拾遺集ㇸ而不ㇾ終ㇾ篇。忽薨去之間、同年正中元十二月一日、直蒙ニ綸言ㇾ相繼撰ニ進此集ㇾ。正中二年十二月十八日奏ニ覽之ㇾ。

延文元年六月十日、依ニ光嚴院綸言ㇸ撰ニ進新千載集ㇾ。于ㇾ時法體同四年四月二十八日、奏ニ覽之ㇾ。先四季六卷、而法體出仕難儀之上、依ニ目所勞ㇾ子息左中將爲遠朝臣持ニ參之ㇾ。

拾芥抄云。新千載集二十卷、部立、春上下、夏、秋上下、冬、離別、羇旅、釋教、慶賀、戀自ㇾ一至ㇾ五雜上中下、哀傷、神祇。後光嚴院御位之時、延文元年六月十日(十一歟)奏ㇾ之。同四年四月二十一日、四季部先奏ニ覽之ㇾ。爲遠朝臣淸書、依ニ綸旨ㇾ入道大納言爲定卿撰ㇾ之。

綸旨案

上古以來和歌可ㇷ令ニ撰進ㇾ給ㇳ者依ニ　天氣ㇾ言上如ㇾ件。

六月一日十一歟　　　　　　左中辨時光奉

進上御子左入道大納言殿已上全文

園太暦第二十七云。延文元年六月八日、天晴。中畧抑今日未剋計、有㆓禁裏御書㆒。勅撰沙汰奉行、人間事愚存申入了。且承快之旨、密々示㆓遣撰者禪門㆒、了又都護對面之次、此事談㆑之、武家註申出、時宜御斟酌云。時分云、御製御分際旁思召煩之由勅定云々。勅撰事、武家聊依㆑有㆓申旨㆒、可㆑有㆓其沙汰㆒候。其間事閑可㆑申候。撰者事、任㆓千載集㆒可㆑爲㆓御子左㆒之旨、令㆑申候。其奉行事、或公卿、或雲客共存候、其例歟。今度可㆑爲㆓何樣㆒候哉。若㆓先例㆒、依㆓當道譜代㆒、被㆑仰㆓奉行㆒候哉。彼是無㆓才學㆒、無㆓申計㆒候。委可㆑被㆑申候也。先急可㆑被㆑仰之間、奉行事、申合候條々、不審追可㆓申候。他事期㆓後信㆒候也、被㆓仰下㆒之旨畏承了。抑勅撰間事、天下已屬㆓太平㆒、畢頗御沙汰珍重存候。撰者法體、雖㆓邂逅候㆒、千載集勿論候上、又武家執奏、不㆑能㆓左右㆒候歟。奉行強、無㆘被㆑撰㆓歌人㆒之儀㆖候歟。後撰集之時、謙德公、爲㆓五位藏人㆒、被㆓奉行㆒候由、和歌所別當勿論候者、其外強歌人、可㆓奉行㆒之條、無㆓定式㆒候哉、隨而新勅歌之時、頭中將賢雅朝臣傳㆑宣候。不㆑被㆑撰㆓當道故實㆒、奉行候之間存候、被㆓仰下㆒候儀候。被㆑召㆓御前㆒、直被㆑仰㆑之、或以㆓綸旨院宣㆒被㆓仰下㆒、先例不㆓一同㆒候哉、存知之分、且令㆓言上㆒候、得㆓此御意㆒、可㆘令㆑洩㆓披露㆒給㆖候。公賢誠恐頓首謹言上。

六月八日　　　　　　藤原公賢上

頭辨殿

追言上

千載集、頭中將資盛朝臣、書二遺院宣一之旨所見候。便宜レ爲二申上一候。可下令レ得二此御意一給上候也。重誠恐頓首謹言。

同十一日天陰　勅撰事。頭辨時光朝臣、及レ晩書二綸旨一、持二向撰者一歟、追尋取續レ之。

上古以來、和歌可下令二撰進一給上者、依二　天氣一言上如レ件。

六月十一日　　在中辨時光奉

進上御子左入道大納言殿

同十二日、天陰或雨、自二晩頭一晴、及二酉刻一。一條三位爲明朝臣來、入道大納言使也。勅撰事、昨日被レ下二綸旨一。抑（御歟）悦之至言語難レ及、先日音信本懷之間所レ示候。尤承悦候由報畢。昨日罷二向武家一、賀申候間、示レ之今度事、併武家執奏之故候也。

按ずるに、武家とは、將軍尊氏の事なり。室町殿より申されしなり。

同書第二十八卷云。延文元年七月二十日。戊申天晴及レ晩、三條三位爲明卿來、語曰、一昨日二十八日撰集事始果遂畢。和歌所歌人、無二人數一、光之朝臣、寶性法印息垂髮（生年十八）自身（爲明）爲遠等連署、爲重者不レ及二連署一云々。

これは、爲定卿の勅撰事始めありしことを、爲明卿の、公賢公に語り申さるゝなり。寶性の息、垂髮なるは、滿吾丸にや。その時のさま、園太暦にていとよくしられたり。

草庵集云。民部卿勅撰を承りながら、奏覧をとげずして、かくれ侍りしに、延文元月七月。三十三年にあたり侍りしころ、新千載集のこと仰せ下され侍りしかば、佛事の次に、人々歌よみ侍りしに、懐舊のころを、頓阿法師、

なき影の立ちやそひけむ今年しもふるきにかへるわかのうら浪

按ずるに、民部卿云々とは、爲藤卿の續後拾遺集の、ことを終へずして身まかられし事をいふなり。

〔新千載集之事〕

太平記三十三、尊氏逝去ノ事云々。五旬程ナク過ギケレバ、日野左中辨忠光朝臣ヲ勅使ニテ、從一位左大臣ノ官ヲ贈ラル。宰相中將義詮朝臣、宣旨ヲ披イテ三度拜セラレケルガ、涙ヲ押ヘテ、

歸ルベキ道シナケレバ位山上ルニツケテ濡ル、袖カナ

ト詠ゼラレケルヲ、勅使モ哀レナル事ニ聞キテ、有リノ儘ニ奏聞シケレバ、君限リナク叡感有リテ、新千載集ヲ撰バレケルニ、委細ノ事書ヲ載セラレテ、哀傷ノ部ニゾ入レラレケル。勅賞ノ至誠ニ忝カリシ事ドモナリ。

羣書一覽云。三光院云、新千載集は、歌よりも、ことばおもしろし。集を見ること、其の集による、詞歌のこゝろの、善惡を見しるべし、肝要なり。

新葉和歌集二十卷

後龜山御宇

歌凡千四百十五首　　撰者宗良親王

部立　春上下　夏　秋上下　冬　離別　羇旅　神祇　釋敎　戀一、二、三、四、五　雜上中下　哀傷　賀

春歌上　卷頭歌

たつ春の心をよませ給うける　　後村上院御製

出づる日に春の光はあらはれて年立ちかへる天のかぐ山

卷軸歌

題しらず　　後村上院御製

四つの海なみもをさまるしるしとて三つのたからを身にぞ傳ふる

九重にいまもますみの鏡こそなほ世をてらす光なりけれ

撰者宗良親王、弘和元年十二月三日奏覽。初宗良竊取二元弘以降之歌一集、爲二二十卷一、名曰二新葉集一。南帝下レ詔准二勅撰一云。

按ずるに、勅撰次第などに、皆新葉集を載せず。今本書序に據りて、しるせることかくの如し。

本集序（宗良親王）曰、秋津島のうち、浪の音靜かならず。春日野のほとり、とぶ火のかげ、しば〳〵見えしかど、程なく亂れたるを治めて、正しきにかへされし後は、（後醍醐天皇、隱岐より還幸の事を云ふ。）雲の上のまつりごと、更にふるきあとにかへり、（中界）一度はをさまり、一度はみだるゝ、世のことわりなればにや、終に又むかし唐土に

江をわたりけん世のためしにさへなりにたれど、ちはやぶる神代より、國を傳ふるしるしとなれる、みくさの寶を、まうけずたへましく〲云々。

按ずるに、これは平安城を出でて、吉野に、皇居を定め給ふといへども、三神器は南朝に傳へ給ふ事なり。江をわたりけんためしとは、西土宋の代、欽宗が末に、徽宗と欽宗と、金の爲にとらはれて、北のかに胡地にうつりし跡にて、欽宗の子の構が、天子の位につき、呉江を渡りて、建康に趣きしをいふなり。さて黄河より南を、金と分ちて有つなり。これを南宗といふ。後醍醐天皇の、吉野の皇居を、それになぞらへ給へるなり。

爰に、呉竹のその人數につらなりても、三代の御門につかへ、和歌の浦の道に携へては、七十のしほにもみちぬるうへ、勝つことを千さとの外にさだめし、むかしは、（趙長が故事、征夷將軍になり給はりし事を宣ふ。）野べの草ことしげきにもまぎれき、心を三つの衣の色にそめぬる。今はあしまの舟、さはるべきふしもなければ、かつは老のこゝろをもなぐさめ、且は、末の世までも殘さんため、かみ元弘のはじめより、しも弘和の今にいたるまで、世は三つぎ、年はいそとせの間、（後醍醐、後村上、後龜山三代、延元元年より元中九年まで、五十七年なり。）かりの宮にしたがひ、つかうまつりて、折にふれ、時につけつゝ、いひあらはせる言葉どもを、玉のうてな、金のとのより、瓦のまど、なはのとぼその内にいたるまで、人をもちてことを捨てず、撰びさだむる所、千歌四もゝちあまり、はたまき、名づけて新葉和歌集といへり。（中略）はからざるに、今勅撰になぞらふべきのよし、詔をかうぶりて、老のさいはひのぞみにこえ、よろこびのなみだたもとに餘れり。是れによりて、ところ〲改め直し

て、弘和元年十二月三日、これを奏す。略下

按ずるに、新葉集の歌は、その人もみな、世の中をひきかへさんと、かまへられたる人々にて、歌もそのことにあづかりたるがおほく、いづれもとり〲にをゝしく、たけくも、いさをしくもある歌にて、ほかの集とはことなり。又この序の詞も、かの俊成、定家などのかかれたるよりは、遙かにたちまさりて、いとめでたしと見ゆるは、あやしきまでなり。後龜山天皇の、勅撰に准へ給ふも、うべならずやは。

かくて、此の集を、此れに入れたる事は、まづむかし、我が西山の贈大納言の君、扶桑拾葉集をあつめられける時、新葉集を勅撰に准らへられたるに依つて、これを代々の撰集の數に加へて、拾葉集第一卷、風雅集序の次に載せ給へりしを、後西院の天皇、これが名を、扶桑拾葉集と給はりて、勅撰に准らふべきのよし、仰せ下されたりき。さるは、大日本史に、南朝を正統と立て給へると、この新葉集を勅撰の中に入れ給へるとは、やがておなじ趣なるを、後西院の天皇より、勅撰に准らふべき詔あり。しからばやがて詔して、新葉集を勅撰の中に入れさせ給へると、同じ義にぞありける。されば、今も拾葉集の次第によて、此の集を此れに載するものぞ。

因にいふ、拾葉集の名を賜へる事は、有栖川幸仁親王のかな序、西山公の上表の御文にも見えたり。勅撰に准らふべきのよしは、源桃遺事云、延寶六年戊午正月、兼々御あつめなされ候、和文三十卷、出來致候よし、天聽に達し給ひければ、後西院帝、名を扶桑拾葉集と御つけ、勅撰に御准候とあり。

櫻雲記。弘和元年北京永徳元年十二月三日、宗良及羣臣等、新葉和歌集ヲ撰ス。凡ソ南帝三代、元弘元年ヨリ弘和元年ニ至ツテ、南朝ノ君臣ノ和歌ヲ載ス。

南方紀傳。辛酉南京、弘和元年、北朝永徳元年中略十二月三日、南京入道親王宗良親王、奏二新葉集一。南朝三代、自二元弘元年一、至二弘和元年一。諸王、大臣、卿上、雲閣、男女、諸臣和歌載レ之。

【綸旨】

被二綸言一偁和歌撰集者、源出二平城皇都一、流至二正中聖朝一、源流、寔繁修撰世煽。而頃年以來、依レ有二四海風塵之警一、久容二六義採擇之席一、誠是朝廷之缺典、斯道之陵替者歟、爰新葉集、衆篇鏤レ金、毎部飾レ玉、翡翠之羽毛、採而無レ遺、犀象之牙角、抽而必擧、可レ謂レ拔二萃乎近代一、豈特推二美於上世一乎。叡感之餘、所レ被レ擬二勅撰集一也者。綸言如レ此、以二此旨一、可レ令下洩二申入上、入道中務卿宮一給天。仍執達如レ件。是れは新葉集の巻末に載せたり。

十月十三日　　右少辨資茂

謹上二條少將殿

新葉集雑中云。續後拾遺集撰ばれし時は、名字につきて、聊か子細ありて、作者にもれ侍りしを、世の中あらたまりて後、風雅集などとて、撰集の事あるよし聞えしを、今はまして作者に加はるべきにても、あらぬことなどおもひつゞけて、おなじくかきそへ侍りし。中務卿宗良親王。此の歌の事前に櫻雲記にも見えたり。

いかなれば身はしもならぬ言の葉のうづもれてのみ聞えざるらむ

今按ずるに、此の歌の前に、前大納言爲定もとへ、千首うたよみてつかはし侍りし時、贈從三位爲子の事など思ひ出でて、遣はし侍りしとて、此の親王の御歌、「ちりはてしはゝその杜の名殘りともしるばかりのことの葉もがな」といふ歌のつゞきなれば、おなじくかきそへとは、詞書あるなり。爲子は作者部類に、贈從三位爲子大納言爲世（系圖同じ）女。とある人にて、宗良の御母なり。さて新葉集は、北朝の撰集に、南朝の人入らざる故の、おぼしたちなるべし。又按ずるに、續後拾遺は、爲藤卿の撰にて、その薨ぜられて後は、爲定卿えらびつぎ、新千載は全く爲定卿一人にて撰ばれたり。されば是れらの集に入らんの御心にて、宗良親王御みづからの歌千首を、爲定卿に贈られしなるべし、さるは此の親王の御母は、爲世卿の女にて、爲定には伯母にあたり、爲定と宗良親王は、從父昆弟なれば、御したしみも一かたならざりしを、なほ足利將軍などをはゞかりて、北朝の撰集には、入れ奉らざりしなるべし。いとこゝろうきわざなるぞかし。

風葉集奥書に、新葉、藤葉、風葉、これを南朝の三葉集といふ由見えたり。

耕雲口傳。（號明魏書）こゝに信州の中書王（宗良親王）と聞えさせ給ひしは、かけまくもかたじけなき、後醍醐の御門の御子、外祖父は爲世の入道大納言の御子、贈從三位爲子（此處の文爲子と申す人が親王の外祖父の樣に聞えていかゞなるかきざま也。）ぞかし。木曾路を分け上りて、吉野のおくにすませたまひしに、此の道のほまれ、幼齢より世にかくれなく、晩年の風格、あめがした、ためしすくなくおはせしかば、朝夕、親近くして、此の道をとひたてまつりしほどに、日ごろのあやまり、冰のごとくにきえ、雪のごとくにとけて、露ばかりの力量も出で來にけるにや、

後には新葉集撰定のことをさへ、委附せられたてまつりにしかども、いく程なくて、また雲水漂泊の身となりてそのありし世に、きゝおきまなびなれにしことども、みな隔生のことの如くなりにしかば、此の道の祕事、口決なども、跡かたちをおぼえず云々。

按ずるに、かくの如くあれば、耕雲も、新葉集の事に、あづかりし事を知るべし。

新拾遺和歌集二十巻

北朝光嚴院御在位　撰者爲明

歌凡千七百五十八首

部立　春上下　夏　秋上下　冬　賀　離別　羇旅　哀傷　戀一、二、三、四、五　神祇　釋教　雜上中下

春歌上　巻頭歌

春たつこゝろをよみ侍りける　中納言爲藤

明けわたる空にしられて久方の岩戸の關を春やこゆらむ

巻軸歌

文保百首歌奉りける時　權中納言公雄

大井川かへらぬ水の鵜飼舟つかふと思ひし御世ぞこひしき

新拾遺集雜上

此の集承りてえらびはじめける日題をさぐりてよみはべりしに深夜月を

民部卿爲明

いたづらに我よふけぬと歎きつる心も晴れて月を見るかな

勅撰目錄云。新拾遺集、貞治二三二十九、同三四二十、民部卿爲明卿撰、頓阿法師助成、奏覽以後返納以前、爲明卿卒、仍頓阿相繼而終レ篇返納。

勅撰次第云。新拾遺集撰者、民部卿爲明、新千載、後三年貞治壬寅二月、被レ仰レ之、同三年四月、且四季奏覽、三ヶ年ノ終レ功、十二月返二納之一、四季奏覽之後、爲明卿死去、其後頓阿法師號計終、任二雅意一續二聚之一納云々。仍集而散々言語道斷、比奥集也淸書行忠。

拾芥抄云。新拾遺集二十卷、部立、春上下、夏、秋上下、冬、賀、離別、羇旅、哀傷、戀自一至レ五、神祇、釋敎、雜上中下。貞治二年二月二十九日、民部卿爲明卿、奉二綸旨一撰レ之、奉行頭辨資定、同四月十六日事始、同三年四月二十日、四季六卷奏二覽之一、而返納以前、同十月二十七日逝去。仍自遺諸返納云々。勘解小路二品行忠卿淸書、勅撰事治定、貞治二三月十一日内々、被レ仰二武家一事、同十五日和歌所、五條室町自二武家一、以二行忠三品一、被レ送二綸旨於撰者一云々。文全

按ずるに、拾芥抄に、勅撰事治定貞治といふ所、三月十五日とあるは誤りか。目錄、次第、共に二月二十九とあり、行忠二品、或は三品とあるも、一ッは誤りあるべし。三品なるべし。

尊卑分脈。爲明權中納言、正二位民部卿、貞治二年二月二日、依二武命一、後光嚴院、被レ成二綸旨一、撰二新

拾遺集、但撰定之最中薨去、然而後日擬二終篇一云々。

正徹物語云。頓阿は、其のころ新拾遺を、爲明の撰ぜられしが、爲明は返納もなくして、集中に沒し給ひけるほどに、雜の篇か、戀の篇からか、頓阿しつぎ侍りしほどに、記錄もあるべきなり。

按ずるに、武家は將軍義詮公なり。はじめ、後醍醐天皇の北條高時を亡ぼさまくおぼし立ちける時、爲明卿は歌の道にすぐれて、月の夜、雪の朝、ちかくめしむつばれしかば、帝のおぼしめしを知りたらば、尋ね問はんとて、六波羅へゐてゆきおき、火の上に靑竹をわたして、其の上をあゆませられんとしける時、

おもひきや我しき島の道ならで浮世の事をとはるべしとは

といふ歌を詠みて、ゆるされたる事、太平記に見えたり。

了俊和歌不審云。爲明卿、爲定卿、不快の後、古今集を御懐中候ひて、諸亭にて文字讀など候ひて　此の說は我こそたしかに傳へて候へなどと、仰せ候ひしをば、あまりなる樣に人も申し、我らも存じ候ひしかども、斯くの如く御執心深く、道をも御守り候ひけるにや、思ひの外に新拾遺をも御撰び候ひしかば、いかほどもかゞやかせおはしまして、目出べく候。

爲明卿は、いかにも其の頃の上手と見えたり。然るを、此の卿うせたまひぬとても、頓阿えらびつがむ事、此の法師は、歌は上手なりしかども、外にも人なきが如くあまりしきことなりしにや。

後深心院關白記。應安八年十月十七日條。傳聞入道式部卿邦省親王薨云々。後二條院皇子、續千載以來

至二新拾遺一五代作者也。頗其例稀歟、今度勅撰不レ被三待二付奏覽一無念也。

新後拾遺和歌集二十卷

撰者　爲遠
　　　爲重

後圓融院御在位

歌凡千五百五十四首次第

部立　春上下　夏　秋上下　冬　雜春　雜秋　離別　羇旅　戀一、二、三、四、五　雜上下　釋教　神祇　慶賀

春歌上　卷頭歌

たつ春の心をよみ侍りける　前大納言爲定

あまつ空かすみへだてて久方の雲ゐはるかに春や立つらむ

卷軸歌

永和元年大嘗會悠紀方辰日退出音聲千松原　儀同三司

君が御代ちぎるも久し百とせを十かへりふべきちゞの松原

勅撰次第云。新後拾遺集、假名序二條松殿、良基公　撰者權中納言藤原爲重、和歌所開闔惟宗光方朝臣、四季奏覽中書勤二仕之一。但奏覽與二返納一之間、依二不慮事一、背向了、仍返二納之一。中書爲敦朝臣、律師尊範、津守國量朝臣等、勤二仕清書一。撰者連署衆爲敦朝臣、法性寺宮內卿　國量朝臣、津守　光方朝臣、惟宗　連署執事國貴朝臣、津守國久。津守新拾遺後十六年歟。永德元年辛酉十月二十八日、夜直奉二勅言一、同十一月二十七日事始、同二年

三月十七日且四季奏二覽之一、同三年十月二十八日終レ功返二納之一。

一、爲レ奏二勅定一參仕束帶之時、先著レ度黑戸。著座之儀式有レ様之。

一、四季奏覽之時、御手箱無レ之、藏人知季於二殿上口一、自二雜色手一請二取之一、而渡進。撰者取レ之、而自二公卿座之御洲之下一進レ之、女房請二取之一也。

一、四季奏覽、與二返納一之間、御讓位無二先例一歟、然者可レ如二先規一歟、仍返二納御手箱於仙洞一。于レ時仙洞小川殿云々。自二北面公卿座之御洲之下一、如二四季奏覽一。以二女房一被レ召レ之、無二先規一歟、返納之時者、只自二内々一可レ被レ召レ之也。

一、依二御讓位一、四季與二返納之御名字一、相違了也。無二先規一。

〔和歌所事始之儀式〕事始日集名卷頭歌定之

一、部分等歌袋撰者出レ名置二和歌所一也。

一、可レ置二所望之歌一、以二官位之次第一、札連署。開闔光明方朝臣、書レ之押細連署は押二長押一。

一座二十首短冊、引合、出題依二先規一。國量朝臣、講師光方朝臣。直衣狩衣撰者、人數爲敦朝臣、同上國量朝臣、同上光方朝臣、同上國貴、横座同上國久、國量出二杉原檀紙一。撰者寄人取レ之先規也。

一、御手箱依レ有二先規一、國量沙二汰之一歟。

一、爲レ承二奉勅定一、參任之時著物束帶。

一、四季奏覽之時、直衣下結。

一、返納之時、直衣下結。

按ずるに、和歌所にて、撰集事始のさま、これにいと詳かなり。但し事始の日、集名卷頭歌定レ之とは、其の時に取りて、官位といひ、勘能といひ、さるべき人を、數々の人の名を集めて、某こそ卷頭にをるべき人なれと、いふ事を、まづ定むるなるべし。次に部分等の歌袋、撰者出レ名とは、春の部の袋上下、夏の部の袋などと、名を書きたる袋を出し置きて見るまゝに、まづ春ならば、春の袋へ入る。料るに事始の日、これをまづ取り出すなるべし。さて其の次に、當座の詠歌の會あるなるべし。事始のよろこびに此の事ありと見ゆ。

拾芥抄云。新後拾遺集二十　部立トバカリ　永和元乙卯六月二十九日丑刻綸旨到來其詞云。

上古以來、和歌可下令二撰進一給上者、依二天氣一言上如レ件。資教謹言。

六月二十六日　　　　左衛門權佐資教奉

進上御子左中納言殿

勅使資教、隨二身御子左中納言亭一云々。同十月御百首沙汰在レ之出題、御子左中納言爲遠卿、永德元年辛酉八月二十七日。巳刻撰者爲遠卿、頓滅云々。同十一月日可三相續令二撰進一之由被レ仰、爲重中納言直勅定云々。不レ及レ被レ成二綸旨一云々。永德二年壬戌三月十七日、四季六卷且奏覽。和序在レ之、二條太相國良基公書レ之。同三年癸亥十二月終二撰功一。返納而數反錯亂、大略被二棄捐一歟之處、重有二其沙汰一、至德元甲子十二月無爲返納云々。至德

二乙丑二十五撰者中納言爲重、爲二敵人一被レ害。

按ずるに、次第に、新拾遺後十六年歟とあるは、誤りなるべし。拾芥抄に、此の集を始めて仰せ下されたるは、永和元年とあり。新拾遺返納の貞治一年より、永和まで、凡そ十三年になるなり。又爲重卿にかさねて命ありしは、次第に、十月二十八日とす。拾芥抄には、十一月とす、是れまたあやまりあるべし。爲重卿の殺されたるは、常樂記に、至徳二年乙丑二月十六日、御子左中納言爲重卿撰死、山科藏人入道平井爲二敵人一令レ殺云々。侍一人打死了とあり。此の集を返納ありし十二月より、わづかに六七十日にはすぎず。此の集の返納、今少しとゞこほりなば、また撰歌中に、身まかられなんかし。あやふかりし事なり。但し返納の事、次第には、永徳三年十月とあるは、初めの度なり。いよ〳〵をさまりしは至徳元年なり。

尊卑分脈。爲重撰二新後拾遺一、但始爲遠卿奉レ勅、不レ終レ篇薨去之間、相續撰レ之。

櫻雲記云。弘和三年（北京永徳三年）十二月、北朝新後拾遺和歌集を撰むと云へども、南朝の羣臣の和歌を載せず。（豐島胤榮）

本集序曰。權中納言藤原朝臣爲重に仰せて、いにしへより今に至るまでの歌を、集めえらばしめ給ふ云云。文治のかしこき御代に、皇太后宮太夫俊成、みことのりをうけたまはりしより、延文の明らけき時にいたるまで、代々に撰び置かれたる勅撰、すべて彼の家より出でずといふ事なし。今の世の推す所、人ののゆるす所、まことに道のひじりと云ふべし。四つの時のもてあそびより、くさ〴〵に至るまで、其の數

千歌はた卷、名づけて新後拾遺和歌集と云ふ云々。永德二年の三月の二十八日になむ記しをはりぬる。

按ずるに、是れはまづ、四季奏覽の時の序と見えたり。此の序の作者、二條の良基公は、其のころのものしりにて、しかも足利氏にこびられたれば、此の集をも、武家より申しはからはるゝから、かな序をば、此のおとゞのかかせられたるもの歟。かくて、此の序にいへるごとく、文治に俊成卿の、千載をうけたまはられてより、代々皆御子左の家、勅撰をばうけたまはりて、定家卿は新古今、新勅撰と二度、爲世卿は新後撰と、續千載と二度、爲定卿は續後拾遺と、新千載と二度、此の三人は皆二度づゝ、うけたまはられたるもめでたきわざにて、此の爲重卿までも奉り來られしは、此の家にとりては、いかばかりのおもておこしなりけむ。此の新續古今を飛鳥井の家にてえらばれしこそ、御子左のためには、口をしき事なりけめ。

勅撰次第頭書云。永和元年七月、被レ下ニ綸旨於ニ御子左中納言爲遠卿一、撰歌事被レ仰レ之。奉行日野左少辨資教、自身隨ニ身綸旨一、向ニ爲遠卿亭ニ云々。八月事始同二年二月之比、愚詠可レ出之由、遮而爲遠卿書狀有レ之、仍同二月上旬撰餐、同七日淸ニ書之一、鳥のこ十三枚、一尺六分切レ之書レ之、同紙一枚裏レ之。裏紙は、長サチサホド不レ切ヲ木ノノレナリ也。カミヒネリニテ結レ之、納ニ文箱一、副ニ愚狀一遣レ之、同八日也。右尊道親王、入道二品御詠草案之奧書也。依ニ御自筆ニ寫レ之、慶長九十九也。

按ずるに、これは始め爲遠卿の、うけたまはられしをりの事なり。通勝卿の、慶長九年十月九日にうつしたまへるとなり。

新續古今和歌集二十卷

撰者雅世

後花園院御在位

歌凡二千百四十四首次第

部立　春上下　夏　秋上下　冬　賀　釋教　離別　羇旅　戀一、二、三、四、五　哀傷　雜上中下　神祇

春歌上　巻頭歌

たつ春の心をよみ侍りける　　權中納言雅縁

春きぬといふより雪のふる年を四方にへだてて立つ霞かな

巻軸歌　　後福光園攝政前太政大臣

たのむかなわが藤原のみやこより跡たれそめし玉津島ひめ

勅撰次第云。新續古今集、眞名序前攝政左大臣兼良公 假名序同人、撰者權中納言藤原雅世、和歌所開闔法印權大僧都堯孝、寄人。名缺 新後拾遺後五十年歟。永享五年癸丑八月二十五日被レ仰レ之。奉行名缺 同十年八月二十三日、四季奏二覽之一、七箇年終レ功、同十一年六月二十七日返二納之一云々。

拾芥抄云。新續古今集二十卷、部立トバカリ 永享依二綸言一、飛鳥井贈大納言雅世卿子レ時中納言撰レ之。有レ序。

眞名假名一條攝政兼良公令レ書給云々。

上古以來、和歌可下令二撰進一給上者、仍二天氣一言上如レ件。資任謹言。

左中辨資任奉

進上飛鳥井中納殿

或本云、東山左府實熈公筆蹟、資任辨官次第、永享七三十二、任二右少辨一、同十轉二左少辨一、同十一轉二權右中辨一、嘉吉元年十二七轉二左中辨一、兩人見二辨官之體明豐書綸旨一歟、資任書レ之由不審也。

永享　年　月　日奉二綸旨一（奉行藏人左少辨明豐明豐辨官次第永享三左少辨藏人同九十一二十七轉二右中辨一同十一三十八轉二左中辨一）同十年八月二十三日、四季奏覽。同十一年月日返納、權中納言雅世撰（已上拾芥全文）本集漢序云。夫撰集者、文思之標幟、而今不レ作者已久、寧非二明時之缺典一乎。由レ是遂擇二禁内便宜之殿一、爲二和歌編撰之所一。詔二權中納言藤原朝臣雅世一、專掌二其事一、論思獻納夙夜在レ公、出二入古今一、取二捨美惡一、凡歷二六年一甫就二一集一、名曰二新續古今和歌集一。永享戊午八月下澣謹序。同かな序云。時に永享十年八月二十三日になむしるしをはりぬる、云々。かな序云。權中納言藤原朝臣雅世に仰せて、和歌のうらの浪のよるべには云々。そもく參議雅經卿は新古今五人の撰に加はれるうへ、此の道にたづさひても既に七代にすぎ、其の心をさとれることもまた一筋ならざるにより、こと更に勅するむねは、誠に時至りことわり叶へるなるべし。

按ずるに、此の時仰せ下されたるさま、和歌所をおかれたる事、雅世卿とほつ祖の雅經卿、新古今の時五人の撰者に入りしためしをもて、此の度この集の撰を承られたる事、世のひゞきにて、家のめいほくに、人もいひおもひけんこと知るべし。

蔭戒記第十六卷云。永享五年八月二十五日、天晴。御忌月如レ例、今日被レ仰下下和歌集可二撰進一由、於中

飛鳥井中納言上。雅世藏人權右中辨長淳、書二遣綸旨一了。凡院御治世之時、猶可レ爲二院宣一歟之由、有二沙汰一。然而猶有レ議、被レ下二綸旨一云々。新拾遺新後拾遺等之例歟。件兩集武家執二奏之一。今度又可レ然、又聊有二子細一歟。抑雅世卿曩祖雅經卿、加二新古今撰者一之後、中絶無二此事一。忽興二數代之跡一時刻到來、可レ爲二高運之至極一者歟。和歌所開闔事被レ仰二堯孝僧都一云々。件綸旨舊草事長淳、昨日尋二問予一。故儀同三司資教卿御教書之體、有二所見一、仍注進了。又飛鳥井中納言來臨、被レ示二合請文之體一。爲氏爲世等可レ書之舊章被レ隨身一者、彼趣無二子細一、可レ被二規模一之由計示了。

按するに、是にも雅世卿の此の度撰者になされしをほめたり。又撰者綸旨その外の事も、古き跡を尋ねて申しおこなはると見えたり。但し奉行の人次第には名を不レ記。拾芥抄には、右中辨資任とあり、薩戒記には權右中辨長淳とあり、いづれかよからん。薩戒記なるは、其の時その事にあづかりて記す文なれば、誤りはあるべからざる歟。猶いかゞ。

南朝記傳云。永享十年戊午八月二十三日、飛鳥井權中納言藤原雅世、新續古今集を奏す。此の集には南朝の臣の歌を載せず、但し後龜山院の御製四首、花山院右大將長親卿法名耕云明魏號和歌の達者なり、此の人の歌六首入るといへども、南朝の官位を顯はさず、明魏法師とかけり。明魏の詠六首入る事も、後北朝へ來れる故なり。次に北畠持康の歌一首これをのす、當代北朝の臣たるによりてなり。

俊明云。今按ずるに、此の時北朝の撰集に、南朝の和歌をとらざる故に、南朝にて此の時新葉集をえらばる。令世云、此の説非なり。新葉集は永享十年よりは四十九年以前、弘和元年の撰なり。新葉集

は風雅集の時におもひたたれしなるべし。其のよし前に云へり。このとき尭孝意見せし、云々。

羣書一覽云。三光院御說云、末の集におもしろきは新續古今。今その物に見えたる所をいさゝか此にあぐ。

〔二十一代集〕

今世に、古今集よりしもつかた新續古今までを、二十一代和歌集と云へり。

新續古今集の序云。おほやけごとにえらび集めらるゝあと、二十あまり一たびになんなれりける。

靜勝軒銘云。桑域二十一代集（是れ僧萬里が太田道灌のためにかけることばなり。）本朝書籍目錄云。二十一代集（耳底記問云。吉田殿の二十一代集は、本よく候哉。答云。よきなり。兼右手跡大めあるなり。）

かくの如くむかしより二十一代集の名も久しく聞えたり。

〔十三代集〕

倭漢事數云。二十一代和歌集云々。新續古今（自二新勅撰一以下稱二十三代集一。）

兼載雜談。公方樣是れは二十一代集の中卷頭の歌なり、なほせ〳〵とありしに云々。

按ずるに、袋草子にいへる如く、古今より拾遺までを三代集（拾遺集の下に詳かなり）と云ひてより、あるは七代集（千載集の下に詳かなり。）あるは八代集（新古今集の下に詳かなり。）あるは十代集（續後撰集の下に詳かなり。）あるは二十一代集（見上）又は十三代集（見上）などと集のいで來るにしたがひて、稱へしものなり。されば今新葉集を數に入れて二十二代集ともいふべく、また新千載と新拾遺集は、ともに後光嚴院の御時にして、二集ながら御一代の集なれば、

これを一代と見れば、新葉集を數へてもなほ二十一代といはんも不可からじ歟。又九代集とは古今をはぶきて、後撰より續後撰までを、宗祇の一千五百首ぬきたるを九代抄といへり。又古今をはぶきて後撰より新續古今までのぬきがきを、二十代集抄といふもあり。

卷數

〔續三代集〕

續三代集作者部類跋云。倭歌作者部類、自二古今集一至二續後拾遺一者、建武四年、元盛、光之編輯焉。其後康安二年、光之增二補風雅、新千載二集一、並爲二三卷一、以行二於世一。余今考二新拾遺、後拾遺、新續古今三部一、而倣二舊本篇目一、悉擧二其作者一。新拾遺以下初見者、詳註二其官位、世系、歌數一、而其既見二於舊本一者、唯記二三部所レ載之集數一而已。遂集爲二三卷一、以附二舊本之後一。於レ是二十一代集全備焉。然或下官、或卑位、或凡僧、或女子等、未二勘出一者、姑闕レ之、以俟二再校一。且有二同時同諱一者、又有下記二其家號一、而不レ記二姓名一者上。今尋二其始末一、據二其事跡一、以考二書之一。唯恐有二牽合傅會之誤一、然可レ爲二他日便覽之小補一也。

正保三年仲秋　　　中大夫源考功郎中

金葉詞花を除くの外は、萬葉より新續古今まで二十卷なり。

按ずるに、古今集を二十卷と分ちたるは、萬葉の卷の數にならへるもの歟。其の後の集ども二十卷なるもの、跡をつぎ、序ある集は、その序に、ちうたはたまきとかき、文のとぢめをざらめかもと結べ

今も有る、古詞を襲へるものなりき。中々に拙しとや云はん。其の中に後拾遺の序はえらび終りぬる
のん　事になりけるといへり。かくの如くといへりと、とぢめたる漢文のさまにてわろし。新勅撰集は
新勅撰集といふ事しかり、新後拾遺序も、千とせの色を傳ふべしといふ事しかりと、書かれたる、是
れも漢文のさまなり。只千載集序のみえらび奉りぬるになん有りけると、とぢめられたるぞよろしか
りける。

〔命　名〕

古今集は昔今の歌を集むる由の名なり。其の後にえらべるを後撰と名づけ、その殘れるを拾ふとて拾遺とつけ、それにつぎて撰ぶとて、後拾遺といひき。金葉、詞花は、ほめたる名なり。千載集は遠く傳はらんのよしなり。新古今は、今まだあらたに、むかし今の歌を集めらるゝよしにて、新勅撰は、その後またあらためて、勅撰あるの名、玉葉、風雅もまた美稱へる名なり。

按ずるに、撰集の名を命けられたること斯くの如くにて、其のことわり聞えたるを、續後撰より已下は、皆三代集の名を襲ひて、或は新、或は續といひて、かへすがへすも同じ名を用ゐられたる外には、集の名を仰すべき由なきが如く聞えて、これまた拙しといふべし。

〔新　撰〕

春日社參記（初めに寛正六年、室町將軍家春日社參のことをいふ。）云。此の度かの家に代々の跡をつぎて、敷島の歌撰び奉るべき由の勅はべりしにつきて、和歌所の寄人になされ侍るは、身にとりて重代の名も侍らず、まして今堪へたる道

にもあらぬに、かかる仰せの侍るは、唯他生の宿縁ぞと、知らぬ世のゆかしきのみぞ侍るや。

按ずるに、此の記は寛正六年の記なり。後土御門院の天皇御即位の年にして、將軍は東山義政の左大臣なり。かくの如くあるからは、勅撰いできたらんとおもはるゝに、其の後きこゆる事なきは、何の集にかあらん。思ふに其のころ、應仁（寛正六文正元應仁元也）の時、細川勝元、山名宗全軍をかまへて、京師のうちゆゝしき亂れにてありしかば、此の勅撰は終に遂げられずして、罷めけるにやあらん。此の度かの家に、代々の跡をつぎてとあるは、御子左の家にてぞあらんと思ふを、そのころは二條冷泉ともに衰へて、かの飛鳥井の家さかりになりて、雅親卿（法名榮雅雅世の子也。）殊に名高かりしかば、此はきはめて雅親卿なるべくおもはる。是れより後は、連歌といふもの盛んにおこなはれて、其の方にのみ名高き人ありて、和歌の方には僅かに太田道灌、正徹法師などのみなりき。

勅撰次第に、二十一代集畧頌といふものを載す。いかなる人のしわざにかあらん、韻といふものもふまず、いとつたなき物なれども、洩らさんもをしくて、此に書き加へつ。

歴代和歌勅撰考　巻之六

常陸水戸　吉田令世撰

〔和歌師資〕

歌はしも、これの世の中に、おのづからはらまれくる人の心言葉にして、たぬしともうれしとも悲しとも思はん時、それがまに〳〵いひもて出づるものにしありければ、

風雅集序云。やまとうたは、あめつちいまだひらけざるより、そのことわりおのづからあり。人のしわざ定まりて後此の道つひにあらはれたり。○古今集序云。やまと歌は、人のこゝろを種として、萬のことの葉とぞなれりける云々。世の中にある人ことわざしげきものなれば、こゝろに思ふことを、見るもの聞くものにつけていひいだせるなり。花になく鶯、水に住む蛙の聲をきけば、いきとしいけるもの、いづれか歌をよまざりける。○子夏詩序云。詩者志之所レ之也。在レ心爲レ志。發レ言爲レ詩。情動二於中一而形二於言一。言之不レ足。故嗟二歎之一。嗟歎之不レ足。故永歌レ之。永歌之不レ足。不レ知二手之舞レ之足之蹈一レ之也。情發二於聲一。聲成レ文謂二之音一。治世之音安以樂。其政和。亂世之音怨以怒。其政乖。亡國之音哀以思。其民困。故正二得失一。動二天地一。感二鬼神一。莫レ近二於詩一。○禮樂記云。凡音者生二人心一者也。情動二於中一。故形二於聲一。聲成レ文謂二之音一。是治世之音。安以樂其政和。亂世之音怨以怒其政乖。亡國之音。哀以思其民困。聲音之道與レ政通矣。○梁鍾嶸詩品曰。氣之動レ物。物之感レ人。故搖二蕩性情一。形二諸舞詠一。照二燭三才一。暉二麗萬有一。靈祇待レ之以致レ饗。幽微藉レ之以昭告一。動二天地一。感二鬼神一。莫レ近二於詩一。〔百川學海〕○程子周易序曰。萬物之生。負レ陰而抱レ陽。莫レ不レ有二太極一。莫レ不レ有二兩儀一。絪縕交感。變化不レ窮。形一受二其生一。神一發二其智一。情僞出焉。萬緒起焉。○朱子詩經集傳序云。人生而靜天之性也。感二於物一而動。性之欲也。夫既有レ欲矣則不レ能レ無レ思。既有レ思矣則不レ能レ無レ言。既有レ言矣則言之所レ不レ能レ盡而發二於咨嗟一。詠歎之餘者必有二自然之音響節族一。而不レ能レ已焉。此詩之所二以作一也。〔これらのおもぶきをもて、うたのことをもさとるべし。〕

さらに僞りかざれるものにあらず、まことのいたりになんあるをもて、あめつちをもうごかし、おに神を

もあはれとおもはするは、ことわりのまゝにぞありける。

上子夏詩序詩品を引くが如し。又易繫辭上傳曰。言行君子之樞機。樞機之發榮辱之主也。言行君子所三以動二天地一也。可レ不レ愼乎。○白氏文集第十李白墓詩曰。可レ憐荒壠窮泉骨。曾有下驚二動天地一文上。

しかあれば、此の歌はまねびのおやといふものにつれて、たづねとふべきにもあらず、ことにふれて思ひわたさるゝことを、我が口づから歌ひものしつるを、

千載集序俊成曰。から國、日のもとのひろきふみの道をも學びず、しかの苑、鷲のみねのふかきみのりをさとるにしもあらず、唯假名の四十あまり七もじの中をいでずして、こゝろにおもふ事を、言葉にまかせていひつらぬるならひなる故に云々。詠歌大概定家曰。和歌無二師匠一。唯以二舊歌一爲レ師。

いにしへよりかくよみきぬる中にとりて、この歌に、いとしもたへなる人もいでこずやはあるべき。かれその人をば人丸、赤人といひて、家持のぬしなどもはやくたふとびいやまひ、

萬葉集第十七大伴宿禰家持贈二池主一書云。幼年未レ逕山柿之門。裁歌之趣、詞失二乎叢林一矣。といへり。本朝文粹に、和歌類林序云。何重二異域之蘇李一。空輕二我朝之山柿一乎なども見えたり。むかしより人丸赤人をば、歌の上手此の道の宗となしたることおもふべし。

紀貫之にいたりて、これを歌のひじりとたゝへたり。

古今集序云。かのおほんときに、おほきみつのくらゐ柿のもとの人丸なむ、歌のひじりなりける云々。又山のべの赤人といふ人ありけり、歌にあやしくたへなりけり。人丸は赤人がかみにたたむ事かたく、赤人は人丸がしもにたたむ事かたくなむ有りける。

かくてよりのちは、いよ〳〵神のごとおもみせられて、それが次には延喜のころ、友則、貫之、躬恒、忠岑を四たりの歌仙といひて、古今集をえらばしめたまひ、

袋草子。三代之明主降レ勅恢二玆道一。四人歌仙奉レ詔獻二家集一。○八雲御抄云。貫之、躬恆、忠岑、まことに此の道のひじりなり。

あるはなしつぼの五人といひ、

後拾遺集序云。むかしなしつぼのいつゝの人といひて、歌にたくみなるものあり。いはゆる大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城等これなり。

あるは六人の黨といひ、

十訓抄云。江匡房記云、和歌の道に取りて往年六人の黨あり、所謂範永、棟仲、頼實、兼長、經衡、頼家等也。○袋草子、續古事談、八雲等にも見えたり。異同あり。

または大納言公任のきみをば、空の月日の如くになんあふぎてしかども、

八雲御抄云。公任卿、寛和の比より天下無雙の歌人とて、既に二百餘歳をへたり。在世の時いふに及ばず。經信、俊頼已下、ちかくも俊成存生までは、空の月日の如くあふぐ云々。

なほまねびのおやと定め、これが教へ子とよりくる人もなかりけるに、古曾部のほふしが伊賀守長能にいたりてこのみちをとひたるぞ、やまと歌にまねびの父あるはじめなりける。

中古歌仙傳曰。能因法師遠江守忠望孫、肥後守爲愷男、實弟云々。俗名永愷、文章生肥後進士、遁世之後號二古曾部入道一云々。和歌自レ昔無二師弟一。而能因始長能爲レ師。○袋草子にもみえたり。其の後六條の顯輔卿。清輔朝臣など、またこの道のものしりなりしかども、をしへ子のさたはきこえず。
○尊卑分脈云。顯輔號二六條歌道一流祖、清輔和歌初學集作者。

俊成卿に至りて、また基俊の朝臣にまねび、

長明無名抄云。五條三位入道談曰、そのかみ年二十五になりし時、基俊の弟子にならむとて、和泉前司道經を中立にてかの人と車にあひのりて、基俊の家にゆき向ひたる事有りき。彼の人その時八十五なり。その夜は八月十五夜にてさへありしかば、亭主殊に興に入りて歌の上の句をいふ。仲の秋とをかいつかの月を見てとやう〳〵しくながめ出でられしかば、予これをつぐ。君がやどにて君とあかさむとつけたるを、何のめづらし氣もなきを、いみじくかんぜられき。○詠歌大體云。近くは亡父卿則道を習ひ侍りける基俊と申しける人云々。○兼載雜談曰。俊成は基俊に五歳の時より門弟になり給ひしなり。是れは二十の字を脱したるならん。

鴨の長明は俊惠法師が教へ子となりき。

長明無名抄云。俊惠に和歌の師弟の契り結びしはじめ、かの詞に云ふ、歌にはきはめたる故實の侍なり、我をまことに師とたのまれば、此の事をたがへるな、そこはかならず末の歌仙にていますべかるらへに、かやうにちぎりをなさ

れば中しはべるなり云々。

これぞそのかみのありがたちなる。かくてまたその後は、定家の卿のうみの子のすゑ〴〵、かた〳〵に別れて、たがひに其の流れをひきつゝ、よその波風おだしからずいひもて騒ぐことになんなりにける。

正徹物語云。此の道にて定家卿をなみせん輩は冥加もあるべからず、罰をかうぶるべき事なり。其の末流、二條、冷泉兩流と別れ、爲兼流とて三ツのながれありて、魔醯首羅の三目のごとくなり、たがひに抑揚褒貶あれば、いづれをさみし、何れをもてなすべき事にもあらざるか○落書露顯云。おのづから傳へきくに、冷泉黄門爲尹卿の歌ざまのこと、如市町說は詠歌の體其の詞自由にして幽玄の體を存せず、闕けたるすがた多しと云々。○常緣聞書云、寶德四七二十二於二常光院一承るに條々公方の會にて冷泉持爲あやめのねと上句に讀みて下句にねぬなはとよまれたり。此くの如きの事をだに知られぬにやと申されき。これらは冷泉家を譏るなり。又○了俊和歌不審云。爲世卿爲兼卿の御風體は黑白のかはりめ見え候。御教への樣も二樣に承り及び候。是れこそ疑ひなく、只一トすがた許りに入りふし給ひける故かと存じ候。藤谷殿の御教へはかならずしも一體にとゞまれとは御教へ候はで、歌の替りめは昔も今も師の風體に弟子不レ似レ父の歌樣に其子不レ似とも、歌讀同じ物とうけたまはりて候云々○了俊辨要抄云。二條家の歌ざまは、最も初心の人も、やがて〳〵上々に至る。是れにて思ふべし、道の淺き事を。」これらは二條家と爲兼の流れをそしるなり。又は了俊不審云。藤谷殿〔爲相〕の御歌樣を、御子左家の人々申し候ひけるは珍らしく新しくは聞え候へどもたけなき御歌にて候などと申しけるとかや。これまた冷泉をそしるなり。これより先に基俊と俊賴とたがひにそしる事、寂蓮と顯昭といどみあひたることなど、八雲井蛙その外かれこれと見えたれど、我が家を立てて口傳祕事などいふ事はいまだ聞えざりしを、二條、冷泉、爲兼と別れてより、たがひに我が家を立てて人をいれぬけなり。

こゝにおきて、道のひめ事、口づからの傳へなどいふ事かまへ出でて、わが家をたて、奥ふかくゆゑあるさまにもてなしつゝ、そともの垣よりは、たやすくうかゞひえぬがごとくになむなれりける。其のよし次のくだりにいふを見よとよ。

〔師傳奧儀祕事〕

歌の上にとりて、まねびの父の傳へごとひめ事などいふことはしも、基俊より俊成に傳へ、俊成より定家にさづけたりといへり。

古今童蒙抄序云。歌の道におきては、定家卿の説をはなれては頗る傍若無人なり。その謂れは、基俊より俊成は此の道を傳へて三代になれり。和歌の奥儀、祕事、口傳、殘る所あるべからず。然れども近き世となりて、かの子孫の中邪僻を執し、あやまちを傳へたる事も侍るにや。○落書露顯云。さすが此の道は家たゞしく、和歌祕抄殘らず相續分明におはせし爲秀卿に此の道をうかゞひ得て、〔中畧〕冷泉の事は家を繼ぎ、祕抄等相傳の事は世のしる所なり。かくのごとくその子孫基俊、俊成、定家よりの祕事をつたへたりとあり。

其の事を猶たふときものにして、人にもうべなはせんとては、基俊は紀貫之が傳へをえたりといひ、

耳底記云。基俊奈良の南圓堂に歌道を祈られたれば、大津の古瀬へ御出であれとの靈夢を蒙られたり。さて靈夢にまかせければ、基といふものに逢ひて、山法師の女にあこゝとやらん云ふ者、貫之が道を傳受したるを傳へられたりとあり。○幽齋百人一首抄云。基俊は貫之よりの傳受の故なり。

またいよ〳〵そのことを深くせんとては、かの貫之は宇佐の宮に祈りて、夢にさづかりたる事ありといひなすめり。

白梅園鷺水が誹諧新式目云。〔元祿中刊行〕定家卿御説に、いにしへ貫之宇佐の宮に參籠して歌道の秀逸を祈り申し侍りし時、夢の御告げありしに、五人の歌仙たち居ならびたまひて、一句づゝ示しおはしましける由なり。その御歌〔あなくるし、人丸〔いとぞくるしき、赤人〔あをやぎの、猿丸〔わがくるかたは、黑主よりによられて、町君、これを當序題曲流の五義と云ふなり。一字々々につきてそのこと　わりある事なり云々。かかる妄説もあるなり、つたなき事わらふべし。此の事の非なること知る人は知るべし。

まことにかたはらいたきしれ事ならずや、笑ふべくなむ。

貫之は歌の上手にて、躬つね等と古今集をえらびこそしたれ、口傳などいふことあることは古書に見えたることなし。また貫之が宇佐の宮にいのらん事あるべしともおぼえず。○神道者と云ふ者の説に、和國の道は、天兒屋根命より傳へてその家ありといひ、或は日本紀の奥祕は、舍人親王の直傳をつたへたる家ありなどといへるも、また古今傳受のたぐひにて、かかる事はみな俗説にてとるにたらず。

うまくおもひはかり見るに、俊成卿もひめ事などいふことは絶えてなかりき。

古來風體抄云。歌のよきことをいはんとては、四條大納言公任はこがねの玉の集となづけ、道俊卿の後拾遺の序にはことばぬひものの如くにこゝろ海よりも深しなど申されためれど、かならずしも錦ぬひもののごとくならねども、歌は

たゞよみあげ、もしは詠じもしたるに、何となく聲にもあはれにも聞ゆる事の有るなるべし。もとより詠歌といひて聲につれてよくもあしくも聞ゆるなり。○千載集序云。から國日の本のひろき文の道をもまなびず云々。唯かなの四十あまり七文字の中をいでずして、心におもふことを言葉にまかせていひつらぬる習ひなるが故に云々。これらの言歌よむ心得を俊成卿のちからのかぎりを記されたるものにして、此の外に秘事口傳あるべき由は見えず。○兼實公の玉海に云。治承四年二月三十日戊午俊成入道之許に送二消息一自筆爲レ射二一日之遺一昧也。其次和歌抄物爲二分契一可二傳受一之由示送。報狀云「ふりにける木の下水の淺ければかきつたふべき言の葉ぞなき、返歌一契りをば淺からずこそ結びしか木の下水の何よどむらむ。○年山紀聞云。報狀の歌は俊成卿なり、返歌は兼實公なり、師弟子としられたり。この趣を見るに、神文などして秘書を傳へ受けらるゝにはあるべからず。某々の書をかりうくべしといふ契等をもて、抄物を借る事を許さるゝことと見え、俊成卿の歌にも、かきつたふべき言の葉ぞなきとあるにても、今の世の如く、古今の秘事などいふ事はなかりしことおして知るべし。もし秘事あらば、とりはづしても、いかに卑下の詞にも、かき傳ふべき言の葉ぞなきとはいはれまじき事をや。

定家の卿も歌にひめ事ありしことは見えず。

東鑑二十卷建曆二年九月二日條。此の便宜に定家朝臣進二消息幷和歌文書等一今日持二參御所一。同二十一卷建曆三年八月十七日之條。京極侍從定家付二條中將雅經朝臣獻二和歌文書等於將軍家一是先日被二尋仰一之故也云々。これはいかなる文書にかありけん、さるべき書とは見ゆれども、秘事口傳などいふ事は是れにも見えず。○井蛙抄に、京極「定家」被レ進二右府將軍一實抄といふものを見るに、今ある詠歌大體の事なり。それには貫之が歌の風調より、のち〳〵の人のことをいひ、父の俊成卿までにいひおよぼして、さて經信、俊頼、顯輔、淸輔、基俊と俊成、六人の秀歌を三首四首ヅツかきつらねて、終りに云ふ、只今おぼゆる事をかきつけて侍れば、無下にかたのやうに侍れど、かたはしにて心はおのづから見え侍らんと書かれたり。これ一隅を擧げて三隅を曉れとの意なり。○又詠歌大概に、言葉は三代集をいづべからす、風體は可レ效二堪能先達之秀歌一などある、やがて歌よみの極意を書きいでられたるものにして、歌の上に取りては、これより外の秘事口傳はあるべからず。かの實朝公へ進ぜられたる和歌の文書は、今の詠歌大體、又は濱成式喜撰式。あるは新撰髓腦などの類にもや。濱成式などは本より取るにたらぬ僞書なれども、千載集序に喜撰式の事みえ、淸輔奧儀抄にも。濱成式、喜撰式といふこと、あまた見えたれば、淸輔朝臣のころははやくありし書と見ゆればなり。さて此の時などは古今傳受といふ事もいまだみえぬ事なり。

よしや撰集のおもぶき、歌をものにかかむとき、筆のたちど、墨の濃淡、其の外まとるのむしろの立ちふるまひの定めなどは、その家々の傳へありもせめども、

撰集故實會席作法などは、袋草子、八雲等にも見えたり○短冊の筆つきは、二條冷泉は五七五七七とつくなり。皆人の知るが如し。又六條家にては、九十十二とつぎて、「吉野川ながれの、「水やまさるらんゆきもいつしかとけぬとおも

へば、是くの如くかく由、粟田嘉休見聞抄といふものにみえたるよし、彰考館の往復書案にみえたり。〇正徹物語云。雅經は定家の門弟の分なり、公宴などにては懷紙を三行五字に書かるゝ許りこそ雅經の家のかはりめにてあれ、其の外は、何にてもたゞ二條家に同じ者なり。かくの如く家々にてたがふ事あり。

それはた歌よむ事のうへにとりては、もとよりかゝはらぬ事にして、筆つきの定めによて、よき歌のよまるべきにもあらねば、これらは知りも知らずもさてありぬべし。さるをいつしか古今集の祕事といふものをまうけなして、たはやすく人にゆるさぬ事となれり。そのよし次にあげつらふが如し。

〔古今傳授〕

古今集のひめ事とは、いかなるすぢをいふにかあらむ。おのれは本より、人につきて歌をまねびたふ事もあらざれば、ましてさるひめ事などはうけも傳へもせず、そのよしはえしらねども、

密勘云。和歌の事、庭訓おろそかに、管見せばくして、如難儀こと聊かも習ひしらず侍る中に、少年の時古今を見侍るに、よみとかぬ所多く侍りしかば尋ね申ししに、古今は受けてこそよめ、押してはいかでか見んとて、授けられ侍りしたゞ一つの說〔前左衞門佐基俊〕にて、家々の祕事をもうかゞひ聞き侍らねば、何事も知りわきまへ侍らずとあり。これによれば、基俊よりの傳へにて、淸濁音便その外の難儀なども、少しはありけめども、衆說をば知らずとの事にて、今の世のごとくなる愚かなる說を、祕めものしたるにはあらじ。これ定家をもて定家を證すにて、古今集にさせる祕說なきしるしなり。〇季吟八代集抄云。古今集、此の集は故金吾〔基俊朝臣〕より五條三位〔俊成〕に傳授の故深く、京極黃門中院禪門より世々の深祕口訣二重三重に傳ふれば、不審齋〔宗祇〕牡丹花老人など、その傳授の法とて十箇條の制詞をしるしのこされき。予そのかみ靈瑞院〔淸高法印〕の御かたより御傳授ありて、彼の不審齋より九世の血脈をたまはれり。しかれども其の師傳の抄は、かの十ケ條の制詞をもれてみだりにせんことは、住吉玉津島の冥慮恐れあり云々。季吟が此の說も只ひたぶるに傳授といふ事をたふときものにして、かたくまもりたるのみの言にして、信僞までは考へぬなり。

今いふなる三鳥三木などは、さらに歌の上にとりて、何のかゝはりあるべきにあらず。古今集は、延喜五年に、貫之などがみことのりを承りて、えりとゝのへたる、むかし今の歌の集にこそあれ、玄妙不思議のふかき理こもれる物にはかつてあらず。ひめ事とてかくしも傳へもすべき事は、いづこにかはあるべき。只讀

みみるまゝの古今の歌集なるをや。もし今世にある古今の傳授といふものの如くなるすぢならば、あひおひの松「をが玉の木「めどのけづり花、これを三木といひ「喚子鳥「いなおほせ鳥「みやこ鳥、これを三鳥と云ひていみじきひめ事とすなるは、愚癡なるたは言といふべし。凡そ草木鳥獸の名なとは、昔有りて今なきもあり、今有りてむかし無きもあり、また一ツ物ながら昔と今と名のかはりたるもありて、それを考へ明らめんことたはやすからねども、三鳥三木などは、貫之がえらばむ時は、皆當時世にありて、人もよく知りたるから、歌にもよむわざにて、今のごとく、かくし物する事にはあらざりければ、貫之それが祕事口傳をつくるべきかは。よしやその事祕事にもあらめども、三鳥三木などを、知り得たりとも、歌よむうへの心得には、本より要なきわざなれば、道の傳授となすにたらず。又七首の祕事、七ケの大事といふ事あり、その說つばきしてすつべき事どもなり。たとはば貫之が、袖ひぢて結びし水のといふ歌を、此の歌は三國和合の理侍るなりとて、法華經梵網經などをこと〴〵しく引きていへる、いかでさる事のあらん。貫之いかにみづからほこるとも、我がよめる歌にかかる傳授を作りおくべきにあらず。又、基俊、俊成、定家、いかに文盲至愚の人なりとも、さすがに聞えたる此の道の上手たちの、かかるはらはしき事をかまへ出でて、古今の祕事なりといふべしやは。この外ひをりの日、ひるめの歌、その外にも、古今の二字などいひて、延喜の帝、天照大神より祕事を給はり、御喜びの奉幣に准へて、古今を撰び給ふなど、あらぬひが事のみぞ多かる。されば、古今集傳授といふ事は、定家などより後に作り出でたるものとすべし。○戴恩記に、古今傳授の切紙目錄を載す。○「王代の祕目一通、「年號のよみくせ四通、「題のよみやう十七通、「官名の正點七通、「官名一通、「かばねのよみやう一通、「四題一通、「百官の名目四通、「歌人の名のよみやう一通、「五體四品一通、「九章一通、「四ケ大事一通、灌頂他家祕傳一通、「五儀三體の大事一通、「求風隨祕歌一通、十二病一通「つれ〴〵草の内一通、「百人一首のよみやう二通、「伊勢物語の内一通、古歌一通「八雲神諸の口訣一册、此の外いくらも相傳の物ども候へども爰にかかず、又紙面にのせず詞にて傳ふる祕事多し。定家卿より幽齋法印まで、一器の水を一器にうつすやうに、口づから傳へ給ひしなり。これよみかたの口傳と申す祕事なり。

傳へもて、道のふかきことわりありとするに足らず。歌は我が國のおほやけなるみちなれば、ひめ事あるべきことかは。

萬葉新採百種解附言。凡そ學びの道はおほやけなるものにて、よしあしは古き文にのせてあるを、見る人の才によりて明らむる故に、古は家をたてず、すぐれたる人あれば用ゐたまふのみ。かつ傳授祕事てふことも聞えず、その傳へし事のわろくて、傳へぬ人の語のよきもつねなり。たとへば、から國の書の祕事はつたはらねど、かしこに明らめぬことを、此の國にてよく解くもおほきが如し。古きふみを見ずして、後の人のわたくしにいへることを、よしあしもわかず信ずるしれ人は、心を人にあづけたらんがごとし、

顧ふに、これはかの二條、冷泉と爲兼とみつに別れてより。

玉葉集の條に、正徹物語梨本集などを引きていふが如し。

おのも〱我が家をたてらるゝから、我こそ正しき統を傳へえたれとて、

上に童蒙抄、落書露顯、耳底記等を引くがごとし。耳底記に、またつねには四十未滿にては古今傳授なしといへども、定家は十六にての傳授なりといへるも、誤り傳へたる事いふにもたらず。定家の古今を傳授ありしこと、古書に見えたる事なし。また古今の證本といふものも、定家の諸本を挍合はせて定められたるにこそあれ、俊成よりつたへられたるにあらず。○和歌庭訓抄〔爲世卿作〕あたらしきをもとむとて、さまあしくいやしげなる事どもをもとめよむことあるべからず、故九條内府の御自讚歌、あけがたのあまのとわたる月かげにうき人さへや衣打つらむと侍るを、故入道民部卿爲宗は、無下の傾城かなと難ぜられ侍りけり。實もにては侍らねど、こゝろらくこそ侍れ。あるひは遠國にて我が身を立てんとて、重代の家督をそしり、或は家の祕說はわれこそ習ひ侍れと申す人も侍る。或は門弟などに信ぜられんとて、よりどころなき事ども申し出し、或は宗匠などに、よわくかひなき歌よみにて、すこしも風情こもり力ある歌は、人の歌をも見しらず、我が身もよまれずと申し置きて、信仰する人數をしらず。これまめやかにふかくまどへるなるべし。その故は世々の傳はりある家領等悉くゆづりあたへ、たび〱朝家に採用せられて勅撰を褰る家督には祕してをしへぬことを、庶子に授けむことしかるべしや云々。

みづからほこり、我が家をたふとくせんとて、かかるたば事をまうけて、そのかたざまの人、あるはをしへ子などへ、ひそかに傳へたる拙き策といふべし。さるはいつばかりにあらむ、龜山天皇の御前にて、爲世、定家の古今をもて爲兼をたゞし、

井蛙抄の事上に見えたり。

爲明の古今集をふところに入れて、かた〱にもちあるきつゝ、我こそたしかに傳へをえたれといはれたる。

了俊不審の事上に見えたり。

などをおもふに、そのころよりぞいひはじめけむ、

爲世と爲兼と互に襃貶ありしより、その子孫の爲兼を譏らん爲に、古今傳授といふ事も作り出でられたる事、雨中吟、未來記等の如くにぞあらん。これより前に、古今の傳授といふ事も、のに見えず。

とおもふに、なほあらざりけり。

了俊辨要抄云。和歌の抄物の事家々にさま〳〵あり、皆詞等の事を註したるなり。詠歌のすがた、心仕等をこまかにをしへられたる事は、俊成卿、定家卿、爲家卿許りなり。是れを朝夕心を靜めて披見あるべきなり。和歌の秘々、詠歌一體、愚見抄、詠歌大概、古來風體、毎月抄等なり。古今集の歌以下の說は、多分顯註密勘に見えたり、といへり。是れに俊成卿已下の詠歌の事をこまかにをしへられたりといふに、詠歌一體等をあけて、古今集の歌以下の說は、多分顯註密勘に見えたりといへるにて、此の時いまだ古今傳授といふ事のなき事を知るなり。もしあらば古今集の事は、秘事口傳宗匠の御ゆるしをうけて知るべしなどこそかくべけれ。さはいはで密勘をあげたるにて、この集のことは、顯昭の註に定家卿の密勘にて盡きたりとなるべし。〇かくの如くこまやかに心をとめて見れば、今世が說の妄ならぬ事を知るべし。〇落書露顯に、さすがにこの道は家たゞしく、和歌秘抄殘らず相續分明におはせし爲季卿に、此の道をうかがひ得てともあれど、古今傳授の事はなし。

然らばまさしくは、いづれの時にか出で來つらむ、一條兼良のおとゞ、冷泉持爲の卿につきて、古今のひめ事をさづかりしといへるに

公事根源集釋に、古筆屛風傳を引きて曰く、兼良公倭漢之學識不レ愧二古人一自負二才氣一無二歌學之師承一。將レ讀二古今集一慨然嘆曰一閧之市必立二之平一一卷之書必立二之師一。況乎歌道之奥乎。竟噬臍就二冷泉持爲卿一學二三代集之秘訣一といへり。然らば持爲のころは、既に傳受と云ふ事ありしと見えたり。兼良公は尊卑分脈に、文明十一年四月二日に八十歲にて薨ぜられたる由なれは、持爲卿の弟子になられたるばかりに二十歲前後とみて、應永二十年の前後なるべし。其の時代おもふべし。

よれば、そのころよりやいひそめけん。猶古今の傳授といふ名は、いまだ見えず。其の同じ代に、東の常緣といふ人あり、これはしも遠つおやの時より歌人にて、この道を爲家卿より傳へ、

諸家系圖纂云。千葉胤賴號二東六郎大夫一。其子重胤歌人。其子胤行中務丞歌人。法名素暹爲家卿歌道相傳

この常緣にいたりて、いよ〳〵ます〳〵歌にたへなりけるに、應仁の亂によて、都の中も、かぎりなき世

のさわぎにて、歌の道も其の傳へをうしなひてしかば、この人を都に召して、ふたゝびやまと歌の道をおこし給ふといへり。

歌道釣物云。東野州常緣は、桓武天皇の後胤坂東の八平氏の一流千葉介常胤が六男、東の胤頼和歌の道に達し、戰場にても手に卷をはなさず、その子平太重胤いよ〳〵此の道明らかにして、東國におこなはれ、實朝公の師範たり。その子胤行いよ〳〵嗜び、入道して素暹法師と名づく。是れより常緣まで相繼ぎて絶えず、歌道よしみの故を以て、定家卿の子孫と婚姻を結ぶ。一旦二條家零落の時、緣ある故に和歌の祕奧こと〴〵く彼の家に傳へきたり。數代濃州郡上を知行して常緣の世に至り、應仁大亂の後打ちつゞき天下騷がしく、公武ともに和歌の道すたれぬる時、幸ひに常緣此の道の堪能たるの閒、忝くも武家へ仰せ付けられ、野州を召しのぼせられて歌道再興の義あり。常緣數年在京して東山殿に昵近せり。〇東系圖云。常緣古今集令傳授公武歟家無雙歌人也とあり。しかるに東系圖に、これよりさき行胤が子の行氏を古今相傳すとあるは、うたがはしき事なり。前の條々に云へる如く、爲家などの比は古今傳授といふことはなき事なればなり。おもふに此の系圖は後より追ひてしるせる所もあるべければ、必ずしも取るべからざる歟。常緣古今集を令傳授とあるもおぼつかなし。常緣は只先祖より和歌の抄物等を傳へしなるべし。そのうちにおのづから古今の事もありしなるべし。正しく古今集の傳授といふ事は、常緣と宗祇との閒に見えたり。〇向坂蘭溪見聞錄云。和歌近世譽あるは普光園殿、一條禪閤、兼良公、逍遙院殿、三光院殿、九條玖山公、近衛龍山公、烏丸光廣卿、天子には後水尾帝、後西院帝、靈元帝、殊にすぐれさせ給ふとなり。古今集の傳授は、中古東の常緣を以て祖とす。宗祇法師、逍遙院實隆公、稱名院公條公、三光院實澄公、二位玄旨法印、八條家、中院家、烏丸家相つゞく、

かくて、そのころつゞけ歌といふ、ことに名高かりし。宗祇といへる世すて人、常緣にまねびて古今集のふかきむねを傳へ授かりぬといへり。これぞ古今傳授といふ事の正しく物に見えて、世にもきこえたるはじめなりける。

宗祇集の詞書云。文明三年東下野前司常緣より古今集傳授の後、年を重ねて、相傳のうへになほのぞむことありて奉りし云々。これ宗祇が自らの詞なり。また〇宗祇終焉記云。東野州に古今集傳授聞書幷切紙にいたるまで殘る所なく此の度今はの折に素純口傳付屬有りしなるべしといへり。これは宗祇が常緣より受けたる傳授を、今また常緣が孫の胤氏法名素純に、宗祇より傳へたりといふ事なり。終焉記は宗祇が弟子宗長法師道すがらつきしたがひて、まさしくその折の事を宗長が記したるなれば、此の記はまことにかたき記にて、此の記と宗祇集にぞ始めて古今傳授といふ名は見えたる。後の物ながら〇本朝通紀後篇卷二十一云。宗祇就東常緣而傳授于古今集之奧旨古今集之傳授蓋始于宗祇。〇常緣集云。宗祇法師より和歌の事たづね侍りけるによみて遣はしける「今さらに身のおこたりぞしられけるとはずばいかにしきしまのみち。又按ずるに、常緣聞書に、俊成卿云々基俊公より古今相傳二十五歲とかや、不分明とあ

り。此の說も後よりいひ出したる說にて、俊成卿の時代の書には見えぬ事なり。さて常縁などの比はかくいひし事と知らる。

然らばこの事は、常縁と宗祇とが間に出できたる事にして、これよりいむさきには、古今の傳授といふすぢは絕えてなき事になむありける。

終焉記に、拝聞書とあるものは常縁が聞書と聞えたり。卽ち今いふ東野州聞書の事か、もしまた外にも有るか。終焉記をよくあぢはひて見るに、古今の傳授と云ふ事は、野州より始まれるものなり。

こゝに宗祇がをしへ子の宗長も、またその傳へをうけたりき。

耳底記曰。宗長は古今傳授したれども、あまり念を入れなんだなり。我は連歌師にてこそあれ、道を傳へてなにすべきにもあらず、連歌のつけあぢだによくばといふて、餘りかまはなんだとなりとあり。是れをおもふに宗長さるものにて、古今傳授といふ事の、取るにたらぬ事を知りてこそしかいひけめ。

それよりかの宗祇がつたへを、實隆のおとゞ、公條のきみ、細川幽齋ぬしへ傳へもてきて、今はうけばりたる此の道のふかきひめ事にぞなりにける。

和漢三才圖會云。歌道以二古今集中三鳥六木等之秘一爲二傳受一。而中古以二東常緣一爲レ祖、而宗祇、逍遙院實隆、稱名院公條、三光院實澄、細川玄旨法印、八條殿、中院殿、烏丸殿、相二續之一。○擧白集に、悼二玄旨法印一詞書。家の風桂を折り京極黄門の一流れ、其の末絕えずして、此の法印まで正しき筋をつたへ給へりとぞ、まことにあふぐべくたふとまざらむや云々。

しかあるを、慶長五年に東照神の會津の方へうちむかはせ給ひける跡に、石田三成大坂がたにて、幽齋ぬしの丹後の田邊の城にこもられけるを、いくさをやりてうちきためなんどしければ、いたくたしなめられて、城もいとあやふかりしをり、後陽成院の天皇このよしきこしめされて、田邊へ御使を給はり、そのいくさやめよとみことのらして、かこみをときて古今の傳授をなし奉り、その身もことなくまぬがれしはありがたき事なりし。

東國太平記。續々拾遺落穂集、藩翰譜などを按ずるに、三成兵をやりて田邊をかこむとき、三條大納言實條卿、烏丸大納言光廣卿、賀茂大宮司松ノ下をそへて田邊の戰場に遣はされ、戰ひなかばなる所へ勅使行き向ひ、本朝歌道の祕傳、鳳闕には絶えて武家に相續せり。中古濃州の士東下野守平常緣より紀州の種玉庵宗祇に傳へ、宗祇より三條大納言逍遙院實隆卿へ傳へ、實隆より稱名院公條卿へつたへ、公條より三光院實澄卿へ傳へ、それより圓智院公國卿へ傳ふ。公國早世の折ふし、其の子香雲院實條未だ七歳なれば、細川兵部太輔藤孝入道玄旨につたふ。藤孝は文武義勇の名將なり、もし玄旨討死せば、本朝の神道家傳長く絶え、神國のおきて空しくなるべし。古今の傳授を禁裏に殘さん爲に勅使あひ向ふなり。此の陣しばらく引くべしとありければ、兩陣戈をふせ甲をぬぎ、なりをしづめて勅使を本丸に請じ奉り、燒香灑水して古今の箱を取り出し、祕密の傳授のこさず實條卿へ傳受し、源氏物語の奧義二十一代集の口訣切紙等まで丁寧に認めて、神國祕密傳受の印信とて、一首の和歌をぞ奉られける。古も今もかはらぬ世の中にこころのたねをのこす言の葉と讀みて、實條卿に向ひて、古今の箱等を渡し奉り、此の次をもて光廣卿も傳受し給ふといへり。今はむねとある所をつゞめてかけり、委しくはいと長ければ、本書につきて見るべし○さて按ずるに衆妙集に、古も今も替らぬの歌は、慶長五年七月二十七日丹後國籠城せし時、古今集證明の狀、式部卿智仁親王に奉るとてとありて、此の歌あり、東國太平記等の說非なり。

さてまた宗祇より牡丹花肖柏に傳へたるを、堺傳授といひ、

肖柏は和泉の堺に住みし人なり

肖柏より奈良の饅頭屋に傳へたるを奈良傳授といひ、

和漢三才圖會云。自二宗祇一傳二牡丹花肖柏一謂二之堺傳受一傳二于南都饅頭屋一謂二之奈良傳受一。

かの幽齋ぬしのかたへ傳へたるをぞ二條家傳といふといへり。

倭漢三才圖會云。古今集先雖レ有二萬葉集一以二古今一爲二歌道本源一。其中有二口授之祕旨一爲二傳授一矣。貫之、基俊、俊成、定家、爲世、頓阿、經賢、孝尋、堯惠、堯孝、常緣、宗祇、實隆、公條、實澄、玄旨、謂二之二條家傳一其外有二流義一といへり。但し貫之、基俊などよりこの傳へを擧げたるは、例の誤りによりて誤りをつたへたるものなれば、とるべからず。○續無名抄云。歌道の傳來は紀貫之、基俊、俊成と古今集の相傳あるなり。二條家は爲世卿より頓阿が傳へて、經賢、孝尋、堯惠、堯孝、東野州常緣、宗祇、逍遙院實隆、稱名院公條、三光院實澄、細川玄旨法印と傳來して、八條殿、中院殿、烏丸殿などみな玄旨よりつたへ給ふ。宗祇より肖柏へ傳へられし流を堺傳受といひ、それを南都饅頭屋傳へしを奈良傳授といふなり云々。尾崎雅喜云。按ずるに、此の饅頭屋と云ふは林宗二の事にて、源氏林逸抄、節用集等の作者なり。○鹽尻四百六十八段古今傳授。定家、爲家、爲氏、爲世、頓阿、經賢、孝尋、堯惠、堯孝、常緣、

宗祇、實隆、公條、實澄、玄旨、智仁親王、八條通光、中院、廣高院、後水尾院、太上皇、堯孝より堯恵僧都に傳へし一傳、宗祇より宗長および牡丹花へ傳へし三條稱名院公條より九條植通公と紹巴とへ傳へられしもあり、光友卿御傳授の時讀ませ給ひける御歌、おもひきや時ぞきぬらし敷島の妙なる道を傳ふべしとは。

かくの如く、常縁、宗祇よりかた〳〵にわかち傳へければ、かの俊成卿、定家卿のうみの子のすゑなる方にのみ、わたくしのものともちいつく事にも限りたらず、おのづからあかれひろごりきつるにあはせて、おのも〳〵その家を立てらるゝもまた多かりき。

九條道家公、植通公、三條實隆公、清水谷實業卿、武者小路實陰公、飛鳥井雅孝卿、日野弘資卿、烏丸光廣卿、中院通秀卿など皆近き世にてきこえたる歌の道の師にぞおはすめる。

かれ、こゝを以て、上の冷泉、下の冷泉などの家々にも、さのみ聞えたるはなく、わざごとうたに名高かりし松永貞德は、五十人あまりまねびのおやをとりしときくも、

戴恩記云。諸道に心をかけしにより、今魂まつりにかぞふれば、師の數五十餘人に及べり。

九條植通のおとゞ、細川玄旨ぬし、あるは菊亭右大臣どの、中院入道殿、飛鳥井大納言どのなどにつきてまねびて、かの定家卿の末には道をとひ奉らざりしは、ことに聞え人のなきが故なるべし。

戴恩記曰。歌學を仕り奉りしは、九條禪定殿下、細川玄旨法印なり。其の外少しづゝも物習ひ申せしは、菊亭右府公、中院入道殿、飛鳥井大納言殿、同宰相殿、紹巴法橋、清水宗我、城勝檢校、安住法師等なり。

そのころ藤原惺窩といふ人あり、是れはかの定家の卿の末にて、和歌所の莊播磨の細川といへる山鄕に住み、から人孔子の道をまねびえて、近き世のからまなびの祖といはれたるを、

日本諸家人物誌云。藤原惺窩名肅字歛夫。其先世々播州細川に食邑す。父の名は爲純、所謂冷泉家なり。先生幼にして穎悟常ならず、人呼んで神童とす云々。四書六經を講じ、程朱の說を唱ふるに、海內靡然として隨ふとあり。猶儒林姓名錄、日本詩史、落栗物語、その外のものにもかれこれと見えたり。和漢三才圖會にも委しく見ゆ、

その家のわざなればにやあらん、歌をもよまれつれど、いとよろしとは見えず。

閑散餘錄云。吾が國慶長元和のころは、兵戈の餘にて學問の道大きに衰ふ。京師の中に、四書の素讀を教ふ人もなかりしとなり。その頃、惺窩先生一人學を講じ、後生を倡ふ。門人に豪傑多く出でたり云々。昔惺窩先生も和歌をよくせり。文集に和歌集を合刻せり。〇今和歌集をみるにいとつたなく歌と云ふべくもみえず。

其の子に爲景といはれしは、かの冷泉の家をつぎて、

拾葉集系圖云。爲將子爲景、正四位左中將、實肅第一子、爲二爲將子一。承應元年三月十五日卒。と見えたり。新撰書畫一覽にもこの事あり。

文の詞などもあまた見えたるをぞ、少し定家卿の末の聞え人ともいふべき。

扶桑拾葉集に、爲景朝臣の文章かれこれとのせられたり。そのよしあしをば知る人は知るべし

されども、豐臣若狹の少將などにはならぶべからざる歟。かくの如く、やうやくにおとろへもてきぬるまに、古今集の傳授といふ事もかれこれとちりぼひて、書よむ人はおのづからうかゞひみる事もあり、そのこと葉つたなくあざらなるわざといふ事も、今はあまねく人知りにたれば、

萬葉考別記呼子鳥の考云。此の鳥萬葉に多く出でて、何のうたがひもなきに、後の世の人は古今歌集の一つを守りて、ひがごといふめり。

上なくたふとき物ともおもひたらず、ふかく考へ見れば、もとより何のあやしき事にもあらずなむ。

〔撰和歌所〕

紀貫之家集曰。延喜の御時やまと歌しれる人をめして、むかし今の人のうたたてまつらせ給ひしに、承香殿のひむがしなるところにて歌えらせたまふ。夜のふくるまでとかういふほどに、仁壽殿のもとの櫻の木にほとゝぎすのなくを聞召して、四月六日の夜なりければ、めづらしがりをかしがらせ給ひて、めし出

でてよませたまふに奉る。ことなつはいかが鳴きけむほとゝぎすこよひばかりはあらじとぞおもふ。

清輔袋草子曰。古今集延喜五年四月十八日、令二友則、貫之、躬恒、忠岑等撰一レ之云々。撰和歌所内御書所也。

拾芥抄曰。承香殿仁壽殿北九間四面、内御書所在二承香殿東片廂一。延喜始依レ勅有二別當開闔衆一筆食式仰穀倉院令買進舊位祿充誰用同樂所。

源親房古今集序註。此の集を撰ぜられける時、大内の承香殿の東なる所にて撰之。近代和歌所といふ事はこれよりしておこる。村上の御時の後撰集も昭陽舍にて撰レ之。此の舍をば梨壺と云ふ。よつて其の時の撰者をば梨壺の五人といふ。これは皆被レ置二和歌所一之初也。

按ずるに、此の時和歌所と云ふ名をば建てられざりしかども、彼の承香殿の東なる内御書所を和歌を撰ぶのところとせられたる事、右のごとくなれれば、觴をうかぶるばかりの水こゝよりながれそめたり。さてその後また〳〵和歌所と云ふ號の出で來たるは左の如し。

源順家集曰。天暦五年宣旨ありて、はじめてやまと歌えらぶところをなしつぼにおかせ給ひて、古萬葉集よみときえらばしめ給ふなり。めしを蒙ぶるは、河内掾きよはらの元輔、近江掾紀の時文、讃岐掾大中臣能宣、學生源順、御書所のあづかり坂上望城なり。藏人左近衞少將藤原伊尹そのところの別當にさだめさせ給ふに、神無月のつごもりに御題を封じてくだし給へり。神無月かぎりとや思ふもみぢ葉のとある、各歌をたてまつる。神無月はては紅葉もいかなれや時雨とともにふりにふるらむ。

本朝文粹卷十二奉行文

侍中亞將爲ニ撰和歌所別當一御筆

宣旨奉行文(謙德公)　源　順

左親衛藤亞將者。當世之賢大夫也。雄劍在レ腰。拔則秋霜三尺。雌黄自口吟。亦寒玉一聲逮ニ于跪一。彼仙殿之綺筵。銜ニ此宸筆之綸命一。天下彌知ニ強鯁不撓艷情相兼之臣一。昔雖下柹本大夫振ニ芳聲於萬葉一華山僧正馳中高興於片雲上矣。唯傳ニ人間之虛詞一未レ賜ニ聖上之眞跡一。見レ今尠矣。希矣。于レ時天曆五年歲次辛亥女英初換之月。朱草將書レ之時也。

禁ニ制闌入一事　源　順

右藏人少内記大江澄景仰云。件所名渉ニ妖妄一。實入ニ神祕一。振ニ萬葉之襃篇一。知ニ百代遺美一。況乎排ニ昭陽一爲ニ修撰之所一。尋ニ箕裘一爲ニ寓直之任一。手提ニ水龜一近採ニ青苔之曉露一。心戀ニ花鳥一偷翫ニ紅梨之秋風一。事之祕重不ニ敢出レ闌。宜レ禁ニ闌入一各勤所識。者禁制如レ件。

天曆五年十月日

八雲御抄曰。後撰天曆五年十。於ニ梨壺一和ニ萬葉集一。以ニ藏人少將伊尹一爲ニ和歌所別當一。和歌所根源是也。能宣、元輔、順、時文、望城、撰レ之。

袋草子曰。後撰集於ニ昭陽舍一令レ讀ニ解萬葉一之次撰レ之。

東常緣聞書曰。後撰集村上天曆五十晦。坂上望城□□等撰。謙德公(于時藏人少將)爲ニ和歌所別當一。

後撰集奥書曰。天暦五年十月晦日。於二昭陽舍一撰レ之。爲二藏人左近少將藤原伊尹別當一。按するに、爲字は衍して別字の上に在るべし。

拾芥抄云。後撰集二十卷。天暦五年辛亥十月。於二梨壺一以二藏人少將伊尹一爲二和歌所別當一。註曰。和歌所根元是也。

これにぞ始めて和歌所といふ名は見えたる。さて其の和歌所を置かれたるは何の爲ぞといふに、もとは萬葉集の訓點を付けんがためにて、其の寄人は卽ち能宣、順など集まり、別當は謙德公のいまだ藏人少將と聞えし時にて、天暦帝の御筆にて、此の和歌所の奉行すべき由の宣旨を下さる。其の文は順が作なり。曰。艶情相兼之臣。昔雖下柿本大夫振二英聲於萬葉一。花山僧正馳二高興於行雲一。而亦傳中人間之廬詞上。未レ賜二聖上之眞迹一。見レ今思レ古。尠哉希哉。とかけり。實に御筆の宣旨などを賜はる事は、珍らしき事なるべし。扨其の萬葉の訓點つけたる次に後撰集を撰ばしめ給へるなりき。○和歌所寄人、○梨壺五人などの事は下に見えたり。かくて後撰の後は、拾遺集をば花山院の自ら撰ばせ給ひ、後拾遺序、袋草子、八雲御抄、勅撰次第、拾芥抄などに見えたり。其の後、後拾遺、金葉、詞花、千載などつぎ〳〵に撰ばれしかども、撰和歌所は置かれざりしにやあらん、其の沙汰物に見えたる事なし。土御門院の天皇建仁元年に至りてぞ再び和歌所をば置かれける。其の所は、以二弘御所北面一爲二和歌所一と定家卿の明月記に見え、そこの圖も左に引くが如し。

さて新古今集をば、此の弘御所の北面なる和歌所にて撰ばれしなり。

明月記建仁元年七月二十六日條日。巳時計參上。此間右中辨奉書到來。明日可㆑被㆑始㆓和歌所㆒事。爲㆓寄人㆒酉尅可㆘令㆓參仕㆒給㆖追仰初可㆑被㆑講㆓和歌㆒以㆓松月夜涼㆒爲㆑題。凝㆓風情㆒可㆘令㆓參入㆒給㆖人々布衣也。今遇㆓此事㆒可㆑謂㆓老幸㆒。聞㆓人々㆒說㆓寄人十一人㆒云々。

左大臣殿後京極殿良經公　內大臣通親公　座主慈圓　三位入道殿俊成卿　頭中將通具朝臣　有家朝臣　予　家隆朝臣　雅經　具親

寂蓮云々

同年八月五日。右中辨十一日御幸御供可㆑參之由相觸浄衣云々　頭中將、新兵衞佐等於㆓和歌所㆒可㆓著到㆒之由相議事達㆓天聽㆒。忽被㆑置之。淸花書㆔寄人名於㆓其端㆒。民部大夫宗安於㆓內北面㆒作㆑籤。又以㆓家長㆒可㆑爲㆓和歌所年預㆒之由衆議申㆑之召次一人付㆓此所㆒如㆓歌合之時㆒可㆑催㆑人之由等。各相議。每事有㆓勅許㆒。頭中將聊有㆘示㆓告事㆒心中爲㆑悅。未㆑知㆓一定頗不㆑可㆑憑事㆖也。晚景退廬。

按するに、淸花以下心得がたし。これは忽被㆑置㆑之民部大夫宗安於㆓內北面㆒作㆓籤書㆒淸花寄人名於其端などありしか錯亂したるもの歟。

同七日。次參院。頭中將以下參會。和歌所著到。有㆓御尋㆒云々。

同十一月三日。左中辨奉㆑書上古以後和歌可㆓撰進㆒者、此事被㆑仰寄人云々新古今の事なり。

〔和歌所圖〕

以㆓弘御所北面㆒爲㆓和歌所㆒。

御座

座主

殿上人座

同

此所有平ラ板敷地下の物可キカ祗候之未聞其人

〔 〕文臺

二行敷疊

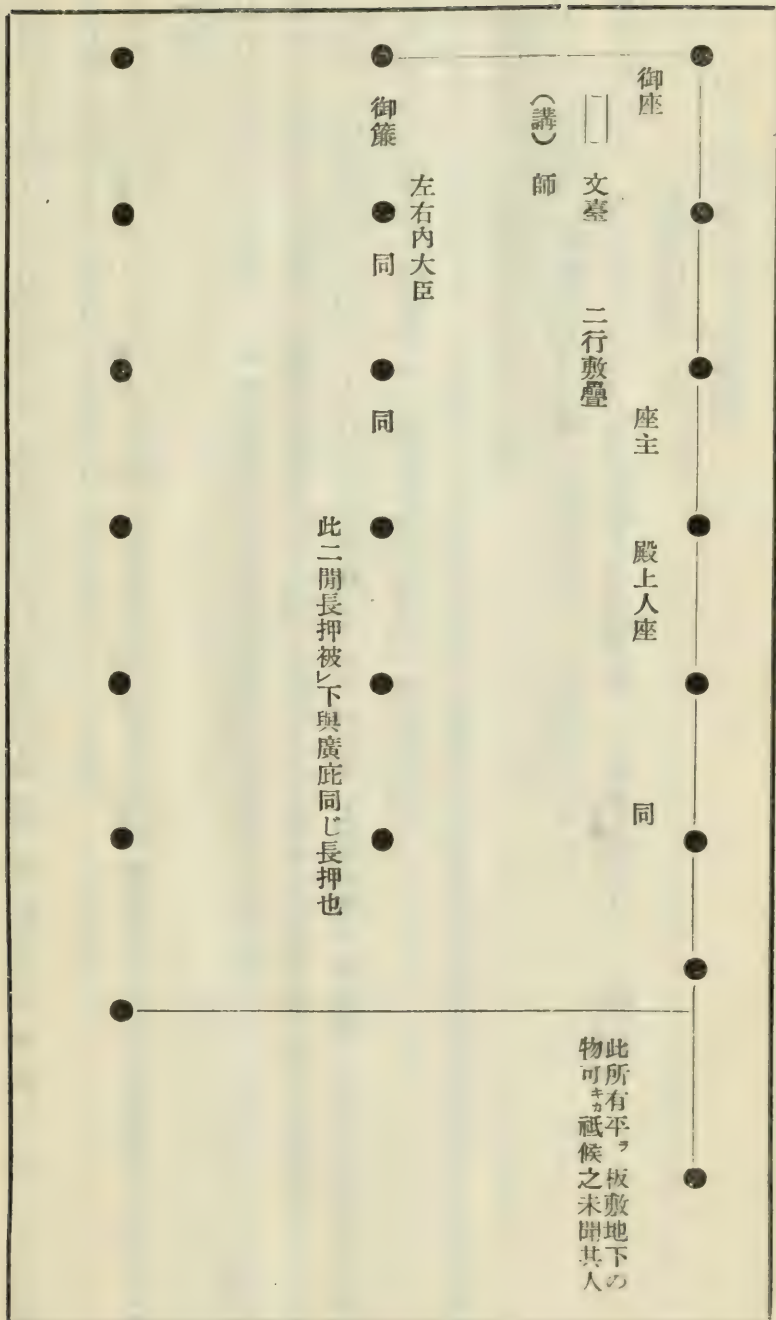
(講)師

左右内大臣

御簾

同

同

此二間長押被レ下與廣庇同じ長押也

右明月記和歌所の圖

明月記にみえたるは上の作の如し。是れはかならず撰歌の爲のみに非ず、彼の翰林院弘文館などの類になぞらへて、此所に時の歌よみたちをつどへ置かれんがためなり。さて新古今集も此の和歌所にて撰ばしめ給へるなりき。

井蛙抄云。柿本栗本の條下　水無瀨の和歌所に庭をたてて無心座あり。

此れによれば水無瀨にも和歌所を置かれしなり。その後は續古今の時和歌所あり。

井蛙抄云。民部卿入道爲家出行之時。辨入道光俊家前を被レ通、雀文車立てたり。以二下部一誰人御車哉被レ尋之所、日向守殿御車云々。兼氏朝臣也。以外腹立被レ歸之後、直に入二和歌所一、兼氏朝臣歌三首被レ書入一たるを悉く切出し云々。

これは爲家卿の亭の中にありと見えたり。續拾遺、新後撰、續千載などの時もみな和歌所あり。それは東常緣聞書、拾芥抄などに見えたり。開闔の所に引く。又新千載の時の事は、

園太暦第二十八。延文元年十一月十三日己丑條。抑御子左大納言入道爲定年來有二一談一。和歌所之體。可二歴覽一。且爲二公所儀一不レ可レ有二身恐一歟云々。撰歌沙汰。聊一見之由。所思之上。凡彼家與二當家一。代々有二由緒一。有二其禮一。隨而山階殿爲氏卿之時。細々入御。且寄宿事有レ之由、所レ聞及一也。而近來聊疎遠之處。此禪門殊爲遠爲二眞實猶子一。可レ存二其禮一之由示レ之。卽入二來於此第一首服。予加冠者也。他歟仍不レ能二左右一。而近日。如二知行一。不レ容易一。忽難二行向一之間。返答之處。爲明卿可二來臨一。乘二彼車一可レ來之間。頻懇望仍諾。秉燭之後來。大納言同相伴。共人俄難二召出一。仍光熙朝臣。同令レ乘二車後一。予大納言三位等。同乘向二彼禪門所一。[ ][ ]入道敎行朝

臣第也。於二門外一欲レ下レ車之處。三品慇懃之上。又自種々有二示旨一。大納言以下、下車。予一人作レ乘遣二入於中門車寄一。下レ車爲遠已下下二庭上一蹲居。禪門卽入來。引導卽入二和歌所一。此所外曾無二可レ入之所一云々。細々可レ來之處。目所勞已後。每事不レ合レ期仍不レ及二入來一。面談又欣慕甚之間。懇所二申行一云々。文書等沙汰之體。誠又嚴重也。且當所レ置文體。覽レ之。於二此處一良久淸談。就レ中一昨日所レ遣。御百首愚詠。春部一見。頻註擬每寸首委示レ之。本懷也。其後至二外護所一。於二此處一勸二酒饌一。爲遠爲重以下。居二予前物一五獻之間。度固辭。誠借境之體也。丑剋計歸。此間又於二同所一乘車。過分之式也。

これは此の園太暦の作者公賢公と爲定卿とゆかり有るによて和歌所の體を見たるとなり。右の記中に向二彼禪門旅所一といひ、註に入道教行朝臣の第也とあり、然ればこの時の和歌所は禁中にはあらで、便宜の所につきて設けられたるものなり。さて、爲定卿は撰集の間は、此所にかりずまひせられたりとおもはる。その後、後花園院天皇の御時に、新續古今集を雅世卿の撰び奉りしは、又禁内なり。新續古今集漢序曰。由レ是遂擇二禁内便宜之殿一、爲二和歌編撰之所一、詔二權中納言藤原朝臣雅世一、專掌二其事一。とある是れなり。此の後は撰和歌所の沙汰絶えて聞えず。今かりにこれを百官諸寮の職掌に擬へて書きなば、左の如くにもあらん歟。

「和歌所」

別當一人　官位無相當

攝家淸花之人。有二文才一者任レ之。掌二看督編纂撿察非違上奏公事一。

寄人召人とも官位無相當

四人或五人。後來無㆓定數㆒。建仁中和歌寄人十一人也。專掌㆓見閲文書撰定和歌㆒。

開闔一人官位無相當

出納文藉勾當諸事

かくの如くにもあらん歟。但し和歌所別當は、天曆に謙德公のいまだ藏人の少將と申しし時、此の職に任ぜられしばかりにて、其の後別當の沙汰物にも見えず、きこえもしたる事なし。後の奉行といふもの此の職に當る歟。時といひ人と云ひ、盛りなりしはかの御時なり。

寄人付召人

源順家集曰。萬葉集梨壺和條めしをかうぶるは河内掾きよ原の元輔、近江掾紀時文、讚岐掾大中臣能宣、學生源順、御書所のあづかり坂上望城なりとあり。

これ寄人なれども、此の時寄人とは唱へず、上に引ける明月記に始めて此の名出でたり。

明月記建仁元年七月二十六日條曰。明日可㆑被㆑始㆓和歌所㆒事。爲㆓寄人㆒。

園太曆二十八延文元年八月九日條。右京權大夫光之朝臣來。和歌所歌人被㆑召加㆑之。父跡雖㆑可㆓自愛㆒、無㆓寸暇㆒無㆑術之由語㆑之。

春日社參記作者未詳云。和歌所の寄人になされ侍るは身にとりて云々。

これみな和歌所の寄人なり。もとより詔ありて召さるれば、順集には召しをかうぶるはとかけり。故

に召人とも云ふなり。

袋草子云。長元六年白河院子日記曰。宇治殿義忠記レ之幄外東西當ニ中納言後一設ニ殿上人召人等座紫端疊一。未剋主客起レ座徘ニ徊中庭一。召ニ堪能之兩三輩一有ニ蹴鞠之興一。次幄座和歌召人越中守橘則長義忠二人也。

これは和歌所にはあらざれども、ちなみに此に出せり。

千五百番歌合家長朝臣

なし壺のむかしの跡に立ちかへり和歌の浦にぞ浪のよりう人

此の家長和歌所年預の事は、上に引ける明月記建仁元年八月五日の條に見えたり。

〔和歌所燒〕

太平記三十二院御所炎上事條。

文和二年二月四。院御所持明院殿燒けにけり云々。元弘建武の亂より以來、回祿に遭ひぬる所々を數ふれば、先づ内裏馬場殿云々。爲世卿和歌所云々。都て三百二十餘箇所、此の時に當りて燒けにけり。

〔和歌所開闔〕

明月記建仁元年八月五日條。又以ニ家長一可レ爲ニ和歌所年預一之由。衆議申レ之。是れには開闔とはなけれども、おなじ事を常緣聞書には開闔とあり。

東常緣聞書勅撰目錄云。新古今集。後鳥羽院建仁元七。元久二三二十六。右衞門督通具、有家朝臣、家隆朝臣、雅經等撰。源家長爲ニ和歌所開闔一。各撰進之後。有ニ叡覽一。被レ加ニ御點一。令部類序攝政、漢序親經卿。

拾芥抄曰。私勘云、建仁元年被レ置二和歌所一。開闔源家長、寄人藤原清範、鴨長明、藤原秀能。如レ此あり。

其れより後は。

東常緣聞書曰。續古今集、後嵯峨院文永二十二二十六。(正元元年三月仰被レ下)前内大臣公(基家)前大納言爲家、侍從行家、光俊朝臣等撰。開闔兼氏朝臣云々。○續拾遺。龜山弘安元十二二十七。(建治二年七被二仰下一)前大納言爲氏撰。開闔兼氏朝臣。撰歌中卒。後慶融法眼。○新後撰集。後宇多嘉元元十二十九。前大納言爲世撰。開闔長舜法印。○續千載集。後宇多文保二四十九元應二七二十五。撰者開闔同二新後撰集一。○新續古今集。今上永享五同十八二十三(五誤歟)。奏覽。雅世卿撰。開闔堯孝法印。

已上常緣聞書なり。拾芥抄もこれに同じければ略す。さて開闔とのみあれどもみな和歌所の開闔の事なり。

薩戒記第十六。永享五年八月二十五日の條。和歌所開闔事。被レ仰二堯孝僧都一云々とあるこれなり。

〔和歌所邑〕

按ずるに、是れは別に和歌所の費をとりまかなふべき爲に、彼の建仁に此の所を置かれたる時に、邑をも其の料にあて行はれたる歟。又さはなくして、俊成卿の千載集撰ばれし後に、建仁元年和歌所をば置かれたりしかば、其の時俊成、定家父子ともに寄人にて、其の後みな〳〵和歌の宗匠その子孫にてうけつぎたれば、かの家を自ら和歌所とやうに云ひならひ來たるによりて、彼の家和歌所を置かれざりしさきより知りたる地をも、後々は和歌所の領邑と申したる歟、詳かならず。されど後の考への

如くなるべきなり。

冷泉家系圖云。爲家卿家嫡文書和歌所領細川小野兩邑讓ニ於爲相卿一。爲家卿薨。和歌所領兄爲氏卿欲レ奪レ領焉。訟ニ將軍家執權寶光寺一。聞レ之許與。爲相卿後爲世卿再論也。兩家臣訟ニ將軍守邦親王一。將軍命ニ平高時時益仲時等一令レ聽ニ是非一。爲ニ下知狀一卷一與ニ爲相卿一也。下知狀有レ之。○頭書曰。播磨國細川莊嫡子一人相承之地。民部卿爲家卿文永十年七月二十四日、同十一年六月二十六日、爲ニ兩通讓狀一與ニ爲相卿一。初正元年中。書讓ニ爲氏卿一。後不孝故悔返レ之。與ニ爲相卿一也。爲世與ニ爲相一競望。正應二年十一月七日、被ニ裁許一下知狀有レ之。又正應四年八月十四日。（本ママ、）時爲世家被ニ下知一也。又爲相與ニ爲世一相論。依越ニ訴狀一。正和二年七月二十日、爲ニ下知狀一與ニ爲相一也。

この爭ひによりて、それを訴へんがために、爲相卿の母なる阿佛尼は鎌倉へ下られたるなり。その日記を十六夜日記といへり。

十六夜日記曰。道をたすけよ、子をはぐゝめ、後の世をとへとて、ふかき契りを結びおかれし、ほそ川のながれも、ゆゑなくせきとゞめられしかば、あととふのりのともし火も、道をまもり、家をたすけむ、おやこの命も、もろともに消えをあらそふ。中畧さても猶、あづまのかめの鏡にうつさば、くもらぬかげもやあらはるゝと、せめておもひあまりて、よろづのはゞかりをわすれ、身をようなきものになしはてて、ゆくりもなく、いさよふ月にさそはれ、いでなむとぞおもひなりぬる。

此の日記に、鎌倉へ下りて居られたる事のみにて、裁許の事はなし。裁許の事は系圖に見えたるが如

し。さて此の後また此の領地をうしなへる事ありき。

なぐさめ草[徹釋正]曰。小野といふ所を過ぐるに、故新大納言爲尹卿は、和歌の道の長者にていませしかども、時うつり、世くだりぬるにや、此の道もすたれ果てぬるを、内大臣家より、千首の歌奉らしめ給ふべきよし、仰せられたるに、述懐の歌の中に、

いかにせむ小野の山柴こと絶えてなほたてかぬる宿のけむりを

おふけなき身のねがひにはあらじかしいつかむすばむ細川の水

近江の小野莊、播磨の細川は和歌所の永領にて、五條の三品よりかはらざりしかども、道のおとろへにしたがひて、武家のわむせいなどいふ事に成りつゝ、家の風も弱り行くさまなるを、此の次に聞えあげ給ひけるなるべし。その歳の冬、彼の細川莊を返しつかはされて、やがて小野をもわたさるべしなどの、あらましありと聞えし。[中略]時の管領右京兆入道より、知行にそへて贈答などの有りしを、此方彼方とりつぎ奉りしかども、歌のかたちも覺えずなりぬ。やがて正三位大納言にあがりなどし給ひて、和歌の道を再びおこし給ふかと見えしほどに、明くる年の春の花の夢にさきだちて、雲ときえ霞とへだゝりたまひにしこそ、あはれに悲しかりしか。[尊卑分脈ニモ正三位公卿補任ニハ正二位トアリ]

鎭西古文書編年錄

寄進安樂寺和歌所

肥前國鳥屋村内田地捌町[岩光七郎入道跡]

同國山浦村田伍町〔除年天寺寄進已下〕
豐後國玖珠郡飯田郷内賀伊浦村田地拾町〔古莊下野權守跡〕
同國大肥莊吉武小犬丸名田地漆町〔畠地以下可レ依二田數一〕地頭職事
右。菊池武重已下逆徒蜂起之間。發二向肥後國一之刻。於二太宰府原山一は建武四年九月十三日夜。被二嚴重瑞夢一。以二筑後國志田莊内田地三十町一。寄二進和歌所一畢。如二彼狀一者。當宮別修理少別當信哲〔以下脱〕

〔撰集故實〕

袋草子曰。撰集故實時大臣一人歌雖レ非二秀逸一必可レ入レ之。英雄ノ公達又々隨レ宜可レ優事也。雖二歌宜一非レ指二重代一又非レ人ヲ無二其聞一者不レ可レ入レ之。於二無雙歌一無二左右一。又歌仙之歌有二秀歌一首一。次歌一兩可レ入之故實也。現在者ヲバ撰定、故者ヲバ隨レ宜歟。以前撰集漏歌ヲバ好ンデ不レ可レ入レ之。此集決定劣二彼集一之趣顯然之故也。但至二秀逸歌一無二左右一。同題歌幷似返歌一二一等可二相竝一也。時節玄隔（はるかに）非二沙汰限一。秀歌一所不レ可レ竝所々可二相交一云々。歌次第漸隨レ便可レ書云々。以前撰集一事必可レ違也。故萬葉集、古今、後撰、拾遺迄各別也。或人曰、古今ニハ題不レ知讀人不レ知。後撰ニハ題不レ知讀人モ。拾遺ニハ題讀人不レ知。如レ此歟云々。然而末代本不二必分別一、是轉々書寫之失歟。讀人不レ知書事可レ有レ儀。一ニハ眞實不レ知二作者一歌、一ニハ雖レ書二名字一世以難レ知二其人一下賤卑陋之輩、一ニハ詞有レ憚歌等也。又歌之後著二作者一歌人善惡有レ憚致故人憶說不レ聞歟也。仍古今ニハ萬葉以往歌。或書二讀人不レ知一。或歌後著レ之。所謂奈良帝。人丸等也。如レ此事尤可二斟酌一事也。又連歌歌一首取成入二撰集一常事也。

按ずるに、是れは清輔朝臣、父の顯輔卿詞花集をうけたまはられたれば、かかる故實も父の傳へをうけられたるものなるべし。

又曰。予金葉詞華兩度之撰ニ逢テ。千歲一遇空過レ之。遺恨第一也。初ハ幼少。後ハ撰集者之子息之歌無レ入之例云々。大愁也。

是れまた勅撰の故實なるべき歟。されども後は撰者の子の歌も集に入る事となれり。

八雲御抄云。清輔云。撰集故實、時之大臣英雄公達などは、雖レ非ニ秀逸ー可レ入非ニ重代ー非ニ其人ー者不レ可レ入、無雙歌人勿論也。此故實、爲レ集尤無レ詮事也。

此の文、袋草子と少し異なり。

水蛙眼目云。新勅撰の撰者定家の歌十一首、家督爲家の歌六首、續後撰の撰者爲家の歌十一首、家督爲氏の歌。此處ニ何首ト歟有リシカ續拾遺の撰者爲氏の歌十一首、家督爲世の歌六首、これは尤風體の本と見ならふべきにや。

これも上をうけて、撰者歌十一首その子うた六首づゝ入れられたる故實の如し。さるは、井蛙抄に、千載集には撰者歌初めは十一首なり。勅定によりて二十五首を加へて三十六首なり。とある十一首の跡をふまれたるものなり。さておほく我が子の歌もえらび入れられたり。清輔の詞花集に入れられざりしは、幸ひなしといふべし。

井蛙抄云。續古今は云々、集治定の後、所存相違の事ども一卷に書きて、常盤井入道相國のもとにつかはす。爲兼、延慶訴陳の時、勅撰撰者故實二百餘箇條祕事を、祖父入道爲家より相傳のよしいひたるは、此

の事なり。爲教卿爲兼卿父常盤井相國に隨逐之間見及歟。詞書に百首にと侍るを、百首歌にとあるべきかなど體のちゝとしたる事どもなり。大旨何か祕事にてもあるべきと云々。

了俊辨要抄云。凡そ撰集に入れらるゝ事は、三の品之れあり云々。其の一には是れ上手人、二には重代の歌人、三には此の道執心ふかき人、この三の外の人は入れられざるなり。

〔勅撰盛知衰運〕

萬葉集の歌、そのさまやう〳〵に移りて、一方ならずといへども、なべてはあがれりし世のふるき歌にて、後の世の如くかよわくいたづらなるはなし。さるはまづ人の世となりて、橿原の宮よりつぎ〳〵のすめらぎ、都をあまたたび遷し給ひつゝ、國の爲世の爲、たよりよからんとのみまつりごち給ひてしかば、年月をあまたにふれども、いつも〳〵いきほひさかりに、人のこゝろもいさをしくたけきから、よみ出づる歌もおのづから、をゝしくも、ふとしくも、なつかしくもありて、ま心のかぎりなれば、殊さらにあらぬたくみをなして、作りまうくることはなかりしなり。されども、するゑ〳〵の卷々にいたりては、からふみや、ほとけのふみなる事などをも、こゝの詞によみいづる事になりてしは、おのづからの移ろひになむありける。しかはあれども、それはたふるき心詞にして、猶ふとくたけき歌なりき。しかれば、これらはふるき歌の類に入るべし。かくて、都をうつさるゝ事も、桓武天皇の延暦□□に、今のたひらの京に御殿をしめ給ひしまでにとゞまりて、しづかにのどかなりしかば、人の心もいやなごびにのみなごやかになりもてくるにしたがひて、大宮人もをちこちのいでましにつかうまつる旅のいたつきもわすれ、四方の國の

はたてもまつろはぬえみしもなければ、いくさ君をつかはさるゝ事もあらず、大内裏と云ふものを作りいでたまひて、からさまをもまねびつゝ、何事もその立てたまへる御さだめをもておすまゝに、いたくよわうなるにはあらざれども、海ゆかば水づくかばね、山ゆかば草むすかばねなどいふたけきまごゝろは、おのづからうせて、歌もなだらかなるさまにぞなれりける。これ萬葉集よりのち古今集までのあひだ、かくの如くうつろひなり。僧正遍昭、業平、小町などの歌にて知るべし。しかのみならず、嵯峨のみかどのころは、さかりにからまねびおこなはれて、歌はすたれたりしかば、かれこれにつきて聞えたる人もすくなかりき。行平、業平、小町、黒主、遍昭、喜撰、康秀、或は有常、篁などの外にいでず。しかはあれども、これはた昔の歌にて、後の世のおよぶべきにはあらず。醍醐の御代にいたりて、躬恒貫之などいふものいでて、此の歌ふたゝび盛りにおこりはじめて、詔して古今集をえらばせ給へり。此の御世には、格式などいふ御さだめの書をもえらまれ、かの嵯峨の御世の名殘にて、からのまねびもさかりにおこなはれ、馬のつめふみゆくかぎりまつろはぬ國もなく、おほやけのまつり事正しくひろくゆきたらひたるが上にて、やまと歌の集をえらばむ事はうべ〳〵しく、さるべき御事にぞありつらむ。ひきつゞきて、天暦の御代に後撰を集め給へるも、亦同じ世のさまにて、すめろぎのおほみこと四方の國におこなはれ、これよりさきの天慶に、純友、將門などいひしあらぶるものもたやすくまつろひて、すめらみいづのかしこき世の程にして、其の後此の後撰のえらび有りしは、これまたさる事なるべし。武き方も文なる方もそなはれるがごとし。次に花山天皇の拾遺は、前の二ッのえらびとは其のさまいたくたがひたるべし。さるはむかし、鎌足のおとゞ天智天皇とおもひはかりて、蘇我

入鹿をうちほろぼししより、やうやくに藤原のつる御門の内にはひひろごりて、其の末なる忠仁公、昭宣公などいひし、かの漢の霍光にならひて萬の事を關ひ白され、うけばりたる世のおもしなりしまゝに、おのづから朝廷の御ゐづ此の家にうつりきつゝ、はては上をなみする事もいでまうで來つるにつけて、東三條兼家のおとゞ、その子道兼のおとゞ二人して、花山天皇をばたばかりあざむきて世をすてさせ參らせ、兼家のむすめのうみ奉りたる一條天皇を御位につけ奉りたりき。しかれば、花山の天皇はいまだいと御わかきほどに世をのがれ給へりしまゝに、あたら年月をいたづらにおりゐのみかどにてすぎさせ給へる御つれづれのほどなどにや、拾遺集をばえらばせ給ひけむ。延喜、天暦の古今、後撰のさかりなりしとは、いたくそのおもぶき異にして、貫之が萬のまつりごとをきこしめすいとま、もろ〳〵のことをすて給はぬあまりに、古の事をもわすれじ、ふりにしことをもおこし給ふとて、といへるとはたがひて、まことにはかなしくせんかたなげの御しわざとや申し奉るべからむ。人のこゝろもあさらによわらになりもてきて、時のいきほひある方になびきかたぶく世のさまは、藤原の家あることを知りて、御門あることを知らずともいふばかりに見ゆるは、いと後の世に、此の大御國を、下ざまのつよき人にうばはれ給はむきざし、こゝにあらはれぬといふべし。されば、その世にいでくる歌は、皆かなしくかよわく、花やぎたる言のたはれたる詞のみおほく、まことにまめなる方には、花すゝきほにいだすべくもあらず。大納言公任の卿、あるは紫式部、和泉式部など、女にまで才人おほく聞えて、歌の道さかりなるごとくに見ゆれども、これ世の中のおとろへゆくさま、かくのごとくにしてぞおとろふるわざなりける。さるはまづ、文德、淸和より一

條天皇の比かけて、その世の人のかける書らを見るに、伊勢、源氏物語、榮花物語、紫日記、和泉式部日記、その外家々の歌集、ふみの詞どもなり。伊勢、源氏はつくり物語なれども、其の世のありさまをうつしてかける物なれば、猶當時のさまは、是れにておもひみるべきなり。○今昔物語、世繼等に、左大臣時平公の大納言國經の北の方を、酒のまぎれに奪ひ歸り、盛衰記に、櫻町中納言成範卿の北の方を、花山院左大臣かねまさ公へ贈りあたへられたるなど、さりぬべき勢ひはせんかたなけれども、いとけしからぬみだりがはしさなりけり。日本紀に輕太子の、御妹輕皇女とたはけ給ひ、增鏡に、龜山帝の、御妹の五條院懌子をおかして、姫み子さへいでき給へるなどは、さらに殊の外なるすぢにて、本より論の外なれば云ふもさらなれども、むかしよりかかるみだりがはしさのありつるも、猶文德、清和また一條帝などの比より後々は、ことにいみじかりしなるべし。此れ亦世のよわらになれる一ツのたよりなり。大かたの人々すぢならぬ男女のたはけごと、あやしきまでいと多かり。こは男もいふべきすぢにあらず、いはれたりとて、女もうけひくまじきことなるを、いへばなびきつゝたはけたりしは、いとみだりなるふるまひにして、こはいかなる心々ならむとおもふに、山城の平の京の人は、よわらにあはれげなるさがにて、人のねぎごとをいなぶことをえせぬまゝに、かへりて正しくうけひかぬをば、心つよくあるまじきことのごとくにおもふより、さる道ならぬわざをもなすになむある。つれ／＼草云。悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦のなにがしとかや、さうなき武者なり。故郷の人の來りて物語すとて、あづまの人こそいひつることはたのまるれ、都の人はことうけのみよくて實なしといひしを、聖それはさこそおぼすらめども、おのれは都に久しくすみてなれて見侍るに、人の心おとれりとは思ひ侍らず。なべて心やはらかに情ある故に、人のいふ程の事けやけくいなびがたくて、よろずえいひはなたず、心よわくことうけしつ、いつはりせんとはおもはねど、ともしく叶はぬ人のみあれば、おのづからほいとほらぬ事おほかるべし云々。此れにて、山城の平安京の人情よくしらるゝにつけておもへば、心やはらかに情ある故、人のいふ程の事けやけくいなびがたく、萬いひはなたずといへるこゝろさまより、道ならぬ男のいふ事をも、主ある女もきく事にて、みだりがはしくすなるべし。徒然草□云。山階の左大臣殿は、あやしの下女の見奉るもいとはづかしく、心つかひせらるゝとこそ仰せられけれ。女のなき世なりせば、衣紋も冠もいかにもあれ、ひきつくろふ人も侍らじといへり。位三公につらなる人の臣たるもの、世の政をおもはず、女のためにかくばかり心つかひせられしは、愚かなる事ならずや。男も女もかくはかなき世の中なれば、其のよみいづる歌も、ふとくをゝしくたけき心詞はなきも、又ことわりならずや。○眞淵が邇飛麻那備云。今その調べの狀をもて見るに、大和國は丈夫國にて、古はをみなもますらをに習へり。故萬葉集の歌は、凡丈夫

の手ぶりなり。山背國はたをやめ國にして、丈夫もたをやめを習ひぬといへるは、まことにしかなり。〇吳子料敵第一章曰。三晉者中國也。其性和、其政平。其民疲二於戰一習二於兵一輕二其將一薄二其祿一。士無二死志一故治而不用。〇徂徠文集十二。大氐平安之地、山水麗秀、往々乎生二尤物一矣。廼自二桓皇奠都一之後數百千年、維民所レ止公卿鉅室世官世祿莫有不家。平安者而富貴之娛聲色爲最。生女之願人人而有レ之。〇閈閣所レ習。姆師所レ誨。靡曼妖冶彈思窮巧。遂能家出嬌。施人擁二姬姜一。延天而降平安麗人之盛。淸紫赤染諸女。史所二記載一可二概見一焉。然猶尙文柔爲政風流成レ習。微言佚行何所不レ有。而爭奪之迹寥乎未レ聞者。是其時與レ俗爲然也。この文は、鹽谷が妻を師直が奪はんとしたる事を記したる初めに見えなり。此はその一ッを知つて其の二を知らず、平安の人の性は只いづくまでも情にひかるゝといふ事を先とすべきなり。

かかれば、そのあひだによみかはしたる歌ども、皆よわらにして、世の中もいそしくたけきさまにはあらざりつれども、源頼義などいふますらをありて、後冷泉院の御代のすゑに、おほみことにまつろはぬ阿部貞任などいふあらぶる者をうちたひらげ、猶おほきみの御國ならぬ國ぞなかりける。また後三條院のはじめには、記錄所をおき給ひ、國のまつりごとをしるさせ給ひ、世もおこりぬべきいきほひに見えつれど、撰集の事はたえて久しく聞えざりしを、白川院の御時にぞ、後拾遺をあつめられけるは、ふるきにかへるともいひてをかし。ひき續きて、堀河院ことに歌をこのませ給ひ、百首もふたゝびにおよびたるは、さかりなる事なりしかども、男と女とをことさらにつがはせて、艶書合といふわざをし給ひしは、いかゞあるべき事かは。かくて世を治めむとすることはうべからず。是れもいひもてくれば、かの心やはらかに情あるといふ所より出でたるたはぶれにして、その世のみだりがはしさも思ひ見るべし。これ、よわらなる歌のさかりにおこなはれて、世の衰へを知るともいひつべき歟。漸くに延喜の比の手ぶりはうしなはれて、むかしのさまにあらず。おのづから其の比の一ふりをなせりしに、經信、俊頼、顯輔、清輔、基俊、俊成などいふ聞え人、末の世のいやしきすがたをはなれて、つねにふるき歌をこひねがひ、近代透歌の文なり　撰集も金

葉、詞花、千載、程もおかずゑらばれつ。さてその歌ざまは、西行、定家などの、花やかにこまやかにしてよわらなる歌にうつるべききざしにこそありけれ。さるは、其の比平の清盛入道、世を我がものとして朝廷をなみし奉りければ、大みいづはいたくおとろへまして、世のさまひろくおほきならず、さゝやかにせばきさまなるにつけて、歌もしかありぬべきことわりなるべし。かの道長のおとゞ、一條院の比、此の世をばわが世と思はれしよりは、猶いたくまさりてぞ見えける。さるは、保元平治より世の中亂れきて、平治の時清盛いさをありてより、かくなりあがるにつれて、あぢきなきおこなひありければ、木曾義仲信濃ぢにおこり、源の頼朝伊豆におこりて、まづ義仲が都をせめつる其のまぎれに、門さしこめてひそみゐられつる俊成卿こそ、千載集をばゑらばれけれ。世の中くつがへり君ほろびたまへども、ともにいきしにをおなじくせむとはおもはず、よそにみなしてひきこもられたるもののきたなさは、何にかたとへむ。歌よむ人のよわらにして、世の中におぎなひなきこと、かばかりにもいたれるは、皆かのこゝろやはらかなるより、かくはなりまかるにこそあれ。この中にゐて、歌集をゑらばれたるは、打ちあがりみやびたるわざとやいはまし。またはいふかひなきをさな子のたはぶれにちかしとやいはまし。これをたとはば、春の鳥の、風はやく雪霜さぶき冬の日にはひそみゐて、のどかなる花のころをまちてさへづるにや譬へてむ。いにしへをおもへばかくはあらざりしなり。素戔嗚尊は、ちはやぶるたけき神なり、八雲の歌をよみ給へり。神武天皇は人の世となりてのかしこきみかどのはじめなり、すがたゝみの歌あり。藤原の鎌足はたけくもみやびかにもありて、朝廷のいさを人なり、やすみこの歌あり。このほか猶あまたにかぞへしらねど

も、かくのごとくありてぞ、歌もしき島の道ともいふべきを、後の世のごとくよわらにのみなりもてきては、歌まきあつめられてさかりなるがごとくなるにつけて、世の衰へはかへりて知らるゝわざぞかし。かくて、頼朝卿世の中はらひをさめて、日本國の總追捕使といふ事を申し給はり、我が家の子らを諸國の地頭といふ物にしてまつりごちければ、かの國司といふ者はたゞむなしき名のみにして、皇命は京の外におこなはれず、しゞみおとろへましぬるは、おほかみをかりて虎をかふに似たり。我が日本國のむかしのかたちのうせぬるは、この時をそのきはみといふべく、世の中まことにかはりあらたまりぬ。さてその時新古今集をあつめられたるに、その集の手ぶりはこまやかにちひさく、たくみによわらに、おもしろき歌共なり。これをば、達磨宗とてそしる人ありしといへり。歌ざまのかくなりぬるも、世につれて朝廷のみいきほひのしゞまりたる、都人の歌はさもありぬべきわざなるべし。歌は只和國の風にて侍る上は、先哲もくれ〴〵かきおける物にも、やさしく物あはれによむべきとぞ見え侍ると、定家卿の衣笠内大臣におくられたる状にありと、井蛙抄にみえたり。是れいにしへをしらず、おとろへたる世の詞なり、大きなる非ごとならずや。貞徳戴恩記にも、力なき女の歌をよむ男は、臆病のをのこなりと見えたり。さればかく衰へたる世ながらも、世の中ひきかへさむとかまへられたる、頼政三位の歌などは、いかにも勢ひたけくぞ見ゆる。（ほとゝぎす名をも雲居にあぐるかな弓はり月のいるにまかせて）又おのづからの理なり。かくて御國を頼朝卿にうばはれ給へれば、すめらみいづはおとろへたれども、其の實をたづぬれば、此の大八洲のいきほひは却りて強くなりぬるなり。よて鎌倉人の歌は、同じ世といへども、其のさまたけくいさみて見ゆるは、此の大やまとを掌ににぎりた

る人の心よりいづればなるべし。

頼朝卿、つぼのいしぶみのうたは、さのみいきほひたけくもあらざれども、梶原景時との連歌、又景時が歌、かれこれと東鏡増鏡などにみえたるは、皆いそしく、又實朝公は定家卿の弟子なれども、彼の卿のこまかにたくみなるふりとはたがひて、歌の姿ふとく古ぶりをこのまれ、山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやはといふ歌は、いかにも征夷將軍ならずばよまるまじき歌なり。これおなじ時世なれども、皇威おとろへたる京都のよわらなる人のこゝろよりいづると、世をさかりにまつりごちて日本を掌握に入れたる人のこゝろより出づるとのたがひめなり。

これよりのち、かまくらの北條なども歌をよみたれど、後々の撰集に、そのうちの人々の歌、あまた入りたるをみるに、さのみたけきすがたも見えず、只よのつねのよわらなるふりなるは、かの都人の歌をもととしてまねびよめば、そのすがた世にひろごりて、然なりつるも、またおのづからの世のいきほひにて、せんかたなきことなりかし。新古今より後々も、新勅撰、續後撰、續古今など、猶つぎ〳〵にあつめられて、これをたぐひもなき世の光と、いひも思ひもしたるあしきわざにはあらざりつれども、歌のみをさばかりあつめられむよりは、まつりごとの上にとりては、うけばりてうべ〳〵しき國史實錄などいふものをも記されたらむは、猶いかにめでたからむを、さるわざすべき人もなく、衰へたる世ながらも、歌あつむことは、やまともろこし知りうかべたる博士ならでもいでくるわざなればにや、これのみさかりにあつめられにけり。これまたすめら御いづおとろへて、都の外にはおほみこともおこなはれず、わづかに歌の勅撰などぞ君の御こゝろにはまかせられける故もこもるべし。さらば後々の世にひきつぎて勅撰のさかりなりしは、これ世の衰へを知るのはしなり。あはれにかなしきわざになむ有りける。されども猶、後花園天皇の永享に新續古今集えらばれける時までは、一條兼良のおとゞなどものしりにして、かな序眞名序も

かき給ひて、むかしにもはぢざりけるを、のちくはこの和歌集の勅撰すら聞えず、つがの木のつぎくにおとろへもて行きて、むかしは、金葉集に俊頼の朝臣の連歌を加へられたるをだに、とかくおだしからずいひけるを、世くだちては、雲の上にて宗祇法師がえらべる新筑波といへる連歌の集などをもて遊び給ひ、（親長記。明應四年十月四日云々。自禁裏今度宗祇法師新撰菟玖波集〔去月二十六日奏覧前關白太政大臣冬良公〕四巻十一十二十三十四被下之可寫進云々。）牡丹花の肖柏法師を召してかしこくも御口づからつらね歌をぞせさせ給ひける。（此の事、實隆卿の勅にしたがうて發句を奉る記といふものに見えたり。肖柏發句、空におきてみんよやいく夜秋の月。脇は御製、庭にくもらぬ玉しきの露。）かくの如く、いよく\ますく\此の道もひきくなりはてて、かの二十一代集の外は、わたくしの集どもこそおほけれ、勅撰といふはたえてなき事になりてしは、是れも世のいきほひにはあめれど、まことにかなしき事ならずやは。今はしも、いにしへのまねびも歌のみちも、いとみさかりにひらけきぬるを、（皇國の學はさらなり、漢學の盛りになれる事をも、何もそれをいふとては、東のとほの御門におほまつり事とらしたまひて、萬をおこしたまふによれるよしを世の人いふなるは、もとよりさることなれども、江村北海が日本詩史に、至文祿改元之後有天子賜源通勝御製詩。蓋否極而泰元和文明之運。已兆于此者歟といへるは、實に卓見といふべし。まことにしかなり。）もし此の事をおもほしおこし給はば、撰集はさらなり、いかなる國史實錄または律令なども物せられんに、其の人をかくべからざるを、このおのれ等がいやしくかひなき身には、さる事おもひかくべきにはたあらねば、たゞ時のいたりて、おほやけに物とりおこなはし給はむ事を、住江たかさごのまつにかけて、ゆく末久しからむ世まで思ひ残すになむ。

歴代和歌勅撰考巻之六　大尾

昭和十三年二月十日印刷
昭和十三年二月十五日發行

（非賣品）

校註國歌大系
第四卷

編輯者 中山泰昌
東京市神田區錦町一丁目五番地
發行者 小川菊松
東京市本所區厩橋一丁目二十七番地
印刷者 西尾眞八
東京市本所區厩橋一丁目二十七番地
印刷者 凸版印刷株式會社本所工場
東京市神田區錦町一丁目五番地
發行所 株式會社 誠文堂新光社
電話神田 自二一二六番 至二一二九番
振替東京四五三四〇番

昭和三年二月十二日印刷・昭和三年二月十五日發行